
ただいま暴走中！

呪理阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただいま暴走中！

【Nコード】

N5939Q

【作者名】

呪理阿

【あらすじ】

長男純「ん、めんどくせえ」と長女忍「すももって美味しいよね」次男岳「トマトうめーじゃん」に次女光「お菓子食べる？」の高山四兄妹と周りの人の、ほのぼののような騒がしいような普通なような日常です。作者の周りで起こったことと思いつきで成り立っていますがちよっと覗いてみてください！ 幽霊やら死神やらその他諸々、思いつくままに無駄にファンタジー入ってます。だって思いつくんだもん。やりたかったんだもん。好き勝手な作者の割に毎日更新中です。

1 スーパーにて

「……光、どっちにする？」
ひかり

「こっち」

「あたしはこっちがいい」

こうなったら……あ、いきなりすんません。
たかやましのぶ

高山忍ってゆー者です。

今のこの状況を説明すると、あたしと妹の光で買物（ラーメン）に来た。

で、目の前にはしょうゆ、みそ、とんこつの三種類のラーメンがあるわけ。

で、光はみそがよくてあたしはしょうゆがいい。

まああたしはどっちでもいいんだけどね。

なんとなく張り合ってみよーと。

てな訳で、こうなったら……。

『ッ！』

二人でうなずき合うと無言のまま手を出す。

つまりジャンケン。

どこがどうつまりなのかという質問は受け付けないよ？

結果は、二人ともグーであいこ。

『ッ！ッ！ッ！』

なっかなか決着がつかない。

みすてりー。

「あゝ」

五回目。あたしの勝ち。

今日の昼ご飯はしょうゆラーメンに決定！

「お姉ちゃん、お菓子コーナー寄ろ」

「大賛せー！」

何を隠そう隠さないけど、あたしはお菓子好きなのだ！

大好き、じゃない。好き、なんだよ。分かるね違い。
てな訳でお菓子コーナーへ移動。

「あ、チョコが安くなってる」

「もうすぐバレンタインだもん。買い時♪」

バレンタイン終わった直後の方が安いんじゃないかな。なかったけ。
まあいいや。

「光は何買うの？」

「ん、なんにしようかな」

あたし買うやつは既に決定済み。

ビタチョコ二枚。

ミルクチョコは前に買ったやつがまだ残ってるんだよね。

……そろそろ食べないと賞味期限がヤヴァイかな？

今日のおやつ、それに決定。

「私これにしよう」

「……それ？」

光が持ってたの、何だと思う？

《限定30袋！焦げためざし！！57円》

絶対失敗したやつだね！？

「だって、限定30袋しかないんだよね？ しかも57円だよ！」

……しらないって。

苦くて食べられなかったとしてもあたしには回ってこないでしょ。

……多分。

「買うものはこれで全部だね」

「うん。じゃ、お待ちかねの試食探しといきますか」

「お！」

お店に来たらこれはやらないとね！

たまにステーキとか出てたりするし。(食べ損ねたけど)
前にコンビニで試食やってた時はびっくりしたけど。

パートワン・野菜、果物コーナー

「あ、あったよー！ぽんかんだー」

試食する時は一つだけ。これはマナー。
いただきます。

ご馳走様でした。

甘かったよ。種噛んじやったけど。

「……お姉ちゃんー」

「ん？」

何か「うえ」って顔してるね？

「種噛んじやったー！」

あんたもかい。

「一緒に舌も噛んじやったー！」

痛いよね。

「つまようじも噛んじやったー！」

噛みすぎだろ！

「ってぽんかんはつまようじ使わないでしょ！」

「しまったー」

何が！？

パートツー・肉コーナー

の、近くで乳酸菌飲料を二種類もらった。

「甘いー」

「甘い」

「お姉ちゃん、そっち飲ましてー」

「ほい」

パック交換。

「あれ〜？さっきより甘くない〜」
てことは、

「あまつ〜!?」

……こうなるよね。

パートスリー・パン

なかった。

たま〜に試食あるけどすぐなくなっちゃうんだよね。

帰宅後。

「につつつつつがい〜!!!!」

あ、やっぱりあの真っ黒めざし苦かったのね。

「……お姉ちゃん、食べて〜?」

「ヤダ」

「そんなこと言わないで〜。おいしいよ〜?」

さっき苦い言ってたろーが!

「ほらほら〜、遠慮しないで〜。ね〜?」

げ、口に押し込むな……。

……………。

「につつつつつがああああ!!!!」

あたしは、決意した。

これからは光が変なもの買おうとしたとき全力で阻止しよう、と。

1 スーパーにて（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

2 真っ黒めざしの恐怖

「純兄^{じゅん}！」

ぱしっ

忍でーす。

暇だったのになんとなく兄の純に横蹴りをしてみた。

結果、見事に受止められた。

「なんだよ、いきなり」

若干言葉遣いは悪いけど決して不良ではないのであしからず。

「いや、なんとなく」

「テメエなんとなくで人蹴んのかよ」

「だいじょーぶ、純兄^{じゅん}だけだから」

「ったく……。岳^{たける}にすりゃいいじゃねーか」

岳^{たける}っていうのはみつつ下の弟ね。

「岳ならいいんだ？」

「俺に被害が及ばなければよし」

なんて酷い兄だろう。

「ねーちゃん！ またはにーちゃん、へるぷみー！！」

今、階段から落っこち……。もとい下りてきたのが岳ね。

「どったの？」

「光がああ真っ黒めざしオレに食べさせようとしてんだよ！！」

ああ、昨日買ってきたためちやくちゃ苦いヤツね。

……うん、

『まあガンバレ』

「んなトコでハモるなあああ！！！！」

「岳お兄ちゃん、どこ？」

あ、光も下りてきたね。

「うげ。へーるぷみー？」

なぜに疑問形？

「あれゝ？ 岳お兄ちゃんはゝ？」

「あれ？ 今までここにいたのに……」
消えてるし。

逃げ足は速いからなゝ。

「何でゝ!？」

その手に持った真っ黒めざしが原因だと思うよ？

昨日より量が増えてるような気がするのはあたしの気のせいだよね。

……気のせいだよね!？

「んゝ。ま、いいやゝ」

いいんだ。

「純お兄ちゃん、食べてゝ」

「えゝ」

ありゃ、純兄、ご愁傷様。

って、このままあたしもここにいたら巻き込まれそうだね。

逃げよう。それが一番良いに決まっている。

純兄を助けようという気は皆無。

だって、純兄とあたしの立場が逆だとするでしょ？

純兄はあたしを助けようとするわけがない!

カチャ

「あ、ねーちゃん!」

「あ、純兄を見捨てた兄不幸者」

「それはねーちゃんだろ!」

うん。それが何か？

あたしに被害が及ばなければよし!

「で、岳は何でここに居んの」

ここ、あたしと光の部屋なんだけど。

「いや、階段から一番近かったからつい」

なんて理由だ。

「あれ、岳までここに居んのか？」

「あ、純兄。どうだったお味は」

「いや俺は食ってねえよ」

『ええええええ!!』

ズルイよ！ 純兄は食べないなんて！

「オレなんか3匹も食わされたのに!!」

それは酷い。

「何でだ!？ どうやって逃げたんだ!？」

「親父がお袋に食わせた方が面白い反応をするんじゃないか、って
言ったらあっさり」

「その手があったかああああ!!」

……いや、岳は無理じゃないかな。

だって、

『岳の反応の方が面白い』

「だからんなトコでハモるなああ!!」

事実だし。

とはいえ、やっぱりあたし達もおとーさんやおかーさんの反応も
気になるのでこっそり陰から見てみることにした。

おかーさんの場合。

二階で洗濯物をたたんでいる所に光がやってまいりました。

あ、ちなみにおかーさんは主婦。

週に二回仕事行って、月に一回ボランティアしてるけど。

「お母さーん、これ食べて」

「ん〜?……………」

おかーさん、一瞬フリーズ。

かと思いきや、ニコッと笑って、

「お父さんにあげておいで」。

きつと面白いリアクションしてくれるよ」

純兄と同じ追い払い方をして見せた。

うーん、流石親子。

あ、気付いたかもしれないけど光の口調はおかーさんに似たんだよ。

ついでに顔もそっくりなんだ。

おとーさんの場合。

おとーさんはパソコンの前で……仕事かな、アレは。ちなみにおとーさんの仕事は銀行員ね。

「お父さーん」

「ん？」

「お父さんってー、めざし好きー？」

あ、手段変えたね。

「ん、まあ好きかな」

「じゃー、目瞑ってー、口開けてー」

「お？何々？」

「えへへー、お楽しみー」

……おとーさん、この後どんな悲劇が待ち受けてるかも知らず、目を瞑って口を開けます。

えと、なんていうか……ガンバレ？ドンマイ？

「はいー、プレゼントー♪」

「☆#●%\$@○★!？」

……光よ、それはあんまりだ。

おとーさんの今の状態。

口から真っ黒めざしの尻尾を大量に生やし、声にならない悲鳴を上げている。

終いには何故か踊りだした。

……変な食べ物って、怖いね。

2 真っ黒めざしの恐怖（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

3 アレに似てる

「なー、にーちゃん。

この目玉焼き人みてーな形してるぜっ！」

「とっとと食え。

別にお前が遅刻しても俺は困らねえけど」

「えー、じゃあねーちゃんっ！ホラッ」

「パク」

「あゝあゝあゝあゝあゝっ！！」

オレの目玉焼きiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」

俺の弟妹達は朝飯さえ静かに食べさせてくれない、のはいつもの事だ。慣れてる。

……出来れば慣れたかねえけどな。

純だ。

会話を聞けば、いや読めば分かるかも知れないけど一応説明しておく、岳が目玉焼きを見せびらかしていたらそれを忍にパクられた、という普通の朝食風景だ。

……普通じゃない？

うちではこれが普通なんだよ。悲しいことに。

ちなみに光はそれをニコニコして見学している。

何かを振られてもニコニコしながらスルー。

一番楽な位置だな。

「あ、光、純兄。

このスルメ靴そっくりな形してる」

「朝飯ん時に何食ってんだお前は」

「パンに目玉焼き、後キャベツの千切りとスルメ」

「そーゆーことを聞いてんじゃねえよ」

そこまで細かく言うとは思わなかったけど。

「おとーさんの椅子においてあった」

親父の奴、また食べてそのままほったらかしてたな。

「帰ってきたときに『減ってる！？』って嘆くかもしれないけど自業自得だよね。はもはも」

何気に光も食ってるし。

「あつ、光！今度は米粒が『の』の形してるぜ！」

「えい♪」

「崩されたあつ！」

また箸を使って作り直す。

食えよ。

あ、忍がパンだったのに岳が米だったのは、うちでは朝飯がパンか米かだけは自分で勝手に決めるようになってるから。

たまにパン切らして全員ご飯になったり、逆に米炊くのを忘れて全員パンになったりするけど。

「純、ほらほら、たこ♪」

「お袋まで何やってんだよ」

「え、みかん食べてるんだよ」

「オレはもつとすげーぜ、蛇だ！！」

へーん！ そんな声が聞こえたような気がする。

「じゃあ私は、鮫！」

『参りました（〜）』

ペコリ

……みかんの皮でたことか蛇とか鮫だとか作ってるけど、

「実の安全も考えた方がいいぞ」

「まぐまぐまぐまぐ」

『盗られた（〜）っ！？』

……結構甘いな、これ。

「ねーちゃんはともかく、にーちゃんにまで盗られるとは思わなかったあ！！」

みかんかこの中にはもう入ってなかったんだよ。悪いか。

「お姉ちゃんはいつものことだけど〜！」

「流石、一つも離れてないだけあるね」

ちなみに俺は4月、忍は3月生まれ。

学年は同じ。

「……あ、このみかん親子だ」

小っこいのと大きいのがくっ付いてるヤツな。

「コアラに似てるよね」

『どこが？』

「だってコアラって親子くっ付いてるじゃん」

「共通点それだけ!？」

「えゝ？ サルの方がいいゝ？」

そういう意味じゃねえだろ。

「……あ」

「どうした？」

「いや、あそこの車の上で寝てる猫さ」

よく見えたな、窓越しで。

「それが？」

「ハムに似てるなゝって思って。」

ほら、絵とかによくある切る前の」

……食うなよ？

3 アレに似てる（後書き）

よく見たら何かに似てるって事、ありますよね。
……ありますよね？

ご意見、ご感想等お待ちしております！

4 今日の夕飯は？

「ただいまッ！……って、鍵しまってる!？」

あー、そーいや今朝母さんが『今日は友達の所に行って来るね』とか言ってたつけ。

岳でーい。

「えーと、鍵鍵……」

……………あゝ。

鍵、オレの机の上だ。

「しまったあああああああ!！」

ガチャカチャ

あれ、開いた？

「五月蠅いよ、岳お兄ちゃん」

「あれ、光？」

あ、そうか。

光はオレより2つ年下の小3。

とーぜん、オレより先に帰っている訳だ。

「何で鍵閉めてた訳!？」

「お母さん、純お兄ちゃんかお姉ちゃんが居ない時は鍵閉めなさいって言ってたもん」

「あ、そっか」

「おい、早く入れよ」

ぬ、後ろから聞こえるこの声は……。

「あゝ、お帰り、純お兄ちゃん。早いね」

「ん」

ただいま位言ったらどうだろう。

「あれ、ねーちゃんは？」

「二者懇で少し遅くなる……らしい」

「らしいって」

にしゃこん？

に 階で

しゃ 会の

こん ぎつねをやりましょう

……絶対違うな。

大体社会のこんぎつねって何だ。国語の教科書に出てきたこん〇つねなら知ってるけど。

あれ、テーブルの上に紙を発見。

『純忍岳光へ♪』

今日はお母さん友達の家で晩ご飯食べるから晩ご飯は何か適当に自分達で作ってね（ハート）

お母さんより♪』

ナンデスト？

「にーちゃん！」

「あ？」

「にーちゃんって料理出来んのかっ!？」

「……簡単なものなら？」

怪しい!

光は論外として……あっ!

「ねーちゃんは!？」

一応ねーちゃんは女だ!

たまに、ほんつとたまーにお菓子作ってるし!

「……レシピがあれば大体作れっけど……それがどうした?」

「これっ」

にーちゃんに紙を渡す。

「……………うげ」

……今小さく『うげ』って言わなかったか!?

不安だ……どうしようもなく不安だああああ!!

「どうしたの?」

「あ、光!これ見ろよ!」

「あつ、馬鹿ヤロ・・・」

『ふむふむ』とかうなずきながらメモを読む光。

「大丈夫だよ。私を作るから」

……………し、

しまったあああああああ！！！！

光はちゃんと料理をしても、途中で明らかに、

あ、き、ら、か、に、変な物を入れるんだ！！

小一の時なんかねーちゃんの作ってたクッキーに、わさび、からし、しょうが、こしょう、その他調味料類諸々を大量に入れて史上最悪のクッキーを食わされる羽目になったんだ！！

あれはもー、最悪だった。

焼けたのも奇跡的な感じだったしなあ…………。

「さてー、何作ろうかなー♪」

まずい…………光は本気だッ！！

「まずは冷蔵庫から調べよっ」と

てとてとてと

「どーしよ、にーちゃん」

「…………とりあえず、変なもの入れそうになったら止めりゃいいだろ。変なものさえ入れなかったら普通なものを…………」

「作るかなあ…………」

変なもの入れたやつしか見たことねーし。

「…………とりあえず、忍が帰ってくるまでは見張っとけ」

「アイアイサーー！」

今日の夕飯、絶対に危ういものにはさせないッ！！

4 今日の夕飯は？（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

5 まず材料探し

「あゝ、カレールーとじゃがいもゝ、にんじんに玉ねぎ発見ゝ！今日の晩ご飯はカレーだねゝ♪」

「マテマテマテマテマテマテマテマテエー！！」

その玉ねぎ芽が生えてるぞ！？

ねぎともいう。

引続き岳だっ！

「光、玉ねぎ使うならこっち使え」

「んゝ、分かったよゝ」

ナイスにーちゃん！

えーと、ちょっと解説しておく、母さんが今日友達の家に行ってたんだ。

で、晩飯は自分達で作れ、となったんだ。

それを聞いた光が自分を作ると言い出したんだ！

解説終わり！

「に、しても何で玉ねぎがこんなになるまでほつといたんだ……？お袋の奴……」

だよなあ。

玉ねぎの上からは短いねぎが5本くらい生えてるし、玉ねぎそのもののなんか紫色に変色してるぞ？

「……庭に植えとくか」

上手くいけばねぎ代が浮くな！

そのままほったらかして忘れ去られる可能性も高いけど！
ってかそっちの方が高すぎるけど……。

「えゝとゝ。あとカレーに必要なのはゝ……。お肉だゝ！」

光は冷蔵庫に突進した！

べちっ！

「い、痛いゝ」

アホだ……。そのまま冷蔵庫にぶつかってやんの。

「えっと、お肉、お肉」

おでこをさすりながら開けたのは……野菜室!?

「あ、あつた!」

そしてまさかの豚肉発見!?

母さん……アンタは何を考えて野菜室に肉を入れたんだ!?

「これは冷凍庫に戻しておこう」

戻すのかよ!

冷凍庫、オープン。

『うわ』

中には冷凍食品やら肉やらがギッチリ。すげー。

「古いものから使わないといけないよね」

というわけで、オレも手伝って冷凍庫の中身を全部出すことになった。

中身が半分くらいに減った頃……。

オレは、トンデモないモノを見つけてしまった。

それは……。

賞味期限・10・6・13

と表記された鶏肉ツ!!

古すぎだろオイ!!

もちろんそれはソッコでゴミ箱行き。

もったいねーけどオレ等の腹のためだ!

よかった、オレが見つけといて。

光が見つけてたらこれもカレーに入れられていたに違いな

「これで全部だね」

「うあ、何だコレ」

あ、にーちゃん。

「冷凍庫の中身全部出した!」

「……パンドラの箱を開けたようなもんだぜ、それ」

「へっ?」

にーちゃんが指差す方を見ると……。

「これとー、これとー……あー、これもいいなー」
しまったああ!!!

光の手には賞味期限を過ぎた食品が大量に……。

ああああ災いがふりそそぐう!!!

「よし、こんなもんかなー。片付けよー!」

とりあえず、片付けるだけ片付けた。

もちろん、古いものが上に来るようにしてな!

「後はー……今はこれだけでいいかー」

良かった。光の目を盗んでにーちゃんが明らかに入れたらまずい
ものを取り除いておいたんだ。

これで今の所は大丈夫なはずだ!

……でも、今はってなんだ。

「さー、作ろー!!!」

……よくよく考えたらオレカレー作る時の手順とか知らねー……。
つまりどこがおかしいとかわからねーよっ!!!

神様仏様マリアさま、どうかねーちゃんが早く帰ってきますよう

にいつ!!!

5 まず材料探し（後書き）

冷蔵庫とか冷凍庫に以上に古いものが入っていた……！
ってこと、ありませんか？

私はつい最近ありました（汗）

ご意見、ご感想等お待ちしております！

6 調理開始！ 切りましょう

「たーいまー」

「お帰りいっ！！ 待ってたぜねーちゃんっ！！」

「のわっ！？」

忍です！

あゝ、びっくりした。

いっつも出迎えてこない岳がロケット並みのスピードで走ってき
たんだもん。

「どったの？」

「ひ……光が……光がカレーを作ろうとしてるんだッ！！」

……………。

「ウソッ！？」

「嘘ついてどーすんだホントだよッ！！」

まずい……早く止めないと今日の夕飯が悲惨なことに！！

「光！」

「あゝ、お帰りゝ、お姉ちゃんゝ」

良かった……まだじゃがいもの皮剥いてるだけだった。

「帰ったか……」

純兄もちょっと安心したって顔してるね。

えーっと、確かカレーを作ろうとしてるって言ってたっけ？

カレーくらいならレシピなくても多分大丈夫！

……多分！

で、どんな変な材料を用意してんのかな、光は……。

にんじん、玉ねぎ、じゃがいも、カレールー、離乳食……。

「離乳食！？」

「ほらゝ、疾風^{はやて}くんの忘れ物だよゝ」

疾風っていうのはあたし達の従弟ね。

去年の5月に生まれたからまだ0歳。

正月の時に来てたからその時のかな、この離乳食は。

「にーちゃん……変なものは取り除いたんじゃない……？」

「大丈夫だろ、離乳食くらい」

「はいはい、役に立たない男子共は行った行った」

とりあえず台所から追い出す。

狭かったんだもん。

「ちょっ！ 光は含まれねーの！？ 何で！？」

「光は包丁使ったりは上手いもん」

「なるほど」

納得するんだ？

「ちゃんと光見張っとけよ……」

「まかしとけー」

「あゝ！」

「どったの光」

「お米とぐの忘れてた〜！」

なんだ。何かあったのかと思ってびっくりしちゃったじゃんか。

何かあるっちゃあるけど。

「はいはい、あたしとぐよ。」

光はそっちやってて」

「……にーちゃん」

「あ？」

「ねーちゃんに光の見張り頼んで大丈夫なのかっ！？」

「……………多分」

「……………。」

オレたちも見張っとこーぜ？」

「そうだな……」

とんとんとんとん……

「光、おじゃが切れた?」

「切れたよ」

「ん、じゃあ水にさらしといて」

「は」

うん、今の所大丈夫。

「え」と……お姉ちゃん」

「何?」

「玉ねぎやって」

絶対ヤダ。

というわけにもいかないんで、渡された玉ねぎを黙って冷蔵庫にしまっとく。

「ほら、にんじん先やろ」

「うん」

そんなこんなしている内に米とげた。

えーと次は……あ、肉切つとかないと。

……って。

「なぜにミンチ!」

「だってこれなら切る必要ないでしょ」

……確かに?じゃ、これでいいか。

「……にーちゃん?」

「悪い、全部は調べられなかった」

「……さて、玉ねぎ(敵)のとーじょーだ」
「わーい!」

「え、喜ぶ？」

「うええ〜ん〜」

泣けと言ってる訳じゃないんだけど。

まあとりあえず、一旦冷蔵庫に入れたから大丈夫でしょ、という
思考で行こう。

とん、とん、とん、

……やっぱしみるう〜。

「お姉ちゃん〜、貸して〜」

「え？」

後ろにはゴーグルをつけた光。

「んなもんあるなら最初っから出せよ!？」

「あはは〜、忘れてた〜」

酷い。

「というわけで〜、私やるね〜」

「はいよ」

ざくざくざくざくざくざくっ!

おお、なかなかのスピード〜。

の前に、

「何そんなに細かくしてんの!？」

みじん切りどころじゃないし!

と、いうか家では(他のトコは知らない)玉ねぎはくし切りなん
だけど?

光……玉ねぎに何の恨みが!?

「だっていつもはカレーの中の玉ねぎとけてるもん〜。

だから出来るだけ細かくしてるのかな〜って思ったんだけど〜」

……ま、いいや。やっちゃったもんはしょうがない。

まだまだ先は長い、ね。

6 調理開始！ 切りましょう（後書き）

カレーの作りかたはうち流でやっております。

ご意見、ご感想等、お待ちしております！

7 調理中…… 煮込みます

ジューツジューツ

「いい匂い」

光ですう。

今、私とお姉ちゃんてカレーを作ってて、お姉ちゃんがお肉いためてるの。

私は今のうちに調味料とか探してようかな。

「お塩と、お砂糖と、薄力粉と……」

あれ？ 薄力粉って調味料だったけ？

まあいいか。

お父さんが前にカレーにとろみつけるときは薄力粉を入れるって言うってたし。

「お兄ちゃん二人とお父さんは辛い方が好きなんだったけ」

わさびと、しょうがと、からしと。

あ、焼肉のタレ発見。

これも使おうと。

「光？ あと煮るだけだよ！」

「はい！」

こんなもんでいいか。

お鍋の中には、お肉、にんじん、じゃがいも、玉ねぎ
(切りすぎた為ドロドロ)、お水。

十入れたてのカレー。

それが石油ストーブの上に乗っています。

……え？ なんでストーブの上か？

だってどうせストープは点けるもん。

こうしたら一石二鳥でエコでしょ？

地球にやさしく、だよ。

……あれ？

「お姉ちゃん、何で離乳食入ってないの？」

「うえ？ほんとに入れんの？」

当たり前じゃん。

ほっといたらゴミになっちゃうもん。

という訳で。

「ぼとぼとぼとぼとぼと」

「なにも口で効果音言わなくても……ってあぁっ！！ 入れちゃったぁ……」

「大丈夫だよ。冷凍してあったし、まだ一ヶ月くらいしか置いてないし」

「気にするな自分気にしたら負けだ気にするな赤ちゃんがちゃんと食べれるものを入れたんだからあたし等が食べても大丈夫そうだし」と大丈夫大丈夫大丈夫……気にするな気にするな気にするな……」

うわお。

お姉ちゃんが壊れた。

……ちゃんす。

「今のうちに取ってきた奴入れよ」と

え」と

「お塩」

どさっ

「お砂糖」

ぼろぼろっ

「薄力粉」

ばふっ

「わさび」

……私は辛いのにそんなに好きじゃないからちよっただけ。

ぽとん

「しょうが」

これも同じく。

ぺちやつ

「からし」

またもや同じく。

ねりっ

「そして中辛焼肉のタレ」

どぼっ

……入れすぎちゃったかな。

まあ、大丈夫でしょ。

えっと、後は混ぜて出来上がりっつと。

鍋の中は、なんか白い雪山のようなものの上に、わさびとしょうがとからしがのつて、とどめをさすかのように茶色の液体がかかっている、って感じ。

……やりすぎたかな？

混ぜれば大丈夫か。

「んしょ、んしょ」

……なんかかたいよ。

薄力粉を入れすぎたのかな？

お水を足せば大丈夫かな。

ばしやつ

「にーちゃん、もうオレ、見たくない」

「全く、誰だよう、まかせとけー、なんて言ったのはあ」

『お前だ!』

「あはは……。おとーさん今日は早く帰ってくるらしいから人体実験してから食べようね」

「当たり前だ」

「当たり前なんだ……」

「よっっしもうすぐ完成っ！」

なんだか恐怖に満ちた視線を感じるけど、気のせいだよっ！

7 調理中…… 煮込みます（後書き）

決して真似しないようお願いいたします。
責任は取れませんので。

ご意見、ご感想等お待ちしております！

8 調理終了! そのお味は?

「よし、かんせー!」

その満面の笑みが悪魔の笑みのように見えるのは俺だけか? 純だ。

今、カレーの入った鍋を光がコンロに置きに行っただけど……。そのカレーはとてつもなく不味そうに思えてならねえ。

何しろ最後の最後に冷蔵庫から発掘した、いつ開けられたかの分らない『開封後は10日以内にお食べ下さい』とか書いてあるピザソースも入れてたからな……。

さっき岳にそれを舐めさせてみたら「めっちゃくちゃ不味い」って言うてたし……。

あれを最初に親父に食べさせて大丈夫なモノか確かめようと考えたまでは良いけどその親父もなかなか帰ってこねえし……。

「……ねー、カレー、出来ちゃった。

誰で人体実験しよーか」

「オレはやだぜ! さっきの激マズピザソースで充分だッ!」

「アレは岳がジャンケンに負けたからいけないの。」

さー、おとーさんはいつ帰って来るのかな?」

「あ~~~~~!!」

『えっ!?!』

「ご飯炊いてないよ」

何だ。一瞬カレーを落としてこぼした、ということに期待したのに。

忍と岳も同じみてえだな。

大げさすぎるほど肩落としてやがる。

いや、ショックで倒れた、って言った方が正しいか。

肩を落とした、のつもりかも知れねえけど何も前のめりに倒れな

くても。

「ただいま」

『お帰りッ!!』

「うおっ!?　びっくりした。

……お、今夜はカレーか?」

ちなみに出迎えたのは俺以外だからな。

米は忍が炊いた。

「ん。あたし達で作った」

「……………」

忍……親父で人体実験をするんじゃないのか?

「だいじょーぶ! 光は抜きだから!」

「えゝ、私も……むぐゝ!」

「父さん、早くっ」

「わ、わ、わ、引っ張らないで」

がちや

「お、純。ただいま」

「へいへい、おかーり」

「……純がひど「そんなことより、あれだよ!」これ? ちよつと食べても『いーよ!!』いただきまーす」

せめてスーツ脱げよ。

『ゴクリ……』

「あ、旨い!」

『うそおっ!?』

「でしょ?　私も作ったんだよ」

「え、本当に?　普通に旨いよ。光も進歩したんだな」

どういう意味の進歩だ?

まあ、とりあえず、このカレーは大丈夫らしいと言うことが分かった。

「うつつっわ!! 何これ!？」

ただし、途中で入れた異物が完全に溶け切っていたというわけではないらしく、色々と変なものが出てきた。

「え、これ山葵じゃねーの!？ 何で摩り下ろされてねーの!？」

「……なんかあたしのからは摩り下ろされてないどころか切られてさえないしょうが出て忌たんだけど」

「えゝ!？ それって摩り下ろすものだったのゝ!？」

『はっ!？』

ってな感じで。

まあ、俺のところには入ってなかったからよしとしよう。

8 調理終了! そのお味は? (後書き)

本当に美味しいかどうかは分かりません。

試してみても不味くても責任は取りませんのでご了承ください。

本当にやったら結果教えてくださいね♪

ご意見、ご感想等お待ちしております!

9 冷蔵庫の恐怖

「とゆー訳でー！我々はこれから冷蔵庫の掃除を始めろー！！」

「おー」

何であたしが手伝わされてんだろーか。

忍ですー。

カレーを作る時の話を聞いたおかーさんが突然「冷蔵庫の掃除をしよー」って言い出したんだよ。

確かに冷蔵庫の中には危険物としか思えないようなものが沢山入ってたけどさ。

何であたしまで手伝わされなきゃいけないんだろ。

理由は分かっているよ。逃げ遅れたから。

純兄はどっか行っちゃったし、岳はわざわざ友達と約束作って逃げたし。

光はよりによって今日習い事だし。

「よし、まずはドアポケットからねー」

とんかつソース、山葵、からし、しょうが、お茶、水、焼肉のタレ×5……焼肉のタレ多っ！！

柚ごしょう、出汁、お好み焼きのソース、カレーの時の激マズピザソース……って

「捨ててなかったのコレ！？」

「何言ってるのー、賞味期限は……」

「過ぎてるからっ！！」

ゴミ箱へ直行。

他には特に危ないものは無し。

「次はチルドルーム」

ここはチーズとか入ってるからなあ。
危ないものありそう。

……発見。

「おかーさん、このスライスチーズいつの」

「えー、チーズっていつぱいあるんだけど……
賞味期限いつ？」

「一昨年の8月」

「あーそれならまだ……」

「大丈夫なわけあるかっ!!」

ったく、いままでおかーさんの料理食べてよくお腹壊さなかった
なああたし達。

ある意味凄いかも。嬉しくないけど。

で、他にも危なさそーなクリームチーズとかを処分。

いやー。冷蔵庫によくカビ生えてなかったなあ。

って、まだ始めたばかりなのに。

それからをだーっと言って行くと、

冷蔵庫、一番下の段。

賞味期限が昨日のヨーグルトを発見。

おいしく処分させてもらった。

腐った牛乳を発見。

光速でゴミ箱へ。

冷蔵庫、真ん中の段。

カビの生えたべったら漬けを発見。

庭に肥料となる、かどうかは知らないけどとりあえず埋めといた。

冷蔵庫、一番上の段。

腐敗した卵を発見。

ヒヨコにもなれなかったのに食べることさえ出来なくなってしま

った、のはあまりにも可哀想過ぎたからせめてお墓を建ててあげた。
良い肥料になってください。

「あ、忍く。見てみてく、こんなのがあつたく」

「うえ。捨てろっ！今すぐ光よりも早く捨てろっ！！」

「あははく、だよねく」

カビで真っ白なバター。

よく気づかなかったなあ……。

不思議や不思議。

9 冷蔵庫の恐怖（後書き）

冷蔵庫の中って何入ってるか分からないですよね。
……ですよね？

ご意見、ご感想等お待ちしております！

10 チョコって美味しいよね♪

今日って何かあったっけ？

忍でございまーす。

なんかね、女子の殆どがそわそわしてるように見えるんだよ。
もう一度聞きます。

今日って何の日？

「忍、はい」

「ん？」

チョコケーキ？

あ、この子はあたしのクラスメートの山内桜。
中一ん時からの友達で、結構仲良いよ。

あ、そうだ、言ってなかった。

あたしと純兄は中学二年。

ちなみに、あたしも純兄も三組ね。

「ね、今日って何かあったっけ」

「え？」

そんなに目真ん丸くして驚かなくても。

「え、え、本気で言ってる？」

「うん」

「今日、バレンタインだよ？」

「……………ああ！！」

「忘れてたの！？」

だって、ろくに参加したこと無かったもん。

「とりあえず、はい」

「ありがと！ホワイトデーにでも返すよ」
覚えてたら。

「うん。…………あ、もうSHR始まる」

「ん、じゃね」

うーん、しっかしバレンタインか。
……国語の時間が楽しくなりそうだ。

六時間目、国語。

途中はあんまり面白くなかったからはしよるね。

「ほーい、授業始」

「ぶーちゃん！ 彼女にチョコもらった!？」

「いきなり!？」

うん、こうなると思ったよ。

国語の担当、東田孝義先生。
ひがしたたかよし

太っていて顔が赤いということであだ名が『ぶーちゃん』

これを許してるんだから心が広いんだかダメな教師なんだかわかんないんだよね

顔が赤いは関係ないんじゃないか？

豚ってピンク色のイメージあるもん。

ほんものは見たこと無いからよく知らないんだけど。

で、東田せんせには彼女が居るらしい。

……あ、あたしはぶーちゃんって呼ばないよ。

だって他の教師に怒られるのイヤだし。

「で、で、で？ もらったの？」

「えー、えー」

「なに？ もらったのもらってないの？」

あ、もらってないんだったら自分のあげよっか」

「いや、もらった、もらった」

『どんなの!？』

「そこに食いつく!？」

そりゃー気になるでしょ。

「普通に、ちょっと苦いやつ」

『手作り!?!』

しかし見事なハモリだ。
一部だけど。

「いや、市販の高いやつだけど?」

「ああ、愛が無いんだ」

「まあ、捨てたんだしね」
ドンマイだあ。

「待て待て待て待てえい!! 　いつ捨てた!?!」

『え、違うの?』

「違うから!!」

『だって噂では』

「いい加減ハモるのやめい!!」

ここまで来ると打ち合わせたみたいになってくるね。

「ほらほら、授業始めるぞ!」

もうやけくそだね。

「はい、四段ら」

「ぶーちゃん、オレ読む!」

この光景見るとなんとなく小学生かって言いたくなるんだけど。

「分かった分かった、読んで」

「カルは腕に唸りを上げてツカサのチョコを殴っ」

「カルはそのチョコにどんな恨みが!?!」

「怒ったツカサもカルのチョコを砕く」

あれえ、この話って何かいわゆる『美しい話』ってイメージがあつただけどなあ。

どろっどろだね。ちゃんと読んだらいい話なのに
チョコ、恐るべし?

10 チョコって美味しいよね♪（後書き）

サブタイは思いっきり本文とは関係ありません。
私の意見です。

ご意見、ご感想等お待ちしております！

11 バレンタイン恐怖症

さあて、どーするか……。。

岳だっ！

さて、いきなりだけどオレは今もぐれつに悩んでいる。
理由は……

昨日光にもらったチョコ！

もう見た目的に完全危険物なんだよな。

だって、だってな？

どっからどう見ても魚の形してるんだぜ？

しかも丸々一匹分。

オマケにチョコの所々に変な凹凸が……。

捨てたりなんかしたら絶対に光に泣かれるしなあ……。。

ねーちゃんのと一緒に食べたらまだましかと思ったら、ねーちゃんバレンタインのこと完全に忘れてたとか言うし。

……ここは一つ、勇気を出して！！

「にーちゃん」

「あ？」

にーちゃんに食ってもらおう。

ん？ 自分で食うとも思った？

馬鹿！ そんなのは自殺行為というものだああ！！

「目、閉じて口開けて」

「やだ」

「そんなこと言わずに！！」

とか言っても効果が無いのは分かりきっている！

ってな訳でオレはにーちゃんに飛び掛くる！！

どかつ

「イツテェ!!」

殴られた。

家庭内暴力だっ!!

「訴えてやるう」

「ったく……わーったわーった。貸してみ」

「やたっ!!」

にーちゃんって泣いたら動いてくれるんだ。

初めて知った。

……と、感動したオレは馬鹿だった。

ずぼっ

「ああああんぎやああああああああ!!!!」

ま、不味い! 前に食わされた真っ黒めざしと同じくらい不味い!!

ちくしょ、忘れてた。相手はあのにーちゃんだ。

自分に被害が行くようなことをしないで決まっている!!

でもオレの口の中に突っ込むのはどーよ?

こうなったら……次の手!!

「ねーちゃん」

「やだ」

「まだオレ何も言ってるねーよ!」

「さっきの叫び声と純兄の部屋の会話とその手に持った無残にも頭が食いちぎられたいわしチョコ」

む。聞かれていたのか。

流石地獄耳ねーちゃん。

ってゆーか、この魚っていわしだったんだ。

「それからしてどー考えてもそれをあたしに食べさせるつもりでしょ」

「Yes!」

「グッバイ」

「しつれーしましたー」
「と見せかけて!!」

「食らえー!!」

猛スピードでねーちゃんの方へダッシュ!

もちろん突き出した手にはいわしチョコ!!

「どう」

「んぎゃあっ!!」

は、入った。

鳩尾にねーちゃんの蹴りが入ったあ……!!

食らったこと無いやつは分かんねーだろうけど、マジでこれ痛いんだぜ?

「ぐおおおお……」

「とどめっ」

「んにゃあああああああ!!!!」

「……あれ? 岳お兄ちゃんどうして気絶してるの」

「ん? 光がくれたチョコがあまりにもおいしかったからだって」

「えへへ、やっぱり生のいわしが良かったのかな?」

あ、それとも色々混ぜたチョコレートの方かな?

来年もそれあげよっつと」

……バレンタインなんて、二度と来るな!!

12 サンゴもらった

「純兄、行こーよ」

「やだ。行きたかったら一人で行け」

「やだ。一人で帰るの退屈だもん」

そんな理由かよ。

純だ。

簡単に状況を説明すると、学校からの帰り道にリサイクルショップなんてのがあったんだ。

道の一部にブルーシートしいてその上に色々置いてあるようなやつ。

で、忍はそこに行きたいんだとか。

俺は面倒だから行きたくねえんだよ。

「行こ、行こ、行こ、ねー」

「いつ駄々こねるようになった」

「今」

なんて簡単な答えだ。

「おう、お二人さんカップ……ぐぼあ!!」

『誰がカップルだ?』

ったく、いっしょに帰るとしよっちゅう勘違いされるからめんどくせえ。

下校中会ったりなんかしなければ……つと、その前に。

「生きてるか」

「仏説摩訶依般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄……」

「んな長い經読まなくても」

「殺すなコラ!!」

ああ、生きてた。

俺と忍の蹴りを同時に食らったのにこんなに早く復活するとは。

「あーいてて、何でいきなり攻撃されたのおれ」

「あたし等は断じてカップルなんぞではないっ！　という反論の意味で」

「へ、違うんだ？」

「兄妹だ馬鹿野郎」

「っつか、コイツ誰だ。」

「ふーん、つまんね。まっ、見てけよ。見るだけならただだし」

「あ、リサイクルショップの人か。」

「んじゃー遠慮なく」

「お前の遠慮なんて見たことねえけど」

「もらえるものはもらっとく。それがあたし」

「そんなことはとっくに知ってる。」

「忍は橋の方から流すようにザーッと見てる。」

「俺？興味の欠片もねえよ。」

「……何コレ？」

「白い石みたいなものから細い変なものが生えている。」

「……サンゴっぽいけど。」

「ん？それサンゴ。ホンモノだぜ。ちなみに値段は十円な」

「ホントにサンゴかよ。」

「へー、コレがサンゴの死骸」

「わざわざ死骸をつけなくてもいいだろーに。」

「へー……」

三分経過。

「いつまで見てんだよ」

「だって見るだけならただだし。」

「次はいつ見れるか分からないし」

いい加減帰らせて欲しい。

「そんなに気に入ったんだったもってけよ。ただで」

「おおー！兄さんデブ！」

「ナニィ！？」

太ってないし。むしろやせてる方だろ。

「違った、太っ腹！！」

大分違うだろそれ。

「よしよし、もってけドロボー！」

「泥棒は犯罪だ！」

「そうでなくて！」

「泥棒は犯罪ではないと！？？」

「それでもなくて！」

……帰っていいか？

「そいじゃさよーなら。サンゴありがと！」

「どういたしまして！って突然だな！？」

「じゃーねー」

「スルーかよ！？」

「ただいまー」

「お帰りー。あれー？何それー」

「サンゴ。もらった」

ぽかん。

光、フリーズ。

「サンゴの死骸ー！？お払いしなきゃー！
なんでそうなる！？」

13 掃除用具入れ遊び

キンコンカンコンコン
光です。

四時間目と休み時間が終わり、今から掃除。

私の班の担当は廊下だったね。

箒取ってこなきゃ。

がたつがたつがたつ

あれ？ 誰だか分からないけど隣のクラスの人が掃除用具入れから箒出してる。

一本拝借。

ぱたん

あ、隣のクラスの誰かさんが掃除用具入れに入っちゃった。

掃除さつさと終わらしてまた見てみよう。

……うーん……。

さつさと終わらしたいのにな。

廊下で何か取っ組み合いして遊んでる男子が邪魔で掃けないよ。

……よし。

さつさつさつさつさ

「うわっ！ 掃くな！ きたねえだろ！！」

「……………」

面倒くさいからスル。

そこにいるのが悪いんだもんね。

あ、塵取りとってこなきゃ。

そういえばあの誰かさんは塵取り出してなかったな。

パカッ

「……ぷっ」

変なの〜！

だってね〜、頭が掃除用具入れにつっかかって傾いてるんだよ〜。
え〜つと〜、塵取り〜、塵取り〜。

廊下に戻ったらゴミを集めた上で取っ組み合いしてる奴がいます
〜。

すぐくムカついたので箒で突いて叩いて掃いてやりました〜。
こんなことする方が悪いんだもんね〜。

パカッ

パタン

なんか開けたら閉められた〜。

パカッ

パタン

むう〜。

パカッ

パタン

パカッ

パタン

パカッ

えい〜。

パタン

塵取り入れることには成功〜。

「……あれ、なんでこんなに箒出てんの。閉まっとけよ〜」

先生。そこは用具入れ見て確かめようよ。
大体なんで私が片付けなくちゃいけないの。

パカッ

パタン

ほらあ、閉められちゃった。

パカッ

それ。

「うあっ!？」

パタン

今度は閉めたの私だよ。

箒を三本くらい突っ込んだ後でね。

がたがたがたっ

これ、何も知らない人が見たらポルターガイスト現象だね。

……あ、収まった。

パカッ

「……ぷっ」

パタン

今度はさっきの頭突っかった状態で箒抱きかかえてたよ。

あ、箒持った子が来た。

箒を戻そうとしてるんだね。

パカッ

「きゃああああ!!」

ずさっ

おお。漫画みたいな後ずさり。

教室の端まで後ずさったよ。

「び、びっくりした……」

あのリアクションにはこっちもびっくりしたけどね。

「こら、掃除用具入れに入ってる奴。」

お前は箒か？ なんなら今すぐ使ってやってもいいぞ」

「出ます出ます出ます！」

うちのクラスの担任の先生はまさに有言実行な人だからね。

言った事は本当にやるんだよ。

前にさっきと同じ事言われてそれでもずっと入ってたらさかさまにされて箒みたいにつかわれちゃった子がいるんだよ。

「さっさと自分のクラス戻れ」

「はあゝい」

せっかく面白かったのにな。

あゝ、また箒持った子が来た。

パカッ

ガラガラッ

あゝ、たまにあるよね。

掃除用具入れ開けたら箒がガラガラッて出てくるの。

パシッ

「ナイスキャッチ」

……うゝん、確かにナイスキャッチではあったけど。

それを小声で、オマケに自分で言ったらちよっと悲しい人に見えるよ？

14 もし〇〇が降ってきたら

「桜」

「はーい？」

忍です。

暇だったのになんとかなく桜に話しかけてみた。

「何か面白いこと無い？」

「無いよ」

なんてキツパリと言うんだろう。

「よ」

「あ、しーちゃん」

今来た、挨拶を一文で終わらせてしまう女の子は、
中谷篠。なかたにしの
通称しーちゃん。

って言ってもそう読んでもるのあたしただけだね。

「しーちゃん、何か面白いこと無い？」

「無い。何か面白いこと無い？」

今あたしが言ったことと同じこと返したな。

「第一回、もし〇〇が降ってきたらー！！」

桜が手をパーッと広げて高らかに宣言。

『突然だな！？』

「えー？ だって面白いこと探してたんでしょ？」

うん、それは確かに。

「何？ 何かやんのかおめーら」

桜の斜め前の席で振り返るは高崎清たかさきしん

なんだかんだでよく話したりはする男子。

「じゃ、始めよっか」

「オレは無視か！？」

『うんそう』

あ、しまった。返事したら無視じゃないじゃん。

「まずは篠からね。」

何か降ってきたら面白そうだな〜って感じのを〇〇の中に入れて」

「あたしから？ ……ん〜……あ」

何か思いついたみたいだね。

「もし一万円札が降ってきたら」

なんてピンポイントな

さー、皆で想像しよう。

ある日、突然一万円札が大量に降ってきた。

どさーっ

「ママーこの紙お絵かき出来ないよう」

「ママのお財布に詰めておきなさい！」

「ああ！！ これで借金全額返済出来る！！」

「夢のマイホーム！！」

「よかった。お小遣いなくなりそうだったんだ。へへ」

「この金はオレのだ！！」

「馬鹿野郎！ オレのに決まってるだろ！！」

「あなたのお金は私のもの。私のお金は私のものよお！！ おーほ

ほほほ！！！！」

……戦争になりそうだ。

「って言うか最後の、何？」

「ウザかったね〜」

「なるほど、そんな風にすればいいのか。

おーい、純！ なんか面白そーだぜ！！」

なんでそこで純兄を呼ぶかな。

まあ、しーちゃん、桜、清、純兄、あたしがいつものメンバーって感じではあるんだけど。

「あんだよ」

「じゃゝ次はゝ……純君で！」

「……もし木刀が降ってきたら」

話聞いてたんだ。

想像……するまでも無い。

『怖いよ!!』

「あそ」

大体なんで木刀が出てきたのさ！

「次ゝ、忍行こゝ」

「あたし？」

んゝ、そうだなあ……。

「もしケーキが降ってきたら」
想像してみよー。

空からいろんな種類のケーキが降ってくる。

ひゅるるるるう……

べちゃ。

それを拾い食いする犬や猫。

おなかを壊す犬猫。

悲劇だ。

「後が大変そう」

「だめになる服が大量にゝ」

「クリーニング店は悲鳴を上げて喜ぶだろうけどな」

「よし決めた!!」

お？

「オレはケーキが降ってきたらクリーニング店を開くっ!!」
馬鹿だ。

「いや、本当に降ってくる訳じゃないから」

「ならオレが降らす!!」

ドカッ

「純君のパンチ!見事に鳩尾へ決まりました!」

何も中継しなくても。

「うぐぐ……」

「南無阿弥陀仏」

「殺すな!!」

……ん?

「なあに?般若心経の方が良かった? あれ長いからやだ」

「ちがうつつーに!」

え? 違うの?

「はーい次行こー! ……清君」

「何でオレの時はテンション低いんだ!?!」

「あははーなんとなく♪」

「ったくう……んーと、もし数学のテスト問題が降ってきたら」

なんてピンポイント過ぎる。

想像しよーう。

空からハラハラと降る数学のテスト問題。

地面はどんどん白い紙と黒い文字で埋め尽くされてゆく。

だから何。

「うわあああああああ!! 怖いっ!!」

ドカッ

「今度は忍のパンチが眉間にく、入りましたあ!」

だから実況せんていいと言うのに。

「何でアレが怖い」

「どこも怖いトコねえだろ」

「だって、だって！！ 数学のテスト問題だぜ！？」

……あ。

清って数学が異常なほど苦手なんだっけ。

「清、 $1+1$ は」

「2。ってそれは算数だろ！！ 馬鹿にしてんのか！」

Yes！

その日の夜。

お札と数学のテストがケーキをサンドして、さらにそれに木刀が刺さったものが学校に降ってくる夢を見た。

と、言う話を皆に話す夢を見た。

何故？

15 志望校は

「純兄」

「……あ？」

「暇」

「……りんご食ってんじゃないか」

それでも暇なもんは暇なんだもん。

だって、食べてはいるけどそれ以外してないんだもん。

「暇ー暇ー暇ー」

「俺にどうしろってんだ」

さあ。

「純兄は何してんの」

「暇つぶし」

結局純兄も暇なんじゃないか。

何か雑誌みたいなの読んでるけど。

「それ何？」

「学校で貰ったろ。府内の私立校ガイド」

「ふーん。純兄そんなに行きたい高校でもある「無い」……」

即答かい。

「でも忍に合いそうな学校な「どれ？」……これ」

純兄の背中から覗き込んでみると……。

……おい。

「コレ男子校」

「あ？ お前男じゃなかったか？」

「妹という事まで忘れたのかオイ!!」

兄としてどーよ。

「『まで』って、俺が何か他に忘れたことあったか」

無いよ。多分、きつと、恐らく。

「ま、冗談だけどな」

おい。
がちや

「あれ、ねーちゃん何してんの？」

「りんご食べてんだよ。見て分かんない？」

あ、そうだ。言い忘れてたけどここ、純兄達の部屋ね。

「見て分かるけど何でオレ等の部屋で食ってんの」

「暇つぶし」

「納得」

納得早いねー。

で、

「岳は何しに來たのさ」

「ここオレの部屋！」

「オレの部屋に何しに？」

「えっ！？ えーっと……暇つぶし？」

「何でその二人そろって暇つぶしがここなんだよ」

『なんとなく』

「……………」

なんとなくに勝るものなし！

「そーいやさ、純兄って志望校決まってるの？」

「……ある意味」

と言うと？

「歩きまたは自転車で通える公立校」

「へえ……って、二校しかないし」

水ヶ丘高校か第二水ヶ丘高校。

「……に、行けて親父が言ってた」

「それあたしまである意味決まったようなもんじゃん！？」

あ、そー言えばあたしもおとーさんにそんな事言われたような気が……。

「ま、言われなくてもそうするつもりだったけどな」

「へえ？ なんで」

「遠い学校とか行くのめんどくせえ」

「大いに納得」

って言うかあたしもその部類だし。

「んじゃ純兄が行きたいのは第二水高」

「そうなるな」

「の？」

第二水高は普通科の？類と？類文理系があるんだけど。

「……ま、？類受けるつもりでやってたらどっちでも大丈夫だろ」

……考えてないんだね。

「あ、なっちゃんが言ってたんだけどね」

なっちゃんって言うのはおとーさんの妹ね。

つまり叔母さん。

「？類はクラス替え無いんだって」

「……だから？」

あー、はいはい。気にしないね、そう言うのは。

んー、でもどうするかな、あたしも。

こないだ進○ゼミの模試出したけど、第二水高？類は55%で努力圏だったんだよね。

？類は90%で安全圏だったけど。

英語が100点中35点という……。

その他の教科もそこそこやばかったんだけどね。

流石に英語ほどじゃ無いけど。

……まあ、何とかなるさ！！

という事にしておこう、うん。

……期末の勉強はちゃんとやるかな。たまには。

オマケ

「オレの登場は何だったんだ!!?」

「岳お兄ちゃんはお出られただけ良いじゃない。」

お兄ちゃん達出てるのに私出てないんだよね?」

うん、放置しておこう。

オマケ 2

りんごは綺麗にあたしに食べられましたとさ。
めでたしめでたし。

何がどうめでたしなのか。

そんな質問は受け付けない!

16 第一回？何と読むでしょう

「第一回、何と読むでしょう！！」

さー、やってまいりました、何と読むでしょうの時間です！！

あ、違った。何『と』読むでしょう！！

ちなみに、第二回、第三回があるのかと言う質問は受け付けねぞー！！

岳だーっ！

「……で、何」

約一名このテンションについてこれて居ない奴が居るが

「ねー、何するの？」

「俺に聞くな。一人で盛り上がってる奴^{バカ}に聞け」

……違った。オレ以外全員だった。

「んで？結局何がしたいの岳は」

「暇つぶし！！」

「なるほど」

家じゃこう言えば基本的に納得してもらえろという不思議。

「何でテメエの暇つぶしに俺等が付きあわされなきゃなんねえんだよ」

はーい、約一名納得してない奴が居ましたー。

しかしそれは一切無視させていただきまして！！

「無視すんなよそこ」

なぜ心の声に突っ込まれたのか不思議ですが『声に出てる（よ）

』……あーもう！話進まねー！！

「当て字で色んな言葉を作ってそれを何と読むかというゲームだ！！」

「やっと説明した」

「長かったねー」

色々突っ込まなきゃすぐ説明したからな！

「今日のお題は……魚の漢字（を）一文字は入れること！」

「今日以外にやる予定もあんの？」

「無い！！」

「なら『今日の』とか言うなよ」

んな事言われてもなあ。

「まあとにかく！ 第一問！！」

「クイズなの？」

「例題だ！」

「なら第一問とか言うな。例題って言え」

今言った！

「さあ、何と読むでしょう！！」

『駄菓子菓子』

「例題なのにお題から外れてる！？」

あ、間違えた。

ちなみに正解は「だがしかし」な

「えーと、気を取り直して、何と読むでしょう！！」

『駒津蛸人』

「んー……あ、分かった！」

え、ウソッ！？

「『駒津蛸人』↓『こまつたこと』↓『こまつたこと』で、困った事！」

う……悔しいが……。

「正解！」

「わーい。んじゃ次あたし出すね」

全然喜んでるように見えねー。

でもなんだかんだでのってるし。

「はい、何と読む？」

『北鯊鯛寒い』

「分かった」

にーちゃん早えよ！！

「『北鯊鯛寒い』↓『きたはぜたいさむい』↓『きたはぜったいさむい』で北は絶対寒い」

ちよつと無理があるんじゃない……

「ぴーんぽーん。はい、純兄」

何かねーちゃんが仕切ってるような気が!?

「……ん」

『重?』

……?

まず魚がワカリマセーン。

「えーつと」

「あれ? いつの間に持ってきたのそれ」

ほら、すし屋でよくある魚の名前が漢字でギッチリ書かれた湯のみ。

何故かそれが家にあるんだなあ。

「あゝ、分かったよ!」

『重?』↓『おもうつぽ』で思うつぽだ!」

「そう」

へーあれウツボって読むの。

「はい、次光ねー」

……何かオレ、半空気化してね?

「んーつと、はい」

『?巢』

湯飲みで確認! 分かった!

『『?巢』↓『うぐいす』でうぐいす(でしょ)』

先に言われた!?

「せーいかーいー!」

「岳一問も答えられなかったねー」

「るっせ! 最後のは分かってたからな!」

本当だから!!

16 第一回？何と読むでしょー（後書き）

近くに当て字で書いた色々があつたので書きました。
さて問題です。何と読むでしょー！

『絶対？烏賊？』

答えは明日載せますね！（覚えてたら）

17 まだ寒いのに

「純兄ー行くよー」

なぜ俺が待たせてたみたいな言い方をする。

「待たされたのはこっちだ」

「知ったことか！」

それで済ますな。

純だ。

今、学校に行くため、外に出たところ。

大分温かくなってきたとはいえ、まだ寒い。

「寒い寒い寒い寒い！」

「大声で叫ぶな、五月蠅い」

「暑い暑い暑い暑い暑い！」

「叫ぶなど言ったのが聞こえなかったかコラ」

「あ、余計寒くなるから止めろって意味じゃないのか」
いつ誰がそんなことを言った。

「にゃ」

「にゃ」

……毎朝の恒例行事。忍が猫を呼び出す。

寒い中待たされるこっちの身にもなって欲しい。

「ナ」

「ナ」

……お？

「珍しく短かったな」

「皆忙しいそうな」

猫って飯食って寝てるだけじゃねえのか？ 昼間は。

あ、ちなみに忍は猫語が分かるらしい。

小っこい時から猫に話しかけてたからか？

「……ひーまだー」

「歩いてるだろ」

「足以外が暇」

「寝てろ」

「ぐう」

ホントに寝るなよ。

目は半開きだから意識が半分ぶっ飛んでる程度だろうが。

「半寝」

「……それ言ってる時点で寝てねえだろ」

「んゝ……ま、それもそっか。……んむ？」

伸びをしたと思ったら、空中を見て固まる。

「純兄ー、あっこ何か居る？ 何かちとぼやけてんだけど」

……あっこ、を見てみたら……居た。

面倒そーなのが居た。

面倒そーなのⅡ幽霊という式。

どー言うわけか俺は物心ついたときからこういった類のものが見える。

忍や岳はぼやけたものが見える程度。

光は気配を感じるだけなのに俺にははっきり見えるんだなこれが……。

そいつ等に会っていい思いをしたことは一度もねえ。

「居るんだ、やっぱり」

「居るけど……ほっといいいか？」

「どんな奴？」

「落ち武者」

「よしほっとうこう」

『ちよっ！？ 待て待て待て待て待てえい！！ 何故わしをスル』

面倒だから「酷い……」

面倒なものはほって置くのが一番だ。

前、下手に関わった自殺した爺さんの霊に延々四時間、人生論とやらを語られたからな……。

あれは地獄だった。

「純兄、ごろごろ聞こえるけど何言ってるの？ 落ち武者」

「何故スルーするかと」

「可愛くない。めんどくさい。可哀想に思えない」

あ、石化した。

「後遅刻するのはごめんだしね。……あ、後」

一息すって……。

「オバケの匂はまだまだ先だしね」

がらがらがら。

崩れた。

にしても匂って。おい。

食う気か？

『わ、わしは旨くないぞ!!』

「るっせえ。とっとと成仏しやがれ」

ってか復活早えな。

『一人では寂しいではないか!』

気色悪い。

「そこらに漂ってる霊でもいっしょに連れてけ。じゃな」

『わしをほっとく気か!?!』

「最初にそう言ったら」

『おお、そういえば』

ったく。結局関わっちまったな。

早めに出てて良かった。

『……言っておったか?』

……キレていいか？

とりあえず、周りに忍以外誰も居ないことを確認してとび蹴りをしておいた。

後日、落ち武者はそこら辺のすずめの霊と成仏したようだった。

……結局一人で行かなかったのかよ。

17 まだ寒いのに（後書き）

昨日の答え。

『絶対？烏賊？』↓『絶対いわないか？』で、絶対言わないか？
でした！

18 歩く(?) 文房具箱

「光ちゃん、ねー、光ちゃん!」

んむ。あんみんぼうがいだよお。
光です。

「んみゅ?」

「セロテープ持っていない?」

それだけ?

まあいいか。

え。つとセロテープセロテープ……。

「はい」

「ありがとう」

さて、お昼寝再開。

あ、今は給食が終わった後のお昼休みね。

「ひーちゃん、糊貸して!」

酷いよ、いま寝ようとしたばかりなのに。

「糊ね」

「……あ、やっぱりボンドない?」

……今出そうとしたところなのになあ。

また探さないといけないじゃない。

「はい、ボンド」

「ありがとう」

あ、あのね、私は学校でちよっぴり有名な歩く(?) 文房具箱なんだよ。

はさみに糊、セロハンテープから色鉛筆まで、いつも持っているポーチから文房具なら何でも出て来るんだよ。

どこぞの青い狸猫のポケットとは違うからね?

文房具限定だもん。

それでは、私はまたおねむの世界へ帰ります。

「高山ー、おい、高山!!」

……酷いよ。今寝ようとしたばかりなのに。

「カッター持ってねーか!？」

また借り物？

ん〜と〜……カッターは〜……と〜。

「はい」

何に使うんだろ。

今度こそお休みなさい。

「お、おいっ!! カッターとか持ってくんな! あぶねえよ!!」

ドタバタドタバタ

……んみゅう。

あんみんぼうがいい。

カッター持ってくんなんて言ってたね。私のかな？

安眠の為。見てこよう。

「……………」

これは、危険だね。

だってね、私が貸したカッターを喧嘩相手に向けてるんだよ。

危ないよ。

「返して」

「はっ? なんでだよ」

なんでもへったくれも無いよ。

「危ないからだよ」

「だーいじょうぶだって。俺様なめんな!」

俺様って…………。

それよりも、

「なめないよ、こんな不味そうなもの」

「ま、不味そう? 俺様って不味そうなのか!? くそっ!!」

え〜? なんで怒ったのこの人?

しかも何か相手に突っ込みそうになってるし。
……って！ カッター持ったまんまじゃない！
しょうがないな。

「えい」

どかつ

「高山光の膝蹴り！！ 見事に決まりましたアツ！！」
誰かさん実況ありがとう。

えーっと、カッターカッターっ……あれ？

「どこ行っちゃったの？」

「電気の上だ！ 何か落ちそう……って」
落ちてきた！

しかも刃が出たまんま！

「みゅー！」

パシッ

「お見事っ！ 怪我一つ無くカッターを掴みました高山光、意外と
反射神経はいいようです！」

再び実況ありがとう。

でも意外とってどういう意味？

さて、お昼寝お昼寝♪
がらっ

「光！ 果物ナイフ持ってるか！？」

岳お兄ちゃん……。

何に使うの！？

18 歩く(?) 文房具箱(後書き)

もちろん光は果物ナイフなんて持っていません。あしからず。

19 絵しりとりしようよ

「絵しりとりしよう！」

『突然だな！？』

何故か忍、篠、清君に綺麗にハモって突っ込まれたあ。
桜です。

「だってどうせ皆暇でしょ？」

『それもそうだ』

何で毎日毎日暇してるのかな、この人たち。
わたしも人の事いえないけどね。

「純君もやろ」

「んあ？」

聞いてなかったのかな？

「絵しりとり」

「何でまた「純兄早くー」……分った分った」

よーし、皆揃ったから……あ、何に絵描こ……ノートでいいや。

『みんぎりまーわーりっ』

たまにみんぎり知らない人がいますので説明しまーす。

みんぎり回り。つまり右回りは、ジャンケンと同じようにグーチ
ヨキパーのどれかを出して、一人だけ違うものを出したらその人か
ら右回りに回っていくの。

例えば、わたし達の場合は忍と純君がチヨキ、篠と清君がグー、
わたしがパー。

この時はわたしから右回りなの。分かったかな。

「ん……何にしようっかな？」

さらさらさら……

よしっ！

「はい、次忍」

「ほーい。あ、分かった」

わたしが描いたりす、分かってくれたみたいだね、良かった！
さらさらさら……

「はい。清」

「あいよっ！ ……あ、分かった！」

さつきチラッと見たけど多分スイカだね。

さらさらさら……

「ほいっ、次純か」

「ん。……？ 何だコレ」

んむ？

……ううん……なんだろう、これ。分っかん無いな。

楕円形のメロンパンみたいなものに棒が四本生えてるんだけど……

…。

「何言ってるんだ！ カメに決まってるだろ！」

『頭と尻尾は』

「引っ込んでるんだ！」

分かりにくいよ！

「あだっ」

「忍と純君のダブルチョップ！ 吸い付くかのように清君の脳天

へ！」

「実況せんでいいってのに」

だーって実況したくなるんだもん。

「っつか吸い付きたくねえよ。こんな奴の頭に」

「ひどっ！」

「あーはいはい、純早く描いて」

「ん」

さらさらさら……

次は篠〜！

「……忍と純の絵ってそっくりだな」

「あ、本とだ。程々に雑つつーかなんつか」

『あんた（テメエ）のよりマシだ』

激しく同意。

「というか清のは程々に、じゃないし」
さらに激しく同意〜！

「最初メロンパンかと」

「え？ あたしは宇宙船に見えたけど」

「あたしは昆虫の足が二本足りないバージョンに見えた」
わたしは箸をさしたメロンパンかと思ったんだけどな〜。

「篠〜、描いた？」

「ああ、うん」

……うーんと、えーつと……。

リス、スイカ、カメ……。純君のは〜……メス？で篠は……なん
だろ〜。

あ、メスって手術とかで使うようなメスね。

で、篠は何か太い棒に線がいっぱい入ってるんだけど〜……。

「う〜ん……あ、分かった！ 酢昆布？」

「スルメ」

あう……そう来たかあ。

さらさらさらさら……

「はい！」

「……………??？」

んー……？分からなかったかな〜。

「あ、アレか！」

よかった、分かってくれたみたい♪

次に回ってきた時は、こんな感じだったよ。

スルメ（篠）↓目↓マント（忍）↓登場！（清君）↓ウナギ（純

君）↓ギリシャ文字（篠）

何か途中におかしなものが挟まってるよ？

……て、あれっ!？

わたしは「目」を描いたのに、何で次が「マント」で「ま」にな
ってるの？

……目を真ん丸く書いたのが「目玉」と勘違いされちゃったのか
なあ。

19 絵しりとりしようよ（後書き）

絵しりとりした時、意味が分からない絵を描く人って必ず一人は居ますよね？

20 ホントに居たのかこんな奴

「おーい、たけ「誰が竹だ！」誰も竹とは言ってねーよ！」
そりゃそうだ。

オレがわざわざ途中で切ったんだからな！

岳だ！。

ちなみに話してる相手はクラスメートで友達の中谷翔なかにしょうな。

「で、何か用か九日投下？」

「投下じゃない、十日」

「それはさて置き。何か用？」

「用が無きゃ来ちゃダメなのか！？」

「うんそう」

とは言わないけど。

あ、言ったか。

「ふーん。じゃ、面白いことあるけど言ってやんね」

「なにッ！？ 何だ！？ 面白いことって！」

「ひっひーん」

「馬？」

「違あう！」

全く、話が進まないじゃないか。

オレのせい？ まさか。

「で、面しれー事って？」

「これこれ」

む？ 手紙？ ピンク色の女子が使うような感じだなー……。

……まさか。

「お前そー言う趣味だったのか！？」

「んな訳ねーだろー！！」

「じゃーそれは何だ！」

「シーッ！ 実はな……修也の靴箱の中に入ってたんだ」

人の靴箱覗いたのかコイツ。

あ、修也っつーのはうちのクラスの男子な。

なんつーのかな、地味？
いやいや違うな。

クール？
ツンデレのツンだけバージョン？

まゝ、そんな感じか。

で、スポーツ、勉強、大体出来るような奴。

まっ、オレには敵わねーけどな！

本当だぞう。

「で、中身を見てみたら……」

人の手紙の中身を見たのか!?

あーあーあー、怒られてもしーらね。

「で、何て書いてあったんだ？」

え？
人の手紙の中身を見ちゃいけないって？

「バーロ、見たのは翔だ。オレは内容を聞いただけ！」

「じ、じ、じ、実はな……所謂ラブレターってヤツだったんだよ！」

「うええええええええ！？」

ホントに居るのか！？
靴箱の中にラブレター入れる奴！

「十中八九ドッキリじやねーか！」

「いや、それがな……どっからどー見ても女子の字だぜ？」

「そこら辺の奴に書かせたんじゃねーの？」

「だからってわざわざこんな便箋と封筒買うか？」

ああ、それもそーだ。って事はホンモノ！？

「で、何て書いてあったんだ!？」

「んーとな……」

『しゅ、しゅーや、くん、へ……』

ほうか、ご、たいーくかんの、うら、で、まって、ま、す……』

だ
と
」

「なんでそんなしどろもどろで言うんだよ」

聞きにくくてしょーがねー。

「書いてあるのをそのまま言ったんだけど。」

全部平仮名で書いてあるから読みにくいと思ったらありやしねー」

「話し言葉でラブレター書くかね、普通」

「まー、とにかく見に行くのは確実って事で！」

「おう！」

「……って、あれ？」

「それ修也は読んだのか？」

「……あゝ」

おい。

「ガッコ来たのは修也より先だったから……」

おいおいおいおいおいおい！

「放課後って事は今戻しに行っても大丈夫だよな！ 戻しに行こう！」

「あ、ちよつと待て。修也にラブレターなんて出した度胸のある奴、誰」

だって、修也はラブレターなんてもらった途端やぶって捨てるよ
うな奴だぜ？

そんな奴にラブレター出すなんてほぼ自滅同然じゃねーか。

「んーとな……。5ー2古閑奈那子こがななこって書いてあるな」

「古閑あ！？」

古閑っていやー、隣のクラスの普通の顔立ち、ちよつとテンション高め、成績普通な女子……。

つりあうかねえ。

「よし、翔！ 賭けしよーぜ！ お菓子一つ賭けて！」

「じゃ、おれは「オレは実らないに賭ける！」……実るに賭けると」

「そーゆーこと」

「ま、いいや」

よしっ！ 勝った！

さーって、何のお菓子もらうかなー♪

20 ホントに居たのかこんな奴（後書き）

ラブレタードッキリ、引っかったことある人ー。
または引っ掛けたことある人ー。

私は誰かが引っ掛けようとするのを黙って見る人です（笑）

21 実ったの实ってないの

放課後……。

「お、来たぜ……修也だ」

「言わなくても分かるっての」

岳だ！。

前回のあらすじ。

朝、翔が修也の靴箱に入っている所謂ラブレターを発見。

で、オレと翔は修也がどんな反応をするか楽しみに靴箱の陰から見守って(?) いるのだ。

「あ、あ、修也が手紙に気付いた」

「気付かないほうがおかしいから」

何しろ靴の上に置いてあったんだからな！

「……………」

周囲を確認。いたずらだと思っているらしい。

ってか普通そう思うわな。

封筒の裏…名前を確認、ここで修也にある異変が起こった！

「お？ お？ お？ 修也のやつ顔が赤いぞ？」

どうやら熱があるらしい。

行かずに家帰って寝るかもしれない……。

賭けはどーなるんだあ！

「これは……まさか……」

「なんだ、翔も同じこと考えてたか」

「ああ、おまえでも気付くよな、うん」

家に帰って寝るのだけは勘弁してくれよ……。

あ、修也が移動を開始した！

「尾行するぞ！」

「言われなくとも！」

体育館裏……。

「お、やっぱりあのラブレターは本物だったんだな。ちゃんと古閑いる」

いやーよかった。帰って寝るなんてことにならなくて。

「古閑も顔赤いな、熱か？」

「おい、これから告るからに決まってるだろ」

あ、そーゆー理由。

しっかしまー、二人とも赤いこと赤いこと。

どーかしたらリング頭が二人いるようにも見えるぜ？

「え、えとっ、修也君！」

勇気を振り絞って声をかける古閑。もちろん顔は赤いまま。

「……ッ？」

上目づかいで（睨んでる？）古閑を見る修也。こちらも顔は赤い。

「あ、……あ、あっ、あ、あたしとっ……」

おっかしいな、古閑ってこんなしどろもどろだったっけ？

「あーもう！ さっさと言えよお！」

「そーだそーだ！」

ちなみに小声で話しているので聞こえません。多分！！

「あたしとッ……とっ、と、と……」

壊れたCD聞いている気分になってきたぞオレは。

「あたし、と……決闘して下さいっ！！」

『はあ！？』

「あぁっ！ 間違えた！」

いったい何と。

「チッ……はつきりしねえ奴だな……」

おや、修也くうん？

貴男はオンナノコ泣かせるきですかあ？

「おいそこっ！ いるのは分かってんだ。出てきやがれ」

『バレてた！？』

まさかのまさかり！ こっちに来ますか！？

「バレバレだ。とつとどっか行きやがれ馬鹿野郎」

「そう！ 修也君の言うとおりだよ！」

『あーははーい。ゴーマンナサーイ』

すたこらさっさのさ。

と見せかけて実は録音機を仕掛けてあったり。

ふははははー！

『つたく……てめえもだよ。言いたいことがあんならさっさと見え。なんなら俺が言うか？』

『えっ……？』

『—————……』

『あ、あた、っしも……だよ……』

『……ふん』

後で録音機を回収してみたらどうだろう。

一番大事なところが小さすぎて聞こえないではないか。

賭け、どーするべ。

ちなみに修也に聞くというのは無理。

一回聞いてみたらな、顔赤くして突然殴ってきたんだよ。

オレはまあ、余裕で避けれるんだけど（にーちゃんねーちゃんのは速くて避けれない。いつか避けられるようにとスピードの訓練を……うわ言って悲しくなってきた）翔はしっかり当たってたからな。

意外と痛そうだった。

22 突然出たあ

「のわあっ!!」

がたん、どてん!

忍でえす。

何か知らんが隣の部屋から岳の叫び声と何かが倒れる音が聞こえてきた。

行ってみよー。

「おーい、どーちまちたか岳君？」

「何故に赤ちゃん言葉!？」

なんとなく以外にどんな理由があると言うのだ。

「岳お兄ちゃん、どうしたの」

「あ、いや」

答えになってないよ。

「突然蜘蛛が出てきて驚いたんだと」

何だ蜘蛛か。……って、

「純兄居たの!？」

「気付いてなかったのか？」

「うんにゃ」

気付いてたからこそ言った訳で。

気づいてなくても言うけど。

「うふふ、かゝわい」

光は何か蜘蛛『で』遊んでるし。

「あゝ!」

「どした」

「カーテンの裏に入っちゃったゝ!」

『それだけか!？』

「えゝ？そゝだよ？」

それだけで大声出さないで欲しい。

カーテンを捲ってみよー。

ぴら、ぽと

『うわ（ゝ）っ！』

ビックリした、めくった所ドンピシャでいたんだもん。

ついでに落ちてきたんだもん。

「ったく、いちいちうるせえよ」

『何でビックリしてないの（ゝ）！？』

「霊が出るときは普通突然だから」

あゝ……そゝゆゝ理由？

「わゝゝ！！」

……今度は一階^{した}？

「どーしたの」

「ゴキさんが出たんのよゝ、突然」

何でゴキブリの事をゴキさんって言うんだろう。

もゝ、小さい時から不思議で不思議でたまらないんだよね。

「なーんだゴキか」

岳、なーんだとか言ってる割にしっかり殺虫剤持ってる理由を聞きたいよあたしは。

「えゝ、ゴキさんゝ？ どこどこゝ」

光、何でゴキブリと聞いてそんなに顔を輝かすの。

『さゝ探そゝ！』

ねえ純兄、あたしじゃこの人等止められそうに無いよー？

「光！居たか！？」

「いないゝ」

「わゝゝ！」

『居たの！？』

「あそこ〜！」

かさかさかさかさ

ゴキブリも逃げる、逃げる。

台所からリビングへ……。。

「いくぞ光！」

「了解だ〜！」

岳はゴキブリを潰すため、光はゴキブリで遊ぶ為、追いかける、追いかける。

岳の手には殺虫剤、光の手には猫じゃらしがしっかりと握られている。

「光！ 挟み撃ちだ！」

「了解した〜！」

……なんだろう。

モーレッツにゴキブリにガンバレと言いたい。

「ん？ どーした、岳に光」

「おとーさん逃げろー」

巻き添え食うから。

「いくぞー！」

「お〜！」

シューッ！ ぴこぴこぱたぱた

殺虫剤と猫じゃらしはしっかりと命中した！

おとーさんに！！

「うぎゃああああああ！！！」

あーあ、だから逃げろって言ったのに。

「ちい、逃がしたか！」

「そりゃそりゃそりゃ〜！」

「ぎゃはははは〜！」

頑張れおとーさん。

かさかさかさかさ

「居た！」

シューッ

ゴキブリ退治は成功した！

『ばんざーい、ばんざーい（ゝ）！！』

多数の（一人だけ）犠牲者を出したがゴキブリは墓石の下へ眠った。

「……うるせえ……」

しかし、犠牲になったのはもう一人居た。

二階で来週あるテスト勉強をしていた純兄は五月蠅くて五月蠅くて全く進まなかったらしい。

ごしゅーしょー様。

22 突然出たあ（後書き）

……あれ？ 突然出たものを書こうとしたのにいつの間にかゴキブリ退治に……。

不思議ですねえ！

23 トラウマの歌

「くわっ、くわっ、くわっ、くわっ♪」
純だ。

今日は近所(?)に住んでる従弟妹が遊びに来ている。
で、さっきから兄妹4人＋αで従妹の歌を聞かされているという
状態だ。

「けろけろけろけろくわっくわっくわっ♪ ありやとでちた♪!」
ぱちぱちぱちぱち。

礼をしたら拍手してやら無いとすっごく不機嫌になるからやっ
ておく。

あ、ちなみにこいつ等はなっちゃんこと仙波奈津叔母さんの子ど
も。

兄の神谷(5歳)と妹の菜美(3歳)。

「つちゆきまちて、どんぐい(どんぐり)の歌♪!」

……まだ続くのか?

「まだやんの……? 八曲目だよ」

「ねーちゃん、あきらめろ。小さい子には勝てないものなんだっ!」

「いいぞー菜美ちゃん。もっとお兄ちゃんやお姉ちゃんを困らせ
ちゃえ」

待て光。煽るな。神谷は既にぐてっとしてんだから。

「じゅ、じゅんにいちゃん……もうだめぽ……」

それは大げさだ、神谷。

「どんぶりこよこよどんぶりこ♪」

なんで『どんぐり』は『どんぐい』になるのに『どんぶり』はち
ゃんと言えるんだ?

「どんぶりって同じところでぐるぐる回るだけじゃ……」

岳、突っ込んだら負けだ。

「おいけにはまってさーだいべん♪」

「大便違うから！ 大変だから！」

忍も突っ込むな。効かないから。

「ごじょうがでてきえこんいちわ」

悟浄が出て消えコン一羽？

違うか。

「おっちゃんといっちょにあそびまちょ」

『誘拐か！？』

だから突っ込むなって。

「どんぶりこよこよよこんれ」

「どんぐり結婚したの？」

血痕？もとい結婚？

……ああ、最後の『こんれ』が『婚礼』か。

「ちばやくいっちょにあちよんらが」

……おお、久し振りに突っ込みが無かった。

「やっぱいこやまがこいちいと」

『小山って誰！？』

「こーくんのともだち」

『いるの！？』

「ないれはごじょうをこまらち」

頑張れ悟浄。

「ありやとれちた」 ぱちぱちぱち

「三番は！？ どんぐり帰したげて！？」

「悟浄も大変だね」

悟浄と俺等を重ねてねえか、光。

「それはつちゆきまちて」 ぶんぶんぶん！

「なわとびの歌？」

「お姉ちゃん違うよ。はちのやつだよ」

「うげ」

……あれか……？

「ぶんぶんぶん」 はちがとびゅ」

……これか……。

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよ♪」

「トイレの間や胃に野原が咲いた!？」

「すげー」

「野原って咲くって言うのかな？」

「ぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

一息すって……？

「ぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

……二番に入った。よかった、小っこい頃の光とは違うみてえだ。

「あさちゅゆぎやぎや♪」

「朝露がガラガラってどーなってんの!？」

「水銀の朝露とか？」

いやそれかなり危ねえから。

「のはやがゆえゆよぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

『地震!？』

野原だけがピンポイントで揺れる地震でどんなだよ。

「ぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

……ん？ 三番なんてあったか？

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

ゆゅ♪

一番と同じじゃねえか。

「とこれのまやいにのはやがしゃいたよぶんぶんぶんはちがとびゅ♪」

ゆゅ♪

……何か同じ所をぐるぐる回ってる？

これじゃまるで……

「小さい時の私みたいでしょ！ お母さんに聞いたの」

「……ねえ光？ まさかとは思うけど……」

「菜美ちゃんに三番って言って教えたよ」

『マジか……』

「ん？ どういうこと？」

ああ、神谷は知らなくて当たり前だ。

光が菜美くらの頃、一日中歌を歌ってた事があって……。

それが『ぶんぶんぶん』だったんだな。

同じ歌の一番ばかり何回も何回も続けて歌うんだ。あんな風に。

『ぶんぶんぶんはちがとびゅー　といれのまやいにはやがしや
いたよ　ぶんぶんぶんはちがとびゅー　ぶんぶんぶんはちがと
びゅー　といれのまやいにはやがしやいたよ　ぶんぶんぶんは
ちがとびゅー　ぶんぶんぶんはちがとびゅー　といれのまやい
にはやがしやいたよ　ぶんぶんぶんはちがとびゅー　ぶんぶん
ぶんはちがとびゅー　といれのまやいにはやがしやいたよ　ぶん
ぶんぶ……』

誰か、止めやがれッ!!

23 トラウマの歌（後書き）

『どんぐりころころ』は私の、『ぶんぶんぶん』は妹の小さい頃に歌ったものを参考にしています。

『ぶんぶんぶん』のループは最初大丈夫でも後々ぐてってなってきますよ、ホントに。

24 勉強してただけなのに

がらがらっ

「……ねー純兄、何でこの教室だけ誰もいないんだろ」

「俺に聞くな」

じゃあ誰に聞けというんだ。

忍でーす。

ただいま学校の自分の教室に着きましたー。

現在8時ジャスト。

いつもなら殆ど誰もいない時間なんだけど、テスト前だから勉強しに来てる人がそこそこいるんだよ。

えらいえらい。

あたしはやんないのに。

でもよくよく聞き耳立ててみるとゲームの話とか漫画の話しか聞こえないんだよね。

……勉強してる人いるのかなあ？

「ひーまだー」

「いきなりか」

毎朝言って毎朝突っ込まれてるからもう日課的なものになってきてるんだよね、コレ。

んーっと、筆箱出ーして、本出ーして……あれ？

「……本忘れたっ！」

「あそ」

酷いよ純兄。

本無しで朝過ごすなんて出来ないよ。暇すぎて。

……今、あたしが本読むことを不審に思った人？

あたしも本くらい読むからね？

今日持ってこようとしたのはムダ知識の本だけど。

「純兄、暇だ」

「あそ。邪魔すんな」

…なんて酷い扱いだろう。

ちよーつと純兄のワークに落書きしただけなのに
はく、暇だ。

暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ暇だ！！！

……たまには勉強するか。

「ボソボソボソボソボソボソ」

「何ボソボソ言つてやがる」

「え？ 英語って声に出してやった方が効率的なんですよ」

なんかの本に書いてあったよ。

「……今何をやった？」

「英語だけどそれが何か」

.....

あれ？純兄がフリーズした。

「最近少し暖かくなってきたと思ったけど」

けど？

「明日はまた寒くなって雪なのか……」

「マテヤ」

何であたしが勉強したら雪が降るのさ。

「テスト直前の直前の直前まで勉強しないテメエが勉強してんだ。これが驚かずにいられる訳が……何か憑いてんのか？」

「ひっでー言い方」

テスト直前の直前の直前の直前って言ったらテスト前の休み時間の事じゃん。

テスト直前（二週間前）の直前（一週間前）の直前（三日前）の直前（前日）の直前（テスト10分前）3分前の休み時間）って感じね。

「見た感じ何も……ああ、憑いてた」

……え？

「後ろ」

くるん。

……何か、いるねえ。

もやもやしててわかんないけどさ。

どかつ

「殴り飛ばしたからもう何も憑いてないでしょ」

「……憑かれてたせいじゃねえのか……。病院行くか？　せめて保

健室」

「ちよつと！？　何でそーなんの！？」

「だって……なあ？」

なあって。

「よっす」

「おは、しーちゃん」

「何してた？」

「何って……テスト勉強？」

ぴたっ

見事にフリーズ。

「何か憑いてる？　それは無いか、忍だし。頭大丈夫か？」

……何でそーなるかなあ！？

「おっは！　ししじ！」

『ししじて』

「『し』のぶ『し』の『じ』ゅん」

何でそう略すかな。

「んで？　純と篠は何そんな深刻そーな顔してんだ？」

『忍が勉強してるから』

「なにいつ！？　忍はオレと同類（つまりノー勉強）だと思ってたの

に！　裏切り行為だ！」

おーげさな。

って言うか何で勉強しただけで裏切り行為になるの。

「忍、毒キノコでも食ったか？」ぽんどかつ

肩に手を置こうと近寄ったのが運のつき、
「忍の前蹴り、大事なトコへ入りました〜！」
丁度いい位置にあったからね。

あたし座ってたから。

「おはよう！ で、何で清君前蹴り食らってたの？」

『忍が勉強してることに下手に突っ込んだから』

「ええ〜っ！？ 忍が！？」

純君！ 昨日の晩ご飯or今日の朝ご飯に変なモノ入ってなかった
！？」

……皆さあ、

どーしてそんな反応しかしてくれないの！？

24 勉強してただけなのに（後書き）

勉強してたら驚かれる……。

そんな人って意外とレアじゃないですか？

25 ざ☆追いかけて

わ。

あ、光です。

今ね、岳お兄ちゃんにリコーダーを貸してもらおうと思って岳お兄ちゃんの教室に来たんだけどね？

なんだかそーだい（？）な追いかけてこが行われてるんだよ。

箒片手に岳お兄ちゃんを追い掛け回す誰かさん、若干顔赤い。
VS

教室中をまさにひらりひらりと跳び回る岳お兄ちゃん。

そして巻き込まれないように教室の隅によって見学と言うか観戦し？をしているクラスの人たち。

十机に向かって宿題か何かの丸付けをする担任の教師さん。
なんか凄いな。

「ん？ あれ、高山の妹ちゃん？ なんでココに？」

あ、危ない危ない、用事忘れる所だったよ。

「岳お兄ちゃん！」

「へっ？ 光？」

良かった、すぐ気付いてくれた。

「リコーダー貸して」

「オメーのは？ うおっと」

危ないな、話す時くらい中断すればいいのに。

「家に忘れてきちゃったの」

「あ、醤油ーこと」

それ面白くないよ？

「いっと、おっと、ほいっと。そらよっ！」

くるくるくるくるくる……ぱしっ

『ナイスキャッチ！』

えへへ、声をそろえて言われると照れるな。

「はあっ、はあっ、おい、それ俺のだろうが……!」

あゝ、本当だゝ。

かざかみ

風上修也って書いてあるゝ。

それより修也って人ゝ、息上がってるねゝ。

「ちよっと、返してっ!」

いやゝ、これは貴女のは無いですよゝ。

「修也と間接キスとか絶対許さないから!」

いやいやゝ、そんな事する気さらさら無いですからゝ。

「奈那子、こっちよこせ!」

「おお? 古閑の修也に対する呼び方アーンド修也の古閑の呼び方が変わってる?」

『ぎくっ』

なんて分かりやす過ぎる人たちだろうゝ。

「とつとつとりあえずっ! はいっ!」

くるくるくるくるくる……ぱしっ

ナイスキャッチゝ、岳お兄ちゃんゝ。

「おい、返せ」

「オレらが居なくなった後何て言ったか教えてくれたらな!」

「ちよっ……先生! なんで止めないの!?!」

あゝ、それは確かにそうだねゝ。

普通の教師だったら留めに入るものゝ。

「仲良きことは美しきかな」

『何か違あう!?!』

見事なハモリゝ。

「チッ……これなら?」

あゝ、修也(って人)が岳お兄ちゃんの筆箱取ったゝ。

「あうち、とーられちった」しゅばっ

「なっ!?!」

「とーられちった、から取り返した!」

おおゝ、見事なスピードゝ。

そっかゝ、岳お兄ちゃんたまゝ……にお姉ちゃんの暇つぶし道具として追いかけてるもんね。」

「チッ」

修也（って言う人）、箒を突き出しますゝ！

岳お兄ちゃんはそれを片手で掴んでゝ……

「うわっ」

『あっ！！』『ダンッ

乗ってた机から落っこちちゃったゝ！！

「あゝ、良かった、受身習つといて。にーちゃんに感謝だわ」
そういえば一年くらい前に習ってたねゝ。

……よく覚えてるなゝ。

「驚かせやがって……」

「およ？ 心配してくれてたのかゝ、修也君よ」

「つんな訳あるかっ」

「あーりがとよん」

思う存分いじってるねゝ。

……ところでゝ、

リコーダーはゝ？

26 今日はテストなのです

「しーん、しーん？ しーん！」

「んぎゃあああああああ！！」

「見事な跳躍力！ 天井に頭が届きそうです！」

いや、それ大げさでしょ。

結構な高さまで飛び上がったのは事実だけど。

「耳いてーだろ！ 耳元で叫ぶな！！」

「テメエが返事しねえからだ」

純兄口調で返してみました。

「つくそ、兄弟なだけあってそっくりだ……」

「さて、あたし等は兄妹。あたしは弟じゃないの」

「よく分かったな！？ 字しか違わないのに！？」

「よく言われるもんだから。」

で、なーんであたしが呼んでるのに気がつかなかったの？

気付いてたら耳元で叫ばなかったのに。

「ふふふ……それはな……」「やっぱいいや」聞けよ！

何だ、聞いて欲しいのか。

「勉強してたか」「桜、今日のテスト何だっけ？」……ううっ

男子が泣いても可愛くない。

「んゝとねゝ……理科と技術家庭と数学だよゝ」

ふむ、

「清、ご愁傷様」

「まだテスト始まってもねーよ！？」

だってえ。

清↓数学が異常なほど苦手

今回の理科テスト↓湿度を計算で求める問題がでる。

+清はマトモにテスト勉強をしない（あたしもだけど）

結果↓今回は何時もよりも悲惨になる可能性は高い。

「まだやつても無いテストの結果を予言されたくなんかねーよっ！」

「はい、清くーん？ 樹形図は書けますかあ？」

「書けるからっ！ それ位！」

「この問題解けますか？」

「無理！」

せめて問題読んでから言ってよ。

「次、湿度をもとめる公式は」

しーちゃん、突然後ろから出てこないで。

「しつど？何それ」

.....。

啞然。

「と言うのは冗談で」

『本当？』

「ひでえっ！」

「だったらその頭を何とかしろ」

ねえ純兄、何で君は教科書読みながら話聴いてるの。

どーせなら混ざってよ。

とか言うあたしの手にも教科書は乗ってるけど。

「はーい、座りなさーい。テスト配りますよ」

一時間目、理科終了。

「どーだった？」

「取敢えずは全部埋めた」

「しーちゃん理科得意だしね」

「うむ、理科『だけ』は得意だ。忍はどうだった」

何も自分で『だけ』を強調しなくてもいいと思うんだ。

「あたしも一応全部埋めたよ」

問題は……

「……………」ずうーん

「清君？ どうしたの。……あ、テストどうだった〜！」

そんな元気に聞かないであげようよ。

きつと最後の方の計算問題の公式、その他諸々が分からなかったんだよ。

「聞くな、聞かないでくれ、頼むから、本とに」

「あはは〜、純君は……聞くまでも無いね〜」

だって純兄頭いいもん。勉強はしてるから。

テスト前二週間だけ。

「席に着きなさ〜い」

二時間目、技術家庭終了。

「家庭科ムズイ」

「そのぶん技術は簡単だったかな〜」

「……あれ、清が復活してる……あ、そっか」

清は実技そこそこ出来るからね〜。

丸暗記で。

「清ー」

「テストどーだった〜？」

「全部埋めた！」

理科のときとは凄い違いだ。

「……ただ」

ん？

「名前を書いたかどうかが怪しい」

これで書いてなかったら最悪だな。

「理科のほうが」

そっちか！

「清、次は数学だけど」

「それを言うなあ〜！！ 純！ 頼むから言わないでくれっ！！」

「言った後に言われても」

そーだそーだー。

「次は数学次は数学次は数学数学数学数学……」
桜、あんたは鬼か。

「んみやあああああ！！」

「あはは、面白い♪」

……確かに？

『次は数学数学数学数学数学数学数学数学数学数学』

「にやあああああああああ！！」

猫語で悲劇的展開だー！！ だね。

……ピッタリはまってるような。

「席着きなさ〜い」

三時間目、数学終了。

教室に一つの死骸が転がっていた。

……うん。

「仏説摩訶依般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄
舍利子色不異空空不異色色即是空……」

「出た〜、忍の『問答無用、逝きなさい』だ〜！」
いつの間にそんな名がついてたの？

「って！ 殺すなコラ！！」

「問答無用！」

「おいっ！？」

逝かしました♪

蹴り飛ばしたただけだね。

27 寝言

「あーうー、さぶい」
忍でしゅ。

「なーんで楽しいことしてる時は時間が早く立つのかねー？」
さっきまで漫画読んで気がついたら12時に。

いやー、不思議不思議。

明日もテストあるのになー、寝不足の可能性は限りなく高い。

うん、さっさと寝て明日は寝坊しよう。いつもが早すぎるんだから。

と、思っで階段登ってたら……。

「わー、たーべーらーれーるーう」

何か岳達の部屋から変な声が聞こえてくるんだよね。

まあ寝言だろーけど。

どんな夢見てるんだか。

「あー！ 食うな食うな食うな食うな食うな！！」

寝言だとゆーのにえらい早口だな！？

……テープに取っというてやろう。

確か岳は録音機持ってたはず。

かちやつ

「……うーわー」

いつ見ても思うけど岳の机、よく雪崩起きないなー。

元の高さの倍くらいになってるんだけど。

しかもよく見たらゆれてるし……。

「おねーちゃんも来たのー？」

「光！？」

『しーっ』

あれ、純兄起きてたんだ。

「二人とも何してんの」

「岳お兄ちゃんの寝言で目が覚めちゃって」

「右に同じく」

そんなに五月蠅いいのね、岳の寝言。

『だから寝言をテープに取っていつか脅しに使おうと（思ってた）』
黒い。

「ううゝ、殺されりゅうゝ」

そこまでしないと思うよ、岳。

「馬鹿、アレは寝言だ」

「明かりをつけましょローソクにゝ。お花をあげましょ菊の花ゝ。
五ゝ人ばやしも死んでいたゝ。

きょゝおは悲しいお葬式ゝ」

「光は何歌ってんの」

突然すぎるにも程があるでしょ。

「今日はひな祭りだったの忘れててゝ」

「え？ 今日？」

「そうだよゝ」

かんっぺきに忘れてた！

雛あられも菱餅も食べてなかったんだもん。

「うっめえ！」

「黙れ！」

あ、あんまり美味しそうに寝言言うからつい。

「おっ！ やった！！」

『？』

宝くじにでも当たったか？

「肉まんのおんに最初の一口で……！」

『それだけか！？』

「でも確かに嬉しいよねゝ。絶対に一口でたどり着けないもんゝ」
確かに、それは確かに。

「あゝっ！ 光！ 取るなア……」

「何で私取るのゝ？」

「普通に考えれば忍だろ……」

純兄、酷い。

「なあっ！　ねーちゃん取るな！」

「結局あたし取るの！？」

「ああああ……オレ一口しか食ってねーよう」

失礼な、あたしは全部取ったりなんかしないよ！

「にーちゃん、宿題やって」

「断固拒否」

純兄、あれは寝言だって。

岳、純兄がやってくれる訳ないでしょ。

「おおっ！？　本とか！？　やった！」

『嘘（ゝ）』

岳の夢の中の純兄甘ッ！

「ねーちゃん、にーちゃんにべったりすんの止めなって」

「誰がしとるか！？」

「忍、抑えろ。殴ったら起きる」

うぬう……起きたらなぐるっ！

「ねーちゃんマジで猫みてーだ」

『それは確かに（ゝ）』

……悔しいが否定はしないよ。

「ところでー」

ん？

「三人揃って何やってんだ、あん？」

『ばれてた（ゝ）！？』

「バレバレだっ！　大声でツツコミその他するな！」

……一つ言わせてもらってもいいーだろーか。

『寝言が五月蠅いお前が悪い（ゝ）』

ちなみに、最初の方は普通の寝言だったから純兄と光、あたしの
岳脅し道具となりました♪

28 いーんですか？

「……あれ？」

「どったの？」

「あそこに何かいる？」

あそこ、と指されたベランダを見ると……

あゝ、何か居るねえ。

忍でーす。

「何かもやもやしてる。いつもと違うよ」

「うゝん、あたしも何か色がついて見える」

今まで景色がもやんってしてただけなのに。

「純兄ー！」

「耳元で叫ぶな馬鹿野郎」

あたしは野郎じゃない！

「あれ何？」

「……表現しづらい物体」

分からないよ。

「もーちよつと性格に」

「……ホラー映画か何かに出てくる雑魚みたいな物体」

あたしホラー映画見たこと無いんだけど。

精精『パイ〇ーツ・オ〇・カリ〇アン』位だよ。

あれってホラーに入るの？

「もっと性格に」

「……あ、斬られた」

あ、本とだ、何かきれーに真っ二つになってる。

『何に（ ）？』

「……黒い和服のちびっ子？」

何それ。

「ねゝ、声かけてみてゝ」

「断固拒否」

……だろーね。

「おーい、誰だお前」

岳……あんた声ちゃんと聞こえないでしょ。

「……うん、分からん！にーちゃん後は頼んだ！」

……なるほど、それが狙いか……。

ナイス岳！

「チッ」

『……話、したくない……なら、しなくていい』

………、何か聞こえた？

「……ねーちゃん、何かオレ、聞こえたんだけど」

「私も」

どーやらあたし達も霊的なものと会話が出来るようになったみたいです。

どんだんパフパフー。

「……ところで、どちら様ですか」

『………』

何か黙っちゃった。

いきなり過ぎたのかなー？

突然はダメだよ、光。

『ざーん、どした？』

何か新たに誰か来たようです。

そっちに聞いてみよう。

「どちら様で？」

『え？ 見えてんの！？ まーいーや。死神様だー！！』

………。

パードウン？

「死神って実在したんだ」

いや何納得してんの。

「なーな、名前なんてーの？」

いや何話題変えてんの。

「純兄ー？ 知ってた？」

「知ってた」

「何で教えてくれなかったの！」

「聞かれなかったから」

なるほど。

ところで、

「さっきベランダにいたホラー映画の雑魚はどうなったの」

「どっか行った」

どっかてどこさ。

「よし！ 斬、剣、^{さん}天^{そら}だな！ おぼえたっ！」

しかも何か増えてない！？

「……斬、剣、どーゆー事が説明あるな？」

『無い！』がんっ

……うわあ、いったそ。

よくは見えないけど、でっかい鎌みたいなもの殴られてたよ。

『……天、落着け』

『……斬に落着けといわれる日が来るとは……』

『……どういう意味だ』

『いや、なんでもない。なんでもないからその鎖しまってくれ』

ちよつと解説。

天……声からして女の子かな？ が頭を抱えた直後、何か氷で出

来てるっぽい鎖が出てきた。

解説終わり。

「つーるーぎー、だいじょーぶか？」

『ダイ……ジョウ……ブ』

全然大丈夫そうに聞こえないんだけど。

『あ、ところで、あんた等の家、居候OK？』

……天さんは突然ナニを言っているの？

突然すぎてサッパリ訳わかんないよ。

「OKだよ」

『いつからそこに!?!』

おかーさん、心臓に悪いよ。

「おい、親父の了解取らなくていいのか」

「あはは、大丈夫。あの見える人じゃないから」

いやいや、そー言う問題か?

それ以前におかーさんで見える人だったんだ……。

『やたっ! オレはこの世界の食い物全部制覇してや……うぐっ!』

「あはは、じゃあ私が作ってあげるね」

……光、手加減してあげてね。

天、斬、殺さないであげてね。

剣の状態。

氷の鎖で雁字搦めに縛り上げられ、鎌の先端部分が若干頭に食い込んでいる。

そんな状態。

まー、そんなこんなで家に家族が増えました。

………いいのか!? これで!?

28 いーんですか？（後書き）

なんとなく思いついたので書きました。死神トリオ。
思いついたら即行動。その後のことは考えない。
どーなるのか私も分かりません（汗）

29 毒ってこあい

「はい、剣くん♪」

「……………ども」

いやあ、見事なまでに怪しすぎる物体だねえ。
とても食えるとは思えねーよ。

岳だ！

ちびっ子死神トリオが来た次の日、光がトンデモナイモノを剣に
食わせようとしてんだ。

……たしか材料にかたつむりが居たような気がする。

あと、何か霊力？　ってやつをトリオが分けてくれたからオレも
ねーちゃんも光もはっきり見えるようになった。

「……光、これ生きてるのか？」

「だって新鮮な方が好きなんじゃないかな〜って思っ〜」
まっさかー。

「焼いてください、煮てください、何でもいいからマズ生きたもの
は勘弁してください本気でお願いしますから！」

「大体なんでこんなことになったの！？」

「あゝ、お姉ちゃんおはよ〜」

光、ねーちゃんはさっきから起きてたぞ。

「ホラ、剣が『この世界の食い物全部制覇してやる』とか言っ〜た
ろ」

「だからまずはエスカルゴ作ってみた〜」

「何でもまずエスカルゴなの！？」

ごもつとも。

「植木鉢の下でかたつむり見つけたの〜」

「なんて理由だ……」

「だから、どうぞ〜♪」

「カンベンシテクダサイ」

真っ青だ。

「斬、居候させてもらってるんだ。文句つけるものじゃないぞ？」
「天酷むぐ!？」

おお、口の中に問答無用で突っ込みやがった。

天、結構ひつでー奴だな。

「……おばさん、手伝う」

「あら、ありがと」

斬は責任放棄してるし。

「あ、斬、くれぐれも周りのもの凍らせないように……」

「……分かっている」

天、天、凍るとか何とか言っていないでさ。

斬もちよつとむすってしてないでさ。

まず剣の心配をしてやってくれ。

マジで冗談抜きで死に掛けてるから。

「わ、死にそうになるほど美味しかったんだね！」

「光、それ絶対違うから。これ以上毒を与えないであげて？」

調理器具とかも毒付きそうだしな。

「う……うう……」

「……クスリ、いる？」

「カンベンしてくれッ！」

すげー、斬の一言で復活した。

「うっ……」斬、あげるか。クスリ」やめろやめろやめろ！ 大丈

夫だから！」

すげー。

斬のクスリとやらもそんなに危険なのか。

光の料理とどっちが危険かなー？

「……はい」

……絶対クスリの方が危険だ！ 間違いない！

だってな？

明らかに毒な色をした液体が入った小瓶で、気体が泡となって発

生してるんだぞ!?

「ちなみに解毒剤は」

「……ない」

危なさ過ぎるだろ!!

「……オレは逃げる!」

しゅぱっ!

おお、窓から飛んでった。

「逃がすか!」

天もその跡を追って……。

「うぎゃああああ!!」

しばらくしないうちに剣の悲鳴が。

よく見たらふつつーに食器を片付けてる斬から氷の鎖が出てるし。

「子どもは元気が一番だよね、斬くんも行っておいで」

で、母さんは何か煽るようなこと言ってるし。

『いってらっしゃーい(ゝ)』

ねーちゃんと光は完全にギャラリーと化してるし。

にーちゃんは……何か天にエスカルゴもどき渡してるし。

多分あれを処分してもらわないとこっちに回って来るからだろう。

「剣! 覚悟!!」

「無理! 水護盾!!」

エスカルゴもどき片手に突っ込む天、手を前に突き出して水の盾を作る剣。

……これって何のまんがでしょーか?

「甘い!」

「ぐぬっ!」ずぽ

あ、突っ込まれた。

南無阿弥陀仏。

にしてもコレって何も知らない人に見えたらすっげー怖いよな。
水を操るのとどっから見ても怪しいブツを持った4、5歳児が向

かい合ってたんだから。

向かい合ってるだけならまだしも戦ってるんだから。
オマケに浮いてるし。

……あれ、斬は何処行った。

「きゃあああー！ お皿が浮いて……あう」

あ……通りすがりの主婦Aが斬の手刀で気絶させられた。
なるほど、お皿&エスカルゴもどきは一般人も見えるのか。

「わっ！」

どさっ

……剣が降ってきた。

あー……白目むいてる。そんなにキョーレツなのかあれ。

あ、そっちじゃなくて全身強く打ったからか？
て、

「大丈夫か!？」

「大丈夫。3分もすれば元通り」

「お湯かける？」

いやいや、カップラーメンじゃねーから。

にしても、まー。

死神って丈夫なんだなあ。

29 毒ってこあい（後書き）

天が全然女の子してくれない……。

それよりこの三人全然子どもやってくれない……。

ちなみに斬は3歳、天は5歳、剣は4歳のはずです。

……筈です。

30 梅干攻撃!

「……赤い」

斬の感想。

「ふやふやだ」

天の感想。

「すつつつつつばああああ!？」

剣の感想。

純だ。

こいつ等が観察してるものは梅干な。

棚の中に入ってるのを見つけて急に観察しだしたからそのままほおって置いた。

ちなみに俺と忍、死神トリオ以外は子ども会の何とかでボーリング行ってる。

「斬と天も食べてみる？」

忍が梅干をもう一個出して言ってみたら、

『……………』

剣に目を移して……

『いい』

しっかり断った。

「あそ? ふくん……ま、ちょっと食べてみて」

で、小さくちぎった梅干を口に突っ込まれた。

「すっぱい」

斬の感想。

「しょっぱい」

天の感想。

リアクション薄いな、こいつ等。

「忍ねえっ、純にいつ、何か甘いのないっ!？」

「砂糖、飴、蜂蜜、どれがいい？」

「何でもいーよう！」

「じゃあ砂糖で」

どさーっ

「○\$%#★●*＆#\$!?!?!?」

.....。

「忍、やりすぎだ」

「.....やっぱり？」

『剣だから大丈夫だ』

声をそろえて酷いな、こいつ等。

「何で皆オレにはこう冷たいの!?!? じどうぎゃくたい反たーい!

!」

『あの一』

.....着物に長い黒髪の幽霊って.....。

『すみません』

「どちらさまでしょー? ところで何か謝られるようなことした?

あたし等」

『いえ、そういう意味ではなく.....てっ!?!?』ぶんっ

天、危ないから鎌を振り回すのは外でやってくれ。

『きゃーっ! 怖いよおう!』

チビを怖がる幽霊.....コレはめったにお目にかかれないだろうな。

「覚悟ーっ! 水攻だ「まてまてまて! 外でやって!」は一い」

ナイスだ、忍。

『ちよっ、助けて下さいよッ!』

「え、そんなこと言われても.....なんであんた襲われてんの」

『知りませんよッ!』

「.....成仏、しろ。そうしたら襲わない」

襲いようがないしな。

『え、じゃあ成仏したらいいんですね。それでは』

あ、消えた。

.....なんだったんだ。

「……天、剣、他の奴が居る。外」

「あーいよっと！」

「分かった」

「純兄、カメラ何処だっけ？」

「何に使うんだ」

何処にも使う要素ないだろ。

「世界初の死神写真とる」

「普通写真に写らないのが霊とか死神とかだろうが」

「……あ、そっか」

そんな残念そうにしくても。

「居たッ！」

『わーっ！ 何々！？』

「くらえーっ！ 梅干こーげき！」

『わあっ！』すかつ

……いつ梅干を。

しかもすり抜けてるし。

「馬鹿！ 霊がんなモン食べられるわけないだろう！」

「しまったあっ！？ ……と見せかけて！」

見せかけて？

「水攻撃！」

『何なんだよーっ！？』

消えた……けど。

見せかけても何もねえじゃんか。

「結局あんたは何がしたかったの」

「え……梅干攻撃？」

それだけか！？

31 テスト返った

「忍……」

「お前、勉強してねーつつつてたよな……」

「うん、英語の教科書チラッと読んだくらい」

「なのに……」

さて、どーしてあたしはこんなこと言われてるのでしょうか？
忍でーす。

今日五教科と体育のテストが返ってきた。

「もーいっかい言って。何点？」

何で二回も言わすかなあ？

「国語86点、数学90点、理科77点、英語85点、体育86点だよ」

「この裏切り者……」

「わう」

清ー、オンナノコに暴力振るっちゃいけないんだよー？
よけたけど。

「ねー、社会は？」

ぎく。

「キカナイデクダサイ。

しーちゃんと桜と清はどーだったの？」

「あははー、忍ー？ 聞いていい事と悪いことがあるんだよー♪
社会は79点これ以外はノーコメントでー」

「あたしは……理科が86点、国語69点、社会76点。あとはまあ、うん」

なんでさー、皆社会そんなにいいの？

「清君はー？」

「体育が84！ これ以外は聞くな……」

「数学。コレだけ教えて？」

凄く気になってたから。

「カンベンシテクレエ！」

「1点。逆にすげえよ」

「純〜！！」

1点って。

「ちなみに理科は名前書き忘れて0点。書いてたら62取れたのにな。馬鹿だ」

「傷口を広げるなあ！」

広げるどころか塩を塗りたくってるような気も。

「あ、純はどうだったんだ？」

「国語96、数学100、理科97、社会90、英語100、体育87」

「一発！ いや1000発殴らせろ！！」

1000倍になってるし。

にしても100点二つて。

純兄、才能分ける。

「たっ！」パシッ

「一発目〜」

殴れてないから。

思いつきり防がれてるから。

「たたたたたたたた！！」 ぱぱぱぱぱぱぱぱ

2、3、4、5、6、7、8、9、10、11発め！」

「だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ！！」

かちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかちかち……

「桜、いつの間にカウンターを」

「こうしないと絶対どこかで数え間違えるから〜」

そんなことは聞いてないよ誰も。

「何でそんなもの持ってるの」

「え？ こんなのが突然出てきたら面白いでしょ？」

そんな理由！？

数分後……。

「はあっはあっはあっはあっ……一発もあたらないとはどーゆーことだ!？」

「トロイ、同じ所しかこない」

「ちなみに、桜、何発目？」

見た感じだーいぶやってるけど。

「んーとね、534発目だよ。清君、あと486発ガンバレ☆」

……半分やったんだ……。

スタミナと言うかなんと言うか凄いな。

「待て、486じゃねえよ。後466発だ」

「あはは、ばれちゃった」

「20発も付け加えるとか……鬼か!？」

疲れたんなら単に清がやめりゃいいだけだと思ったのはあたしだけは無い筈だ。

「はーい、後半、スタート!」

「てあ—————っ!!」

だだだだだだだだだだ……

さらに数分後。

「はあっはあっはあっはあっ!!」

「苦しそーだね」

そりゃそーでしょーよ。

桜によると1023発打ってるんだから。

「コレだけうって当らないとはこれいかに!？」

「下手な鉄砲（拳）も数撃ちゃ当たるとも言いたいんだろうが、下手すぎる鉄砲（拳）は何発撃ってもあたんねえんだよ」

……この場合、的の守りが硬すぎるんだと思う。

32 わっつでいーす

「これ、何？」

「サンゴだよ。お姉ちゃんがもらって来たの」
光です。

今日はお姉ちゃんもお兄ちゃんたちも遅いから死神トリオとお留守番なの。

「なっなっ、光ねえ、コレは？」

「小さい時に岳お兄ちゃんが作った何かじゃないかな」
いろおんな色がグチャグチャに混ざった紙粘土の塊なんだけど。
誰が作ったのかな？」

え？ 私？ まさか。

「ひーねえ、コレは？」

斬くん、こっちに向けないで！

「カッターだよ」

刃が出てるよ！

「ふーん……」

カチカチ、カチカチ、カチカチカチカチカチ

……気に入ったのかな？」

カッターカチカチするのってちょっと楽しいし。

「ひいねえ、これは何？」

「……殺虫剤用意！」

「さっちゅうざい？」

えっつと、確かここにあっただはず！

あつた！

「天ちゃん、それ離して！」

「分かった」

発射！

シューーーーーッ

よし、ゴキブリさんご臨終。

お姉ちゃんが居たらお経唱えてもらえるのにね。

「光ねえっ！ 庭の隅っこにこんなの生えてた！」

おお！ ホトケノザお花つき！

「でかした！」

「え？ 何なのこれ？」

「この紫の花をね」

ピツと抜いて、出てきた白い所を前の歯で噛んだら♪

「……あっ、甘い！」

「でしょ！」

ホトケノザの蜜だよ。

「……味、しない」

「ん、じゃあそれは何かに先を越されちゃったのかな？」

まだ蜂なんて見ないんだけどな。

「あ、後こんなのも生えてた！」

「捨てて！」

どくだみなんていらないよ！

臭いもん。

「捨てるの？ これは何？」

天ちゃん。

鼻つまんでるなら捨てる理由は分かってるよね。

「どくだみだよ。薬とかに使われたりするらし」分かった！ 捨てる！」

早いね。

薬って出てきた途端走ってっちゃったよ。

斬くんが微妙に口の端をあげてたような気がするからそのせいかな？

「ひいねえ、この重いやつ、なーに？」

「辞書だよ」

「えっ！ 大っきい……」

そりゃ、だって、それは広辞苑だもん。

普通のやつより大きくて重いもん。

……お姉ちゃんがたまにぱらぱらめくる以外誰も使っていないだよね。

これぞ宝の持ち腐れ？

「光ねえ！　こんなのも見つけた！」

「よもぎ？　お父さんが何か体にいいとか言ってお茶にしたらよ
うな気がするな」

「これが体にいいの？」もぐもぐ

あゝ！　そのまま食べちゃダメ！

「うえ、不味い」

「ウサギじゃないんだから、そのまま食べるなよ」

「ひーねえ、これは？」

○Sだね。

「ここにスイッチがあるから、ここを押して」

「わあっ！　光った！」

あれ、そっち？

「すごい！　何か赤い帽子のおっさんが中で走って跳んでる！
このおっさん身体能力すごい！」

そっちなの！？

「何が入ってるの？」

「コードとかかな？」

見たことないからよく分からないけど。

斬くん、裏側覗いても何もないよ。

この反応はかわいい♪

33 今日も今日とて

たーたー、たかたかたんたかたかたかたんたかたかたかたつたら
つたたららら♪

これだけで何の曲か分かった人はそんけーに値する!!

「チッ、ちょこちょこ逃げやがって……」

「ほーれほーれ、ついて来れないのかにゃー、修也くうん？」
岳ダス。

今日も今日とて修也を弄り、煽り、追いかけてっことを楽しんでいる!
やー、若干顔赤くして、可愛い何の。

死神トリオも混じったら面白いかと思っただけどなー。

今日から明後日まで何か三人揃って用事あるんだそうな。

死神の用事ってなんだよ。

「ほーれほれ、奈那子ちゃんと遊んできた方が楽しいんでねーの?」

「なんで奈那子が出てくんだよッ!」

「ムキにならなーいの♪」

何かなー、調べた情報によると付き合っちゃってるみたいなんだ
なー。

お陰で10円ガムをあげる羽目になった。

「ホラホラ、こっちこっちー」

「チッ」

やー、追いかけてっことを楽しいねえ。

先生は『仲良きことは美しきかな』とか言って入ってこねーし。
むしろ緑茶すすりながら、さらにお菓子つまみながら観戦してる
し。

で、クラスの殆どのやつらはそのお菓子もらいに行ってるし。
オレも逃げ回る合間に盗りに……もとい、もらいに行ってるし。
いやー、案外旨いお菓子もらってくるから嬉しいたらありゃしな
い。

「修也、食う？」

「ッ……いらねえよ」

そんなこと言って、本とは欲しいくせに。」

「ほら、やるよ。先生のだけど」

「は？」

とりあえず一個あげた。

オレやっさしー。

「……………ゴミじゃねえかッ！」

「や、ちよつと期待したでしょ？ はいホンモノ」

うん、今度のはホンモノだぜ。

先生のもってきたミニクッキー。

ねーちゃんのお菓子並に旨い。

あー、最近食ってねーなー、ねーちゃんのお菓子。

「岳！」

ん？

「のわッ!？」

あーぶね、マジでこけそうになった。

さんきゅー翔。

「修也、クッキーあげたのにいきなり攻撃してくるとは何事だ!」

「え？ あ、悪い」

え？ 素直……。

「じゃ、さいかい!」

「ハアッ!？」

おくにさくんこっちら、手への鳴るほうへッ。

パチパチ手を鳴らしてやると箒片手に突っ込んできた。

やっぱ挑発にはこれが一番だ。

さて、修也の息も切れてきたし、

「翔!」

「ん？」

「はい、バトンタッチ!」

「……………は!？」

それゆけー!

どんっ

がらがらがら

あゝ。

思いつきり突き飛ばしたら机巻き込んでこけちまった。

「おい!? 大丈夫か!？」

「へーきへーき……、おれは石頭な方だから」

「テストはいつもオレより点数低いしな!」

「そーゆー意味じゃねーっ!!」

あ、違うの。

「だいたいお前に勝てるわけ……そうだ、勝てるわけ……ううっ
おーい？」

突然泣き出してどーしたの。

どーみてもウソ泣きだけど。

「オール100点なんてそう居るもんじゃねえし」

『お前が言うか!？』

うーわ、修也が突っ込まれてる。

めーずらし。

大分溶け込んできたねえ。

ちよっと前は一匹狼的な感じだったんだけど。

え? んな描写なかったって?

……気にするな、きつと後付けじゃない。

と、オレは信じといてあげよう。

「翔ー、修也ー」

「あ?」「ん?」

「よーい……スタートッ!」

机の上まで逃げ回る翔にそれを追いかける修也。

いやあ、よく分かったなあ。

「うあっ!？」

「……遅っ」

修也、小声でも聞こえてるぞー。

ちなみに翔は足速いほうだぞ。

お前が足速すぎるんだ。

「はい、じゃー岳！ 後はよろしく！」

「デメエわざと？ まったな！？」

「あっははー」

笑ってごまかすなよ！

「いや、岳と修也の方が面白いから。見てて」

……喜べばいいのか怒ればいいのか。

まあとりあえず逃げ回りましょう！

「行くぜー、よーい……ドン！」

再び！ 先生のお菓子をつまみながら逃げるオレに追いかける修也！

あー、たーのしっ。

33 今日も今日とて（後書き）

こんな先生が欲しい。

という願いから生まれたのが岳たちの担任です。

あー、お菓子くれる先生いないかなあ……。あ……。

34 つまみ食いをしよう

「……あっ」

いーものめつけた♪

忍でいす。

冷蔵庫開けたら昨日は無かったチョコレートを発見。

しかも！ 封は開いている！

これをつまみ食いしない手は無いよ。

いただきます。

……の、前に。

念のため賞味期限確認しておこう。

去年のだったりしたら大変だし。

《2011, 02》

……ま、大丈夫だ！

いただきます。

「あゝっ！ ねーちゃんずっこい！ オレにもちよーだい！」

「えー、賞味期限過ぎてるんだよ。あたしは処分してるだけだもん」

ザ・言い訳。

「消費期限は過ぎたら食っちゃいけねーけど賞味期限は大丈夫って習ったぜ？」

………なんだろう。

あたしが前にやったのと同じ言い訳をする。こいつ。

「ねーちゃんに」

「いつ!？」

あたしは教えた覚え欠片もないんだけど。

「あ、正しくはにーちゃんに。ねーちゃんの言い訳ノートの的なモノを見せてもらったんだ」

何だ、そのあたしの言い訳ノートって。

兄貴、あんたはストーカーか？

「あ、ちなみに勝手に聞こえてきたものを書いただけだからストーカーじゃねーってよ」

純兄の地獄耳ィ！

「はい、ってな訳でちよーだい」

「分ーった分ーった」

残り少なかったのになあ。

「お姉ちゃん、雛あられ見つけたよー！」

……あーっ！

あたし、今年雛あられ食べてない！！

「よし食べよう」

「ちなみに賞味期限は昨日だよ」

うん、今食べてたチョコレートよりずっと安全だ。

「チョコあられプリーズ」

「岳お兄ちゃん、自分で探してよそれ位」

そーだそーだ。

「えー」

「レモンあられ口いっぱいに突っ込んでんじゃうよー？」

「ヤメテ」

よし、食べよう。

ちよっと残ったら部屋に溜め込もう、うん。

ハムスターを見習って！

「忍、テメエ部屋に菓子持ち込むの止めろ。絶対忘れるんだから」

「純兄も食べる？」

「……テメエ人の話聞いてんのか？」

うんにゃ。

「にーちゃん、食うの食わねーの」

「食う」

食べるんだ。

「あー！」

『？』

「クッキー発見〜！」

『でかした!』

何で純兄は『でかした』言ってくれないんだろう。

ノリが悪いなあ。

「からし味って書いてあるよ〜」

そんなのあるんだ。

んじゃ、まあ試しに……

『頼んだ、岳（お兄ちゃん〜）』

「何でオレなんだよ!？」

だって純兄は実験台になってくれる訳ないし。

あたしは絶対ヤダ。

「光は」

「え〜、可愛い妹を実験台にするの〜？」

「……………分かったよお」

いや〜、損な位置にいるよね、岳。

ポリッ

「…………辛ッ！」

まあそりゃそうだよね。

「ありゃ？ 何か中に入ってる」

「何かって〜？」

「…………紙？」

紙!？

クッキーに!？

不良品!？

「え〜っと…………ハズレ…………って何だよこれ!！」

「あ〜、これ、おみくじクッキーって端っこに書いてある〜」

おみくじって。

「つまり、おみくじクッキーからし味ってことか!」

「でも不思議なのが〜、これ、手書きなんだよね〜」

…………手書き？

「光、まさかこれお前が作ったのか？」

「あは☆ ばれちゃった☆！」

……何のために作ったのがサッパリ分からん。

とりあえず一言。

知らぬが仏って正しいね。

じゃ無きや岳は絶対に食べなかったからさ。

34 つまみ食いをしよう（後書き）

おみくじクッキー。

ちよつと作ってみたかったりします（笑）

35 ころろくん

ころろくん、ころろくん。

あう、目が回って気持ち悪い。

ひるかりです。

学校から帰ってきて宿題してやる事が無くなったからころろんしてるのです。

死神トリオ今日帰って来るはずなんだけどな。

ころろくん、ころろくん。

はうう、目が回ったよ。

「ひいねえっ！」

「わー！」

ころころころころころ。

「天ちゃん。お帰り」

いきなり体当たりなんてしてくるから部屋の隅っこまで転がっちゃったよ。

「光ねえっ！ ただいまだぜー！」

「……ただいま」

「剣くんも斬くんもお帰り」

何で窓から入ってくるのか教えてくれたら嬉しいな。

「そういえば、用事ってなんだったの？」

聞いてないんだよね。

一方的に言って一方的に話されちゃったから。

「え？ 入学試験」

「……はい？」

空耳かな？

入学試験って聞こえたような。

「だから、入学試験だって！」

「天ちゃんなら分かるけど、剣くんと斬くんも？」

「うん」

あれ？

私の記憶が正しかったら皆一つずつ年が違ったような気がするんだけど……。

「教師をちよつと——して俺等も受けられるようにしたんだ！」

……教師をどうしたって言ったの？

なんだかいやくな予感しかしないんだけど……。

「いや、だから教師をちよつと脅して……」

「脅すって！ 何したの！？」

「えーっと……斬のクスリを目の前で動物実験させて次はお前にかけるぞって言ったり、校長の浮気現場を撮って奥さんに見せるぞって言ったり、裏で金受取って色々やってる奴の証拠テープを作ってばらすぞって言ったり、剣が水を頭にすっぽりかぶせて首を縦に振るまで放置したり、私の鎌で脅したり……」

……聞かなきゃ良かった！

この子達本とに子ども！？

「ちなみにそれでも受けちゃダメ言う人にはしつかり言ったとおりの事をやった」

うわ……教師さん、がんばれ……。

「有言実行！」

うーん……この子達受かったら最凶の生徒になることは間違いないね。

「光ねえ、さっきまで何してた？」

さらさらっと話題変えたね、この子。

「ころろんしてたよ」

「何だ？ それ」

「床の上をころころするだけ」

この部屋畳だから気持ちいいんだよね。
目が回ることを除けば。

「ころろん」

剣くんさっそくやってる。

やったこと無かったからかな？

ころろろん、ころろろん。

「……目、回る」

「天井が回ってる」

天ちゃん、それは目が回ってるんだよ。

ころろろん、ころろろん。

「ただいまッ！」

あ、岳お兄ちゃん帰って来た。

「お帰りッ！　ただいまッ！　岳にい！」

「わぁっ!？」

剣くん速いな。

あつという間に岳お兄ちゃんの所行っちゃった。

「岳お兄ちゃんお帰り」

「お帰り、ただいま、たけにい」

「……お帰り、ただいま」

「た、だ、い……ま」

岳お兄ちゃん……。

剣くんの頭突きもろに受けちゃったんだね。

36 たつまきー

「……しーねえ、これで何するの」

斬が指すのは500mlペットボトルとビニールテープ。

「暇つぶし!」

もう暇で暇でしうがなくて、何かそこら辺にあったこれで工作
でもしようかと。

……ガキとか言うな。

ふつつーの中二は休みの日部活以外に何をするのか教えて欲しい
よ。

皆家で暇するに決まってる!

と、あたしは勝手に思っている。

「……はさみ、いる?」

「あゝ……、うん、いる。ありがと」

はさみの刃を開いてこっちに向けてないで欲しいんだけど。
さて、始めますか。

「……何作ろ」

考えていると思っていたそのアナタ!

あたしがそんなこと考えてから行動するわけが無いでしょ。

「んゝ……、とりあえず水入れて……」

雨水タンクから。

どうせ後々捨てちゃうんだから新しい水入れるなんて勿体ないし。

ジャーッ↑水を入れる音

ごぼごぼ↑ペットボトルを逆さにして水を出してる音

ピキーン↑出た水が凍った音

「なんで凍ったの!?!」

「……凍らした」

あんたの仕業かい。

この水を凍らしたり氷を操ったりの斬の能力、ちょっと羨ましか

ったり。

「うーん……何作ろ……あ」
思いついた！

ペットボトルに水を半分より多めに入れて、
空のペットボトルをさかさまにして水を入れたほうの口と空の方
の口をくつつけて、
つなぎ目のところをビニールテープでぐるぐるぐるぐる巻いて
つと。

出来上がり！。

「……それ、どうするの」

「逆さまにして、何かかき混ぜるみたいにくるぐる回すと……」
プチ竜巻！

何か見てて楽しいんだよね、竜巻って。
ホンモノは怖すぎるけど。
ピキッ

「あ、凍った」

凍ったやつも綺麗だな！。

「貸して？」

「ん、ほいな」

何すんのかな。

ごぼごぼごぼ……

溶かして、下に集めて……。
くるっ

ひっくり返して？

ごぼごぼピキッ

おゝ、泡入り氷の完成。

「斬、しいねえ、何やってるんだ？」

「……あ、天」

氷溶かして、渡してみる。

「何だ？ これ」

ばしゃばしゃばしゃばしゃ
振る。泡が沢山出来た。

ぺいっ ひゅるる……ばしゃっ

投げて、キャッチ。

あー、何個か作ったらジャグリング出来るかな。
……ちよっと難しいかな。

「……？」

結局分からなかったようです。

「こーやるんだよ」

くるくるごぼごぼごぼ……

「竜巻！」

うわう。突然大声なんか出すからびっくりした。

竜巻好きなのかな？

「あーッ！ 見つけたぜ！ 天、斬！」
ぎゅうっ

剣は斬に抱きついた！

「離れろ、凍らす」

「それはご勘弁を！」

あ、離れた。

「はい、剣」

「……ん？ 何だこりゃ」

頭に乗せてみる。

あっという間にバランスゲームに。

「あっあっあっ」

ポトッ

落ちた。

バランスとるの下手だねー。

「剣、そうじゃないって」

「え？ 違うのか？」

マジボケ！？

「えー……と、じゃあ」

片手に持って、腕を曲げたり伸ばしたり。

「ダンベル違うから」

「あ、やっぱり？ 軽すぎるよな」

これも本気だったらどうしようかと思った。

「こうするんだって」

竜巻ー。

……何か天上手い。

「むっ！ 水流渦！」

剣の手の上に水の竜巻が。

いや、張り合わなくていいから！

37 かっぱけーきっ

「忍、桜に明日何かお返しするとか言っただけだったか？」
「……？ ……？ ……あつ！ 明日って14日！？」

「忘れてたのかよ……」

わーッ！ 完全に忘れてたよ！

それこそ欠片も覚えてなかった！！

危なく、バレンタインも忘れてたのにまた忘れる所だった。
よかった、思い出せて。

「純兄、感謝」

「ん」

さて、何作るかな。

ゼリーは絶対持っていく途中で崩れる。
ってかジュース無いし。

ケーキ……食べたい。けど面倒。

チョコは……湯せんとか面倒。

まず買いに行かないと無いし。

おかーさんのつまみ食い用ならあるけど。
クッキー。絶対粉まみれになる。

後寝かす時間もあるから結構時間かかる。
ん、どーっすかな。

「あれ？ お姉ちゃん何か作るの？」

「うん。カップケーキ」

カップ無いけど紙コップでいいし。

後は簡単だし。

「じゃー、私紙コップ切っといてあげるね」

「ん？ いいの？ ありがと。一個あげるね（きつと）」

「うん」

……あ、光の奴、これが狙いだっただな？

ま、いや。手間が省けるわけだし。

えーっと、卵（一個）を割って崩して混ぜて、

砂糖（大さじ二）を入れて、混ぜて。

牛乳（50？）入れて、あわ立てるように混ぜる。

ベーキングパウダー（小さじ二）……あれ、何処にあったっけ。

引き出しその一。

麵棒、菜ばし、その他諸々が整理されてんだかされてないんだかよく分からん状態で入っていた。

うん、無いね。

引き出しその二。

ラップ×2とオーブンペーパーとアルミホイルは整理されて、後ビニール袋が適当に入ってた。

うん、無さそうだ。

引き出しその三。

鰹出汁やら炭酸（粉）やらドライイーストやらが……って、

「ドライイースト！？ 冷蔵庫入れるよおかーさん！」

すっかり《冷蔵庫で保管してください》って書いてあるよ！？

とりあえず冷蔵庫のドアポケットに突っ込んだいた。

今晚、おかーさんがドライイーストを探して引き出しを何度もあけたり閉めたりすることをあたしは知らない。知る気も無い。

あ、あったあった。ベーキングパウダー。

で、小麦粉（100g）とベーキングパウダー一緒にふるいにかけて混ぜて……。

はい、生地かんせー。どんどんパフパフー。

「はいー、お姉ちゃん」

「ありがと……って、三つでいいんだけど」

六つもいらなから。

三個分しか作ってないし。

「え」

「えーじゃなくて」

「お姉ちゃんと桜ちゃんと私と死神トリオのぶんだよう？ ピッタリでしょ？」

……死神トリオの事とか頭の片隅にも置いてなかったんだけど。

「死神トリオの分はひか……あ、いや、なんでもない」
危ない。光にトリオの分任せる所だった。

「分かった、斬くんと作るからレシピ貸して」

「アンタはレシピどおりに作らんだろ！」

って言うか何で斬となの！？

キングコブラも真っ青な毒を作る気か！？

……流石に無いかな、そこまでは。

「ぎくくく」

……本気でやる気だ。

「天ー！ ……ついでに剣！」

「……何」

「何だ？」

「オレはついでなのか！？」

……できれば扉から入ってきて欲しい。

何で窓からなの。

「斬くん、カップケーキ作ろ」

「……かっぱけーき？ クスリ？」

違う違う違う。

「天と剣はあの二人がこれ以外のものを入れそうになったら全力で阻止してね」

「……分かった」「……りょーかい」

おお、何か暗くなった。

「アンタ等が食べるやつだから」

『分かった!!』

わう、すごいやる気になってくれたよ。

やる気、というか必死？

二人と光にレシピを渡して、よし、あたしは再開。

紙コップの半分から上を切り取ったもの（以下カップ）の内側に
サラダ油塗って、

カップの半分より少し多めに生地入れて、

大きなラップをふわんってかけてレンジに入れる。

一分位で取り出してくし刺して余計なもの（どろっとした生地）
がついてこなければそれでよし。

「あ、チョコいれりゃよかったな……おかーさんの」

ラップかける前にチョコ入れるとチョコケーキになるし。

「待て待て待て待て！ お前等何を作る気だ!？」

……聞こえないよー。

天の叫びなんてあたしには聞こえないよー。

斬の手の上に乗った赤紫色（気泡あり）の小瓶も光の手に乗って
る痛んだぼんかんも見えないよー。

剣の足元凍ってるのも見えないよー。

さーて、後二つもちゃっちゃと作ろつと。

数分後出来た光たちのカップケーキは天と剣の頑張りにより普通
な出来だった。

天と剣は……うん、もんの凄く疲れた顔してた、とだけ言ってお
こう。

38 頭痛い

「じゅーんにー」

「あ？」

「おはよ」

それだけかよ。

「っはよ」

取敢えずは返しておく。

返さないと返すまで言い続けるから。

純だ。

「ねー純兄、頭痛いー」

……俺に言っただうすんだ。

「風邪か？」

「さー？」

熱……は、無い。

と思う。

「純兄、手、つべたいよ」

「ほっとけ」

「いたーい。ねー、どーやったら治る？」

「知るかよ……」

原因も分からないのに。

「だいたい何で頭痛くなっただよ？」

「それが分かったら苦労しないよー」

それもそうだ。

「多分昨日ゲームしまくったからだと思うんだけど」

「分かってんじゃねえか。原因それだろ」

たまにゲームとかパソコンとかしすぎたら痛くなるんだよな。

「ねー、どーやったら治る？」

「……寝とけ。起きたら治ってる、かも」

「今日学校なんだけどー」

「授業中にでも寝とけ」

一部どころか二部三部くらいは聞き流してんだから同じだろ。

「今日三時間目からは卒業式練習だよ？」

「半分意識飛ばしとけ」

歩きながら出来んだからわけねえだろ。

「下向いてたりしてたら学年主任のあの教師に怒られる」

……あいつな。

教師をあいつか言ったらいけねえんだろうけど。

学年主任、英語担当の池中……何つつたかな。いけなか

説教が長い、ほかの奴も巻き込まれるで何か嫌われてる教師。

……一部アレはツンデレで恥ずかしがってるだけだとかいう奴もいるけど。

いい年したおっさんなんだからそうでないことを願いたい。

「ねー、どーしたらいい？」

「まず着替えろ」

パジャマから。

「何に？」

「はぁ？ 馬鹿か、制服に」

「……ふわーい」

裾を引きずりながら部屋に戻る忍。

……いつも思うけど、ぶかぶかだな。

ごん

「いたッ!？」

「プッ」

「純兄、笑わないでよー!」

「ああ、悪イ」

扉開けようとしてその扉にぶつかる奴なんか居るんだなと思って。いや、何度か見たことはあるんだけど。桜のを。

忍がやると……何かな。違和感があるような無いような。

「純兄ー、まだ痛い」

着替え早……。

「とりあえずいつもどおりしてたら忘れるだろ」

まあ無いと思うけど。

「んー、分かったよ……」

ごん

「いた……」

数分後、洗面所の方でそんなのが聞こえた。

「忍ねえ？ どーしたんだろ」

「……下に落としたピン拾おうとして洗面台に頭ぶつけた」

……またか。

ごん

「いった！」

今度は何だ。

「立ち上がろうとしてまた洗面台に頭ぶつけたみてーだ。ねーちゃんらしくねーな」

「可愛かったけどねー、ねー、天ちゃん」

「うん。しいねえが頭ぶつけるなんて始めて見た」

ごん

「いた！」

「今度は何だろー」

……忍、まさか頭痛は頭をぶつけたことが原因じゃ……。

38 頭痛い（後書き）

忍は具合が悪いと稀にドジっことになったりします。
あまりに稀過ぎて皆忘れていきます。

39 ちょっとおせーて？

「純兄ー」

「あ？」

「英語教えて」

「……………は!？」

間違いない、明日は雪だ。

いや、まさかの巨大台風かもしれないねーな。非常食あったっけか？
岳だ！

今さっきねーちゃんがオレ等の部屋に入ってきて、最初に戻る。

「ちよつと忍。もうちよつとこっち来い」

「えー？　なんで？」

「いいから来い」

「んー。分かった」

……大分前に見ただけど。

こーゆー時相手がにーちゃん以外の男だったら『なんで』を連発するんだよな、ねーちゃん。

女でも全く知らねー奴だったらそうすんだけど。

オレが言っても『なんで』連発するのはちよつと悲しいな……。これを見るとさ。

「……熱……ねえな……昨日の頭痛まだ続いてんのか？」

「続いてたら勉強しようなんてしないから」

確かに。

「……………という事は精神科か？」

「酷いな！　何でそうなるの!？」

だってねーちゃんが勉強しようとしてるから。

余にも珍しすぎて。

「何でって……勉強マトモにやろうとしないテメェがやろうとしてんだ。驚かずに居られるか」

「酷い」

「で、何でまた……」

「え、何となく」

「いっつもねーちゃんが何かする時は何となくだよな……」

「……………病院行って精密検「いないから！」んで？何で英語なんだ」

確かに。算数……じゃなくて数学って難しいんだよな？

小学の先生曰く。

「ふう、やっと病院から離れてくれた……。何で英語？何となく」
また何となくかよ……。

「では無く。珍しく」

自分で珍しくって言ってるし。

「英語は学校では欠片もやる気無いから」

え、そんな理由かよ！

「分かった。それは分かる。だから英語はテメェ9割9分9厘ほど聞き流してんだろ？」

にーちゃんそれで納得するのか！？

しかも9割9分9厘って殆ど全部じゃねーの。

「純兄惜しい。10割」

全部かよ！んな訂正いらねー！

「あ、そ。まあ、アレじゃな」

「うん。アレだから」

「アレって何だよ！」

あ、声に出てた。

『英語担当の教師』

そんなに綺麗にハモらなくても。

ってか先生アレ呼ばわりか……ドンマイ知らない先生。

「アレが担当じゃな……俺も7割がた聞いてねえ。家で出来るし」
進○ゼミなー。

ねーちゃんもオレも溜めちまってるけど。

……あれ？

「家じゃ発音とかは分かんねーんじゃねーの？ にーちゃんパソコン使うのは調べ物くれーだし」

「発音？ 親父。あの教師は発音悪いから。……たまに来る外国人教師のなら聞くけど」

あー、マリア先生か。

父さんは……あ、そうか、昔アメリカ行って勉強したとかでぺらぺらだったな。

つつーか英語の教師って発音悪くてもなれるんだな……。

「はい、とゆー訳でおせーて？」

「別に教えるのはいいけど……何処を」

こないだねーちゃんのテスト見してもらったけど間違いの殆どがスペル間違いとかaが抜けたりとかだったな……。それで10点も落としてた。もったいねー。

「……発音？」

「何で疑問形なんだ」

何でもよかったとか？

「これ、ちよつとわかんなくてさ。勘で書く時発音って大切なんだよー」

「勘で書くなよ……単語くらい覚えろ」

「どちらにしても発音は大切でしょ」

「親父は？」

「まだ帰って来てない」

……にーちゃん、父さんにやらせようとしたよな、今。

「分かったよ……」

「とゆー訳で、ここ、よろしく」

「ここって……agreedか？」

……あぐりーど？ はい、わからん。

「あ、それで良かったんだ。こっちは？」

「advertise」

うん、さつつつつぱり分からん。

「advertiser……advertiser……advertiser
se……よし、覚えた！ 多分」

多分って付けるなよそこに。

それにしても……、

英語ってややっこしそうだなあ。

40 雪、そして本とに居たのかこんな奴2

ひゅおおおおおおお……

わゝ、寒そゝ。

光ですゝ。

今ねゝ、久し振りに雪が降ってるんだよゝ。

梅の花は大分咲いてるしゝ、昨日も温かったのになゝ。

「おゝ、さぶ。つべてー」

「お帰りっ岳にい！」

「岳お兄ちゃんお帰りゝ」

剣くんって岳お兄ちゃんに懐いてるよねゝ。

いっつも真っ先に飛んでいくんだもんゝ。

「……わあゝ！ 真っ白オバケゝ！」

「オバケ違う！」

だっゝ。

頭もランドセルも服も雪がいっぱい積もってるんだもんゝ。

あゝ、解けちゃったゝ。

暖房入れてるからねゝ。

「あれ？ 斬は？」

「あそこ」

天ちゃんが指すは家の天井ゝ。

の少し右らへんゝ。

ここと言う右は南ねゝ。

「……？ あ、外か！ ……すげー。よく出られるな」

岳お兄ちゃん指された所（外）を見ていますゝ。

確かによく外出られるよねゝ。

雪の竜巻が出来ちゃいそうなほど風強いんだよゝ。

風邪引かないかなゝ？

「斬は雪男同然だから」

天ちゃん、雪男って毛むくじやらないイメージが強いんだけど。どっちかって言うとな雪男の子バージョンって感じだな。

和服だし。……黒いけど。

「寒いーついでに痛い。純兄何とかして」

「無理に決まってるだろうが」

「あ、お姉ちゃんと純お兄ちゃんも帰ってきた」

わ、岳お兄ちゃん並かそれ以上に真っ白だ。

ハンカチではたいてゐるみたいだけど。

「……お帰り」

「あ、斬ただーいまっ」

斬くんはお姉ちゃん達に懐いてるよね。

あれ？ お姉ちゃんが斬くんを懐いてるのかな。

お姉ちゃん、いちいち斬くんを高い高いする必要は皆無に等しいと思うんだけど。

無表情崩れてないし。

神谷ちゃんと菜美ちゃんは凄く喜ぶけど。

……菜美ちゃんと斬くんって同い年だったような気がするけど。

……。

全然違うよね。不思議。

「斬、外で何してたの？」

「……雪、見てた」

「へっ、顔に当たったりしたら痛くない？ あたしずっと痛かったから後ろ向きで歩いたんだよ。途中」

……お姉ちゃんって人目あんまり気にしないんだね。

「もちろん人通りの少ない所でだけ」

あ……、気にしてたんだ。

「人通りの多いところでは俺を盾にしゃがんだからな」

それで純お兄ちゃん少し不機嫌そうなんだね。

……なるほど、今度岳お兄ちゃんを盾にしてみようかな。

何のためには不明。

「……………あ！　　そういえば何か不審者出たんだって。気をつけてね、特に光」

「何で私なの！？」

「一番逃げ足遅いだろうからさ。刃物もって追い掛け回す若い男だつて」

「……否定できない」。

お姉ちゃんは本気出したら速いし……短距離は、だけど……。

純お兄ちゃんは走るの速いし何故か隠れるの上手いし。

岳お兄ちゃんは逃げる時は異常に速くなっちゃうし。

うゝん確かに一番危ないのかな。

「あ、ちなみにそいつは身長143cm、……うあ小っちゃ。体重92キロ、血液型は海老……じゃなくてAB型で星座はうお座。趣味は本とか漫才とか落語とかその他諸々。黒ぶち眼鏡かけてて黒いリュック背負ってる。息遣い荒くて汗だらだらの要はズンぐりむっくりの……本とに居るのかこんな奴って野郎だ。分かった？」

「分かった」

本とに居るんだね、そんな人。

「ちよつと待て。テメエなんでそんなに詳しいんだよ」

「あたし目撃者」

「は！？　……だからってそんなに細かく……」

「ちよつと盗聴器を仕掛けて」

「盗聴器もってねえだろ」

「ばれましたか」

「ちなみに目撃者って所は」

「あー、それも違う」

何だ、ウソか。

本当にそんな人がいるなら見てみたかったのに。

「本当は短ランボンタンに「見てねえんじゃ無かったのか」これは昨日見かけたんだよ」

……短ランにボンタン？」

アレかな？ 昔々の不良さんが着てたっていうやつ？
どれ位前なのかは知らないけど。

「そんなのが居たのか？」

「うん、これは本と。昨日卒業式だったでしょ？ 校門の前に立
かけてある《第四十回卒業証書授与式》って言うのあるじゃん。あ
そこで写真撮ってたんだよ」

不良さんが？」

「……本とに居るんだな……そんな奴」

「でもま、本とに居るのかって行ったら死神トリオもそうでしょ。」
『？』

トリオさん、そんなそろって首傾げなくても。

死神って殆ど信じられてないんだから。

「雪好きで実験……危険物の調合が好きな死神はもっと珍しいか
もな……」

激しく同意します。

斬くん？ 首傾げてるけど、

君のことだからね？

41 いじめというのがあったらしい

「おい、死ねよお前え」

その瞬間、まさに空気が凍りついた。

……あたし達五人の周りだけだけど。

忍です。

今日も今日とて休み時間、あたし、桜、篠、純兄、清は集まって話したりなんたりしてました。

そこに……えーつと……クラスメートAがやって参りまして、純兄の席の後ろ、……確か水谷亮みずたにとおるとか言ってたつけ。

に、最初の台詞を言ったわけ。

水谷は異常なまでに大人しい……と言うか無口な人なんだよ。

ちょっと質問、これっていじめに入りますか？

あたしは入ると思います。

「おい、コイツがテメー等になんかしたのかよ？　なんでいきなり死ねなんだよ」

お、清が反論。珍しすぎるほど男前だぞー。

「あん？　ひゃっははは！　おい、コイツこんなことにマジギレしてるぜ！」

「馬鹿だろ。こんなのにいちいちキレんのか？」

あゝ、殴りてえ。

殴っちゃっていいよね？

うん、良いということにしよう。

どかつ

「っつ！　あんだよっ、死ねよ！？」

「死ねと言われて死ぬ奴なんていないよ」

「ほんとー、そんなの居たら会ってみたいよお」
桜が参戦！

「どーだかな！ いじめで自殺する奴とか居るらしいし。それって死ねって言われたっつー事だよな！？」

「忍が言ってるのは『死ね』と言われた時点で死ぬ奴だと思うけど」
ぴーんぽーん。さすがしーちゃん。分かってるぅ。

言葉は凶器、確かにそれで心が傷つくことあるだろうけど言われてその瞬間ショック死する人なんて居ないんじゃない？

「……ちっ、屁理屈こねやがって……」

おお、引き上げてく。

ふふん、屁理屈は強し！

「おぼえてろよ？」

「いいえ、忘れます。誰かさん？」

クラスメートの名前さえマトモに覚えぬ奴がそんなこと覚えるわけが無いでしょ？

それにしても……『おぼえてろよ』って雑魚の捨て台詞多い順に並べてベスト3に入るくらいベタな捨て台詞だよねー。

初めて本とに言う人見たよ。

「……………どうも」

……あ、水谷のこと綺麗サッパリ忘れてた。

「どーいたしまして！」

「清、アンタ最初しか参戦してなかったでしょ」

「ばれたか」

ばれるも何も。

「……ほっとしてくれた方が良かったのに……」
聞こえてるよ？

「おい、テメェどういう意味だよ？」

あ、純兄参加。

「……！ ……だって、巻き込まれるだろ……」

ねー水谷、今びっくりしたけど普通に聞き取れる範囲内の独り言だったからね？

「巻き込まれる？」 何に、何で、どういう理由で？」

「桜、何でとどういう理由では同じ」

「あ……このほうが、テンポいいでしょ！」
最初の『あ』って聞こえてたって。

「……いじめ。反論なんかして……おれの見方なんかするから」
「やだな、あたしは見方するつもりでやったんじゃないんだけど。
何かあいつ等ムカついたんだもん」

「……………変な奴」

変な奴ってどーゆー意味だ。

いや、あたしが変な奴ってのは知ってるよ（開き直り？）
ここで言う変な奴ってどーゆー意味なんだって思っ

「水谷、これは元が何か歪んでるからそれでいいんだ。逆にマトモ
になったら怖え」

「やーい、歪んだ奴の兄貴ー」

「……ほらな」

「……………分かつ……た？」

これでいいのかって顔してるんだけど、純兄？

「あっ！」

「五月蠅い」

「ちよ！？ 篠それはねーだろ！」

しーちゃんナイス。

「で、どうしたのお？」

「ああ、桜は優しい……癒し「聞かなきゃ良かった」ちよっ！？」
ばこっ

「さっさと話せ」

「純くんのチョップ、見事に脳天に決まりました！」
桜の実況は癖なの？

「あー、実はな、修学旅行の民泊グループあるじゃん？ 4, 5人
のグループのやつ」

「もう提出の締め切り過ぎてるけど。三日くらい前に」
あたしはもちろんしーちゃんと桜……後もう一人は現在進行形で

不登校の人とだよ。

『で?』

「オレ等まだ三人しか決まってねー訳よ、水谷入らねー? 決まっ
てなかったらだけど」

あー……そーゆー事ね。

……清と純兄とも一人誰?

ま、そのうち分かるか。

「どーする?」

「……それでいいよ……（先生に頼まれたかしたのかも知れないけ
ど……）」

何か今何か言いたそうな顔してたけど?

ま、いっか。

42 ガキな忍

「……あれ」

「どうした？」

「上靴そーしつ。宝探しゲームかな」

「……いや、絶対違う。」

「いじめの定番中の定番、靴隠しだろ。」

「純だ。」

「今は大体8時。」

朝練の無い部活、または帰宅部にとっては来るには早い時間だと思ふ。

「……俺等は帰宅部だけど、いつもこの時間に来ている。」

「純兄、探さないでね？ あたし一人で見つけてやるんだから……
って、あった!？」

「見つかるの早いな。」

「靴箱の、普段使われていない一番下の段。」

「もーちよつと手ごたえあってもいいのに……ねえ？ 純兄」

「……やせ我慢なんだかポジティブ過ぎるんだか」

「何でやせ我慢が出てくるの？」

「……はあ」

「……地味に、傷ついてる？」

「演技は上手いけど……分かりやすい。」

「こてん、と首をかしげるのは一瞬だけ。」

「すぐに階段へ向かった。」

「じゅーんにー、早くしないとこのしかかるよ？」

「やめろ。別に重くねえけど。チビだから」

「酷いな、あたしは大体真ん中らへんだよ。多分」
「確か150ちよつとだった。」

「おはよ〜」

「あ、おっはよー、さーちゃん♪」
ぎゅむ

「……純？ 忍どうしたんだ!？」

「清、どーゆー意味？」

清を睨みつける忍。

地獄耳だな……人のこと言えねえけど。

「でもどうしたの〜？ 急に抱きついてきたりして……」

「だって寒かったんだもん。昨日も雪降ったしさ」

「大丈夫、今日は昨日よりは暖かくなるって天気予報で言ってたから」

「あ、そうなの？」

天気予報くらい見ろよ……。

朝ちゃんとテレビついてたろ。

いつもの事だけど。忍がテレビ見ないのとか、テレビがついてるのとか。

「昼はね」

「えー、午前中は寒いのか？ じゃあ体育（三時間目）ん時もくっつくよ、さーちゃん」

お前はいつから抱きつき魔になった

あと何故桜の呼び方が変わってる？

「あはは〜、今日はわたしがくっついちゃおうかな？」

「やだな、くっつきに入ってたほうが暖かいんだよ、あたしが」

自己中……。

「なー純、やっぱり忍がガキっぽくなってる」

「あ？ いつもだろ」

「いや……いつもにも増してと言うか」

「そういう気分なんだろ、あいつの性格なんて相手と気分で変わるから」

これが普通だと思うけど。

「へえ？ ふーん、ま、いっか」

忍が気がつかせないようにしてるんだから、適当にはぐらかしておく。

下手に忍の内面に手をつっ込んでみる。

忍のスルースキル(?)が上手く作動しなくなる。

ほおっておくのが一番いい。

勝手に元に戻るから。

……つまり、忘れる

普通こんなのを簡単に忘れる奴なんて居ないんだろうけどな……。

「忍、何でわたしばかりなの？ 篠居るじゃない」

「さーちゃんに嫌われたあ」

「そういう意味じゃなくて！」

内面を出さない代わりか、いつもより絡む。

桜と篠は、それを分かっているみたいだった。

「しーちゃんはねー、さーちゃんより筋肉あるんだよ。さーちゃんは柔らかいんだもん」

「悪かったな」

「やだな、誰も悪いなんて言って無いのに。怒らないで？」

「はいはい」

「適当に流さないでよ！ しーちゃん冷たい」

「ほっとけ」

「はい」

訂正。ガキになる。

まあ、長くて半日くれえだけだな。

それまでは、二人に頑張ってもらうか。

43 送辞!?

……およ?

なんだろう、このプリント。

今朝無かったのにな。

忍でーす。

ブッ○オフ行って帰って来たら岳達の部屋の前にプリントが落ちてたんだ。

……誰か拾えよ。

《卒業式 送辞》

あー、昨日は小学校卒業式だったっけ。
ちよっと読んでみよ。

《1春 2(全) 夏》

……うん?

(全) って全員って意味だろうけど何故に夏?

《3秋 4(全) 冬》

何故四季を全て言う!?

本とに送辞かこれ!?! いきなりだけど。

《5色んな日差しがありますか》

……最初の五行これで潰すか。

《6春の日差しは温かいです》

そう繋がるんだ。

で? とか聞きたくなるけど。

《7卒業生の皆さん 8ご卒業 9(全) 出来ますか?》

おい!?

挑発か!?! それを全員で言うか!?!?

それとも涙を流しながら言うって行くなアピール?
それは無いか。

《10するのなら 11止めはしませんが》

……止めないのね。いや、止められても困るだろうけど。

《12（全）覚悟しといて下さいね♪》

怖いよ!？ しかも♪って何!？

《13それでは 14少しだけ 15一年を振り替えさせていただき 16ます》

何これ!？ 16番悲し!？

《17裏山オリエンテーションでは 18一年生と手をつなぎ 1

9振り回されていましたね》

………ドンマイ、今年の卒業生。

小さな子とはそんなもんだ……。

《20体育祭で 21一番盛り上がった》

確かソーラン節だったかな、今年は。

《22（全）玉入れ!》

ええええええええ!？

児童会競技!？

《23体中に玉を受けながらも 24カゴを支え続ける姿に 25感動しました》

いや、カゴ放されたら困るから。

………どんどん卒業生が可哀想になってくるな、これ。

別の意味で泣いた人は何人いるだろう。

《26水小祭りで 27一番の人気を誇った》

水小って水ヶ丘小学校の略ね。

水小祭りは4～6年生がコーナーを作って1～3年と4～6年の前、または後半の人がそれを周る文化祭？ みたいなもの……かな。

何故かオバケ屋敷は六年しかやっちゃいけないんだよ。

《28オバケ屋敷! 29素顔で出来たことが 30さらに人気を集めました》

……素顔で出来たオバケ屋敷？

どんな顔をしてるんだ卒業生……。

《31それを見て 32私達は 33捨て身になることを 34知

りました》

捨て身で、おい。

《35色んな 36辛いことを 37乗越えて》

急に話変わったね？

って言うかその“辛いこと”って一番の原因はこれって言ってる5年生じゃ？

何かそう思える。

……ってか、思いっきり思っちゃうんだけど。

《38皆さんは 39本当に 40強くなれましたか！？》

そんなに力いっぱい聞くな！ 可哀想だから！ 本気で！

《41それはともかく》

ともかくしてやるな！

《42卒業生の 43皆さん 44さようなら！ 45（女全）さ

ようなら！ 46（男全）さようなら 47（全）さーならっ！》

無理やりまとめたな！？

と言うか一番最後だけ適当だな！？

……あれ？ まだ続きがある……。

《48と見せかけて》

おい！ 見せかける必要ないでしょ！

《49（全）さよーなら！ グッバ！》

見せかけ違うじゃん……。

ってかグッバで。適当な……。

あれ、右下に手書きで何か書いてある。

《ボツ》

……良かったね、卒業生。

良かったのか？

44 ごっこ遊び……か!?

ひえーっ!

岳だー!

暇だったから漫画を読んでんだけど、そばで死神トリオが某少年漫画ごっこ（しかも色々ごちゃ混ぜ）をしている。

そんな恐怖の状態にオレは陥っているのだー!

ただのごっこ遊びならこんなにビビったりしねーけどな!?

これはもはやごっこじゃねー!

だってな、だってな!?

家にある某少年漫画の技、リアルでやってんだぜ!?

炎の塊やら電撃やらこっち来そうで怖えよお!

一応ねーちゃんがとっさに覚えさせた、これまた某少年漫画をまねた結界の中でやってるからまじだけど……。

透明な結界だからこっち来そうで落着いて漫画読めねー!!

……ってな訳で、オレは漫画を読むのを諦めた!

「あ、これ面白そーだ。ちよつとどいてろよ……大○字!!」
おー……。

ちゃんと炎が大の字になってんじゃねーか、すげー!

「ハイ○ロポンプッ!」

びしゃーっ!

あ、あつという間に消化。カ○ックスもびっくりな勢いだったな
ー。

……本と、結界を覚えさせたねーちゃんに感謝だぜ。

これが無かったらどうなった事か。想像したくねー。

「斬、何かいいのあったかー?」

「……天○」
あま

「のおうえあ!?! あちあちあちあちあち!! 何だこれ!?!」

黒い火!?! 消えねー!?!」

うーわー、斬、お前は剣を焼き殺す気か!?

しかも何で万〇鏡写〇眼必要な術が出来るんだよ……。
分からない人に一言謝罪。ごめんなさい。

「……消した、まだ熱い?」

「う……いや、大丈夫。大丈夫だから! 氷、仕舞え!」

しかも氷が出てきた所って剣の真上だしな……。

絶対頭の上に落とす気だろ。

で、火傷の手当てはしない気だ……恐ろしや。

「斬、十万〇ルト!」

おお、ピ〇チ〇ウ並に強そー。

「成」

おお、結界（参考にした奴からオリジナルを作ってた）で防いだ。
上手い!

「斬ー、ほれ」

ぽいっ

……え、爆弾!? しかもデカっ!?

何処に持ってた!?

オマケに何かベタな形してんなー……。

黒っぽい球に導火線らしき太い縄がついてんだ。

しっかりそれには火が……って、おい!?

「成。……破」

パンツ

うわー、あんな大きい、ギャグな見た目してても恐ろしいものを
消したと言うのに、何て軽快? な音だ……。

「成」

「……え? 斬さん何するつもりでーすかー……」

剣の頭上にさっきの爆弾と同じくらいの結界を作ったんだな、斬
が。

「復」

そして今の一言（一文字?）でさっきのギャグな爆弾が復活した

んだな！。

「放」

そして今のでその爆弾が放たれて……。

「ちょ、ヤメッ、ざ」どかーんッ

剣の目の前で爆発。

剣は防ぐための結界を作ることさえ出来ませんでしたとさ。
爆風は天が何とか防いでくれたけど。

……って。

「剣ー、生きてるかー！？」

『剣だから大丈夫だ』

声をそろえて言ってるなー。可哀想だから。

「アチチチチ……あーもー、ひりひりするじゃんかよ！」

……大丈夫だし。

「剣、元はお前のだろう？」

「うぐ……、天、それを言っちゃーいけねーよう」
事実なんだけどなー。

「……たーにい、他、ある？」

……まだやるのかッ！？

45 まきまき大戦争!!

『たんじょーび、おめでとー!』

「……あれ? あ、そっか! ありがとう!」

忍でーす。

今日が自分の誕生日だと言うことを綺麗さっぱり忘れてました。
春分の日って二十日だったり二十一日だったりするでしょ?

やっつこしいねー、全く。

……でも、晩ご飯が手巻き寿司なのに気付かなかったあたしって
どーなんだろ。

家で手巻き寿司なのはあたしの誕生日の時と岳の誕生日の時だけ
なんだよー。

理由は簡単、あたしと岳が手巻き寿司好きだから。

だって何入れてもいいんだもん、楽しいでしょ?

「わーっ、すうっげー! 色々ある!」

「にんじん、きゅうり、レタス、……魚が三種類? 納豆……え、

紙? それも沢山」

天、それは紙じゃない、海苔!

あたし達は山羊じゃないから!!

「……つぶつぶ」

イクラはそう言う物だから。

「いたーきまつす!」

「あゝ、岳お兄ちゃんフライングだゝ!」

「とか言いながらテメエの口元に米粒がついているのはどういう訳
だ、光?」

「あははゝ」

……あゝっ、出遅れたっ! 突っ込んでる隙に!

「あ、父さん鮭取りすぎ! ずっこい!」

「弱肉強食! これぞ自然界の掟」

「……どつちかと言うとそれは早い者勝ち、だろ」

よし、この隙にマグロ（半額）……ん？

「いつの間にマグロが半分に!？」

『何!？』

そんなに息ピッタリに振り向かんでも、岳におとーさん。

もむもむもむもむ……

「光、犯人はお前か!!」

「やだなく、何処に証拠が？」

『その皿の上の鉄火巻き（四コ）は何だ!？』

うーん、ナイスハモリ？

さっきの二人+あたし。

「……戦争」

「戦争だな」

「止めるな！ 放せ！ オレは行く!!」

『行くな』

うんうん、天に斬、そのまま剣を押さえておいてくれたまえ。

だって、ね？ おとーさんはこの子達見えないんだから。

寿司が宙に浮いてたらどーなることか。

一番の理由はあたし達の食べる分が減ることなんだけどねっ！

「ほらほら、落着いて」

「母さん、皿の上のイクラ巻き（四本）は何だ!？」

「戦利品だよ？」

『ね』とか言いながら、微笑みながら光と顔を見合わせないで？

「まあ、落着け！」

「なっ、落着いていられるか!!」

「五月蠅いから落着け。近所迷惑だ」

「……はーい」

純兄凄。うん。

「よし、落着いた所で……じゃじゃん！」

おとーさんが出したもの。

空のトレイ。

「……なんだよ期待させといて！」

「期待してたんだ？」

「当たり前だ！」

「おっかしーなー……」

いや、おとーさん、裏っかわ見ても何も無いから。

「あゝ、そこにあったマグロなら食べちゃったよ？」

『な！？』

「だって、要冷蔵なのに常温でほったらかしにしてたんだもの」

……この二人、間違いなく家では最強だなー。

女は強い。

……あれ、あたしは！？

「忍ねえ、ちよっと分ーけて？」

「巻く所からやってみる？」

「え、でも……」おとーさんはショックで意識三分の二程飛んでるから「やるっ！」

うん、いいお返事。

いいお返事だからテーブルの上にあるネタ全種類入れようとするなー！

「いっただっきまー」……もむ「なあああああ！！」

斬の一口くらい小さいんだからいいじゃん。

「じゃあ私も。あむ」

「みぎゃあああああああ！！」

おお、天の一口は大きかった。

……多分剣を弄るのが目的かと。

「……あつ、マグロ……」

良かった、後一切れ残ってた……って一切れだけ！？

あたしまだ食べてなかったのに……。

とられる前にとっておかないと。

シュッ

「……あ」

セーfff、おとーさんにとられる所だった。

「……食べてなかったのに……。忍、おとーさんにそれよこしなさい」

「断固拒否!!」

渡してたまるか!

「子は親に尽くすものだ!」

「え、そなの? 今は別だ!」

「いつだろうと同じだ!」

なんだろ、えーつと……。親権乱用?

「ふーんだ」

「こら! 親にその態度は何だ!」

寿司のネタでそんなに変わるものかねー、性格って。

ま、いーや。はもつ

「ああああああああああ……」

おとーさん、撃沈(?)!

この戦争は一時間もの間続いたのでしたとき。めでたしめでたし。そんな、誕生日な晩ご飯でしたとき!

……ケーキは?

45 まきまき大戦争!! (後書き)

ッという事で、忍の誕生日でした。

伏線全く入れてませんでした(精々三月と言うことくらい)。

忘れてたわけじゃないですよ! 覚えてなかっただけで。

書いてて思いました。誕生日殆ど関係ない。

けーき……ケーキ……あゝ。

46 金魚ちゃん金魚ちゃん

じい————ッ

びちびちびちびちびちびち

……なんだろ。

微笑ましいのか惨たらしいのか……どう反応したらいいの？
忍です。

死神トリオがね、現在進行形で家の金魚の観察してるんだけど、
天が金魚の尻尾つまんで逆さ吊りにしてるんだよね……。

しかもその金魚から見えるであろう位置には剣の操る水の球が。

「はーらほーら、水だぜー」

びちびちびちびちびちびちびちびちびちっ！！

「……………えさ」

びच्चびच्चびच्चびच्चびच्चびच्चびच्चびच्चびच्चびच्च！！

剣、水を金魚に近づけたり離したりって何のいじめ！？

しかも斬がエサ投げ入れてさらに誘惑してるし……。

「んみゃあ、んみゃあ（しのぶちゃ、しのぶちゃ）」

「あれ？ クロ。なあーん（どしたのー？）」

クロって言うのは近所の人が飼ってる猫ね。

クロなのに白猫。ウケ狙いでつけたらしい。

「ふなああん（あれ食べてい？）」

「みゃ（ダメ）」

減ったらおとーさんが悲しむから。

主に世話してるのおとーさんなんだよね。

「んみゃーあ、んにゃーあ（あれしてたら死んじゃううけ？）」

最後の一文字を言わないのはクロの口癖、と言うかマイブームらしい。

「……………」

……さて、言い返せない。

「みーにゃーん（多分死ぬ前に戻すから大丈夫）」

多分、きつと、恐らく。……戻す、よね？

「天、死にそーになってるぜ！」

「ん？ あゝ」

大丈夫、だよね！？ て言うか大丈夫であってくれ！

「成、癒」

あ、治しちゃった。

……便利だなあ結界。もう使いこなしてるし。

「はい、ぽちゃん」ぽちゃん

「……みゅうう（はああ）」

クロ、溜息を吐くな。

そんなに食べたいんならお祭りにでも行っといでよ。

今は無いけど。

「えいつ、えいつ」ばしやつばしやつ

「んみゃあ、ふーなーあん（しのぶちゃ、次やろうとしてるけ？）」

「……よし」

庭の隅に転がってたプラスチックの小皿に、

水槽の水入れて。

「み、みゃん（はい、金魚水）」

一緒にメダカも入れてるからなー。

金魚メダカ水の方が正しいかも。

まあ、最近水槽洗ってないからきつといい出汁が出てるはず。

ぺろっ

「ふみゃーお（ふうーむ……）」

一舐めする度に唸らなくても……。

どこの料理評論家なの君は。

「みゃーみゅーなうん？（金魚メダカタニシ藻炭水な？）」

……君、本とに料理評論家だったりしない！？

細かすぎるよ！

「ふうううううう……」

うん？ どしたの急に唸りだして？

かさかさかさかさかさ……

あ、ゴキさん。

水槽に向かっております。

ぽちゃん、じたばたじたばた

落ちました。

あ、家で一番大っきい金魚が近づいて……。

あぐっ

『……食った……』

「クロ、みーにゃーふなああん（あのでかい奴食べる?）」

「に、に、に、みーにゅあー（いい、いい、いい、クロさんゴキは嫌いな）」

あ、逃げちゃった。

「……解剖、いい？」

「確かにどうなってるか気になる……」

止めんかあああああっ！！

47 熱があるようです

「うー、熱い、寒い、熱い寒い熱い寒い熱い」

「どっちだよ」

忍でえす。

今は二時間目、英語の時間。

授業を聞く気は欠片も無いので黒板に書いてあることをプリントに丸写ししながら落書きという名内職中。

で、最初に言ったようなことをぶつぶつ言ったら隣の純兄に突っ込まれた、という訳。

だって熱くて寒いんだもん。えーっと、ぬるい？ 違うなあ……。

「あれ？ 忍、顔赤くない？」

きつと暖房が効きすぎてるんだ。エコ温度は18℃ですよー？

「ちょっと忍、じっとしてろ」

純兄ー、手、つべたいんだってば。

「あっつ」

「え、風邪か？ 保健室行った方がいいんじゃないの？」

「分かったよう。英語終わこれったら行くー」

暇だから今すぐ行きたいんだけどねー。

「そこー、五月蠅い」

『はーい』

『五月蠅い』と、いう奴の声が一番デカイ。

まさにその通りだよね。

……先生だから当然なのか。

「と、いう訳で今日はここまでー」

こういう訳だろう。聞いてたら分かったのかな。

「きりーつ、れーい、さよーなら」

「さよなら違う！！」

ナイス突っ込み、誰かさん。

「じゃ、忍を保健室へ連行しよう」
しーちゃん、連行違う。

『うわあ』

保健室、満員。殆ど二年。

まあ三年は卒業した後だけど。

「えーと、付き添いの人は戻ってー。ややつこしいから」

「えー。じゃあねー、忍」

『えー』言った割に行くの早いな桜！

「えー……高山さん、二組だっけ？」

「三組です」

「あ、そうそう四組」

「三組ですってばー!!」

疲れてんのかなー、先生。

「……はい、熱測っというてね」

この体温計、音でるのかなー？

ほら、体温計って音出る奴と出ない奴あるじゃん。

ややつこしいよね。

「せんせー、俺帰る。早退。吐きそう。朝吐いたし」

「はいはい、体温測ってからね」

あ、あれは……こないだ水谷をいじめてたクラスメートAだ。

「……頑張って体温上げよ」

聞こえてるよー、独り言。仮病なんだね？

「あれ、お前も帰んの？」

……いや、まだ体温測ってる途中だから。分かんないから。

でもさっき37℃越してたんだよねー。

「多分？」

「ふうん」

……体温測ってるときほど暇な時間はない。

動いちゃいけないし。ついでに話し相手いないし。

保健室にいる人数でも数えてよっかなー。1、2、3、4……。15人。多っ。

ぴぴぴっ、ぴぴぴっ、ぴぴぴっ

あ、これ鳴る奴だったんだーって、

38.6℃……。高っ!?

「せんせー、鳴りましたー」

「はいはいー? ……お母さん今日居る?」

「多分、きつと、恐らく?」

「……………。連絡するからちよっと待っててね」
ちよっとってどれ位?

まーいっか。

「体温測ってる人意外教室かえりなさーい」

きーんこーんかーんこーん……

あれ、ぶーちゃ……もとい東田先生。

一組は三時間目国語って聞いたんだけどなー。

え、だから? それは秘密です。

「あ、チッ」

あ、A、思うように上げられなかったんだ。

「高山さーん。迎えに来てくれるらしいからね、荷物持って下りておいでー」

「はーい」

で、かばんの中に筆箱とか入れてたら清やら何故かAに吃驚されました。

……どーゆー意味だろう。

48 おみまい

「大丈夫なの？」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

「……………斬」

「……………」

「何でこうなったんだっけか？」

純だ。

桜篠清が忍の見舞いに来てんだけど……。

まあ、悪いこととは言わない。ただ、

忍はインフルだったんだよな……。

「……………えと……………」

30分前。

プルルルルル……………プルルルルル……………

「はい高や「純君？ 忍、大丈夫なの！？」」

「インフルだってよ」

「えゝっ！？ インフル！？ A？ B？ AB？ それともO！

？」

血液型じゃねえから。

「Bだったと思う」

「そっかー！ わたしお見舞い行くね！！」

「ちよっ、おい……………」ぷっつ、っー、っー、っー……………。

現在。

……………それでなんで篠に清というオマケがついて来る？

答えは簡単。桜がしっかりそっちにも連絡したからだ。

「忍ゝ、ポ〇リ飲む？」

「え、あ、ありがと……それよりさ、うつっちゃうよ？」
それは玄関先で言ったんだけどな……」

「大丈夫！ わたしは年明け早々罹っちゃったから。あはは」

「あたしは去年の12月に」

「オレは馬鹿だからぜってえ罹りっこねえ！！」

……って絶対引こうとしねえ。

「……清、残念なお知らせ」

「うん？」

「馬鹿が罹らないのはね……風邪なんだよ」

……。

馬鹿でも風邪位なと思う。

「……………大丈夫！！ オレはそー簡単に病気に罹らねーぞ！」

じゃあ最初の間は何だったーんだ。

「……じゅーにい、馬鹿は風邪引かないなら俺と天も馬鹿になるんだけど」

「お前等は別だから安心しとけ」

剣が入ってなかったのは……まあ、いいか。

「純兄インフルまだだったよねー。うつるよ？ 清も」

「ほっとけ」「だからそー簡単にうつらねーって！！」

一応マスクはしてる。

「うつすよ？」

『止めんか（！！）』

わざわざうつそうとしてどうする。

「けほけほけほけほけほけほ」

『本気でするな！！』

「いぞー忍ー」

「篠ゝ、煽っちゃだめだよ。もっとやれ」

止めるか煽るかどっちかにしやがれ。

「あ、そうだ。お見舞いでリンゴ持ってきた」

「おおっ！ 流石しーちゃん！ 食べていい？」 かぷ

「いいけど食べた後で言うな」
もっともだ。

「……紙の味がするよこのリンゴ」

「そりゃー」

「マスクの上から食べたら……ね〜？」

「漫画じゃあるまいし……。本気かわざとか。」

「あ、そか」

「……本気だったの？」

「まっさかー」

ぐさっ

そんな音が聞こえた。

「え、本気だった？」

「……………うん」 もっしやもっしやもっしや
えーっと……やけ食いか？

「ごめんね〜、忍〜」

「や、いーよいーよ気にしてないから」 はもはもはもはも
忍、それヘタ。

「ええっと……ごめん？」

「いーよいーよいーよいーよ」 がりがりがりがり
忍、それ種。

「なんてね♪」

『おいっ』

「めーえんぎでしょ。……種マズっ」

「お前なー」

「そー簡単にあたしが傷つく訳がない！ スルー力は自信あるよ？」
なんつー奴だ。

「このリンゴおいしーねー。何処で買ったの？」

「あそこ」

「どこさ」

「あそこ」「どこさ」あそこ「どこさ」あそこ」

「純、純」

「あん？」

しゃがみながら服を引っ張らないで欲しい。

「ほんとーに、忍は病人なのか？」

「一応な」

病気になっても食欲あるし、喋るし動くし。

……何処が病人だよ。

「うーん……ひよつとして、オレ等安眠妨害中？」

「ぜってえ違う」

忍が病気になって昼間に寝たことなんて見たことねえ。

「でもま、大声が頭には響くかもな？ ついでに言うとお前うつるから帰れ」

「オレだけか！？」

「いや、あの二人も帰るよう言うけど」

「わーったよー。おーい？　しのさく帰んぞー」

混ぜるか……。

つかお前が言うのかよ。

「え？」「何で？」

「悪化させたら後味わりーだろ、治ってから来ようぜ」

妹を説得する兄かお前は。

『それ見舞いって言わない』

……違うか。説得できてねえ。

「……………」と、とにかくっ！忍は本とは安静にしとかなきゃいけないんだから「えー」忍「《お前》が言うな！安静にしとけよ！」

ぜんっぜん話が進まねえ。

「分かったよー。ありがとーね？」

「へっ？　あ、ん。ほら行くぞさくしの」

「順番が変わってる」

「どーでもいいーだろーがそこは！」

しのさくの方が言いやすそうだったんだけどな。

「お邪魔しました」

「治ったら電話してよ」

「はい。ありがとねー」

「ちゃんと安静にしてろよー」

……って言ってもらったつーのに。

「何でゲームなんかしてんだテメェは」

「暇なんだもん」

48 おみまい（後書き）

今流行のインフル、皆様お気を付けください。
流行には疎いのに流行のインフルな呪理阿でした……。

49 家庭内追いかけて

「だから安静にしてろってのに！」

「やだやだやだあ、暇だもん！」

『うわゝあ』

光ですゝ。

今ねゝ、純お兄ちゃんとお姉ちゃんが追いかけてっこしてるんだよゝ。

お姉ちゃんもう治ってるんじゃないのかなゝ？

でもまだ熱下がってないのかゝ。

37℃代って言ってたからゝ。

「ったく、これだからテメエはただの風邪でも回復に三日はかかんだ。アホ！」

「むっ、アホとはなんだ！」

「標準語だから馬鹿以上、だ！」

関西だったらアホより馬鹿の方がこたえるんだったよねゝ。

「にーちゃん、ねーちゃん、オレも参加してもいいーかっ！？」

「お前はこれを何だと思ってんだ」

「へっ！？ 追いかけてっこじゃねーのか！？」

違ったのゝ！？

「……………追いかけてっこ言えばそーか。うん、そーだね……………うわっ！？」

純お兄ちゃんの足払いゝ。

「捕まえた。寝ろ。無理して」

「えーっ」

無理してっ……………。

あゝ。連行されちゃったゝ。担がれてゝ。

あんなのって普通お姫様だっこじゃないのゝ！？

「忍ゝ、お薬ゝ。吸う時間でしょゝ？」

「ダメだぜ母さん！ 麻薬は二十歳になってからだっ！！」
べしっ

「それは酒と煙草だ。麻薬違う。第一お袋が言ってんのはインフルの薬」

「……だからってそんな力いっぱいはたかなくてもいいと思うんだ
オレは」

「手加減したけど」

手加減してそれなんだね。

「純兄ー、おっかけっこの続きしよっ！」

「デメエな……」

純お兄ちゃん、疲れてるみたいだね。

「寝てろつつってんだろ」

「ヤだ」

どさっ

大外狩り。

またお姉ちゃん捕まっちゃった。

「布団に突っ込んででもすぐ出ちゃうけどいーの？」

「睡眠薬でも買って来てやろうか？」

純お兄ちゃん。

買ってきてもお姉ちゃんが飲まなかったら意味無いよ。

リングの中にでも埋め込むつもりかな？

「てい」

どすっ

「つつ」

お姉ちゃんの膝蹴りが純お兄ちゃんの鳩尾に命中。
痛そ。

「純兄、油断大敵だよ」

「追いかけてっこか！？ オレも混ーぜてっ
剣くんだ。」

頭に鎌が食い込んでるのは気のせいだよ。

「ひいねえ、気のせいじゃないよ」

「……………気のせいにさせて〜？」

剣くんが人間だったらとつくに死んでるくらい出血してるんだから〜。

ついでに左手凍ってるんだから〜。

「……………しーねえ病気じゃないの」

「一応ねー」

「……………クス「いいですいいですいいですって」……………これはまともこれ『は』って……………」

「……………ちゃんと動物実験してあるから」

「そっ！ 斬にしては珍しすぎる事に成功したんだぜ！」

「へえ〜っ」

「……………あれ……………」

「天ちゃん〜」

「ん？」

「動物実験の動物って……………」

「もちろん剣」

「やっぱりね……………」

「……………はい」

「ありがとーね」

あゝ、クスリ飲んだお姉ちゃんの顔が『うえっ』って言ってる〜。
不味いんだね〜。

「おかーさん、体温計貸してー」

「36.5℃だ。治った!？」

「舌が痺れたりとかは？」

「……………岳お兄ちゃん〜。

そんな普段見せない……………と言うか殆ど見たこと無いマジメな顔して聞かなくても〜。

「よし！ 純兄、もう一回！
……まだやるの？」

50 第二回！ 何と読むでしょう？

「てけてーん！ 第二回、何と読むでしょうの時間です」
「どういう時間なの？」

光です。

また岳お兄ちゃんがさっきみたいなこと言い出したんだよ。
第一回っていつだったっけ……。
一ヶ月以上前だったような気がするな。

「第一問！！ 『晴朝』 分かる人！」

「ほーい。『晴朝』 ↓ 『せいちょう』 で『成長』！」

「正解！ ……見破られない自信あったんだけど……」
「そうなの？」

「じゃ、あたしやるね？ はいっ 『音卵酸』」

おと？ うさぎ？ さん？

あ。

「『おとうさん』 だ」

「ぴんぽん！」

「読んだ？」

「読んでない（よ）」

「しくしくしくしく」

三十六。

「次私ね」

『馬寝輝根子』

「馬が寝ながら輝き根元で子を産んだ！」
別のものになってるね。

「まねきねこ……ですか？」

「ぴんぽん」

……て。

『誰（！）！？』

よし、命名！

スケルトン人間さん！

「わたくし……こういう者ですが……」

こういう者さんか……。

「……光！、何納得してんの？」

「すっげー、半透明な名刺だっ」

『酔化瑠豚』さん？

「……すける とん？」

「初対面で呼び捨てですか……すける とんではありません……」

「わかった！すけ るとんだなっ！！」

「いいえ……す けるとんです……」

『名字短っ！』

す、なんて名字初めて聞いた。

「違います……す、が名前で、けるとんが名字です……」

「いや、それにしても名前短いし」

そうだよ。お姉ちゃんの言うとおり。

「あっ！ いたっ！ 水功弾っ！！」

どたたたたたたたたたたたたたた

……剣くん。

まだ寒いんだから水の弾乱射は止めて欲しいな？

あ、何発かはあたったらしいね。

すさん居なくなっちゃった。

「わお、すげーもんが見れた」

……誰？

「さては貴様、泥ぼ「違う！」何だ」

「あーっ！」

お姉ちゃん、突然大声出されたら耳が痛いよ。

「いつかのサンゴのおっちゃん「誰がおっちゃんじゃ！」違うのかっ！？」

「ちゃうわ！」

「……関西人？」

「違う！」

「火星人!？」

「もっと違う！」

火星に人間なんて居ないんじゃない？」

「五月蠅い」

『ごめんなさい』

うわー、お姉ちゃんと息ピッタリだー。

「で、何しに来たんだ産後のおっさん」

「産後ちがああう!!」

「……………間違えた。サンゴのおっさん」

「どわーからおっさん違うとゆーに！」

「年は!？」

「20」

うーん……………。

『やっぱりおっさんだ(ー)』

「ちょっ!？ 今年成人式迎えたばっかだったのに!？ まだ20

だぜ!？」

「あたしはもう14だよ」

「……………だーっ! どーいー返せっちゅーんだ！」

言い返さなくていいと思うんだけどー。

「ふんっもーいーよーだおっさんでー(20になったら言い返したる)」

「で、結局何しに来たのさサンゴの兄ちゃん」

「お前せーかくわりーな!？」

「えへん」

「褒めてねえっ！」

……………ぜーんぜん話が進まないんだけどー。

「何しに来たのってさっきから聞いてんだけど」

「バイトで不思議現象の写真を」

「使い捨てカメラで？」

「そお。使い捨てカメラ『卯津螺変』」

……『うつらへん』？

なんか胡散臭いね。

「ねー、不法侵入者」

「誰が不法侵入者だ！」

「ピンポン聞こえなかったしー」

「うっ、じゃな！」

逃げた。

「あれ？ 何か落ちてる」

学生手帳？

「あれ、これって比較的近所の大学じゃん」

名前は……『苑土宇溝次』

……『えんどう こうじ』でいいのかな。

オマケ

「……写って、無い!？」

「そりゃーお客さん、使い捨てカメラ『卯津螺変』は写らないカメラですから」

「はあ!？ それカメラって言わない……」

「そりゃー……ドッキリように作られたうち限定の面白カメラですからして……」

「なら普通のカメラと同じ棚に並べるなよ！」

溝次さんドンマイ。

50 第二回！ 何と読むでしょう？（後書き）

まさかのサンゴの兄ちゃん再登場！。

忍と言い合いを始めたら止めにくい……。。

51 たまたま

すぽんっぽんっこんっとなんとと……
忍でーす。

今天と剣がスーパーボールで遊んでるのを見物中。

「すげーっ、めちゃくちゃ跳ねる！」

君が床にボールを叩きつける力はハンパなかったからねえ。

「よしっ、もう一回！」

すぽんっぽんっかんっとなんぽすっこんっがちゃ

「あ、純兄ー」

「……何してんだ」

えー？

スーパーボールに当たらないように本棚の上に乗ってるだけなんだけど。

「何かおかしい？」

「下りろ。つぶれたらどうする」

「ひどい。そこまで重くない！」

「重さが全く無いとでも？」

それじゃ幽霊だよ。

「あっ！　じゅうに危ない」

「ん？」

あ、スーパーボールが純兄の後頭部に……

当らなかった。

変わりに純兄の横をすり抜けてこっちに……って！

こんっ

「いたっ」

意外と痛い、スーパーボールの直撃。

「んなトコに乗ってなかったら避けられたかもな」

「うー」

「しいねえ、ごめん」

うんうん、今は天が投げた奴だったんだねー。
剣だったらこれよりも強いのかー。

「やーい、ノーコン、ノーコン」

「ん？」

「……何でも無いでーす」

天、怖い。

だってね、だってね。

にっこり笑って大鎌構えてたんだよ!?

恐怖以外の何者でもないよ!

漫画や小説じゃありふれてるけど本気で怖いよ!?

「あ、こんな球発見」

あんな恐怖の笑みした後に戻られてもやっぱりさっきの恐怖の方が勝るねー。

ちなみに天が見つけたのはピンポン玉。

何故あるのかは不明。

「剣」

「ははははいっ!? なーんでございましょう天おねーさま!?!」

剣いそれで男かー。

おねーさまて……。

あ、そか。天は剣よか年上だったっけ。

「てい」

ちよつと待て! そのラケット何処から出した!?

しかも何故テニスラケット!?

「あれはバトミントンのラケットだと思うけど」

うっ。ちよつと間違えたただけだ。

「いたっ」

あ、打たれたピン球が剣の眉間に直撃。

「んにゃろ何すんだ!」

「しかえし」

「んじゃーオレは……てえっ」

野球ボール……硬式の。

どっから持ってきた!?

って言うかピン球の仕返しでそれってつり合わないよ!

ぴきぴきぴきっ

……こおたー。

「お帰り、斬」

「……ただいま」

ちなみに、さっきまで斬は薬草取りに行っていました。

「あらゝお帰りゝ、斬くん♪ 何とって来たのゝ?」

「……ナズナとか土筆とか……たんぽぽもあった」

訂正。野草取りだ。

「あらあらゝ、助かるわゝ」

……今日の晩ご飯は野草の天ぷらに土筆の味噌汁かな?

「……何、してた」

「えーっと……球の投げ&打ち合い?」

「……こんなの落ちてた」

『……………』

斬が出したもの。

ボーリングの球。

何処にあった!?!? そして何処に持っていた!?!?

52 引越し来ました

「……あれ、お隣さん引越しすんの？」

「違うよ、引越して来たんだよ」

「……え？」

「忍です。」

ベランダで日向ぼっこしてたらね、お隣に引越しトラックが来たんだよ。

「お隣住んでたじゃん。あの人等はどーすんの」

「だから。お姉ちゃんがインフルしてる間に引越しちゃったんだよ」

「初耳ですが。」

「終業式の日だよ。ほら、お姉ちゃんのお友達が来た日」

「あの日!？」

気付かなかったのは回りが五月蠅かったからとか？

「でも、どんな人が来たんだろうね」

「うーん……おすそ分けとかくれるおばーちゃん」

「……それお姉ちゃんの来て欲しい人でしょう？」

「ばれたか。」

あ、煮物とかおすそ分けしてくれるおばーちゃん居たらな。

「同年のいい子な女の子居るかな」

「光……友達欲しいのね」

も、昼休み寝てばかりだし、話しかけたりとかしないし。

話しかけられるときは「〇〇貸して？」がお決まりだし。

うーん……まだこの状態か。

「はーちゃんみたいなのがいいな」

はーちゃんって言うのはね、前山口に住んでた時のお隣さんで、
本名海^{うみなかはる}中春ちゃん。

光といっつも一緒に……探検しながら落とし穴等罠を仕掛け……。

「ねー光。はーちゃんという子にどういう繋がりがあるか知りたいなー」

「えー、そんなの言わなくても分かるでしょー」
分からないから聞いているんだけどな。

「話しやすいでしょー、明るいでしょー、言いたいことズバって言うっちゃうでしょー、悪い子にはお仕置きするでしょー」
そのお仕置きがとてつもなく怖いんだけど。

「あー、荷物入れ終わったみたいー」
トラックが消えてる。

ピンポン

「はいはーいー」

……………。

「光、今ピンポン押した人、こっから見えるけどさー」

「はーちゃんー!」

「やっぱりか!」

どーりで似てると思った! 3年くらいじゃ人ってそんなに変わらないね!

「ひーちゃんっ!」

「あらー! あららららー!」

……おかーさん出てくるのおそ……。

「……何の声だ?」

「純兄っいつの間に!」? どーでもいーけど海中家が引越してきたよ」

「……………マジで?」

マジです。

「よっ」

「出たあ!」

いつの間に入ってきた!?

純兄の後ろで片手挙げてる奴!

「ひでえ。幽霊扱いか?」

「そりゃーいつの間にか入っていつの間にか背後に立ってるんだもん」

「……………誰だ」

え。

「純兄ー、覚えて無くても何も困らないけど「おい」覚えといてあげようよー。な……………な……………あれ、何だっけ？」

はーちゃんの兄。

これくらいしか覚えてないんだけど。

「ひでえ……………夏^{なつ}だよ、馬鹿」

ああ！

「なっくんだ！」

「そ。純、意外とオメー記憶力悪い？」

「人の不幸を笑い、その笑いをと切らせた奴を片っ端から屍にしていくような奴に知り合いは居ない」

しっかり覚えてるんじゃないか。

「人の不幸は蜜の味ってな」

最悪だこの人。

「……………変わってねえ……………」

多少は変わってることを期待してたんだ。
引越し直前まで笑われたからなく。

違う、大爆笑されたんだ。

「で、なっくん等はどーしてここに？」

「親父の気分」

『おい』

「と親父の会社の都合」

……………良かった。マトモな理由があったか。

「忍々純々なっくん」

『何？』

「なっくんとはーちゃん家が落着くまで海中家泊まることになったからね」

……は？

『きゃーやったねーひーちゃん（はーちゃん）！
いや、下から聞こえてくるこの声はほっとして。
スペースあるの？』

53 コンビニにて

「なっくん何で鉛筆なの？ シャーペンの方が楽じゃない？」

「どーせすぐ失くすから」

「失くすなよ」

純だ。

夏が引越の時に文房具を失くしたとか言うから、自分のシャー芯買うついでに案内をしている。

夏は異常なまでに物を失くすし、探すのも下手だから二年の一年間で消しゴムは14個、鉛筆は19本失くしたとか。

……小学の時は精々一年に十個以内だったのに。

「あれ、忍に純くんと……誰かさんだ」

「あ、桜！」

「俺は誰かさん呼ばわりか……」

桜からしたら完全に誰かさんだろうが。

「桜も文房具買いに？」

「ううん、お母さんにお使い頼まれちゃって。賞味期限切れ直前のものとか買いに来たんだ」

賞味期限切れ直前って。

「あ、ところで、その後ろの誰かさんだあれ？」

「なっくんだよ。山口に住んでた時のお隣さん。で、何故か今もお隣さん」

「へえ、じゃあ学校で会えるのかな？」

会わなくていいと思う。

「……なっくん、水中だよな？」

「水中？ あ、水ヶ丘中の略か。うん」

「分かった、じゃあまたね」

「うん、じゃね」

「……可愛い娘だこな、純？」

何故そこで俺にふる。

「で？　だから何だ」

「学校の友達だろ？　今の。何か親しそうだった」

「俺は一言も喋ってないんだが」

「最初に純って名前で呼んでたよな」

「だから何なんだ、ってのに。」

「あれ、忍に純じゃん。何してんの？」

「あ、しーちゃん。見ての通り買物でーす」

「……そちの純を問い詰めてるっぽいのは？」

「なっくん。別に問い詰めてる訳じゃないと思うよ、多分（きつと、恐らく）」

きつと、恐らくって聞こえてるんだけど。

「しーちゃんは？　何か買いに来たの？」

「いや、あたしは母さんに弁当持ってきただけ。今朝忘れて行ったから」

「そっか、しーちゃんのおかーさんここで働いてたね」

「そゆこと、じゃな」

「ばいばーい」

……この調子だと清まで来そうだな。

ま、それはねえか。

「純……今度は呼び捨てだったな」

「さっきから何なんだ。意味分かんねえ」

「友達か？」

「ん、まあな」

忍の、の方が正しいけど。

「…………お前さー、男の友達居ねえの？」

何でそうなる。

「居るっちゃ居るけど」

五月蠅いのが。

「よーっ！　じゅしの！」

……出た。

「毎回毎回混ぜるな」

「何だい？ 混ぜるな危険？ 洗剤じゃねーんだからいーじゃん」
理由が訳分からん。

「およ、その後ろのは？」

「夏。前に住んでた所で隣だったんだけど……何故かまた隣に引越してきた奴」

偶然とは思えねえんだけどな、正直。

「へーっ、オレは清つつーんだ、よろしくな、夏！」

「あ、よろしく。……純、お前友達居たんだな」
どういう意味だ。

「あ、ところでさ、篠知らね？ アイツ弁当の箸忘れて行きやがってさー……一応篠の母ちゃんには届けたけど」

「篠？ さっきここに居たよ？」

「えーっ、まさかのすれ違い！？ ちえっ、何かおごらせようと思っただのに」

汚ねえ奴だ。

「それ位で篠は奢ったりしねえと思うけど」

「二十五回目なんだよ！ そんだけやったら流石に……」

「二十五回目！？ そんなに忘れてったんだな……」

……お前はそれ以上に物を失くしてると思うけど？

54 お雛様の過去

『……何で俺まで……』

「純兄ー、なっくん、岳、それ五回目だよ」

「そうだよっ！ いい加減あきらめてちゃんとやってよー！」

「うんうん」

忍でーす。

今皆で雛人形の片づけをしてるんだ。

何かほんつとに今更だよね。

確か出したのは二月の終わり、一ヶ月以上出しっぱなしだったんだなー。

「もういつそ年中出しっぱでよくね？」

「または最初から出さないか」

それじゃ雛人形ある意味無いでしょ。

「雛人形を片付けるのが遅いとお嫁に行くのが遅くなるんだよ？」

「そーだよっ！ 忍ちゃんとひーちゃんがお嫁に行くのがお婆ちゃんになってからになっちゃたらどうすんの！」

それはいくらなんでも遅すぎると思うんだけど、はーちゃん？

「光はともかく、忍なら年中出しっぱでもいいじゃねえか」

「ん？ 妹はやらんぞーって？」

光の立場は。

「いや、忍を貰おうなんて奴いねえだろと思って」

「純兄酷っ！！」

なっくん、大爆笑。

あたしは全然面白くないんだけど？

「しっかしなー、誰だー？ 七段飾りがいいなんて言った奴」

「はーい」

犯人はすぐに名乗り出た。

このお雛様おばーちゃんに貰ったんだよね、光が駄々こねて。

それってくれるおばーちゃんもおばーちゃんだけど。

「あ、コイツの首、紅いのが付いてる」

「キャ――――ッ！！ 血！？ 血なの！？」

はーちゃん……悲鳴が耳に響きます。

「人形が血い出すわけねえじゃん。ペンのインクだよ」

「なんだあ、良かった。でも何でそんなところに……」

『……………』

ねえ、純兄となっくんが視線を逸らしたような気がするんだけど。

「純お兄ちゃーん？」「お兄ちゃーん？」

あ、気がしたんじゃないかって本当に逸らしてた。

「純お兄ちゃん達がやったんだー！」

「ひっどーい！ ウチもよく見てたのに！！」

『その時のお話、あるよね（ゝ）！？』

二人とも、顔近いよ。

その笑顔がとっても、素晴らしく怖いよ。

ん？ あたしは怒らないのかって？

あたしは乙女じゃないもーん、雛人形そこまで大事にしてないもーん。

……お雛様崇らないで。

「分かった分かった！！ 分かったから、顔近い！」

五年前……。

「じゅんおにいちちゃん、おひなさまかざるのでつだってー！」

「おにいちちゃんもだよ！」

『えー』

『えーじゃない！ おひなまつりはおんなのこのいうこときくんだよ（ゝ）！！』

光、はーちゃん、当時四歳。

言い出したらなかなかしつっこいお年頃。

「ちえっ、……あれ、赤のサインペンめっけ」

「本とだーっ！ ……ね、ね、ちよっとイタズラ♪」

「気付かれねーよな、多分」

忍、純、夏、当時九歳。

いたずら真っ盛り。

ちよっとしたいいたずら心で人形の一つの首に血の落書き。

子どもとは案外グロい落書きが好きなのだ。

そして気付かれぬまま（何故！？）……

先程自爆。

……あれっ！？

あたしも共犯！？

「お姉ちゃん？」「忍ちゃん？」

キヤーッ！？

55 お

「おみかん！ おふとん！ おしんぶん！！」

「……『お』はいらない」

「いいの！」

いいんだ？

岳でーい。

今菜美が遊びに来てんだ。

神谷はスイミングだって。

最近何でも『お』を付けるのが菜美のマイブームらしい。

「天ちゃん、菜美ちゃんって斬くん見えてるね」

「小さい子は皆見えるよ。大きくなったら見えなくなっちゃうのが普通だけど」

「そっか、純お兄ちゃんは普通じゃないんだね」

ここにーちゃんが居なくて良かった。

あ、にーちゃんはねーちゃんと一緒になっくんとはーちゃんとの手伝いに行ってたんだ。

オレ？ めんどくさかったから行かなかった！

光は菜美の面倒見るためな。

「おぼしょこん！ おりんご！ お……えーと、えーと……おはこ
！」

「……十八番？」

菜美が言ってるのは『お箱』だと思うけど。

「菜美、それは箱じゃなくてプリンターだぜ」

「おぷいんた？ おぷいん！ おぷいんたべたいな」

おぷいん？ おぷいん……おぷりん？

プリンか！！

わかるとちよっと嬉しい。

「岳に、連想ゲーム化してね？」

「してるな、うん」

プリンターからプリンになった。

「たべたいなーたべたいなー、おたべたいなー」

「……だから、『お』はいらない」

「こまかえこといってゆとはげゆよ？」

菜美……何処で覚えた、そんな言葉。

「……じゃあ天はもうハゲ「どういう意味!？」……そのままの意味」

斬……確かに、確かに細かい事言ってるのは天だなあ。

「天ちゃんはまだまだハゲないよ」

「……ひいねえ、それって将来ハゲるって意味？」

「はうっ!？」 そんなつもりじゃ」

そんなつもりだったんだろ。

目が笑ってるぜ」。

「おいかり? おちちゆいてー、おそらたん」

ついに人の名前にまで『お』を付けるようになったか。

でも天は『お』を付けてもあんま違和感ねーな。

お空って言うし。

「ほらほら、おちついてー、お天たん」

「お前が言うな!」

みしっ

おー、毎度の事ながら痛そー……。

天の鎌ってしっかり研いであるから先っぽもすっごく尖ってたし。

「酷い」

「おいしい? おつゆぎたん」

「天の発音はちゃんとしてたってのにー。オレは剣だい、つゆぎじやねーよー」

剣ー、床にのの字を書くなー。

キノコを生やすなー。

食べられるキノコならOK。

55 お（後書き）

……しまった。

奈津と夏って読み方が同じだ……。

奈津の存在を忘れてた訳じゃないですよ！

ええ、ちよつと覚えてなかっただけです！

……あれ？

56 えいぷりる

「ね〜お姉ちゃん〜」

「ん〜?」

「バナナの皮で滑って転ぶ人って本当に居るんだね〜」
忍です。

暇で暇でしよがなかつた所に光がこんなことを言ってきました。
「バナナの皮で滑って転ぶ人か〜。小学の時は給食でバナナが出る
たびに大量発生してたな」

わざわざ教室の後ろにバナナの皮を蛸みたいに置いてその上を
走るんだよ。

男子の半分はやってたんじゃないかなー。

純兄はやってないけど。ノリの悪いやつめ。

「そうじゃなくてね〜、学校から帰る時に〜」
ちなみに今日は離任式でした。あしからず。

「補導のど真ん中にバナナの皮が落ちてたのね〜、それで〜、ジヨ
ギングしてた人が滑って転んで頭打って救急車で運ばれちゃったん
だよ〜」

ジヨギングして滑って転んで頭打って救急車で運ばれた〜?

忙しい人だね〜。流石現代社会?

違うか。

「嘘だけど〜」

「嘘!〜?」

何とまあ現実味溢れた……。

全ッ然現実味ないじゃん。

「今日はエイプリルフルだも〜ん〜。岳お兄ちゃんも引っかかっ
たんだよ〜」

あ〜……そう言えばさつき岳が『翔も修也も古閑も引っかかった
のに何で光は引っかからねーんだー! しかも逆に引っ掛けられる

とはこれいかに!?!』って叫んでたな!。

五月蠅いの何の。

「純お兄ちゃんも引っかかるかな。試してみようっ♪」
いやー、純兄は引っかからないでしょ。

「さあ、どーだろな?」

「突然出てきて心を読むな!」

肘打ちっ!

ゴン

「いや……声に出てたから」

「嘘っ!?!」

「ピンポン」

膝蹴りっ!

ドスッ

「乱暴だなあ……意外と痛えんだからな?」

「心を読んだお前が悪い!」

「いや、そんな技ないから。あっても俺出来ねえから」

……あれ? じゃ、何で……

「忍ならそう考えると思った」

幼馴染恐るべし。

「ねーちゃんねーちゃん! 今は馬鹿が増える季節だって誰か言ってたけど、ホントだな!?!」

「ん? 何で?」

「頭に花が咲いてる人がいっぱいだ! 目の前にも……」

かかと落としっ!

ゴスッ

「って嘘を考えた……ねーちゃんも引っかかったな!」

我が身を犠牲にした嘘!?!

岳は嘘にどんな執念が……。

「忍ちゃん!」

あ、はーちゃん。

まさかはーちゃんも嘘を言いになざわざ？

「家の片付け、終わったよ！」

あ、報告だったか。

「そっかー。良かったね」

「お兄ちゃんの部屋だけしてないけど！」

「よしなっくん、家に帰って片付けしといて」

「えー」

ぐいぐいぐいぐい

なっくんを押してベランダに。

理由？ なっくんはいつもベランダから入ってくるから。

完全なる不法侵入だね。

「ほらほらーお兄ちゃん、早く片づけした方がいいよー。お母さんの雷がずどーんするから」

起こるとこあい、春夏母。

「ちえっ」

「はーい舌打ちしなーい。じゃねっ！ 忍ちゃん！」

「ほいほーい」

行っちゃった。

「お姉ちゃん。純お兄ちゃんも引っかかったよ！」

「嘘ッ！？」

「嘘」

……あたし、嘘と言う嘘には全て引っかかってるんだけど。

「……しーねえ」「ひいねえー」

あ、天に斬。

……誰かにエイプリルフールの事吹き込まれて引っ掛けに来たんじゃあるまいな。

「どうしたの？」

『お世話になりました』

………は？

「ほえ？」

「学校がね、明日から始まるんだ」

「……学校、全寮制」

……ふむ、こーゆー嘘か。

「だから今日のうちに行つとかなないと間に合わないから……」

「はーいストップ。嘘でしょ」

「……えいぷりるふーるでも、コレ本と」

……………ありゃ？

「ねーちゃんねーちゃんねーちゃん！ 剣がな！ 行っちまうって

！！」

あれれ？

ほんと？

「ねー、学校って、お休み無いの？」

「……春休み、夏休み、秋休み、冬休みなら」

秋休みってあるんだ……。

「その時はー、帰って来るよねー？」

ぱちくり。

そんな効果音がピツタリだな。

「帰って」来て、いいのか？」

「つたりめーだ！ つつか帰って来い！ 絶てーだぞー！」

うんうん。

「ここはあんたらの家うちでしょーが」

『……うん！』

わあ、初めて斬の笑顔見た。

いや、おっそろしい薬持って嬉々としてるのは見たことあるけど

さ……。

あれは黒っぽい紫のオーラが見えるから笑顔に見えない。

「純兄には？」

「もう言ったよ。同じ事、言ってくれた！」

にぱー、こんな効果音つきそう。

「そか」

『行ってきます!』

『行ってらっしゃーい(´)!!』

桜はまだ咲いてないけど。

あの三人がちっちゃな桜の花びらみたいに見えました。

56 えいぷりる（後書き）

と言う訳で死神トリオ、しばらく退場です。

次出てくるのは夏休みかな。覚えていきますように（笑）
なにしろ三歩歩いたら忘れるもので……（鶏？）

57 電話のセールス撃退法

セールス電話撃退法。光の場合。

るるるる……るるるる……がちゃ

「はい、高山で「あ、もしもし、ナンタラ商業のおでんと申しますがペラペラペラペラ」……」

変わった名前だな。

それでもって早口だな。

「ペーラペラペラこのような製品ペラペラ、わが社ペラペラペラペラペラ」

早口言葉だ。

「ペラペラペラところで自宅のポットはペラペラですか？」

えーつと……。

聞き取れないよ。

これって所謂セールス電話ってやつだね。

「何かよく分かりません」

「あ、そうですか、ペラペラペラ」がちゃ。

つーっ、つーっ、つーっ

……あれ、切れちゃった。

忍の場合。

るるるる……るるるる……がちゃ

「はい、高山で「あ、もしもしナンタラ商業のどーたらですが」最後まで言わせてよ」

「ペーラペラペラこのような製品ペラペラ、わが社ペラペラペラペラペラ」

聞いてないな、こいつ。

これがセールス電話か。

初めて聞いたよ。

いきなりがちゃって言うのも可哀想だからちよつとだけ聞いといてあげよ。

「ペーらペらペらペらペらペらペらペらペらペら」

なんだか外国語聞いてる気分になってきたよ。

「ペらペらペらペらペらーペらペらペらペらペらペらペら」
よく息続くな。

「ペらペらペらとところでお宅のポットはペらペらですか？」

いや、んな事言われても意味分かんないし。

んーっと……

「確信はありませんがステンレス製です。それが何か？」

「ペらペらペらペら」

分からんってのに。

「すいませーん、おーい……」「ペらペらペらペら」この電話は現在使われておりません！ 聞こえたよね？ 分かった？」がちゃよし。

次に同じ番号でかかってきたらとってすぐ切ってやろつと。

純の場合。

るるるる……るるるる……

電話？ めんどくせえな……。

るるるる……るるるる……

五月蠅え。誰からだ。

《0120》

ぷっつ

切った。

0120なら知りあいじゃねえだろうしな。

岳の場合。

るるるる……るるるる……がちゃ

「はいっ！ 高山で「あ、もしもし、ナンタラ商業のどーたらと申しますがぺらぺらぺらぺら」誰？」

どーたらって何だよ。

「ぺらぺらぺらぺらぺらぺらぺらぺら」

んー？

早口言葉か？ オレ早口言葉はちょっと苦手なんだよなー。

「ペーらぺらぺらこのような製品ぺらぺら、わが社ぺらぺらぺらぺら」

製品ー？ わが社ー？

あっ！ コレがセールス電話か！ ヘーっ、ヘーっ！

「ぺらぺらぺらとところで自宅のポットはぺらぺらですか？」

ポットお？

「……………」

あー、何か待ってるし、何か言わねえといけねーんだよな。

「もー一度ゆっくりお願いします。聞かねーけど」

「あ、そうですか、それではぺらぺら」がちゃ

……あれっ？ 切れた。

ま、いっか。

58 お霊さん

「へーわだねえ」

お日様ぽかぽか、風はそよそよ。

おっさんうじうじ。

……うん？

『……ぶつぶつ、ぶつぶつ……』

うーん……。

半透明だし、幽霊のかな？

『ぶつぶつぶつぶつ、ぶつぶつぶつぶつ』

ぶつぶつ言いながらプランターの草むしってるけど。

……いや、実態がないからむしれてないけどさ。

『ぶーつぶつぶつぶつ、ぶつぶつ……』

……うん！

こういうのは相手にしないに限る！

純兄がこういうのに迷惑してるのはよく見てたからね。

「さて、光合成終わり！」

いや、あたし植物じゃないから光合成では無いけど。

さて、下手に関わらないためにも家の中に戻ろー……。

『見えてるじゃろ？ 見えてるよな！？ どうしたのって言うてく
れてもいいじゃろ！？』

あー……っと……。

めっちゃったー！

「おじさん、小さいね」

目測145センチ

『ほっとけ！！』

「うん、分かった」

さて、望みどおりほっというてあげましょうか。

『待て！ 何処に行く！』

「だって今ほっとけて言われたから」

『話くらい聞いてくれ！』

「何の？ 『わしの！』 ヤだ『聞け！』 聞いて欲しいなら聞いて欲しいと『言った！！』 あ、そか。うん、それじゃ『待てと言うに！』 ヤだってば『お前に拒否権はな』 あるもーん」

家に入って、窓閉めて、鍵かけて。

これでよし！

『待て〜』

するっ

あー……しまった。

幽霊はドアが閉まってようが壁があるうがすり抜けられるんだっけ。

「てい」

『んぎゃ！？』

対象に霊力がある程度あると無理らしいけど。

だからあたし達は幽霊を殴れるのだ！

『年寄りをもつといたわれ！』

「おじーさん年いくつ」

『わしは爺ではない！』

年寄りなのか年寄りじゃないのかどっちなの！？

「そーですか。どっちでもいいから成仏しなさい」

『いやじやいやじやあ〜！』

駄々っ子かお前は！？

「知り合いの死神でも呼んで差し上げましょうか」
呼べないけど。

『しにがみ？ あ、あの死んだ者の心臓を再び貫きにくるあれか！？ あれでも成仏できるらしいが勘弁してくれ！』
へえ、そんな風にするの。

「大人しく成仏したら呼ばないであげるよ」

『いやーじゃー！ わしや高所恐怖症なんじゃ！ 五階以上にはのぼれんのじゃー！』

高所恐怖症と成仏とどんな関係があるの。

「知ったことか、成仏しなさい」

『高所恐怖症のわしに天へ上れと！？ 鬼か貴様！？』

鬼じゃないよ、人間だよ。

「……成仏の仕方教えてくれるかなー？」

『なんじゃ！ 知らんのか！』

いや普通の人は知らないと思いますが。

『天高く上るのじゃ！ 高く、高く、たか——くな！ 大気圏を過ぎる位まで』

へえ……って、あれ？

「それじゃあ宇宙に行った人全員成仏しちゃうじゃん」

『いや、わしはよく知らんが霊体以外は大丈夫らしい』

ふーん。

「何処で知ったのそんな事」

『……さあ？』

死んだら勝手に分かるようになるのかな？

死神のことかも知ってます。

「へえ。分かった。ありがとう。頑張って上ってね」

『鬼か！？』

「下を見なかったらいいだけでしょ？」

ぽんっ

『その手があったか！』

気付いてなかったの！？

『ありがとな！ それじゃ！』

「うん、ばいばーい」

おじさん？ おじーさん？ どっちでもいいか、は天高く上っていきました。

……あれ、何か聞いて欲しかったんじゃない無かったの？

59 仕分け、中？

「ただいまー」

……親父か。

確か野草採りに行ってたっけ。

純だ。

「純ー、ちょっと仕分け手伝って」

「ヤだ」

めんどくせえ。

「そー言わないで。数多いんだし。どーせ暇だろ
断定？」

ま、事実暇だけど。

「分あったよ……」

「スギナはこっち。よもぎはこっちでカラシナはこっち、ノビルは
こっちね」

「へいへい……」

しかし、量すげえな。

スーパーの袋四袋分位あるんじゃないか？

「えーっと、よもぎ餅の作りかたはー……んぎゃ!？」

「俺にやらせといて親父がやらねえのはどういう事だ？」

「えー、よもぎ餅の作りかた調べてあげてるんじゃない」

俺は頼んでねえ。

「大体よもぎ餅が好きなのは親父だけだろ」

「いや、だってね？ たまたま会った人に『よもぎそんなに摘んで
どうするんですか』って聞かれて『乾燥させて一年分貯めておくん
です』って答えたら……」

貯めて、よもぎ茶にするんだろ？

んな物殆ど誰も飲んでねえじゃねえか……。

「そしたら『あー、そっちですか。私は湯がいてよもぎ餅とかにしますねえ』って。別れてしばらくしてから『……湯がいてって言うてたよなあ……』って思ってた」

よもぎ茶は煎じてるからな。

「あの人はお湯の方を捨てて、俺は葉っぱの方を捨てて……」

「どっちが不自然かと聞かれたら明らかに親父の方だな」

「でしょ？ だからよもぎ餅の作りかたを調べておこうと思って」

……調べて、作るのが面倒だからって結局何もしないんじゃないじゃねえか？

「……って、それを俺に仕分け押付ける理由にすんじゃないじゃねえ」

ばしっ

「親を殴るとはなんちゅー親不孝もんだ！」

「知った事か」

押付けた親父が悪い。

「ちえっ。忍と純はよもぎ餅嫌いだから口に押し込んでやろうと思っただのに」

「それが本音か」

「ななななあゝんの事かなゝあ？」

全部口から出てた……気付いてなかったのか？

「あ、そうそうもぐらの巣があったよ」

話思い切り変えやがった。

「で？ もぐら掘ったのか？」

「ないない。おにぎり持って行って穴にころころ転がしてたらどうする？」

おむすびころりん？

あれで穴の中に居たのはもぐらじゃなくて鼠だろ。

「どうもしねえよ。まず声が聞こえてくる訳ねえだろ」

「声が聞こえてくるまでやってたらどうする？」

はあ？

「単なる馬鹿だろ」

「単なる馬鹿だったらどうする？」

何がしたいんだか。

……とりあえず言い返して欲しいのか？

「単なる馬鹿だったら銀行員にはなれない」

「………ちい」

勝った。

60 ケーキ、ケーキ♪

「はーちゃん、行くよー!」

「おーっ! やっちゃって!」

ぼふっ。

薄力粉の煙が上がった……。

「えーと、次は……混ぜる!」

がちやがちやがちやがちや

おーい、生地が飛んでるー!

夏だ。

少しは箱が残ってるけど、落着いた家の台所でひーちゃんと春が何かを作ってる。

うん、コレがこの二人でなければ微笑ましいのになー……。

「なー、忍、こいつ等を止める手は」

「あると思う?」

だよな……。

「あるけど」

「あるのか!?!」

「だれがないと言った?」

あるとも言ってねえよな?

「で? どうやって止めんだ?」

「あの二人を台所から引き剥がす」

何だ。最初っからやれば良かった。

「とう」

がしっ

「わあっ! お兄ちゃん何するんだよ! 今ケーキ作ってるの!?!」
後ろから抱き上げたただけだろうが。

じたばたすんな! 足が当たって痛い……。

「出来たらお兄ちゃんにもあげるから!?!」

「誰が欲しいと言った!?!」

「いらないとも言っていないじゃん!?!」

俺と同じ言い返し方をすな!

「ねー、離してよー、せっかくはーちゃんと久し振りに一緒に作ってるんだからー」

「ほら! 離せ離せ離せ離せ離せ!?!」

殴るな!

「痛い痛い痛い痛い痛い」

「じゃあ離せばいいのにー」

危険物を食わされるくらいなら殴られる方がマシだ!

「ちよっ、忍、へるぷ」

「女の子に助けを求めるなんて情けないよ、ウチは!」

何故に妹に投げかれにゃならんのだ。

だいたい俺は忍を女の子視してねえし。

「頑張れなっくん、あたしは見てるから」

おまつ、ひでえ!

我が身可愛さに幼馴染を見捨てるか!?

こいつ等のケーキとやらが出来たら大量に突っ込んでやる……。

しかも見てないし。目線は手に持つてる文庫本だし。

「はーなーせー、はーなーせー、はーなーせー」

言い方は間延びするようになったのに動きは激しくなったのは何故。

「えーいー!」

「痛っ」

ひーちゃんに噛み付かれた……。

歯形がくつきり。

しかもかなり痛かった。顎の力すげえ。

「さっ! 続きするよっ!」

「おー!」

止められません。諦めた。

ネバーギブアップ？ 何だそれは。旨いのか？

「あれいれてーこれ入れてー」

「まぜまぜ〜♪」

数十分後

『出来た〜！』

ばんざーい、ばんざーい。

正にそれをやってる。

「はい、お兄ちゃん！！」

「……ども」

見た目は安全なのになあ。

「はい〜、お姉ちゃん〜」

「あんがと」

今回は何が入ってるんだか。

ぱく

………あれ。

「とうとう俺の味覚はおかしくなったか？」

「旨いよー、はーちゃん、光」

『やったー（〜）！』

……あれ、忍が旨いって言うことは別に俺の味覚がおかしくなったわけでは無いんだよね？

「なっくーん、おーい、戻ってこーい」

何処に？

目の前でぶんぶん手え振んの止めろ。

「旨いんでしょー？ 味覚がおかしくなったわけでは無いから安心しなよ」

「お前、何かした？」

「うん」

そこであっさりうなずかれるとは思わなかった。

「あの二人が入れそうな変なものは全て撤去しておいた」

……………全て？

そー言えばまだ家の冷蔵庫とか棚とかにそんなに物は入ってないし、調味料だってちっちゃい容器にってるから移動可能だろうけど。

「純兄も巻き込んで」

「……………そーいや純は？」

「岳に百マス計算の勝負を挑まれて、ずっとやってる」
何やってんだ。

「あれ？ 変なものの撤去したって俺聞いてねえんだけど」
「うん、隠してた」

「何故！？」

気付かなかった俺も俺だけどさ。

「暇つぶし。これじゃ駄目？」

…………俺、殴られ&噛み付かれ損？

61 かくれんぼー

「お姉ちゃん〜ん〜ん！」

「忍ちゃん！」

「忍ー！」

探されてます。

何故探されているかというと、もちろんあたしが隠れているからです。

忍です。

光&はーちゃんの妹コンビにより、ツインテールにされてしまった。

で、見られるの恥ずかしくて逃げ回ってる……と言うか隠れ回ってるというか。

だって絶対似合っていないもん！

さて問題です。

あたしは今どこに隠れているでしょうか？

「しーのーぶー、隠れる事ねえじゃん！」

一旦隠れたら出て行きたくなる。何故？

「あゝ、ここじゃないかな〜」

ぎく。

外から声が。

ぱか

……ぱか？ クローゼット？

小学の時クローゼットに隠れたこともあったな〜。

あそこは見つかりにくかった。

中でやたらリアルなパンダのぬいぐるみを見つけてびっくりしたな……。

しかもそれがおとーさんとおじーちゃんに貰った中国土産って聞いたときは“あいた口がふさがらない”を実行しちゃったな。

「居ないみたい」

「テレビの裏は？ よく隠れてたろ？」

……もう入れないよ。

「おおー！ それがあったかー！」

「行くよひーちゃん！」

「おー！」

……よし。リビング行ったな？

あたしが隠れてるのは和室だからちよつと安心。

がらがらっ

「忍ー、ここだろ」

ぎっくうっ

うわーあ、開いた！ 開いた！

あたしの居る所の扉が開いた！

「……あれ、居ない……。ぜってえここだと思ったのに」
ぱたむ
……ほ。

見つからなかった……。

「お兄ちゃん、居なかったよ！」

「んー……何処行ったあ？」

そー簡単に見つけられると思うなー！

なんたって……

「ちっちゃい時から探すのは下手なくせに隠れるのは虫並に上手い
からなあ……」

余計な一言が入ったよ！？

しかもそのたといえ何！？ なんで虫！？

「何やってんだ、テメェ等」

……うげ。

「あ、純！ お前も探すの手伝え！」

「主語を入れろ。何を探すか分かんねえのにどうやって探せと？」

「ツインテールなお姉ちゃんだよー」

光……ツインテールは余計だ。

「……ツインなんたらは置いといて、忍を探せばいいんだな？」

純兄、まさかツインテール知らない？

二つ結びだよー。って、聞こえないか。

「そうそう、それでしつかりからかってやろうという訳だ」

昨日の仕返し！？

それが分かってたから隠れてるんだよ！ 恥ずかしいのもあるけど！

「あ、そ」

うう……純兄の足音が遠ざかって行く……。

ん？ 遠ざかって行く？ 助かった！

今のうちにちよつと移動……。

「いなかったね」

え、ちよ、早いよ！？ 10秒経ってないよ！？

あう……今度は足音が近づいて……！

がらがらっ

きゃー！ 再び開いたー！

「純、そこはもう探したぜ？」

よし、いいぞなっくん！ そのまま純兄を別の所に……。

「ひゃうっ！」

足首？ まれたあー！

「……聞こえたか？」

『聞こえた（ゝ）！』

ああ……純兄絶対にやけてる。声がそんな感じだった！

「忍、居んだろ？ 出ろ」

命令形ですかー？

「出ねえと……」

痛い痛い痛い痛い！ 手に力入れないで！

「分かったよ！ もお！」

「牛？」

違う！

「おお、本当にツインテールだ」

「でもよく崩れなかったね。布団に潜ってたのに」
あたしが隠れてたのは押入れの布団の中。

分かった人！

……じゃなくて、恥ずかしいよー！

「へえ、似あってんじゃねえか」

純兄からそんな言葉が飛び出すとは夢のまた夢のまた夢のまた夢にも思わなかった。

「餓鬼っぽくてよ」

「純兄酷い！」

おおいに予想してたけど！

「たーいまっ！」

「あー、岳お兄ちゃんだー」

うわー、岳来るなー！

「あれ、ねーちゃんどしたのそれ」
思ったそばから！

「もー、恥ずかしいんだから来ないでよう」

「え？ 忍恥ずいのそれ」

「なっくん、やってみる？」

ちっちゃくて角みたいなのなら出来るんじゃない？

「結構です」

「……………なー」

なんだよ岳。

「んなに恥ずかしいんなら解けば良かったんじゃねーの？」

「……………あゝ」

しまったあああああああ！！

62 台所は買だらけ？

かちゃかちゃ

「純兄手伝ってくれてもいいーのに……」

忍でーす。

今日から小学生達は学校。

おかーさんは今日仕事。

純兄とお留守番中です。

で、おかーさんに頼まれた台所の片付けしてんの。

食器を食器洗浄機に入れて、後はシンクを拭くだけだね。

……あ、バターでべったりなバターナイフ発見。

バター流しといたほうがいいよね、これ。

ジャーン

よし。

……手がべたついたー。

石鹼で洗わないと取れないよねー。

固体石鹼は食器洗いようだから、液体石鹼ー、と。

ピシュッ

「きゃわっ！」

何これ！？

頭押したらこっちに向かって飛んできたよ！？

何の罨！？

「忍？ 腐ったみかんでも踏み潰したか？」

「違うよ！」

って言うか何で腐ったみかんなの！？

「純兄、この石鹼の頭、押してみて」

「石鹼？ これがどうした？」

ピシュッ

「うお」

「わっ！」

またかかったあ！

「純兄なんで避けるの！？」

って言うか何で避けられたの！？

「いや、普通避けるだろ。予想してたし。テメエも避けたろ？
避け切れなかったみてえだけど」

む。

確かに避けたけどさ。顔面直撃だけは避けたよ。

「何で分かったの？」

「テメエの服の肩んとこ。水がかかったみたいないな跡がある」
んむう。

「ちえっ。後は……コップだけか」

軽く流して、入れて。食器終わり、と。

「……純兄何？」

視線を感じます。

「いや、背伸びしないと食洗機に届かねえんだな、と思っただけ」
……どーせあたしはチビだもーん！

純兄の背が高すぎるんだもんだ！

まだまだ成長期だもん、あたし。

あ、食器洗い機の蓋、閉めとかないと。

バタン ガンツドツガシャン！

『！？』

た、たらい！？

たらいが降ってきた！？

あー……、食器洗い機の上においてたから……。

「びっくりしたあ……」

何の罰ゲーム？

いや、頭に直撃したわけじゃないけど。

「確認しとけよ……。よく置いてあんだから。鍋だったらどうすんだよ」

「純兄が見てくれてもよかったのに」
「見えるでしょー？」

「……普段からそこに置いてあるもんだから、違和感とか無くて
ごもつとも。」

後はシンク拭くだけかー。

さて、何が見つかるかな？

前やった時にはポツ〇ーを発見したんだよ。

多分……と言うか絶対おかーさんのつまみ食い用。
プスッ

「いった!？」

「今度は何だ」

「剣山!」

「はあっ!？」

あの生け花とかに使うあれ!

針がいっぱい生えてる奴!

「何でこんな所に……」

「……………あ」

ん?

ゴンッ

「……ったあ……」

何か硬いものが頭に直撃……。

「大丈夫か？」

「まな板!？ 純兄なんで教えてくれなかったの!？」

「一応当たらないように祈ってはおいた」

「意味ないし! 言ってくれた方がずっといいし!」
しかも一応って。

「気付いた0.01秒後には当たってたからな」

0.01秒の祈りが通じるわけも無いしね。

「に、しても何でこんなに罠だらけなの?」

「……最初のやつ以外は注意してれば避けられたけどな」

.....不注意が原因だ、と？

63 新クラスは

「あつ、また同じクラスだ！」

「……………またか」

普通兄弟は離されるもんじゃねえのか？

純だ。

クラス発表の表は目の前にあつて。

それを忍と夏と一緒に見てるわけだ。

「あ、俺も一組だ」

「なつくんも？ あ、桜もあつた！ しーちゃんも！ あ、清も」

また全員同じかよ……。

清の時だけでもいいような言い方なんだな。

「おはよう！」

「あ、桜ー、同じクラスだよ、一組！」

「本と？ 良かったー！」

「よ」

「おはー、しじさな！」

混ぜんなってのに。

「オレ探してくれた？」

「探しては無いけど見つけた。偶然。しーちゃんは探したけど。清は偶然」

そこを強調してやらなくても。

「しーちゃんも清も一組だよ！」

「皆一緒。転校生君も含めて」

「転校生？」 「転校生？」

『転校生』を名前にするな。

「あーっ！ 夏！ お前居たのか！？」

「人を影が薄いみたいに言うな！」

「というのは冗談で」

夏、こけるな。

最初の『しじさな』の最後の『な』はテメエだろうが。

「ね、一組ってことはさ、担任って……」

「……しーちゃん。せつつつかく忘れてたのに思い出させないでくれるかな？」

一年、二年と一組の担任は嫌われてる教師なんだよな……。

嫌われてる理由は忘れたが。

ちなみにその教師、覚えてる人は限りなく少ないと思うが、前に『発音が悪い』って言った英語教師な。

「さ、お祈りの時間で。す。牡蠣^{かきのたね}野胤先生が担任にならないようお祈りしましょう」

なむなむ。

……俺と夏はしてねえけど。

「純、柿の種って人の名前か？」

字が違う。

「一応」

めんどくせえから訂正しねえけど。

黒板に名前書くときだって長い何の……と、誰かが言ってた。

しかも自分で自分の名前書き間違えることもあるらしい。

蠣^{かき}ってややこしいしな。

「無無明亦無無明尽乃至無老至亦無老死尽無苦集滅道無智亦無得以無所得故……」

「忍、祈るのにはお経要らないの」

「やっぱり？ 半分まで来た所でそう思った」
遅っ。

「とゆー訳で、先生のこと知ってるとは思いますがー、転校生も居るので一応自己紹介させてもらおうと、牡蠣野胤です。柿の種では無い。いいねー」

結局、忍達の祈り（？）も空しく、担任は柿の種、もとい牡蠣野
胤だった。

『ハア……』

この溜息のシンクロ率すげえ。

64 喧嘩を売る椅子

「痛っ」

「ねーちゃんどったの？ 牛乳パックにでも指挟んだ？」

「な訳あるか！」

だよな。

岳でーい。

ねーちゃんがな、牛乳飲もうとして急に指銜えたからどーしたのかなーと思って。

なんて姉思いな弟！

誰か褒めて。

「で、結局どしたの」

「牛乳がしみただけ。昨日学校の椅子に喧嘩売られたんだよ」

牛乳ってしみるんだな。

ていうか

「学校の椅子に喧嘩売られたあ！？ どーやって！？ 椅子って喋るのか！？」

『喧嘩ゝ喧嘩ゝ、喧嘩は要りませんか』……違うか。

「そーじゃなくて、学校の椅子の脚って金属じゃん？」

「うん」

まさか脚が勝手に移動したとか！？ ……違うか。

「で、椅子引く時って椅子の下に手、入れるじゃん？」

「いや、オレ足で引っ張る人」

「……あたしはそうすんの！ で、椅子の下に手、入れたら棘があるって……」

金属に棘！？ 何故！？

「四回くらい引っかかった」

ねーちゃん忘れっぽいしな。

どーでもいい事は。

確か昨日名簿見ながら『これ誰?』って20人位は言ってた。で、その内10人分はにーちゃんに突っ込まれてた。

『一昨年同じクラスだっただろが』って。話を戻そう。

「それさー、椅子の気持ち考えたらさらにムカつくな」

「え? なんで?」

だってさ?

一回目『あ、引っかった』

二回目『あ、まあ引っかかりよった』

三回目『ぷっ、また引っかってやんの』

四回目『まだ引っかかる! アホや』

「……ムカつくね。何気に関西弁だとさらに」
「な?」

あ、ねーちゃん、牛乳パック持つ手に力入れんな!

牛乳の泡出てるぜ!

「うん、ムカつくねー。そうでなくてもムカついたけど」

「ん? じゃー何かしたのか?」

椅子に。

……何かって何を?

「うん、ムカついたからペンチで棘をねじ切っというた」
「でえっ!」

「そのペンチはどこから!」

「鞆の中からだけど? それが何か」

「何でペンチが鞆の中に入ってたんだよ!」

「おかしいだろ!」 普通に考えて!

「うん、しーちゃんと桜におんなじ事言われた」

「そらそーだ。」

光のポーチじゃあるまいし……。

光だって持ってるか怪しいぞペンチって。

「で、結局何でペンチが鞆に入ってたんだ?」

「んーっとねー。卒業式の前の週に何となくどっかで役に立ちそう
な気がして入れた」

で、しっかり役に立ったと。

ねーちゃんの勘ってすげー。

今回以外当たったことねーけど！

65 お花見！　ただし花を見ているかは不明

『花見をしよう！』

つというお父さんとはーちゃん父の言葉で……。

近所の公園にお花見に来ました。

はーちゃん一家と私達一家と、あと仙波家。

合計十四人！

光です。

この公園ね、桜の木がいっぱい植えてあるからお花見する人がいっぱいいるんだよ。

でも見た感じではお花を見てる人は殆ど居ないけどね。

「忍、何でわざわざ木に登る」

「だってこうしないと絶対花見れないもん」

見れないじゃなくて見ないの間違いじゃないのかな？

「じゃあいつその事何処まで上れるかやってみろよ」

「おけー」

「夏、煽るな。本気でやるから」

時既に遅し。お姉ちゃんは既にてっぺん近くまで上ったよ。

「あ、こら神谷！　オレの皿の上のおかず取るな！！」

「このおかずは神谷のだもん。たけるにーちゃんのは……消えた！」

神谷君のおなかの中にね。

「はむはむ、おいしー！　秋^{あき}ちゃん最高」

「……おだてても何も出ないわよ、凜^{りん}」

「おだててないわよ？」

秋ちゃんって言うのははーちゃんのお母さんね。

凜って言うのはお母さんの名前。

幼馴染らしいよ、お母さん達も。

「ひーちゃん、これ美味しいよ！」

……何故めざしが……！？

しかもいつかお兄ちゃんやお姉ちゃんの恐怖の対象になった真っ黒めざし！

「苦くない？」

「んむ？ 苦いけど、それはそれでおいしーよ！」

結局苦いんだね。

……ちよっと実験。

美味しそうだったら食べよう。

「お父さん！」

「はーい？」

口の中に……すぽっ！

「☆#●%\$@○★!？」

……いつかの真っ黒めざし食べたときと同じ反応。

危険物確定！

「はーちゃん、やっぱり苦いみたい」

「ありゃ、そお？ じゃあお兄ちゃんにあげよっと！」

……数秒後。

「さっきの人体実験見られてたみたい」

使えなかったらしい。

「ひかりねえたん、たべゆ？」

……菜美ちゃんの小さいおててに乗っているのは桜の花びらなん

だけど……。

食べられません。

「菜美ちゃん食べたの？」

「ううん、じっけんなの」

何処で覚えたのかな？

「えいっただとっ」「ていつてえっんっ」

「ひーちゃんひーちゃん！ なんだかそーだいな戦いが！」

岳お兄ちゃんと神谷君……。

煮物のこんやくをお箸で取り合っている最中です。

箸が早くてまるでこんやくが浮いてるみたい。

「ね、秋ちゃん。お父さん達何やってるのかな」
お父さん達？

……向こうで草弄ってるけど。

負のオーラを漂わせながら。

「……ほっときなさい」

「分かった。もしかしたら天ぷらのための野草採ってるのかもね」

「どうやったらあれがそう見えるのかしら……」

秋さん……遠い目をしないで？

「しのぶねえたん！ なみ、かあい？」

「うん、かわいいーかわいいー」

「きゃーっ！」

うわ、嬉しそう。

髪に桜の花挿してもらったんだね。

「春ちゃん、光、これ食べない？」

あ、名前は出たけど今まで登場はしてなかった奈津叔母さん
ことなっちゃん。

手に持つてるのは、レアチーズケーキ！

『食べる（！）！』

「はい、どうぞ」

あむあむ……むぐむぐ……美味し。

ガチンッ

………！？

今の何！？ ガチンって言ったよ！？

……スプーン発掘！

何故ケーキの中にスプーンが！？

「なっちゃん、スプーン出てきたよ？」

「あっ！ 昨日無くしたスプーン！ 何処に行ったのかと思ったら

……ケーキの中に入ってたのね。ありがとう！」

……どうやったらケーキの中にスプーンが入るんだろ。

「だだだだだだだ!」 「ととととととと!」

「両者一步も譲らない! さて、さつま芋はどちらの手に……じゃなくて腹に収まるのか!」

あれ、岳お兄ちゃんと神谷君がとりあってたのはこんにくじやなかったつけ。

後いつの間にはーちゃんは実況を?

「さ、ひーちゃん食べよ!」

「いつの間にここへ!?!」

瞬間移動?!? テレポーション?!?

「ふっふっふ……実はあの二人の実況をする振りをして……さつま芋とリングの甘煮をくすねて来たのだ!」

レーズン入り!

「はーちゃんでかしたー! お主も悪よの」

「失敬な。我輩を愚弄すむぐむぐ」

台詞最後まで言おまぐまぐ。

おいし♪

65 お花見！ ただし花を見ているかは不明（後書き）

お花見の時にちゃんと桜を見るのは何人くらいだろう……。最近浮かんだどうでもいい疑問です。

66 迷っちゃった校舎内

「ひーちゃん、何して遊ぶ？」

「ん〜……そうだね〜、あ〜、外でドッチボールやってるみたいだよ〜」

ドッチボール！？ いーね、いーね！

ウチ、ドッチ大好き！

はーちゃんこと春でーっす！

今はお昼休み。何して遊ぶか考えてたの！

「ひーちゃん、行こっ！」

「へ〜？ ……うん〜！」

目指すは運動場！

……………の筈が。

「ここ何処！？」

迷子？ 違う！ ちょっと迷っただけ！

……迷子か。

だってだって！ ウチはこの学校に転校したてなんだもん！

まだ二日目なんだから迷子になって何が悪いの！

「ひーちゃん……？ あれ！？ いない！？」

あ……そっか、早く行きたかったから本気で走っちゃって……。

はぐれちゃったんだね。ドンマイウチ。

いや、『気にするな』じゃないよ！

教室にも帰れない！

落着けウチ。まずは現状把握……は、迷子で、現在地把握しないと。

どーやって？

ここ地図ないよ！

しよーがない。周りに何があるか見てみよう。

前…廊下

後…廊下

左…トイレ（何か臭い）

右…美術室

……分らないよ！

ここのトイレ使わないし！

美術室なんて使ったことあるわけないし！

うー……ん、誰か居たりしないかなあ。

ドアの上のほうは曇ガラスじゃないし。

「よいしょっと……」

誰も居なーい。

接骨像とか気味悪いよ。

……あれ、石膏像だっけ？ まあいいや。

あ、棚の上には絵が乗ってる。

「………きゃあああああ！！！」

モナリザ！？ びっくりした。怖いよ！！

模写かな、さっきの……。

「何？」 「どしたの？」 「幽霊とか！」 「んなアホな……」

あ、人が集まってる……。

「あれ？ はーちゃんじゃねーの。何してんだ？」

「あ、岳くん……。なんでもないよ。ちよつと美術室の中のモナリザにびっくりしただけ！」

ところで岳くん、後ろに息切らした人が居るけどそれは誰なの？

「何だ、モナリザか……モナリザ！？」

「えっ！？ 何！？」

「この学校にモナリザ何て置いてねーよ！？」

……ええええええええ！！

じゃあさっきの何！？ なんなの！？

「馬鹿。おいてあるよ。模写」

「お前が知らないだけだろうが……はあっ」

「そうだよ」

なんだ……びっくりした。

突然人ごみの中から出てきた人たちもびっくりしたけど。

「ばーか、オレだってそれくらい知ってた！ 忘れてただけだ！」

「……覚えてなかったなら同じじゃね？」

同意しまーす！

「あ、それよりはーちゃん、その女子トイレ気をつけろよー」

トイレに気をつける？ どういうこと！？

「花○さんが出るんだってさ！」

………トイレの花○さん！？

「きゃあああああああああ！！」

67 教師の自己紹介……って？

はあ……。

つと、いきなり溜息なんかついて悪い。

今、学年集会中で……なんで教師の話は長いんだろうなと思って。純だ。

「教師の話は長いって言うけどな？」

言っではない。思っただけで。

「教師の話が長いときには三つのパターンがある」

俺の勘違いでなければ今は担当教師の自己紹介だったと思うんだけど。

……何故そんな話になる。

いや、誰かは知ってるからいいけど。

学年主任の池中。一部の人間曰くツンデレ、らしい。

……ところで、ツンデレって何だ？

「その三つのパターンの一つ目は、話聴いてない奴が居るとき。こ
さかもとら坂本お前だ。こういうのがいるから、何回も言う羽目になる。

二つ目は、内容が難しくて噛み砕いて言わないと分からない場合
な」

そんな事あったか？

「で、三番目は……お前等今ちゃんとこっち向いて聞いているだろ？

こういう時にもっと話したくなって長くなる場合」

……忍、目を逸らすな。

「こら、目を逸らすな」

忍だけじゃ無かった。

「ん、まあこれで終わり」

唐突だな！？

1〜4組の担任の教師の自己紹介はごくごく普通だったから割合。
「はい、次は美術科担当になった川岸先生、かわぎしよろしくお願いします」

この教師は今年来たばかり。

見た目は……はっきり言って、はっきり言わなくても、教師に見えない。

はげた、訂正。そつた頭に眼鏡が乗ってる。

「はい、川岸明憲あきのりと言います。しょっちゅう『美術の教師』と言うとびっくりされる」

だろうな。

「で、よく何に見間違えられるかと言うと……不動産屋、とか」

……何となく分かる気がする。

「後、ヤクザ」

ヤクザ!?

「趣味はスノボとか山登り……ただしゆっくり」
太ってるしな。

「スノボはたまにインストラクターをやってんの。『はいここをこゝ曲がってはいよくできました!』って。やってんの」

その台詞を言う時だけ妙に声が高くなったのは……別にいいか。

「……はい、こんなもんでよろしいでしょうか?」

「ああはい、じゃあ次、魚有先生うおありお願いします」

この教師もさっきのと同じく、今年来た教師。

「ええと、さっきの川岸先生のような面白いことは言えませんが」

……」

それはいい。

「血液型はB型、趣味は因数分解」

どんな趣味だよ。

「ええ、最後にですね。さっきからずっと動いてますが」

ああ、前に行ったり後ろに下がったり……。足を上げたりおろしたりその他諸々。

とにかくずっと動いてるな。

「じっとしてると落着かないんです。止まったら死んじゃいます」
鮪?

68 何でもバスケットー!

「んーと……昨日十二時代に寝た人!」

ばたばたがたがた……

あ、いるんだ。

忍でーす。

今日はね、昨日委員会とか係とか決めちゃったからHRがやること無いんだ。

だからクラスのリーダー的な人の提案でなんでもバスケットやってんの。

『小学生かよ……』って呟いてた人も居たけどね。

純兄とか純兄とか純兄とか

「……またおれ……」

どんまい、水谷。

確か四回目だったね。

「……男子」

がたがたがたがた!

あたし、さっきからずっと動いてないんだけど。
だってね?

男子の前が昨日十二時代に寝た人で、前が漢字で名前が二文字の人、それより前が学ラン着てる人。

前に動いたのは七回前のなんでもバスケットだよ。

「えーっ……まさかのオレ!?!」

「まさかも何も」 「三回目だし」

桜、しーちゃんナイス。

「清、早く言え」

「んー……アニメ、鉄道、銃器、何でもいいからオタク!」
しーん……。

「え、居ない!?!」

らしいねー。

一部の人がわざわざ動く奴がいるか、な視線を清に送ってるけど。

「……じゃ、山口に住んだことがある人！」

そんなのあたしと純兄となっくんしかないでしょ!?

……セーフ!

「えっ!? 夏お前山口住んだことあんの!?!」

「え、言わなかったか?」

『聞いてねーよ』

ナイスシンクロ!

はい、座れなかったのはなっくんね。

「……………」

なっくん考え中……。

で、純兄の方を見たとなんにやって笑って。

「このクラス内にお……妹が居る奴」

なっくん、今弟って言おうとしたでしょ。

「俺だけだろ、どう考えても」

個人攻撃。見てる方は楽しいんだよ!

頑張れ純兄、止める者はいない!

「まだ生きたい奴」

全員でしょ!?!

しかも何!? その地味に怖い質問!?

がたがたがたがた……

「イタッ!」

あ、誰か黒板のチョーク置く所に背中ぶつけた。

実はさっきから続出中なんだよ。

「うっそ、また!?!」

このゲームを提案したお方。名前はまだ無い。

いや、覚えてないただけけど。

「いやー、もう。じゃあねえ……身長152センチの人!」

あ、あたし152。

「……あたしだけ!？」

「本とに居た!？」

居ると思って言ったんじゃないの!？」

うう……んじゃーねえ……。

「生まれたことがある人!」

『全員だろ!？』

なんで純兄には突っ込まないであたしには突っ込むの!？」

「って言うか生まれてなかったら居ないし」

ごもつともであります。

でもまあ、結構受けたみたいだからいいや。

「あう、なっちゃった」

残ったのは桜ね。

「教師」

考えもしなかったね。

「ナイス山内!」

えーっと、誰か分からないけどグツと親指を突きたてた人がある。

あ、よく見たら皆嬉しそー。嫌われとりますな。柿の種。

「ふむうん……じゃあ、A型とAB型っ!」

最初の『ふむうん』って何。

って、落着いてる場合じゃなかった! あたしAB型!

「また……」

水谷……本と『また』だね。

「……しじみ」

「シジミじゃないよ! 紫波しなみだよ!」

うおっ、本当に居た。

って言うか、否定するなら動かないでおこうよ。

「あだ名はしじみ、つまりお前」

はい、『しじみ』もとい『紫波』が女の子だと思った方!

残念! れっきとした男子です。

ついでに言うと『紫波』って下の名前ね。

いや、それにしても、水谷友達で来たんだね。よかったよかった。

「酷いなあ……んっとーあっ！ 桜を見たことがある人！」

これも全員だよね！？ 窓から見えるし！

……………あれ？

「何でまた僕なの！？」

しじみ……何で座れなかったのかが不思議だよ。

69 ワークに突っ込んでみよう！ 屁理屈で

「……光、光、ちょっとこれ見ろよ」

「どれ？」

にーちゃんが机の上に置いてた英語のワーク。
どーみても不思議なんだよなー。

岳だ！

「ほらほら、ここ。おかしーだろ！？」

「あいきゃんとりーどいんぐりっしゅ」

言えてるじゃねーか。どこで覚えた？

「とりあえず英語で何か読むように言われた時はこう言っとけ、
ってお姉ちゃんが言ってたよ」

「いや、オレは英語なんてちんぷんかんぷん異国語の様だから見て
ねーんだけど」

「……岳お兄ちゃん」

あん？

「英語は異国語でしょ？」

……あゝ。そっか。

「標準語だ！」

ということにしておこう！ 間違っではない筈。

「でー？ なんて書いてあるの？」

「『お母さん、次に何を手伝いましょうか』」

隣に和約が書いてあったからこそ読めたのだ！

おかしーだろ！？

いや、和約が書いてあったことじゃなくて、内容の方！

「こんなことをこんな言い方で言う子どもがいる筈が無い！」

「あゝ、確かに」。『じょうりゅうかいきゅう』？ とか位だよ
ね」

日本にそんなの居んのか？

「あそこ！」

『来週あなたは十五歳になります』

「ここ？ どうおかしいの？」

だって、だってな！？」

「これが書かれた時に来週なら、今頃数年前とかになってる筈だろ！？」

作られてからそこそ経ってるワークみてーだし。

「……岳お兄ちゃん、そこはね、アニメとかの登場人物が年を取らないのと同じ事だよ」

そーなのか？

「ドラ○ものの○太くんなんてね、ちゃあんと誕生日やってるのにずうーと五年生のまんまなんだよ？」

あー……。いつ元の年に戻ってるんだろうな、あれ。

「あ、あとあとと！」

「そんなに言わなくても聞こえてるよ」
んなこたー、わーっとる。

『わたしは医者になるつもりです』

「なれたかどーか、もんの凄く気になっちまうじゃねーか！」

「なれなかったんだよ」

「おい！？」

にっこり笑ってんな事をゆーな！

「え？ じゃあなれた」

じゃあって、おい。

「そーゆーことじゃなく「じゃあどう言う事なの？」……言い返せない」

なんだろー、この敗北感というかなんというか。

「なれなかったんじゃないのならなれたしか選択肢ないじゃない」

ごもっともでございます、はい。

はあ、妹に負けた。

次っ！

立ち直りが早いのが我の……えー……何だっけ。

次！

『彼を手伝って下さい』

「自分が行けよ！ なぁ！？」

「あゝ、そっちなのか？」

うん？

「てっきり、『彼って誰だ！？』かと思っちゃった」
確かに。

「彼って誰だ！？」

70 子供の相手とは大変なのである

「待てー！」

ぴたっ

「わあっ！」

あれ？

待てって言われたから止まったのに。

「急に止まるな！」

「待てって言われたから止まったのに！」

忍でーす。

いやー、あのね？

近所の二年生の子が友達×5を連れて遊びに来ただけどね？

あたしは中学生虐待を受けてるのよ。

なんで！？

あたし一人で六人も相手にできるわけ……あるんだけど。

って言うか現在進行形でやってるんだけど。

ほら、小学校低学年の子が相手なんだよ？ 蹴ったり殴ったり出

来ないでしょ！？

だから適当にこけさせるor逃げるしか方法が無いわけであって。

あたしはまだ制服を着替えていないのであって。

とてつもなくやりにくい。

「にいちちゃん行くぞ！」

「誰かにいちちゃんだ！？ スカートはいてるでしょ！？」

制服以外には持ってないけど。

「あ、じゃあオカマ？」

「何でそうなる訳！？」

せめて着替えさせて欲しい。

スカートって広がるから動きにくいんだよ！

とりあえず部屋まで逃げ込めば後は何とかなる！

……と考えたあたしが馬鹿だった。

あたしと光の部屋には鍵がない。勝手に入ってこれる。
着替えられるじょーたいじゃないでしょーが！

はあ。

とりあえずブレザーとスカートだけ脱いどこ。

スカートの下に体操服のズボンはいといてよかったよ。

「えいえいえいえいえいえいえい！」

はあ。無防備な状態で何故こんなに殴られないといけないのだろうか。

ぬいぐるみで、なだけましだけど。

「こら、女の子が乱暴なんかしちゃいけません！

……とするとやってるあたしって？」

どうしよう。自分で言っというてちよっと悲しくなった。

女の子が一人混じってたんだよね。

「よー……って、なんだ。忍まだ着替えてねえの？ いや、どっち
かつつーと着替え途中？」

まあたなっくん不法侵入して！。

でも今は！

「なっくん、丁度良かった！」

「丁度悪い所に来たようだから俺帰るな」

「酷い！」

しかも本当に帰っちゃうし！ ベランダから。

「忍ー、無事か？」

「無事だけど手伝ってよ純兄！」

すがり付いて来られるのって暑いんだよ！

あと地味に殴られるの痛いし。

「必殺！」

うん？

空気入れポンプのホース？

何で口に銜えてるの？

「ほーふこうれき（ホース攻撃）！」
ふーっ

……………終わり？

「何にもなっていないから」

「てへっ☆」

おーい。

……あー、のど渴いた。水飲みたい。
となったら一階に下りないと。

「あっ！ 逃げたー！」

ダッシュ！

「階段下りるの早っ！？」

ふふふ、何しろ毎回駆け下りてるからね。慣れたのだ。
皆は真似しないでねー。うちの階段急だからー。
って、思うだけ。

言ってる余裕無いんだもん！

こっぷー。

「あ、あそこ！」

……二年生の皆さん、下りるの早いねー。

「水くらい飲まして？」

『ダメー！』

何で！？ 酷いよ！？ 人権無視ですか！？

……二年生じゃまだ分からないかな？

「じゅーんにー！ へるぷみい！」

「断る」

酷いよ！

しかもいつの間に一階に！？

「もっかい言うよ？ 水飲ませて」

『ダメー』

残念ながらもう飲んでます。ごくごく。

うん、のど乾いてる時が一番おいし。

「あっつー」

しかし体温はすぐには下がらない。

第一ボタン

「カッターのボタン開けるよ。第一まで閉めるから暑いんだろうが」

あ、その手があったか。

「ありがと、純兄」

「どういたしまして。よく気付かなかったな」

あ、何か今ものすごく馬鹿にされたような気がする。

「それーっ」

「のあっ!?!」

また来たーっ!

「逃げるっ」

『逃げるなー!』

「逃げるっ! 大事なことなので二回言いました」

「何処がどう大事なことなのか五十文字以上で説明して欲しい」

純兄が何か言ってるけど無視!

今はとにかく身の安全をはかるのだーッ!

71 お兄ちゃんを起こしましょう

「純兄ー！」

「……………すー」

無視されたー。

「起ーきろー」

「……………すー」

また無視されたー。

忍でーす。

純兄がね、いつもムダに早く起きるのに今日はなかなか起きないんだよ。

えっと……………今は、六時。

純兄だったらいつも五時半には起きてるのになー。

あたしは今日早く目が覚めたんだよ。二度寝が出来なかった。

で、純兄に相手してもらおうと思ったらこの状態。

「純にー、上乘るよ？」

「……………すー」

OKとあたしは解釈した！

そーれっ

ぼふっ

「うぐっ」

あ、起きた？

「……………すー」

ううむ、なかなかしぶとい。

おとーさんなら今ので起きるのに。

うーん、次の手は……………。

「純にー、殴るよ？」

「……………すー」

OKと再び解釈した！

とう

ぼすっ

……避けられた。

ほんとーに寝てるの？

「純にー、起きないと耳元で叫ぶよ？」

「……………すー」

OKと三度解釈した！

すううううっ

「起きろおおおおおおお！！」

「……………すー」

すげえ、起きない。

岳なら一発なのに。

「ねーちゃん……五月蠅い……」

「あ、丁度いいところに起きたな岳！」

「悪い所に起きたようだからオレ寝る。やーすみ」
くおら。

昨日もなつくんにおんなじことやられたような気がするぞ。

「岳、純兄起こすの手伝ってよ」

「えー……後がこえーもん。やだー」

「そー言わずに」

「どー言わずに？」

そー返されるとは思わなかったよ。

「やだと言わずに」

「じゃあ絶対に嫌だ」

強くしないで。

「だからそー言わずに」

「どー言わずに？」

……止めた。無限ループしそうだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「お、ひーちゃん手伝って」

ひーちゃんと呼んだのは単なる気分だ、うん。

「何を？」

「純兄起こすの」

「純お兄ちゃん寝てるの？」

見て分らんかー。

そして手に持っているマッ○ー（黒）はなんだー。

「落書きしよう」

おい。

いいね！

「ねーちゃん、光、後がこえーぞー」

『……………』

それもそーなんだけど。

純兄がこんな隙だらけなのも珍しいものでー。

「せめてまぶたに目」

「やめとけて」

「そういえば」

ん？

「どうして純お兄ちゃん今日は起きるの遅いの？」

そー言えば。

いや、普通に考えてまだ早い時間帯な気もするけど。

「純兄の机に何か手がかりが」

あった。

一瞬にして見つかった。

それはもう、電光石火のごとく。

「にーちゃんこれやってたのか？」

「ぼいねー」

「凄い。最後までやってある」

それは……。

えっと……。

ほら、9×9のマスの中に縦と横で1～9の数字がかぶらないよ

うに入れるアレ。

3×3のマスの中でもかぶっちゃダメな奴。

「魔方陣？」

「ねーちゃん違う。数独」

あ、そうそうそれ。

「純お兄ちゃんこれやってたんだね」

そー言えば前におばーちゃんが『やり始めたら止まらない』って
言ってた。

「さあ！ 理由も分かった所で、純兄を起こそう」

「結局そこに戻んのかよ！？」

あたりまえではないか。

同時刻。お隣の夏の部屋。

「お兄ちゃん起きろっ！」

ぼすっ

どどどどどどどど！！

春の小さな拳が夏の周りに降り注ぐ。

「ったっ！」

「よしっ！ 一発入った！！ まだまだ行つくよー！」

どどどどどどどど……

「危ねっ！ 痛えつつってんだろうが！」

「聞いてなーい」

春の、春による、春の楽しみのための、お兄ちゃん起こしが行わ
れていた。

いや、もう起きてるけど。

72 最凶×3 教師の崩壊

「待てッ!!」

「待てと言われて待つ奴がいるものか」

「……同感」

逃ーげろーっ!

あー、楽し。

剣だ!

凶、訂正。今日も今日とてオレ達（オレ&天&斬）は学園内を走り回ってるぜ!

理由? 教師に追いかけられているから以外に何がある?

実はな、オレ達を追いつけ回すという（ある意味）度胸のある教師がこの学校には一人だけいるんだよ。

それが、我等が担任! 灯雷羅音（先生）!

オレ的に『い』が足りないと思う。

だってさ、『らいおん』の方が迫力あるじゃねーか。

「いー加減止まれ! おれを走り殺す気か!？」

「……らおんが止まればいい、それだけ」

「うん、斬の言うとおりだと思うな」

オレも。

あ、ちなみに、何で追いかけてつかと言うと……。

……あれ?なんでだったっけか?

「クソッ! さっさと答案用紙返せ!」

あ、そーそー。

成績に関わるとか言うだーいじなテストの答案用紙（採点前）を盗ったんだった。

実は、オレ等のクラスの奴、一部頭悪くてな、『やり直したい』という声が殺到。

だから! オレ等でそのテストのやり直しをさせるべく、答案用

紙を消してしまおうと言うわけだ！

いやー、こういうことばかりやるから教師には目の敵にされ、生徒には人気者にされ。

うんうん。ベストな状態！ か？

「そういえば、剣」

「あん？」

「答案用紙、どう処分するんだ？」

……………。

「斬」

「……凍らしても何にもならない、と思う」

だよなー。

「とりあえず、教室に持っていくか！」

「OK」

目の前の曲がり角を右に曲がればー。

はい、とーちゃつく。

「皆のものー！ 答案用紙を取り返してきたぞー！」

『でかした！』

褒められた！

ちなみに、一クラス10人程度しかない。

だから対して混雑せずに答案用紙は皆の下へ。

よし！ めでたしめでたし！

……って、あれ？

「こらッ！ 今すぐ戻せ！ ……はあ、はあ」

息切れしとる。

まだ若いのにー！

「それ行け！ 斬！」

「……語呂悪い。後俺は空飛ぶアンパンじゃない」

あ、言った後で思った。

「はあ、はあ……でえっ！？」

どかーん

あ、床に穴が。

「おいっ！　これの修理は誰がすると思っている！？」

「誰がするんだ？」

天の言うとおり！　オレも知らん。

「こーゆーところの修理は教師がさせられるんだよ！　覚えておけ
！」

テストにでるのか？

「……そもそもおんが避けなければ床に穴は開かない」

「うん。そうだな」

「だあほっ！　おれに風穴が開くわ！」

「……えーっと、関西弁当？」

違ったっけ。

「……大丈夫。穴が開いても氷で塞ぐから」
スケートリンクの出来上がりーってか？

「止めてくれ……」

あ、らおん顔色悪い。風邪か？

「らおん、医務室と病院どっちがいい？」

「……そうだな、できれば精神科の病院に行かせて欲しい。

お前等の担任をやっていることが夢か、幻覚、幻聴だったら……」
おーい、遠い目をするなー。帰って来ーい。

72 最凶×3Ⅱ教師の崩壊（後書き）

夏休みに出すつもりが……。

何となく恋しくなって出しちゃいました。

らおん、頑張れ。

君の苦勞はいずれきつと報われる……。

報われないかもしれないが（笑）

73 ドンマイ先生!

「はい、とゆー訳で、先生の自己紹介はこれで終わりー。質問とかある人!」

はーい。

おお、結構上がってんじゃん。

岳だ!

んとな、今音楽で、今年度の音楽の先生が変わったから先生が自己紹介してた。

名前は……えっと……忘れた!!

「んーと、じゃあ……はい、高山、くん?」
こうやま

「高山だ! まんまだろ!」
たかやま

どーやったら『たかやま』が『こうやま』になる!?

「あはは……はい、どうぞ」

あ、流しやがったな。

「先生彼女いる!」

「それ! これやっぱ聞かないと!」

シーン……………。

シケたな。花咲。
はなさき

「ちよっ!」

『ぎやははははははは!!』

「ちよっ!? もー……」

なんだかものすごく微妙な顔してる……。

笑ってっけど。

「先生彼女いると思う?」

『居ないと思う!』「いるでしょ! ……あれ?」

シーン……………。

またシケたな、花咲。

「……はい、居ません」

「えーっ!?! 何で!?!」

「いや、何でと言われても……」

その顔じゃなー……とは可哀想だから止めとこう。

「はい次ー……、中谷くん?」

「ア○パ○マンとプ○さんどっちが好き?」

翔……なんだその質問。

「え……中谷はどっちが好きなんだ?」

「え、おれ? おれはア○パ○マンかなー」

ほー、初耳だ。

「最終的に毎回強くなるし……いざとなったら食べられるし
非常食!?!」

「プ○さんだって蜂蜜持ってんじゃん」

「アンパンの方が腹膨れるだろ」

やっぱり非常食だ。

「はい、次はー……花咲」

「よし来たッ!」

早く言えー。

「好きな芸能人は!?!」

「芸能人? ……芸能人分からん」

おお、仲間だ。

いやだって、家でテレビ付いてるのってニュースとかクイズ番組
とかくれーしか見ねーんだもん。

「えー」

いや、えーつつつてもな。

「よし、じゃあ次で最後にするぞー」

「えー」

キンコーンカーンコーン……

おりよ?

「あれ!?!」

『終わったー!』

何とか先生、これからはちゃんと時間をみて授業してくれよ！

74 We aren't 案内係! O.K.?

「あのー……」

「ん?」「あ?」

純兄、その返事の仕方はどうかと。

「え、ええと、部活の場所分らなかったんですけど……」
忍でーす。

そっか、今日から一年は部活見学なんだ。

「何部行きたいの?」

「テニス部です……」

「あれ? 外に居なかった?」

おっかしーなー。

今は晴れちゃ居ないけど雨降ってる訳でもないし……。

あ、今朝雨降ったんだっけ?

「それが……三年生に聞いたら中って言われて、二年生に聞いたら外って……」

おい、テニ部……。

「外は見てみたのか?」

「あ、はい」

純兄、心当たりあるのー?

「……その廊下曲がった所は見たか? 後、三階の同じ場所」

「いえ、見てないです……ありがとうございます!」

行っちゃった。

あ、ちなみにここは二階ねー。

うちの学校、一年は四階で二年が三階、三年は二階なの。

「純兄なんで知ってるの?」

「雨の日に残ってたら、たまに見かけるからな」

ほー。……いつ残ってたんだろ?

「あのー」

……名札と上靴が黄色。また一年生。

「吹奏楽部って何処ですか？」

「いや音聞こえるでしょ！？」 三階の音楽室だよ！」

今も聞こえてるよ！？ ほら、あの某体は子ども頭脳は大人名探

偵のテーマ曲！！

「あ、そー言えばそーですね。ありがとうございます」

そー言えばって……。気付かなかったんかい。

「あの一」

……またまたかい。

あれ？ 上靴が緑だから三年？

「卓球部何処？」

あれ、この人見覚えが……。

「体育館が多目的室だろうが。会長兼卓球部部长」

ああ！ 生徒会長だ！

って、卓球部部长！？ 自分の所わかんなくてどーすんの！？

「あ、そうそう！ ありがとう一」

え、まさか本当に忘れてた！？

「一年生が聞きに来たらそうやって答えてね♪」

『あたし（俺）等は案内係じゃない（ねえ）！』

そもそも案内係居ないから！

あ一、行っちゃった。

聞いているのかな一。

「あの一」

またまたまた！？

今度はちゃんと一年だ。

「卓球部どこですか？」

「……今階段下りていった人見えた？」

「はい」

「その人について行ったら着くよ」

「はい。ありがとうございます！」

今のでいいんだ。

「あの一」

またまたまた！？

「オカルト部何処ですか？」

「んーと、オカルト部は……オカルトおかると……オカルト！？」

「え、はい」

そんな部活あったっけ？

「そんなのあったか？」

あー、純兄も分からなかったのね。

「あれ？ でもポスターが……」

「何処に！？」

「そこに」

んーと？ 階段のところか。

『オカルト部部員募集！』

ちょーっと不思議な雰囲気

ちょーっと不思議な部活です

上下関係は無いに等しい！！

不思議な体験したい方、どうぞ入って見てください！！』

……はあ……。

こんなのあったかなー？

「場所くらい書いとけよ……」

確かに。ポスター意味なし。

「あれ？ でもさ、新入生歓迎会新歓の時なかったよね？ この部活」

「だから余計気になって……」

ふーん……。

とにかく、

「それっぽい所を探せばいいよね？」

「……は？」

『は？』じゃなくて、探してみようよ！

あたしが気になるから！

75 オカルト部……と言っているのだろうか

「めっかなーい」

見つからない何も探したのは理科室と体育館裏だけだろうが。純だ。

前回に引き続き『オカルト部』とやらを探している。

「うーん、何処にあるんだろ……。体育館倉庫の中とか？」

体育館の部活の邪魔になるだろうが。

「いっそ片っ端からさがしたらどうだ」

「えー……。面倒だけどそれが一番早いのかな？ それでいい？」

「はい。ありがとうございます」

「あれ？ 誰か居る？」

三年五組……空き教室で、A教室とか言われてる。がらっ

「よーこそオカルト部へー！！ 皆皆っ！ 三人も来たよ！」

……光並のチビだ。

そして超音波並のキンキン声だ。

……って、待て、俺等は見学じゃねえ。

いや、忍は見学か？

「……え、えっと……」

「この馬鹿。いきなり引かせてどうする」

スパコンッ

え、ハリセン！？

何処から出した！？

さっき見た時には持ってなかったはず……。

「それどっからだった！？」

「どっからって……内ポケットから？」

何故疑問形？

「いや入らないでしょ!？」

「あの、突っ込んじゃ駄目ですよ。

古賀先輩のハリセン……、何処から出てくるかなんて分からないので」

慣れってすげえな。

いや、何となく思った。

「えっとー、あれ？ 部活見学に来た子にとって、何を言えばいいのかな？」

おい。

「……活動内容、とかではないですか？」

「おー、なるほど、マコちゃんナイス！」

「ですから……。マコちゃんと呼ばないでください「ヤ」
即否定？」

「えっとね……普段はまあ、殆ど何もしてないに等しいんだけど」

「先輩！ イメージ悪くしてどうするんですか!?!」
事実なんだろうが。

「たま〜に幽霊を引き寄せる術式を書いたりするよ!」

……一年の目が輝いてる……騙されるなよ？

「今それ出来ますか!？」

いきなり大声なんか出すからびっくりした。

「出来るよ! 頼んだハルやん」

「俺回しか!？」

色々な意味でフリーダムな部活だな。

それより前に、これ部活か？

「……あ、ちなみに、部活って勝手に言ってるだけですよ？」
説明どうも。

オタク……というか自由人の集まりか？

「……はい、コレでいいな」
早。

なにやら怪しげな文字の中に火のついたローソクが……って。

「ローソク！？ 学校にこんなの持ってきていいの！？」

ああ、突っ込む手間が省けた。ナイスだ忍。

「大丈夫！ 持ってきたわけじゃないから！」

なら何処から。

「……理科準備室から頂戴した」

おい。

「さーそろそろ集まってくるよ！ 幽霊さん！」

……………。

三分待った。

「悲しいことに一人も来てねえな」

「うん」

まあ、所詮こんなもんだろ。

「忍、気は済んだか？」

「あれ？ 純兄待っててくれてたの？」

俺、待ち損か？

三十分くらい無駄にしたな……はあ。

「ちよーっと待ったあー！！！」

いい加減耳が痛くなってきた。

決めた。こいつのあだ名は超音波だ。

「ねえねえねえ！ もしかして君達幽霊見えるの！？」

「見えたら何だ超音波」

ぽん

何故か古賀に肩を叩かれた。

目がいつてる。「分かってるな」と。

……迷惑してるんだな、このキンキン声。

「ねえ入ってよ！ たまにでいいから！ 臨時でいいから！！」

「だって、頑張れ純兄」

いやテメェもだから。

「あっ！ 逃げた！！」

「純兄待ってよー！ 逃げることは九割がた予想してたけどー！！」
だって……なあ？

断るのだって面倒だし。

逃げるが勝ち。……いい言葉だなあ。

76 これでもクッキーを作っているのです

「待ちなさい。貴方達は一体何を作るつもり？」

『クッキーだよ（ゝ）？』

変ね。私の目がおかしくなったのかしら。

秋よ。

家で凧とお喋りしてたら妹二人がクッキーの作りかたを聞きに来たのね。

それで、凧が『変なものを入れない』という条件付で何故か私まで教えることになったのだけど……。

この子達のそろえた材料の中にどう見ても、どう見ても おかしなものが入っているのだけど。

この子達凧の言ってたこと聞いてたのかしら？

からしでしょ、しょうがでしょ、ネギに蜂の子。

え、蜂の子？ 何処から持ってきたの？

切りがないから切るけどコレのほかにも色々。

……よく集まったわね。

そんなことより。

「凧、変なものを禁止したのは貴方じゃなかった？」

何便乗してるのよ」

「だってゝ」

だってじゃないわよ。

「誰かを引っ掛けるためのハズレに使うって言うんだものゝ。

楽しそうだったから乗っちゃったゝ♪」

単純……。

「大体誰かって誰よ」

「分からないよ！ 無差別殺人だもん！！」

春、殺さないでちょうだい。

「違うよゝ。無差別引っ掛けだよゝ」

「……………それならまあ……………楽しそうだし、いいわよ」
止めるのはやめにするわ。

だって、コレを始めたこの子達が引っかかる所を見てみたいもの。
いっつも引っ掛けている方だから。

……ついでに、純もね。あの子見事に引っかからないもの。

「よくし〜！ 型抜きしよう〜！」
え？ もう？

生地できてるし……。って、ちょっと待ちなさい。

「それ、ちゃんと寝かせた？」

「寝かせる？ これに布団なんかかけたら、自分が寝るとき気持ち悪いよ！」

そうじゃなくてね……。

「あ〜！ 忘れてた〜！ 秋ちゃんくつしよふ〜」

濁点が抜けてるわよ。『』が。あとカタカナね、それは。

二時間後

「よくし〜！ 今度こそ型抜き〜！」

「肩たたき〜？」

どうやったらそう聞き間違えるのよ。

「あれ〜、光やってくれるの〜？」

「ウチもやるよ！」

何がしたいの貴方達は。私もやってほしいけど。

「型抜きするんじゃないかったの？」

『ああ（〜）！』

『ああ』じゃないわよ……。

「誰か、コレに挟むネギ等等切つといた方が効率的だよね！」

それを言いながら私に視線を送るのは私に『やれ』と？

「口で言いなさいそういうことは」

「はい。ねぎ切りお願いしま〜す！」

……スーパーとかでは見かけないわね？ このねぎ。

「それね。いつか光たちがカレーを作ったときに発掘した、芽の生えた玉ねぎを庭で育てて取れたんだよ」

……。何から突っ込めばいいのかしら。

発掘したことについて？ 庭で育てたことについて？ コレが安全かということについて？

……まあ、コレくらいの量なら、大丈夫よ、ね？

「見てみて！ 季節外れ！」

クリスマスツリーって……。ホント、季節外れもいいところね。

「こっちは季節ピツタリだよ。ほら、桜！」

もう殆ど散っちゃってるけれどね。

「ねえひーちゃん、その桜ちよつといがんでないかな？」

「え？ 本当だよ！ 何で？ 何で？」

まず、型がいがんてるのだけど。

「あ、その型ね。かなり前なんだけど床に落として踏んじやったの」

凜……直そうとか言う気はなかったのかしら？

「よし！ じゃあハズレを作っていこう！」

丁度、ねぎも切れたしね。

切ってから言うのも何だけど本当に大丈夫かしら、これ。

「えっつと、これは岳お兄ちゃん用」

「これ、お兄ちゃん用ね！」

……あら？ 数十数行前に『無差別』と言ったわよね？

「さ、皆よう」

……ああ、岳と夏はとりあえず絶対引っかかるようにしたかったのね……。

77 クッキー騒動

「ねえ、待ってよ！」

「何で逃げるのっ!？」

そりゃーな!？」

普通そんなもの食わされそうになったら逃げるだろ!？」

何でクッキーがそんなに赤いんだよ!？」

岳だっ!

今日、にーちゃんの誕生日でな!？」

はーちゃんと光が何かクッキー作ってきたんだけど!

そのの一部をオレとなっくんに食わそうとしてんだよ!

「岳ー、試しに食べてみなよ。こっちはおいしいよ?」

いや、ねーちゃん達食ってんの普通の色したクッキーだろ!？」

さっきなっくんの方見てみたらネギが入ってんのが見えた。

っかしーなー。母さん達と一緒に作ったって聞いたんだけど。

……さては、

「母さん達もグルか!？」

「違うよ」

「面白そうだから放っておいただけで、断じてグルじゃないわ」

それってグルじゃねーの!？」 見て見ぬ振りはいけませーん!

「まあ、俺には被害がねえみてえだからよしと言うことで」

良くなーっ! にーちゃんずっこい!

「辛っ!？」

『え?』

ねーちゃんが食べた奴が辛い!？」

ま、まさか……大皿においてあった奴の中にもハズレが!？」

おめーら、もっと安心して食えるものは作れねーのか!？」

「と・に・か・く! お兄ちゃん達素直に食べなさいっ!！」

『断る!！」』

断らない奴が居るのならここに連れて来い!!

……いや、探せばいるか。マゾとか。前言撤回で。

「ねー、コレさえ食べればあっちも食べられるんだよ?」

「あっちも大概危険だろうが!」

激しく同意!

「岳お兄ちゃん? 食べなかったら岳お兄ちゃんのお誕生日の時も同じもの作るよ? 当たり無しで」

勘弁してくれ……。

「……純兄と同一年の時ってきっちり一ヶ月しかない
いや、一ヶ月と一日だぜー。

って、ねーちゃん助けてくれる気はねーの!?

にーちゃんも何かクリスマスツリーかじってるし!
ちよつと実験。

「ねーちゃんにーちゃんヘルプ!」

『やだ』

やっぱり!

頼りがいと言うかなんと言うかそれが欠けた兄姉め!

「……たまには助けてやれよ」

「純兄こそ。むしろ純兄にそのまま返すよ」

何でこう思ったときだけ!!

「じゃ、テメエは岳で俺は夏……って、夏居ねえし
あれ?

さっきまでちゃんと逃げてたのに。

「ひーちゃんっ! お兄ちゃんが隠れたっ!」

……あ、その手があったか。

「……テメエの家の、テレビ台と壁の隙間」

「え?」

「そこ探してみろ」

「分かった!」

にーちゃん! 何て殺生な!

そんなところで見つかったら逃げられねーじゃん！

「えい〜」

あっ！？

もぐもぐ、ごっくん

「辛っ！」

多分これは七味唐辛子だ！ のど痛えっ！

「はい水」

サンキューねーちゃん！

追いかけてる時に助けてくれればもっと嬉しかったぜ！

オマケ

「居ない！」

「残〜念、こっちだ！」

上から声がした……。オバケ！？ イヤーッ！！

って、違うよね、お兄ちゃんの声だったし。

……あ、テレビ台と壁に手と足使って登ってる……。

大した隙間無いのに。すごい。

……クッキーが口に届かない！

よし、この作戦で行こう！

3時間後

「お兄ちゃん、その体制キツクない？」

「お・ま・え・な・あ……」

必殺、疲れさせておろす攻撃♪

78 ちまちま、ちまちま

ちまちま、ちまちまちまちま

「ねーちゃんにーちゃん、そんなちまちまやって楽しいけ？」

『お前が言うな』

岳だってやってるくせに！

忍でーす、

んとね、あたしはビーズでストラップ作ってて、純兄は……純兄もストラップかな？ を、紐で作ってるの。

使わないんだけどね。殆どあげたり放置したり。

岳は何か縫ってるし。

学校の宿題だっさ。

「オレは好きでやってんじゃねーもん。ってかねーちゃんやってよ」
「やだ。だって縫い物ってあんまり好きじゃないし、得意じゃないもん」

まーっすぐに並縫いが出来る人って尊敬するよ！

「えー。じゃ、にーちゃん」

「やだ。面倒」

「それは面倒じゃねーの！？」

あ、あたしも思った。

紐で何か作るのも面倒なんじゃないかな。

「いや、これは結び目作るだけだし……。後、針が指に刺さるのはごめんだな」

……そういえば去年縫い物の授業の時何回か刺してたね。
器用なんだか不器用なんだか。

「結び目作るだけって、その結び目むちゃくちゃ多いだろ！？」

「作るものによって違うけど。これは……大体十個くらい
少なっ。

いや、結び目だけだったらあたしの方が少ないけどさ、三個くら

いだし。

だってビーズだよ？ 何個も結び目作らないって。

「あれ？ 大分前ねーちゃんにあげてたミサンガ？ ブレスレット

？ は異常なほど結んであったけど……」

平結びの奴ね。結び目は確か三十越してたよ。

パワーストーンつき。効果は魔よけだって。

一昨年貰った時は純兄が持ってた方がいいんじゃないかなーと思
ったけど。

「それより岳、それって宿題だよね？」

「へ？ うん」

「……一体何を作ってるの？」

もう見た感じじゃサッパリわかんないんだけど。

「……なんだったかなー」

おい！？

もう糸があっちこっち絡まって大変なことになってるんだけど！？

「忍、聞いた所でムダ。岳と器用は無縁以上だから」

「むしろ何処かのねじが吹っ飛んでるって感じだもんね」

うんうん。我ながらしっくり来る。

「待てえい！！ それじゃオレの頭のねじが吹っ飛んでるみてーじ
やねーか！」

えー。だれもそんなこと言ってないのに……。

「んじゃあ指の運動神経が切れてるとか？」

「だったら指動かねーだろーが！ ってか怖えよ！」

あー言えばこー言う。

「じゃあ何て言えば満足する？」

「え？ ……えー……って器用じゃないってオレをからかう言葉を
オレに考えさせんじゃねーっ！」

『せめてもの情け？』

「そこハモんなーっ！」

いや、だって。

からかうことは確定してるんだもん。

79 激しく微妙な夢

「わーおう」

でかー。

忍です。

ただいま夢の世界を冒険中です。

早い話が今回は夢オチなのだ。

で、今日の前に居るのは……えーっと、居る？ に入るのかな？

まあ、とりあえずなんとも言い表しにくい、ぶにぶにのぼよぼよのまっくろくろすけの物体が目の前にどーんと座ってんの。

じゃまで前に進めなーい。

「おい、そこじゃま」

あ、純兄登場。

一蹴りしたら真っ黒ぶよぶよ君が消えた。

……えーっと、これって戦闘不能？ 倒した？ クリア？ どれでもいいか。

しばらくして、また道のど真ん中にふにふにのぼよぼよのまっくろくろすけが居た。

あ、これは例えられるよ。

マシユマロ！

……食べちゃダメかな、食べちゃダメだよ。一応生きてるみたいだしね。

ぱくっと言った瞬間内臓ぐちゅって口の中に入ってくるのはかンべんだしね。

……自分で言ってるなんかグロイ。お食事中の方ごめんなさい。

ここは夢の中だから食べても感覚しないのかなー。

「あむっ！ やわらかーい！ ねっ！ ひーちゃん！」

「うんー、おいしいねー、はーちゃんー」

……何か、食べてるし。おいしいとか言ってるし。

しかもどんどんどんどん減ってるし!?

うわゝ、凄い大食い……。おっそろしいな。

「ふゝ、おいしかった!!」

完食!?

あの、高さは二十五メートル越してそうで、半径二十メートルありそうなあれを!?

「じゃあまた探しに行こう」

何を!? まさか食べるもの!?

こわ……。

さらにさらに進んでいくと。

今度は三人がけのソファー位の大きさの何かがまたどーんと座っていた。

いや、丸くてうごめいてるから座ってるのかどうかイマイチ分からないんだけど。

つんつんつんつんつんつんつん……。

で、何かそのみょーな物体を、岳を初めとして翔(だっけ?)と、古閑(かなあ?)と、しゅうや(漢字はもはや思い出せん)が棒切れでつんつんしていた。

んー……っと、これはスルー出来る大きさだからぐるっと周っていこう。

……ところで。

あたしは何処に向かってんだろう?

ついでに言うと。

この道は何処に繋がってるんだろう?

はーい、分かっていると思ってた方ー。手ーあーげてー。
分かるかっ!!

だってだって! 全然前見えないんだもん!

……というところで目が覚めた。

何故か顔の上にハンカチ。

……誰か知らんが殺すなああああああ！！

前が見えなかった理由って、コレ！？

ついでに、枕元にはマシユマロ……と、何故か真っ黒なスライム。
さて。

あたしは何に突っ込めばいいのでしょー？

んでもって、

あたしは何をぶっ飛ばしやあいいのでしょー？

80 夜道にて

たたたたたた……

「じゅーんに、早くっ！ 日が暮れちゃうよ！」

「いや、とっくに暮れてるから」

うん、そーだね。

真っ暗だし。

忍でーす。

さて、何故あたし達がこんな暗い道を走って……いや、純兄は歩いてるけど……いるかという。

おばーちゃんの所に行っていたから。

何故おばーちゃんの所に行っただけでこんなに暗くなってしまったかというと。

おばーちゃんに英語を教えてもらってたから。

何故おばーちゃんに英語を教わってたかというとー。

塾の先生をしてるおばーちゃんがあたし達を突然に教える気になつて、何故か月曜と木曜がその日になってたから。

……はてなあ。あたしも純兄も同意した覚えは無いんだけど。

まあいいや。

「そんなことよりっ！」

「どんなことよりだよ」

……まあ、それはともかく。

「純兄走ってよ！」

「ヤだ」

「晩ご飯できちゃってるかもしれないじゃん」

「ふうん？」

あ、純兄時計出して確認。

何でポケットに入れてるのかなー。付けばいいのに。

あ、もしかして時計も没収大賞なのかな？ 校則なんてちゃんと

覚えてないから分からないけど。

「ん、まだ大丈夫。少なくとも後二十分は」

「……いま、八時ジャストなんだね」

たいてい八時半前に晩ご飯だし……。

「つて、そんなことより走ろうよー」

「何でそんなに走りたいがる」

「早く帰ったほうが安全でしょー。不審者出るかも」

「ほお？」

あ、何か馬鹿にされたような気がする。

「とりあえず、あたし走るからね」

よくよく考えればあたしだけ走ればよかったんじゃない。

「……あれ？ 純兄結局走ってるんじゃない」

「テメエが走るからだろうが！」

あ、怒られた。

「何であたしが走ったら純兄が走るの？ あ、分かった。か弱い女の子のあたしをほっとくのが出来ないんだ」

「何処にか弱い女の子が居ると」

うん、そういわれると思った。

「あー疲れた」

「早」

いや、全然疲れてないけどね。飽きただけ。

あと、どーやったら純兄が動くかとかが分かつ……。冗談です。

純兄にらまないで。こあいから。

「うーん、桜は見事に散ったねえ。さくらんぼ食べたいなー」

「どーやったらそうなる」

「こーやったら」

「……………もういい」

あ、そ。

疲れた顔をされたのは何でだろう。

81 結局、六年二組とは

「くそっ！ 逃げるな！」

「いやっ、とっ、逃げるなっつたってな……わうつ、よっと」
凄いな……。

なんかよく分からないけど、とゆうより褒めていいのか分かんないけどとりあえず凄いなー。

翔です。

「おーい、二人ともー。程々にしとけよ」

『止めろよ！？』

まあ、うちのクラスじゃお決まりと化してきた突っ込みはともかく。

何が凄いかとゆうとー。

まず修也から言うと、

1 箒の攻撃がハンパなく早い。

それはもう、前世で槍使いでもやってたんじゃないか、と思うほど。

2 なんだかんだで窓ガラスとかを割らない。

いや、割りそうにはなったことあるんだけど、スレスレで止めてんだよ。

続いて、岳

1 もう絶対本気だろ、な修也の攻撃を全て避けてる。

しかも、教室内を飛び回って。前世で忍者でもやってたのかお前は。

2 避けながら修也をからかう余裕っぷり。

前に机から落ちたことなんて綺麗サッパリ忘れてるだろ。

あー……、あと、ギャラリー（おれ含む）は

なんだかんだでそれを見て楽しんでいる、ってとこかな……。

古閑でさえ大人しく傍観してると言う慣れっぷり。

さらに、先生。

二人の格闘？ 喧嘩？ ……微笑ましい追いかけっこ？ これは
ないか。をビデオでとっているところ。

ビデオカメラ持ってないんじゃないのか。

そして取った奴は何処で使うんだ？

「せーんせー。ビデオカメラどーしたの？」

「買った」

『何のために！？』

「もちろんこの二人のビデオを取るために」

『必要あるのか！？』

ある意味、この先生は超人なのかもしれない。

……いや、変人かなあ。

「岳お兄ちゃん」

「たっけるくん！ おー、やってるね！」

「よーっ、どした？」

あー……岳の妹。そしてその友達。

ごくごくまれに来るんだよなあ。

畜生、変わってくれ。おれもこんなかわええ妹が欲しかった。

修也との喧嘩？ はしたくないけど。

「んーっとねー、……あれー？ 何だったっけー」

『おい』

突っ込みは忘れません。

これぞ六年二組。

「ほらっ！ あれだよあれ！」

『あれって何だよ！？』

「あー、あれねー」

『分かるのか！？』

すげー。

「とゆーわけでっ！ 岳くん、かくかくしかじか」

『分かるか！？』

「おっけー」

『分かるのか!?!』

こ、これで分かるって……んと、なんと呼べばいいんだろう。

「とりあえず、そのかくかくしかじかを日本語でもう一度」

『日本語だ!』 『分かってなかったんかい!?!』

おお、クラスの人数半分ずつで突っ込むとは。

……もしかして、六年二組は全員奇人変人だったりする?

いや、『日本語だ!!!』の突っ込みがずれてるような気がしなくも無いけど。

82 面倒オカルト部

「あー、いー天気だなー」

「……現実逃避したいのは激しく分かるけど……今、雨降ってっからな」

純兄だってさっき現実逃避してたじゃん。

蜘蛛、もとい雲っていいなーみたいな感じで。

忍です。

さて、何故あたし達が現実逃避しているかというところ……。

「待ってよーっ!! ちよっと協力してくれるだけでいいんだってば!」

「少しだけ、ですから」

「その『少しだけ』がどれくらいかという突っ込みは受け付けないからな」

「……古賀先輩、もう少し協力してくれるような事は言えないんですか?」

つとまあ。

コレで理解できる人がいるかどうか分からないけど。

オカルト部の四人と、こないだ案内した子……この様子じゃ入ったのかな……。に、追っかけられてるの。

はー、もう最近昼休みの一部はコレで潰れてるんだよね……。

「ねえっ! 今日だけでいーからー!!」

『叫ぶな超音波!』

すばこーん

純兄と古賀（だっけ?）のハモリの直後にハリセンの音……。

もう後ろの様子が手に取るように分かるよー。

「とりあえず……せめて、今日だけ」

「昨日も今日だけつつってなかったか……?」

言ってた言ってた。よくいるよね、こういう人。

特に子供とか子供とか子供とか……。

「ほ、本当に今日だけですから！ ……ね？」

いや、そんな可愛い顔で『ね？』とか言われても……。

「やだと言ったらやだ」

純兄ってオンナノコに興味持たないよねえ。一生独身だったらどうしよー。どうもしないが。

「むうつ。この枝奈のプリチー笑顔に引っかけからぬとは！ おぬし等なかなかやるな！」

……いや、そう言われても……。
とゆーか誰？

「ちよっ！？」 私はそんなつもりは無かったですけど！？」

「うん、無意識でも可愛い！！」

「あうあう！？」

あー……、何か、後ろが何か訳の分からないことになってる。

「純兄、さっさと撒いちゃお」

「言われんでもやるわボケ」

だよねー。でもボケは無いだろうが。

「なっ！？」 さらにスピードを上げるとは……。何なんだお前等！
！」

いやー、何って、人間ですけど？

古賀、ちよっと小説か漫画の読みすぎじゃない？

「と言う冗談はさておき」

冗談……言うようには見えないんだけどなあ。

「ちよっと見てくれるだけでいいんですよ！」

『何をだよ』

「あ、やっと話聴いてくれた！」
しまった……。ここは返しちゃいけなかったのか。

「ですから、悪魔償還しますので償還できてるか『断る』酷い……話くらいちゃんと聴いてくれても……」

おーい、暗いオーラを出すなー！

「ちょっと!」

んむ?

「止まらないと……」

何?

「大声で叫ぶよ!!」

『もう叫んでるだろうが!!』

「えっ!? あっ……もっと大声で叫ぶよ!」

結局。

なんだかんだで鼓膜を破るような音を発する部長に折れ……。悪魔償還とやらに付き合わされることになったのだった。

83 悪魔、召……喚？

「いよっし！ コレで完璧だよ！ パーペキだよ！！」

雨は降り続いております。

グラウンドに書いた魔法陣なんてすぐに消えちゃうんじゃないの？
忍です。

何が悲しくてこんな雨の中海みたいなことになってるグラウンド
に出にゃならんのだ。

それより前に。

「何で魔法陣がそれなの！？」

「ふえ？」

魔法陣は魔法陣でも、縦横斜め全部同じ答えになるように数字を
入れる魔法陣なんだけど……？

コレで悪魔が出たらあたしは全財産ならぬ全お小遣いオカルト部
に寄付しちゃうよ。

「……本当？」

「後ろから出るな！」

部長か呼んでたので言うマコちゃん！

不気味だから！

「って言うか、口から出てた！？」

こくこく

そんなに顔かないで。

「よーし、それじゃ、行っきまーす」

とてもこれから悪魔召喚をする人の言葉には聞こえない。

「ランマスカミラエ・ママニスジャムエーリマ」

……一体この呪文にはどーゆー意味があるんだろう。

「我の朝餉は味噌汁、スープ、パン、米」

本とにどんな呪文だよ！？

しかも部長の朝ごはん、どーなの。

「夕餉のメニューは鶏肉、豚肉、牛肉」
野菜食えよ！

「……と、菓子パン」
健康に悪いから！ 絶対！

「一昨年の朝餉はエスカルゴ」

どんな朝ごはん！？ 金持ちだな。
って言うかよく覚えてたね……。

「アイムハングリー」

いや、突然お腹すいたって言われても困るんじゃ……。

「アイドンドライクゴッド」

天罰当るよ。

いや、神様いるのか知らないけど。

「アイライク納豆ベリーベリーベリーマッチ」

あ、そこ悪魔じゃないのね？

しかもご丁寧に納豆は漢字なのね？

……それはそーと、あたし達は何をやってるんだったっけ？

「悪魔召喚？ 何処がさ。」

シュー――

え。何か煙出てきたんだけど

「きゃっ！ 悪魔ですか！？ 出るんですね！ こんなので！」

こんなのって言ってるし。

魔方阵の真ん中から出てるけど……。何故に？

ぽんっ

と、軽快な音を立てて現れたのは……。

大体幼稚園児か、小学校低学年位の、

真っ黒な和服に身を包んだ、

黒髪の女の子一人と男の子が二人。

体が小さい順に瞳の色は赤、黄、青とゆー、信号みたいな色。
そこにいたのは……。

「死神トリオ！？」

「あ、やつほー忍ねえ、純にい」
何でまたこんなところに!?

……あと、足元で倒れてる老けたサラリーマンみたいな奴は何。
「あれ!?! 出てるの!?! 出てるの!?! わーい!!」

『叫ぶな』

おお、純兄と古賀(だっけ?)のツツコミがシンクロ。

……いや、純兄はハリセン出したりしてないけど。

「……それより……何した?」

「なにやらオカルトオタクが悪魔とやらを召喚したかったらしい」
「で、多分これは失敗だねー」

「……はあ。じゃあ寄付は……」

いや、元からする気なかったし。

「……剣、斬。あれどうする?」

天の指した先には。

なにやら髪を振り乱し、鬼のような形相で、地面を走っていれば
砂煙がもうもうと立つであろうスピードでこっちに向かってくる男。
ふつつー……に、怖い。

「おーまーえーらー……」成「ぐはっ!?!」

あ、見えない壁にぶつかった。

「行くぜらおん! 水龍! 大攻流!」

龍のような水が……えっと……らおん? に、向かって突き進む!

「え、ちよっ!?! ま……がぼっ!?!」

あ、流された……。

えー……安らかに眠りください?

「……なんだったんだ、あれ」

「あ、学校の先生」

『は!?!』

いいの!?! あんなに先生ぎったんぎったんにしちゃっていいの
!?!

「じゃ、私達授業の途中だったから」

「まったなー！」

「また、な」

あ、行っちゃった……。

足元に転がっていたサラリーマンの霊を引きずりながら。

84 こじつけことわざ教室!

「それじゃ、ことわざ教室を始めます」

「始めるよー!」

『はい!』

変なことわざは教えんなよー。

岳だ!

何か突然光とはーちゃんが菜美と神谷相手にことわざ教室を始めたからちよつと見てんだ。

「よし! じゃ、まずは……聞いたことあるかな?

『蟻も歩けば棒を上げる』」

違う違う違う!

いきなり間違えるな!

『犬も歩けば棒に当る』だろ!?

「意味はね、蟻さんが歩いたら棒にだって登れちゃうってことだよ」

まんまだな……。

って、違う! 充分予想はしてたけど意味も違う!

「蟻すっごい! こーくん蟻になりたい!!」

ならんでいいから!

「なみたんも!」

「うんうん、いつかなれるよ。覚えた?」

『うん!』

ならんでいいし覚えんでいい!

「じゃあ次行こー。」

『おへそ隠して足隠さず』」

どーゆーこっちゃい。

『頭隠して尻隠さず』だろ!?

「意味はね、雷がなって、おへそを取られないように隠しても、雷

さんは足を取っちゃうって事！」

怖えよ！？

雷さんハンパなく怖えよ！？

「じゃ、こーくん雷がなったらお布団に潜っちゃう！」

「なみたんも！ なみたんもー！」

お前等も信用すんなって。

「覚えてね？」

『うん！』

だから覚えなくていいってのに！！

「じゃ、次！」

『海苔に金棒』

海苔！？ 鬼だろ！？

「意味はねー、海苔に金棒を持たせてもあんまり意味がないって事だよ」

あんまりどころか全く意味ねーだろ！

大体どーやって海苔が金棒を持つんだよ！？

「じゃあこーくんが金棒持つ！」

「なみたんがもつもん！」

「こーくん！」

「はいはい、一本ずつ持とうね！」

『うん！！』

何本金棒あるんだよ。

「次ね」。

『赤巻紙青巻紙黄巻紙』

最早ことわざ関係ねーっ！？

早口言葉じゃねーか！？

……しかも、何か結構早口なのに引っかけってねー。

「あかまきやみあおまきやみきまきやみ？」

「言いにくーい」

早口言葉だもんな。

「意味はね」

あんのか!?

「赤巻紙も、あおまきまみ……も、きまきまみ……も、けっきよき
ゆ……は、色が違うだけで同じって、意味だよ!」

はーちゃん……噛んだな。噛み噛みだな。

「ね、巻紙って何?」

「んー……と、トイレットペーパー?」

巻物じゃねーの?

「多分ねー。きっと中国語で書くと手紙だよ」

何故に中国語で言い直すのかわからん。意味同じだし。

85 けつえきがたしんだん？

「……………わー」

シャクシャク

「……………へー」

シャクシャク

「……………おー」

「さつきから何読んでんだ」
純だ。

千マス計算（岳作）をやっていたら、何やら勝手に忍が入ってきて、何やら勝手に人の机の上に上がり、何やら勝手にリングを食べながらそこで読書始めやがった。

「んっとね、血液型診断」

「ふーん」

「あれ？ 純兄は興味ないの？ 面白いのにー」

「無い」

信じてねえし。

保険の教科書か何かに『脳は血液型を知らない』とか書いてあったし。

「んっとね、純兄はABだからー」

「興味ないって言ってるだろうが」

「またまたー、書いてあるのを見るのが楽しいんじゃないか」

信じる訳ではなくて？ そう読むものか？

「んっと、性格『クール』……ええと、涼しい？」

「いや、絶対違うと思う」

何だよ、性格が『涼しい』って。

ああ、でも和訳するところなるしな……。

あ、和訳すること自体が間違ってるのか。

「んと、で、『面倒臭がり』」

「否定はしない」

「あたしは全力で肯定したいけど？」

「そこまで面倒臭がりでも無いと思うけど……。」

「んで、『喧嘩っばやい』」

「否定する」

「幽霊によく喧嘩売ってるじゃん」

「あれは向こうか「買ってるじゃん」言い直すな」
にしてもそんな診断結果とか聞いたことねえぞ。
いや、まずこういうのも殆どしたことねえけど。

「さらに『動物にたとえるとミジンコ』……ミジンコって動物に入
れていいのかな」

「……ミジンコってどういう意味だよ。」

「えーと、『早い話が小心者』」

「どういう意味で早い話だよ」

「ミジンコと小心者にどんな繋がりがあんだよ。」

「あと、『ガキ』」

「……喧嘩売ってんのかその本は」

「んで、『実は……いや、なんでもない』」

「マジで喧嘩売ってんのかそれ」
なんでもないなら書くな。

「さらにさらに『ちよつとあんなものにも興味がある』」

「あんなものって何だよ」

「さあ？」

「……………」

「『実は……怖がり★』」

「『実は』の後の間は何だよ。『★』って何だよ」

「んー、さっきの『実は……いや、なんでもない』の奴かな？」
訳の分からん本だな……。

「あ、こんなのも書いてある『手のひらサイズ』」

「……どういう意味だ？」

「うーん……体重が手のひらサイズ？」

「意味わかんねえよ」

まず『サイズ』じゃねえし。

「じゃあ身長が五キロメートル以内とか」

「単位が明らかに間違ってるんだろが」

「細かいことを気にするな！ A型じゃないんだから！」

いや、確かにA型じゃねえけど

「……でも、清は全然細けえこと気にしねえけど」

「えええ！？ 清ってA型なの！？」

「何を今さら」

「B型かと思ってた！」

あー……そう言えば。

「一回も血液型当てられたことが事がねえって自慢してたな……」

「……だろうね」

ところで。

忍の食べてたリンゴが種とヘタだけになってるけど、いつ食った？

……あと、その本燃やしていいか？

85 けつえきがたしんだん？（後書き）

この作品はフィクションです。

こんな血液型診断書は存在しません。あしからず。

86 こんな起こし方をしてみた

「お父さーんー！」

「ぐおあっ!？」

「朝だよー！」

「……うーん。」

起こそうとしてるのに気絶させそうになっているとはこれいかに？
忍でーす。

「光ー、いきなり腹の上にダイブはきついんじゃない？」

「そうかなー？」

そうだと思うに一票。

「お父さんー、あーさでーすよー！」

「うう……後五分」

母親に起こされる小学生かアンタは。

「だめー！ えいー」

「ぐほあっ!？」

腹の上ののしかかり、再び！

……さて、ここで出てくる選択肢は二つ

一、このままほっとく

二、参加する

んー……、よし。

一にしよう。

え？ おとーさんを助けるって選択肢がない？

だって助ける気全く無いもん。

0・01ミリも。

だから増やすだけ無駄。

「おーっ！ 光、オレも混ぜて！」

「おーけー」

「よしやっ！ とうっ！」

岳乱入……、って、ちよっと待て！

岳までジャンピングのしかかり（？）はきついだろ！！

「うえあ！？」

『何でよけ（んの／るの）！？』

「いや普通よけるからね！？」

うん、流石に同意。

だって岳、小六じゃ背高いほうだし。

とーぜん体重だって光よりかずっと重いわけで。

「んー、じゃ、起きろ」

「……………ぐー」

起きろよ！？

「って、んな分かりやすい寢息（鼾？）立てる奴が居るわけねーだろ！」

とう、とゆー声と同時に拳が一発。

おとーさんの腹に入った。

「ぐおえ」

「ご臨終です」

「殺すな！」

あ、復活した。

「うっせえな……何やってんだよ」

『おはよー』

「いや、さっきから起きてたから」

ああうん、そんな気もするな。

『おはよー』

「だからさっきから起き『おはよー』……はいはいおはよ」

随分投げやりな挨拶ですな。

まあ投げやりにもなるかな。

「ほらほら、お父さんもお早うだよー！」

ゼットゼットゼット
「Z Z Z」

「分かりやすすぎるだろー！」

何もアルファベットを言わなくても……。

「起きないと……」

「次は何すんだ？」

「起きないと……」

起きないと？

「ええっと……うわー、選択肢が多すぎて選べないよー！」

どういう選択肢が頭の中を回ってるのか見てみたいんだけどな。

「よーしー、これで行こうー！」

『何？』

「朝ごはんのホットケーキ生焼けにしちゃうよー？」

……地味にやだなあ、それ。

だって生焼けだとねちよねちよするし。たまにお腹痛くなるし。

「……むにゃむにゃ」

「寝たふりがものすごくわざとらしいな……」

うんうん。

「むうー。じゃあねー、朝ごはんのホットケーキ焦げ焦げにしちゃうよー？」

うよー？」

焦げ焦げって。まずそー。

「ぐー」

……効いてないし

「んむうー。じゃあー、朝ごはんのホットケーキ生地を焼かないで出すよー？」

うわ、それは酷い。

……あたし的にはおいしいけどね。あれ。

うーん、深皿とスプーンがいるな。

「すーぴー」

「むむー、なかなか手強いー」

「本当にやらないと思ってんじゃねーの？」

んー、確かに。

「じゃあ、親父の朝飯のホットケーキは光オリジナルのホットケー

キの生地を光が焼いてそれを口に押し込む、とか」

いい加減朝ごはんのホットケーキシリーズから離れようよ。

「起きるよ、起きてるよ、さー、お母さんのホットケーキが朝ごはんだよなー」

おお、凄い効果。

ええつと、どっちを褒めればいいのかな。

光の料理とゆー言葉か、はたまた純兄が言う、とゆー現実味溢れる言い方か。

「ふふ、今日の朝ごはんのホットケーキは私が作っ……」
ばた

あ、トドメ。

87 ちょっと変えると

『ゴールで〜』

たたたたたたた……

『ウインク〜!』

ぱっちん!

光です〜。

あのね〜、はーちゃんと走ってね〜、それで止まってからウインクしたの〜。

名づけて『ゴールでウインク』〜!

ほら〜、もうゴールデンウイークでしょ〜?

『ゴールデンウイーク』を〜、

『ゴールデン—ウイーク』って分けたら〜……。

『ゴールでウインク』って聞こえない〜?

私にはそう聞こえるんだけどな〜。

「よっしひーちゃん! 次は……これ!」

ばば〜ん〜。

『このはしわたってはいけません』

う〜んと〜。『この橋、渡ってはいけません』か〜。

「こう切って……じゃじゃん!」

『このはしわ—たってはいけません』

『この橋は、立ってはいけません』だね〜!

「でも〜、これって『このはしわ』の『わ』を『は』に変えちゃってるよ〜?」

「うーむ、痛いところをつきますな」

誰の口調〜?

「こんなのは〜?」

『このは—したってはいけません』

『木の葉、慕ってはいけません』

「誰が木の葉なんか慕うのさ」

「うーん。純お兄ちゃんの友達のこと……うー……清くんとか？」

「じゃ、じゃ、次！」

『あやとり』？

「どうやって変えるの？」

「ほら、ここで切ったら」

『あやとーり』

『彩と理』

「彩ってだれ？ 理って居るの？」

「あはは……やっぱ無理があったね」
「もちろん！」

「これは？」

『こどものひ』

「こうするの？」

『こどーものひ』

『子土藻の火』

「いや、もはや当て字じゃん」
「ぴんぽーん。」

「思いつかなかったんだよ！」

「こんなのは」

『えすかるご』

『エスカレーター』

「はーちゃん。」

「全く別のものになっちゃってるよー！」
「うん！」

「力いっぱい頷いてくれなくても……。」

「あ、あ、じゃあ」

『まるたけえびすにおしおいけ』
「これって歌詞じゃない？」

「こーして」

『まるたけーえびすにーおしおーいけ』

『丸田家、恵比寿に、お塩行け』

「丸田家さんは恵比寿さんにお塩をやった！ とゆーか撒いた！
」

恵比寿さんは悪霊か何かなのー！？

丸田家は何ー？

「これはー？」

『あかいくつ』

『赤い靴』ー！

……あれー？

「はーちゃんー？」

「ひーちゃん、それ、正しいから」

……えー！！

『赤井靴』で『赤井さんの靴』じゃなかったのー！？

88 食べましょー

「なあっ!? ちょっと、ひでーよ! ずっこいだろ今の!」

「ふふふ、早い者勝ち。これがこのルールだ!」

「だー!ーもう! にーちゃん! 何か言ってくれよ!」

「ん?」もむもむ

「なっ! にーちゃんその肉は何処で!?!」

えーっと、これを一言でたとえるのなら……:戦場? 忍でーす。

晩ご飯に、庭で肉とか色々焼いて食べてまーす。

うんまあ、こういう時は90%の確率で海中一家も混ざるんだけど、今回もそのルールのなものには逆らわず、なっくん達もいるよ。

「お兄ちゃん! あたしのフランクフルト食べたでしょ!」

「んあ? 俺フランクフルト一本も食ってねえんだけど」

「え!?! じゃあ誰が……皆動かないで!?!」

いや、動くなって。

動かなかつたら出てくるわけじゃあるまいし。

「はーちゃんごめんね、食べちゃった」

「なーんだ。ひーちゃんだったら許すよ!」

何でなっくんには怒るのに光には怒らないの?

「純、その肉俺にもよこせ」

「断る」

あれ、なっくんいつの間にあっちに?

あたしも混ざろー。

「純兄その肉あたしにもよこせ!」

「テメエのは皿の上に乗ってんだろが」

しまった! バレた!!!

いや、隠してなかったけどさ。

「そうそう、だから純の肉は俺のもの」

「馬鹿、俺の肉は俺のものだ」

おお、何か肉をめぐって小さすぎる争いが発生。

「わっ!？」

「あっ! 忍ちゃんごめん!」

あー、箸落ちちゃった。

「何してたの?」

「お母さんがよもぎ……じゃなかった、きゅうり食べなさいって
言ってくるから逃げた!」

よもぎときゅうりには何処に間違える要素が。

「ほら、春。少し位食べなさい」

「やだー!」

あ、行っちゃった。

……あ、箸の存在忘れてた!

「んー、落としちゃったけど三秒ルールで大丈夫だよね!」

『三秒どころか三十秒以上経ってるから』

うう、純兄となっくんにシンクロで突っ込まれた。

「はい、箸」

「ありがとー」

割り箸だから落としちゃった分は肉焼くところにぽい。

ざ・リサイクル!

うんうん、大切だよね。

「だーっ! 何で父さんはオレが取ろうとした奴片っ端から取って
くんだよ!」

「取ろうとしてたのかー、それは知らなかった」

「嘘つけ! オレが取ろうとして箸出したらその先の肉取るくせに
!」

「んー? そーだっけー?」

口調が語ってます。

「お母さん、焼きおにぎりするの?」

「するよー。一個だけ当たり作ろうかー」

『おー!』

………おい。

当たりって……つまりハズレじゃ?

「さてー、この中に一つだけ当たりがありますー」

「誰があたりを引くことが出来るでしょーかつ!」

引きたくない当たりだね。

何が入ってんだか。

「んーとー、お姉ちゃんから右回りねー」

「まだ食べちゃダメだよー」

う……一番最初って一番迷うんじゃない?

当る確立は九分の一だから大丈夫!

………ということにしておこう!

はい、ちなみに引く順番だけ言っとく、もとい書いてくね。

あたし

←

なっくん

←

はーちゃん

←

光

←

おかーさん

←

秋ちゃん(春&夏母)

←

冬くん(春&夏父)

←

おとーさん

←

純兄

ってな感じです。

……おとーさんだけ名前無いんだよねー。どうでもいいけど。

「じゃあ皆でせーのーで！ ……で、食べるよ！」

ややこしいな、食べかけちゃったよ。

「せーのーで！」

ぱくっ！

『辛っ！？』

何で！？ 何で皆辛いの！？

「ん？ なんともねーじゃん」

「はうゝ、当たりは岳お兄ちゃんのようにでゝすゝ」

『は！？』

当たりは一個って……。

何も入ってないのが一個だけって事！？

89 霊ちゃんの苦手は

「あゝ、へゝわだ」

そして暇だー。

どっすつかな。わざわざ修也ん家までからかいに行くのもあれだしな！。

岳
で
い
。

『しくしくしくしくしくしくしくしくしくしく』

三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三十六、三
十六。

って、え？

今の九九じゃねーよな。泣き声だよな。

「どこだ？」

『しくしくしく、しくしくしく』

……何かわざとらしく聞こえてきた。

ん、植木鉢の陰に女の子居るけど、無視だ無視。

「へーいわだなー」

『ちよつと！ 女の子が泣いてんのよ！ 反応位しなさい！』

何コイツ。

「はあ」

『えっ！？
嘘！？
見えてるの！』

「見えてねーよ」

『見えてるじゃない！』

見えてねーもん。

「見えてねー、見えてねー」

『いい加減に死なさい！』

おーい、死じゃねー！
しだ！
ひらがなだ！

「はあー。何だよー」

『うふふ、あ・の・ね!』

「聞くのやーめた」

『何だよ!』

いやだって、うっとしかったんだもん。

『聞いてよ!』

「えー」

『聞きなさい!』

「命令形!？」

まーったく、何だよコイツ。

『いいい! 耳の穴かっぽじって聞きなさい!』

「んー、やだ」

『聞きなさいってば!』

「わーったわーった」

耳元で叫ばないでくれー。

『ふふ、あのねー』

うわぁ。声がすっげー変わった。

『あれ? えっと……なんだったつけ……あれー?』

おーい。

「はい、思い出せねーんなら聞けねーなー、残念残念」

『あっ! 思い出した!』

あー……残念残念。

『あのね! プランターの端っこにね!』

プランターの端っこー?

『でんでんむしちゃんが居たの!』

……………。

「……で?」

『かーわいいでしょ! 見てよ!』

「見たら成仏すんのかー?」

『えー……うう、分かったわよう』

あり? こんなあっさり行くとは思わなかった。

『ほらっ! こっちよ!』

「……って、これ……どっからどーみてもナメクジだろ？」
殻ねーんだけど。

『ええええええー！？ いやーっ！！ナメクジいやーっ！』
「え？」

すげー、何かナメクジって分かった途端飛んでった。

……わっかんねーユーレイだったな……。……。

90 盗人姉弟参上!

「じゃじゃーん! 未理阿ちゃんでした!」

「霧瑠依くんでしたー」

……………えっと。

どー反応しろと?

忍です。

何か、突然変な子×2が入ってきたんだけど…………。

薄い水色のローブ(って言うんだっけ?) 着てる女の子と、男の子。

大体小学四年位じゃないかなー。

「えっとー、どちら様で?」

「双子の姉弟、ミリアちゃんアードムルイくんでした!」

「えっとー、風邪の民、らしいよー」

「風邪じゃないでしたー! 風でした!」

……………分からねー!!

って、また誰って聞いても同じ答えが返ってきてそうだから質問を変えよう。

「何しに来たの?」

「しらなーい」

「ムルイくん! 寄付してもらいに来たんでした!」

何の寄付?

ちよっと昨日買った本でお小遣いやばいんだけど。

「お母さんがね…………お母さんが…………」

ん? 何か目がうるうるに。

「死にかけだからお薬買うための寄付でしたー!」

なんだろ、ものすごっく胡散臭い。

「お母さん死にかけてないよー。大体一ヶ月以上会ってないーい」
おい。

二人でぜんっぜん話が違うじゃんか。

「ムルイくん！ またまた騙すのに失敗でした！
おいこら。」

「結局何がしたかったの」

「えっとねー、ミリアちゃんはお金を騙し取りたかったらしー」

親の顔が見たい。

親の職業は何だー？ 詐欺師か何かかー？

「ムルイくん！ バラしちゃだめでした！」

「盗めば楽なのにー」

親の職業に盗人疑惑が新たに浮上中！。

「あーっ！ でした！」

「あー」

ん？

「ムルイくん！ 逃げるでした！！」

「おけー」

ふむ。

がしっ

「何するでした！」

「はなそー」

とりあえず足をつかんでみました。

いや、だって。何かあたしの大切なお小遣いを盗るつもりだったらしいし。

「ああ！ 来ちゃったでした！」

「見つけ！」

あれ？ 剣？

「あ、しいねえ」

「……協力感謝」

天に斬！？

もう、何が何だか分からない！

「んじゃ！ 戻りましょー！ 未理阿先輩に霧瑠依せーんぱい」

先輩！？

「バナナ一か月分の約束ですよね？」

バナナ一か月分って！？

「……約束、破ったら……これ」

ざーん！ その手の中の小瓶を放しなさい！

どす黒い液体を捨てなさい！！

ああ、適当にばーいっと捨てられても困るけど……。

「うう、分かったでした！ 次は負けないでした！」

「うー、ミリアちゃんがお金騙し取りに行こって言うからー」

「ムルイくんだって賛成したでした！」

えっと、説明をしてくれないかなー。

「あ、忍ねえ。この二人学校の先輩なんだけどな、人間界に逃げたのが見つけれたらバナナ一か月分くれるって言うから……」

「何となく参加してみたんだ」

「……違う、天がバナナ欲しい言ったから」

「ちよっ、斬！」

へえ、天の好物はバナナ？

でも一か月分って……漫画とかでよくありそうな商品だねー。

……あ、それだったら一年分かな？

「じゃあ、バナナ盗みに行くでした！」

「おー」

待て待て待て待て待て待てえい！

90 盗人姉弟参上! (後書き)

ミリアちゃんとムルイくん。

ミリアを一文字ずつ下にずらすとムルイになります。

はい、どうでもいい裏話でした。

91 積み木タワー

「そーっとだよ！ そーっと……」

「分かってるよ」

そーっと、そーっと。

四段目完成！

光です。

はーちゃんと積み木でね、タワー作ってるの。

ほら、ひらがなが書いてあって、裏に絵が描いてあるような平たい積み木ってあるでしょ。

『あ』で『あひる』とか。

あれをね、一段三個で積み重ねてるの。

「つ、次ウチね……そーっと……つよし！」

五段目完成。

「そーっと……」

あわわ、ぐらぐらしてるよ！

……せーふ。

「七段目行くよ！」

がらがらがら

『あーっ！』

「五月蠅いっ！」

うう、はたかれた！

「だって、なっくん！」

「せっかく七段目までいったんだよ！」

「そりゃー、十何段かいつて崩れたんだったら悲しいの分かるけどさ……」

わーっ！ それは悲しいね。

「お兄ちゃんは最後までいったことあるの？」

「ん？ 一応……もう少しで完成って所までいつて崩れたからムカ

ついで止めた！」

一回で〜？

「なーんだ。お兄ちゃんいったことないんじゃないん？」

「俺はな。純と忍はいった筈だけど……」

「純くんはともかく！」

「お姉ちゃんがいったことあるなら私達も〜」

『出来るよね（〜）！』

やる気が出てきた〜！

「……判断基準がイマイチ分からん」

なっくんが何か言ってるけど虫〜！ じゃなくて無視〜！

再び挑戦〜！ の十段目〜！

「ひーちゃん！ 十段だよ！ 次で！」

「お〜！」

「では任せた！」

「任せれた〜！！」

そお〜つと〜……。

「うわっ！？」

どどどどどどどど

「わ〜っ！ 何〜！？」

がらがらがらがらがら

『あ〜！！』

「ちよっとお兄ちゃん！ 何やったの！？」

「びっくりして崩しちゃったよ〜！」

せっかくの十段目だったのに〜！

「悪い。ちよっと階段で足滑らせて……」

『お兄ちゃん？』『なっく〜ん〜？』

「あー俺、純ん家行って来るなー」

逃げた〜！

でも何で上に逃げるの〜!?

またベランダから行く気だな〜。

「も〜……ひーちゃん、やろ!」

「うん〜、ごめんね〜」

「ひーちゃんは悪くないよ! 悪いのはお兄ちゃん!」

三度挑戦〜! あきらめないもん〜!

三度挑戦〜! の十五段目〜!

「はーちゃん〜、もうすぐ完成だよ〜!」

「うん! ……そ〜っと」

よし〜!

うう〜、最後の一段〜……。

ぐらぐらしてるし緊張するよ〜。

一個目〜……二個目〜……。

これで最後〜!

三個め〜!

「はーちゃん〜!」「ひーちゃん!」

『出来た〜!!!』

……あ、最後二つ残ってるな〜。

「ひーちゃん、これ最後にT字に乗っけようよ!」

「そうだね〜!」

一個〜……二個〜!!

『やった〜!』

ぴよ〜ん

嬉しくて飛んじゃうよ〜!

ぴよんぴよんぴよんぴよん

「やっ、たっ、ねっ!」

「う、ん、〜!」

どんどんどんどん

がらがらがらがらがらがらがら……

……。

『あああああゝっ！！』

92 よくある話？

「やれやれ、プラレールとはお子さまですねー」

いや、お前も子どもだろうが。

確か小三だったはず。

純だ。

「ここは、ろーやだから入っちゃダメよ！」

プラレールするんじゃないかったのか？

お袋と秋さんの友達が来てて……、で、その子供の相手をさせられてたりする。

頼まれたわけではなくて……何故か巻き込まれて。

光と岳と春はノリノリで遊んでるけど。

「ほらほら、日向子ひなここっちこっちー」

あー……忍もだった。

「純ー、おお、何かよく分からんが凄いことになってるな」

「ん」

「あれ？　なんでここ閉まって……」「開けちゃダメー！　ろーやなの！」牢屋……なんで？」

意外と子供って閉じ込められるの好きだよな……。

確か忍もやってたような。

トイレに閉じこもるもんだから大変だった。

「見て見てー、光ちゃん！　びゅーん！」

「わー！　凄いねー！」

高いところも好きだよな。

「忍ちゃん忍ちゃん！　高い高いして！」

「はゆたんはゆたん！　ぐゅぐゅして！」

「ひかりちゃんだっこー！」

……遊具と化しているような気がもの凄くする。

「オレは！？」

『どんまい岳』

「にーちゃん達ひでえ！」

じゃあ何を言えと。

夏、笑いすぎ。

「岳くんプラレール出来たよー」

『早っ!?!』

……あ、脱線するであろう場所がぱっと見ただけでも数箇所。
ところで所々プラレールとは関係ないものが組み込まれているの
は何故だ。

ビデオテープとかビデオテープとかビデオテープとか。

「子供らー! ピザ来たよー!」

「お寿司もー」

『わーい!!』

……一瞬にしていなくなった。

食い物ってすげえ。

「やれやれー、ご飯に釣られるとはお子さまー」

「里奈、行きたいんでしょー、行こ」

「あう。うん!」

結局行くのかよ。

「おーい」

『……………』もぐもぐもぐもぐ

「……食い物ってすげえな。こんなに静かになるって」

いや、声を発してないだけでかなり激しい争いが繰り広げられて
るけど。

忍がマグロを取ろうとするだろ?

すると横から電光石火の早業で実由が取る。

……と、その繰返し。

「はーい、お兄ちゃん達の分ね。難を逃れた。つまり人気の無かつ

たネタ」

『あ、どうも』

はつきり言うな、この人。

「ホタテにアジにネギトロにウナギって……人気ねえのか？ 本当
に」

「少なくとも忍^{しのたけひかり}岳光は食べねえな」

「……あ、違う、お菓子に行ったんだあいつ等」

……まだ一時なんだけど。

「ポテエトオ！」

『わー！』

なぜにわー？

「……あ、純純、あっち見ろよ」

オバサンもとい大人の方？

……何だかポテトよりは大分高そうなお菓子が数種類。
そしてちゃっかりそのお菓子を盗ってはパクつく忍。

「行くぞ夏」

「あ、やっぱり？」

当然だ。

「あ、純兄ー、なっくん。おいしいよこれ」

忍、その手に持つてるのは何個目だ。

「んじゃ俺も貰お……って。ねえし」

「あーごめんねー夏君純君！ 食べちゃった」

……まあ、予想はしてたけど。

93 猫猫会議

『さて、今日の議題は……何故人間の子供は魚が嫌いなのか！
で
あゝる』

『議長！』

『なんだ』

『僕の飼い主の男の子は魚大好きです！』

『議題変更！ 何故人間はキャットフードを食べないか！』

結局食べ物なん！？

クロで。

白猫だけどクロって分けわかんない。

あ、ミイがわかんない人は46話を見。

まあとにかく今は猫猫会議に集中しよ。

『ふむう、確かに人間がキャットフードを食べないのは不思議です
なあ』

『うちに赤ちゃん居るんだけど、その子がキャットフード食べよう
としたらお母さん止めるんだよ！』

『あ、うちもだ。「ばっちいから止めなさい！」って怒るんだ』
はっ！ こ、これっ！？

『人間はキャットフードが汚いものだと思ってるん！』

『『ななっ！？』』

『キャットフードとは人間が考え出したものだろう！？』

『わたくし達はばっちい物を食べさせられていたということです
！？』

むむ、人間！ それは酷！

『でもでもおゝ、ちよおゝと待ってくださいよおゝ？』

『何だミルク』

『はいゝ、人間が食べるものですけどねゝ？ 例えばチョコレ
ー
ト……皆さん食べますかあ？』

チョコレート？

あの茶色い、べとべとの奴？

『食べないよおっ！ ぼくぼく、あんなべとべと食べない！』

『うむ。我輩も食わん』

『ちよつと舐めてみましたけど、舌がじーんてなるほど甘かったですわ』

『ミイも食べな』

『ですよねえ。それと同じような感じでは無いですかあ？』

わあ！ そういう考え方があった！

『なるほど！』

『納得ですわ！』

『では盛り上がった所で次の議題行きましょう！』

何故人間はネズミを食べないのか！』

『ぼくぼく、ネズミ食べないよ！？』

『ミイも食べな』

『俺も』

『わたくしも食べませんわ』

『ええ、私も……』

『我輩も』

議長は食べるのか？

『……まずネズミなんてそうそう見ないよなあ』

議長も食べないのか！

『絵でしか見たこと無いな』

『そうですな』

『わたくしの飼い主は猫がネズミを追いかけてやられるアニメが好きですの。でも、そんな光景実際には見たことはありませんわ』

『あ、ぼくぼくネズミは森の中に居るって聞いたことあるよ！』

……森の中行ったら、迷っちゃうと思。

『よし！ この件は保留で！』

それでいいの！？

94 理科の先生を怒らせるべからず

「はい、それでは始めー。よいどん！」

何故に理科の実験始めの合図がそれ？

忍でーす。

硫黄と鉄の化合の実験……を、始めたところ。

「はい忍、硫黄と鉄の混ぜ混ぜ頼んだ」

「頼まれた」

最初っから混ぜてくれたら楽なのになー。

いや、混ぜるだけだけどさ。

「せんせー、遅れましたっ」

ありゃ、清。

そーいや居なかったねえ。

……斜め前の席の、それも結構うるさいほうの人間がいなかったのに気付かなかったあたしって？

「高崎君遅刻ー、はい、何してたの？」

そう言う事言いながらノートに書き込まれるのって見ててちよつと怖いよなー。

……と、前に清が言っていた。

「実は腹痛くて保健室に」

「清ー、嘘つくなよ？ あはは」

おー、なっくんナイス。

清ー、嘘はいけないよお？

「う、実は頭が「はい嘘おー」捻挫して「……体育なかった……」階段から落ち「高崎君、怒るよ？」あう」

ちなみに、最初が桜で次が水谷。最後は先生ね。

はい、清の言ったことをつなげてみよう！ の巻。

『実は頭が捻挫して階段から落ちた』

……何か凄いことになってるな。

「くそっ！ 白状します！」

「はい、何？」

「昨日の晩熱出した母の看病してて寝てしまつて遅れました！」
『嘘つけ！！』

それは学校そのものに遅刻した時の言い訳でしょうが！！
ぜったいにそれでは言い訳できないだらうけど！！

「高崎くん？ 白状するんじゃないかなあ？」

「先生怖え」

何か黒いオーラが見える。

そして超のつくにこにこ顔が怖すぎる！

「どうしても君は硫化水素の臭いを嗅ぎたいようねえ……。硫化鉄
できた班！」

『はい』

実はあたしたちはしつかりやってたのだ。

そしてさっきからゆで卵の白身の臭いをきつくしたよーな、教科
書で言う『腐った卵のような臭い』がしつかりと出てたり……。

うーん、一応知ってたけどこんなにきついとは思わなかった。

「ちよつと貸してね？ ……さーあ、高崎君、君の鼻の寿命はこれ
までよ。ふふっ。塩酸を入れるから試験管の上にお鼻を持ってきた
さい」

おー、ひどい罰だー……って！？

「先生ストップ！」

「それ危険だから！」

「だから実験の後で水入れなきゃいけないでしょ！？」

「あらら、そうだったわねえ。じゃあ薄めてない塩酸ぶっかけの刑
で許して『余計危険になってるから！』」

この人大丈夫か！？ よく教師になれたな！？

「じゃあクロロフォルムを嗅がせ『眠らせてどうする！？』じゃあ
何ならいいのっ！」

いや、そこでキレられても……。

っていうかクロロフォルムなんてあるの？

「金魚丸のみの刑」

なっくん、何そのトンデモない刑。

「だめ！ 金魚さんがかわいそうだと思わないの！？
清の心配はせんのかい。」

結局。

今回の実験で使った実験器具洗いの刑になりましたとさ。

95 雷ごろごろ

ピカアツ

……………

どーん！　ごろごろごろごろ……

『きゃーっ！！』

雷怖え！

いや、雷は怖くねーんだけどな？

雷鳴った時の女子の悲鳴が高くて高くて怖え！

岳だ！

「怖いよオ！　学校に落ちちゃったらどーしよー！」

「避雷針あるから」

「それでも怖いよ！」

んと、何か叫んでるこいつは……里山璃々（さとやまりり）だっ
たと思う。

「ところで修也は怖くねーのー？」

「はあ？　何がだ？」

「いや、この流れるに雷だろー？」

「まさか。お前は怖いのか、くく」

おーい、笑うなー！　誰が怖いと言った！？

「修也怒るぞ！」

「それは怒ってねえのか」

怒っとする。

ところで。

なーんで話し中なのに攻撃されてるんだオレは！？

まあ、いつもの事だけどー。

「岳ー」

「何だー？　最近出ても台詞一つしかない翔」

「……酷い。そのうち転ぶぞ？　床湿ってんだから」

「もうとつくに転んだ!」

「いやそこ威張るなよ」

えへん。

別に転んでも痛かなかったけどな。

あ、ただ床の木の臭いがきつかった。

ペカッごろごろごろ……

『きゃーっ!』

耳がいてー。

「ちよつと! 近くなかった今の!？」

「近いよォ! 近いよォ! 一秒も無かったよ!？」

学校ん中いたら大丈夫だろー?

避雷針あんだし。

「せーんせ、何食ってんの?」

「雷ビスケット」

何そのまんまな名前&形のビツケ。稲妻形って。

一枚いただき。

ぽりっ

ぱちぱちぱちぱちぱちっ!

「んにゃっ!？」

口がー、舌がー、しーびーれーるー。

「ほら、雷ビスケットでしょ?」

んー、まだしびれる。

もう一枚いただき

「しゅーうーやっ」

「いらん」

そー言わずに、はい、口開けろー。

「と見せかけて、はい翔!」

「むぐ!？ むむむむむむ」

うんうん、旨いかー。何かよーわからん声発してるけど。

「お、オレ今日はお菓子貰うのやめとこ……」

「あたしも……」

うん、正しい判断だと思うぞ。

ぴかっ

どーんごろごろごろごろ

『きゃーっ!』

そんなに叫んで疲れねーのかな。

オレの鼓膜は大分疲れてんだけどー。

と鼓膜の声が聞こえるような気が……しない。

96 岳と蛙

げこーっ、げこーっ

「はぁー」

「……純兄どーしよ。岳が暗い」
暗くて変で怖い。

蛙の声聞きながら溜息ついてんだけど。
忍でーす。

学校から帰って来たらなにやらこんな状態だった。

「ほっとけ」

「ほいな」

あれ？ ほっといていいのか？

……まあいいや。

「ねーちゃんとにーちゃんがひでえ」

岳、君は一体何に話しかけてんの。

「どったの岳」

「あんなー、裏山オリエンテーリングあるじゃん？」

ああ、小学の毎年の恒例行事。

学校の裏山登って、頂上でアメ貰って帰って来るだけなんだけど
ね。

……裏山には名前無いのかなあ。

〇〇山とかって。裏山が名前？

「で、今日雨じゃん？」

「延期になった？」

今日だったんだー、って感じなんだけど。

「ううん。中止……はーっ」

岳……そんなに楽しみだったの。

まあ、岳六年で最後だしねー。

小学ん時『雨学年』と呼ばれたあたし達でも晴れたのに。

五年の時の林間学校なんかは嵐だったけど。

「中止になったせいでな!？」

あれ? 続きがあるの?

「授業があっただよ!」

そっちなか!?

そっちなのか!?

「オマケに!」

まだあんの?

「教科書全部忘れた!」

うわ。それは悲しい。

「置き勉強してねえのか?」

純兄、小学生って普通置き勉強しないんじゃない?

あたしはともかく。

「いつもしてたけど」

してんのかい。

「そのつもりで偶然うっかり持って帰っちまってさ……」

どのつもりだよ。

「とりあえずそんなこんなでオレは凄く落ち込んでるんだ!」

そんなに力いっぱい言わなくても。

「岳お兄ちゃん」

「んあ?」

「見て見て、捕まえたの」

おー、蛙……。

「って、大丈夫かこの蛙!？」

何か凄いぐたーってしてるけど!?

いったいどーゆー捕まえ方をしたらこうなんの!?

捕まえたのが何分も前なら分かるけど……。

それならもっと前に持ってくるはずだし。

「あのね、はーちゃんとイロイロ使ってギリギリまで追い詰めながら遊んでね」

光、はーちゃん、それはあんまりだ。

「……ねーちゃん」

「ん？」

「オレ、何かちょっと元気になったわ」

何故に。

「この蛙の方がよっぽど大変だよな……うん。こんなことで落ち込むなー、オレ」

……やっぱ、今日の岳変だ。

97 鶴を折ろう

「それじゃ、折り紙配るのでとりあえず一羽ずつ折ってください」
わく、わく、千羽鶴だ。

いや、だから何って訳でもないけど。
忍です。

修学旅行でね、長崎行くんだけどそれで千羽鶴を折ろうって事になった……らしい。

聞いてなかったから分かんないや。

「篠く、折り紙変えて」

「いいけど……何で？」

「わたし黄色嫌い！」

小学生みたいな理由だなー。

「あそ。はい、赤でいい？」

「うん、ありがと」

……そー言えば。

赤も黄色も千羽鶴で使っちゃいけないんじゃないかな。なかったっけ。
よく見れば純兄黒だし、なつくん金だし、清銀だし。

よく金銀取れたなあ……。

オマケにあたし白じゃん。

使っちゃいけない色のオンパレードだっ！

まあ、たいして関係ないらしいし、いっか。

「……忍、鶴の折り方ってどんなだったっけ？」

ありゃ、なつくん忘れたの？

「三角に半分折って、さらに半分折って……」

「ああ、分かった、サンキュ」

コレで分かるの！？

最初の最初だけなのに！？

まあいいや。

あたしもさっさとやろっと。

「……………篠」

「お前意外と不器用だったんだな」

「うっさい」

言われないと鶴って分かんないんだけど……。

羽がある事くらいしか。

「幼稚園の時はもっと酷かったぜ？」

これ以上!?

「だって羽があるかも分からな……ぎゃっ!？」

「うっさい」

しーちゃんが怒ったあ！

「篠の怒りの鉄拳！ 清君の後頭部にヒットしました！」

「そーいや清のは？」

あ、机の上にあった……って、

「テメエは折ってもねえじゃねえか」

「オレは十五秒あれば出来るからな！」

早っ。

「じゃあやってみて。よーい……」

桜、その手の中にあるストップウォッチは何処から出した!？

「スタート！」

1……2……3……

早っ!？

もう正方形に開いて潰すまで行っちゃった。

「……15！」

「セーフ」

……ぎりぎりで十五秒だったんだね。

「すげえ！」

「何か凄い綺麗だし……」

この才能の一部を数学に割けたら……。
何も変わらない気がする。

98 お友達できちゃった!

「えいっ!」

わゝ、ダブルアウトだゝ!

はーちゃん凄いゝ!

「わあっ!?!」

当たっちゃったゝ!?!?

はーちゃん……ええとええとゝ。ドンマイゝ。

光ですゝ。

お昼休みだからねゝ、クラスの人たちとドッチボールしてるのゝ。
前はこの時間寝てたのにねゝ、はーちゃんに連れてこられちゃったのゝ。

「高山っ! 取れ!」

「ほへゝ?」

わわゝっ! いつの間にかボールがこっちにゝ!?

「えいゝ」

セーフゝ、なんとか取れたゝ。

うゝん、何だかまだ外で遊ぶの不思議な感じするなゝ。

皆でいっばいで遊ぶの、はーちゃん来てからだもんゝ。

はーちゃんゝ……にボール渡したいけど人いっばいいゝるなゝ。

「佐紀^{さき}ちゃんゝ」

「はーいっ! ありがとねん、ピカちゃん!」

何で私はピカちゃんなのゝ?

佐紀ちゃんいっつもこうなんだよゝ。

皆に変わったニックネームつけるのゝ。

「ムー〇ン覚悟!」

「俺は某カバそっくりの妖精じゃねえっ!」

ムー〇ンの名前は睦月^{むつき}くんねゝ。

『む』しか合ってるないよゝ。

ありゃゝ、取られちゃったゝ。

「よしっ」

「あっ！ みよよん危ない！」

みよよんゝ？

あゝ、相手コート近くで本読んでる子かなゝ？

危ないってことは味方なんだよねゝ。

……ドッチボールしながらよく本読めるねゝ。

「え、村田いたのか！？ 影うつすいなお前」

……佐紀ちゃゝんゝ。バラしちゃってどうするのゝ。

みよよん逃げろゝ！

「………美代^{みよ}、こっち………だけど」

みよよんって美代ちゃんって言うんだゝ。

「えっ？ あれっ？ だゝもう！ ややつこしいからアッチ投げる

！」

えゝ！？ こっちゝ！？

はわゝ、逃げなきゃゝ。

美代ちゃんのところ逃げたらわかりにくいかなゝ。

「美代ちゃゝんゝ」

「……影うす横へ………よゝこそ」

「ほゝゝ？」

影うす横ゝ？

『影が薄い人の横』かなゝ？

さっきの傷ついてたのかなゝ。

「何読んでるのゝ？」

「……『知ってるようで知らないどうでもいい事』」

……不思議な題名だねゝ……。

美代ちゃんがまず不思議な子だけどゝ。

「ひーちゃん危ないっ！ 後ろ後ろ！」

ほゝゝ？

わわゝっ！ 真後ろ三十センチ以内に睦月くんがゝ！

……当たったんだね。」

そしてはーちゃんが入ったんだね。」

「あう、当たっちゃった。」

「よっしゃ、入れる！」

一歩進んで、はい外野。」

私命中率もスピードも低いから一遍出たら入れないんだよね。」

お姉ちゃんも言ってたよ。ダーツの的には当たるのにドッチボールでは的が動いて当たらないって。」

だから美代ちゃんとお話ししてよ。」

「美代ちゃん、今日遊ぼう。」

「今日？ ……今日、ピアノ。」

ありやう、ピアノか。」

「明日は？」

「……大丈夫。……家どこ？」

「水ヶ丘町。」

「それは……全員。」

だよ。」

「うーんとね、うーん……学校で待ち合わせて行こ。」

「……うん。」

もしかしたら私から誘って遊ぶ人って美代ちゃんが初めてかも。」

明日楽しみだな。」

99 ベっこう飴作ります

……さて。

これはどーゆー事だろう。

皆で考えよう。シンキングタイム！

……って、何を考えるか分かんないね

忍でーす。

何かね、光達がまた台所に居るんだけど……。

光にはーちゃん、で、何かもお一個居んのよ。

人を一個って言っちゃいけない？　じゃもお一人。

「あ、お姉ちゃんお帰りー」

「いや、あたし何処にも行ってなかったから」

なのに『お帰り』ってちよつと傷つく。

「……お姉さん？」

「そ！　忍ちゃん！」

「美代、です……おじゃま……しています」　ぺこり

わー、礼儀正しい。

「なっくん見習え」

「何だよ」

「何でって」

そりゃー、いつもベランダから入ってくるといふ不法侵入が礼儀正しいなんて言えないし。

「わーっ！　焦げてるよー！」

「わわっ」　「……わー」

フライパンから煙がーっ！

……って、何作ってんの？

「うわ、べっこう飴か。何か懐かし」

小学の理科クラブでやったなー。

「あー、コレ食べれないよー」

「美代に、ちょうだい……」

食べるの？ 体に悪そう……。

「……兄上に、お土産」

『おいっ！』

美代にも兄さん居るの！？

とゆーか何で兄上！？

あと光！ はーちゃん！ 親指を立てるなーっ！

「どんな感じだったか教えてね！」

「……写真、撮っとく」

おいおいおい……。

止めるのやめた。頑張れ、美代兄^{あに}。ははは。

「最近の妹はこんな奴しかいねえのか？」

「あたしは！？ あたし純兄の妹！」

「あ」

『あ』 ってなに！？ 『あ』 って！

「よし、気を取り直してもう一度」

アルミカップに……

どさっ

砂糖を入れ……

「って、多っ！？」

「あゝ、失敗」

よかった、失敗で。

明日砂糖がなくなったらどうしようかと思った。

いや、明日砂糖使うわけじゃないけど。

「水入れるよっ！」

ばしゃっ

「おい、水は数滴で充」……フライパン、入れる……ね「おい」

うーん、さっき焦がした奴は焦がしさえしなけりや普通に出来たのに……。

これじゃべっこう飴じゃなくて砂糖湯になっちゃうよ。

「ところで忍、純は何処行った？」

「岳の友達とナ○プレしてる」

何でまたそんなことになったんだか。

「岳の友達？ 岳は？」

「他の二人の友達とゲームしてる」

赤い帽子にヒゲのおじさん達がカーレースするやつで。

「よし、じゃ俺はそっちに混ざろ」

ありゃ、行っちゃうの。

「お姉ちゃん」

「何？」

「砂糖が消えたのっ！」

「……砂糖の、色の、水だけ残った」

溶けたんだよっ！

100 ただ暴裏話！ その一

「じゃじゃん！ そんな訳で、ナントただいま暴走中！略してただ暴第100話だぜい！」

「どんな訳で？」

「さあ」

「おーい、盛り上げろよ！」

「こんにちは！ そんな訳で、どんな訳かはともかく作者の呪理阿じゆりあです！」

「100話で何するの？」

今日は裏話と言う事で、キャラをどういう理由でつくったか、と名前の由来を……。

「後付か」

何故断定するのかな純君？

違います！ 名前は考えたっちゃ考えたんです！

考えてそれか、とか突っ込まれそうですけど。

さて、まずは忍。

「ん？ あたしから？」

彼女の名前は、私が初めて投稿した『おとーさんが語るお話』シリーズの『おとーさんが語るお話 桃太郎』の、突っ込み役を作ったときに考えました。

「由来は？」

うちの母に『男にも女にも居るような名前ない？』と、聞いて……。

「ちょっと待て！ 何でそういう質問なの！？」

マコトとかジュンとかいうのもあったけど？

「ジュンって……俺の名前と被るじゃねえか」

その時はまだ純という存在すら考えてなかったのだ。

「わー、にーちゃんドンマイ！」

岳の存在も考えてませんでした。

「うう」

で、何で『男にも女にもある名前』かと言うと。

「何で？」

名前が被る男子を作ってみたかった。以上！

「居ないじゃん！」

今まで忘れてましたから！

「威張るな！」

さて次。光！

「無視するなーっ！」

光は、さっき言った『おとーさんが語るお話　く桃太郎く』の、おとーさんにお話頼む役として作りました。

「本気で無視されたあ」

で、名前の由来は……。

えーっと、こちらは大分さらーっと作ったので……。

「ひどい！　忘れたの？」

あう。

多分、できるだけ女の子して欲しいなー、と言う事でこういう名前にしたんじゃない……。

「結局忘れてんじゃないか」

「わー、わー、じゅりあひっでー」

何故にひらがなになっているのでしょうか。

「読みにくいからな！　オレが！」

「呪理阿って当て字でしょ？」

はい。当て字です。

っ、次行きます！

名前つけた順で言っているので……。

「次オレかっ！？」

あー……うん、そうだ。岳です！

「よっしゃ、にーちゃんに勝った！」

存在自体は純の方が先だったんですけどねー。

「何だよ何だよ、けーつきよくオレ最後かよ」

多分……。

二人ともただ暴を考える時に作ったので覚えてないですが。

「あやふやな所多すぎねえか？」

あう。三ヶ月以上も前の事覚えてないですよっ！

「にしちゃ、忍の所ははっきりしてたけど」

人に質問して考えたものは覚えるものです。

「そーゆーモンかあー？」

そーゆーモンです。

はい、岳の名前はー。

ぶっちゃけ適当です。

「おーい！」

電子辞書でぴこぴこしながら男の子の名前に使えそうなの探しました。

「これ、考えたって言うのか？」

考えましたよー。イメージに合いそうな探したんだから。

「ほお」

……で、結局文字を書き出してた紙が訳わからん事になったので、

「何かオレ、雲行きが怪しくなってきたような気がすんだけど？」

もうコレでいいや！ と、岳になりました。

「結局適当かよ！」

だって私、めんどくさがりですから。

「いやいや、そこ威張れないから」

が！ しかし！！

「えー？ 何かあったの？」

そのめんどくさがりが面倒な事を呼んでしまいました！

「ええっ!？」

実はですね……。

『たける』と、キーボードでうちます。
変換します。

この時は『岳』と素直になってくれるんですが……。
「キーボードに素直もくそも無いだろうが」
そこはともかく。

「それ以外がなくてくれない？」

そうなんです。『たけるは』とうちます。
変換します。

『猛は』となるんです。

「並べ替えすればいいのに」
そう思うのですが……。

「やり方が分からない、とかか？」
いえ、やり忘れる、ですね。

一回なっても『後でやろ』となって……。

「このめんどくさがり屋！」
はい次行きまーす。

「何か流されたような気が」
気のせいかと。

はい、最後は純ですね。

「流れからして絶対由来も何も無いと思うんだけど」
純はですねー。

私がお兄ちゃん欲しかったなーという理由で作りました。

「そんな理由!？」

だって小さい時からずっと欲しかったんだもん!

「……純兄は何で中三なの? できない事は無いけど、多少無理があるんじゃない」

高校生活とか大学生活とか、仕事してる人の生活ってはっきり分かんないんで。

「ありゃ、マトモ？」

で、名前の方は……。

『優斗』とか『快都』とかその他候補があったりしたんですが。

「純お兄ちゃんだけ〜?」

いえ、一応全員ありました。

忍……は、さっき言いましたね。『真琴』や『純』

光↓『鈴鹿』『未奈美』

岳↓『勇氣』『馬鹿』

「ちょーっと待ったーっ! 何か聞き捨て、読み捨てか? 出来ね

ー奴があっただけど!」

『勇氣』ですか?

「違あう! 『馬鹿』の方だよ!! 読み方変えりや『ばか』だろ!」

これはギャグで作りました。

本当には使わなかったんだからいいじゃん、ということ。

「ギャグ!」

はい、で、純の名前の続き行きます。

「……ねえ、何か今までの中で最長になってる」

はいそこ突っ込まない。

100話記念、って事で、読者様もじゅりあの戯言にもう少しお付き合ってください。

純の名前の続き行きます!

候補出した後で、他の三人の名前が『忍』『光』『岳』で、あれ、全員一文字じゃん。と言う事に気が付きまして……。

「遅くない?」

「自分で作ったくせに〜」

そこ突っ込んじゃだめなの。

それでっ!

ここまで一文字続いたんだから全員一文字にしちやおう! と言う事で『純』になりました。

「なんでここでお姉ちゃんの名前候補が復活するの〜?」

一文字の名前が思いつかなかったんです!

「清とか剣とかは？」

後であ、こんな名前もあるじゃん、と、そいつ等を作ったときに思いつきました。

「おい」

はい、それでは今回はこの辺で失礼いたします！

『突然だな！？』

それでは、今度はどこかで突然現れて見せましょう！

「いや、いらなからそれ」

あう。

それでは失礼いたします！

読者の皆様、これから『ただいま暴走中！』をよろしくお願いいたします！

101 清、宿題をする

「よし！」

『ん？』

「今度こそ……オレはやる！！」

……何を。

忍です。

いや、何かね。

今数学が終わったところなんだけど、突然清が叫びだしたんだよ。

「何するの〜？」

「宿題！」

『今までやってなかったのかよ』

わあ、コレがハモるってちょっと凄くない？ ほら、長いし。

「やってなかったと言うかできなかったと言うか」

どっち？

「とにかくっ！ オレはやるぜ！」

どーん

うーんと、この場合背景って荒波の方がいいのかな、爆発の方がいいのかな。

「うっ」

あれ？ 何かプリント広げた瞬間動かなくなった。

「いきなり難問が……」

「さっきの授業でやったばっかだろうが」

「夏、コイツにそんなのは関係ねえ。ば「馬鹿だからな！」……」

あ、純兄が清にらんでる。

で、何か拳作ってる。

つまり。

「開き直るな」ドスッ

こういうことだよね。

「純君のパンチ……あれ？　突き？　が、清君の鳩尾に直撃！」

「ぐおおおおおおお！？　ちよっ純！　今のマジで痛えぞ！？」
「当然だろ？」

「ははっ、相変わらず」

「夏そこ笑うトコじゃねーっ！　そして当然でもねーっ！」

なっくんになんなものは通用しない、純兄にとってはそれがと
うぜーん。

「で、いつコレはやるの」

「篠ー、助けてくれてもよくね？　色々から」

「……ふむ」

しーちゃんが筆箱を探して……取り出しましたるは。
はさみ。

「えー……篠さん、それは一体なんでございましょう」

「見て分からないか、はさみだ」

流石にそれは分かっていると思うんだけど……。

「それで何をしよう？」

「ふふ」

怖いから！　その笑み怖いから！

「と、冗談はともかく。やるのかやらないのか」

少しいいですか？　さっきの少し本気に見えたのですが。

と、言っても聞き流されるだけだよねー。

「やりますから教えてくれ！　答えを」

意味無いじゃん。

ちなみに、一問目は展開でこんなだね。

問一　 $(x+3)(x+5)$

……清、本格的にヤバイかも。

「はーい清君、ちなみにドコまで分かる？」

「コレが暗号だという所まで……」

「あほだろお前」

「数学のみという意味なら何を今さら」

開き直るな。

「じゃあ基本の基本から言うよ？　これは乗法公式？を使って……」

「あ、それなら分かる」

「じゃあ解けるだろ」

「へ？」

いや、そこで『へ？』って聞かれる方が『へ？』何だけど。

何で乗法公式？が分かるのに解けないの。

「aもbもねーじゃん。ほら、乗法公式？って $(x+a)(x+b)$ だろ？」

『はあ！？』

「……清、この場合は多分アンの言ってるaが3でbが5」

清、ちよつと沈黙。

「ああ！　そーゆー事！？」

『はあ！？』

102 強いものいじめ？

「なあ」

「えー、なっくん、また鉛筆なくしたの？」

「おーい」

「机の下は？ 鞆の中は？ ……えーと……ゴミ箱の中は？」

「いや俺イジメられてんじゃねえから」

「おいってば」

「だよねえ」

「無視するなあ！」

「ひゃわっ！？」

「びっくりしたあ……」。

「忍でーす。」

「誰だよー、後ろで突然怒鳴ったのは。」

「くるっ」

「……………」。

「誰だろう」

「おいっ！！」

「テンション高いなあ。」

「さてさて、顔に見覚えはあるんだけど、誰だったかな。」

「あ、確か……悪い、自己紹介してくれたことは覚えてるが忘れた」

「忘れるなよおい！」

「しよーがないよ、なっくん忘れんぼだし。」

「ああうん、あたしがいえた事じゃないね。」

「村田だよ！ 村田岬^{むらた けい}」

『誰だっけ』

「忍、コイツのゆーこと聞かなくていいって」

「あれ、清が妙に冷たい。」

「……………あぁっ！！」

「水谷イジメのAだ!」

「A!？ 何で俺がA!？ 後なんか人聞き悪いぞ!？」

はい、分からなかった方は41話参照。

「だーって、ねえ？」

「事実だからなー」

「ちなみにあれから水谷に謝りましたA君？」

「だあもう！ 今まさに俺がイジメられてるよな!？」

あら、やっぱり可哀想かな。

「ごめんね、えっと……で、謝った？」

「はあ……何でこんな奴に話しかけてんだ俺」

聞こえませーん。

「うう……もー、謝ったよ、謝った」

ありゃ、素直な奴。

どんな謝り方したんだか知らないけど、いじめっ子が謝ったって

凄くないかなあ。

「で、何の御用で？」

「ああ、それ。やっと本題に「早く話さないとAって呼んじゃうよ」

はあ……」

溜息二回目ー。

「お前さ、妹いる？」

「いるよ？」

それが何か？

「そいつ、今小四？」

「そーだ……って何!？ まさかうちの光を……」

って、こないだ初めて読んでみた小説ラノベでこんなのを見た事があるなあ。

「いやそれ意味分かんねえから……って、光？ やっぱそっか……」
何が。

「ところで村田あ、おめー顔青くね？ 大丈夫か？」

清、何かさっきと態度が百八十度変わっております。

「大丈夫……じゃ、ねえかも」

「何？ 変なものの食べた？ 拾い食いはダメだよ？」

「ああうん、分かってる。昨日思いつき思い知らされた」

えっ！？ 否定しようよ『拾い食いなんかしてねえ！』って否定しようよ！

「拾い食いしたの？ 何を？ どんぐり？ 梅？ リンゴ？」

「全部今の季節じゃ落ちてねえよ！」

「しかもリンゴで」

冗談に決まってるでしょ！

「いや、そうじゃなくて……テーブルに置いてあったカップケーキ食っただけ」

「それ拾い食いって言わなくね？」

「どちらかと言うと盗み食いかつまみ食いだね」

あたししょっちゅうやるけど。

昨日もなにやら妹三人組のカップケーキのちゃんと出来た奴つまみ食いたし。

美代はちゃんと作ってくれるからね！

何個か変なのは作ってたけど……。回収してくれたし。

『兄上にお土産』って言う……あれ？

「もしかして……そのカップケーキ、黒かった？」

「ああ、チョコかココアでも入ってんのかと思って食ったら……」
一瞬の沈黙。

そして。

「焦げたトースト味って何なんだよっ！？」

叫んだ。

「焦げたトースト味い？ あ、春の奴が言ってたな。『今回は凄く新しいよ！』って」

どういう意味で新しいんだろう……。

少なくともいい意味じゃないね。

「お前の妹も共犯か！」

「あれ？ 美代の兄さんって村田だった？」

「そーだが何か！？ 三日前も『兄上お土産』って焦げたべっこう飴渡してくれるし！ 何なんだよ！」

さて、一つ疑問が浮かびました。

美代は村田の焦げたべっこう飴を食べた時の写真を本当に撮ったのだろうか。

撮ったんだったら今度見せてもらおうと♪

103 何かわけのわからん事に

「修也ー、こっちこっち」

「……これってもしかして卒業まで続いたりするのか……?」

いんや。中学行っても続けるつもりだぜー、オレは。

岳だー!

何かいつも通りのようで最近ちょっと変わったところがあんだよな。それは……。

「修也がホーキを使わなくなった!」

「何を今さら……」

あ、声に出てた。

何か修也曰く気分的に自分が悪いような気がしてくるかららしい。何を今更。

「岳くーん!」

「岳お兄ちゃん」

「……岳、くん」

あ、美代含め妹三人組。

「あゝっ、岳お兄ちゃん後ろ」!

「んあ?」

『ぴやうあ!?!』

どんな驚き方だよ。

「何も居ねえじゃん」

「何々!? もしかしてユーレイ居ちゃったりするのオ!?!」

里山大正解。

……いや、何か今回はでっけー耳がついてるけど。

ほら、えーっと……うん、何か分かんがでっけー耳がついてんだ!

で、耳で立ってんだ。

「なんじゃこりゃあ!?!」

「おい高山、お前は頭がおかしくなったか」
せめて疑問系にしてくれよおい。

「なんじゃこりゃあ!？」

『え?』

せんせーもまさか見える人?

「何々!？ ビデオカメラがどーしたのオ!？」

「見せて!」

……………。

沈黙。

『なんじゃこりゃあ!？』

あれ?

「どーなってんのアレ」

「さ?」

「凄いよ! ひーちゃん! カメラにね! 目では見えない変な物
体が映ってんの!」

まさかそれって……。

『むゆみゆ! 変な物体とは何でしゅかあ!？』

『お前だよ!!』

あれえ?

あのカメラ越しだと皆にも見えてんのか?

『みゆーちゃんは変な物体では無いのでしゅよお!』

『ドコが!？』

『ちゃんと耳で立って『おかしいだろ!』みゆみゆっ!？』

えー……なんだろ、なんなんだろコイツ。

「おーい、ちよっとお前」

『みゆーちゃんはお前では無いのでしゅ』

「いや、それはいいーから『よくないのでしゅよお!』 はいはい」
何かすっげー疲れんだけどコイツ。

「はい、みゆーちゃん?」

『はいでしゅ』

はいにも『でしゅ』ってつけんのかよ。

「私の質問に答えてね」

『おっけーでしゅ!』

「みゅーちゃんは幽霊」

『違うでしゅよお! 何を隠そうみゅーちゃんは妖怪なのでしゅ!』

『妖怪!』

実在するのか!?

しかも隠せてねーし。

いや、幽霊が居るんだから妖怪が居ても……

「おかしいだろ!」

やっぱおかしいか。

「何でお前等何も無しでそいつ見えてるんだ!」

あ、そっち?

「何でって言われても……なあ?」

「ねえ」

まずはそのビデオカメラから突っ込むべきじゃねーかなー。

『むみゅみゅっ! そーいえばそーなのでしゅ! 何ででしゅか?

なんででしゅか?』

「だあもう! 見えるもんはしょーがねーだろ!」

「死神トリオに分けてもらったら見えるよ」

『死神!』

何か……余計話がややこしくなった気がする。

「よばれて飛び出てなんとやらー! 未理阿ちゃんでした!」

「噂をすれば影が差す」。霧瑠依くんでしたー

……あれ、こいつらって確かねーちゃんが言ってた……。

忘れた!

「ああっ!? 先生のお菓子が凄く減ってる!」

「おかしいよ! お菓子が浮いてるの!」

「あ、カメラで見たら何だか人が増えてる……」

「未理阿ちゃん、これおいしいよー」

……すっげー早業。いつ盗った!?

「いっただっきまー」どかつ

『わーっ!』

あれ、何か急に二人吹っ飛んだけど。

「貴様等……これは遊びでは無いと何度言えば分かる？」

なんか知らんがさらに増えた!?

「あう、妙羅先輩……」

「いきなり蹴るのは酷いですよー」

「知った事か。ミュウ、お前も勝手に人間界に出るな」

うわっ踏ん付けてる。止めた方がいいか? コレ。

『あ、みょーら! みゅーちゃんね、みゅーちゃんね』

「黙れ。勝手にふらふらするな」

『はーい』

うっわ、素直!

「貴様等もいつまで転がっている。戻るぞ」

「先輩が吹っ飛ばしたんですけどねー」

「じゃっ! おやつもおいしかったし帰るでした!」

……窓から出入りするのは死神と妖怪のお決まりなのか!?

「……衝撃映像が取れた……さすが『卯津屡出』だ」

『何だよそれ!?!』

当て字にしか見えねえっ!

あ、当て字か。

「岳……なんだったんださっきの?」

「知るかよ!」

104 ここで寝るな

「……眠い」

「またか」

今日だけで三十一回目だ。

「ねーむーいー」

「知るか」

純だ。

「そんなに眠くてテストは出来たのか？」

「うん、出来たよ。数学も公民も、解き終わった瞬間寝た」

ああ、そういうえば目の前で突然倒れたな。

……数学は残り一分だったような気がするけど。

「純兄ー、11111の素因数分解の答えって何？」

「覚えてねえな」

「あたし、アレ解くのめんどくさくなって途中で止めたんだけど」

……このめんどくさがり屋……って、人のこと言えねえか。

「うーん、まあとりあえず適当に入れたからいいや。お休みー」

「ここで寝るな」

「………すー」

……俺が寝るまでに起きる事を願おう。

じゃねえとベット盗られる。

十一時。または二十三時

「おーい、起きろ」

「………すー」

……くそ、本当に盗られるとは思わなかった。

オマケになかなか起きねえし……。

どれだけ眠かったんだよ。

「涎垂れてるぞ？」

「知った事かー」

いやそうじゃなくて……って。

「テメェ起きてんだろ」

「……………むにゃ？ 朝ー？」

「夜だ馬鹿」

「お休みー。……………すー」

おいこら。

こんななコイツ寝付くの早かったか？
寝たふりか？

「おい」

揺する。

叩く（軽く）。

叩く（若干強め）。

ああもう、こういう時ばかり演技上手いんだから分かりにくい。
特に寝たふりは幼稚園の頃くらいから練習してたしな……。

理由？ ソファーとかで眠くなって、そのまま寝たらベットまで
運んでもらえたからだ。

って、前に自分から言ってた。

「おい、次は殴るぞ？」

「……………すー」

何かイライラしてくるな、これ。

女殴るのは好きじゃねえけど、妹だしいつか。
ぼすっ

「こふっ」

……………起きたか。

「……………すー」

ああもう！

コレでも起きねえってことはあれか？
俺が忍ん部屋まで運ばねえといけねえのか？

考えただけでもめんどくせえ……。
くそ、最終手段。

「んっ」

「きゃわっ!？」

どた

必殺、引き摺り下ろす。

……最初からこうすればよかった。

「痛いよ!」

「五月蠅い。そこで岳が寝てんだから静かにしろ」

「んー。じゃあお休み」

「ここで寝るな!」

「えー」

えーじゃなくてだな……。。

「んしょ」

「何で担ぐの。お腹痛い」

「知るか。運んでやってるんだろうが」

……何となく敗北感がするのは気のせいかな？

105 テスト、皆の珍回答集

テスト珍回答集。

忍の場合。

理科

『右の人物の名前を答えなさい』

正答…アボガドロ

忍…アボカド

「食う気か!？」

「違うよ! だって、何かそんな感じしない？」

「ちなみに、学年で最も多かった間違いは『アボガド』らしいけど」

「……………」

国語

『漢字に直しなさい』『ことわる』

正答…断る

忍…誤る

「……え? これ小学の漢字」

「思いつかなかったんだもん」

「胸を張るな」

清の場合。

数学

『展開しなさい。』

$(a+b)(c+d)$ 』

正答… $ac+ad+bc+bd$

清… $abcd$

「分かってたんじゃないの?」

「いやー、引っ掛けかと思って」
『なんでだよ!』

『 $(x+a)(x+b) \parallel x^2 + (a+b)x + ab$ 』
左辺を右辺のような積の形に戻す事を(A)すると言う。

(A)に入る語句を入れなさい』

正答…因数分解

清…因数分解

→

「何困ってんだよ」

「つい。今回はたまたまだぜ!？ たまたまだ!」

「……たまたまで漢字って間違えるかねえ……?」

「うっ」

篠の場合。

『水酸化ナトリウムを加熱した試験管の口元についた液体を調べる
ために使う試験紙を答えなさい』

正答…塩化コバルト紙

篠…リトマス紙

「しーちゃんがここで間違えるとは珍しいね」

「五月蠅い」

「この単元でリトマス紙は使わなかつ……て、何? 何で拳用意してんの?」

「ふむ、忍のほうが点数が良かった嫉妬心からだとも思っというて」
「ちよっ、一点差でしょうが!」

社会

『1889年に発布された、天皇主権の憲法をなんと言いますか』

正答…大日本帝国憲法

篠…大日本皇国憲法

「うわゝ、惜しいね。皇国って書いたのはもしかして『天皇』の『皇』の字を取ったの？」

「うん」

「そっかゝ。でもでも、わたしの『大日憲法』に比べれば正解だね」

「そこは比べる所か!？」

桜の場合。

理科

『水酸化ナトリウムと、それを加熱した後の白い物質の性質が違う事を確かめる方法を二つ書きなさい』

正答…水に溶かす

フェノールフタレイン溶液を入れる

桜…水に入れる

フェノフタ液を溶かす

「……特に突っ込んでおくべき所にだけ突っ込んでおく。」

『フェノフタ液』って何だ!？」

「『フェノールフタレイン溶液』の略だよ。」

ノートにコレで書いてたらうっかり……テへ☆」

「……略するか？ 普通」

「あははゝ」

社会

『日本国憲法が發布されたのは何月何日ですか』

正答…十一月三日

桜…二月三日

「……節分？」

「三日しか覚えてなくてゝ。どうせならお兄さん「鬼さんね」そう

そう、が居ない時にするのかな、と思って」

「はいっ、ちなみに施行は何月何日!？」

「五月三日!」

「なんでこれは合ってるの!？」

「……ん、コレで全部か」

「あれ? 純兄のは？」

「コイツ珍しい間違い一つもなくってよー」

「あれ? これは? 『フランス革命』が『フランツ革命』になってるよ」

「フランツって誰だよ」

完

106 リコーダーを吹こう

ぽーぽーぽー、ぽぽぽーぽー、ぽーぽーぷー……

「リコーダーか？ 久し振りに聞いたな」

「うん、五ヶ月ぶりに吹いた」

忍でーす。

柵で綺麗サッパリ忘れ去られて転がってたアルトリコーダーを見つけて、んで吹いてます。

二年の時ちよつとはまってたんだよね。

ほんつとにちよつとだったから一ヶ月も持たなかったけど。

「お姉ちゃん、私もやる」

「やればー？ ……あ、コレを？ アルトの方を？」

「やってみたい」

「いいよ」

……指、届くのかなあ？

「……うから高いレまでしか出来ないよ！」

それはアルトだからレからソね。

「ソプラノの方やったら？」

「うう、分かった」

はい、取りに行つてらっしゃい。

「リコーダーの何が楽しいんだかサッパリ分かんねえな……」

「純兄、リコーダーは中の下だもんね！」

「……上の上に言われると馬鹿にされてるとしか思え「馬鹿にしてるんだよ」……」

純兄に勝てるのなんて殆ど無いんだもん！

「お姉ちゃん、取ってきたよ」

「おー、おかーり」

ソプラノリコーダーって、アルトリコーダー見た後だと凄くちっちゃく見えるよね。

「にーちゃん！ 百マス計算！ 今日こそ勝つっ！」

「後数十年は無理だろ」

「あゝ!？」

「ほら、やるならさっさとやるぞ」

「純兄も岳も、好きだねえ、百マス計算。」

「お姉ちゃん、何吹くの？」

「んー……、茶色の小瓶とか？」

「何？ それ」

「こんなの」

「ぽっぱぱー、ぽっぱぱー、ぴっぴ、ぽっぱっぴっぷっぱー」

「あゝ、前にお姉ちゃんが吹いてたやつ」

「そうそう。これ楽譜」

「音楽の教科書だけど。」

「オマケに岳のだけど。」

「五年のだからいいよねっ！」

「高いミってどうやるの？」

「普通にミの指して。んで、後ろの穴をちょっとだけ開けるの。そんだけ」

「お。簡単」

「ぽっぱぱー、ぽっぱぱー、ぴっぴ、ぽっぱっぴっぷっぱー」

「吹けるようになんの早っ!？」

「えへへ」

「前にやってたんじゃないの？」

「前にお姉ちゃんが教えてくれたもんね」

「はて。それはいつだろう。」

「覚えがない。まさかボケたかつ!？」

「……ただの物忘れか。」

107 ラジコンカーの悩み

「うおーっ、何かすっげー久し振りに見たコレ！」

「何何？」

うわ、オレってばすんごい見られてるー。

「わー！ 本当に久し振りだねー」

ああ……押入れでの生活は苦しかったぜ……。

オレが誰か？

ふっふっふ……ああ、ちょっと待った、閉じるボタン押さないで。

ラジコンカーだ！

「電池入ってるかな」

「やるの？ やるの？」

「ったりめーだ！」

「何が？」

おおっ！ かつての持ち主！

「うわっ、なっつかしー」

「電池オッケー、よし、ちよつとどいて」

よしっ！ 久し振りに走るぜい！

……………。

「あれ？ 電池切れてんのか？」

「違うより、これちゃんとはまってない」

「っていうかフタは？ 電池のどこの」

大分前から行方不明……ああ、オレの骨！

「内臓丸出しじゃん、これじゃ」

……電池を内臓にたとえるなーっ！

「ま、いーや。行っけーい！」

びゅんっ

ひゃっほーい！ 気分爽快！ 走るのはやっぱり気持ちいーっ！
ごん

……いったあっ!?

「いきなりぶつかってどーすんの。ちょっと貸して。……あれ、また動かなくなってる」

内臓でんちがズレた……。

「よっし、今度こそー」

びゅんっ

ひょーっ! スレスレで椅子の足とか通るからスリル満点っ!
相変わらず上手いな!

がたっ……

段差に引っかけたって内臓でんちズレたあっ!

だあもう! フタ見つけてくれよ!

「何やってんだ?」

『ラジコン(ゝ)』

ああっ!?! お前は……!!

かつてオレをバラバラに分解した恐怖の……ええと、いい言葉思いつかん。

「ああ、コレか」

びくびくびくびく……

「次私にもやらせて」

「ほいな」

……ほっ、大丈夫そう……いやまてオレ!

前は大丈夫だと思った瞬間やられたんじゃないかっ! 気を抜くな……。

「……あれ? さっき電池ちゃんとしたのに動かない」

「ん? ちょっとコントローラー貸せ」

びくびくびくびく……

「……動かねえな。こっちに問題あんのか?」

ぎゃーっ! こっち来るなこっち来るなこっち来るな!

「……忍、悪いけどドライバー取ってきてくれ」

「はいよー」

ぎゃあっ！　ぎゃあああっ！

ぶーんーかーいーさーれーるー！

戻れるのか？　戻れるのかオレっ！？

カチツカチツ

何かボタン押されてるーっ！

「……動かねえな」

……はっ！

警戒するのに夢中で動くのを忘れてたあっ！

じゃあ何か？　オレは自分のせいで分解されようとしてんのか！？

カチツ

ギュルルルルル……

「あ、動いた」

「ほんと？　貸して貸して」

ふう、分解は免れたな……。

「よくし、ゴ」

ぎゅーごん

いってえっ！

何でいきなり追突事故起こさなきゃならんのだあっ！

108 お風呂は買だらけ？

「うわあっ!？」

何コレ何コレ!？ 髪の毛!？

怖っ!

忍ですっ!

んとね、何かお風呂入って、風呂桶の蓋開けたら謎の物体Xが漂ってた……。

『どうした?』

「お風呂ん中に何か変なの入ってる!」

髪の毛だったらやだなー。コレ何?

『……親父、風呂ん中に何か入れたか?』

『あー、スギナ入れた。スギナ風呂』
へ?

『聞こえたか?』

んー、あ、ほんとだ。

よく見たら草だ……。

せめて出汁パックか何かに入れてよ!

何も無しでポーンと突っ込まないで……。

「あー、びっくりした。純兄ありがと」

『ん』

『……純、いきなり殴るのはあんまりだと思っぞ』

殴られたんだおとーさん。

うん、とりあえず頭洗お。

シャンプーシャンプー、っと。

ピシュッ

「きゃわっ!？」

何コレ!？

何か前にもあったような気がするんだけど……。

何でいきなりこっちに飛んでくるの!?

『……あつそだ、ねーちゃん』

「何ー?」

ああもう、目に入ったあ。

『ごめん、シャンプーの先っぽ、さっきオレ入った時に折っちゃまった』

「はあ!？」

どうやったら折れるの!?

『あははー、そーゆー訳で、氣い付けて』

「遅いから!」

『ドントマインド! 略してドンマイ!』

氣にするなって……おい。

「やった本人が言うな!」

『……よし、逃げよう』

こら。

もー。ほんとにどーやったら折れんの、これ……。

がん

「いっ!？」

お風呂の蓋倒れてきたあ……。

何か色々と前にも似たような事があったような氣がすんだけど?

さっさと頭洗お。

ピシュッ

「きゃわっ!？」

ああもう、また引っかかった!

「んーと、リンス」

かちゃ

……水?

「あれ?」

『あー、お姉ちゃん』

今度は光かー。

『ごめんね、リンスなくなっちゃったからお湯入れちゃった』
「何で!？」

『誰か引つかかるかなって思ってた』
「しっかり引っかったよ!」
「はぁ……」

「リンス位入れようよ」
『めんどくさくて』

「さすが我が妹。」

「ぜんっぜん嬉しくないけど。」

『リンスとろうか?』

「や、いい。いっそおとーさんも引っ掛けよう」
「仕返しはきちんとしないと。」

「岳と光はもう入っちゃったしなぁ……」

「純兄は何も仕掛けてないからやっちゃ悪いし。」

「……めんどくさいからもういいや。」

109 盗る盗る勝負!

「じゃじゃーん! 未理阿ちゃんでした!」

「霧瑠依くんでしたー」

「……あゝ! もしかして……」。

「お姉ちゃんと岳お兄ちゃんが言ってた盗人死神姉弟さん?」

「未理阿ちゃん、霧瑠依くん達有名みたいー」

「おお、本当に盗人死神姉弟さんだ。長いな、呼び名」。

「隙あり」

「あー、ポッ○ー取られたー」

「何やってるでした!」

「うゝんゝ、盗るのは得意でも盗られるのを阻止するのは得意じゃないと」。

「取り返しー」

「……ところで」。

「そのポッ○ー私のなんだけど」

「盗った物は盗った人の物でした!」

「じゃあこれは私の物だね」

『あぁっ!?!』

「おにぎり盗ったり」。

「何かねゝ、ローブのフードの中に入ってたの」。

「何味?」

「あー、ちよっとー……」

「ぱくっ」

「あーあ、やっちゃったでした!」

「……」。

「何が?」

「普通のご飯の味だよ」。

「あれあれー? なんてだろー?」

「おかしいでした!」

うゝん、何がおかしいのかなゝ。
ぱくっ

「あうゝ、梅干だゝ」

すっぱゝいゝ。

でもおいしゝ。

「ふふふっ! 引っかかったでした!」

「剣に貰った最強兵器ー梅干君ー!」

そう言えば前に剣が梅干食べて騒いでたゝって、お姉ちゃんに聞いたなゝ。

「もぐもぐゝ」

「き、効いてないでした!?!」

「そんなバナナー」

うゝん、おいしゝ♪

「はいどうぞゝ」

梅干の種ゝ。口にぽんゝっ。

でも実はしっかり付いてるよゝ。

「すうっぱあああああいでした!?!」

「えー? 何が失敗?」

失敗じゃなくてすっぱいだよゝ。

「隙だらけゝ」

バナナゲットゝ、ロープゲットゝ。

……ロープなんてどこで使うのゝ!?!?

「あ、未理阿ちゃんのロープがー!」

「霧瑠依くん盗り返すでした!」

「おー……って、やるのムルイくんだけだよねー」

あゝ、霧瑠依くんもロープ出したゝ。

「我の命に従え。目標を捕縛。続いて収縮」

おゝ、凄ゝいゝ!

ロープが勝手に動いたゝ!

未理阿ちゃんのほうのロープ盗り返されちゃった。

「ふっふっふー、見たでした!? 未理阿ちゃんたちが本気を出せばこんなものでした!」

「うん、凄いね」

もぐもぐもぐもぐ。

バナナおいし〜♪

「あぁっ!? ミリアちゃんのおやつがでしたぁっ!?」

「バナナはおやつに入るんだね」

入るんだね。

110 だーっしょー

「ていつ」

すとおつ すとおつ すとおつ

「えつと〜……真ん中と〜、十五の二倍と〜、七の三倍で〜……百一点〜！」

「おっしやつ！」

岳だーっ。

父さんが何処でか知らんけど前に貰ってきたダーツやってんだ。

「あ〜、そうだ〜。岳お兄ちゃん〜、これで一番点数たくさん取れるとこ教えてあげようか〜？」

は？

「んなもん真ん中の五十点だろ？」

「違うよ〜」

んじゃー何処だよ？

「ほら〜、ダーツの二十点の扇形あるでしょ〜？」

ん。

「で〜、その一番端っこの太線が二倍で〜、真ん中の太線が三倍だよ〜？」

……………あっ！

「そっか、二十の三倍は六十だから……」

「ぴんぽ〜ん〜」

よっし、んじゃーこれからそっちを狙おう！

「ていつ」

「二十点〜、一点の三倍〜、五点〜。惜しいね〜」

ちい。

「でも岳凄いいじゃん。あたしなんて真ん中狙って端っこまでずれるんだよ？」

「純お兄ちゃんは文字に当るよね〜！」

対して変わんねーじゃん

ああ後、にーちゃんそこに居るんだけど。
表情的に怒ってるなー、ありゃ。

「よしっ、もっかい！」

とおっ

「五点の三倍ゝ、一点ゝ、十八の三倍……ってええっとゝ」

「十八の三倍は五十四だ」

「って、十八の三倍も真ん中より大きいじゃん」

ちよっと待てよ？

んじゃー、とーぜん十九の三倍も真ん中よりおっきい訳で。

「あゝ、十七の三倍も大きいよゝ。五十一だゝ」

……真ん中より大きい所って、意外と多かったんだなー。

「もっかい！ とっ」

「六十点ゝ！ 全部二十点だゝ」

何で綺麗に二十の三倍の所にいかないんだよ！

「岳お兄ちゃんゝ、貸してゝ」

「ん」

「えいゝ」

すと、すと、すと

「二十点の三倍、十九の三倍、十八の三倍……って、ええっ!？」

「えへへゝ、百七十一点ゝ」

ウソー……。

「おまつ、百八十点いけるんじゃねーの!？」

「無理だよゝ」

そうかなあ……。

「だってゝ、全部は枠に入りきらないもんゝ」
あ。

111 おやつは別腹、これは常識

「ただいま」

『おかえりー』

忍でーす。

さっきまでおばーちゃんに英語教えてもらってて、終わったからおやつ食べてるよ。

「おっ、いいところに帰ってきたみたい」

これ、あたしと純兄のおやつなんだけど。

「ん、爺さん太るぞ」

「もう太ってるよ、純兄」

「……死ぬぞ」

「何でいきなりそうなる!？」

何か色々すっ飛ばしてるような。

「生活習慣病で。婆さんに隠れて酒も飲んでんだろ？」

「何でそれを」かかった。婆さん、爺さん酒飲んでるらしいぜ」あ
あっ!」

おじーちゃんが青くなった。

白くなった。緑になった。……ええっ!？」

「お祖父ちゃん? あとでちょーっと、お話があるのだけど・・・」

「ひいっ」

おばーちゃん怖い。

「まあ、野菜クッキーくらいなら食っても大丈夫だろ？」

何かしつかり原材料確認してるけど。

「おお純!」

「ああ、やっぱダメ」

「はあ……」

凄い。何か表情の変わり方が凄い。

さっきは後ろにばあって花が見えてたのに……今は何か青黒いオ

ーラが見えるよ。

ついでに青い火の玉とかも。

「と言うのは嘘で、まあ、こんくらい大丈夫だろう
ぱあっ

うわゝ、分かりやすっ。

「あ、そういえばテスト、あったんだっけ？」

「ちよっと前に」

「どうだった？」

全体的にあたしの点数が上がって純兄の点数が落ちた。

「俺は合計473点。忍は……」

「覚えてないよ。計算して」

「……えっと、とりあえず460代だったと思う」

計算してたんだ？

「理科はね、クラストップだったよ」

「へえ！ 純超えたの？」

「うん！ ……一点だけけど」

あ、何か純兄が不満げな顔になってる。

お兄ちゃんのプライド？ って奴なのかな。

「……あ、何かクッキー減りすぎでしょう？ これ。お祖父ちゃ
ん？」

「ち、違う違う。忍！」

む、孫に罪をなすりつけようととでも？

「あたしそんなに食べてないもん。」

……お腹いっぱいだからもういいや」

「つまりそれだけ食ったって事だな」

あう。

「五枚しか食べてないもん！」

「五枚も食ったのか」

『しか』と『も』で、印象って凄く変わるよねー。

「育ち盛りだからいっぱい食べても大丈夫！」

「何か話がそれてるような気がしないこともないんだけど」
気のせいだよ！

「あ、そうそうチョコレートあるけど食べる？」
「うん」

「まだ入るのか？」

「純兄、おやつは別腹なんだよ？ 知らない？」

「人間の胃は一つしかない事しか知らないな」

ああ言えばこう言う。

別腹は別腹なんだもん！ ねえ？

112 てるてる坊主

「ねえなつくくん」

「んあ？」

「てるてる坊主の歌詞ってどんなのだったっけ？」

「んー？ てるてる坊主う？」

「てるてるぼうずー、てるぼう「そこは分かってるよ」」

夏だ。

ああもう、寝てたから頭回んねえ。

桜が何か聞いてきたから答えてる、ってくらいしか分かんね。

「三番ならあたし分かるよ」

てるてる坊主の三番ねえ……。

ああ、小二ん時ちよつと流行ったな。

「どんなの？」

「てる坊主の後から言うー。」

それでも曇って泣いたなら、そなたの首をちよんと切るぞーだよ」

「嬉しそうに歌うところか？」

「怖いよお！」

忍がここを歌うたびに回りの奴……特に先生がこわばった顔してたな。

あれは面白かった。

そうぞうしてみ？

小二の、小さめの女の子が笑みを浮かべて可愛らし〜い声で『そなたの首をちよんと切るぞ』なんて歌ってんだぜ。

そら怖くもなるわ。

……今でも衰えてないんだなあ。

「一番と二番は？」

「んー……一番が

いつかの夢の空のよに晴れたら………忘れた。何あげるんだっけ？」

晴れたら……金の何たらだったと思うが。

「金の鈴だろ？」

「清くん知ってるんだ！」

「……今のとてどういう意味の言葉だ!？」

まんまの意味として受取っとけよ。

「二番はなんだっけ？」

「私の願いを聞いたなら……辛いお水をたと飲ましょ？」

何のばつゲームだよ。

「違うって。甘い蜜をたと飲ましょ、だろ？」

違うだろ。

「甘い……お菓子をたと飲ましょ？」

「それ飲むって言わない」

『うーん……』

こういうのって思い出せねえとすっげえイライラするよな……。

「とりあえず、甘い何とかだよな」

「甘いといえば？」

「お菓子！」

それはさっき言った。

「ジュース……じゃ、ねえよなあ」

「炭酸？」

「それジュースだろ」

「お酒！」

酒？ ……甘酒か。

「あ、それじゃん！」

「甘酒って本当に甘いのか？ 飲んだ事ないんだけど」

純に聞いても意味無いと思うが？

「俺が知ってると思うか？」

ほら。

「……まあ、甘いから甘酒なんだろうけど」

甘いから、本当に。

「未成年の飲酒は禁止されています！」

「甘酒は酒に入らないかと」

「そなの？」

どちらにしてもてるてる坊主は飲酒とか関係ないと思うがなあ。

「本当に晴れたら鈴とか甘酒とかあげるの？」

『まさか』

「そのままゴミ箱に直行だな」

何か罰当たりな感じしねえか？ それ。

「弟が紐巻いて砂糖水すわせる程度だな」

「しーちゃんの弟？ ……紐って？」

「鈴を巻く時の鈴無しバージョン……と言ってたと思う」

結局単なる紐かよ。

「あ、でもしっかり首を切り落とすのはやる」

「どっちかというと千切ってるだろ？」

……………。

罰当たりな奴等だな！ 本っくに！

113 格闘ごっこ!

「ひーまだー」

「暇だな」

純兄の口から暇って聞くのは久し振りな気がする。

「てい」

「暇なのは分かったから蹴るな」

だって暇なんだもん。

忍でーす。

「純兄、純兄、やろうよ」

「……まさかとは思うが格闘ごっこじゃねえよな?」

「それだけどなにか」

「はあ……めんどくせえ。でもそれを止めさせるのもめんどくせえ
しなあ」

何か純兄のめんどくせえモードが全開だあ。

「岳ー、光ー」

『何(ゝ)?』

「純兄があれしてくれるってー」

『おおっ!』

あ、純兄の顔歪んだ。

「ああもう、めんどくせえ……って、まさか俺対テメエ等三人じゃ
ねえよな?」

「そのまさかですが何か」

「はあ」

「よっし、にーちゃん行くぜ!」

いきなりだねえ。

「とお」

パンチ。

受けられる。投げられる。

あっさり終了。

……とは行きません。

「まだまだーっ！」

「えいゝ」

二人が行ったところであたしも混ざろう。

「岳、足払いっ！」

「おりゃ」

で、簡単に倒れてくれないのが純兄なんだなあ。

「わゝ！」

代わりに光が投げられてるし。

「ひーちゃんひーちゃん、何やってんの？ あたしも混ぜて！」

「おいおい嘘だろ……」

残念ながら現実です。
ほんとう

「よお純。手伝おっか？」

なっくん、笑ってます。

……大爆笑？

「いや、むしろ交代してくれ」

「それは嫌だ。せっかく面白いのに」

うん、楽しそうだねえなっくん。

「じゃあ忍、岳、夏の方行け」

「おまつ、面倒な方押付けやがったな！？」

「当然だ」

残念ながらあたしは動く気はありません。

「いっくぜーなっくん！」

「うあ」

「純兄いっくよー」

「はあ……」

溜息ばかりついていると……ええと、なんだったかな。

不幸が逃げる？ それだったら皆溜息付きまくるわ。

あ、なっくんが逃げたのを見た。

あ、足つかまれた。

投げられた。

「ああもう！俺ってば今日はお前等を笑いながらゆっくりしよう
と思っただけだぜ？」

「ん。それはしつかりぶち壊してやるから心配するな」

「分かった。今日の予定は明日にずらしておいてやるよ」
全然解決になってないような気がするんだけど。

「あっ！何か凄く効率的になってる！」

「効率的〜？あゝ、背中合わせだから〜？」

「そうそう！あれって後ろからの攻撃できないもん！」

何か某体は子ども、頭脳は大人の名探偵の映画にあったなあこんなシーン。

やってるのも、その相手も真逆と言っているほど違うけどさ。

「とうっ！」

「ん」

「あぎゃっ!？」

大丈夫かー。頭から落ちたけど……。

「岳お兄ちゃんゝ、畳でよかったねゝ」

「フローリングだったら絶対痛かったよ！」

「あ、ああ……良かったのか……な？これ」

どうだろう。良かったんじゃない？

「よし！一斉攻撃行くよ。その名も数より量作戦！」

「凄く頭悪そうな作戦だね！忍ちゃん！」

ならどうしろと。

「ほい、ほい」

「結局全滅だな」

『あゝ』

光とあたしが純兄、はーちゃんと岳がなっくんを押さえつけられます。
痛い、重い、苦しいの三拍子がそろって最悪だね。

「つぶれるよお兄ちゃん！　ウチがつぶれちゃったら、お兄ちゃん殺人罪だからね！」

「そこまで酷くつぶれるのか！？」

あれ、つぶれる事は前提なの？

「……………にゅ」

「あつ純兄！　光本当につぶれかけてるから！」
「ん？」

「痛い痛い痛い痛い！」

光にかける体重を減らす分がこっちに来てるの！？　ねえそうなの！？

「ぽふっ！　抜け出し成功！」

『作戦か！』

「ふふっ♪　はーちゃん、すぐ行くよ」

あたしは？　ねえ。あたし手伝ってあげたのに。

いや、気付いてなかったけどさ。

114 家出なといれの華子さん 前編

「うわあっ!？」

『うわあっ!？』

……びっくりしたあ。

『いきなり大声出さないで! びっくりするの!』

「あたしだってびっくりしたよ!」

忍です。

トイレのドアを開けたら何故かおかつぱに赤いスカート、白いブラウスという姿の女の子がおりました。

えーっと……。これってアレだよね。

「トイレの花子さん?」

『違うよ! といれの華子さん!』

ええっ!？

え? 『花子』の『はな』って『華』の字なの!？

「あと『トイレ』が『といれ』なのにはどういう意味が?」

『ひらがなの方が可愛くない?』

……違いが分らん。

「『花』と『華』にはどういう意味が」

『『華』の方がお嬢様みたいでしょ?』

全部イメージの問題かい!

「それはともかく……。何でトイレの花子さん……もといといれの華子さんが家のトイレに出てきたわけ?」

『家出なの!』

「速やかにお帰り願います」

『酷い!』

だって……家のトイレ狭いんだよ?

邪魔だよ……。

『せめて家出した理由くらい聞いてくれてもいいでしょう!？』

そしてそこから新たな友情……ううん、愛情が芽生えて最後には「ちよっと待てえい！」え？」

何だ！？ 何か聞き捨てなら無い言葉が聞こえたよ！？

「何で愛情が芽生えるの！？ その愛情ってああいう意味の愛情だよね！？ 君はアレですか！？ ユリかなんかですか！？」

あまりにびっくりして敬語になっちゃったよ！

『え？ ええっ！？ お、女の子！？』

「お前な……。男子にしちゃ髪長いとか思わないの？」

『それが流行りなのかとおもって』

何で！？

いや、最近の流行とかサッパリ分からないけどさ。

「そうでなくてもさ……」

『それに服が男の子っぽいし、胸ペツタンだし、色っぽくないし……』

「服とかどうでもいいし。後の二ついらないもん」

『ほらあ！ 全然女の子っぽくないあ！』

そんなこと言ってもねえ。

服なんて純兄のお下がりだし。

だいたい中三で色っぽい子なんているの？

……学校にはスカート短くしてる奴がわんさかいるけどさ。

「っていうか、それ以前に」

『？』

「小説か漫画の読みすぎ」

『うわあああああん！』

何で泣くの！？

『あんな素敵な恋をしてみたかったのに！ 私の小さな夢だったのに！ 夢が壊されたああああ！？』

そんな事言われても……ねえ？

「な、何かよく分からないけどごめん……」

『うう……』

「ところで、そこどいてくれないかな？ さっきから我慢してるんだけど」

『家出した理由聞いてくれないの？』

「速やかに以下略」

『略するなあああ！』

五月蠅い子だな……。『

「ねーちゃん何やってんの？」

『あ、岳。明日学校行く時この子連れてって』

「おおっ！？ 何々？ トイレの花子さん！？ マジでいんの！？」
らしいよ。

『どれの華子さん！』

「……あれ？ って言うか華子さん成仏しないの？」

『どれの華子さんはオバケだからいいの！』

幽霊とオバケは違うのか？

「ねーちゃん、オバケは妖怪の一種でいーんかな」

「いいんじゃない？」

『良くないもん！』

ああもう、面倒なものが迷い込んできたなあ……。

115 家出なといれの華子さん 後編

「何やってんだ？」

「あ、純兄」

忍でーす。

なにやら『といれの華子さん』を名乗る『トイレの花子さん』が迷い込んできて……。

さつきから我慢してるのになかなかトイレに入れずに居ます。

「なんだ。といれの華子か」

あれ？

『華子さん！ 何回言ったら分かるの！？ 高山純！』

「五月蠅い。帰れ。また姉妹喧嘩だろ」

『酷い！』

「え？ え？ 知り合い？」

って言うか姉妹喧嘩！？

華子さん姉妹居るの？

「小学校の三階の美術室の前にある使われてねえトイレあるだろ」
「うん」

「あそこで四人姉妹が順番にトイレの花子さんをやってるって聞いたけど。まだやってたんだな」

『五月蠅い五月蠅いうるさーい！』

君が一番五月蠅いよ！

「純兄トイレの花子さん知ってたの？」

「調べに行こうと言ったのは誰だ？ あ？」

んー。

「私ですごめんなさい」

あの時はもやんとしか見えなかったけど気になって。

「ん。分かればよし」

思い出す、だと思うよこの場合。

「で、どーすんのコレ」

『コレって言わないの!』

「アレ」

『アレじゃなあい!』

「ソレ」

『ソレでもなくて!』

「ドレ」

『分からなくなってるじゃない!』

「ざ・こそあど言葉!」

それがしたかっただけなのね、岳。

「で、純兄コレ『コレじゃな』どうしたら帰る?」

「華子の弱点を忘れたか?」

「忘れるも何もあの時はあたし幽霊見えなかったし。聞こえなかったし」

「ああ、そうか」

忘れてたんだ。人のこと言えない。

「華子は酒を少しやれば赤くなってふらふら『酔うのかよ!?』そういうことだ」

……………。

「で?」

「え?」

いや、酔わせてどうするのって聞いてるんだけど。

「酔えば自分のトイレに入って休みたくなるらしい」

「はい、お酒持ってきたよ」

光……。その行動の速さは何。

「華子さ……ん!?」

「うあ」

キノコ生えてる!?

暗いオーラが漂ってる!?

妙に静かだと思ったら……。

『誰も構ってくれない……。ふふ、どうせ私なんて、私なんて空気なんだわ……。アンモニアよ……。単二よ。ふふふ……。』

『怖っ！？』

ハンパなく怖い！

「ん、マイナス思考も相変わらず……。あ、少しは発動までの時間が延びたか？」

「どうでもいいよ！」

「花子さん、あ」

うわ、こんなところで名前間違えたら……。

『そうよね。名前覚える価値さえないわよ。うふふふ……。』

「華子さん、お酒！」

『むぐうつ。ひっく』

おお、酔った。

『ひっく。あは、あはは！　じゃあね、また遊ぼ！　あはははは。追いで追いで』

『怖えって！』

「いや、アレはトイレに遊びに来いという単なる誘いだ」

……。ややこしいというか、結局怖いというか。

とりあえず。漏れないうちにトイレ入ろ。

116 トイレの〇〇さん姉妹

「はーなっこさん!」

「ねえ、本当に居るの?」

「イマイチ信じられないな
いるってば。」

こないだお前等妖怪&死神ご一行様見ただろ!
カメラごしで。

岳だっ!

昨日のといれの華子さんに誘われたから、ちょい臭いのをがまん
してきてみたんだ。

姉妹見てみてえし。

『きやーっ! 男の子!』

『きやーっ! 女の子!』

「うわっ!？」

「きやあああ!」

「マジか……」

マジなんだなあコレが。

あ、先生にカメラ借りてきたから他の三人にも見えてるぜ。

『お静かになさい』

……全員おかつぱ赤いスカートなんだな。

でも髪とスカートの長さが違うな。

年上っばい奴から年下っばい奴になるほど短くなってる。

『あーっ! こそあど言葉!』

「それ、オレの名前!？」

『あたりまえでしょ?』

あたりまえなのか!？

「高山、お前アイツに何したんだ」

「色々と」

「何い!？」

おい翔。お前何に驚いた？

「ごめん、自己紹介よろしく」

「わたくし、花子と申します」

「私のことは知ってるでしょう？ 華子」

「あたしはなこよっ!」

「自分、ハナコね」

……って。

『全員音同じじゃねえか!』

『そうでないと『トイレの花子さん』になりませんわ』

……いや、そうか？ そうなのか……？

「修也あ……怖い」

「……大丈夫だ」

えー、何かピンク色になってるあそこはほおって置いてだな。

ああ、何か華子とはなこは興味あるっぽいけど。

『華子がお世話になりましたね。お茶でもいいかがです?』

「こんな嫁が欲しい」

翔、お前はいくつだ。

『どうぞ』

早っ。

………。

「ごめん、花子さんちよつといいか？」

『はい?』

「このお茶、何で白いんだ？」

『洗剤茶です』

飲めねえよ!

「ううっ……」

「翔!？」

飲んだのか!? 飲んだのかあれを!

「お、おいしかったでえっ……す。キュウ」

「気絶した!?! 保健室に運んだ方が良くない?」

「運ぶに決まってるんだろ!」

ああもう!

「花子さん、少し聞きたい。この茶? を作った水って……」

『トイレで汲みました』

「やっぱりか!」

修也! やっぱりってそう思ってたなら最初に聞け!

「けほっけほっ」

古閑!?! お前も飲んだのか!?!

……今日の発見。

翔と古閑はアホだ。

後、花子さん等に出されたお茶? は飲んではいけない。

……いや、普通に飲む方が間違ってるよな、コレ。

117 暇人の会話

「にーちゃん」

「宿題なら手伝わねえぞ」

「オレ、宿題頼んだ覚えは一度もねーんだけど」
頼まれた覚えもないな。

純だ。

「にーちゃん」

「用があるならさっさと言え」

「……すっげー暇そうなのにそう言う奴って始めてみた」
そうか？

「で？」

「オレも暇なんだよ」

「で？」

「いや、で？ って言われても暇なんだよ」
だからなんだ。

「何かいい暇つぶしねーの？」

「そんなものがあつたら俺が聞きたい」

「んー……あー……考えるのめんどい。にーちゃんのめんどくせえ
病に罹った」

「人を病原体みたいに言うな」

それにしても……暇だな。

「てい」

「いきなり蹴るな」

「いきなり足払いすんなよー」
蹴ってくる方が悪い。

「なーなー、にーちゃん修学旅行いつ？」

「ん……次の日曜からだったと思う」
「思うって」

たいして興味ないからな。

「それが？」

「お土産期待していいか「ダメだ」えー」

「かさばらなくて安いものなら買っというてやるから」

「えー、安モンかよ」

お小遣いの残りは自分のものになるからな。

「忍にでも頼め」

「ねーちゃんもおんなじこと言うんだよっ！」

「じゃあ自分の修学旅行で買うんだな」

小六なんだからあるだろ。

「えー。オレの小遣いの残り減るじゃん」

……結局俺等と同じじゃねえか。

「まあ少しは期待しておくぞ」

「つてオレはにーちゃんの分買わなきゃいけないーのかよ!？」

「当然だ」

「うーわ、うーわ、にーちゃんずっこ！」

何を今さら。

「京都だったか？ 俺は八橋がいい」

「じゃあオレカステラな。にーちゃん達長崎だろ」

「……………」

「何で黙るんだよ！」

カステラはかさばりそうだなあ、と思って。

「小さくて安いものがあつたらな」

「結局安モンかよ！」

「ガチャポンよりいいだろ」

「最初そのつもりだったのか!？」

何も無しは可哀想かと思ったしな。

あるのかは知らないけど。

「純お兄ちゃん」

「あ？」

……何を言おうとしてるのが顔から凄く分かる。

「お土産なあに？」

「あま○うのハイ○ユウでいいな」

「え。それは吸収限定でしょ？」

九州な。

何を吸収するつもりだ。

「忍に頼めよ」

「頼んだよう？」

「断られたか」

「ううん。何かストラップ買ってくれるって」

「なっ！？ オレには安モンだったのに！」

……欲しいのか？ ストラップ。

どうせほっとくだけなのに。

「純お兄ちゃんは？」

「何を売っているかによる」

「じゃあ期待してるね！」

にっこり

期待を裏切るな、という脅しか？ これは。

118 水う！

「ぐはぁーっ！ 疲れた！ マジやべー。ねーちゃん水ー」

「ねーちゃんは水ではありませんせーん」

「いやそーゆーのマジでいらねーから水くれって！」

なら最初からそういうえばいいものを。

忍でーす。

何か岳が帰るなり水を求め始めました。

「水筒のは？」

「飲みつくした」

「がぶ飲みは……ええと、何とかの元だよ」

「何とかって何だよ」

「さあ？」

何だったかなー。

うーんと、えーっと……。

「水う！」

「自分で注いだほうがよっぽど早いでしょうが！」

「何でキレらんなきやいけねえの！？」

事実でしょ？

「はいー、岳お兄ちゃん水ー」

「お、サン……んぐんぐ」

お礼くらい最後まで言えよ。

「ぷはっ」

「はいおかわりー」

「おおっ！ 光すげえ！ んぐんぐ」

「えへへー」

んっとね。

光、何で水の入ったコップがテーブルを半分も埋め尽くしているのかな？

いつの間に用意したのかな？

「はい、おかわり」

「もういらねーよ！」

あ、十五杯目でダウン。

「え。せっかく金魚水用意「げほげほげほげほ」……嘘だよ」

ほんとだったら怖いから！

「あ、ちなみに岳。喉に手突っ込むと吐き出せるらしいよ」

「んな助言いらねーっ！」

別にあって損しない知識かと……うーん。

知らないなあこんな知識。何処で使うの。

「ところで。何でそんなに水欲しかったの？」

「だーってな！？　だーってな！？　体育大会の練習三時間ぶっ通しであっただぜ！？」

「給食はさんだんでしょ？　帰ってまで欲しいって事は」

「そーだけど放課後は応援団のもあったんだぜ！？」

へえ。

「岳が応援団だとは知らなかった」

「私も」

「ねーちゃんはともかく光は知っとけよ！」

何かともかくされた。

「味方チームの事は興味無いもーん」

「おいっ！？」

「あ、チーム同じなんだー」

「ねーちゃんはそっからかよ！？」

「お弁当の色が楽だね、おかーさん」

「そうね。お赤飯しないと」

あ、赤組なんだ。

赤い食べ物って何があるかなー。

トマトでしょ、リンゴでしょ、すももでしょ……。

「あ、ねえ光一。水入りコップ一個貸して」

「はーい。何するのー？」

赤い着色料持ってたこと思い出して。

ちよっと溶かしてみよう。特に理由はないけど。

はい、コップがあります。

着色料買った時に付いてきた小っちゃいスプーンで着色料入れます。

おー、赤くなった。

……え？ オチ？ 無いよ？

119 折り紙

「これがこうなって……んでこーして……」

うん。これでよし。

でー、次はー。

忍です。

図書室で借りてきた本見ながら折り紙してます。

「あれ？」

むむ？

……分かん。

「うーん」

やっぱこういうときは

「純兄ー」

「あ？」

「ここどうなってんの？ 十番の所」

折り紙の説明書ってたまにわかりにくい事あるよねー。

「……折り紙の説明書読むのはテメエの方が上手いだろうが」

「わー、何か純兄に褒められたのって初めてな気がするよ？」

「まさか」

そーかな？

「じゃあいつ？」

「……………」

答えられんなら言うなよ！

「んで、これどうなってんの？」

「だから俺に聞くなって」

「見る位してよね」

「ああもう、分あったよ……」

あ、断るのめんどくさくなつたな。

はい、折りかけ折り紙^{それ}。

「説明書貸せ」

うん、折り紙だけで分かったんならどうしようかと思った。

いや、どうもしないけど。

「ここを開いて……んで？ ああ」

「分かるんじゃない！」

「ん？ 何か悪いか」

いや、いいけどさ……。

「ありがと」

んで、あとはここを開けたら……

「出来た！」

「ライオンか？」

「犬だもん！ パピヨンだもん」

顔の周りに茶色いのがるから見えなくは無いけど……。

「よし」

「どうした？」

「岳と光とおかーさんにコレが何に見えるか聞いてくる」

「……あそ」

帰って来たらおとーさんにも聞こつと。

犬だもん！ パピヨンだもん！

「光ー」

「何？」

「……何してるの？」

「えー？ 見て分からない？」

いや、分かるけどさー。

文房具の手入れでしょ？

「必要あるの？」

「あるよ〜!」

「何処にその必要が?」

「……………」

答えられないなら自信たっぷりと言わない!

「まあいいや。これ何に見える?」

「ん〜…ライオン〜?」

あうー。

「でも首より上だけを見たら〜」

あれ、続きあるの?

「エリマキトカゲに見えるな〜!」

何か余計ややこしくなったあつ!

「おかーさん」

「は〜い〜?」

「あっ! 何食べてる!? 何食べてる!?」

「見つかった〜!」

目の前で堂々と食べてて見つからないとでも。

「食べていい?」

「……………」

考えないでほしいなあ。

「ダメ〜」

「えー」

「じゃあいいよ〜」

じゃあってなにさ。

チヨコチヨコ。

「あ、コレなんか高そう」

「だからばれないようにしてたのに〜」

のわりには堂々と食べてたけどね。

「おかーさんコレ何に見える?」

「犬かな」

やった！ 犬派来た！

「パピヨン」？

「ピンポン！ あ、そだ岳は？」

見当たらないんだけど。

「まだ帰ってきてないよ。 団長さんだからね」

「あ、岳団長だったのね」

「そうだよ、よく聞いたら声聞こえてくるよ」
聞こえない聞こえない。

「ほら、また「どんだけ耳いいんだよ！」」

「うわお」

「はーっ……はーっ……」

岳が死んでる。干からびてる。干物になってる。
ばしゃ

「ぶはっ！？」

「よし、生き返った」

「いきなり水かけんなよ！」

うん、叫べるならよし。

「岳、これ何に見える？」

「悪の使い魔」

「……水飲む？」

「ん」

おお、一瞬でコップの水が消えた！？

「はい、もっかい聞くけどコレ何に見える？」

「んー、犬じゃね？」

よし！

「ご褒美にチョコあげる」

「マジ！？ サンキュー！ 何か知らんがラッキ」

犬が二票、ライオン二票で……あー……ついでにエリマキトカゲ一票か。

おとーさんは何て言うかなー。

「お帰りー。おとーさんこれ何に見える？」

「折り紙」

……いや、そうだけどさあ……。

結果

犬…二票、ライオン…二票、折り紙…一票、（エリマキトカゲ…一票？）

あたしはエリマキ犬オン折り紙を折れるようになりました。

120 お土産欲しいな

「さて」

「さてさて」

「明日にーちゃんとねーちゃんは行っちゃう訳だけでも」

「逝っちゃうみたいない方だね」

怖くすんな！

岳だっ！

「分かった、言い直す。修学旅行に行っちゃうわけだけでも」

「お土産に何くれるか会議」

と、ゆーわけだ。

前に聞いたけどさー。イマイチ真面目に聞いてくれないじゃん？

ガチャポンとか安モンとか安モンとかって。

「お姉ちゃんはいいいんだけどね」

「オレはどっちもよくねえっ」

ねーちゃんは終始無言だったんだぜ！？

聞きに行った時！

考えてるみたいだったけど……。あれは暗算してる顔だった。

間違いないとお小遣いの事考えてやがった！

「さてさて、何かってくれるのかな？」

「長崎つつたらやっぱカステラだよな」

「ビードロがいい」

ビードロかー。

……えっと。

「ビードロって何だ？」

「んーっと……きつねがつるに意地悪してスープを平たいお皿で

出して、その後でつるに仕返しされるお話あるでしょ？」

「うん」

あのつるの仕返しってさ、手で持って飲めばいいかな。

ってずーっと思ってんだけど。

「あれのつるが仕返しに使った皿みたいな形のガラスのおもちゃだよ」

……あの絵本についてたやつみたいなのだと……。

「でっか」

「もっとちっちゃいの。丸い所が手に収まるくらい」
ふんふん。

……おもちゃ？

「何処がおもちゃ？」

「ミニチュアつる仕返し皿だとほそい管がついてるでしょ？」
無理やりまとめた！？

コレだと何かつるがちっちゃー見たいなんだけど。

「あそこから息吹き込んだら音が鳴るんだって」

「あ、見たわけじゃねーの？」

「お母さんに聞いたの」

ふーん。

「ガラスだから乱暴に取り扱ったら割れちゃうけどね」

「えー。やっぱそんなら食いもんの方がいいな、オレ」

「キレイだって言ってたもん」

オレは綺麗より旨い派だ！

「綺麗でも割れたら終わりだろ」

「瓶詰めにするもん」

っておい。

「何ムキになっちゃってんのお前」

「欲しいんだもん」

いや、これで買ってくれるわけじゃあるまいし。

「欲しいんだもん」

「オレに言うなよ」

「違うよ」

何で急に小声になるんだよ。

「純お兄ちゃんと忍お姉ちゃんって地獄耳でしょ」

そーだな。うん。

前に宿題の分かんねーとこ聞きに言った時、オレが言うより先に解き方教えてくれてびびった。

「だから普通の声で言えば絶対聞こえてるから、買わないわけにはいなくなるでしょ」

「……おまーな」

聞こえて無かったよ設定で買ってくんねーかも知れねーじゃん。

「だってさー、純兄」

『うえっ!?!』

「急にごによごによってなったから聞きに来てみたら……」

「あう……」

あー、逆に怪しまれちゃってたわけね。

「ビードロねー。高いのかな？」

『さあ』

「……いや、そう返されるのは分かってたけどさ」

ガラスで綺麗って何か高そうなイメージあるけどな。

「買ってくれる? 買ってくれる? 買って買って」

「オモチャねだる子供?」

「オモチャねだる子供だもん」
ビードロ

「……あ、そか」

おーい。

「もー、しょーがないから買っとくよ。あつたらだからね!」

「やったー!」

えーっ!?!

「んじゃオレカステラー!」

「それは元から買うつもり」

「俺等も食いてえし」

なんだよ。それ。

「この食いしん坊!」

『お前（テメエ）が言うな
にゃはは。』

121 忍の修学旅行記：お菓子食べよう

「お菓子くれ！」

「えー」

「いいよ、飴でいい？」

「はい、チョコ」

忍でーす。

待ちに待った訳でもないけどとりあえず少しは待ったかもしれない修学旅行でーす。

と言ってもまだ新幹線の中だけど。

「サンキュ！ 篠は……うん、頼んだオレが間違ってたな」

「しーちゃん、お菓子出そうとしてたけど今ので引っ込めたよ」

「ウソオ！？」

ウソ言っでどーすんの。

「ん！」

「……なぜオレに向かって手を差し出しているのでしょうか桜さん？」

「お返しは？」

ほんとだ、お返しは？

「無い！」

『威張るな！』

「……チエッ。はい、野菜スティック」

一本だけ？

「もうちょっと〜」

「もう一声」

「オンナノコのためを思ってそのお菓子カロリー控えめだぜー」

むう。関係ないし。

んと、さっき清にあげた飴の袋……。

「ほい」

“カロリー35%off”

「……………なんか負けた気分になったのは何故だ」

「お前はいつも負けてるからな、うん」

「夏、お前は何言っちゃってくれて……………かりんとうちょーだい」

あれ、こめかみぴくぴくしてたのは何処やった。

「牡蠣野せんせー」

「あれ、しーちゃんそれあげるの？」

プチ饅頭。

「うん。牡蠣野せんせー」

「オレにはくれなかつたくせに！」

清、かりんとうもらえたのかなー。

「……………」

先生ぜんっぜん反応しないし。

「……………柿の種え！」

「牡蠣野胤だ！」

やっと気付いた。

……………突っ込みのためだけに反応したように見えなくもないんだけど。

「あげる」

「おっ！　ありがとう」

「はい、せんせー。カロリー35%off」

「……………いや、先生太ってないからね」

とか言いながら受け取るんじゃん。

「ほーら、こっちだよ。ふふふ」

なんかこっちはこっちでなんかやってるし。

「くそっ」

清達の席あたしらの前だからねー。

お菓子の取り合いしてるみたいだけど、なんかやりにくそー。

「ほらほら、こっちこっち」

「桜、何してんの？」

「餌付け」

……餌付けて。

「オレは犬か!？」

「いや、どちらかという餌に釣られるマヌケな猿だ」

「さらに酷くすんな純!」

「いや、猿のほうが犬より頭いいんじゃない?」

「だんだん、というかどんどん話がそれてる気がする。」

「中谷達はトランプとか持ってきてないのか?」

「しーちゃんと先生会話続けたの?」

『持ってきてない。だって……』

「じゃま」「面白くない」「めんどくさい」

「……さいですか」

きれいに三拍子そろったねー。

「忍^{おまえ}ー、なんかねえ?」

清はちよつと五月蠅い。

122 清と桜の修学旅行記：ホテルだ！ ベットだ！ 飛び跳ねるのだ！

1 女子部屋

「わっ！ 和洋室だっ！」

「ベットだ！」

「喧しい」

篠く、ノリ悪いなあ。

桜でえす！

「跳ねる跳ねる！」

「やっぱりこれはやら無いとダメだよね」

ホテルのベットってトランポリンみたい！

何だか筋みたいなのが足から伝わってくるけど……。

「しーちゃんもやろーよ。ほら、………玲奈^{れな}さんも！」

忍く？ 鈴木^{すずき}さんの名前忘れてたの？

なんかやたら淡々と荷物の整理してたのは鈴木玲奈さん！

不登校だったんだけど……んくと、何があったのか知らないけど

修学旅行には来てくれたの！

「……あたしはやらないから」

「視線はすっごいベットに向いてるよ？」

「べ、別にやりたいなんて思っていないわよっ！」

……これって、もしかして、これって……。

「ふーん、そっか」

「って忍く！」

「へ？」

これはアレだよ！ 絶対アレだと思うよ！

「きっと鈴木さんツンデレなんだよ！」

「……………」

こてん。右に首をかしげる。

こてん。左に首をかしげる。

「……つんでれって何？」

『そっからか！？』

「鈴木、ツツコミするんだな」

「ば、馬鹿にしないでよねっ！」

うーん、それにしても忍はツンデレの意味知らなかったんだね。
純君だったら知らなさそうだけど……。

「忍、ツンデレって言うのはね、普段ツンツンしててたまにデレ
くとする人のことだよ」

「擬音ばっかじゃん」

これ以外に説明できないんだもん！

「あたしは別にツンデレなんかじゃないんからねっ！」

「んじゃあつんでれを代入し『数学！？』て考えたら玲奈さんはベ
ツトぴょんぴょんしたい、となるわけだからおいでよ」

ツツコミスルーしたよね？ 今。

「……玲奈でいいわよ。高山」

「何でこっちが名前で呼ぶのにそっちは名字なのさ」

「え、だって」

「いや、だってじゃなくて」

「だって！ 下の名前知らないもの！」

「そこかあああああ！？」

自分だって忘れてたくせに。

2 男子部屋

「おーい、じとしもやろーぜ！」

ぼん、ぼん、ぼん、ぼぼん

「何そのまとめ方！？」

純、亮、紫波に決まってんじゃん。

オレと夏はやってんだし。

清だ！

「清、多分それは下にも響いてるぞ」

そんなのオレの知ったこっちゃねー！

だってどーせ下、うちの学校の女子だし。

たしか篠ん所だったし。

「んー……響いてるのなら止めとくよ」

「……シジミ、やろうとしてた？」

「シジミじゃないってば！ 紫波だってば！」

今日だけでそのツツコミ何回目だよ。

「俺やめた。後で怒られんのは清だけで充分だしな」

どーゆー意味だよ、おい。

「……暇だな」

「お風呂って何時からだったっけ？」

「五時」

「今は？」

「四時」

うえー。一時間もあんじゃない。

「誰かランプとか持っていないの？」

「……持っていない」

「てつきり夏が「ねえよ」うん、オレもねー」

「俺もだ」

「じゃあ僕を出そ『初めから出せ！』あはは」

やーこいやっちなあ……。

123 紫波の修学旅行記..班別研修

「おお」

「見事ね」

「うん。見事に……」

「迷ったな」

紫波だよ！

んつとね、今長崎の観光……もとい班別研修中なんだけど。

うん、もうこれ以上ないほど見事に迷っちゃった。

おつかしいなあ、眼鏡橋行くはずだったのに。

それでちりんちりんアイス食べる筈だったのに。

「高山君、ここどこだろ？」

「長崎」

「そうじゃないでしょう！」

あゝ、鈴木さんって意外と元気だなあ。

てつきりもつと高飛車な人だと思ってたんだけど。

「シジミ「紫波だよ！」どっちでもいいで「よくないよ！」話が進まないでしょ！」

だってだって！

「純兄にはこういうの聞いちゃ駄目だよ。純兄、全く知らないところじゃ方向音「お前もな」だから」

「ふうん。てつきり何でもできる天才君だと思ってたわ」

「……嫌味か？」

「それ以外にどう聞こえたっていうの？」

あー……うー……前言撤回。

鈴木さんは高飛車です。

「つという訳でー、まずはここがどこから探さない」と

「目印になるような場所なんてどこにもないじゃない」

「あーうー……とりあえず！ アッチが南で「馬鹿。そっちは東

だ」純兄わかるの？」

高山さん……。適当なことは言わないでほしいなあ。

「時計で調べられるだろ」

あ、時計の短針を太陽に向けて文字盤の十二時との真中が南ってやつかな？

今は十時半だから、あのどーんって建ってるビルの方が南だ！

「あゝ、見て見て、あそこになんか面白い子がいるよ」

「……迷ってる？」

迷子の面白い子？

「うう……。ええつと、アッチが南でコッチが北で……。あつれー？」

「えださん枝里さんテンパっちやる……」

「ん」とん……太陽がこっちじゃからやっぱりコッチが南になって……ぶつぶつ」

うわー。凄いな、なんかあれだね。

モロ不思議ちゃんだね。

「ああーもう！ 純兄わからん！」

「うっさい」

あ、まだ続けてたんだ。

「もう！ 貸しなさいよ。あたしが地図読んであげるから！」

「あれ？ もしかしてこういうの得意？」

「ま、まあね！」

『最初から言えよ！』

「うるさいわね！ ちょっと黙りなさいよ！」

はあい。

「あ、忍、桜、玲奈。ちりんちりんアイス発見」
嘘っ。

「どこどこ？」

「ほんとだ！ しーちゃんナイス！」

「ちよっと！？ 眼鏡橋は「眼鏡橋に行く目的、それはちりんちりんアイスが食べたかったから」……よって目的はもう達成される、

と言いたいのか？」

そういうことだよ！　だってだって、予定表自分たちで作るでしょ？　『眼鏡橋の欄はちりんちりんアイスを食べる』って書かれてるんだもん。

一応眼鏡橋を見る、とは書かれてるけどそれは十五秒って書かれてたりしてねー。

「玲奈分かってんじゃない！」

「さあ行こう」

おおい！

「分かったわよ……。べ、別に、アイスが食べたいわけじゃないんだからねっ！　あなたたちが行きたいって言うから「誰も聞いてないよ」あう」

……鈴木さんって、僕にはつかめないような気がしてきたよ。

「あ、あっちにお土産屋がある。カステラの試食あるかな？」

どうせ買って帰るなら美味しいのがいいしな」

「……紫波「シジミだよ！　ってあれ？　合ってた？」シジミ「言い直さなくていいよ！」」

ああもう！　どーせ僕はシジミなんだ！

お味噌汁の具なんだ！　佃煮なんだ！

「ん、とりあえず一方的に思ったこと言っておく」
うう……？

何か温かい言葉でも言ってくれるの？

「班別研修何処行った？」

ぜんっぜん関係なかったあつ！

高山くんにこう言う事期待しちゃいけないんだね……そうだった。

124 篠の修学旅行記：民泊の雑談

「うわー、これ美味しい！」

「うんうん、いっぱい食べて」

「はい！」

少しは静かにしろ！

……と、思うだけで口には出さない。

篠だ。

「いっぱい歩いたから飢餓で飢えそうだったんだ」

『……………飢餓で飢える？』

飢餓Ⅱ飢えでしょ。

「はうっ！ 違うの！ 飢餓が飢えそうだったの！」

飢えが飢える？

「余計におかしくなってるわよ！」

「飢え死にしそうだったの！」

「飢餓を使うのあきらめた？」

…………とりあえずすぐおなかが空いてたのは分かった。

「あう…………お、美味しいね！ ちゃらんぽらん！」

ちゃらんぽらん…いい加減で無責任なこと、そのさま。

意味不明。

『ちゃんぽんね（よ）！』

「あわあわあわあわ」

「とりあえず落ち着きなさいよ！」

「ふう」

「落ち着くの早っ！？」

「あわあわあわあわ」

「慌て直さんでいい！」

「す、こ、し、は、静かに食べろ！」

まったく、やかましい。

「し、篠が怒ったわ!」

「お、お母さん!？」

「人を勝手に母親にするな」

長女だから半分癪みたいなものなんだよ!

「いや、だってだって、ねえー? 桜」

「はわっ!？ え？ 何々？ 納豆に集中してたの」

「納豆に集中って……。どこに集中するようなどころがあるのよ?」

「ほら、この最後の、ほら!」

分からないから。

最後の粒を取るのに集中してたってこと?

「バターのバター焼き……」

『何て!？』

何でこんなに話がころころ変わるんだよ!

「あ、いや、なんとなく思いついたただだからスルーして?」

「しようにもできないわよっ! 何よそのわけわからない単語……」

単語? 熟語? 文?」

バターのバター焼きって……。どうなのそれ。できるのか?

「ほら、なんか、なんかわからないけどできそうな気がしない!？」

「わかるよ」 「分からないわよっ!」 「……………」

何とも言えない。

何このバラバラな意見。

「あ、あのね、今日バスに乗ってる時に玲奈面白かったんだよ!」

「え? この話終わりなの!？」

玲奈、しばらくすればきつと慣れる。

「あのね、バスに乗った時椅子がすごく倒れてたからね、戻すためのレバー探してたの」

ふむ。

「それでね、玲奈の席、補助席ついてるところだから、椅子倒したり戻したりする黒いボタンがあったでしょ? 「ちよっ」それでね、玲奈ってば「やめ」それは椅子戻す奴じゃないって勘違いして

たの。一回それをポチッて押して、『戻らないじゃない』とか言つてね「止めてって言っ」結局レバーを探し続けるのがかわいかったよ」

ポチッくらいじゃ戻らないわな。

「それでね、わたしが押してあげただけだね。ふふ、ふふ「ちよっと！」その間、ね！　ずっと、補助席抑えてたの！」

補助席？

「だって！　あそこを押したら補助席が開くんだと思ってたんだもの！」

「玲奈、顔がイチゴみたい」

「う、うるさいわね！」

今じゃ白いイチゴもあるけど……。

「そうそう、このイチゴ美味しいよ」

「いつの間に食べてたの？」

「ずっと食べてたよ？」

「ん、あたしもうお腹一杯なんだけどな……」

茶わん蒸し残ってるな。

「わたしが食べるよ、貸して」

「え、まだ入るの？　マジで？」

いつもお弁当少ないのに……。

「昼は少食だけど朝と夜はいっぱい食べるよ！」
なぜ？

「あ、ね、イチゴ食べるときにさ、フォークでプスッて刺す感触気持ち良くない？」

グサツ

『……プスッ？』

125 皆の修学旅行記…短い詰め合わせット!

ホテルの夕ご飯

「……うーん、誰かがこれ食いさえすればここは完食なんだが」

夏の目の前には一人分のサラダ。

夏が隣の清に視線を移すと、

「オレ無理。もうパンク寸前!」

で、さらに隣へ視線を移すと……。

「僕もー」「おれも……」「俺も」

そして、最後の一人に全員の視線が向けられた。

「俺だって無理だからな!」

岬だ。

……うわあ、俺覚えてもらえてるのかなあ……。

あ、考えたら悲しくなってきた。

「ちえっ、美咲ちゃんも無理か」

「美咲ちゃん!」

字が違う! 性別も違う!

「うーん……、よしっ、中国では少し残すのが礼儀だから中国流で

行こう」

「アホかっ!」

「……頭固いな、美咲さん」

ああああああもう!

「村田さんだからな」

高山までえっ!?

普段女子に『さん』とかつけないくせに!?

民泊にて

「高山君、高山君」

「あ？ ……紫波か」

「眠れないよお……」

「知ったことか」

俺にどうしろと？

「酷いよお……。ちよつとくらい相手してよお」

「ああ、あれか？ お前はひ弱な小さい子だから暗い所で、他の人が見えないと怖くて怖くて眠れないってか？ 忍の暇つぶしに毎晩毎晩十二時近くまで寝れない俺がせっかく今日は寝れると思っているのにそれを妨害してまで怖いって言うのか？ なら俺は寝る」

「……ええと、なんか、ごめん」

「分かったらさっさと寝ろ」

「はあい」

……ん、あの話は半分以上が嘘だけだな。

「高山君……」

「寝たんじゃなかったのかよ」

「ゆ、ゆ、ゆ、幽霊なんて、いないよね？ ねっ、ねっ、ねっ？」

「……………はあ」

どういう訳かこの辺りは幽霊がやたら多くて追い払うのに苦労したのに……。

「嫌な事および面倒な事を思い出させるな」

「ええええええええ！？ ど、ど、ど、どう言う事！？」

「あ……いや、なんでもない。とっとと忘れて寝ろ」

これで素直に引き下がってくれば楽なんだけど。

「え？ なんでなんで？ あうあうあ……気になるよお。でも怖いし……………」

……結局怖いのが原因なのかよ。お前はいくつだ紫波。

「はいはい、いいからとっとと寝ろ。幽霊なんざいねえから」

「そ、そうだよねっ！ ふう……お休み」

「ん」

……夏、清、水谷。

よく起きなかったな、紫波の声大きかったのに。

民泊にて 2

「眠くなるまで、しりとりしようよ！」

「しりとり？ ん、いーよ。しーちゃんと玲奈もやるよね」

「いいぞ。暇だし」

「いいわよ」

別に、やりたいわけじゃないけどねっ。

「りからねっ。リス！」

「えー……と、次はあたしでいいのかしら？」

す、でしよう？

「スイカ」

「次あたしねー。カメレオン」

『……………終わったあああああああ！』

嘘でしょ！？

「あっ！？ ごめんっ！ ごめん！ 今のなし！ カメラ！」

カメレオンなんてややこしいものが何で最初に出てくるのよっ！？

「あたしか。ランタノイド」

『何て！？』

「ランタノイド！ ほら、元素の周期表の下の方に書いてある……」

だからなんでそんなものがパッと出てくるのよ！？

「ど？ ど……ドミニカ共和国」

……妙なものしかだしてはいけないなんてルール、あったかしら。

「くるみ」

「ミノタウルス……あれ、これなんだっけ」

分からないなら言わないでしよう！？ ふっう。

「スカンジウム」

「なんで元素ばっかり出てくるのよ！」

「む、む、……むちむち！」

効果音!?

「ち、チタン合金……」

あたし、もしかして、遷った!?

「終わったよ!」

しりとりって、こんな簡単におわるものだったかしら!?

125 皆の修学旅行記：短い詰め合わせット！（後書き）

しりとりを書いていたらなぜか出てきた言葉の半分以上が最後に「ん」がつく不思議……何故でしょう！？

126 帰ってきました

「あー、三年終わったあ」

「早っ」

「いやー、だってさ？ 何かほら、何か一番のイベント終わったから……」

「分かんないよ」

とりあえず今は、電車の中立ちっぱなしで足が痛いなー以外には考えられないや。

忍でーす。

「やあっと帰れる……俺帰ったら即行寝るけん、忍ちゃん起こさんとしてな」

「夏、何で山口弁「何となく」……あそ」

あ、純兄絶対に沈黙の時『話し続けるのめんどくせえ』とか思った！

「皆だるだるだね」

「だらしないわねっ！」

「まあこいつらだし」

おいこらー。

「お兄ちゃんっ！ 忍ちゃんと純君もお帰り！」

「お帰りー。お土産は？」

光、いきなりそれはどうかと。

「うわ、帰ったら絶対会う前に寝ようと思った奴に会った」

「ちよっと、お兄ちゃん？」

なっくん……。

「わー、光ちゃん久しぶりだね！」

「お久しぶりー」

「……兄上……岬、知らない？」

おわっ、美代までいた！？

「岬？ んーっと……あ、おーい！ 美咲ちゃん！」

「人の名前を勝手に変えるなど言うに！」

「……居た、姉上」

「美代はまねすんな！」

完全にいじめる側からいじめられる側になってるねえ、美咲ちゃん。

「お袋か秋さんはどこだ？」

「いないよ？」

あれ？

「母上に……会いたかったの……？」

「黙れ。つまり、テメエ等だけで来たと？」

純兄、五つ下の子に黙れはどうかと。

「そうだよ？」

『ここは校区外だ！』

うわっ、なっくんまで！？

「三人居るから大丈夫だもん！」

「関係ねえよ。ああもう、何かあったらどうするつもりだ？」

「でもでも、校区外が一番遠いところよりこっちの方が近いよ」
へ、屁理屈！

「それでも駄目だ。光、ビードロ抜きだな」

ご飯抜きみたいな言い方だね。

「ええっ！？ 買ってくれてたの！？ もうしないから！」

「本当に？」

「本当だよ！」

「……………」

「あう、お姉ちゃん……」

叱ってる時の純兄の沈黙って怖いんだよね。

オーラというか、何というか。

「んー……、でもまあ今回は光が悪いからなあ」

「お姉ちゃん」

「純兄ー、今回はいいじゃん、大丈夫だったわけだし」

「ああ、光はテメエじゃねえからな」

どーゆー意味だよっ!?

「純、純」

「あ?」

「土産抜きはねえだろ。こいつ等、早く土産が見たかったから来たんだと。それじゃ踏んだり蹴ったりだ」

「本当に土産抜きにする気は無かったけどな」

だろうね。

「ああ……何かもう面倒になってきた。ついでに疲れた。ん、光、もうすんなよ」

うあ、何か突然ぱっきりと終わった。

「はい」

「ん。ほら、ビードロだ」

「やったー! 開けていい?」

「家に帰ってからだ」

「え」

ありゃ、桜たち居ないや。帰ったのかな。

「はあ……。帰ったら父上にまず報告するのがコレかよ、おい」

「……嫌なら、しなかったらいいのに」

「馬鹿。言わんでもばれてるだろ、どーせ」

「……むう。父上、怖い」

「んなこととづくに知ってる」

「……うん、だから……。兄上も一緒に「絶対に嫌だ」ふふ」

ふふってなんだ!? ふふって!?

「帰るか」

「帰ろ! 帰ろ!」

「……さっきから歩いていたのは帰るためではなかったと?」

「いやー、何となくな。何か喋ってないと出そうな気がして」
幽霊見ても怖がるやつじゃないくせに。

「そうだな、こんな時に出られるのは迷惑極まりない」

いつ出ても迷惑がってるくせに。

「……でも、この踏み切りって」
「そういえば岳は来なかったんだな？ テメエ等が行くと言ったら一緒に来そうなのに」

話遮ったね。

ここの踏み切り通らなかつたら遠回りになっちゃうもんね。

だから周りの幽霊達をスルーしようと頑張って話そらしてるんだね……。

「岳くんならひーちゃん家で屍になってるよ！」

「明日体育大会だから、ものすごく練習してたんだって」

「声がかれないように押さえてたって言ってたけどね。動きとかが激しいって」

そっかー、明日なんだ、体育大会。

んじゃ、宿題は『早く寝る』とかかな？

「でね、宿題は『中学生にお兄ちゃん、お姉ちゃんが居る人はお土産をしっかりと味わう』だって」

何でだよっ！？

127 体育大会、開会っ！

「つつー訳でテメエ等あ！　ぜってー優勝すつぞ！」

『おーっ！』

いよっし！　気合十分！　練習十分！

小学最後の体育大会、ぜってー優勝してやるっ！

岳だっ！

「いやー、しっかしあのお菓子大好きせんせがあんなこと言うとは思わなかったな」

「あたしも……むしろ高山くんのセリフだと思ってた！」

「同じく」

いやー、オレってば意外とああ言う事は恥ずかしくてできないのよ？

「あー、開会式めんどくせえ」

「それでいいのか応援団長！？」

「うっせ。どーせならチームリーダーにも言ってやれよ、それ」

「……それは俺がやる気ないように見えるという事か？
うん？」

「あるのか？」

「あるとは言いがたいな」

『結局ねえのかよ！？』

「修也はそう言う事は表に出さないのよ！
ほんとーにねーかも知れねーじゃんよ。」

開会式終わったあ！

と、本当に声に出しては言えないから心の中で叫ぶ。
ずうっと立ちっぱってしんどいよなー。

しかもオレ応援団だから座れねーし。

最初はエール交換だからさ。

「応援団！ 円陣組めーっ！」

……せんせのこのテンションってまさかずっとこのまま？

「よし、組んだな。んじゃ団長、何か言え！」

何か！？ えー……よし。

「カステラパワーだ！」

『分かんねーよ！！』

とか言いながら足は踏み込むのな。

「よし、行って来い！」

『おうっ！』

……ところで、応援団には女子もいるのに何でこんな返事ばかりなんだ？

「赤組のーっ！ けんとー願ってーエールよーい！」

『そーれっ！』

「フレーツ！」

『フレーツ！ あーかーぐーみっ！ そーれ！』

うーん、はつきり言っつて、これ wait している間が一番きつい……。だってエールってほとんど同じだし！

応援合戦の方が見てもやっても楽しい。

『次、赤組お願いします』

いよっし、来た！

昨日は『声がかれたら困る』とか言われて思いっきり喋れなかったからな！

ストレスはっさーん！

「あ……白組のーっ！ けんとー願ってー！ エールよーい！！」

あつぶね、赤組って言いそうになった。

『そおーれっ！』

「フレーツ」

『フレッツ！ あーかーぐーみっ！』

全員間違ってんじゃねーかよっ！？

『フレッツフレッツ、あろ組』

混ざったあ！？

『フレッツフレッツ、白組っ！』

ああ、元に戻った。

『おくくく……ファイトお！！』

ピッ

よし、とりあえずこれでもいーじゃん思考で行こう。
過去は振返らない主義だ！

『プログラム二番、五年生の100m走です』

「応援だーん！」

水くらい飲ませろっ！

「よお、岳」

「にーちゃん！？」

いっつも来ねーくせに！？

明日は雨かあ。

ぺしっ

「いてーな」

「ん、余計なことを考えるお前が悪い。声に出てた」

ウソお！？

「ま、頑張れよ。俺のカステラ食ったんだからな。負けたら殴る」

その笑みを消せえっ！ 怖え！

何！？ まだ根に持ってたのか！？ いやまだ一晩しか経ってね

ーけど！

いや、昨日な、カステラがあんまり旨かったもんだからにーちゃん達の分までうっかり（ここ重要）食っちまって……。

はあ。めったに見せない笑みをここで見せられると怖さ十……百……いや、千倍かも。

「たっける」

「あ、ねーちゃ……うげ」

ねーちゃんのも食っちまったんだけど……。

「あたしの分のカステラ食べたんだから、負けたらチリンチリンア
イスのドロップあげない！ プラス……うん、言わないであげる」

「余計怖いわあっ！」

「はい、分かったら光のためも含めて頑張る！ 行って来い応援団
長！」

どん

はたくなあっ！

「いってー。ああもう、100m走始まってんじゃん。行くぞ！」

『おう！』

だからなんで女子までそんな返事なんだよ！？

と、とにかく、何が何でも勝たないわけにはいかなかったあつ

！

128 六年、全員リレー!

「おー、すっごいいい勝負」

125対128かあ。

「お姉ちゃん、嬉しそうにしないでよ」

「負けてるんだよ!? ウチ等!」

たった三点じゃん。

「……たかが三点、されど三点……」

「もおー。後玉二個入れたら勝ってたのに!」

玉入れてそうそう入るものでも……無いこた無いなあ。

「あれ? そういえば純お兄ちゃんは?」

「帰った」

『えー!?!』

岳脅すだけ脅してさっさと帰ったんだけど。

「気付かなかったの? 次の六年の全員リレー終わったら昼休みでしょ?」

「だって」

「純くんなんてどこフラフラしてるか分かんないし」

……まあ、そうかも。

「フラフラするのは忍だ」

「純兄!? あれ!?!」

帰るって言ってたのに!?!

「……帰って、無いよ?」

「もう一度来ただけだ」

「純兄が!?!」

「……どういう意味だ?」

わざわざ純兄がもう一回来るなんて……。

「明日は……うん、雪とまではいかなくても雨だ」

「何か岳が来いとか言ってたからな」

なんかスルーされた。

「あたしそんなの言われてないんだけど？」

「テメエは言わなくても来てるだろうが」
来ないかもしれないじゃん。

「忍は暇人だもんな！」

なっくん、嬉しそうに言わない！

「あ、お兄ちゃん！」

「ほら、もう始まって。応援しないでいいのか？」

あれ？ あ、ほんとだ。始まっている。

たーけーるーはー……。

「あゝ、岳お兄ちゃんアンカーだよ」

「……チツ」

え、純兄今の舌打ち何！？

「^{アイツ}岳……今俺がいた方が怖くて速くなるって言いやがった」

読唇術……便利だよねえ、こんな時。

「事実じゃない？」

「ん、岳が負けた時はついでにテメエも……ああ、言わないでおい
てやる」

あたしが岳に言ったのと同じ事言ったあ！

「なっくん、純兄が怖い」

「あはは、頑張れ。俺は白を応援するかな」
人の不幸を笑うなあっ！

「おにーちゃん？」

「……敵だ」

「やっつけろー！」

「はい？」

人を呪わば穴二つ！。

……人を笑わば穴二つ？

体に穴が開かないように気を付けてね。

「お前らとにかく応援席座ってろ！」

「お兄ちゃんたちが居るから「よし、んじゃ別のところ行くか」えーっ」

えーっ。

ここが一番見やすいんだけど。

「ところで忍？」

「何？」

「ずーっと鉄棒の上に座ってて足痛くならねーの？」

ここが一番見やすいんだけど。

「んー。若干……あーいや、大分痛い」

棒に当たる位置変えてるんだけどなあ。

「本部席の方意外と見やすいぜ。ゴールもあっち側だしさ」

「行く」

くるんと回ってー。

元に戻った。

一回転。

「天国回り」

「地獄回りは」

できません。

「行くならさっさと行かねえと……あとちょっとしか残ってねえし」

アンカーまであと二人じゃん。

「よし、走ろう」

「えー」

「何で言いだしっぺが文句言ってるの!？」

あ、あ、あ、後一人。

「とりあえず行こ！」

「うー、いいな〜お姉ちゃん達」

「……後三年」

「ウチ等があっち側に行くまで？」

「……うん」

「あーっ！ こけた！」

「やべえじゃん。抜かれた」

「ん、これはこれで『よくねえよ！』面白『くない！』五月蠅い」
だって純兄がボケるから。

「これ団体競技だからドーンと入るだろ？ 得点」

「一位四十点、二位零点、引き分けで両方に二十点。変わってなければ」

「詳しいな」

「二年連続得点係だからね！」

これはあたしだけだった。

「ん？ 三年連続だろ。中一の時乱入してたから。知り合いがいるのを使って」

「頼まれたんだよ！」

言い方によって凄い違い。

「あ……白の奴速え……。大丈夫か岳」

「さあ？」

「……おい」

だーって。

「あ、やっとバトン渡った。岳は……白と同じ位じゃねえか、足の速さ」

うー……。

四十三点差はキツそうだなあ。

「……あれ？ 何か岳、速くなってね？」

「ん？ あ、ホント。さっきまでの何さ」

そんなら最初っから本気出せばいいのに！

「ねえ純兄……？ あれ、純兄は？」

「へ？ いねえの？」

んー、まあいいや。

「あ、あ、あ、後ちよつとで追いつく！」

「でもゴールまでも後ちよつとだぜ？」

「岳ー！ 負けたら怒るよ！？」

あ、さらに速くなっ……ちやいないな、うん。

って言うか、これ位で速くなったら凄いなあ……。

「よっし！ 追いついた！」

パンッパンッパンッ

あ、終わった……。

どっちが勝ったの？

引き分け？

「ん、ぎりぎり勝ったな」

『純（兄）！？』

「どこ行ってたの！？ っていうかそのカメラどっから……」

「親父が持ってたから借りてきた。ほら」

んー……？

あ、ちよつと岳の方が早くゴールしてる。

そういえば最後の最後で飛び込み前転してたような。

「これ借りに行ってたんだ。わざわざ」

「いや、岳を脅しに行った。これはついで」

岳が急に速くなったのは純兄が脅したから？

純兄……。

なんというか、凄すぎる。

129 いつもと違うことをするのはよくないらしい(前書き)

携帯だと、行間が空いていると読みにくいという意見がありましたので行間を詰めるようにしました！

今までのところもすぐに修正しますが、少しの間二種類あることになります……。あしからず。

129 いつもと違うことをするのはよくないらしい

「さあって、今三点差で負けてるわけだが」

「ぜったいリレーの最後、高山君の方が速くゴールしたわよね？」

「……まあ、そこんところは得点係の判断だから」

「え、おれのせい!？」

何でだよ。

リレーの時は五年がやってたろーが。

岳だ!

今はとりあえず、昼食休憩中。

んでもって作戦会議……先生曰く。

ぜんっぜん作戦練ってねーけどな。

「あー、赤飯うめー。赤だぜ、赤。俺らの赤!」

「五月蠅い」

「うん、オレも思った……」

「落ち込むならやめときゃいーのに」

とゆーのはまあ、冗談で。

「作戦どうしますチームリーダー」

「……なぜそこで俺に振る」

「オレってば応援専門だから!」

あれ、なんでオレ目そらされたの?

「はぁ……」

あれ、なんで修也溜息ついたの?

「修也ちゃん疲れてるなら「お前のせいだ」えー!? いや、わかってたけど」

「分かってたならやめんか!」

「それはともかく「ともかくするな!」いつものやるか!」

ちようど弁当も食い終わったし!

食後の運動だ!

……うん？食後の急激な運動は体に悪い？

オレいっつもこれやってるもーん。だから大丈夫だ！

……たぶん。

「さー、修也！かかってこい！」

「……岳、岳」

「あん？」

「今日は椅子運動場に運び出しててみんな机に座ってんだから……」

机の上を飛び回るなって？

誰がいつそんなことをした！

……オレいっつもやってますね、はい。

「んー、よし、廊下でやろう！」

「ったく……」

とか言いながらついてくる修也ちゃん。

文句言うつもり無いっしょ？

「そこ二人！今日は暴れるなよ！うちのチームの切り札なんだからな！腹壊されたら困る！」

「でも残ってんの100m走と組体だけじゃん」

「馬鹿！その100m走で思いっきり走れなかったらどーする……」

うーわー。

いつものせんせの面影ゼロじゃん？

「とゆーわけで今日は駄目だ！」

『はあい』

『プログラム17番、六年生の100m走です』

「うう……」

「岳？どうした？」

「暴れ足りなくて逆に腹痛え……」

普通逆だろ！？

と、自分の体突っ込んでみる。

「普通逆だろ!？」

あ、突っ込まれた。

「大丈夫かよ……お前、うちのチームで一番足速えんだぞ？」

「はい、一つしつもん。修也、50m何秒」

「7.9秒」

あーうー……。

「オレ7.7。チェツ、せっかく一番を修也に仕立て上げようと」
思うなよ」……」

だあってえー。

よし、最終兵器。

「にーちゃんどこか分かんねー？」

「お前兄さんいるのか？」

修也はそっからかよ!？」

「えーっと……なんか!あの人だよね!」

古閑!なんでわかるか!？」

「んー……と、あのガ……元気いっぱいの人」

「そりゃねーちゃんだ!」

最初の『ガ』についてはスルーしてやる。

たぶん『ガキ』だろ？」

「にーちゃんはー……ほら、あの……何てーか、怖え奴」

「ああ!よく岳が百マス計算挑んでる」

「それ!」

あ、最近やってねーな、百マス計算。

「そーだなー……。確か、リレーの前は鉄棒近くにて……」
役に立たねー情報だなおい!？」

大分前じゃねーか!

「今は給食室の前に」

「遠っ!？」

うーわー、遠っ。

うーん、でもいるってことは見てるってことだよなー。

「うーん、うーん、にーちゃん見てるんだよなー」

うーうー、ぷれっしゃー。

「ちょ、余計具合悪くなってる？大丈夫？高山君」

「古閑、お前次」

「あっ！」

うーん、うーん。オレの番まであと五人ー。

「あ、おれも行ってくる。修ちゃん頼んだ」

「だれが修ちゃんだ」

脱力させるなあっ！

わー、にーちゃんこっち見てるー。

「おい、高山お前次だからな」

うーうー、オレ次だから間違いないにーちゃん見てることになるよなー。

「はい次ー」

わっ！オレの番。

にーちゃん見てるぞー。

よし、プレッシャーOK！

「よーい……」

パンッ！

ああもう、この音心臓に悪いからやめてくれよ！

んな事より、ほらほら、にーちゃん見てるぞー。

よし、行ける！

「……高山、腹痛いんじゃないかったのか？」

「とてもそうは見えないけど……」

「あ、アイツ純さん利用したな！」

『純？』

ああ……そーだった。

「岳の兄さん」

「ああ、そう。で、利用って……」

なーんかなー。

前からピンチになったら、岳の奴純さんで自分にプレッシャーかけて……。

というか、恐怖でピンチ乗り切るのが癖みたいなんだよな。

パンツパンツパンツ

「ふへえー。怖かった」

「ほらな」

『……………』

130 くみたいそー

「わゝ、凄いゝ」

「ひらひら!」

「……うねうね」

今ねゝ、岳お兄ちゃん達の組体操だよゝ。

光ですゝ。

「なっくん、何だっけあれ? イソギンチャクだっけ?」

「え、名前あんの?」

「……もういいや」

あのねゝ、組体操のねゝ、腕を交差させて隣の人と手をつないでゝ。

波みたいに体を起こしたり倒したりするやつだよゝ。

「あ、終わった」

バラバラになってゝ。

あれゝ? 二つに分かれたゝ。

「……新聞記者、邪魔」

「うん。邪魔」

せっかく綺麗なのにうろろされたら違和感がゝ。

「あ、騎馬作ってる! それぞれ二列目の方」

「一列目の方は……なんか構えてる? 剣? とか弓?」

……チャンバラゝ?

それとも昔の戦ごっこ?

「あっ! 歩兵前に出た!」

「やっぱあれ歩兵なのね」

「弓が思いっきり関係ないところ向いてるけどゝ」

「……あさっての方向」

あのまま撃ったらぜったい弓が行方不明になるねゝ。
パントマイムだけどゝ。

『わー!』

「あ、騎馬も出た!」

「あ、あ、あ! あはははは!」

「新聞記者、巻き込まれてやんの!」

お互いの方に走って行ってるからね。

その間に立ってたら挟み撃ちだよ。

「あー、ぎりぎり抜け出した」

「惜しい!」

あー、ぶつかった騎馬が壊れ始めた。

「……よく見たら、白組ばかり騎馬壊れてねえか?」

「赤組もちよつと壊れてるよ? ほら、おんぶ状態になってるやつもある」

「組みなおせよ!」

ほんとにね。

「あ、白が一騎になっちゃった」

「最初から真ん中にいたし、お頭かな?」

「……盗賊団?」

「海賊じゃない?」

……海賊は馬使わないよ。

「あ、お頭も倒れた」

「結局お頭って呼ぶのかよ」

「なんか気に入った」

「……あそ」

赤が勝った!

つまり私たち優勝できるのかな?

「そーいや純君は?」

「純兄? 帰ったよ」

「また!」

「結果だけ教えろってさ」

どうせなら見て帰ればいいのに。

「……赤も崩れた」

『えーっ』

何でっっ？

「次何するのかな」

「そろそろ終わりだから何か大技でもすんじゃねえの？」

「五十段タワー！」

「人数足りねえだろ、どー考えても」
んっつと。

「六年生は確か全員で六十五人だよ」

「それ以前にバランスとれないよ！」

「……うん、分かってたからね。分かってたけどなんとなく言ってみただけだからね。だからそんなに色々言わなくても……」

言わなきゃいいのにっ！

「あ、でもタワーはやるみてえじゃん。ほら」

おっ、いっぱい積みあがってる。

男子ばかりっ！

「五年生も交じってるよ！ 名前知らないけどクラブにいる人がいる！」

「名前くらい知っとうよう」

「多田^{ただの}野ひ……くんだよ。名前くらい分かってるって！」

……下の名前分からなかったんじゃ……。

「五段タワーじゃん！ あたしが言ったやつ^の十分の一だから五は合ってたよ」

「はいはいよかったねー」

「……なんかすごく馬鹿にされたような気がする」

「馬鹿にしたんだよ」

はっきり言うね。

「あ、女子は女子で三段タワーしてる」

「スルーですか忍さん」

「嫌なことはすぐ忘れる主義なんだ！」

知らなかったよ。

「うらやましい主義だなおい」

……五秒も覚えてなかったね。

131 体育大会、閉会！

『成績発表をします』

どきどきどきどきどきどきどきどきどき……

とまではなつてねーけど、緊張すんなー。

岳だ！

体育大会終わって、んで閉会式の成績発表。

を、得点係の翔がやってる。

『白組、325点』

……マジで？

うわ、もしかしてヤバくね？

「た、高山君……汗凄いよ」

「そりゃそーだ。朝からずつと運動してたんだから」

「えーと、冷や汗凄いよ。漫画みたい」

漫画で。

でもなー、やっぱ負ける可能性が大分高いんじゃない？とか思っ

てたらな、そりゃー怖くて怖くて冷や汗だらだらにもなるっしょ。

にーちゃんとねーちゃんが何してくるか！

……ああ、余計怖くなった。とりあえず考えるのやめた。

「でも、中谷笑ってるから勝ってるんじゃないかねえのか？」

「んー、そっか！ んならよし！」

『単純……』

単純で何が悪い！

『赤組、325点。引き分けです！』

……まさかの引き分け！？

すげー。

ま、負けてねーから帰った途端絞め技とかはねーよな！

ねーよな！？

帰った途端とび蹴りとかねーよな！

な!?

あーうー、怖えから考えない。

「……喜ばいいの!?! 悲しめばいいの!?!」

「リアクションをしなければいいだろう」

「それはそれで何か悲しいもん!」

「なら悲しめば……」

「あ、そうか……なあ?」

違うと思うんだけど。

「翔ーっ! 何で引き分けなのにあんな嬉しそうだったんだ!?!」

「こ、怖いから突進するな!」

そっか?

「質問の答えになってねー」

「だから怖えよ番長!」

「だーれが番長だゴラ! いーかげんなこと言ってんじゃねーぞコ
ラァ!」

「ノリノリじゃないかあ!」

うん、ちよつと楽しかった。

「ってそれも答えになってねー!」

「あ、ごめん。んーと……ごめん、その質問には答えられない
ハァ?」

「なんでだよ?」

「そ、それは……実に言いくいんだけど……」

なんだ? まさか質問を聞いてませんでしたとかじゃねーだろ?

「質問を聞いていなかったのだ!」

まさかのそれかよ!?

「威張るな!」

「高山君、首絞めるならもうちよつと手加減を……」
んー、じゃあちよつと手加減。

「余計強くなつて……ぐふう」

「あ、氣い失った」

「ええっ!？」

「失つてねーよ!」

まあ冗談は置いといて。

「んで、さっさと答えろよ」

「そ、それは……実に言いにくい」「それはもういいから!」「じゃあ質問をどうぞ」

占い師?

それともあれか? えーと……

ロシアンルーレット!

……違うな。

「何で引き分けだったのにあんなに嬉しそうだったんだ」

あ、修也ナイス。

言うのを忘れるところだった。

「あー、それは……うん、引き分けだったらどっちのチームからも文句言われないしさ、楽なんだよ」

文句う?

「数え間違いじゃないの!?! とか?」

「そうそう、そんな事去年言われた」

「そりゃそうよ、あたし言っただもん」

「お前もかあ!?!」

何人に言われたんだろー。

いや、誰かが数えてるわけじゃないけどさ。大体で。

「だ、だって……修也のチームが負けてたんだもの」

「……お前いったいいつから修也が好「いやーっ!」耳があああああああ!」

今のは翔が悪いっ!

「おーい、そこ。チーム集会始めますよー」

あ、せんせが元に戻ってる。

「それじゃあ最後にエール！ 行け！ 団長！」

オレはポ○モンか！？

ってかなんかまた熱血になってるし！

「ふー。よし！ 行け！ 応援団！」

『ポ○モンかよ！？』

あー、最後まで女子も男口調な突っ込みだったなあ。

「赤組のーっ！ ……あー、違うな。ちよつとせーんせ」

「何だ？」

「いやー、んとな……」

『赤白のーっ！ 引き分け祝ってーっ！ エールよーい！』

『そーれっ！』

……んーとだな。

『フレーツ！』

どーせ引き分けなんだからエールなんて全くおんなじことになる
でしょーと思って。

『フレーツ！』

赤白合同で最後のエールをやるうということを提案した！

『あーかーしーろっ！ そーれ！』

うお、オレってば結構いい事したんじゃない？

『フレッツフレッツ赤白』

白組の女団長もノリノリだったし。

『フレッツフレッツ赤白……』

皆の息もなんかそろってるしな！

『オオーッ、ファイトオー！！』

ピッ！

まあとにかく、最後の体育大会はすっげー楽しかったということ

で！

『ありがとうございますましたあ！』

……中学の応援団は学ランらしいし、やってみよっかなー？
オレは番長！ってな。

132 数学しま……す！

「はい授業始めるぞ」

「きりーつ、れーい」

『さようならー』

「こらっ！」

きっと今日はみんな帰りたい気分だったんだよ。

忍でーす。

んとね、どういう訳か、そんなもっていつの間にか『ドッキリ係』なるものが作られてて。

その第一回目のドッキリとして今のやり取りが出来上がりました。

「鈴木！ お前意外とこんな才能があったんだな」

「ば、馬鹿にしないでよね！」

玲奈の不登校もどっか飛んでっちゃってたし。

相変わらずのツンデレ（だっけ？）だけど。

こういうクラス全員の協力が必要なモノが出来るようになったってかなりの進歩じゃない？

教師はまあ、大変だろうけどさ。こんなことされたら。

「今日先生へらへらなんだからさっさとやるぞ」

「へらへら？」

へらへらって、なんか笑ってるやつ怒るときに言う『へらへらするんじゃない！』のへらへら？

「へろへろのちょっと軽いものバージョン。おら、プリント配るぞー」

「へりへりは？」

「へらへら以上へろへろ以下」

「へるへるは？」

……プリントは？

「へろへろ以上」

「へれへれは？」

「へろへろ以上へるへる以下」

「おお、へろへろ五段活用……って。

『プリントはー！？』

「お前らが質問するからだろが！」

「あゝっ、人のせいにした」

「やかましい」

否定しないんだ。

「あ、せんせー、車の中の卵入れ取ったんだって？」

卵入れ……？

卵入れ！？

なぜに！？

「日焼けしたから捨てた」

もったいなー。

「卵入れて何々？」

「買った卵を置いておく所。割れなくて便利だったんだけどな」

「……それをつける前は割れてたのか？」

「……………」

割れてなかったって意味だよね、この沈黙。

「でもさー、そんなの卵置き忘れたらピーちゃんなるじゃん？」

『何で生まれるんだよ！？』

「普通腐るでしょ！？」

あ、一人だけ違う突っ込みした。

誰かは不明。声だけじゃわかりません。

「はいプリント回ったな、回ったと言え。よし、んじゃまずー」

確認になっていない気が。

「はい、これ一センチ一センチの正方形。これが四つ集まったのがこれ」

黒板に図ペタリ。ポロリ。

「あ」

図落ちた！。

磁石が弱いんだね。

「どー見ても一センチ以上あると思いますーす」
小学生かお前は。

「はい、この面積は」

おお、見事なスル！。

『四平方メートル』

「はい単位違うなー。平方センチだから」

見た目はもっと大きいけどね！。

「はい、実はこれを使って二平方センチメートルが出来る！……あ」
ポロリ。

また落ちた。

「はい、四つの四角の対角線をそれぞれ結ぶ！……あ」

ポロリ。

なんか落ちるまでの時間が短くなってきたような。

「はい、こうすれば中にできたこの四角は半分になって二平方セン

……」

ポロリ。

「つまり、一辺×一辺が二になるわけだ」

いちいちはりなおさなくても、手で持った方が早くないかなあ。

「 $\sqrt{2}$ ？」

「そうこれを発見したのが」

「マゼランとゆかいな仲間たち！」

「なんでだよ！？今は数学！地理の時間じゃない！」
ポロリ。

「ピタゴラス！」

「違う」

「アルキメデス！」

「の弟子」

『ええー！？』

弟子いたんだ！

ポリ。

「その磁石、むなしく落ちていくなあ、先生みたいに。あ
はいそこー。」

……えと、花坂^{はなさか}って言ったかな？
顔が笑ってるよ。

「くそっ」

あ、なっくんなんかは大爆笑中だ。

「先生若いな！」

清、追い打ちをかけるようなこと言わない。

「もういい」

あ、落ち込んだ。

「今日は宿題なしのつもりだったけど出す！はい配るぞー」

『花坂あ！ついでに海中！』

「いやーっ！ごめん！ホントごめん！」

「何で俺までっ！？」

しかもついでだって。

133 二者懇って

「高山さーん、高山忍さーん」

ここは病院だったっけ？

「はーい、遅くなってごめんな」

「いーえ、話をするような相手はみいんな部活行っちゃっててもう暇で暇でしようがなかったうえに純兄にはとっとと帰られちゃって、表に出さずに物凄くイライラしてたけどぜんっぜん怒って無いですよ？」

「……はい、ごめんな。どうぞ」

だからー、怒ってないってばー、あははー。

忍でーす。

今日二者懇で、とりあえず本来の自分の時間までは待ってたんだけど……。

何か知らんが部活を待たせるとかいう理由で他の人が入ってきて遅らされてー。

いっちばん最後になってしまった。

「はい、それで……どんな感じ？」

「何がですか柿の種………先生」

「……と、とりあえず、クラスで」

クラスがどんな感じか？

「んー……、五月蠅い」

「ああやっぱり」

やっぱりと思ってるんだったら何とかしてー。

「どの辺が五月蠅い？」

「えー……花咲とゆかいな仲間たちがくん

え、何？ 何かギャグアニメみたいなのけ方したよこの人。

「そ、そうか。で、五月蠅いから席替えしようとしてるけど、それ

についてはどう思う？」

「その席気に入ってるんですけど」
がくん

またこけた。

あたしの席、真ん中の列の一番前で、今教師が座っているとこなんだけど……。

五月蠅くても聞こえるから、気に入ってるんだよねー。

「……と、ところで成績いい方だけど、塾は行ってないんだよね？」
「行ったところですかとやめると思います」

がくん

……癖なの？

「自分で勉強「してません」……やったらもっと伸びるでしょうに。特に社会」

「歴史なんてどこで使うんですか」

「いや、あのねえ……」

今やってるのは公民だけだよ。

「志望校とかは？」

「今のところ無いです」

「んー、そうか」

あれ、終わり？

さっきから全然話続かないねえ。

「高山は兄弟とかいるの？」

「高山純はあたしの兄ですが何か」

「ああそうだった、ごめん。弟とか妹とかは？」

純兄に聞かなかったのかなあ。

「どっちもいます」

「ちゃんとお姉ちゃんしてる？」

うーん、何て難しい質問だ！

「多分？　きつと？　恐らく？」

「……純は家ではどんな感じ？」

「家族全員の恐怖の対象！」

がくん

若干このリアクションうっとうしくなってきた。

「ああでも、たけ……弟と百マス計算勝負とか、最近ではナンプレも勝負やってます」

「そっか、弟はいくつ？」

「小六」

「あ、来年入ってくるんだ」

……あ、柿の種がずっとこのまま学校に居るんだったら岳の学年持つことになるんだ。

岳！一組だけにはなるなよー。

「はい、最後に気になることある？」

「気になること……気になること……？ うーん」

教室見回してみるけどー。思いつか……あ。

「バルコニーの花壇が雑草だらけです！」

「そこは気にしちゃダメだ！ 抜きに行かないで」

「誰がいつそれを抜いたんですか。どっちかっていうと食べられるのが無いのかの方が気になってるんですけど」

食べないけどさ。苦いから。

「そ、そうか……まあ高山は不思議だからなあ。他には？」

あたしのどこが不思議なの！？

いや、たまに言われるけどさあ。

んー、他ねえ。

「ほら、藤原君が腕時計つけてますとか」

そーなの？

「小浜君の眉毛ありませんとか」

「そーなの！？」

知らなかった……今度見てみよう。

「あ、そうそう。一昨日の音楽室の掃除が無かったってこと聞いてなかったんですけど」

おかげで掃除がサボれた。

「あー、あれな。あの日先生職員室によらなかったからそのこと書いた紙見てなかった」

うわあ、音楽の八木田^{やぎた}先生が言ったことと全く同じだ。

「ほら、先生渡り鳥みたいにあっちこっち行ってるから……」

「先生」

「ん？」

「渡り鳥を馬鹿にしてはいけません！」

「それ先生馬鹿にしてることになるからな!？」

あはは★

「先生くくく渡り鳥♪」

「お、ま、え、なあ……」

先生くくく渡り鳥!

テストに出るよ!

134 懸賞に応募しよう

「父さーん、何してんだ？」

はがきだらけだけど。

「懸賞に応募しようと思って」

「懸賞？何の？」

チラシもいっぱい。

岳でーい。

「今書いてるのはこれ」

ふむ？ 何々……。

《男女虫キャンペーン！

パッケージについたシールをはがきに貼って送ると抽選で五十名様に男女虫パペットをプレゼント！》

……ええと、どー反応すりゃいーんだ？

「……欲しいのか？」

「いや」

欲しくねえなら応募するなよ！？

「ほら、こういう誰も応募しなさそうな奴は当たる確率が高いだろ？」

そういう考え方をする奴は他にもいるんじゃないかなあ？

「んで、もしそれが当たったらどーすんだ？」

「喜ぶ」

「……で？」

「終わり」

「終わるかよ！？」

もったいねー！

「結局邪魔になるだけじゃねーかよ！？」 大体なんだよ男女虫って！？」

「知らん」

「知っとけよ！」

「とあるお菓子のキャラクターだ」

「知ってんのかよ!？」

あー、なんかすっげー疲れてきた気がする。

「オレ、年かな」

「……小六が何言ってるの？」

「お前のせーだ！」

「人のせいにしてはいけません」

「やかーしい！ 本当の事だろが！」

よし、落ち着けオレ。

とりあえず話を変えよう。

「んで、応募するやつ他にねーの？」

「無い」

「ねーのかよ!？ はがきこんなにあるのに!？」

「と見せかけて」

「見せかけんでいい！」

「実はこっちに本命が」

だったら全部そっちに出せよ……。

「たたたたたたー。ニ○テ○ドー3○Sー」

「おおおおおおお！」

まずは何で青い狸が不思議な道具を出すときの音楽を口で言ったのかから説明してほしい！

「3○Sって、これあんの!？ 応募すんの!？」

「いや」

「しろよ！ 何で出したんだよ!？」

「応募したいんだったら自分で書いて」

「あ、うん」

……あれ？ 何かはめられた気が。

父さんもしかして自分で書くの面倒だっただけなんじゃ……。

「あれー？ 何やってるのー？ 二人してー」

「あ、母さん。懸賞書いてんの」

「…………お父さん？　まさかまたいらない物貰おうとしていないでしょうね？」

あ、父さん硬直。

おもいつきりいらん物貰おうとしてたもんな。

「あゝ！やっぱりまたやろうとしてたのね！」

「母さん、またって？」

「十年くらい前にね、冗談でこおるなぬいぐるみの懸賞に応募して」

こおるなぬいぐるみ見た感じ冷蔵庫位ありそうなんだけど。

「当たったんだ」

「ううん、十枚外れたの」

「ならいいじゃんかよ！」

「出したはがきは十二枚よ？」

んじゃ二枚は当たった……って！？

「そおるなぬいぐるみが二体も当たったのか！？」

「そうなのよ。ほら、そのうち一体は保育園にあげたんだけどね」

何だ、あげたのか。

「もう一体は？」

「……はあ」

え、なんで溜息吐くの？

「岳が物凄く気に入っちゃったからあげたり売ったりできなかったんじゃない！」

「えええええええ！　オレのせい！？」

記憶にはない！

いや、十年も前なんだったらオレ一歳か二歳なだけどさ。

「オマケに忍まで気に入っちゃってるし、純はぬいぐるみは興味なさそうだったのに二人の味方するし」

おおっ、五歳のにーちゃんやっさしー！

あれ、光は？ そっか、生まれてねーな。

「で、結局今は押し入れてぐっすりなのよ」
あるのか！？

よし、このはがき書いたら探してみよう。

135 不思議満載なぬいぐるみちゃん

「ねー、ホントにこん中にあるの？」

「母さんが言ってたから間違いない！ 多分」

そこに多分をつけないでよ。やる気なくなるから。忍でーす。

岳が、押し入れにでっかいぬいぐるみあるらしいから探そーぜ！
なんて言ってきたから探してるんだけど。

「無いじゃん」

「うーん、ここじゃねーのかなー？」

「んじゃもう一個の押し入れ探そうよ」

見つけてどうするつもりなのか知らないけど……。

「えー。あっちの押し入れ？」

「あっちの押し入れ」

嫌がること無いでしょうが。

普段からおとーさんとおかーさん使っているとこなんだから……。

「はい、さっさと来る」

「なんだかんだで探すのノリノリじゃねーかよ」
だってー。

探してるのって冷蔵庫位大っきいぬいぐるみでしょ？

ちよっとくらい覚えてるよ。

たしかあれは……。

「あったあー！！」

「……え、これ？」

なんというか、無残なことになってる気がしないでもない……あ
あいや、思いつき無残なことになってるけど……。

「胡麻和え！」

「どんな名前だよこのぬいぐるみ!？」
だから胡麻和えだってば。

……何でこんな名前がついたんだろう。
あたしがつけたような気がするけどさ。

「えー……まあいいや。何でその胡麻和えの胸が赤いのかから説明
してくれねーか？」

全身クリーム色なんだけどねえ。

なぜか左側が胸のところから赤いという……。

「これケチャップ」

「どーやったらぬいぐるみにこんなにべっとりケチャップがつくん
だよ!？」

「何でだったかなー」
んーっと、んーっと、確か……。

「あ、思い出した。開封直後のケチャップを思いっきり握ちやって、
それでぶしゅーっと噴出されたケチャップが胡麻和えの胸に直撃!」
「アホか!？」

「四歳のかわいい過ちだよ」

「やったのねーちゃんかよ! しかも結果は全然かわいくねーよ!
むしろ怖い!」

突っ込み長い。

んでもって、

「やったのなっくんね」

「なっくん!」

何で壁に向かって叫んでるの。

「呼んだ?」

そして何でなっくんがここに居るのかな!?

「いや、呼んでねーよ別に」

「あそ。って、うわ、ホウレンソウのお浸しじゃん!？」

「どんな名前だよ!？ ってか、え? 胡麻和えじゃねーの!？」

あれ、名前が長いって所には突っ込まなかった。

「胡麻和え？ こいつの名前はハウレンソウのお浸しじゃねえの？」

「そーだっけ。ああでもそんな気もしないこともないけど」

「あれ？ やっぱ胡麻和えだったっけ？」

「あれあれ？ こいつの本名何だっけ？」

「よし、とりあえずまずこのキャラクター名を思い出そう」

「それよりまず、押し入れから引っ張りだそうよ」

まだ出してなかったし。

何か突き出た鼻が突っかかって見てて痛いし。

「よーいしょ。うわ、意外と重っ!？」

「そーそー、重から移動させる時は皆で蹴ったり体当たりしてたよね」

「あと転がしたりな。香ちゃん面白かったなあ……」

ええと、香ちゃん……ああ！ 山口の友達の中で一番の不思議ちゃん！

ちよっと天然も入ってたし、小っちゃかったし、なんか皆の妹香ちゃんとか言われてたな！。

……今度山口行ったときあたしの方が小っちゃかったらやだなあ。

「なつくんとねーちゃんも手伝えよ！」

「ああ、悪い」

さー、皆で引っ張ろう。

「……何やってんだ、テメェ等」

『あ、手伝って。てかやって』

「質問の答えになってねえ」

え？ 質問してたの？

「ほら、この押し入れの中のぬいぐるみ出すの手伝ってって」

「ああ、氷漬けな」

『また新しい名前出たああああ!!』

でも何でおかずの名前じゃないの!？

「ん？ きんぴらごぼうだったか？」

結局おかずの名前だし！

「ちょ、ちょっと、やっぱ一回これ出すのやめて名前思い出そう!」

「そだね、ええと、お味噌汁!」

「それだああああ!」

一発で分かった!?

「よし、すっきりしたところでお味噌汁出そう」

「わかめの味噌汁だっけ、豆腐の味噌汁だったっけ」

「余計なところに突っ込むな! 気になる!」

なっくん、細かい所気にしすぎじゃない?

そうでもない?

「わかめと豆腐の味噌汁だ」

「ああ、すっきりした」

「したのか!? これで!? なっくんすげー」

すごい。

……何が?

「んじゃ出そう」

ずぼ

「……何この音」

「ぬいぐるみが抜けた音だろ?」

こんな音ふつうしないよねえ。不思議だ。

「やっぱでけえな、わかめと豆腐の味噌汁」

「やっぱなめこの味噌汁じゃない?」

「もういいから……」

あ、疲れた?

「んで、このキャラクター名ってなんだっけ」

「たしか、なめっこだ」

何のキャラクターなんだろ、これ

「……やっぱなめこの味噌汁かも」

「違う! こいつはニンジンとサツマイモの甘煮だ!」

何か無駄に長くなったあ!

「何を突然……あん時お前一歳だったろ」

「背中にこんなのが挟まってた！」

背中に！？ どーやって！？

《このぬいぐるみのなまえはにんじんとさつまいものあまにです。
かわいがってください》

……………捨て猫？ もとい捨てぬいぐるみ？

「すげえ、字は明らかに子どもの字なのにぬいぐるみの事『この子』
じゃなくてちゃんと『このぬいぐるみ』って書いてある」

「……誰が書いたんだ、これ」

「え？ これってあれだろ、俺等で名前を忘れないようにしようっ
て書いた奴じゃ……」

何でそれが捨てね……ぬいぐるみみたいになってるんだろ！？

不思議だなあ。昔のあたしたち。

136 ぬいぐるみだって悩めます

こんにちは。昨日発掘されました、ニンジンとサツマイモの甘煮です。

ただいま、今まで見たことのない女の子に破れたところを繕ってもらっています。

ああ……親切だなあこの子。

「でもよくこんな特徴的なぬいぐるみの存在忘れてたよね」

……独り言で妙にぐさりとくる言葉を吐きますが。

わたくし私、忘れられてたんですね……。

『おお、お前は！』

え、なんでしょうこの青い車。

『お前は……』

何やら私のことを知ってい……。

『誰だ？』

る訳がないですね、はい。

でも私はこの声を聞いたことがあります。

『ラジコンカーさんですか』

『おおうっ！？ ま、まさかオレって有名！？』

ええと、馬鹿なのでしょうか、アホなのでしょうか。

それとも、両方なのでしょうか。

「あれ？ なんでラジコンがこんなところに？」

『何ですか？』

『オレの家にオレがいて何が悪い！？』

押し入れあら。

『その家は皆の物です』

『……なんか、お前って頭固そうだな』

『がちがちのプラスチック頭が何を言うんですか。私の頭は布と綿でできていますから当然やわらかいですよ。ふわふわです』

もまれてもまれて擦り切れるほどの気持ち良さだったんですから。
……いえ、私はひりひりして痛かったんですけどね。

『そーじゃなくてなー。やっぱお前頭固え』

『どう思います、ウサギ人形さん』

『やっぱいい、あたしがいつちばん可愛いわよねえ』

ああ、聞いた私が馬鹿でした。

「ああーっ！ みみちゃんだー！ こんなところにー！」

あ、あの、ちょっと！？

私の背中に針を突き刺していかないでください！！

縫う位ならちよっとちくっとする程度で済みますけどね！？

こんなに針山みたいにグサツといかれたらすうっごく痛いんですよ！？

『あらあ、光ちゃんじゃなあい。って、ちよっ！？ 耳！ 耳つか

まな……あふう、あれえ？ なんだったっけ』

ウサギ人形さんのもう一つの人格が出たあ！

このうさぎちゃんとはラビットちゃんと違ってとてもいい子なんですよねえ。

じゃなくて！ 針！ 針！ 抜いてください！

「あー、うさちゃんも耳のところがちよっとほつれてるよー」

……もう、いいです。

あきらめました。はい。

この針の痛みを我慢してこそ、真のぬいぐるみになれるのです！

『なんだよ、それ』

『何故私の心の声がっ！？』

『いや、心の声がオレらの声だろうっ！』

はわわわわー！ 忘れてたのです！

ということは私の考えてたことすべてダダ漏れだったのですね！？

『そうだよ。ニンジンとサツマイモの甘煮ちゃんったらうっかりさ
んなんだからー』

はう……。

『ところでいつこの針は抜けるのでしょうか!?!?』

『……………』

何か答えてくださいよおっ!

137 美代の人物ファイル

「じめじめだな」

「じめじめだね」

「……じめじめ」

うーん、何しようかな。

光です。

梅雨でしょ。雨でしょ。暇でしょ。

皆じめじめでテンション低……。

「いよっしゃああ！ 俺様大富豪！」

でもないみたいだね。

「俺様っ！？ 俺様っていう奴本当に居るの！？」

「……危険人物、登録されてる」

「危険人物！？」

というかその小っちゃいファイル何！？

「……水ヶ岡小学校全人物調査ファイル」

『全人物！？』

「……三から六年までの」

それでも多いよ！

「見せて見せて！」

「……プライバシー保護のため……」

だったら作らなかったらいいのに！

「じゃあじゃあ、ウチのとかひーちゃんのところでいいから！」

「……ん。はーちゃんの……はい」

どれどれ？

うみなかはる

《海中春

生年月日 2001年11月20日》

「……春って名前なのに……誕生日、秋とは思わなかった」
不思議だね。

なつくんはちゃんと誕生日夏なのにく。

「お父さんが冬で、お母さんが秋で、お兄ちゃんが夏なんだもん！だからお父さんが全部揃えようってこうなったらしいよ」

「……メモ、メモ」

メモするんだく。

「他になんて書いてあるのく？」

《声がでかい。五つ上に兄がいる。以外と反射神経は鈍い。ついでに方向音痴》

ついでにつてく……。

「あれく、はーちゃん反射神経鈍いのく？」

「どっちボール……よく当たる」

「あく！」

「それだけっ!？」

こくん。

あっさりうなずかれたねく。

「うー。ひーちゃんは？」

「……あ、消し忘れ……」

んく？ 何を消し忘れてたんだろく。

「……はい」

えくつとく。

たかやまひかり

《高山光

生年月日 2002年1月23日》

……ところどく。

「何で消した後のところに危険人物って跡があるんだろく」

「危険人物だったから……」

あっさり言われたく。

「なんでなんで？」

「……ポーチ」

ポーチく？

「これがどうしたのく？」

「何がdてくるか……わからない」

文房具しか入ってないよ！

「前……カッター3本くらい入ってるの、見えた」

「惜しいな、四本だよ」

「いるの!？」

……うん。

「水小祭りのときは大活躍」

文化祭って言うのかな？

お化け屋敷は六年しかできないけど楽しいの。

保護者が来たりとかは無いけどね。

「他に何て書いてあるの？」

《語尾が伸びる。四兄弟の末っ子。地味に運動神経はいい。昼寝好き》

「地味につて？」

「めったに、本気出さない」

あはは。そうだった。

「そういえばそうだよ。体育大会の時もぎりぎり一位取れるくらいに手加減してたし」

あはは。

「なんでバレバレ!？」

怖いよ！ 純お兄ちゃん位……よりはマシだけど怖いよ！

『だって、本気見たことあるし』

いつの間に!？」

「……電気から落ちたカッターをつかんだとき」

あ……。

「大分前だけど、幼稚園からの帰りに雷鳴って走ってっちゃった時」

ああ……。

そういえばそうだね。

「……メモメモ」

「あ、そういえばさっきの大富豪野郎は何で危険人物？」

「……カッター、けんかに使った
あゝ、そういえばあつたな。」

138 オバキューツ!

「おおーっ、オバキュー!」

「安いよ安いよ。なんとただよ!」

それじゃ売ってるとは言わないし。

そもそも売り物じゃないし。

忍でーす。

うちの庭で、お化けみたいに大きなきゅうり略してオバキューが採れました。

「はっはっはっ、お父さんの愛が詰まって「ほったらかしてたくせによく言う」ううっ」

純兄ー、おとーさん泣いちゃったよ。

はつきり言おう。不気味。

「なー母さん、これ何センチ?」

「分からないよ、測ってよ」

「とゆー訳で、ねーちゃんメジャーとって」

パシリ? 岳の方が近いのに。

……と、思ったら目の前にあった。

「ほいな」

「あんがと。えーっと……」

シューツ

金属のメジャー伸ばす時って何か気持ちいい。

「三十……うわっ!」?

しゅるるるるるるバチツ

で、固定しないといけない奴は固定し忘れると急に引っ込んで何か危なかった感じさせる。

「四十一! 三十センチ定規よりも大きいよ!」
そりゃね。

「ウエストは?」

「きゅうりにウエストがあるの!？」

「きゅうりの一番太い所」

知らなかった。

「……忍、まさか信じてねえよな」

「えっ!？ 違うの!？」

「信じてたのか!？」

……違うよね。やっぱり。

「さてさて、このきゅうりはどうやって料理しようかな。晩御飯何がいい」

『ステーキ()』

「あはは、怒るよ？ あ、大丈夫よ純。あなたが言っていることは分かってるから」

「ん」

『ごめんなさい()』

純兄だけズルい。

いや、言っていないんだからズルいってこたないんだろーけどさ。

「で、晩御飯何にしようかな」

「オバキューの寿司!」

「それってかっぱ巻きって言うよね」

「あ、そか」

おい。

「オバキューとサツマイモの甘煮」!

「ニンジンとサツマイモの甘煮ぬいぐるみの影響!？」

「ぴーんぽーん」

当たりなの!？

「オバキューのジュース!」

「美味しいの?」

「美味しいってこないだ見たサイトに書いてあった! ……気がする」

おい!

「オバキューのドックフード」

おとーさんまで！

「何で犬！？　ここはキャットフードでしょ！」

「そこは突っ込むところじゃねえ」

やっぱ猫だよ！　可愛いよー。

「オバキューの回し蹴り！」

「どんなのか見てみたいよ！」

想像してみた。

オバキューがぐるぐる回っている。

以上。

……えと。

「オバキューのはちみつ漬け〜！」

「やっど食い物に戻った……のはいいけど、何故はちみつ漬け？」

「メロンの味なんでしょ〜？」

……そうでもなかった気がする。

「オバキューの胡麻和え」

「オバキューのお浸し！」

「オバキューの氷漬け〜」

「きんぴらオバキュー」

「オバキューの味噌汁っ！」

以上、ニンジンとサツマイモの甘煮という名前にたどり着くまでに出たおかずのオンパレードでした。

……あれ、一つおかずじゃないのが交じってるよ？

『いただきまーす』

結局。

オバキューの塩ごま油和えになりました。

139 かつぱの恐怖

それは、突然現れた。

手がするりと滑ってしまいそうなぬらかな肌。

人間とは思えない、すれ違った十人中十人が振返ってしまいそうな顔立ち。

ツンとした唇。

……こう言えば、聞こえはいいか？

純だ。

いきなりだけど、前言撤回。正確に言おう。

手がぬるりと滑ってしまいそうなぬめぬめの肌。

人間とは十人中、百人中だって一人も思わないだろう醜い顔立ちとがったくちばし。

『かつぱあ!?!』

目の前にいるのは正真正銘、怖い話やら昔話やらに出てくるかつぱだった。

……手にきちんときゅうりを持っているのは褒めるところか？

『あらあ、なあに? あたしの美しさにびっくりしちゃったあ? うふっ』

かつぱではこんな顔が美人なのか……?

それともブスなのにナルシスト、とか?

「純兄っ! あたしたち何も見てないよね! 帰ろう! 走るよ!」

「ああ、いつもなら反対するけど今日は別だ」

「行くよーっ!」

よーい、どん!

って、聞こえたのは気のせいということにしておこう。

『ってちよっとお! 待ちなさいよ!』

「何かきゅうり飛んできたあ!」

……当たり所が悪かったらあっさり気絶しそうな勢いで飛んでく

るんだけど……。

『ほらほら、恥ずかしがって無いでこっちにお・い・で♪ お兄さん♪』

ちよつと待て。

「あたしは帰っていい？」

『あたし、女には興味無いの』

……はあ……。

「と、いう訳であたしは先に帰ります！　じゃあねー」

この兄不幸者。

人のことは言えねえけど……。

んなことより。

「テメエ生臭いからとつとと池に戻れ！」

『じゃあ来てくれるう？』

「分かったからさっさと行け」

『うふ♪』

よし、向こうを向いたな？　向こうを向いたなら俺は帰……。

がし

「放せ」

『い・や・よ♪』

よし、どちらにしても帰ったらまず念入りに手を洗おう。

「放せ」

『い・や・よ♪』

腕を外向きに回せば痛くて放す……ハズ。

人間じゃねえから分からねえけど。

ぐるん。

ああ、取れなかった。

「何で腕が一回転するんだよ……」

『あらあ。知らないのお？　かっぱの両腕は体内で繋がって……ちよつとっ！？　何するつもり！？』

小学の時にそんなことを怖い話に出てくる妖怪撃退法みたいなも

ので読んだことがあるのを思い出してな。

確か、かっぱの両腕は体内でつながっているから片方の腕を引く張るともう片方の腕が縮んで、そのまま抜けてしまうこともあるとかないとか……。

ずぽ

……抜けた。

『いやああああ!! あたしの腕え! 返しなさい!』
ん? 痛くはないのか。

「あ、体から離れると力も抜けるのか」
べりっ

……なんだ、べりって。これが手のはがれる音か?
粘膜が乾いたからか。

『返しなさい!!』

「ほらよ」

『ああああああ! あなたいったいどこに投げて……』
ぼしゃん

よし、ちゃんと池に入ったな。

いや、入らない方がどれだけノーコンなんだって話になるけど。
………あ、かっぱってすごいな。

開いた口がふさがらない、なのか顎が地面についている。倒れるわけでもないのに。

「さあ、取ってこい」

『お、鬼い!!』

「はは、なんとも言え。もとはと言『鬼、鬼、鬼、鬼、鬼』だれがいつ何度でも言えと言った? あ?」

『いやあああっ! 許してええええ!!』

反省しているのならよし。

二度と出てくるな。

『うう……。二度とあの鬼、この道を通るな！ え、え、あれ、な
んでだろ。またあの声が聞こえるよあははー』

『どうしましょう。この人幻聴に悩まされているようですよ、先生』
『しばらく入院させましょう』

こうして、かっぱの精神科病院の入院患者が一人増えたのであつた。

b
y

かっぱの看護師

140 お久しぶりです、オカルト部

「まってーっ！　ねえ！　ちょっとでいいからちよつと来てよ！」
ちよつとを二回言うとなんだか怪しく聞こえてくる！

『何度叫ぶなと言えば分かる！』
すばこーん

「いったーい！　今のはちよつと痛かったよハルやん！？」　いい
加減ハリセン携帯するのやめてよ！」

あれ、突っ込むところが若干ずれてるような気がしないでもない
んだけど。

忍です。

最近静かだと思ってたら、再び追いかけるようになりました。
あの、きょーふのオカルト部……あ、部活とは認められてない
だった。オカルトオタクの集まりにっ！

「いけーっ！　タツノオトシゴ！」

「はいっ！　って、結局オレのあだ名それですか！？」

あっさり返事しちゃってから言っても……。

って、今こっちに単独突入（？）してきた男子、オカルト部に連
れてったあの一年じゃん！

「タツノオトシゴーっ！　頑張って下さーいっ！」

えっちゃんこと枝奈さん、年下にもあなたは敬語を使うんですね
！。

「ちよつと来てくださいッ！　せめて話くらいは聞いてくださいよ
！」

「どう考えても頼む奴の態度じゃねえだろうが！」
いきなりとび蹴りしてくるって、どーよ？

「……よし、こうなったら忍。応戦しろ」

「やだよ！　あたしおいて逃げるつもりでしょ！」

「当然だ。昨日俺にかっぱを任せて逃げたのは誰だ？」

だってだってえ！ 昨日のあのかつぱ、明らかに純兄にしか用事なかったんでしょ！

流石に方手べつとりさせて帰ってきたのにはビビったけどさー。

「……それだ、それが聞きたかった」

「そうそう！ マコちゃんナイス！ 何の用事か忘れるところだったよ！」

ならそのまま忘れて追ってくるなあ！

「ですからマコちゃんと呼ばないで下さいともう693回言っています」

何で数えてるの。

「かつぱって言ったな？ どこで見た」

できればその手のハリセンをしまってください。ついでにストロボ写真も取らせて。

運動を見るんじゃないくて、どこにしまったのか見るために。

「砂原池。これだけでいいならもう追ってくるな」

「砂原池？ 部長知って……る訳が無いですぬすみませんでした。古閑先輩知ってます？」

タツノオトシゴ。地味に失礼。相手が部長だからいいけど。

全員知らないとか言わないでよ。

「いや、俺は知らない。枝奈は？」

「私も知りません……誠君知ってますか？」

「もちろん……。水ヶ岡小学校の近くにある大きめの池。鯉やカメなどが生息している。かつぱを見たという子どもは後を絶たない。

しかしそうは言っても甲羅や皿を見ただけなのでおそらくカメの甲羅か水面に映っ「もういいよ」……」

ずいぶん喋ったね、この人。

あれ、途中で話しきられたからか知らないけどちょっと表情が暗くなった。

「それじゃ、そのことは教えたから俺らはもういいな。もう追うな」
命令形ですか、純兄。

「あ、いえ……どのあたりで見たかもしゃあれば教えていただきたいので……」

「明日は土曜日だしっ、一緒に来てね！ 待ち合わせ場所は……」
ちよっと待て！

「何であたし達行く前提で話が進められてるの!？」

「あ……どちらかお一人だけでもいいですよ」

よし、こうなったら……

「よし、任せたぞ忍」

「もっと平等な決め方は無いの!？」

「昨日俺にかっぱを押し付け「それはもう聞いたよ」ああそうだ、先週テメエが光のお気に入りのおハンカチでうっかりごま油を拭いてしまっただけが取れなくなってそれをこっそり隠していることは……」

何で知ってるの!？

「しっかり証拠写真も「何でそんなことは面倒くさがらないの!？」こういう時に役立つからだ」

「鬼！ 悪魔！」

「ん、褒め言葉として受け取っておく」
ぜんっぜん褒めてない!

「じゃあ、よろしくね！ しののん！」

しののん？ ああ、タツノオトシゴよりはマシかあ。

141 かっぱでなくても良かったらしい

けきよけきよけきよけきよけきよ……

わー、スズメってよく息続くねー。

え？ あれはスズメじゃない？

現実逃避に突っ込まないでください。

忍でーす。

約束を破るのもなんか罪悪感するので、結局オカルト部のかっぱ調査（と言えるようなことをこの人たちがするのかどうかはともかく）に、同行してしまった。

ところで、あたし達が一昨日かっぱ見たのは橋の上だったんだけど……

今いる場所が本来立ち入り禁止の池のほとりというのは、どう言う事でしょう？

んでもって、何故その池のほとりの一部だけが砂でおおわれているのでしょうか？

『池のほとりが砂地になっていることから砂原池と名付けられた』

（マコちゃん談）

一部だけ、それも人一人が立てるくらいの広さしかないんだけど、砂地。

「何でここだけ砂なんでしょうね、えっちゃん先輩？」

「ええっ！？ 私だって知りませんよ！ 聞くならまこ……」

どよん

絶対、漫画ならこんな効果音ついてるよ。

知らない情報、っていうか自分の情報が間違ってたことかな？

がよっぽどショックだったんだね……。

「マコちゃん！ 正しい情報がわかったんだからいいじゃん！ ね？」

「そう、ですね……はい」

おお、立ち直った。

たまにはいい事するねー、部長。

「で、本当にこれ何ですかね、不自然極まりないンスけど」

「掘ってみよう！」

ところで、あたしは居る意味あるんでしょうか。

「こんなこともあるかとシャベルを持ってきてある」

「さーすがはるやん！」

何でこんなことがあると思ったのか、砂のことよりそっちの方が
気になるんだけど。

「ほらほら、しののんも！」

「はーい」

砂くらい手で掘ればいいのになって思ったあたしは前世モグラだっ
たとかじゃないよね？

『殺すぞ、殺すぞ』

「へ？ ハルやん、何か言った？」

「いや……でも、声は聞こえた」

「あ、あの……今の、砂の中から聞こえた気がするんですけど……」

『ええっ！？』

まさか。

……と、はっきり言えない自分が悲しい。

『黙れ、帰れ。それとも埋まるか、死ぬか』

「せせせせせ先輩、どうしましょおおおおお！」

『まず、お前、お前』

「へっ！？ うぎゃ」

『タツノオトシゴッ！』

何か、あだ名のせいでいまいち緊張感が無い。

タツノオトシゴの足が膝くらいまで砂に埋まったんだけど……。

「あの、砂の面積広くなってません？」

んー、そういえば、さっきの倍くらいの大きさに……。

「ってどーなってんの！？」

「うあ」

あ、腰まで沈んだ。

「あわわわわわ、タツノオトシゴーツ！」

「叫ぶなアホーッ！」

あ、ついに部長をアホ呼ばわりした。

すでに胸あたりまで沈んでるし……。

『帰るか、帰るか』

「帰るッ！ 帰るから……離して……」

離して？ 足でもつかまれてるの？

『シャーモ、何してるか。とっとと離すね』

……お知り合いですかー？

「わあっ、チャイナ服！ さらに中国なまり！」

「あれ？ 見えるの？」

どー見ても霊体なんだけど、この子。

身長あたしと同じくらいだー。

『私らなめるな！ ニンゲンに姿見せるくらい簡単ね！』

怒られたの？ 怒られた感しないけど怒られたの？

『ほらシャーモ！ いつまで潜てるか。お前もそいつ離してさっ

さと出てくるね』

『……む』

わあ。この一文字だけですごく不機嫌ってわかったよ。

「ああ、やっと手え離れたあ！ 怖かった……」

「だ、大丈夫ですかタツノオトシゴ……」

『これでいいか、いいか』

『ぼっちぐーね』

あ、出てきた。こっちもチャイナ服。

……あのお、ところで。

とても手を離れただけでは出てこれないような深さまで沈んでますけど。

『で、お前らいたい何しに来たか？』

「あれ？ 何しに來たんだっけ？」

「……かっぱを探しに來たはずです……」

忘れてたの！？ あたし、凄く損した気分……。

「でもまっ！ この人たち、未確認……ええと、まあ見つけたんだからいいや！」

『かっぱ？ 皿帽子のあれか？』

「それだな」

皿帽子って言うとなんだか帽子の一種に聞こえてしまう不思議。

『昨日、昨日、どこか、消えた、消えた』

『ええええええええ！？』

あれ、純兄が原因？

「……どんな感じだった……？」

『先頭に、怖い怖い騒ぐ皿帽子がいたある』

ああ、絶対純兄が原因だ。

『その回り、回り、医者が固めてた、固めてた』

入院でもしたのかなあ。精神科の。

「じゃあ会えないんだー。ざーんねん」

「ってか、オレはいつここから出れるんスカね？」

「あーっ！ ごめんねタツノオトシゴ！ 忘れてた！」

「……いや、そうだと思ってましたよ。ええ。分かってましたとも」

あれ、傷ついた？

『シャーモ、出してやるね』

『……む』

「ぎゃああああああっ！」

おい、手をちょっと動かしたただけなのに、砂がタツノオトシゴ放り投げた。

……吐き出したように見えたのはあたしだけでは無い筈。

『シャーモ、お前も少し丁寧を覚えるべきね』

『いない、いない』

説教してる場合ではないかと。

余裕で木の高さ超えてるよ？

「ちよっと！？ あの高さから落っこちたらタツノオトシゴ、死ん
じゃいますよ！？」

『またく、人間は弱いある』

やれやれって……いったいあんたはどれくらい丈夫なの。

一瞬後。タツノオトシゴはきれーいに着地。

女の子に抱えられて、だけど。

142 絶賛暇中の四人組

「暇だなー」

「暇だね」

「暇ねー」

「他に何か言う事はねえのか。……暇だということは否定しないが」
否定しねーんならいーじゃん。

岳だー。

友達と遊んでて暇というのはどーゆーことだろーな。

「よし、山でも登るか！」

「岳ー、何が悲しくてこの暑いのにさらに暑くなんなきゃならねーの？」

山の中って涼しいぞ？

……いや、登ってたら暑くなるけどさー。

「涼しい所って言ったらあそこよね、水辺！」

「まず木陰まで移動することが先だと思うが？」

ちなみに、今いるのは遊具なんて全く無いくせしてこの辺じゃ一番でかい公園。

とーぜん、そんなところに居たら影に入ることなんてできるわけ無い。

『だよな（ね）ー』

移動開始。

……どこへ？

「岳、どこ行くんだ？」

「知らん」

「んな無責任な……」

無責任？ だからなんだ！

「あ、ねえっ！ 砂原池行かない？ ほとりなら涼しいよ！ 木もいっぱい生えてるし……」

「おおっ！ 古閑ナイス！ 一昨日にーちゃんがかつぱに絡まれたところだし、それに会えたら怖くてさらに涼しく……あれ、古閑ってビビり？」

修也の腕にがちりしがみついているけど……。あ、修也ー、顔赤いぞ？

「いちやつくなら邪魔者は退散するべきだよな！」

翔、身を乗り出して言う言葉か？

「暑いから離れろ！」

「だだだだだだっ！ かつぱだよ！？」

『かつぱならもういないある』

「いやあああああ出たああああああッ！！」

あのー。

古閑の悲鳴の方が怖いと思ったオレはおかしいのか？

『五月蠅い、五月蠅い。シャース、埋めていい、埋めていい』

埋める！？ 埋めるって言ったか！？

「はうっ」

「奈那子！？」

あらら、気絶した……。

「はうっ」

「って翔もか！？」

何っーか……情けない。

『シャーモ、人間はそうホイホイ埋めるもの違うね。たまににするべきね』

たまにならいいのか！？

『……む』

「高山、声だけのこいつ等はお前の知り合いか？」

「生憎こんな物騒な奴に知り合いは……ああいや、物騒な知り合いは居るけどこいつらは違う」

斬はどー考えても物騒だよなあ。

次会うときマシになってるといいなと思ったオレはよくばりなの

か？

「……………物騒な知り合い、居るのか？」

「そこは突っ込んだら負けだ修ちゃん」

「誰が修ちゃんだ！」

何で怒鳴られにやなんのだ。

「ええと……とりあえずどこ向いて話せばいいのかわかんねーから出てきて？」

シャースとシャーモつつたつけ？

『さつきから後ろに居るね』

「うおっ、背後霊かお前！」

『背後霊なんていないね！』

たとえば、たとえば。

『シャース、シャース』

『何ね。今会話中ね』

『もう、時間。帰る、帰る』

……時間？ こいつ等門限あんのか？

『あぁっ！？ 本当ね！ もうすぐみるすなの放送時間ね！』

『アニメの、どこがいい。分からない、分からない』

アニメエッ！？

『お前にあの良さ分かるか！ とにかく帰るね！』

ばしゅっ

つてな感じの音立てて、砂ん中に潜ってったけど……。

「何だったんだ……」

「さあ？」

それよりオレはこの妙にふかい穴の方が気になる。
入りたかねーけど。

「うう……あれ、おれどーしたんだっけ？」

「はっ！？ 修也、修也！ 埋まってない！？ 食べられてない！？」

食べるは何処から出てきたんだ。

「お前は大丈夫なのか？」

「はう……よかったあ。うん、あたしは大丈夫」

「おい誰かー、おれの心配をしてくれー」

それを言ってる時点で大丈夫だろ。

それにしてもー。

「暇だなー」

「暇だね」

「暇ねー」

「他に何か言う事はねえのか。……暇だということは否定しないが
否定しねーんならいーじゃん。

そろそろ涼しくなってきたし、帰るかなー。

143 暑い

「あぢー」

「わゝ、なんだか清君不良みたい」

「カッターシャツ全開、その中に赤いシャツ。

……確かに。

制服が学ランだから余計に不良っぽく見える。

忍でーす。

「あぢーもんはしょーがねえだろ」

「あー、激しく同意。夏嫌いだあー」

「まだまだこれから暑くなると思うんだけど。」

「それよりさー、忍も桜もよく長袖でいられるな？ オマケに第一
まできっちり締めて」

「それがあたしですから」

「なんとなく？ あははゝ」

「大体、皆長袖だし。袖まくってる人の方が多いけど……。」

「せめて第一は開けてくれよー、見てて暑い」

「黙れ変態」

「篠、なーんでオレは変態呼ばわりされにやなんのだ？」

「しーちゃんの変態基準は低いもんねー。」

「んな事より「んな事なのか！？」「違うのか？」

「おー、なっくんトドメ刺した。」

「「この学校クラーあるんだろ？ 俺それ聞いて凄え楽しみにして
たのに……何でつかねえの？」

「前の学校なかったんだ。」

「後0・2℃で付くよゝ」

「はあっ！？ それくらいまけてくれてもいいだろ、カバ校長」

「校長カバ呼ばわりって……あー、おとーさんも言ってたしいか。
校長の顔、カバに似てるって所から付けられたんだけど、まんま

だよね。

「あ、後0・1℃」

つけー、つけー。暑い。

「誰がカバだって？」

『突っ込み遅いよ!?!』

というか、居たの!?!

「暑い」

「いきなりそれかよ!?! っつか突っ込みは何処にやった!?!」

「では」

「聞けよ!?!」

って言うか、何しに来たの?

「あ、後0℃」

「よっしゃあ! つく!」

.....

「ついてねええええええ!」

うるさあい。

「よし清、どう言う事が聞いて来い」

「何でオレ!?! ちよつと純、どー思うこれ」

「ん?どうと言われても.....やっぱり清が行くべきという方に一票」

純兄聞いてたの?

「ああ、お前に振ったオレが馬鹿だった」

『何を今さら』

「うわっ、お前ら覚えてろよ!?! 今回の期末オレ勉強してるからな!?! 負けても文句言うんじゃねーぞ!?!」

明日は雪かな? 今なら大歓迎。

「生憎だがあたしも勉強してるぞ」

「わたしも」

「あたしも」

「うわ負けたあああああああ!」

おい。

「まあ、清が本気出したらどうなるかは分かんねえんだからさ。気を落とすな」

「夏う！」

「上げて落とす。はは」

「ぎゃーっ！」

おい、清？

なっくん何もしてないよ？

ぶおおおお

あ、クーラーついた。

『……………暑い』

風が生暖かいっ！

144 結局何しに来たんだか

「うー、暑い」

「暑い？」

「……？」

ちよっと人間のマネしてみただけだッ！

だからンな変なモノ見るような目でオレを見るな！

剣だ！

「えと、斬。今日もバナナは美味しいな」

「……普通」

「………」

何かぜんっぜん会話続かねー。

「んで、オレ等何しに現実世界こっち来たんだったっけ？」

「んむ、んぐむぐむぐ？」

「……とりあえずバナナ飲み込んでから喋ろうな？」

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ……

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ……

「っていつまで囃はなむんだ！？」

「……バナナ、溶かす？」

斬、それって確か人の体溶かすクスリじゃなかったかー？

「んむっ。いらん！ 砂人すなびとが出たから、幻想的世界あつちに戻せ、って事

じゃ無かったか？」

さりげなく二本目のバナナスタンバイ。

「……これ、普通自分達にまかす？」

「斬の言うとおりでッ！ よってオレ等はこの仕事をサボる！」

「お前らああああああ！！ 仕事をサボるとは何事だああああ！

？」

「らおん！？」

「いつもの事ながら見事な走りっぷり。エネルギー補給にバナナい

るか？」

「ああ、どうも……って違う！」

とか言いながらちゃっかりバナナ貰ってんじゃないか。

「あむっ、もぐもぐもぐ……いいかお前等、今回の仕事はだな、あむっ」

食いながら話すなって、入学直後オレに説教してたのは誰だったっけ。

「……そもそも、学生に仕事与えるのが変」

「その通りだ！　ごちそうさま」

認めるんだ？

「バナナの皮はその土に埋めたらいい肥料に……」

「ん？　そうだな。って話を逸らすな！」

ノったのは誰だ！

「えー、話を続けるぞ。学生の、というか天を除いてこんな六つにも満たないガキが学生ということ自体がまずおかしいのだが」

「はーい」

「何だ剣」

「オレもはこないだ五歳になりましたー」

ハッピーバースデーディーアオーレー

「そうなのか？　お前等誕生日分かってたんだな……」

「オレ等三人で作りましたー」

「こらッ！　っと、言うか五歳も六つに満ちてない！」

「だって、本当の誕生日なんて知らねーもん。後簡単に引っかけたのはだーれだ」

あの一、地味に悲しそーな顔するのやめて？

いや、なんかすぐ青筋浮かんだけどさ。

「まあ、ええと、とりあえず！　天はともかく剣と斬までもが何で学生なんてできているかと言うと！」

「モルモット尊い実験台の犠牲と、校長の離婚、後裏でコソコソやってる奴の逮捕。そのほか臨死体験をした教師の皆様の犠牲の……」

「思い出させるな！」

あれ、らおんにもやったつけい。

あ、確からおんにはバナナの皮ですってんころりのシャシンって言うのを取って皆に見せよーってやったんだ。

「はあ……。なんだかすごく疲れた。疲れたからさっさと言うぞ。

つまりな、お前等は実力で教師を負かせて学校うちに居る。

早い話が、んでもって認めたかないがおれ等教師よりお前等の実力は上だ」

おおー、なんか大人。何か知らんが大人だー。

「……さっさと話すと始めに聞こえた気がした」

「空耳だろう？」

……お前等、話が長いの基準低くね？

「だから！ 少しずつ仕事を与えて、それをきちんとこなせるようならば卒業させてもいいんじゃないか、という話が出た」

二か月……。あー、もう三か月くらいかな？ だけで？

「オレ等ってば結構目、かけてもらってるんだなー」

「嫌でも目に入るだろ！ 毎日毎日毎日毎日問題ばかり起こしやがつて！ オマケに生徒には人気なんだから質悪い……」

あれ、面倒事からの解放が目的？

「まあ、そう言う事だ」

「そっかー」

さて、どうしよう？

「はいまず、天君！」

「私は今の生活が気に入っている」

「斬君！」

「……特に意見は無い」

「はい、剣君」

あ、自分で言おうと思ったら天に言われた。
ぐっじよぶ。……使い方あってるよな？

「オレも天と同じー！ という訳で帰ろーぜー」

「アホかぁッ!？」

「うむ。それにしてもいたずらに使う力をもう少し抑えたほうがいいか？　そうすれば卒業なんて話も出ないだろうし……」

うーん、でも思いつきり暴れられねーのもなぁ……。

「……とりあえず、ペーパーテストは白紙で出せば……」

んーでも、入学前からあんなこと思われてるんだったら……。どーするべきかなぁ。

『……けきよく、何しに來たかあいつ等』

『知らない、知らない』

『せかく家に帰れる思たのにな』

『そもそも、迷子、シャースのせい、シャースのせい』

『む、お前だて乗り気だたある!』

『アイツ等、声かければ帰れた、帰れた』

『あゝ……何でそれ早く言わなかつたか!？』

『気付いて、なかつた？　馬鹿、馬鹿』

『五月蠅いある!』

……うん？　何か後ろの方で砂柱みたいなのが出来た気がするんだけど……。

気のせいかな！

145 砂人と死神と妖怪と人間と

「太陽さん、もうちょっと……もつと、かなり遠慮していいですよ？」

暑いよ！

「雲！ もーちょっと出しゃばっちゃっていいんだよ！」

「……あ、蜘蛛の、巣」

蜘蛛は出しゃばらなくてもいいんだけど。

光です。

二度目ですが、暑いです。

「あれ、お前もしかしてあの性格悪い中学生達の妹じゃねえ？はて。」

何やら後ろから声がするのですが。

「ひーちゃん！ みーちゃん！ 逃げるよッ！」

「おー！」

「……えと、おー？」

みーちゃん、もうちょっと思いっきり言っていんだよ？

「逃げるなよおい！？」

「犯罪者にあつたら子供百当番の家にすぐ逃げ込んで、警察を呼ぶのが常識！」

「人を勝手に犯罪者にするなあああああ！？」

違うの？

「……犯罪……誘拐、未遂、者」

「違あう！」

ほらほら、買い物帰りのおばちゃんに見られてるよ？

「はあ……あの兄妹と血いつながってるもんな、しょーがねーよな」
「簡単にあきらめられちゃ面白くないんだけど」

「あれ、ひーちゃん知り合い？」

「ある意味」

一回しか会ったことないけどね。」

「サングのおじちゃんでしょう。」

「だ・か・ら、おじちゃん違う!」

さつきから違うしか言っていないよ。」

『この、不届きものー!?!?』

「はい!?!?」

あれ?」

なんだかサングの人が飛んでっちゃった。」

すぐそこに墜落したけど。」

『子どもに手、出す。何事ね!』

「お前も大概子どもだろうが!」

突っ込むのそっちなの?」

確かに私と同じくらい背しかないけど。」

『何言うか! 私、今年で十三ね!』

以外。」

「十分子どもだ!」

『年寄り黙るね!』

「年寄り!?!?」

じゃあおじいちゃんやおばあちゃんは何になるんだろう。」

「……ひーちゃん、あの子知り合い?」

「違うよ。」

「……こっちに、もう一人、居る」

ほえ?

あ、本当だ。」

地面から生えた男の子がいる。」

『きやああああああああ!?!?』

生えてる!?!? 生えてるよ!?!?

『……人間、うるさい、うるさい』

思いつき人間じゃないよ発言。」

「じゃじゃーん! 未理阿ちゃんでした!」

「霧瑠依くんでしたー」

あゝ！

「久しぶりだねゝ、盗人姉弟ちゃんゝ」

「わっ！ 光でした！ お久しぶりでした！」

「久しぶりー、お菓子持ってるー？」

今日は持ってないなゝ。

いつも持ってないけどゝ。

「……ひーちゃん、何か、居る、の？」

あゝ、二人には見えないんだったゝ。

「ほらゝ、大分前に岳お兄ちゃんの教室に出たでしょゝ？ おっきな耳の妖怪とかゝ」

『みゅみゅっ！ それはみゅーちゃんのことやしゅか！？』

……出たゝ。

耳で歩く妖怪ちゃんゝ。

「貴様等……来るなど言っただはずだが？」

出たゝ！

なんだか偉そうだった人ゝ。妙羅だっけゝ？

「あれ居るの！？ 見たい見たい！」

……どうやってゝ？

「……そう、大変、だね……」

『んむ』

みーちゃん、なんで生えてる男の子と意気投合してるのゝ？

「未理阿、霧瑠依、帰れ」

「ええーっ！？ いいじゃないでしたーっ！」

「迷子の保護みたいなモノっばいですよー？」

迷子？

『そうそう、それでどういう訳かこんなところに出たある』

「そっかー、やっぱお前迷子じゃねーか！！」

『ちよとまよただけある！ 他人に迷子言われる筋合い無いね！』

「訳分かんねーよ！」

こっちはこっちで意気投合してるようなく？
えくつとく……かおす？ だね。

146 扇風機

「あー」

ぶおおおおお

「うー」

ぶおおおおお

「わーれーわーれーはーうちゅーじんだー」

「……馬鹿が一人発生した……」

へー、誰のことー？

忍でーす。

扇風機で遊んでました。

馬鹿じゃありません。子供^{ガキ}じゃありません。

「暇なんです」

「何故敬語？」

「暇なんです」

「……で？」

「暇なんです」

「俺にどうし「暇なんです」そうか」

「暇なんです」

「……」

あ、純兄ひどい。スルーするつもりだ。

「暇だ暇だ。おにーちゃん何かない？」

「ガキか」

「おっさんに言わせれば中学生もガキ」

「で？」

「純兄もガキ」

「少なくともお前よりはマシだ」

あら、あっさり認められた。

「あー、わわわわー」

「……気い散るから扇風機に向かって声を出すな」

「やりたいの？」

「何でそういう結論になんだよ……」

やりたくて気が散るという意味にもとらえられないこともない。

「純兄何やってんの？」

「テスト勉強」

「……まっじめー」

「うん？ テメエも昨日はやってたろうが。それもなんと二時間半、
テメエが」

塾行ってる人から見たら少ないんだって。こんなに多いのに！

「ただし理科だけ」

「他の奴はやる気なし！」

「何でそれを扇風機に向かって言う？ ……やる気がないという割
には一昨日学校に行く途中に何やら社会の暗記に夢中になって電信
柱に……」

口元だけで笑うなっ！ これならなっくんみたいに大笑いの方が
マシかもしれない。

……あーいや、どっちも嫌だ、やっぱり。

「社会はやらないとまずいもん」

「そうだな、授業全部聞き流してるとか言いながら全部聞いててし
っかりノートとってるくせに社会だけ覚えられないんだよな」

笑いながら頭を撫でるなあっ！

「すっげー馬鹿にされた気分だ、にーちゃん」

「岳のマネか？」

うん。なんとなく。

「ちなみに思い切り馬鹿にしている」

「してんのか！ やっぱりしてるんだ！」

声を殺して笑うのやめーッ！

……よく笑うなあ、今日の純兄。

「ぜったい今回は理科負けないから」

前回、小さな暗記漏れひとつで純兄に負けました。

「ほお？」

「いや、まあ終わったテストのこと言ってもしょうがないけどさー」
理科のテスト、今日だったし。

「なら英語で勝負するか？ 明日だし」

「ええーっ」

自分が苦手じゃない教科持ってきたな。

得意じゃないらしいけど。本人曰く。

「よしっ、英語と音楽！」

得意教科、んでもって純兄の苦手教科を持ってまいりました。

「ぐ、音楽……まあいい。じゃあそれで」

あら、結構あっさり。

あ、そっかー、実技教科のテストは暗記でどーにかなるって美術のヤッちゃん……もとい先生が言ってたもんね。

「純兄ー、運指だいじょーぶー？ んでもって譜面は暗記できたー？」

「……それは扇風機に言ってるのか？」

「さーねー」

ぶおおおおお

すーずし♪

147 感動のない再会

「純お兄ちゃん」

「……まず、何故窓から入ってくるような事になったのかと言うところから聞こうか。後ろの諸々は後でいいから」

「やってみたかったの。そしたらね、妙羅……ええと、先輩がやってみるかゝって言うから」

「……………純だ。」

妙羅、つてのは多分、絶対、間違いなく後ろの偉そうな死神か……。

「うちの妹に悪い影響を与えないで欲しいのですが、妙羅置物生徒会長」

「誰が置物生徒会長だと？」

「えゝ？ 知り合いゝ？」

最後にあったのは小学生のころじゃねえか？

「わう！ よく知ってるでした！」

「その通りだよ。あれ、君は誰？」

『みゆみゆっ！？ みよーらは今は置物ではないでしゅよ！ かいちよーでもないでしゅよ？』

「貴様らは少し黙らんか」

襟首つかんで投げ捨てるこた無いと思うけど……。

ああ、ちびっこい耳で歩いてるやつは耳をつかまれてたけど。

何か黙るところかどっか行ってるし。

「んで、光？ 何してこいつと会った？」

「んゝつとねゝ、はーちゃんとみーちゃんと一緒に遊んでたら飛んで来たのゝ」

「悪い、聞いた俺が馬鹿だった」

「酷いなゝ。でゝ、純お兄ちゃん知り合いなのゝ？」

今までで一番いい思い出のない知り合いだな。

「小学……たぶん五年の時、一年間授業妨害してきた迷惑野郎だ。他人以上かも知れねえけど知り合い以下だ」

「……とりあえず最高ランクで知り合いにしておくね」
他人でいいんだけど。

「貴様、何故それを知っている？ それを知ってるのは純とか言う口の悪い小学生だけのはずだが。……それともアイツ、喋ったか？」

「馬鹿かお前、あれから何年たったと思ってやがる」
三年と少しだぞ？

「純お兄ちゃんがお前って言った〜！」

光は何か驚くところがずれてるだろうが。

「貴様、純か!？」

「気付けよ！」

馬鹿だ、絶対に馬鹿だ。

置物とは言え、よく生徒会長なんかになれた。

「……………大きくなったな」

「子供の成長を楽しむ爺婆かテメエは!？」

「すぐに殴る癖は改めろ」

あっさり受け止める癖に……。

「すぐに殴る相手はテメエだけだ」

「そうだっけ〜」

光、テメエはどっちの味方をするつもりだ？

「んで、今は置物何をやってんだ？」

「誰が置物だ」

「置物であるからこそお前だろ？」

「そうか、その置物に貴様は何度組み手をして負けた？」

「素人が鍛えている奴相手にかなうものか」

オマケに霊体の奴は身が軽いし。

……つか、浮くし。

「……思い出せば思い出すほどお前の方が圧倒的に有利じゃねえか」
「人間は不便な体してるな」

お前らが便利すぎるんだ。

『みょーら、みょーら！ みゅーちゃんこんなにお菓子貰っちゃったでしゅ！』

「捨てて来い」

『みやああああ！ お菓子！』

……いきなり窓から投げ捨てるこたねえだろ。

「妙羅先輩！ お菓子が降ってきたでした！」

「違うよミリアちゃんー、妙羅先輩が投げ捨てたんだよー」

「ななっ！？ 何するでした！」

急に騒がしくなったな……。

「そいつらは？」

「卒業して無いくせして勝手に仕事についてくる馬鹿姉弟と＋α」

＋αって……。

「馬鹿姉弟とは何でした!？」

「成績優秀の十歳にして十年生の天才ですよー」

自分で言うなよ。

『ぷらすあるふぁ？ なんでしゅかそれ？』

「……耳が大きいという事だ」

『褒め言葉でしゅね!』

褒め言葉なのか!？

「よし、帰るぞ」

「ん、帰るのか。二度と来るなよ」

「やっぱり妙羅先輩って嫌われてるでした!」

「自業自得ってやつだねー、ミリアちゃん」

やっぱりってなんだ。分からないでもないが。

自業自得は思い切り納得してしまわないでもないが。

「こいつの二度と来るなはまた来いという意味だ」

「えーっ、ありえないでした!」

「あつたらびっくりー」

……こっちを見てくるな、こら。

「そういう意味だ。な？」

結局こっちに振るのかよ……。

「はぁ……、あぁ、それでいい」

だって、何て言っても意味ねえし、こいつ。

148 おもちゃ会議

『最近、この家の子たちはおもちゃで遊びませんね』

『前からだぞ。特に一番上の……あの恐怖の……ええと、取り合えずアイツがおもちゃを欲しがってるところなんて見たことねえ!』

恐怖の、の続きが思いつかなかったんだね……。ラジコンさん。後、遊ばないね、から欲しがらないね、に話題がいきなりそれてるよ……。

ウサギ人形です。

今は真夜中、光ちゃんの枕元からこっそり抜け出しておもちゃ会議に参加してるの。

『ラジコンさん、何を言っているんです。子供と言えはおもちゃ売り場で欲しいものを見つけるのではありませんか。その時に母にねだるのです』

『んなこたねーぞ! 光はウサギ人形が欲しいって一日中カーちゃんにねだってたんだぞ!』

そうなの? こ、光栄です光ちゃん。

『岳もそーだぞー。おもちゃの銃をずっと欲しがってたぞー』

あ、こんばんは。ボールさん。

相変わらずぺっちゃんこ……。

『そうなのですか……。ああ、そういえば忍さんはラジコンカーさんを欲しがってましたねえ……。』

『うお、マジで? やったね!』

忍お姉ちゃん……もうちょっと女の子らしいものは欲しくなかったのかな?

あ、悪いとは言っていないよ!

『純ちゃん、何か欲しいもの無かったのかなあ、みんなで考えよう! ほらほら! 特にお年寄り!』

『ミニカーさん、まさかそこに私も入れてはいませんか?』

『違うの!?!』

ミニカーちゃん、ニンジンとサツマイモの甘煮さんが怒ってるよ!
『ううむ……あの子は昔っから一人でぶつぶつぶつと不気味な
子じゃったからの……』

がらがらお爺さん、今ですよ。

昨日は宙に向かって話すどころかパンチしてたし……。

光ちゃんも一緒に……いやあ! 光ちゃんが痛い子になっちゃう
っ!

『今はみんなそんなことになってるよね!』

『うわあっ! 持ち主い! オレが助けてやる!』

『何からですか』

全くだよ。

『た、た、たけにゃんがおかしな子に!?!』

いたんだ……、ダーツさん。

『とりあえずみんな落ち着けーっ! 落ちつけたら落ち着けーっ
!』

『一番暴れてるのはテメェだ、おはじき』

みんな揃って飛び跳ねないで……。

『あっ、お前はルービックキューブ!? めずらしー……』

この家にルービックキューブがあったの!?!

初めて知った……。

『あ、そういえばありました、純さんが欲しがっていたもの』

『何!?!』

わー、流石お年寄……いえ、なんでもないです。ニンジンとサツ
マイモの甘煮さん、こっちをにらまないでください……。

『ルービックキューブさんをはじめ、立体パズルの皆さんはほとん
ど純さんの欲しがったものですよ』

『ん? そうなのか?』

口調がそう言ってるよ……。

私も光ちゃんに合わせようかな。

『おお！ そうじゃった、そうじゃった。それを言えばモデルガンだとかダーツだとか、的当てみたいな奴らは岳の欲しがった奴じゃぞ』

そういえば……そう、っぽい？

『じゃあ、光ちゃんはお人形とかぬいぐるみとかだね』

『一番女の子らしいな！』

一番も何も女の子は二人しかないよ。

『……………忍さんは？』

『……………』

忍お姉ちゃん……。

ここにいる人だと、ラジコンさんでしょ、おはじきちゃん達でしょ、ボールさんでしょ……。

『一番守備範囲が広い奴だ！』

『何でもOK？』

『そんな感じですね』

もしかして、忍お姉ちゃんの方が純お兄ちゃんよりも、謎？

149 お昼御飯です

「よし、お父さん特性皿うどん！」

『これが？』

どっからどー見てもざるうどん……。

「しまった、間違えた。ざるうどんざる抜き！」

『……………』

ええと、とりあえず冷たくて、つゆにつけて食べるうどんだから
ざるうどんでもいいか。

忍でーす。

おかーさんが何やらママさんバレーボール？　みたいなもん行っ
てるから、おとーさんがお昼ご飯を作りました。

「私が作るって言ったのに」

光は何やらすねています。

「ねーちゃん、これ抑えとくの、すっげー疲れたんだぜ？」

「で？」

「……いや、続きはねーんだけど……」

岳は何やら疲れています。

純兄？　純兄は何やら死神に絡まれています。妙羅とか言ったかな。

「早く食べよー」

おとーさんは一人悲しく席に着いています。

『いただきまーす』

「って言って何でみんなまず氷を取るのかな！？」

『だって暑いんだもん』

しょーが無いんだもん

「……野菜が無いね」

「ベランダからキュウリ採ってこっか？」

「ねーちゃん、念の為聞いておくけど、誰が？」

「おとーさんに決まってるじゃん！」

「んならいつか」

決まってるのかって突っ込みは無し？

「決まってるの！？」

あ、入った。

「今決めた」

「決めるな！」

じゃあ誰が取りに行くの。

「出さんが負けよ、じゃーんけーんほい」

「えっ、ちょい待ち」

「あゝ、お父さん出してないゝ。お父さんの負けゝ」

「いてらー」

行ってるしゃーい。

「うう」

.....。

「急にニンジンとサツマイモの甘煮が食べたくなってきた」

『何で（ゝ）！？』

また押し入れに閉じ込められているであろうデカブツを思い出したらなんとなく。

「純ー、ご飯出来てるぞ」

「ん。すぐ行く。という訳で帰れ」

「帰れ！？　ここはお父さんの家！」

「ああいや、親父に言った訳じゃなくてだな……」

「じゃあ誰に……」

あれ、なんか上は修羅場？

キュウリが来るまでもうちょっとかかるかなゝ。ずるずる。

「もむもむもむもむ……ももーもー、もむもー」

「あー、はいはい、光、口に物を入れて喋らない」

何が言いたかったのか凄く気になるから。

「むー。もむもむ……」

「後岳ー、一回にそんなに取ったらつゆに入りきらないでしょーが」

小鉢パンパン。

「今それに悩んでんだ！」

んじゃしなかったらいいのに。

「けほっ、けほっ」

「……光さん、まさか丸のみとかしてないよね？」

「けほけほけほけほ」

そのむせているのはした、という意味でございましょうか。

「ほいほい、ちよっとずつ食べよ？」

「うゝ」

あ、おさまった？

「だから、あー……説明めんどくせえ……三回目だろ……」

「納得できないって！」

いつになったらきゅうりは食べられるのかなー。

150 バランバランな点数

「皆せーので行くよ、せーのーでっ
ばっ

玲奈…七十一點

清…七十五點

しーちゃん…九十四點

桜…六十一點

なっくん…六十點

純兄…九十五點

あたし…九十五點

忍でーす。

理科のテストが戻ってきたのでせーので見せ合いっこしてます。

「うわぁん！ なっくん」

「俺最下位……俺最下位……平均点も明らかにレベル高すぎだろおい？ うぁぁぁぁぁぁ」

ちなみに平均点は七十點でした。

「ちよつと！ 何であたしが高崎何かに負けないといけないのよ！
？ 別に、悔しい訳じゃないからね！」

「嘘つけて、オレ様に負けて悔しいんだろーほれ、言ってみ、ほ
れ」

えー、あー、うん。

「どう」

「ぎゃぁぁぁぁぁぁ！ ちよつ、忍！？ 今肩の方からゴキツって
！？」

「久しぶりに出ました凶暴忍ちゃん！ 今日合気道で清君をやっ
つけるようです！」

あ、これ合気道なの？

やった本人が知らない。

「む……また忍に一点差で負けたっ！」

「しーちゃん殴るのやめーっ！」

そういうあたしが清の腕ひねってたら説得力無いけどさっ！

「忍と同点？ やべえ……」

「ちよつと純兄、どういう意味？」

「そのままの意味だ」

何であたしと同点だったらやばいの！？

「ちよちよちよつ、しーのーぶー！ 痛い！ 痛い！」

「男の子ならこれくらい我慢しなさい！」

「はあっ！？ 無理！」

全く、情けない。

「し、忍……あなた、意外と頭良かったのね！」

意外と……ええとー、褒められてるのかけなされてるのかわからない。

「褒め言葉として受け取っておけ」

「はーい」

「……す、素直ね……」

そーお？

ええー、そーお？

「しーんくーん、大丈夫？」

「はう、やっぱ桜はめが「言わなきゃよかった」前にもあったぞこの展開！？」

そーお？

「だからー！ 僕はシジミじゃないの！ 紫波なの！」

「……じゃあ、頭の中が……シジミ並？」

「ひっどーい！」

シジミ並の頭って……初めて聞いたよ、そんなたとえ。

「紫波ー、何点だった？」

「だから僕はシジミ……あ、合ってた」

紫波……ちゃんと名前を呼ばれても突っ込むんだ。

「で、何点だったの、シジミ」

「シジミじゃない!」

「話が進まなあい!」

「ええっ!? 僕のせい!?!」

さあ。

「んで結局何点だったの?」

「……………わ、笑わない?」

「点数による」

「言わない?」

嘘つかれるよりマシでしょ?

「じゃ、笑わない」

「じゃ、ってなに!?! じゃって!?!」

細かいことかどうかはともかく、細かいことは気にするな!

「そういう訳で、何点?」

「どういう訳で!?!」

こういう訳で。

「…………四十五点…………」

…………んと。

「大丈夫! 下には下が居るから!」

「フォローになって無あい!?!」

そーお? (↑確信犯)

151 テストとテストと死神さん

「せーのーでっ！」

んあ？

昼寝してたのに……ねーちゃんの声で起きちゃった。

岳だあ。

「うあ、うあ、うあ！ 純兄に音楽で負けるとは！？」

「……英語、一点差……勝ったはいいけど、一点差かよ……」
んー、テストか？

「見せて見せて」

「光、いつの間に……」

今来たところだぞー？

「うわわー！ お姉ちゃんもつたいないよこれー！」

「光、オレもオレも」

えーっと、あー、一番最後の楽譜写しのところ？

……確かにもったいたいねー。

だってな、だってな？

終止線が縦線になってるし、四分の四拍子の上の四が途中から書かれてねーし……。

a t e m p o が、a t e n p o になってるし……。

「良かったねー、純お兄ちゃんー。忍お姉ちゃんがうっかり者で」

「ああ、たしかに」

「良くないもん！」

んな事言っても。

「にーちゃん、オレ中学のテスト0点取る自信が出てきたぜ！」

『威張るな』

にゃはは……。

「英語はー？」

「見ーしてっ」

うおう、読めねー。

よし、中学になったら先生に言ってやる！

日本にいて英語なんてどこで使うんだ！

外国人に道聞かれたってこう答えりゃいいんだ！

アイドンノウ。

完璧。

「あゝ、これ分かるよう！ プランでしょ」

「惜しい！ それはプレイ！」

「むうゝ……これはゝ……セエンゝ？」

「シーンね！」

ええーっ、だってseenだぜ？ セエンとしか読めねーじゃん！

ローマ字読みだけどさー。

「これは分かるぜ！ 五だ！」

「数字だから！ 読めないとまずいから！」

だってここしか読めねーし。

「ずいぶんと騒がしいな」

「……妙羅……ほんっとお前、置物なんだな」

置物？

「何だこれは」

「読めるか？ 和約してみ」

「……マークは映画を見たことが無い」

おお、すげーっ！

死神って英語もできるんだ！

「人の名前からして違うな」

違うのかよ！？

「マイクは映画を二度見たことがある、だ」

「で、貴様は何がしたいのだ？」

「自分より上の奴をからかうって面白いもんだぜ」

「……これはからかわれているのか？」

激しくビミョーなとこだな。

「そうだな、馬鹿にしているということにしておく」

「純、表に出ろ」

あ、怒った。

「めんどくせえから今度な」

にーちゃんの今度ってぜってーこねーぞ！

先にめんどくせえがついたときは特に！

「妙羅先輩っ！ 大変でした！ あ、未理阿ちゃんでした！」

わざわざ言わなくていいから……。

「霧瑠依くんでしたー。妙羅先輩ー、大変大変ー」

「貴様等はいったいいつ学校に行っている？」

おめーこそ。

『そこんとこどうでもいいのでしゅ！ みよーら、お仕事でしゅよ！』

仕事と聞いてめんどくさそうな表情になるあたり、にーちゃんの同類なのか？

「何だ」

『んとでしゅねー、ユーレイの保護でしゅ』

「保護？ 成仏させるではなくてか？」

『んとでしゅね、どこかの誰かさんのうっかりミスで死なせちゃった人でしゅから』

おいおいおいおいおいおい！？

うっかりミスって！？ うっかりミスで死なせちゃったとか言わなかったか！？

「そのどこかの誰かさんを調べておけ」

『はいでしゅ！』

……耳で走ってるのに、なあんであんなに速いんだろうなあ……。

「そういう訳で、仕事が入った」

「とっとと行って来い。戻ってこなくていいぞ」

「はは」

今の笑ってなんだろ……。

「忍お姉ちゃんゝ、落ち込まないゝ、落ち込まないゝ。次勝てばいいでしょゝ」

「……うう」

ねーちゃん……静かだと思ったら落ち込んでたのか。

151 テストとテストと死神さん（後書き）

日本にいて、どこで英語なんて使うんだ！
誰もが一度、思ったことがあるはず（笑）

152 ジャンケン

「……うあ」

「あら？ 高山、どうしたの？」

「雨、さっきまで小降りだったのに……」

「……ああ、傘忘れたの」

違う。

純だ。

「忍の奴、いつの間にか傘盗りやがった」
折り畳み傘、鞆に入れてたはずなのに。

居残らなきゃよかった……。

「なっさけないわねー」

「そういう鈴木は何でここに居るんだ」

「べ、別に傘忘れたわけじゃないわよ!？」

……へえ。

「テメエそれだから、ダウト弱えんだよ」

今日の昼休み、清のランプでやってたんだけど……こいつ、演技力の欠片もねえし分かりやすいったらありゃしない。

忍と桜が強かったな。

「悪かったわねっ!」

「誰も悪いとは言ってねえよ」

こいつ、ばばぬきも弱えんだろな。

「やるか、ダウト。雨がやむまで暇だし……」

「いいわよっ、やってやろうじゃない! ま、負けても知らないわよ……」

絶対自信ねえな、こいつ。

「でも。二人じゃつまんねえな」

「そもそもアンタ、ランプ持ってるの？」

「まさか」

「……元からダウトなんてできないじゃないの……」
やる気もなかったけどな。

「ねえ高山、じゃんけんしない？ 別にアンタが弱いとか思ってるわけじゃないわよ？」

思ってたんだな。

「……出さ者負けのジッケッタ」

俺はパー、鈴木はグー。

「ズルいわよっ!？」

「知ったことか」

「知ったときなさいよ!」

嫌だと言ったらどうなんだ？

「もっかいよ! ジャン、ケン、ポン!」

「俺はジャンケンホイを推する」

「知らないわよそんなこと!」

「知っとけよ」

「嫌よ!」

「……………」

ああ、会話が続かなくなるんだな。

「あ、悪い。お邪魔だった? すぐ出るから……」

「邪魔じゃないわよっ!? 余計な事言わなくていいんだから!」

「え、あ、ごめん……?」

余計?

「村田、テメエバスケ部?」

「おう、それがどした?」

「続きがあるとも思ったか?」

「……やっぱお前、高山と兄妹だよなあ」

……俺も高山なんだけど。

「ほらっ! さっさと行かないと練習時間減るわよっ!」

「タオルだけ取ったら出るって」

「高山っ! ジャンケンの続きよ! 一回もまともにやってないじ

やない！」

二度しかやってねえし。

「ジャンケンホイ」

「速いわよっ！」

「デメエが遅いだけだろ」

「何よっ！」

叫ぶの好きだな。

「行くわよ！ 今度はちゃんとよ？ ジャン、ケン、ポン！」

俺はチョキ、鈴木はグー？

ぺん

「待て、いつからたたいて・かぶってジャンケンポンになった？」

「不意打ちだったら普通に叩けるのね……」

「ん？ カウンターを打っても良かったとでも？」

「よくないわよっ！」

全く痛くなさそうだったから別にいいかと思ったんだけど……。

よく考えたら女子に叩かれるのって微妙にイラつく気がする。

「ジャン、ケン、ホイ」

パシッ

「あ、防いだわねっ！？」

「防がなかったら『かぶって』の部分が無くなるだろうが？」

「何よっ！ 二度連続で負けたくせに！」

……関係あるのか？

「あ、雨やんだか？」

「やんでないわよ。ちよっとパラついてる程度だけど」

「それくらいなら大丈夫だ。また降ってくる前に帰る」

出た途端降ってきたら最悪だけど……。

「そう、ならあたしも帰るわ。別にアンタが帰るからじゃないわよ

！？」

「その『別に』は口癖か？」

「そんなに言っていないわよ！」

言ってる言ってる。

153 短冊に願いを込めて？

しとしとしとしと

「……雨だね」

「雨だー」

「雨だね」

「他に言う事はねえのか」
だってえ。

忍でーす。

七夕なのに星が見れません。

「せっかく短冊書いたのに」！

「何だ、その量……」

パツと見二十枚超してるけど？

「学校で書いたの」

「答えになってねーし」

織姫と彦星見たかったー。

「純兄、天気変えられるような霊とかいないの？」

「居る訳ねえだろ」

どーかな、知らないだけで居たりして。

「光、短冊見せて」

星の方はあきらめた！

「どれがいい」？

「どれでもいいよ」

んーと？

『欲しい！』

何が！？

「これ学校の人の奴もちよつと混ざってるよ」

「これ誰？」

「佐紀ちゃんだよ」

誰。

「これは？」

『食べたい！』

何を！？

つ、次！

『行きたい！』

どこに！？

「正確に書いてる奴はいないの！？」

「えゝ……あゝ、これは細かく書いてあるよゝ」

どれどれ？

『週刊フォア・ア・ウィーク三十五号の十ページから十五ページを
独占して乗りたい！』

「細かすぎるよ！」

て、言うか週間フォア・ア・ウィークって……。

週刊一週間？

「普通のは無いの？」

「注文が多いなゝ。これは？」

あまり期待はしてないよ。

『お花屋さんになりたい』

うわお。なんだかすごく普通。

「あゝ、○○屋さんになりたいシリーズこれだけあるよゝ」
四分の一くらいこれじゃん。

ケーキ屋、パン屋、本屋、八百屋……あれ、なんか珍しい気がする
ものも。

サッカー屋。

……え。

「サッカー屋って何！？」

「サッカーを売るんじゃないかなゝ」

どうやって！？

「サッカーボールを売るんじゃないかなゝ」

言い直した……。

「サッカーグッズを売るとか？」
「それだけで儲かるのかな……。」

「あゝ、こんなのもあったよ」

『パズルマスターに俺はなる！』

頑張ってください。

「純兄、会ってあげたら？ この子」

「嫌だ。面倒」

「バツサリと」

パズル好きなくせに。

「これ……何かすげー」

「どれ？」

『一寸法師になりたい』

……マ○キノコでも採ってくればいいのかな？

「こんなもあるよー！」

『楽しかったあのころに戻りたい』

君はいくつですか。

『最近すっかり老けちゃったよ』

だから、君はいくつですか。

『十五人目には？ラれたくない！』

何て！？

「……真面目に書いてるやついねーし」

「これ書いた子は真面目だって言ってたよ？」

『織姫さん、オレと付き合ってください！』

「モロふざけてるだろー！！」

織姫って美人なのかな？ やっぱり。

「すつごく真剣な顔してたよ？」

「……………すげー」

すげー。

んと、何を応援しよう。

……織姫を取られないように頑張ってね、彦星。

154 一寸法師……ではなくて

「お供仕りまする！」

「仕らなくて結構です」

「なっ!？」

いや、なっ!？　ってあたしが言いたかったことなんだけどね？
忍です。

黒髪ポニーテールな一寸法師？　っぽいモノが話しかけてきた。
目測三センチ？

「そ、そんなっ!？　拙者にいったいどうしろと申されるのでござ
るか!？」

「知らないよそんなこと」

「つ、冷たい……」

いやだって……ねえ？

「一生懸命川を上ってきたというのに！」

「……ほー」

これ、川じゃなくて、ドブね。

「お椀の船に箸の櫂は？」

「今時手漕ぎで来いと!？　ふ、古い考えでござるな。もしや今は
日常でも手漕ぎの船を使うのが常識だとも言うのでござるか」
侍な格好して何を言うか。

「ええと、質問変えるね。何でアンタ濡れてんの？」

しかもあたしが最初に見たとき、ドブからよいしょって出てこな
かった？

「ふっ、水底を歩くのもなかなか大変でござった」

「……今時、水底を歩くのが流行ってるの？」

「む……拙者だってモーターボートを使いたかつ……」

モーターボート!？　モーターボートって言った!？

「しかし拙者は重くて……」

「何言ってるの？　こんな小っこいのにモーターボート乗れないほど重いわけが……重お！？」

え、こいつの襟首つかんで持ち上げようとしたら、逆に引っ張られたんだけど！？」

「ほら！　ほら！　拙者は一七法師、その名の通り体重は一七でござる！」

はあっ！？

「こうしてる間にも少しずつ地面がへこんで……」

一寸法師、もとい一七法師が片足を上げると……。コンクリートだというのに足跡がくつきり。

「しばらくすれば都市伝説になれるんじゃない？　いちいち足跡つくんならそのうち誰かが見つけるかもしれないし」

「おお！　拙者の伝説でござるか！？」

小さすぎて誰にも気づかれないかもしれないけどね！。

とは、言わないであげよう。

「ところで、最初の『お供仕りまする』って、何」

「一辺言ってみたかったのでござる」

ほお。

「殴ってもよろしいでしょうか」

「ご勘弁を」

あら、意外と腰抜け？

「んで、アンタは何しに来たの」

「爺婆に頼まれて八つ橋を買いに……」

八つ橋？　ってあの八つ橋？

京都のお土産のお菓子？

「……どっから来たの」

「大阪湾から上り始めたでござる」

いったいどーやったら大阪湾からここまでたどり着くのでございましょうか？

「大阪湾から淀川を上って……京都府に入ったあたりでなんと三つ

に川が分かれていたでござる!」

はいはい、三川合流地点?

「迷って迷って泳ぐ手を止めた隙にうっかり魚に食べられそうにな
って……」

泳ぐ? 歩いたって言ってなかった?

「必死に逃げたらここにいたでござる!」

「なんでだよ!」

「ええっ!? こ、ここは何処でござるか!」?

「水ヶ丘町ですが何か」

分かるのかな。

「な、なんでえっ!」?

分かるんだ?

「きよ、京都はどっちでござるか!」?

ええー……西でしょ?

「あっち」

「分かったでござる!」

おお、走り出した。

足跡凄い。

んでもって、

「何で東に行くかなあ? 近道?」

「ここは何処でござるかーっ!」

……違う、単にすっごい方向音痴なんだ。

155 暗記、暗記、暗記

「推古、舒明、皇極、孝徳、斉明……えーっ……クソッ次何!？」

「天智」

「それだあっ!」

忍です。

どーゆー訳か岳の『天皇言えるかな』に付き合わされています。

「覚えてどーすんの、これ」

「せんせの前で修也と言ってく!」

「で?」

「多く覚えてた方が勝ち!」

……それだけ?

「修也には負けねーっ!」

おおー、アニメか何かだったら後ろで火がメラメラ燃えてそう。

「という訳で、推古、舒明、皇極、孝徳、斉明、天智、弘文、天武」

ほんつとに、勝負以外にどこで使うんだろ……。

「修也って言う……前に純兄とナンプ○してた子?」

「持統、文武、元明……ああもう! 集中してたのに!」

「ごめん」

「許す!」

うわ、あっさり。

「表貸してくれてるのねーちゃんだし」

うむ、感謝せよ。

……流石にこれは声に出せない。

「ええーっと、次は……元正で、聖武で……えーっと」

「孝謙」

「それ!」

よく覚えたなー。いや、完全に覚えてるわけじゃないけど。

「ヘルクレス、牛飼、竜、獵犬」

「……光は何やってるの、星座早見盤なんか持って」

「星座覚えるの」

……何か覚えるのが流行ってるのかな。

「淳仁」「大熊」「称徳」「子獅子」「光仁」「獅子」

頭眠くなってくる……。

「よ、忍」

「あ、なっくん。また不法侵入した？」

「いんや、今日は珍しく玄関から」

自分で珍しくって言った……。

「純兄知らない？」

「何か変な小っこくて重いのに絡まれてる」

……一t法師？ まだ居たの？ 八つ橋どした？

「んで、俺は打ち出の小槌を探して旅をだな……。引かんとして」
だってえ。

「打ち出の小槌ならその神社で売ってたよ」

「マジ？」

「マジ」。小っちゃくて可愛いのに」

キーホルダーか。本物かと思ってびっくりしちゃったよ。

「ところで、岳は何やってんだ？」

「歴代天皇覚えるんだって」

「天皇？ 何でまた……あー、なんとなく？ やっぱ」

おー、流石、よく分かってるねー。

「でも違う」

「嘘っ!？」

何故にそこまで驚かれにやならんのだ。

「俺は元素覚えるのなんとなくだったぜ？」

「誰もそんなこた聞いてない」

って言うか、元素何て皆覚えてるじゃん。理科で、カルシウムまでとちよつと。

「元素、全部覚えるの結構大変だったんだけど」

「ぜんぶ!? 百ちよつと!?!」

「そーそー」

疑いの眼差し。

「……水素ヘリウムリチウムベリリウムホウ素炭素窒素酸素フッ素
ネオン……」

証明?

「……マンガン鉄、コバルトニッケル銅亜鉛、ガリウムゲルマニウ
ムヒ素、セレン、臭素……」

長いなー。

数えてたら、これでまだ三十五?

「……ハフニウム、タンタルタングステンレニウムオスミウム……」
早口なのに、長いなー。

「フェルミウムメンデレビウムノーベリウムローレンシウム……」
ローレン氏、生む? すごいねー。

うう、まだ終わらないー。数えるのは七十個目で止めた。

「……ウンウンオクチウム! ぷはっ、息キツイ……」

「じゃ、やらなかったら良かったのに」

「忍が疑うから」

あ、あたしのせいにしたっ!

「あはははは」

何で笑ったの、この人。

大股で一步後ずさり。

「いや、おまーな……」

何か怖くて。

156 屋根、もとい屋上

「じゅーん！　じゅーん！」

六月？

「純！」

違うよね、やっぱ。

忍でーす。

「何？」

「ちよっとこれ引っ張り上げて！」

はしご？　しかもでかつ。

「えー」

「えーじゃなくてだな！」

「いくら？」

いくらって。

「金とるのかよ！」

「いや、小遣い」

「同じだあっ！」

おとーさんよく叫ぶなあ。

明日声かれてても知らないよ？

お客さんの相手できなくなっても知らないよ？

「いいからこれ引っ張り上げろって！」

「いくら？」

何か無限ループしそう。

「だあもう！　十円！」

あ、あっさり折れた。

「ん」

あ、十円で納得した。

まあ、はしご引っ張り上げるだけだしね。

無いより良いじゃん思考？

「買いたてか」

「純兄純兄、このビニール破っていいよね」

「そりゃいいだろ。出さなきゃ使えねえし」

「ビニールを思いつきりびりーって破くの、何か気持ち良くない？」

「わゝ、大っきいゝ」

「何これ何これ！ すっごーい！」

「……どーん」

美代さん、何故に効果音？

「うおっ、でっけー」

「あれ、岳何持ってるの？」

「スノコ。父さんが持ってたって」

人使いが荒いなあ。

「よしっ、屋上に上ろう！」

おとーさん上るの早っ。

さっきまで庭にいたのに。

「……アホと煙は天のぼる」

「純、テンション下げると言わな事言わない」

「ん？ 前に自分で言ってた事じゃねえか」

「……いや、まあ言っただけ……」

溜息吐かないの。

「……あと、屋上というより……屋根じゃない？」

「ホントだねゝ、みーちゃんの言うとおりだゝ」

「ねえねえっ！ 上るなら早く上ろうよ、おじちゃんっ！」

肩落とさないの。

「父さん、このスノコどーすんの？」

「屋上は滑るから、敷いとくんだよ」

あくまで屋上って言うんだね……。

「……押し入れスノコを？」

「何考えてんの」

「大丈夫だ！ ……………多分」

最後にとてつもなく不安になる一言が付け加えられてた気がするんだけど。

「みよーら！ これ美味しいでしゅよ！」

「ホントだー」

「塩かけたらもっと美味しいでした！」

「だ・か・ら、勝手について来るなど言っている！」

あれ、なんか今一瞬にしてプランターのキュウリが五本くらい消えたような。

んでもって向こうの方に子供×2と耳がドでかいチビがぶっ飛んでるような。

さらに何か和服の男がそれを地面にたたき落としてるような。

……………気にしない方向で。

「おーい、純、具合でも悪いのか？」

「ある意味……。俺部屋に戻る」

「どういう意味？ ……具合悪いなら寝とけよー」

「うん……」

ぜったいたい原因妙羅だよな？

「じゅ、純が素直だ……！」

「父さん感動するレベルが低い」

「純お兄ちゃんってたいい素直だよ〜」

そーかなー？

「ううっ。気を取り直してっ！ 屋上上るぞ！」

「……気を落としてたの……ひーちゃん父上、だけ」

「うんうん！」

「ううっ！」

いちいち泣かない！

ってか、泣けてない。

「うおーっ！ たっけーっ！」

「そりゃそーだよ岳くん！ 屋上だもん！」

「オメーも大概テンション上がってんじゃねーか！」

「当たり前でしょ！」

うーみーはーひろいーなー……もとい。

そーらーはーひろいーなーおーつきーいなー。

何か普段建物に遮られてるだけに余計大っきく見える。

あたしん家、山の途中にあるしねー。

回り家ばっかだけど、しっかり斜面ある。下校時キツイ。

「みーちゃんも上がっておいでよー」

ふるふるふる

「高所恐怖症〜？」

こくっ

って、喋ろうよ。

「ベランダは大丈夫なの〜？」

「……！！」

ありゃ、一瞬で中に入っちゃった。

気付こうよ！ ベランダってこと。

「やっほーっ！」

「恥ずかしいからやめなさい」

「うん、ウチもやってから気付いた」

顔赤いし。やめときゃいいのに……。

「おー、何々？ 屋根上ってんの？」

「なっくんも来る？ 止めとく？ はしご怖い？」

「うん、怖え」

あら、あっさりと言ったね。

なっくんね、小っちゃい頃にはしごで遊んでて、足滑らせて落っ

こちちゃったの。

それ以降はしご恐怖症だって。

高所恐怖症じゃないんだー。

「こっちウチン家だよ！ 行こ！」

「おう！」

行く、というか、上ってるし。

なっくん家の方が斜面の高いところにあるから……。

「ここで天体観測とかしたいな！」

「すぐ飽きる癖に」

「うっ」

あれ、図星？

157 大惨事です

「初プールだー」

「そんなテンション低い声で言われても……」

「だーってさ、プールって着替え面倒じゃん？ 入ってる間はいいけど……」

オマケに、しーちゃんも桜も見学でしょ？

んでもってその理由は水着忘れでしょ？

うう……あたしも忘れてくれればよかったかも。でも成績下がったりなんかしたらやだしなう。

「何でこんなに見学が多いのよっ！」

「玲奈さん、そこは怒っても仕方ありません。次からは忘れずに水着を忘れるようにしましょう」

「美香^{みか}っ！」

「冗談です」

冗談の分かりにくい人だねっ！

隅の方で体育座りして、さらにこんなこと言うから何か怖い。

「玲奈、友達できたんだ」

「余計なお世話よっ！」

「お世話をする気はさらさらありません」

「誰よっ！」

さあ？

しいて言うなら一七法師？

「玲奈さん、忍さん、皆さんすでにプールに入っています」

『えっ』

いつの間に？

「冗談です」

『ややこしいわっ！』

「というのが冗談です」

『ややこしいというに!』

ふふ、とか言って笑わないでほしい……。

「ほらーっ、そこ二人、早く入りなさい!」

ああもう、中森がややこしいことするからあゝ!

………って、

『温っ』

まだ二時間目ですよー?

太陽さん、もーちよつと遠慮していいですよー。

遠慮されすぎたら寒くなるし、前言撤回。

「はい、じゃあウォーキングー。あっちまで。よーいどん!」
競争じゃないのに。

「あっちまで行ったらランニングで戻ってきてよ!」
水の中でどう走れと!?

「と、とりあえず行きより早く足を動かせばいいのかしら?」

「そっかー、じゃあそれでいいんじゃない?」

「………適当に返してる?」

「うん」

ほらほら、怒らない怒らない。

「はい、じゃあ、水に慣れるために十回潜って! いーっち」
潜りました。

息を思いつきり吐いて、うっかり鼻から水を吸い込んでしまいました。

「げほげほげほげほげほっ」

「ちよっ、ちよっと!?! 忍!?! 心配はしてないわよっ?」

じゃあ何で声かけてきたのかな!?

ふうー、落ち着いた。

「さーんっ」

うあ、二回目潜り損ねた。

『ぼこぼこ……こ、ここは何処でござるか……』

「ぷはっ」

さて、なあんてまた一七法師がこんなところに？

「せ、先生！ 何か底に変な虫がいますう！」

「みずでちゃっちゃつと追い出しといて」

一七法師、虫扱いされちゃったよ。

「沈んでるんです！ しかも底に埋まってるの！」

あれ、そーだっけ。

潜り。

探し。

見つけ？

………穴、開いてるんですけど。

水、抜けてるんですけど。

ってか、そもそも人間……いや小っこいけど。って、浮くよね！

？ 重くても！

お相撲さんでも！

一七法師って……どーなってるんだろ。

「先生！ 三階の廊下の天井の穴から、水が……」

「はあっ！？」

「本当です！」

今年はプール授業、無しかもしれない。

……あ、九月もあるか……。

158 宿題が出来ませぬ

「純兄、大変な事に気付いてしまった」

「あ？」

「明日までの数学の宿題やってない！」

「……で？」

だから、やってないんだってば。

やんなきゃいけないんだってば。

だって、いつものB5プリントじゃなくて、今回はB4プリントなんだよ！？

忍でーす。

ええと、さっきの続きだけど。

数学は明日一時間目なんだよ！

「朝休みだけじゃ終わりそうにないよ！ と言いたかったんだけど」

「あそ」

「あっさり流すなあ……」

「帰ってからやりやいいだろ」

「持って帰ってまた明日持ってくるのめんどくさあい」

あ、黙られた。

あ、あっさり教室から出てった。

「ってちよつとお！」

「学校でやりやいいだろ」

「そりゃま、そうなんだけど」

「ん。じゃあ俺は帰る」

薄情だなあー、もう。

ちやつちやとやって、帰ろ。雨降りそうだし。

傘は持ってるけど、折りたたみだから小っちゃいし。

「んーで、えーつと……うわ、こう見ると問題数多く見える。折ろ」
折った所で何も変わらないけど。

『えー、誰か居るじゃん』

『先輩は？ 先輩呼んでこようよ……』

『ダメだよ、練習中だから怒られちゃうよ』
はて、なにやら廊下そとが騒がしいのですが。

「どったのー。あ、ここ使う？」

銀色の楽器持ったのが二人と、黒い楽器持ったのが一人。

それぞれ手に持ってる楽譜は分かるけど、鉄の塊は何だろう。

「え、あっ、はい！」

ふむ、場所間違ったっぽい。

そっかー、吹奏楽部は教室使うのか。

「それフルート？」

「はい」

本物見たのは二回目だなー。一年で部活体験した時、見事に音が鳴らなかった。

「そっちの黒いの何？ クラリネット？」

プリント片付けたはいいけど、どこでやろうかなあ。

「オーボエですっ！！」

うわう、何か、何か凄い大声で怒鳴られた。

「えと、何かごめん」

「あ、いえ、いいですよ」

上靴の色からして一年かな？ 凄いなー、楽器間違えられただけでこんなに怒るんだ。

「んじゃ、そゆ事でー」

『どゆ事っ！？』

仲いいなあ。ツツコミが凄いピッタリ揃ってる。

「どゆ事が分かんないけどバイバイ、頑張ってるね」
何処でやろ、宿題。

『な、何か良く分からないけどいい人？ だったね』

『良かったー、ここに居たのがあの人で』

『譜面台立てようよ、早く練習しよ？』

愛想は振りまいてて損はしない、筈。

譜面台ってアレだね、楽譜置くヤツだね。

何処に持ってたの？ 四次元ポケット？ 建てようって事はあの鉄の塊かな？

「それより、机、机」

……うーん。

余使いたくないけど、最終手段。

あ、違う。最終手段は持って帰る。という訳で最終一步手前手段。

「居るー？」

「わっ！ しののん！？ 自分から来てくれたの！？」

オカルト部部室。

またの名をA教室、若しくは三年五組？

一番最後は聞いた事ないけど。

「いや、机貸してー……と、言うつもりだったんだけど……。何したの？」

教室中霊で溢れかえっておりますが。

「あ……、しののんさん、こんにちは」

「何してたかって言うよねー」「一番の常識人に聞くよ！ えっちゃん、何したの、これ」ひどっ！？」

耳が痛い！ 叫ぶな！

「じ、実はですね……。とても言いにくいのですが……」
何？

「……何もしていません！」

「何処が言いにくいの！？」

もったいぶる必要無いよね！？ 皆無だね！？

「あ、ども、来てたんっすか、しののんさん」

「タツノオトシゴ」

「……………オレの名前、竜悟たつじですから。そこんところしく」

マコちゃんと古賀は何処に居るのかな。

「無視されたあっ！」

んで、この大量の霊どうしよう。ぶつかるし、痛いし、邪魔……。
「それは何かの踊りか？」

「違うからっ！　霊がぶつかって来……あゝ」

『霊っ！？』

しまった……。

とりあえず、ここは逃げる。

『待てっ！』

ああもう結局いつものパターン？

とりあえず、近くに死神居たりしないかな？　あの霊たち払って欲しい。

「天、斬、剣！　は、居ないか。ええと……妙羅！　未理阿！　霧瑠依！」

『呼んだ？』

「って本当に出たあああああ！」

『みゅみゅっ、みゅーちゃんだけ呼ばれてないのでしゅよ！？』

ごめんなさい。貴方の存在忘れてました。

「妹、私の名前を呼び捨てにするとは何事だ？」

「純兄は何でいいの！？」

「純は……む、そう言えば年下の癖に生意気だな」

何か違う方向に話が進んでる気が。

「……しいねえ、何？」

「あ、それぞれ。あっちの教室に霊が大量に居るから成仏……って
うわ！？」

何か、背中にのしかかれたような。

「しののん、誰と話してるの！？」

「ちよっと超音波は黙ってて」

「し、しののんまでが超音波って！」
つい本音が。

「あれか。放って置いても明日には成仏しているから気にするな」

「何で！？ 何で成仏するの！？」

「じゃじゃーん！ 幽霊ホイホイでした！」

……ええと、パクリだよね、それ？

「斬のクスリの有効活用ー」

今度はどんな毒作^{クスリ}ったの……。

って、成仏が明日って事は？

最終手段、家でやるしかなかったあつ！

外に出た。

雨が降ってた。

……うあー。

159 李も桃も桃のうち

『すももももももものうち』

「……んで？」

すもも美味しいなーって言いたかったんだけど。

「美味しいねー、お姉ちゃん」

「うん」

光は分かってる！

「んー……。わっかんねーなー。すももって皮と種の周り酸っぱくね？」

『それも含めて美味しいんじゃないか』

「ハモって言われても……」

狙ったわけじゃないもん。

「なー、にーちゃんどー思……って、いねーし！」

「純兄なら妙羅に拉致られたよ」

「拉致！？ 何で！？」

年下のくせに呼び捨てにするのは生意気だーとか、何とかかんとか？

確かそんな理由。

……妙羅って何歳なんだろ。三十路超えたおっさんだったりして。

「岳お兄ちゃんは何ですもも嫌いなのか？」

「んあ？ だって酸っぱいし。小っちゃいし。オレは断然桃派だ！」

桃も美味しいよね。

「すももももももものうちだよ」

「もが一つ多かったぞ！？」

「違うよ。二つだよ」

「分かっててやったのかよ！」

何故に。

「……そーいやねーちゃん、それ、今取ったヤツ。何個目？」

そんなに食べてないよ？

んーっと……

「十個目くらいかなっ☆」

「二けたあ！？」

美味しいんだもん。

「お姉ちゃんずるいー！ 私まだ九子だよー！？」

「何がまだだっ！？」

「大じょーぶ、まだあるよ」

「もう食わんでいいだろがっ！」

『えー』

食べたりなあい。

「えーじゃなくて！」

「すももは別腹という言葉を知らんのかー！」

「知るか！」

ええっ！？

「何で二人してんな驚いた顔になんだよ！？」

『なんとなく（〜）』

「リアクションまでなんとなくするなあ！」

喉潰れるよ？

「岳ー、外まで声響いてるわよー」

お帰りー。

「あ、母さん、ちょっとさー、ねーちゃんと光に何か言ってやってくれよ。もうすもも十九個……あっ、今に十個になった。が、食われちゃってんだぜ？」

「えええええええーっ！？」

岳の声よりおかーさんの声の方が大きい気がする。

「忍ー、光ー」

『……？』

「これから十日間すもも無しー！」

『えーっ！』

岳、『どーだ!』みたいな顔でこっち見ないの。

後でげんこつ十発ね♪

「せめて五日〜」

「だめ〜」

半分になってるし。

「六日!」

「だぁめ〜」

「七日〜」

「だ・あ・め〜」

「八日!」

「め〜」

「九日〜」

「ふ〜ん〜」

「十日! って最初に戻ってんじゃんか!」

むう……これなら。

「あゝ、盗み食いしたら倍々に増やしていくよ〜?」

『あうっ!?!』

「って考えてたのかよ!」

当たり前でしょうが!

あうゝ、すももゝ。

160 身長身長！ 後一応着衣水泳

「暑い！」

「……………」

「暑い！」

「……………」

「暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い暑い……修也デメエいきなり何すんだ！」

「五月蠅えから叩いた。で？」

いや、で？ とかわれても困るからな！？

岳だ！。

時は五時間目、場所はプール！

着てるものと言うと……。

冬物長袖トレーナー。

冬物長ズボン、の、下に水着。

どー考えても暑くなるだろこりゃ！

着衣水泳何て考えたのは誰だ！

いや、なんですんのかは分かってつけどな？ プール入るまでが

無駄に暑いだろ！？

「とにかく、オレあ暑いって言いたかったんだよ！」

「言ってたじゃねえか」

「足りん！」

「……先生、このうっせえ馬鹿突き落としていい？」

「許可「すんな！」当たり前だ」

ややこしい事言うな！

いや、オレが遮ったんだけど。

「そーそー、せんせー」

「ん？」

「オレさー、ちょっと不満な事あんだよね」

「……………」

っておい、ほっとく気か。どこへ行く。

生徒の話を親身になって聞くのがせんせの役割じゃねーのか！
別に大したことじゃなかったけどさあ。

「不満なら俺にもある」

「ほー。んじゃせーのって言ってみるか？」

「ああ。せーの」

『何でオレ（俺）がお前と背が同じなんだよっ！？』

おお、ぴったり一致。

「何かばっかみてーな事言ってるな」

『やかましい！』

何で翔はオレ等より背え高えんだよ！

大体四月の身体測定ん時何センチだったって！？ 158！？

「テメェ小六男子の平均身長知ってるのか！？ 145だぜ！ 1

45・05！ なのにテメェなにあっさり中一男子の平均身長まで
抜いてんだよ！？」

ちなみに中一男子の平均は153だったはず。

「何でそんなに詳しいんだよ……」

「そこは突っ込むところじゃない！」

「いやどう考えても突っ込むところだろ？」

知るかつ！

「ちよっとちよっと、二人とも、そんなこと……」

「しかも女子にまで身長負けてね？」

「……………今の時期は女子の方が身長は高いものだ保険で習った
だろ」

そりゃー習ったけどさ。

何かさ、ちよっと悔しくね？

「大丈夫だよ！ 中学生になったら大っきくなるよ！」

慰められてるし……。

「修也！」

「オレは抜きか!？」

「うんっ! 修也抜かしちゃだめ!」

「いやいやいやいやおかしいだろ!？」

「そもそもスタートライン同じだから!」

「……うん。身長伸ばさないで!」

「無茶言うなあああああ!」

あれ、そーいやずっと言い合ってたけど、いつプール入んの?

「そこ四人ー! 早く入れー」

あ、オレ等が遅れてるだけね。

ジャッポーン! ……って、行きたかったのに。

「何お前等オレの服掴んでんの?」

『危ないし』

「何だ!？ お前等真面目ちゃんか!？ 真面目ちゃんなのか!？」

『お前が不真面目すぎるんだ!』

うあ、先生込みで怒鳴られた。

161 桜って意外と

「ちーがーうー！ やからな！ ここがこーなってあーなってこうなんねん！」

「こーなってあーなってどうなるんだよ！？」

「逆切れすなや！ ええか！ もっかいやんで！」

……桜が、壊れた。

「……桜って、関西出身なのか？」

「んー、あ、そう言えば保育園の時に引っ越して来たんだよ！ 最初はモロ関西弁だったんだ」

「シジミと保育園同じなんだ」

「うんっ……って、僕はシジミじゃなあい！」

忍でーす。

ある日、ある時、ある学校で。桜が清を教育し始めました。数学の、一年の所からやらせてたりしちゃってる。

「一次方程式位解きいな！」

「無茶言うな！」

「言うとらんわアホ！」

……………。

『やっぱ、壊れてるよなあ
うんうん。』

「あ、あれは素なのかしら？」

「極度に興奮したらこうなるとか？」

「おー、漫画か何かのキャラに居そう。」

「しののん！ じゅんじゅん！ お仕事の時間でえいす！
知らんがな。」

「ってか、部長！ そこ出入り禁止のベランダ！」

「忍、逃げるぞ」

「アイアイサー」

ダッシュ

「行けっ！ ハルやん！」

「俺はポ○モンか！」

とか言っけしっかりドアから入ってくるくせにい！

は、挟み撃ち……。

「よし、強行突破の方向で」

「アイアイサー」

と、言う訳でマコちゃんちよつと蹴るよー。

「……運動神経悪いとか思ってる？」

「うん」

見た目と性格からなんとなく。

「情報収集力、零」

何課の試験ですか、先生。

とか思ってる間に……足払われて押し倒されちゃった。

「ごめーん純兄、捕まった」

「俺に被害が及ばないなら何も問題ねえから心配するな」

兄として酷いとおもいまーす。

「変態眼鏡、忍から離れなさい！」

「……へ？ あゝ」

よし、脱出。玲奈ナイスだ！

「もおーっ！」

あ、桜……怒ってる？

「五月蠅いで！ 清が集中でけへんやんか！」

こっちに！？

「いやー、オレが集中できねーのは部活行ってねーからうあああああ大会近いのに休むからぜってえ後輩に殺されるううううう！ という恐怖のせ……あ、いえ、嘘です。ごめんなさい桜様」

な、情けない……。

「えっ、ええと……な、何かごめんねっ！ オカルト部隊、今日は引き上げます！」

ちょっと待ってよ。二音くらいおかしなモノがくつついてたような気が？

部隊？ あれ？ 部じゃなくて？ 前に自称がつくけど部じゃないの？

「清、ウチかて大会近いねん、分かったらさっさとやるっ！」

「なら夏休みでもいいじゃねーかよ！」

「甘いッ！ アンタが夏休みだけでこーんなたぶたぶ溜まっとする苦手潰せるわけないやんか！ セヤから今……」

こ、今度は説教始まった……。

「ねえ、忍。皆何部入ってるの？ き、気になってるわけじゃないわよ！ なんとなく……」

気になってるんじゃないか。

「んーっとね、確か清はサッカー部で……しーちゃんはテニス、なっくんといでに美咲ちゃんがバスケ」

「美咲ちゃんって、まだ続いてるのね……」

一度ついたあだ名はそう簡単に変わるものではない。

「んで、桜が……卓球」

「嘘っ！？ あ、あんなにのほほーんとしてぽよよーんとし「分かったらさっさとやるっ！」……い、今はともかく……試合とかできるの？」

「前に見たけど、もうこれでもかって位速い球打ってたよ」

「えええええっ！ 凄いのねえ。別に凄いとかは思っていないわよ？」
どっちさ。

「後で聞いたけど、普通のスピードらしい」
「凄くないじゃないのっ！」

卓球って絶対動体視力と反発力と、ええと、とにかくなんかそんなの必要だよー。

「ああもう！ 何でそれがそないなんねん！」

「えっ！？ 違うのか！？」

「全然ちゃうわ！」

……桜を一言で表すと。
怖い。

162 蜂の巣除去は誰が？

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」

「うっせえな」

「酷い！」

「光です！」

「それよりねー！ それよりそれより！ 蜂の巣！」

「ちよつと外見てみたら中くらいののがあつたんだよ！」

「鉢？ どこに」

「勝手口の所」

「ん、あれか」

「あれかじゃないよ！」

「どうか知ってたのー！？」

「ひーちゃん！ やっほ」

「はーちゃん！ どうしよう。蜂の巣！」

「えっ！？ 蜂の巣！？」

「そうだよ。蜂の巣だよ。」

「どう見ても阪〇を応援してるようにしか見えないあの虫だよ！」

「純くん純くん、どうしようっ！」

「ほっときゃいいだろ」

『無理ッ！』

「怖くて怖くて出られないよ！」

「……勝手口なんて使わないけど。」

「あー、でも冬には使うもん！ みかんとかりんごとか置いとく

のに使うもん。」

「夏ー、忍ー」

『今手が離せないっ！』

「……何やってんだ、あいつ等」

「んとなー、何か和室で組み合ってるの。十秒間床に押さえてた方

が勝ちだとさ」

人間指相撲、とか言ってたよ。

「……………親父は？」

「川へ野草を摘みに」

今度は虫よけ作るんだって。

今更な気がするんだけどね。もう蚊いっぱい居るし。

「……………ほっときいいだろ、鉢くらい」

『駄目っ！』

だんだん沈黙が長くなったと思ったら！

押し付ける相手探してたんでしょ。

「ん……………仕方ない。最終手段」

やってくれるのかな。

……………そんな訳ないよね。

「お袋か秋さんは？」

「頼りねーな、にーちゃんっ！」

もっと言っちゃえ！

「ん、あ、岳が居たな。悪い。じゃあテメエに任せた」

「任せるなあああああああっ！」

鉢が居なくなるならどっちでもいいよ？

「冬さんとか？」

「ひーちゃんのお父さんと一緒に行っちゃったよ」

さ、残りは岳お兄ちゃんと純お兄ちゃんだけだぞ。

「そういう訳だ。任せた岳」

「やだっ！」

「鉢の子が食えるかも「いらねーよっ！」蜂蜜「無理だから！」じゃあ何ならいい？」

そういう問題なのかな。

「……………んと、あ、にーちゃんのゲームソフト一本で……」

凄い不平等条約。

「よし、行って来い」

「うお、いーのか!？ マジで貰うぜ?」

「ん、行け」

「ぜってーだぞ!」

「わあったって」

「よっしゃ!」

おお。あっさり?」

「純くん、ソフトどこにも無いよ?」

どこに置いて……し……ってなに?」

「ソフトなら大分前に売った」

『ええっ!』

「しー、岳に気付かれるだろ?」

純お兄ちゃんずっこい。

163 指相撲するのです

「なっくん負けてよ」

「絶対やだね」

むう。

忍です。

なっくんと指相撲してます。

理由？ 暇だったから以外に何があると！

「とりゃ」

「あっ！ ずっこいぞお前！」

両手を使っただけじゃないか。

「勝ったー」

「嘘つけ」

「ずっこい勝ち方したもーん。だから勝ち」

「……ええと、そうあっさり認められても困るんだけど……」

「何で？」

どして？

「ええっと……と、とにかくもっかい！」

「負けず嫌いだなあ」

「お前が言うなよ」

え？ あたしそんなに負けず嫌いかな。

「ねーちゃん！ にーちゃんが酷いっ！」

『ずっと前からじゃん』

「……いや、そうだけど……あのな！ 昨日ちゃんと蜂の巣撤去したのにゲームソフトくれねーんだぜー」

蜂の巣撤去でゲームソフト？

「純に貰うって約束してたのか」

「うん。なのに無いとか言ってくる！」

大分前に売ってたしなあ。

「なっくん、指相撲の続き！」

「よし。次は両手無しだからな」

「分かってるって」

「分かって無かったから言ってるんだろぅが！」

「つて、あれ、オレは！？ 無視！？」

え、だって続けてもどうしようもなさそうだったし。

「あーっ！ なっくんズルい！ 何で親指で抑えるの！？」

「こういう遊びだろうが！」

ちよつと言ってみただけ。

「うー光ー、にーちゃんとねーちゃんとなっくんがひでえ」

「ただいま留守にしております」

「居るだろがっ！」

ああっ、負けた！

「何でなっくん勝つの！？」

「勝っちゃいかんのか！？」

いや、言ってみただけ。

「岳ー、おいでおいで」

「あ、聞いてくれんの？」

「うんにゃ」

「ふーんだ」

あ、ふてくされた。

「指相撲であたしに勝ったら聞いてあげる事も考えてあげるから」

「どーせ考えるだけだろそれ！」

「いや、考えもしないよ」

「ふーんだ！」

あ、さらにふてくされた。

「分かった分かった。聞いてあげるから」

「絶対だぞ」

「ほいほい」

指相撲って始めるときなんていうの？

よーいどん？

レディーファイト？

「てい、とっ、たっ」

「んっ、えい、てい」

むう。捕まえられん。

「指相撲なのに何で全身使ってんの？」

え、だって、何か、勝手に、動かない？

「とりゃっ」

「ってねーちゃん、なんで投げんの！？　　ずっとこいぞ負けそうだったからって！」

「よし、まだ投げられる」

「そーじゃなくてえ！」

え？

「え？　　な顔じゃなくてっ」

「んーと」

「んーとでもなくて！」

……………んと。

「ちよっといちいち五月蠅いなあ」

「ごめんなさい殴らないで」

よし、許してあげよう。

……………何を。

「んで、何か話したいとか言ってたんじゃ無かった？」

「それそれ！　……………」

『……………？』

「何て言おうとしたのか忘れた」

……………よし。

「なっくん続き！」

「また負かしてやるよ」

「えー」

「えーじゃなくてっ！」

164 当たった……けど

「岳！」

「何？」

「見ろ！」

……んと。

顔はおっさん、体は女。頭に触覚で背中にはカブトムシみてーな羽。

ある意味不気味だっ！

岳だ。

「父さん、これ何？」

「男女虫パペットだ！」

「……………あぁっ！ 懸賞の！」

「そうそう」

「むっだなモン当たったなぁっ！」

しかも何？ 三体も当たってね？

「でもなんか嬉しくない？」

「全っ然全く欠片も嬉しくねーよ！」

送ったのオレじゃねーし。

「似たような言葉合わせるなぁ」

「それだけ嬉しくなかったから」

「あはは、はは、はぁ……」

うぁ、落ち込んだ。

あああああカビが生えるうっ！

というのはまあ置いといて。

「どーすんのこれ」

「どーしようこれ」

「いらんモン応募すんなよ！」

「以後気を付けます」

「これ二度目なんだろうーが！」

「三度目は気を付けます」

「二度あることは三度あるって！」

「じゃあ三度目も応募「せんでいい！」」
全く。

どーすんだよ、これ。

「ところでさー、オレの応募した3〇Sは？」

「無いよ」

「えー」

「いやえーじゃなくて」

んじゃどう言えと？

「アッチ向いてホイ」

「あつ、負けたあああああつていきなりなんだよ！？」

「いや、なんとなく」

突然すぎだろ……。

「そんな事より岳」

「話を逸らしたのは父さんだろがっ！」

「そんな事より、これを見ろ！」

ばばーん！

男女虫パペット。

「いやこれさっき見たから」

「よく見て」

よく？

ぶ、ぶぶ、ぶぶぶぶぶぶぶ……

うお、羽動いた！

「飛ぶのかこれ！？」

「いんや」

「んじゃ何で羽動いてんだよ！」

「飛ぶようにしたかったけど飛ばなかったらしい」
で、羽が動くだけ？

「ほら、忍が何年か前にドラ○もんの人形？ 貰ってたろ。あれの

頭についてたタケ○プターが動いたのに飛ばなかったのと同じだ！」

「あれ、扇風機だったし」

意外と風来た。

手のひらサイズだったのに。

「全然同じじゃねーじゃんか！」

「こ、これだって涼しいぞ？」

ぶぶぶぶぶぶ、ぶ、ぶ、ぶ……

「……止まったけど」

「電池切れた」

「早っ!？」

最初だからか？ 試し用の電池だからか？

「んーと、あれ、電池交換するところ無いんだけど」

「はぁ!？」

「ま、いっか。電池の無駄だし！」

最初っから貰うなよって気になんだけど。

「あ、忍ー、いる？」

「いらん」

「……岳、何か忍がそっけない」

知るか！

「ほんとーにいらねーだけじゃねーの？ ってか、絶対そーだろ」

「あ、光ー、いる？」

「いらな〜い〜」

「……岳、なんか光もそっけない」

いつもどーりだったと思うけど？

「あ、じゅ「いらん」せめて最後まで言わせろっ！」

「はっ」

「わ、笑われた……すっごい馬鹿にしたみたいに笑われた……」

馬鹿にしてたんだろ？

165 妙羅の頼みごと

「純、ちょっと手伝え」

「第一声がそれかよ」

「何か問題があるか？」

「親しき仲にも礼儀ありとか言うじゃん」

「知らん」

知っところよ。

忍でーす。

なんかもう、扉のとの字すら知らないよーとでも言うかのように、まあこれがいつも通りだけど。妙羅が入って来ました。

「何の手伝いだ？」

「来てから説明する」

急ぐの？

「いや、ここでしろ」

「来てからだ」

「ここでだ」

「来てから」

「ここ」

「来てから」

「ここ」

「来てから……って、話が進まんだろうが」
気付くの遅っ。

「ん、ならあきらめてここで説明しろ」

「したら絶対に手伝えよ」

「聞いてから決める」

「なら来てから説明」「しても結局手伝わせるんだろ？」
当然だ」
当然なんだ。

「……よし、忍行って来い」

『何でそうなる(の!?)』

おかしーよー、なんであたしに振るの!?

「私は純に來いと言った」

「……なら、聞いて忍でも出來そうなら忍にやらせる」

「妹はあてにならん」

「今さらつと酷いこと言われたよ!?!」

ろくに話したこともないのに!

「ああもう、いいからさっさと言え」

聞かないんじゃないの?

「俺は早く数独の続きがした……チッ」

「……妹、何故純は今舌打ちをした?」

え、こっちに振るの。

「んつとー、あ、きつとタイマー止め忘れたんだ。パズルする時いつつも計ってるから」

「そうだ。テメエが突然入って來るから止め忘れた」
最速記録が出そうだったのにね。

「私のせいかな?」

「そうだ」

「はっ」

あ、何か純兄の心の声が聞こえる気がする。

「(こいつ、殴りてええええええええええっ!)」
前言撤回。叫びでした。

「で、結局何なの?」

「最近入って來た部下の取り扱いが難しくくてな」
「帰れ」

うあ、バツサリ。

「部下の管理が出來ないとか俺に言ってもしょうがねえだろ」

「そいつらの名前は斬、天、劍というのだが?」

……そりゃー取り扱いにも苦勞するでしょうね。

「そいつらがお前の部下? 四月に入学したところ?」

「実力があれば飛び級だろうがなんだろうがするからな」
流石と言うか何と言うか。

つまりあの三人、実力があつたって事？

ある意味あるけど。

「まあガンバレ」

「何のために来たと思っている」

「さあな。数独の邪魔をしにか？」

根に持つてる……根に持つてるよっ。

「いや。取り扱い方を聞きに来た」

「説明書があるとでも思ってたのか？」

「無いのか！？」

驚くところ！？

「あるのか？」

妙羅が懷から取り出しましたるは。

『部下の取り扱い説明書 第一巻』

……あるんだ。

何巻まであるのこれ。

「こんなもある」

『後輩の取り扱い説明書 番外』

番外って！？

「欲しいか？」

「生憎後輩がない」

「そうか。まあ必要になったら言え」

別にいらなと思うんだけど。

「分かった。じゃあもう帰れ」

「何をしに来たと思っている」

「数独の邪魔」

確定？

「で、取り扱い方……口頭でもいい」

「光ーっ！ 居るか？」

「純お兄ちゃん！ 食べて食べて。あ、妙羅さんこんばんは」
「妙羅さまだ」

「は〜い〜」

あっさり受け入れるな！

「……下の妹はいい子だな」

「手え出すなよ、ロリコン」

この人ロリコンなの！？

「一辺冥界^{あっち}に逝くか？ シスコン」

シスコンじゃないと思うけど。

「光、手に持ったそれ、妙羅に食わせてやれ。喜ぶぞ」

「了解。はいどうぞ」

光、何作ったの？ クッキー？ ゼリー？ とにかく不気味な物
体。

「……今の人間界にはこんな食べ物があるのか？」

この人、何歳？

あ、凄い、食べた！

「うっ……」

「ドクダミ入れたの。これで妙羅さまも健康に」

『なるかつ！？』

むしろ毒だよねっ！？ 体に悪いよね！？

「……斬に解毒薬でも貰おう」

「悪化させられないようにねー」

「……………」

あ、黙って出てった。

死神撃退！

あれ、何かこれって罰当たり？

166 成績表の恐怖（前書き）

読んでくださっている方々、いつもありがとうございます！
最近いつも投稿が20時過ぎてからになってしまってますので……。
もういっそ、書いてすぐに投稿してしまおう！ となりました。
あしからず……。

166 成績表の恐怖

「あい、通知表渡すよー」

『いない!』

「いやいないじゃないやなく『いらん!』言い直さんでいい!」
注文が多いなあ。

「ああもう、はい、秋村ーっ」

あ、全部無視した。

「成績表怖え」

「怖い」

「怖〜い」

「怖……くなんてないわよっ」

『どうでもいい』

『そのノー天気分ける』

純兄、なっくん、ノー天気ってどうやって分けるの?
忍でーす。

「海中!」

「ほーい。んじゃちよつと行って来る」

「生きて帰ってこい!」

「分かった、必ず生きて帰って「さっさと来ーい」……んと」
珍しく真剣な顔だったのに。

……こんなことで真剣な顔になってもなあ。

「夏、どーだった?」

「上がった上がった」

おー、よかったね。

「上がったけど5が減った」

「5がある時点で凄いと思うよ?」

だってだって。あたし中学なってから5取った事なんて無いし。
なぜか4止まりなんだなあ。

「わあああああつ！」

あ、シジミの悲鳴。

「……どうしたの」

「やったっ！ やったよ！ 1も2も無い！」

「……………」

「亮君その反応はないと思うんだっ！」

「いいなー、1無いって」

清、2は？ 2はどうなの？

「鈴木！」

行っってらっしゃい、玲奈。

「どうだった〜？」 「十川^{そしやう}！」

「上がったわよ。別に、これくらいじゃ嬉しくっ……無いけどね」
なら、口元が緩んでるのは何故？

「高崎！」

「せんせーそれ燃しといて」

「馬鹿なこと言ってないで来い」

「ふえーい」

「生きて帰ってこい！」

なっくん、清に言われたことまんま復唱。

「だ、駄目だ……オレはいいからお前は「さっさと来ーい」最後まで言わせて。逃げろ！」

何から？

「ぐぼあっ」

あ、清……血でも吐きそうな声したよ？

「大丈夫「高山忍！」んじゃ、そゆことで」

「最後まで言ってくれても……」

ええーっ。と、気分で言ってみたりもしたりする。

「高山……お前職員室でも話題になって「私は何も悪いこととしてないわよ!？」……誰」

さあ？ 玲奈かな。

「うん、まあとにかく。二年に比べて大分伸びた」

おお、5がある。

あ、いつも通り保体は3なのね。

いっつもここCなんだよね。安全に関してのうんたらかんたら
ってトコで。

「高山純！」

「生きて帰ってこい！」

ごん

「純くんの手刀が清くんのこめかみにっ！」

桜の実況って久しぶりに聞いたような？

「っつか、痛ええええええいつも以上に痛ええええええっ！」

「忍、見せて」

「ほいな」

「オレは無視かよ！」

いつものことじゃん？

「思わず殴りたくなるような成績だな」

「とか言いながら拳こっちに向けるのやめ……って、ホントに殴っ
てきたあっ！」

下段払いっ。

「むう」

「今の絶対本気だったでしょ！」

「当然」

当然って。

「純、オール5？」

「いや」

何かいっつも成績表帰ってきたときその質問されてるよね、純兄。

「え、純、お前成績下がった？」

「喧しい」

下がったんだ。

「見せて見せて」

あ、4と5がいっぱい。

かと思いきや意外と少ない？

「3多し！」

「返せ」

はあい。

「中谷ー」

あら、先生力尽きてきた？

「は、初めて5があった！」

しーちゃんのテンションが上がってる。

「そかそかー、よかったな、篠」

「うむっ」

何かしーちゃんが珍しくガキっぽい。

「私名簿順だといつも最後なんだよ？ どう思う？」

このクラス、山中さんと山本さんとかいないもんね。

だから山内の桜が一番最後になっちゃうんだねー。

「山内ー」

「遅いよ！」

「え、あ、ええとー、ごめん？」

謝るんだ。

「あわわわわ」

あ、桜が何か慌てだした。

「あわあわあわあわ」

ダッシュで戻ってきた。

んで、筆箱から鋏を出して成績表を切ろうと……って

『待てっ！』

「あうあうあうあうあう」

桜をなだめるのに、三十分くらいかかりましたとき。

167 バナナとクスリ

「はぁーるがきいーたあ、はぁーるがきいーたあ、どおーこおーにいーきたあー」

「剣の頭」

「やかーしい」

天だ。

「今、夏」

「細かいことは気にしねー方向で」

「夏でもバナナは旨いからな」

「あ、オレにも一本」

うむ。しつかり味わえ。

「そーらちゃんっ。今日もしつかりバナナ味わってるかしら？」

「あ、蓮菜さんれんなっ！ もちろん！」

私にバナナの旨さを教えてくれた蓮菜さん！

バナナ嫌いの子が何とかしてバナナが好きになるように日々奮闘する凄い人だ！

「……って、天？ オレは旨い飯屋に連れてってくれるって聞いたんだけども？」

「何を言う。今日は蓮菜さんがバナナ料理をごちそうして下さるのだ」

「……バナナ？」

バナナだ。何かおかしいか？ 斬。

「……全部？」

「もちろん全部よ。いろいろなバナナ料理があるわよ」
流石蓮菜さん！

「…………俺、まだ作りかけのクスリが。剣。実験台」

「テメーの実験台にされるよりバナナフルコースの方がずっとええわっ！」

うむ、よく分かってるな、剣。

「ほらほら。早くおいで」

「……む。とにかく俺は作りかけ「だーめっ」……こうなったら」

こらっ！　クスリを取り出すな！

「ざあん！　これってあれだろ！？　相手溶かす奴だろ！？　これを今どうしようとした！？」

「これからかけようと『やめんかっ！』じゃあ……」

別のクスリを出そうとするなっ！

バナナの前で何をする！

「……あん？　こりゃ見たことねーな。何コレ」

いつもの毒々しい色でなくて、虹色に輝いているぞ？

……ある意味毒々しいかも。

「……好きなモノへ、姿、変えられる……」

「バナナになれるの！？」

えっ！？

「……本当にそれ、好きなら」

「頂戴っ！」

「ちよっと待て！　斬！　解毒薬は」

「無い」

即答っ。

「蓮菜さん、もし失敗作だったら……」

「バナナへ近づくためにはどんな危険にも立ち向かうのよっ！　天にはその覚悟がないの！？」

そ、そうか……。私はもしかして覚悟が足りないのか！？

「斬！　それ、私にもくれ！」

「アホかあああああ！？」

私は、バナナへと近づくためにはならどんな危険も恐れない！

「天ちゃん、さあ飲みましょう」

「あぁっ」

「こいつ等絶対頭おかしい！　おい！　正気に戻れ！　大体斬のク

スリは飲むじゃなくて被るんだろーが！ ……じゃなくてっ！
とにかくやめろっ！」

劍
⋮
○

「すまない」

「悪いってんだったらやめんかああああああっ！」

ピ
シ
ヤ
ツ

「あああああ、被っちゃった……」

「……ちなみにコレ、動物実験前」

「はあっ!？」

「実験出来て良かった」

「良くねえっ！
ってか天死んじまっ
たらどーすんだよ！」

「……劍。死体隠すのいい山知ってる？」

「違あう！　そうねえっ！」

「俺は知ってる。だから安心」

「安心するとこじゃねええええええつ！」

う、む？

「五月蠅いぞ」

「あ、え……そ、天？」

「ちゃんと私はバナナになれているか？」

手を動かそうとしているのに動かないのは、バナナになったからか？

「ぷっ、くっ、あ、ごめん。ああでもやっぱ我慢できねえっ！ ぎ

やははははははははははは！」

人の顔を見て笑うな！
私はそんな風に育てた覚えは無い。

「ううっ。あ、天ちゃん？ バナナになれた？」

「蓮菜さん」

『あ……』

どうしよう。

体バナナ。顔私。

バナナの着ぐるみでも来て転がってみたいだ。

「斬っ」

「ききっ、成功」

眩しいほどの笑顔だ。いつものクスリが完成した時の笑顔だ。邪気たっぷり、悪戯っ子、悪魔、まあとにかくそんな類のモノを混ぜ合わせたような笑顔だ。

「解毒」「無いつて言ったじゃん？ ききっ」くそ。作れ！ そして完全にバナナになれるクスリも作れ！」

「ききっ。解毒剤は拷問に必要ないね」

私と蓮奈さんを拷問する気か！？

「天ちゃん……この子、こんなに明る……ええと、とにかく喋る？ 子なの？」

「クスリが完成した時と拷問中は……」

親の顔が見てみたいっ。

168 ある意味謎の高山家

ぴーんぽーん

……………あら？

変ね。返事がないわ。

家の中から声聞こえてるのに。

玲奈よっ。

忍と桜、篠と遊ぶ約束してたんだけど…………。

『はい』

「ええっ！？ 高山！？ 何で居るの！？」

『…………鈴木か。表札を見ろ、馬鹿』

あ、高山…………。うっかり忍と高山が兄妹だったこと忘れてたわ。

「べ、別に忘れてたわけじゃないわよっ」

『はいはい。忘れてたんだな』

「忘れてないわよっ」

『…………インターフォン越しでいつまで話し続ければ気が済む？』

『あ、悪い。とりあえず、忍出る』

え？ もう一人男の人の声がしたけど…………誰？

「やほー、玲奈。おいでおいで」

「あたしは子どもじゃないわよっ！」

「成人してなかったら子どもだもーん」

「言い方が悪かったかしら。あたしは幼児じゃないわよっ！」

「まーいいからおいでって」

「お、おじゃましますっ」

これ、言わないとなんだか落ち着かないわよね。

「あゝ、新しい人だゝ！ 食べるゝ？」

妹ちゃん？

ええと、手に持った黒いモノは何かしら？

「光、毒しまいなさい。食べさせるのなら純兄に」

ど、毒！？ 高山にならいいの！？

「了解」

了解するの！？

「ねーちゃん！ なっくんが……なっくんが死んでるっ！」

な、なっくんが死んでる！？

なっくんって海中の事よね！？

……弟くん達とも仲いいのねえ。

「勝手に殺すな！」

「お、復活？」

「お兄ちゃんっ！ 岳くん！」

「……も一個味見」

ええと……海中の妹？

手に持った奴って、さっきのあの毒みたい……。

『勘弁してくれええええええええっ！』

あら、海中って家の中じやいじめられる方なの？

「ちなみに。元気な方がなっくんの妹ではーちゃんこと春、おとな

し……そうなのは美咲ちゃんの妹にしてはーちゃんと光……ってさ

っきの妹ね。の友達」

妹持ってる人多いわねっ！？

「村田に妹っていたのね」

「全然似てないよね」

あ、桜。

「なかなか来ないから降りてきちゃった」

「ごめん。玲奈が「あたしのせいじゃないわよっ！」まだ何も言っ

てなあい」

玲奈がって言いかけたじゃないのっ！

「ああもう、とっとと帰れ！」

「……篠と高山、けんかでもしてるの？」

妹と弟は一人ずつとしか聞いてないし……。なら、上には篠と高山しか居ないわよね？

あ、さっきのインターフオンの途中で入ってきた人？

「ううん。純くんったら、何もない所とけんかしてるんだよ」

「……高山って、頭大丈夫？」

「だいじょぶだいじょぶ。ところで玲奈。あたしも高山」

どうしろって言うのよ。

「と言う訳で純兄のことは純でよろしく」
え。

「無理よっ！」

「何で!？」

そんなに力一杯聞くこと!？

「だ、だって……向こうだってあたしのこと鈴木だし……。いきなり名前で読んだら引かれるでしょ？」

「そーかな？」

「そうよっ」

多分っ。

「じゃあ純兄にも言っとくね。玲奈のこと鈴木じゃなくて玲奈って呼んでって」

そ、そういう問題じゃなくて……。

「会談で話すのって首疲れるから、さっさと行こ」

無視？ 無視なの？

「篠。純くんどんな感じ？」

ちよつと……ドアの隙間から何覗き見してるのよっ。

「とてつもなく高度なパントマイムしてるぞ」

き、気になるわねっ。

「あ、投げられた」

『ホント!？』

あ……、別に気になったわけじゃないわよ!

「じゅーんにー。妙羅ー、見られてるの気付いてる?」

『気付いてるからちよつと黙ってる!』

あら、変ね。今高山……じゅ、純の声ともう一つ声が聞こえたよ

うな……。

「純くんが怒鳴るところなんて初めて聞いたよ〜!」

「あたしも」

当然、あたしも

「妙羅って?」

「今純兄と喧嘩してる人」

『え?』

だ、誰もいないわよ……?」

まさか幽霊とか言わないわよねっ!?

「妙羅、純兄が変人みたいになってるからさー。姿とか出せない?」

「……………」

「あそ。んじゃあ純兄、変人続けて」

え?

「殴られてえか?」

い、今の声本気だったわよ……? イラついてるのかしら。

「誰? 妙羅って」

「だから、今純兄とけんか「そうじゃくて!」えー、幽霊ダメな人

」

「は〜い」

あ、桜って幽霊ダメなの?

あたしは別に大丈夫よ!?

「幽霊ではないのでご安心下さいーい」

「よかった〜」

本当に幽霊だったらどうもしないけどどうしようかと思ったわ。

「妙羅は死神だから☆」

『帰るっ!』

何で死神が家にいるのよっ!

高山家って、何なの!?

169 ガールズトーク？ どこが？

「集まったはいいけど暇だよね」

「そもそも何して遊ぼうとしてたのよっ」

「さあ？」

もう会話でいいんじゃないかな。

忍でーす。

遊ぶために集まって、その遊びが会話。

……あ、なんかちよっとおばさん見たいって思っちゃった。

「忍、ちよっと通るっ！」

「ねーちゃん！ こいつ等何とかして！」

『待ちなさーい！』

『……………』

どうすればいいかな、この場合。

何とかしてって言われても行っちゃったらどうもできないんだけど。

「ほっとこ」

「ほっとくべきだね」

「……絶対海中って忍のこと女の子として見てないわよね」

ん？ 今更そういう方が無理じゃない？

「そもそも忍の服って男物っぽいよね」

純兄のお下がりです。

とくに不満はありません。

「実際男物。しーちゃんもそんな感じじゃない？」

「そうなのか？ 服はよく見ないで買うから……」

「見なさいよっ！」

え、見るべきなの？

「玲奈は女っぽいよね。服も髪型も」

「あ、当たり前でしょ！？ 服に気を使うものじゃない、女の子っ

て」

「そうなの!？」

「そんなに驚いた顔で見ないでくれる!？」

「ごめんなさい。」

「桜は普通に女の子の服よね」

「ママが買ってくるんだよ」

「……自分で選ぶんじゃない？」

「面倒だから何でもいいな」と思って」

「そんなに大きなため息つかなくても。」

「そもそも服が話題に上ったこと自体初めてだよね」

「そういやそうだな」

「あ、あなた達……女子力無いでしょ!？」
絶対」

女子力？

「学力じゃなくて？」

「全然違うわよっ!」

「あ、ところで」

「話変わるの!？　ここで!？」

玲奈、喉潰さないでね。

「さっき死神とかなんとか言ってたけど、あれって嘘だよね!？」

あ……。

「でもそうじゃなきゃ純は何と話してたんだ」

「やだよだ!　信じたくないよ」

玲奈が頷き人形と化しました。

「あ……どうしよ。本人に聞く？」

「よし行こう!」『やだあっ!』

一対二

行かない方向？

「忍、ここ冷房ついてる？」

噂をすれば何とやら。

「純くん!　死神なんていないよね!　ね!？」

「居る何て言ったら殴るわよ!？」

「いるよなっ」

おお、扉を開けた瞬間から一気に女子に囲まれる純兄。
音を消せばもて男に見えなくもないかもしれない。

「……あ、冷房はついてるな」

『無視するなあっ!』

ついてないよ。現実逃避？

「北側だからどちらにしても涼しいと思ったのに……暑い」

そりゃー、これでもかかってくらいに桜たちが近づいてるからね。

「純くくん?」「高山?」「純」

「女が怖えてやつのが持ちが分からなくも無くなってきた」

あはは。あたしは純兄の方が怖いっ!

「純も大変だな」

「なら変われ」

「やだね。俺は一步下がったとこで笑っとく」

「最低だな、テメェ」

「あははははははは!」

本当に笑ってるし。

「で、居るの居ないの!？」

「海中! あんたなら何か知ってるでしょ!？」

「純に聞けよ」

「と言う訳で純。さっさと答える!」

何か純兄が弱い立場になってる。

めずらしー……あ、妙羅とじゃ結構弱い方か。

「ええー……何て言ってほしい?」

「居る!」「居ない!」

「どうしろと!」

あ、暑さのせいで切れるラインが低くなってる?

「ど、怒鳴られた……。あう、ごめんね純くん」

あ、桜が引いた。

「純、仕事だ。ちょっと来い」

あ、妙羅。いつから純兄に仕事をプレゼントするようにな？

「ああああああもう！　ちょっとお前等一步下がれ」

『……？』

一步下がる。

二人まとめて足払い。

「よし。俺はちょっと出かける」

「いてらー」 「行ってらっしゃい」

『答え聞いてない！』

不満ですか、お二人さん

「ねえ、やっぱり居るの？」

「居たらどする？」

「か、帰る！」

怖がりだなあ玲奈。

「居ないから安心してよー」

「なら最初からそう言いなさいよっ」

「あんまり怖がるから楽しくて」

「馬鹿にしてるの！？」

「してないよー」

ほんとのこと言ったら失神しちゃったりするのかな。

170 夏休みの宿題は

「……………うー」

「にーちやんどした？」

「暑^{あち}い」

「オレだって暑いよ！」

へえ。

純だ。

「んで」

「あ、まだあんの？」

「社会の宿題がめんどい」

「オレだって宿題めんどいよ！」

社会の宿題に『考察』の欄があるからめんどくせえんだよ。

「夏休み入ったばかりなのにほとんど宿題終わってるとこが純兄だよね」

「ん、数学の宿題は分けてやることをお勧めする」

入試過去問両面刷り四枚を一気にやるのは流石にキツイ。

「言われなくてもそーやりますー」

「……未来形？」

「数学は手付けてない」

あそ。

「ちなみに宿題に手は」

「んと、読書感想文と美術だけやった」

あ、どっちもやってねえ。

「社会後回しにして読書感想文やろかな……」

「美術はー？」

「社会の後」

「後回しだね、よーするに」

あきらめが早いのが俺の長所だ。

もし遅刻確定の時刻に起きたとしてもサクッとあきらめるぞ？

……自慢になってねえし。

「純お兄ちゃん図工好き？」

「普通」

「どちらかと言えは？」

「どちらかと言えは？」

「どちらかと言えは普通」

「どちらかになって無い」

「だって好きでも嫌いでもねえし。」

「ねーちゃんは？ 図工」

「普通のどちらかと言えは好き」

「……二人ともどうでもいいんだね」

『どうでもいい』

「ハモって言うところか！？」

「たまたまだ。」

「純兄、ところで相談なんだけど」

「ん？」

「あ、聞いてくれるんだ。てっきり『夏にしろ』とか言うのかと思
った」

「その手があったか。」

「夏にしろ」

「聞いてよ」

「だったら話を逸らすな。」

「社会やったとこまででいいから写さ」「却下」チェツ」

「元から期待してなかったようにしか見えねえ。」

「ね、ところで体力作りって何したらいいの？」

「あ、光もあんのか？ それ」

「うん、ね、何したらいい？」

「体力づくり？」

「ランニング？」「縄跳びかな」「適当に遊べば勝手につく」

「凄く投げやりな意見があったような気がするんだけど」

「気のせいだ」

「気のせいか」

納得するのか。

「やっぱり家事でしょ。光手伝って」

「はい」

……素直……。

「岳も体力づくりあるんだったわよね、手伝って」

「今算数やってんの！」

「じゃあ終わったらね」

手伝う事前提か。

「あー、そーいや自由研究とかあるよな。どしよ」

「プランクトンの観察」

「えー、もちよつと簡単なの」

簡単だろ？

「卵の殻を溶かすヤツは」

「あ、それ楽しそう。それやろ」

……二年の時にやってなかったか？

「純ー。光いるか？」

「なっくーんあたしは？」 「オレは？」

「代表して一番上の奴」

「代表とかやだ」

「子どもかお前」

何か悪いか？

「光がどしたの？」

「春が暴走したから止めてもらおうと」

「それくらいやれよ。兄貴なんだし」

「うあ、お前に言われたくねえ」

ん……じゃあどうしろと？

「はーちゃんの暴走って？」

「家じゅうに自由研究とか言って罍張り始めやがった」

自由研究は罍にかかった人間観察か。

それともどういう風に張った罍が一番かかりやすいか……とか。

「じゃ、俺は春の方に着く」

「あ、やっぱお前も？」

テメエもかよ。

「じゃあ何しに来たんだよ!？」

「光にさらに煽ってもらおうと……」

なら最初から言え。

「夏? 聞こえてるわよ」

「……………あーっと。あはははは……。ごめん、やっぱ罍取り外させる方手伝って」

……………。

「んな不満そうな顔になるなよっ!?! 純まで!」

面白そうだったのに。

「夏。春はもう降参したわよ。さっさとあなたもこちらへいらっしやい」

降参? ……………降参?

171 お父さんの扱い

「わわわわわっ！ やめてよ！」

「やだ」

「やだじゃなあい！？」

「そおくら、お髭じよりじより」

「いたあい！」

あはは、春ガンバレ。

夏だ。

「拷問ね……」

「んじやお母さん、助けてやれば？」

「わざわざ助けるほどの事でも無いわ」

拷問つつたくせに。

「もおおおおおお！ やめてよ！」

「何でえ。お母さんにやってあげたら喜ぶのに」

「イ・ヤ・よ！」

「あははははははは！」

親父ってば、フリーズしてやんの。

「ちよつと夏、黙ろうか？」

……口つまんだ。

イコール？ 俺の笑を邪魔しやがった。

「ちよつと逝って来いっ！」

「ぐはっ」

蹴ってー、殴ってー、足払ってー。

体育の授業にある柔道ってこのためにあるのか。

「お兄ちゃんって……笑ってるとこ止めると怖いよね」

「そうね」

いや、俺はお母さんの方が怖えと思う、

「ところでお母さん、お父さんって何が苦手？」

「そうねえ……」

あ、お母さん協力すんの？

「パサパサしたかぼちゃの煮物が嫌いね」

「へえ」

それは俺も嫌いだな。

「後ね、猫が苦手」

「そなの？」

「秋い！」

あ、事実なんだ。

「じゃあここは忍ちゃんに手伝ってもらおう！」

あー、春も春で大概怖えかも。

何が怖いって、人に仕返しする計画立ててる時にすっげえ楽しそうになるのが怖え。

「ちよっ……と、夏。首、首……絞まってる」

「絞めてんだよ」

「止めなさい」

親父って何気に腕力強いから困る。

いや、別にそこまで困らねえけど。

「そりゃっ、お髭じよりじよ「来るなっ！」今のは酷くない？」

え、だって……。

「秋、前から気になってたんだけどこっち来るなり俺の扱い酷くな
って無い？」

つい純たちに影響されて？

「気のせいよ」

き、きっぱり……。

「んー、そう？」

「そうよ」

「ふーん、そうなのか……」

納得するのか！？

「な？」

あ。してなかった。

「ところで、夏休みの宿題は進んでるの？」

「ぜんぜん」

小学校の頃なんか、俺は宿題を期限直前になってもやらない派だったからな！

お母さんに滅茶苦茶怒られたけど。

「さっさとやりなさいよ」

まだ夏休み始まったばかりなのに……。あ、もうすぐ一週間経つ？

「ウチは今自由研究のネタを考えてるよ！ テーマは『お父さんに仕返すするにはどんなのが一番効果的か！』」

研究でいい、のか？ ある意味研究だけど。

「やっぱ俺の扱い酷くなってる！」

「気にしないの。ね？」

「うう……これがひどい扱いしてる人の言葉じゃ無かったら嬉しいけど……」

顔はちよつとほころんでるくせに。

その頃、高山家。

「おとーさん、名前何だっけ？」

「酷っ!？」

「気にしないの。ね？」

「うう……じゃあ凜、俺の名前は？」

「……………」

「……………ひどい」

172 夏の雪崩

「ぎゃああああああっ！」

「うっせえ」

「いや……あのさあ、弟が悲鳴あげたんだからちょっと位心配してもよくね？」

「心配するような出来事があったのか？」

「いや、雪崩が起きただけ」

「それ位音聞きゃ分かる」

冷てー。

机の上のモンがどっさああああああっとな、行ったのにな、この反応。

岳だー。

「へえ、漢字テスト五十点？　きっかり半分。すげえ」

「だあっ！　勝手に見んなよ！」

今までの最低点っ！

「テストから勝手にこっちに來たんだ」

「否定できねええええええ！」

「事実だからな」

ふんだ。このがり勉にーちゃん！

多分にーちゃんは努力型。夏休みなのになあんで勉強してんの？

『みゅみゅっ！　何かしゅごいことになってるでしゅよ！』

あ、何か久しぶりに見た気がする。耳で歩く妖怪。

「妙羅のペットか。帰れ」

『いきなり酷いでしゅっ！　でもってみゅーちゃんはペットじゃないでしゅよおっ！』

ある意味可愛い物体なんだけどな。コレ。

『ところでこの紙と本の海は何でしゅか？』

「ちよっと雪崩が起きただけー」

『みゅみゅっ、耳の踏み場もないでしゅよっ!』

……耳の踏み場? 足の踏み場か?

「すぐ片づけるってば」

「とか言ってまた机の上に乗っけるだけだろ」

ぴんぽおーん。大正解。

『みゅみゅっ! ちゃんと片付けないとメツでしゅよ!』

見た目4, 5歳に叱られる11歳の図?

あ、何か情けねー。

『第二のみょーらみたいでしゅ』

「ほお、妙羅は片付けが苦手なのか?」

『ほっといたら部屋はいつも書類でぐちゃぐちゃでしゅ』

へえ、以外。

『だからみゅーちゃんがいつもキレイキレイしてあげてるのでしゅよ!』

「ふうん」

『キレイキレイして、おかげでみょーらは仕事がぱっぱできるのでしゅ!』

おー、胸張ってんのか? これ。

胸だけじゃなくて動体全部張ってるように見えっけど。

「じゃあこいつの片づけ手伝ってやれ」

『了解でしゅっ♪』

おー、すげーご機嫌。

「でももう終わったぜ?」

『何処がでしゅかつ! 机の上に置いただけじゃないでしゅかつ!』

いーのいーの。

『あーっでしゅ!』

叫び声にもでしゅ付けるのかよっ!

「って、あ、ぎゃああああああああ」

い、一日に二回も雪崩がっ!?

バランスゲームには自信あんのになー。

『やっぱりみゅーちゃんが片づけるのでしゅっ!』

「あー……、うん。よろしく」

「楽し、いっか。」

『開きましゅっ!』

「……………って」

「ちよおおおおおとおおと待ったあああああ!」

『みゅみゅ?』

みゅみゅ?　じゃねーよ!

「何で床にこんな大穴開けてんだよ!?!」

『大丈夫でしゅ。閉じること可なのでしゅ』

「じゃなくてっ!

「何で雪崩をそん中に落っこちそうとしてんのかな!?!」

『これでああなたの机もキレイキレイのさっぱりでしゅっ!』

えーと?　つまり?

「あなたはこれを全部捨てるおつもりで?」

『みゅみゅっ!　違うのでしゅよ!　みゅーちゃんが居ればいつで

も取り出し可能でしゅ!』

「お前が居なきゃ出せねーのかよ!」

「こいつに期待したオレが馬鹿だった!」

『みゅーちゃんが居なくてもお兄ちゃまが取り出してくれるでしゅ

よ?』

「お前のにーちゃんとか知らねーよ!」

『じゅんの事でしゅよっ!』

「はい?　にーちゃん?

『でしゅよねっ』

「デメェ帰れ」

『まだキレイキレイ終わってないのでしゅっ!　どさあー』

「口で効果音出さんでも。」

「にーちゃん、説明プリーズ」

「ヤ」

一音で返された……。

「んじゃあ耳妖怪のさ、開けたのと同じ穴開けるだけでいいからっ！
じゃねーとホントに出せんのか分かんなくてこいつ帰せねーし」

『ではではみゅーちゃんはこれにてっ！　なのでしゅ！』

あ。

あーっ！

「にーちゃんっ、今日やる分の宿題穴に入れられちゃったから出してっ！」

「ヤ」

「ヤ、じゃなくて！」

やべーよ、やべーよ。宿題がもしこのまま帰ってこなかったら……。

って、まだ一か月くらいあんだし大丈夫かも知れねーけど。

「頼むっ！　なっ、なっ」

「……よし、ミュウは今度会ったら半殺しにしよう」

……にーちゃんの口からこんな言葉初めて聞いたけど。

殴るとかな、蹴るとかなら聞いたこと数百回あるけどなっ！？

半殺しは初めてだ！　多分。

「はあー。やんなきゃダメ？」

「ダメー」

じゃねーと不安だしー。

「はあ……。三歩歩下がれ。」

はい？

「あー、やっぱ五歩下がれ。テメエの机あたり。そう、そこ
何で？」

「開く」

「ぎゃあああああああああ！」

教科書痛え！

何で俺の頭の上から振ってくるんだよっ！

「あ、岳。もうすぐ辞書が「ぐあっ！？」あ……遅かったか」

もっと早く言えよっ！

あー……最初よりかなあり酷くなってる……。
うん。

皆さん。机の整理はきちんとしてましょう。

173 かみとゴム

「あのさー、純兄」

「ん」

「何で勉強あたしの部屋でやってんの？」

「涼しいから」

あっさりきっぱり答えたね。

忍でーす。

「あのね、純兄」

「ん」

「前から思ってたんだけどね」

ほんっと前から。

「ん？」

「髪切ればもっと涼しくなると思うよ」

少なくとも首のあたりはかなり。

ぎりぎり肩には付かないけど、それでも首の回り覆ってるんだもん。

「短髪は落ち着かねえもん
もんって。」

「じゃ、せめて髪くくれば？」

「ん……ゴムあったかな」

そっから始まるの？

「多分洗面台の引き出しにあるんじゃないかなー」

「ふーん」

いや、ふーんって言って何またワークに目え移してんの？

「あー、やっぱり暑い」

「だから取っといでって言ってるのに」

「んー」

あ、絶対めんどくせえとか思ってる。

「ちなみにあたしは行かないからね」
んで、絶対あたしに頼むと思う。

「えー」

ほら！ ほらね！ 絶対あたしに頼むつもりだったんだ！

「純ー、忍ー、ゴムって持ってる？」

『ゴム？』

「そうそう。美術のさ、紙くるめて止めとくヤツ。どっか行っちゃ
って」

家には無いんか。

「なっくん美術やったの？ 屋外写生だよね、どこ描いたの？」
なっくんって絵、上手かったっけ？

「まだ描いてねえよ」

「じゃあなんでゴムを無くすんだよ」

「いや、何か画用紙ごとそのへんにほっといたらどういう訳か……」
『どうやって無くすんだよ！？』

す、すごい。三か月半で消しゴム五個無くしたことより凄い！
全然褒めることじゃないけど。

「修也 ああああああ！」

「不気味だ」

「不気味くねえっ！ 喰らえ、ゴム鉄砲！」

廊下が何やら騒がしい。

「ゴムつつった？ よし、貰って来よ」

なっくん、ベランダの窓位閉めるてってください。

「修也ってあれか？ んと……青」

「色で言われても分かんないよ。しかもそれって前着てた服の色で
しょ」

「名前を覚える気はさらさらねえ」

最悪だこの人。

「よし、ゴム調達。じゃな」

ホントにゴム取りに来ただけなんだ……。

「純兄も少し動いたら？ 肩こるよ、腰炒めるよ」

「……今発音がおかしくなかったか」

「え、腰炒めるよって言っただけ」

「……腰炒められる前に動くよ」

おお、言葉からにじみ出てた？

腰を炒め物にしても絶対おいしくないよねー。

あれ、でも人肉ってホントにまずいのかな？

………危ない。一瞬食べてみたいと思う所だった。犯罪者にはなりたくありません。

「あ、そだ純にー純にー」

「あ？」

「ゴムとび用のゴム何処やったっけ？」

「知るか」

「知っというよ」

「知っててもどうにもならん」

えー。そかな。

「んじゃ、あれは？ 縄跳び用のゴム」

「んな物あったか？」

「無いと思う」

「何がしてえんだよ」

「暇つぶしを」

「勉強でもしてろ」

気分じゃないんだよ。

あ、でもやっぱしなきゃダメ？

歴史の復讐で五十問中四十七問でできなかったんだからしないとま
ずい？

うー。昔の事知ってて何になるんだ！ と怒鳴りたいけどね、あ
たしってば。

「岳！」

「あん？ 何にーちゃん。がり勉モード解除？」

純兄はロボットか何かですか？

「ゴム落ちてた。ゴム鉄砲するのはいいけどちゃんと回収しろ」

「ほいなんて、何か髪絡まってる。だれの？」

分かるかつ！

「んー、誰の？ 結構長くてくせっ毛って？ んな人居た？」

分かるかってのに。

174 突然の璃々なんだよっ！

「きゃーっ！ やだやだおぼるるよお！」

「み、みーちゃん！？ 落ち着いてえっ！」

「どうしたのー！？」

びっくりびっくり！

ばばんっ！ 璃々だよんっ。里山なのだよんっ！

あれあれっ？ りりの事覚えてくれてる人居るのかなア！？

95話、103話参照だよーっ！ あれ、でも結局りり活躍してないんだけどな。

「やだあっ！ 水きらあい！ 私はお茶派！」

『何か違うよね（ゝ）っ！？』

あ、んとね、んとね。りり達ってば今日地区プールなのオ！

そこでね、高山くんの妹ちゃんと、一緒にいたこと、もう一人のお友達かなっ？ を見つけたの！

前にヨーカイ？ みゅーちゃんってのが来た時に何もなしで見えてたのがりりってば気になるんだよねエ……。

なんだかうむやまになっちゃってるけど。あれ？ うむやま？ うやうや？ うむうむ？ とにかくそんななのオ！

高山くんに聞こうと思ったのに、いいつも風上くんとか追っかけっこしてるしさー。

……むう。修也くんって追っかけっこしか興味ないのかなア？ あわわっ、じゃなくて！

とにかく！ 何が言いたいのかと言うとっ！

りりも幽霊見たアい！！

と言う訳で見える人に突撃っ！

「いーやーだよーっ！」

「授業の時はちゃんと入ってるじゃん!？」

「はーちゃん、みーちゃんはいっつも見学チームだよ」

「あ、そうだったっけ。と、とにかくみーちゃん! 何でプール入れないのに来たの!？」

「美代も泳いでみたいもん!」

ふむふむ。みーちゃんって、美代って言うんだね!

みーちゃんでもいいや。

『じゃあ入ろうよ(ゝ)!』

「うーっ」

お手伝いしてあげよォ! ほら、信頼を得てどうやったら見えるのか教えてもらうの。

んともと、借りた貸しは返しなさァい! の巻!

あれあれ、りりってば腹黒だっけ?

そうそう、あのね! 前にぎゅうぎゅう、じゃなくて牛乳のポスターのキャッチコピー考える授業あったの!

りりのはね、

『腹黒い人でも白くなります』

どうどう!?

あ、こんなことやってる場合じゃ無かったね!

「みーちゃんっ!」

「あれ、知り合い?」

「……………違う」

おおっとォ!? 急に雰囲気変わったよみーちゃん!

どしたのどしたの!?

「あの人じゃない? ほら、あの、忘れもしない」

おおおっ! 高山くんの妹ちゃん、略して高ちゃん覚えてくれてたんだねっ!

「誰だったっけ?」

だああっ! 覚えてないじゃん! しっかり忘れてるじゃん! 忘れもしないってなんだったの!?

「お兄ちゃんのクラスメートだよオ！」

「中学生が何でこんなところに〜!？」

中学生っ!？ あれあれ!？ あ、高山くんってお兄ちゃん居たっけ？

「下の方のお兄ちゃんだよ！」

「あゝ、岳お兄ちゃんの〜」

「そういえば居た……っけ？」

結局思い出してくれないんだねっ！ いいよもうっ！ ううう。

「でゝ、里山さんどうしたの〜」

「覚えてるんじゃないかっ！」

「用事聞いているんだけど」

何々!？ この子達冷たいっ！

まるでプールの水みたいだよ！ ……あ、でも今は温いなあ。

「みーちゃんをプールに入れよう大作戦！ 手伝いに来ましたアッ

！」

「やだやだやだやだやだ！」

『入りたいんじゃないの（〜）？』

「うう」

強行突破、あれ、使い方あつてのかな？ 行ってみよーっ！

みーちゃん小柄だしねっ！

「とりゃあーっ！」

「みゆあみやみゃっ!？」

凄い悲鳴だねっ!？

ばっしゃああああああああん

おおー、凄い水しぶきっ！

……………

……あれ？

浮いてこないよオ？

「みーちゃん！ だいじょごぼ」

「みーちゃぶく」

言い切ってから潜ることをお勧めするよ！

『プハーツ！』

早いねエ。

「……………」

「みーちゃん出ようとしな〜い〜」

「……………」

……あれっ、そう言えばりり、なんでこの子達とお近づきになつてんだっけ？

んーっと、えーっとオ……………ああっ！？

「高ちゃん、なんで幽霊見えるのっ！？」

「突然だね〜っ！」

175 見たいのーっ！

「凄いいねっ！ 高山くん家って大っきいんだねっ！」

「いや、普通サイズですが。んな事よりオレは何で里山がここにいるのか知りたい」

「右に同じ」

「前に同じ」

「しゅ、修也に同じ！」

「ただいま」

……急に騒がしくなった。

イコール、勉強に集中できん。

「んでんで、どうやったら幽霊見えるのオ？」

「純お兄ちゃんに聞いてみよ」

来るな。Uターンしろ。Jターンも可。とにかく来るな。

やかましそうだから。

「純お兄ちゃん」

「来るなって言ったのに」

「聞こえてないよ」

声には出してねえからな。

「と言う訳で、んと」

「りりだよっ！」

「そうそう、璃々さんよろしく」

「馬鹿待てこれを置いてくんなこら」

聞こえてないふりはやめろ。

「純兄、誰か来てんの？ 無理阿だったらこっちへ寄せ」

何があった、忍。

「あんにやろーあたしのすもも盗りやがって。絶対許さん」

何て分かりやすい。

「……よ、よく分かんないけど怖いなっ！？」

「なら帰ることを激しくお勧めする」

「ヤダッ！ 幽霊どうやって見えるか教えてもらうまで絶対帰らないっ！」

ガキかこら。

……あ、ガキか。

「忍」

「何っ！？ 未理阿来た！？」

違う。どんだけ根に持ってたんだよ。

「呼ばれて飛び込んでじゃじゃじゃーん！ 未理阿ちゃんでした！」

……飛んで火にいる夏の虫。

「出たな未理阿！ ちょっとこっち来なさい！」

「へっ！？ 何々！？ 何か居るの！？」

「違うのでした忍さん！ あれはお母さんがどうしてもすももが食べたって言うのにすももをかうお金が無くてやむなく」嘘つきなさい！「今やってるでした！」

「ちがぁう！」

うっせえにもほどがあるだろが。

近所迷惑、画面迷惑？ とにかく五月蠅い。

よし、逃げる。

「あーっ！ ちょっとちよっと！ まだりりってば幽霊見る方法教えてもらってないよオ！」

「ついてくんな！」

「はうっ！？ ううっ……でもでも、りりの夢は幽霊を見ることなんだよっ！？」

どんな夢だよ、そりゃ。

幽霊が見える程迷惑な事ねえぞ？ 冷凍庫を開けるとする。

『ここは我々のテリトリーだあああああ！』

ほれ、氷漬けにされるのが好きなある意味マゾが三人くらい詰まってる。

斬でも紹介してやろうか？ 確か氷を操れたはず。

「何をつかんでるの？」

「氷」

「嘘だあ」

ある意味あつてるけど？ 冷たいって所は。

「ねえね、ねえね、どうやったら幽霊見えるの！？」

話題変わるの早えなこいつ。

そろそろ面倒になってきたんだけど……何がってもちろんこいつの相手をする事。

……ろくに相手してない？ じゃあ近くにいるだけで疲れるこいつを引きはがしたいだけってことにしといてくれ。

……もういつそ幽霊見えるようにしちまおっかな。

「ちなみに、なんで幽霊が見たい？」

「えっ！？ だって幽霊だよ！？ 道の生物だよ！？」

未知な。明らかに発音違う。

「テメエが死んだら何になる？」

「骨と灰！」

……………。

「霊体の方、魂の方は」

「幽霊っ！ 人魂っ！」

え、別物って考えてるか？ あーでもめんどくせえしほっとこ。

「幽霊はどんな感じだと思う」

「人の形！」

「そう言う事を聞いてんじゃねえよ。性格とか、その辺」

「んー、おとなしいのとドロドロンなのと、とにかくいろいろ！」

ん、そだな。ドロドロンの意味が分からんが。

まあ、なんとなく聞いてみただけだけ。

「そんなのを一言でまとめて言う」と

「面白い！」

馬鹿。

「鬱陶しい」

「ええええええっ!？」

耳に響く……。超音波とどっちが上かな。さすがに超音波まではいかねえか。

「と言う訳で見ないでいられることに感謝しろ」

「ええーっ、何か納得できなァい!」

幽霊同等に鬱陶しいなこいつ。

「……声だけ聞こえるようにしてやる。その上で見たかったらまた言え」

「ええーっ、今すぐ見たいよォ!」

いや、絶対後悔するから。本当に。

「じゃあこれも無「これだけでいいです!」ん」
扱い方が分かってきたかも。

んーと。……耳の中と脳の一部だけに霊力を移せと? うあ、普通に通にやるより面倒。

「じゃ、ちょっといじくるぞ」

「へ? 何を?」

「説明面倒」

「新しい四字熟語でしょうか」

あー、それでいいや。

「ひゃわっ!？」

「うっさい」

「ゆ、指が消えた!? って言うか、りりの中に入ってる!？」

「五月蠅いと言うに。っつか、どうやって見てる?」

「あそこの鍋に映ってるよ」

あ、そう言う事。……片づけろよ、鍋。

「ん、終わり」

「え、これだけ?」

「……これだけって言うけど。すうつげえめんどくせえ事してたから。俺がパズル得意じゃ無かったら数時間かかってるから」

「うっそオ!？」

嘘をついて何になる。うあ、疲れた。

「んじゃ帰れ。耳に響くつつか、もう頭にも響く」

「はあい♪」

今日の分、明日に伸ばそ……。予定伸ばすとか好きじゃないけど。

オマケ

やったやった! りりってば幽霊の声聞こえるようになったちゃった!
た!

いろいろ聞こえるな〜っ♪

『ぎゃああああああっ』

『おらおらおらあっ! 水攻弾ッ!』

『ちゃんと心臓あたりを狙え。無駄打ちするな』

『いーだろ別に。弾切れするわけじゃあるまいし』

『……クスリ、かける』

『やめええええい! 振りまくなっ!』

『……じゃあ』

『よ、よし。氷の槍なら許可……』

す、すっごく怖いよオ……。

176 おかしなモンには手を出すな

「で、やっぱ怖いから見たくねーって？ あ、聞きたくねーか」
「うう……うん。なんなの水攻弾って！？ 心臓狙えって！？ クスリって!？」

死神トリオ……あ、死神はいっぱい出てきたから最凶トリオに改名。に会っちゃったのか。

「というわけでやっぱ聞こえないようにお願いっ！」

「いや、オレに言われてもどうすりゃいいか知らねーしなー」

あたしの方見ても、あたしだって知らないから。

忍です。

「何でっ！？ 何で……えと、お兄さんは出来るのに高山くんできないのオ!？」

純兄の名前知らなかったんだ。

「んーと、にーちゃんはほれ、異常なんだ」

岳、その言い方はどうかと。

「あゝ」

そこのピンクも納得しない。

あ、ピンクって、着てた服がピンクだったらピンクって言いまして。
た。

頭の中ではありません。

「りりってばお兄さんに会いたいんだけど……何処に居るのオ?」

『寝てます』

「ええっ!? 絶対早起きする人だと思ったのに!？」

ぴーんぽーん、大正かい。

いつも無駄に早起きしてます。稀に二度寝。

「え? でもまだ十一時だぜー? オレだったらまだ寝てたい時間

……あ、何か急に眠くなってきた。朝の変な味のお菓子のせいかな?」

何変なものに手え出してんの。

「お休みー。でも寝るなら布団へゴー」
ほっとくけど。

「あーいあーいさー」

うあ、本当に眠そう。

「え、え、え、止めないのっ!？」

「床で寝られるのも邪魔だし」

「……………不思議一家だね」

そうかな？

父…野草オタク&変な話を即興で作る

母…怖いと言えば怖いかもしれない

兄…よー分からんが色々な意味で異常

岳…元氣

光…料理異常

「そうだねー、まともなのあたし位じゃん」

「りりはお姉さんも含めていったんだけどねっ!」

え？ あたしも？ どこが？

「んでー、どするの、ピンク」

「りり!」

「どするの、りり」

「どするって？」

んー、だから。

「1. このまま諦めて帰る、2. 午後に出直してくる、3. 純兄を
たたき起こす」

「3で!」

よしよし、分かってるなこの子。

「起っきろーっ!」

「起っきてーっ!」

「やだ」

起きてるじゃん。

「あのあのっ！ これ、聞こえないように……いきなりいった。」

「んあ？ あー、だからやめとけって言ったのにー」
純兄眠そー。岳は熟睡中。

「え、あのー、まさか戻せないとか……？」
不安そう。

何をしてた最凶トリオ。

「すうっげえ時間掛かる。戻すの」

「すうっげえ？ って、どれ位？」

「んー、まあ、最長コレくらい」
パー。……じゃないよね。

「五分？」

「まさか」

「五十分？」

「舐めてんのか」

「ご、五時間……？」

「五日」

『ええええええっ！？』

「というわけでまあ、残念だったな。ちなみに俺はやる気なし」
いやいやいや。ほっとくなよ。無責任な。
あたしには関係ないけどさ。

元はと言えば、幽霊みたいとか言って靈力に手を出したりりが悪い。

これでよし。

………いいのか？

177 兄をシメよう

「にーちゃんが壊れた」

「変なのは前からじゃ無かったかな」

「光に言われたかねーと思うけどな」

一応常識人かも知れないかもしれない人だった気がしないでもないのねー。

あ、自分で言っていて意味分かんなくなった。
忍でーす。

最近純兄が人間離れしたことをするようになったのでちょっとした会議を開きました。

会場、あたしと光の部屋。

純兄は隣の純兄と岳の部屋で勉強中。純兄がよっぽど集中してなかったら聞こえるんじゃない？

その辺は一応考慮して小声だけど。

「壊れたトコその一。何か変な穴開けてた。おかげでオレの机はきれいになったけど」

何か必死に片づけてたもんね。何があった。

「壊れたトコその二」。なんだか靈力操れるみたいだね」

りりは結局どうしたんだろうねー。

「壊れたトコその三」

「え、ほかにあったっけ？」

一応あるよ。

「がり勉」

『あぁ』

おお、納得した。

前はテスト前しか勉強して無かったのに、夏休みに入った途端急にし出した。

「でもそれって受験生だからじゃ……」

はれ？

「なっくんもいつもよりやってるらしいよ？」

『おかしいのはねーちゃん（お姉ちゃん）の方じゃね（ない）？』

え。

あはは。

うん。

「それはまあ置いていて」

「置いとくべきなのか？」

「置いとくべきじゃない気がするね」

置いといて。ちゃんとやるから！ 歴史が嫌でほっぽってるんだ
けどもん！

……ダメじゃん。

「話戻すよ！ で、いったい純兄はどーしたのでしょーか」

『うーん……』

「あ、あれじゃね？ ほら、妙羅がにーちゃんに仕事手伝わさせる
とか言ってたじゃん」

『あ（ゝ）っ！』

それだ。絶対それだ。

そのついでに妙羅が何か変な事吹き込んだな！

「その仕事は全部放置してるけどな」

『ぎゃあっ！？』

「……………」

何か反応してよ。怖いよ？ 無言で部屋の入口に立たれても。ね

え？ 純兄。

「ん。そう言う事だ」

『どう言う事！？』

説明足りん！

「何で小声で話してたのに聞こえたの！？ 壊れたトコに追加っ！
地獄耳は元からだからー………んと、超絶地獄耳！

「え、あれ小声だったのか？」

……あー、うん。普通に話してたね。
小声のこの字も無かったね。

「と、とにかく！ にーちゃん説明！ こないだはもやんされたかな！」

もやんされたて何さ。

「えー」

『えーじゃない！』

「んー」

『んーでもない！』

あ、この辺も壊れてきたかも。隙なかったのに。見つけらんなかっただけな気もするけど。

「……ん。企業秘密」

『何の企業だよ！』

十五にして仕事人間とかよしてよ？

……うー、あたしまだ十四なのに何で純兄は十五なんだろう。
幼稚園の時の疑問がぶり返してきた。いや、分かってるけどねー、分かってるんだけどね。

「んー、死神のという事で」

「やっぱり人間離れしてる！ どうしよねーちゃん！」

「よ、よし。まずは妙羅をシメるところから始めよう！」

「無理だから」

やる前に諦めるのは……何だっけ。

「んじゃ説明寄せ〜！」

ビシッ……と決めてるのに口調でいまいち決まらない光ちゃんでした。

「え」

『えじゃなあああああい！』

もうこのループは面倒になってきたので純兄をシメる事にしました。
た。

……あれ、何か無謀な事してる気がする。

「ん、ん、ん。よし」

おー、抑えられた。両手片足で抑えられた。

「岳、大丈夫？」

「鳩尾入った……」

ドンマイ。

「んで、誰をシメるって？」

『ごめんなさい』

「よし」

あっさり。

「って、おーい。説明は」

「次回」

言っちゃいけない事をさらりと言ってた気がする。

178 壊れた原因

「と言う訳で説明してもらおうよ！」

と言う訳、が分からない方は前話へお戻りくださいませ。
忍でーす。

「んで？」

「いや、だから説明しろって！ にーちゃん何で故障したの？」

「人をロボットか何かみたいに言うな」

え、でも手が故障したとかって言うじゃん。

「口で説明しろと？ めんどくせえ」

『そこめんどくさがらない！』

「……よし、別の奴に聞いて来い」

『誰にっ！？』

「開く」

おー、あたし達三人の真下に真っ黒な大穴が……え。

『何するかっ！』

壊れたところをさらに追加ーッ！

「行てら」

『行てらじゃなあああああい！』

と言う叫びもむなく、あたし達は落ちていくのでした。

……………気分はお結びころりんのお結び。

「……あ、しーねえたーにいひーねえ。何、干されてる」

「干されてねーよ！」

気が付いたらでっかい木にぶら下がってました。気分は布団。

下では何やら斬が何か口に出したくない色々なものを広げています。頭の中の警戒警報が五月蠅い。

「とりあえず降りよ？」

この木、でかいくせに下までしつかり枝がある。変なの。

「……しーねえって、猿？」

『うん』

こらそこ、失礼なと言うな。

木登りに慣れてるだけだ！……あれ？猿って褒め言葉だった？

「岳と光も早く降りといでー。足場大量にあるでしょ」

「飛び降りてキャッチしてくれるって言うのは無し？」

「岳は百パー無理。光は………んー、やっぱ重そうだしやめて」

「女の子に重いとか言っちゃいけないんだよ」

「はいはい。あたしも女の子ですが？」

「……で、何しに来たの」

「にーちゃんが壊れた」

「じゅーにいい？昨日も会った。壊れて無い」

昨日『も』？

「純お兄ちゃんが何かねー、色々変な事できるようになってたから」

「……変な事？」

「一、何か変な穴開けてた。物しまえるようなの。」

二、霊力操ってた

三、オレ等を変な穴に落っことしてここに飛ばした……あれ、こ

こ何処？」

「森」

いや、そりゃ見たら分かるよ。

「……世界の事？なら、霊界」

『何処だよ！』

「……現実世界と幻想世界の間の現実的世界と幻想的世界の間の小さい世界」

げんそうてきせかいとげんそうせかいのあいだのげんじつてきせかいとげんそうてきせかいのあいだ？

『ややこしいわっ！』

「現実世界と幻想世界のド真ん中」

幻想世界ってどんなのだろう。世界の位置について考えることは放棄しました。

「霊界ってことは幽霊も居るの？」

「……幽霊は冥界行特急列車待ちのだけ。居るのは死神、神、死神か神候補生、妖怪、オバケ……その他諸々。」

冥界行特急列車って。特急列車って。おい。

「オバケと幽霊は違うの？」

「オバケは生まれた時からオバケ。幽霊は何かが死んだモノほえ。」

……あれ、何か本題がどっかに行ってしまったってけど。

「でっ！ にーちゃんは結局どーなったんだ？」

あ、岳も思ってたんだね。

「……何も変わってない」

「んじゃさっきの壊れたとこ一、二、三！ は何なんだ？」

『壊れたとこ一、二、三！』？ 幼稚園児向けの歌の曲名みたい。

「二、三……死神なら誰でもできる」

兄が死神になりました。……ごろ悪い。

「何でにーちゃんが死神見たくなってんだよ！」

「死神、感染する」

『病気か！？』

感染症！？ 怖ッ！

ミイラ取りがミイラになるようなもの？ あれ、何か違う？

ミイラの奥さんがミイラになるようなもの？ 怖ッ。

「……そのうちしーねえ達も死神に……」

なりたか無いです。

「んじゃ、にーちゃんは死神が感染して死神になったと」

「……うん」

『多分』じゃなくて『うん』なんだ。

「……ちなみに、いつからなってた？」

最近じゃないの？

「……………」

あれ、おーい。この沈黙何！？

「……最初から」

『はあっ！？』

御冗談を。

「本当。最初に会った時、死神だった」

うっそだー。

「斬くん。死神って、どれ位でうつるの？」

「半年から一年……」

あ、原因絶対妙羅だ。

五年の時絡まれて困ってたのなんだのうんぬんって言ってた気がするし。

「あれ？ だったらあたし達もうとっくになってるんじゃない？」

「じゅーに、普段は人間。たまにしか死神しない」

へえ？

純兄も死神したら和服着るのかなー？

「……そう言えば、四年くらい前にじゅーにいっぱい見たって。

未理阿が……」

記憶力良いんだねー未理阿。あたしから盗んだものも覚えてるのかな？ ってか覚えとけ。

「あ、そだ。一つ質問」

「……………」

「壊れたところ一、は？」

「……………ミユウの血でも飲『怖いこと言うなっ！』……でないと、そうはなら……あ」

あ？ どした？

「……うん。妙羅が飲み物に混ぜて飲ませてた」

あ、言い切りやがった。

「お姉ちゃん！ 純お兄ちゃんが吸血鬼になっちゃった！」

「騙されただけっぽいから落ち着いて」

「……便利だから、いい」

そこ、開き直らない。

はい、調査結果。

純兄が壊れた原因Ⅱ 妙羅

死神感染させるわみゅうの……んと、うん。とにかく。元凶あい
つだ。

「まあ、原因分かってよかった……のか？」

『……………』

「うおわっ！」 「わっっ」 「おあっ」

「ん。お帰り。分かったか？」

斬に送ってもらいました。出たところは純兄の真ん前でした。思
い切り体打ちました。

もっと優しくやってくれ。

「色々なーちゃんが大変だった事は分かったかも」

「ん。そか。……あ、そだ。これ付けとけ」

ミサンガ？ あ、多分これ純兄お手製。

黒い紐で編まれてて、透明な石がついてて、その中で赤いのと黒
いの靄がぐるぐるしてる。

めーがーまーわーるー。

「何コレ。ミサンガについてる石高そう」

反応するのそこ？

「売るなよ？ 死神感染予防のミサンガ。なりたかねえだろ」
何で分かった。エスパー？

「分かったー。ちゃんと付けとくー。でも何で今更ー？」

「なかなか石が手に入らなくて。見つけてもやたら高えし」
あ、やっぱ高いんだ。

「一応四年前から探してたけど」

……絶対それ無くすなよってアピールだね！？　そのこあい微笑み消して！

「ねー純兄。妙羅に何か変なの飲まされたって……」

「ミユウの血は別にまずくなかったけどな。人間と違って」

あー、発言もおかしくなってきた。

「……………お姉ちゃん！　純お兄ちゃんが吸血鬼に！」

「ならねえよ」

179 凄いらしい

「お兄さーっんこっちら、どっちら」

何の歌だろう、これ。

忍でーす。

お風呂あがりで涼しいです。

「おにーさん居るー?」

「お前の『おにーさん』って誰を指すんだ?」

「あたしは純兄以外に兄さんいないよ」

「鬼じゃねえのか」

聞き間違い?

「忍あがった? 純、次入る?」

「後でいい」

「じゃ次入ろ」

「おとーさん今日は早いね」

「うん」

道草食ってなかったんだねー。

家のおとーさんの場合本当に道端に生えてる草食ってんだから困る。

いくら野草美味しいからって……ねえ?

ちゃんと公園の水で洗ってるとか言ってるけど……そういう問題じゃないでしょ。

「ん、俺ちよつと行って来る」

「どこに?」

「どういう訳か死神どもに押し付けられた仕事」

純兄が仕事人間になっちゃったあっ!?

しかも何か妙羅に限定されていないのは何故っ!?

オマケに自分も死神だよねー。

「行ってらっしゃい。夜食作っとくから遅く帰ってきてね」

「違うだろ、それ」

「え、何でおかーさん普通にしてるの？」

「え、だって今まで何千回とあったことだし」

「何千とあってたまるか」

「冗談だよ。何百回とあったことだし」

あれ、純兄が否定しない。

「嘘」

「ホント」

「おとーさんは？」

「知らないよ」

よく気づかれなかったね。

ってか、よく気づかなかったね。あたし達も。

「でも純も開き直ったね」

「昨日教えたし」

「あらら。そうなの」

「うん」

「行ってらっしゃい」

「ん」

行ってきます位言おうよ。

行ってらっしゃい。

「何で二階上がるの」

「人前で死神になるの嫌なんだって。可愛いね。家族なのに」

可愛いかな？

死神になる、の方は見てみたいけど。

「忍も可愛いよ」

「突然そう言われても」

「あはは」

困るだけだって。

「何作ろうかな」

「おにぎり希望」

「……食べる気満々ね」

そりゃもちろん。

「あたしも手伝うからさ」

「ならよし」

おほか食べたいな。

……あ、ところで。

「そういえばさー。死神って給料あるのかな」

「そりゃあるわよ」

ですよねー。

じゃないと妙羅とかどうやって生活してるのさ。

「この家の貯金一部は純のお給料なもの」

嘘お。

危うくせつかくできたおにぎり落とすところだったよ。

「死神のお金って円なんだ」

「宝石」

………え。

「質屋で売ったら凄いのよ」

近所に質屋何てありましたでしょうか。

「一回で諭吉さまが十人くらい」

死神って給料いいんだねえ

「霊界の質屋ってすごいのよ。円でもドルでもユーロでも何でもアリ」

霊界に質屋があるんだ。

そりゃたしかにすごいかも。

………どんな世界だよ霊界。

180 頭が頭が

「明日は日曜日!」

「119番へ。救急車へ」

凜、いきなりその反応は何だ。

吾輩は父である。

名前はまだ無い。……酷くね?

「お袋、ボタン今間違えた。110番押しただろ」

「あはへ、間違えたへ」

「本気で通報するな!」

「冗談だよ」

冗談で通報しないでほしい。

「で、何があった?」

「明日は日曜日!」

「お袋、やっぱ通報しよう」

こら純!

「ほいなへ」

ほいなじゃなあいつ!

「何でそんな反応ばかりする!」

「明日は木曜日だし」

「日曜日はもうちょっと先だし」

日曜日であってほしいから日曜日と叫んでみただけだろう。

「……………純、何をしている?」

「こうすれば頭も冷えるだろ」

「首に直接氷を当てる奴があるかっ!」

冷たいから気持ちいい。と言う前に何だか痛い。

「保冷剤だよ。貴重な氷をわざわざ使うもんか」

皆が使うからすぐ減るもんない。氷。

「何か馬鹿にされた気が……」

「気のせい気のせい」

「そうかなあ……。」

「お袋、冷却ジェルシートってあったつけ」
「絶対馬鹿にしてる！」

「残念ながら」

「残念じゃねえよ。」

「……あ、氷嚢ならあったんじゃないかな」
「本気で探しに行かない！」

「氷嚢何て家で見たことねえんだけど」

「うん。無いな。ところでいい加減保冷剤どけて」

「ヤ」

「ヤじゃなくて。」

「無かったよ」

『やっぱり』

「代わりに湯たんぽなら見つけたよ」

「温めてどうすんだよ」

「冷やしてどうすんだよ、と言いたいけどねお前の親父は」

「いい加減冷たさで頭が痛いんだけども？」

「で、頭覚めたか？ 明日は木曜日であって日曜日じゃねえの。お
け？」

「おけ？ って数年ぶりに純の口から聞いたなあ……。」

「日曜日であってほしいなと言う切ない願いにこんな突っ込みをし
なくてもいいと思うんだけどね」

「まだ覚めてねえのかな。目に保冷剤突っ込んでやろうか」

「やめんか！」

「痛いから！」

「はふう。おはよう」

「忍、いきなり入ってきてトンデモナイ事言わないでくれ。」

「まだ日付も変わってねえから」

「おはよう。早く寝なさい」

「んー？ にいちゃんまだ起きてるの？」

「にいちゃん？ 初めて聞く言葉だ。」

「何の夢を見てたのか激しく気になるけどとっとと寝ろ」
「気になるんだ。うん。おとーさんも気になる。」

「んー、残念ながら目が覚めた。と言う訳で純兄何か相手して」
「数独するか。競争で」

「絶対負けるじゃん。あたし」

「囲碁」

「ルール知らない」

「俺も知らん」

「なら言うなよ。」

「親父の頭の矯正」

「よしやろう」

「おいこら。矯正するようなとこなんか無いよ。」

「で、どこがおかしくなったの？ どこのネジが飛んだ？」

「ネジが飛んだとか言うな！」

「おとーさん。明日は何曜日？」

「日曜」「純兄どうやって強制し」って言いたいけど！ 木曜日！」
「ところで忍。」

「どこから話聞いてた？」

181 プールでもやるよ

「修也！」

「……？」

「どっちが長く潜ってられるか競争な！」

「ガキ」

「あゝあゝ！？」

岳だ。ガキではない！

「何でいきなり潜り競争なんだよ」

「んじやいつも通り追っかけっこで。よーいどん」

潜る。逃げる。

さーって。どこに逃げたら捕まりにくいかなーっと。

やっぱ人の多い所だよな。

後はでっかいビート版の下に潜るとか。

お、でっかいビート版めっけ。上に一人のって、二人で引っ張っ

……って、あれ？

光たちじゃね？

「怖いよっ！ ひーちゃんはーちゃん戻してよう！」

美代が壊れてる……。

「ダメー！ 水になれないとー」

「そうだよっ！ ほらほら、たのしーよー！」

こいつ等、鬼？

それとも思いやりのある優しい友人？

オレ的には前者に見える。

だって、二人とも無駄に笑ってるし。

「岳ッ！」

「修也あっ！？」

ヤベ。捕まるまでもう五メートルねーじゃん。
逃げないと。

翔、ナイスだ。教えてくれてどーもあんど。

そーいや古閑いねーな。地区違うしなー。

さてさて。どう逃げよう。

「捕まえた……ッ！ お前、泳ぐのは遅いな」

修也が速いんじゃないの？

でもなんかムカつくから言い訳……。

「オレは武闘派なのっ！」

「……関係無くね？」

思いつきで言ったんだから関係なくてあたりめーだろ！

「何を威張ってるのか知らんが威張るな」

あた。ぶたれた。

「口には出してねーじゃん！」

「威張ってたのかよ！」

「知らずに殴ったのか!？」

「無論だ」

無論かよ！

「テメーこそ威張ってんじゃねえっ！」

喧嘩だ喧嘩！

流石に顔面殴ったら（だって水から顔と肩くらいしか出てないし）

まずいかなーと言う訳で、オレは必殺奥義。水鉄砲を使う！

……必殺奥義ってついた割にシヨボ。とか思った奴！

これだって結構強えんだからな！

目なんかに入ったらしばらく反撃不能なんだからなっ！

そんな都合よく入るか？ オレを舐めんな。コントロールには自

信がある！

「とりゃ」

「フン」

ああっ!？ ずっこい！ 水ん中潜りやがった！

「こら修……ゴボッ」

足払いすんなあっ！

ああもう、プールとか海って嫌い！

自由に身動きとれねーもん。

人間は陸で生活する生き物だっ！

魚捕るときゃ釣竿使うの！

「プハッ！」

「ほんつとに水ん中だと遅いな」

「テメー水泳でもやってたんじゃねーの？」

「ちよつとしかしてねえよ」

してたんじゃねーか！

「キャッ！ 修也君カッコいい」

「何この漫画的展開」

「知らん」

「知つとけよ。自分の事くらい」

あれ、何かさっきの言った女子、隣の子に何か言われてる。

何々？

「あれのどこがいいんだか」

オレも思う。激しく。

182 プールで酔う

「わお、岳が逝っちゃってる」

「いつもからかってる子にからかわれた上に遊ばれて疲れたんだって」

倍返しされたんだね。

忍でーす。

明日はきつと雪なので石油ストーブでも用意しといてください。

なぜなら、あたしが今日は勉強しかしてないからだよ！

ちなみに石油ストーブなのは節電のため。料理もこの上でしてみたら？

「水はもう見たくもない」

「今君の髪から落ちたのは何かな？ 水滴じゃない？」

ちゃんと頭拭いた？

短髪でどうやって濡れたまま帰ってくるの。

「んじゃ、そう言う事で」

「どう言う事？」

何だろ。

岳が、酔った時の良雅くん父りようがみたい。

良雅くんって、山口の幼馴染の一人ね。

良雅くん父凄いいんだよ。酔ったらとことん変な事言い続けるんだから。

「あのさ、あのさ」

「どのさ？」

「うー」

本格的に良雅くん父だあ。

「どした？」

「岳が良雅くん父化した」

「……酒でも飲んだか？」

「飲まねーよ！」

あ、普通に突っ込んだ。

「何処が良雅くん父？」

「さっきまでそうだったんだよ」

「ちゃうもん、ちゃうもん」

あ、またおかしくなった。

「良雅くん父ほどでは無いけど……変だな」
「ね？」

なつくんとはーちゃんにも見せたい。

「お帰り」

「あ、母さん居たの？」

「あはは。ぶっ飛ばすよ？」
怖い怖い怖い。

「ごめんなさい殴らないで」
ペコリ。

あら、治った？

「お詫びにふんどし奢るから」
治って無かった。

「いらねー」

「らね」

「ね」

ザ・木霊。

それはともかく。

「岳どうしたの？」

「プールで疲れたの」

「んで酔ったの」

岳、自分で認めた……。

「ベットヘゴ」

「ゴーゴ」

「早く行きなさい」

「アイアイサー」

ごん

あ、壁に頭ぶつけた。

どたっ

あ、階段に躓いてこけた。

「なぜだー」

前をちゃんと見てないからだと思います。

がん

「ぎゃああああああつ！」

あ、足の指ぶつけた。

小指じゃなくても痛いよね。

「何かすうっぱー階段に喧嘩売られてる気がするからもうここで寝る」

「邪魔だからやめろ」

「えー、じゃあにーちゃん運んで」

「絶対やだ」

絶対までつけなくても。

「んじゃねーちゃん」

「体格的に無理」

もう岳ってあたしと十センチも変わらないしー……。

何か行ってて腹立ってきた。

「と言う訳で、てい」

「痛っ！？ 何で!？」

「イラッて来たから」

「なーんでなんで、なーんでなんで」

「もっかい蹴ったるか」

「ご勘弁を」

じゃあさっさと酔いから覚めなさい。

183 最初の話題なんて次第にどこかへ消えるもの

「しのぶちゃんひかりちゃんたけるちゃんじゅんちゃん、せみとりいこー!」

忍でーす。

菜美の発音が大分しっかりしてきました。

「何でお兄ちゃんたちが後なのかな? 菜美ちゃん」

「にゃんとなくっ☆」

にゃんとなくこの子は強くなりそう。

「神谷網持ってきたんだっ!」

「神谷、蟬は手で捕れるよ」

え? 捕らない?

「網使いたい」

その気持ちは分かる。振り回すの楽しいよね!

……あれ、違う?

「兄ちゃん達は?」

「岳お兄ちゃんはお友達と遊んでくるって。純お兄ちゃんは……」

……お姉ちゃん知らない?」

「台所に居たよ。アイス食べて……あつ、今の無し」

『食べよう!』

今の無しって言ったじゃん! いや、効果ないだろうなとは思ったけど。

次に冷凍庫開けたらアイスなくなってるかもしれない。

よし、食われる前に食うべし。どっかで聞いた誰かの教え。誰だっかなあ。

「純兄ちゃん食べていい?」

「なみもなみも!」

「私も」

あ。食われる前に食うべしの前に食われたら意味がない。

自分で言っというてなんだけど意味分からん。今の言葉。

「あたしの分残しというてよーっ！」

『残念でした〜』

「はぁっ!？」

もう無いとでも!？」

「大人気ブドウ味は売り切れで〜す〜」

「金取るの?」

「取らないよ〜。頭固いなあ〜。石頭だな〜。殴っても痛くない〜?」

何か酷い言葉の羅列が聞こえる気がする。

「って痛い痛い痛い。こら光、叩かないの」

「だってお姉ちゃん岳お兄ちゃんたまに殴ってるじゃん〜」

「それはともかく」

「話変えないでよ〜」

いやだって。それよりアイス食べたいし。

……本当にブドウ味無くなってる。

でもっ。あたしは見た!

昨日、おかーさんが美味しそうなチョコアイスを冷凍庫の奥深くに隠すところを!

カップのと箱入りのコーンアイス。

カップはとったのばれるからコーンアイスだね、やっぱり。

「じゅんちゃん、ちょーだい!」

「あ? 菜美も今食ってるだろ」

「じゅんちゃんのもたべたい! そっちのほうがいいでしょ!」

菜美……何で分かった。

純兄の食べてる、んでもってあたしも今食べようとしてるコーンアイスが数十円高いことを!

買ったのあたしじゃないから多分だけどね。

「何でそう思う?」

「いちごかにくはいってるもん! チョコレートだもんっ! ぱり

ぱりのチョコのなかにアイスクリームのチョコはいつてるもんっ！」
菜美、どうやって調べた。

純兄はお行儀の悪いことに立って食べてたからコーンの中見えな
いはずなのに……。

「えへへ、なみ、はないいのー」

鼻がいいとかいう問題じゃないでしょ！

そういえば。蝉取りはどこ行った？

184 カナカナくん

「居たよー。そーっと、そーっと……」

しーっ。大っきい音立てないでね。

忍でーす。

蟬を取りに、雑草やら蜘蛛の巣やらのせいであまり散歩したくない散歩道に来ています。

散歩道としてどうなのこれ。

「えいっ！」

「とれたとれたー！ カナカナくん」

カナカナくん？ カナカナ……と言えばヒグラシ？
んえと。

「菜美、これアブラゼミ」

「カナカナくんってなまえなの！」

こじつけ！？ それとも捕る前に決めてたとか？

「あっ！ あそこにも居るよカナカナくん！」

「アブラゼミ全部のあだ名ですか！？」

「うん」

そこであっさり頷かないでほしい。

「ちがうよ。せみぜんぶ」

さらに範囲広くなったあっ！？

「それよりっ！ 早く捕らないと捕られちゃうよあのカナカナくん」

「どこ？」

「あそこ！ あの小っちゃい木！」

あ、あの大きい奴。

「捕られちゃうって？」

「カマキリ！」

あー、カマキリに食われちゃうって？

「ジジジジジッ！」

「あ、捕られちゃった」

あらら。

でもめったにカマキリのお食事シーンなんて見られないよねー。

「もういつそカマキリ捕まえりゃいいだろ」

「純兄暇そうだね」

「ん？ いや、カナカナくんなら五匹くらい捕った」

純兄までカナカナくんって……。

「その取ったカナカナくんは？」

「そこ」

ん？

「カナカナくんのびんづめー」

「響きが怖いからやめなさい。入れるなら虫取り籠へ」

「えー」

えーじゃなくてっ！

「だってだって、むしろこんなんだよ？」

……忘れるのってさ。覚える事より難しいって誰かが言ってた。

でもあたしは今見たものを忘れたいんだけど。全っ力で！

「何で蝉でぎゅうぎゅうになってんの！？」

「いっばいとれた！」

「そりゃ見たら分かるけどね！ 何匹か離そ！？ ね！？ なっち

ゃん……お母さんびっくりするよ！？」

「うー。わかったあ」

よしよし。

「お姉ちゃん。せっかく何匹入るか試してたのに」

「お前が原因かつ！」

「集めるの大変だったんだよ」

よくぞ集めたと褒めてあげたいけどさ。

「忍姉ちゃんっ！ あそこあそこ、捕って！」

「どそこどそこ」

「木の上！ 高い所。神谷登れないから、捕って！」

誰かがすでに上ってるけど。

凄いなー、四階建ての建物くらいの高さあるのに。いや、あたしも登れるけど。

「ジジッ」

「よしやつ！ 修也捕ったぜ！」

「じゃ、頑張って片手で降りて来い」
って、岳達じゃん。

「ええーっ！？ 虫籠こっち投げろよ！ 蟬入れて落とすから！」

「だめっ！ 生き物は大切にするんだよ、高山！」

あ、あの古閑って子結構いい子だねー。
そして翔。空気化してるね。

「岳お兄ちゃんー、何してるのー？」

「へ？ あ、居たの？ カナカナくん捕りだけど。自由研究の材料調達とも言う」

カナカナくんって、流行ってるのかな……じゃなくて！
自由研究に何をするつもりだ！？

「違うよ、工作の材料調達でしょ」

工作に何を作るつもりだあつ！

「馬鹿。工作の見本調達だ」

ああ、やっと安心できた。

「何作るの？」

「カナカナくんの木」

よかったね、やっと喋れたね、翔。

「カナカナくんのき？」

……木にカナカナくんが生ってるところを想像してしまった。
怖っ。

185 困ったの

「お兄ちゃん」

「あ？」

「困ったの」

「へえ」

「困ったの」

「ふうん」

「困ったの」

「ん」

「困ったの」

「やかあしい。」

「純だ。」

突然光が入ってきたかと思ったら……いや、別に思ってたわけじやねえけど。いきなり『困ったの』を連発してきやがった。

「困ったのお」

「そか」

「うん。困ったの」

「ん。忍にでも聞いてもらえ」

「忍お姉ちゃん裏山行ってるの」

「何故に。」

「食べられる木の実の話おじいちゃんから聞いてね。一人で探しに行ったみたい」

「暑さで脳が溶けたか？」

「……でも、食える木の実見つけんならその気の場所教えてもらおう。俺も食ってみたい。」

「困ったの」

「そこに戻んのかよ」

「困ったの！」

「岳は？」

「カナカナくんの木作りに翔くん家に行ってるよ」
「何でこんな時に限って居ねえんだよ。」

「こ・ま・っ・た・の」

「妙羅」

「妙羅はダメ」

「ちえ。」

「未理阿」

「未理阿ちゃんもダメなの！」

「霧瑠依は？」

「死神軍団ダメ」

「む。」

「夏」

「なつくんもはーちゃんもお出かけ中」

「ほんとに、何でこんな時に限って居ねえんだよ。」

「おふく……あ、仕事か」

「そう。だからお兄ちゃんしか居ないの」

「ちえっ。」

「あのね」

「俺は聞くとは言ってねえ」

「聞いてよ！」

「はいはい」

「あのね」

「聞くとは言って「戻らないの！」」

「わあったよ。聞けばいいんだろ？」

「聞くだけだけど。」

「で？」

「私のね」

「うん」

「大事なね」

「うん」

「宝石ちゃんがね」

「うん？」

「家出しちゃったのー！
は？」

「宝石が家出？」

「そう」

「生物でないモノが家出したのどうこうの前に宝石持ってたのか」
「持ってたよ。たまにお店とかに置いてある何の石が入ってるか
分からないドキドキな箱のやつ」

「ああ、あの数百円で売ってる、持ってるのと被ると何か落ち込む
やつ。」

「なんとなく金を捨ててるような気がするアレか」

「酷いなく。そんな言い方ないでしょ」

「忍の持ってた、土を削ってパーツ取り出して組み立てる恐竜の化
石もどきは面白かったけど」

「話が全然違う方に曲がっちゃってるよ」

「人間の会話なんてそんなもんだ」

「そんなもんにしないでよ」

「んで。何の話をしてたっけ。」

「話戻すよ？ 宝石ちゃん探してー！」

「やだ」

「即答ー！？」

「めんどくせえ」

「こんな時にめんどくせえ病ならないでよ」
「ん？ これ病気なのか。へえ。」

「まあ頑張っ探せ」

「えーっ。手伝ってよ」

「夏じゃねえんだからプランターの中にあったりはしねえだろ」
「当たり前でしょ。なつくんは失くすところがおかしいんだよ」

失くしたはさみが木に突き刺さってた事もあったな……。

「私が三分探して見つからなかったら一緒に探してね」

「ん。……って短っ。せめて一時間は探せ」

「えっっ！？ カップラーメンでできるの待つ三分は長いでしょ」

「全然違うだろ、そりゃ」

「間を取って五分ね、絶対だよ」

「どこが間を取って、だよ。」

「あったく！」

早っ。

「お兄ちゃん、プランターの中にあっただよ！」

「何でんなトコにあんだよ！」

三分後

「お兄ちゃん、あのね。また困ったの」

「自分で解決できねえ事か？」

186 猫がぼろん

「みにゃあーっ！」

「お姉ちゃん、猫ってあんな声もあげるんだね」

「うん、あたしも初めて聞いた」

「悲鳴っぽいけど何だか語尾がほのんってしてたよね」

「光に言われたくないと思うなあ……」

忍です。

北側にある和室でゴロゴロと日陰ぼっこ、何て響きからして不健康そうなことをしてたら悲鳴らしき猫の鳴き声が聞こえてきました。

「にゃーっ、にゃーっ！」

「お姉ちゃん、白猫ちゃんが来てるよ」

「んー？ あ、クロだー。久しぶりに見たなあ」

訂正しよう。久しぶりに会ったなあ。

『忍ちゃ、忍ちゃ！ 早く来！ 緊急事だっ！』

『クロ、その一番最後の音言わないの意味わかりにくいからやめよ？』

『むむ。そ？ むむむ……やっぱりこの口癖やあめたっ！ ……』

……って、そうじゃなあああい！』

口癖ってそんなにあっさり帰れるものじゃないと思うんだけど。

「お姉ちゃん、こんな叫び声も上げるんだね。ぎにゃああああああって」

怖いな、この叫び声。

『ミルクが大変なんだっ！ 穴にぼろん』

『何かその効果音違くない？』

んでもって地味に怖くない？

『そんなこと言ってんじゃなあいっ！ いいから早く来るっ！』

「と言う訳で光、ちよっと思ってる」

「分からないよ。にゃにゃにゃって二匹の世界に行かないでよ」

あたしも匹で数えてるっ!?

「何かミルクって猫が穴にぼろんしたらしいから、猫助けしてくる」

「穴にぼろんく? 首でも落「言うなっ!」」

グロイ!

「あははく、行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

裏山、しかしどこの裏なのかは分からない。別名謎の山。

その入口付近。獣道だけど。

『穴にぼろんって言うより穴にころん、だね。これ』

足を折りたたんで、あおむけに転がって……って。何で猫なのにそんな状態で落っこちてんの。

『忍ちゃんは聞き間違いが激しいな。ちゃんとミィはころんと言ったぞ』

そーだっけ?

『あ、忍さんこんにちは』

『こんにちは、ミルク。まだおはようの時間だという事は黙っとくね』

『黙ってないではないですか』

黙っとくと言ったら黙った事になるんだよ。って、誰かが言ってた。誰だろう。

『んで、大丈夫ー?』

『ひっくり返って落ちてる時点で大丈夫ではないですよ』

『そっかー。どっか折れてない?』

『大丈夫です』

よかったよかった。

さて、どうやって穴からだそう。

いや、あのね。ミルクの落ちた穴がね。やったらめったら深いのよ。

オマケに猫なら落ちれる、もとい入れるだろうけど人間じゃ無理だね。

「ややつ、これはこれは忍殿！」

「これまた久しぶりだね、一も法師。八つ橋買えた？」

「……？ …………ッ！」

何、何？ 何か考え始めたと思ったら、思い出したような顔して。
「拙者は爺婆に頼まれて八つ橋を買うために旅をしているのでござつた！」

「今まで忘れてたとか」

「いや、それが、道に迷ってしまつて」

まだ迷ってたの！？

「……弟がね、修学旅行で京都行くんだって。その時に勝ってきてもらおうか？」

「マジッ!？」

侍な恰好で『マジッ!？』って……似合わないね！。

「うん。だからさ、この穴の中に落っこちてる猫助けてくれる？」

「猫？」

ぴよこつと穴の中を覗く一も法師。

「こつ、これはっ!？ ミルク殿！」

『忍さん、この人だれですかぁ?』

……すっごく、一も法師がかわいそうに見えた。

187 誕生日と誕生日？

「菜美ー、お誕生日おめっと」

「おめっと？ おめん？」

「ごめんなさい、ちゃんと言います。おめでとう。」

「忍でーす。」

蜂蜜にレモン汁入れただけの蜂蜜レモンをプレゼントとして、ハッピーバースデー言いには仙波家へ突撃してみました。

「あっ！ 忍姉ちゃん！」

「あ、神谷もおめでとー」

「……神谷、誕生日明日なんだけど……」

「いや、いっぺんにやった方が豪華粗品貰えるでしょ？」

「豪華な粗品。あれ？ 豪華でもないけど。」

「とまあ、美味しいよー。水で溶いて飲んでもいいし、かけすぎるとぼたぼた落ちるけどパンにかけてもいいし」

「わあっ！ 嬉しい！」

と言ったのが二人の母親ことなっちゃんというのはどうなんだろう。

「丁度ジャム切らしてたの。ありがとう、忍」

一番喜んでるのがなっちゃんと言うね、なんだか達成感が無い気の状態になってるけど。

まあ感謝されてるしいいや。

「しのぶちゃん、あそぼ！」

「うんうん、遊ぼっ！」

あれ、あたしはプレゼントじゃないですよー。

とか言いつつ遊ぶけど。いや、言っていないけどね。

「何しよっか」

「ぶんぶん！」

「羽音？」

「ぶんぶんってするやつ！ ほら、んと、ぶんぶん！」
考えたけど結局変わつとらんじゃないか。

「んー、とりあえずぶんぶんってすればいいよね？」

「うんっ！」

んー。とりあえず持ち上げて。うわ、軽っ。流石四歳なりたてホヤホヤ。

「行くよー」

「おー！」

とりやつ。

壁やら柵やらに当たらないように気を遣いながらも振り回してみる。

「きゃああっ！」

怖かった？ ……って顔笑ってるよこれ。

「神谷もっ！」

「はいはい。そんな訳で菜美、交代ねー」

「どんなわけー？」

どこで覚えたその返し。

あ、あたし等の会話か。

「こんな訳ね。はい神谷ー」

持ち上げて、うわっ、重っ。流石六歳一日手前の男の子。

「ほーいじゃ行くよ」

「おおーっ！」

うん、声もでかい。

とりやつ。

振り回すのは菜美ほど簡単じゃない。

ダイエツトを考えている女性の皆様！ きっとこれ痩せますよー。

「子供達ー！ おやつだよー」

『ケーキ！？』

「ケーキは夜ね」

じゃああたしは食べられないのか。チエツ。

188 発散っ！ したい

「純兄、もうすぐお盆じゃん？」

「ん。嫌な時期だな」

「……幽霊いっぱい帰ってくるから？」

「稼ぎ時ではあるけど」

「仕事人間発言やめい」

いつの間にか仕事人間になった、俺は。

純だ。

「で、何が言いたかった。今のか？」

「ううん。もうすぐ山口の方のおばあちゃん所行くじゃん」

「うん」

「前住んでたところじゃん」

「うん」

「皆に会えるじゃん」

「うん」

「楽しみでなんとなくどっかで発散させておかないと暴れちゃいそうで」

「裏山でも駆け回ってこい」

「冷たっ」

夏にはちょうどいいだろ。

「ん……じゃあその楽しみは組織液にでも溶かしとけ」

「何故に組織液」

「今理科やってたから」

血液中の赤血球に含まれている、酸素と結びつく物質の名称を答えなさい……。

ヘモグロビン、と。

「純兄って妙なところで単純だよな」

「そうか？」

「うん。どうでもいいところも言う」

「どうでもいい所ならいいじゃねえか。」

「で、発散できたか？」

「ううん。まだまだ」

「外走ってこい」

「疲れるからやだ」

「それでいいのか中学生。」

「……まあ、俺が言われたとしても同じように答えるけど。」

「と言う訳で、会話ダメなら発散できる何か教えて。疲れない奴」

「どういう訳でそうなった」

「こういう訳」

「……絶対ここで聞き返したらループするな。」

「八朔でも食えば？」

「無いよ。旬でもないのに。いくら発散と八朔が似てるからって食べるだけで発散できるわけじゃないでしょ」

「楽しみを発散させたいとかなんとかいう割にドライだな。」

「八朔は昔は今くらいが旬だったらしいけど」

「過去形でしょ。全くもー、お兄ちゃんってば」

「突然呼ばれたことのない呼び方で呼ばれても引くだけだぞ」

「光には毎日呼ばれてるのに」

「光とテメエはまるで違うから」

「どういう意味だろ」

「名前からして正反對。いや、忍は全然忍んでないけど。」

「光もある意味ズレてるような気がするけど。」

「ね、どこら辺がまるで違う？」

「全てにおいてって言うてもいいかもしれない」

「そこまでじゃないでしょ。例出してよ」

「例？ めんどくせえ。」

「あー、そだな。服の好みとか？」

「そっかー、光よくスカートはくもんね。服装とかどうでもいいっ

て思っ て無いの、光とおかーさんだけじゃない？
確かに。

「それテメエは仮にも女子としてどうなんだよ」

「仮にじゃないんですけど。本当に女子なんですけど」

「そこはまあ置いといて」

「置いとかないでよっ！」

じゃあそこらへんに捨てて。

「他にはあれだな、料理がまともか変か」

「ホントに置かれた！？」

「いや、捨てた」

「捨てないでよ！」

そういえば最近光料理してねえな。平和でいい。

……嵐の前の静けさ、何て縁起でもないこと思い出した。

「ちよっとー？ 聞してるー？」

嵐なら今日の前に居るか。

「発散できたか？」

「忘れてた。ねえ、どうやったら発散できる？」

……聞くんじゃないかった。

189 じえんが

『ああ〜っ!』

がつしやあああああん

「また光の負けー」

「むう〜」

岳だ!

押し入れに、ニンジンとサツマイモの甘煮が抱えるように入ったジェンガを発掘して遊んでみる。

もう、光の弱いなの。今までの最短記録、三ターン!

「光、時間かかっていいから慎重にやろっ」

「うん〜。ありがとう〜、お姉ちゃん〜」

……何でこっち睨んでんのかな? 光さん?

「べ〜」

あっかんべーとかする奴すっげー久しぶりに見たなー。

「で、まだやんのか?」

『当然っ』

「そ」

なんだかんだでにーちゃんも楽しんでるし。

崩れる度に毎回毎回一人で黙々と組み立ててるけど。

「んじゃ、みんぎりまあわり」

あ、にーちゃん一人負けー。

こういう時さ、自分からできるのはいいけど負けてるからちよつと微妙な気分になるよな。

「ん」

「次私だね〜。岳お兄ちゃん〜、今度は絶対負けないんだからね〜」
笑ってるくせに目が笑ってねーとこあいよ。

あ、ちなみににーちゃん、光、ねーちゃん、オレの順……って今更だけどオレ最後じゃん。

「行くよ」

ぐらっ

「はうっ!?」

二回目何だから流石に崩れやしねーだろ。

「うう」

「ほら光、ゆっくりゆっくり」

「うん」

そおおおおと

がっしやあああああん

『早あ!?!』

最短記録! 一ターン!

「うう」。私見学にする」

「えー、やろうよ、光も」

「見学なの」

ねーちゃん、光が居たら絶対負けねーからってのが理由じゃねー
だろーな。

「で、やんのか? まだ」

『もちろん!』

「そ」

だんだん組み立てるスピードが上がってきてるなー、にーちゃん。

「みんぎりまあわありっ」

よっしゃ、オレ一人勝ちーっ!

こういう時はかなり嬉しいよなっ!

「よし、あえて一番下の端っこ取ろう」

「え。更なる最短記録を作ろうとでも?」

「ちげーよ!」

さっきから普通の所ばかり取って面白くなかったからな。

たまには。ていっ!

「よっしゃ! 目標達成! 後は野となれ山となれ!」

「山にしかならなさそ」

そんなこたねーだろ。

「低い目標だな」

にーちゃん、そりゃねーだろ……って、

「んな事言いながらにーちゃんもうかたっぽの端っこ取ろうとしてんじゃん」

「ん。何か問題でも？」

いや、ねーけどさー。

「大ありだよ！あたしの時難しくなるじゃん」

「よし、やっぱり……」

「別のところしてくれるの？」

「このまま取ろう」

「って言うと思ったよ！」

思ってたんなら期待すんなよ。

「ん。まあ頑張れ忍。口先だけで応援してやるから」

「どうせなら心から応援してください」

『え』

「何で岳まで！」

いや、なんとなくノリで。

「頑張れー、お姉ちゃんー」

「うん。ありがと光。……ところで男子群」

まとめる必要がどこに。

「何でそんなにあたしの顔じいーつと見てるのかな？」

『やっぱ一番下を取るべきだろうというのを空気で表現してみよう
と』

表現になってるのかはともかく。

「よくそんな長い言葉をきっちりぴったり合わせられるね！」

ザ・兄弟の神秘。……いやいや、ないっしょ。

「えーっと、この最後に残った一番下のど真ん中をシュパツと取れ
と？」

誰もシュパツと取れとは言ってねーじゃん。

「ゆっくりでいいよ」

にーちゃん、微笑^{わら}っていう所じゃないと思う

「んな事したら絶対崩れるでしょうが！」

「そのために下を取ったんだから、な？」

「な？　じゃなあああああい！」

とか言いながら結局そこに手え伸ばしてんじやんか。

「一気に行くからね、倒れても大丈夫なように避けといてよ」

「手で払うよ」

動くのがめんどくさいと？

「オレは逃げる」

三步下がって一步前へ。意味は別にねーよ？

「とっ！」

……お？　………おお？

「やったッ！」

がっしやああああああああん

『……………』

何か、虚し。

190 お盆のおもちゃ

『今年もお盆が来ましたね』

『そおねえ、ニンジンとサツマイモの甘煮。ところでいい加減この長ったらしい名前は何かならないの？ めんどくさいんですけどお。あたしみたいになかったわいく短くてかわいい名前にしなさいよお』

あなたは名前の大切さが分かっていないのですね、ラビットさん。そして何気に『かわいい』が二つは言っているのは何故ですか ニンジンとサツマイモの甘煮と言う名の巨大なめっこぬいぐるみです。

なめっこと言うのはキャラクター名ですが、皆さん覚えていましたか？

『お盆つつつてもさー、オレ等おもちゃには関係なくね？』

『思いつき関係ないですね』

『んじゃ何でそんなしみじみと』

『今まで私は押し入れの中にしかいなかったのですよ！？ しみじみと季節の移ろいを感じていたのです！』

『ちよいちよい、ウサギ人形『ラビット！』へいへい……ラビット』
耳をつかめばいいのに……あ、ラジコンカーさんには手がありますんでしたね。

『なあにい？』

『お盆ってさ、季節か？』

『……………』

すみませんねっ！

はっ！ 何で私が謝っているのですか！

『勝手に謝ったんじゃないか、ニンサツが』

『ニンサツ！？ 忍者のお札みたいに言わないでくださいよ！』
自分で言って何ですけどこの忍者のお札ってなんでしょう？

『知るかよ』

『はあ……やっぱり光ちゃん居ないのは寂しいわねえ』

『突然何を』

光さん含め、このお家の方はお母様の実家に帰るとかでおやつの後に出発しました。

もっと早く出ればゆつくりできるのに、と思ったのは私だけではない筈です。

『そう言えば、ルービックキューブさんがさっきからずっと純さんの机の中で暴れていますね』

『出たいんじゃない？ 出してあげなさいよ、ニンサツ』

……一瞬、ニンサツでもういいじゃないかと思ってしまった自分が情けないです。

『動きますかね、この体』

『しばらく帰ってこないんだから、目いっぱい暴れましょっ！ 動く動かないは問題じゃないのよ！』

十分問題ではないですか。動けなかったら暴れられません。

『ほらあ、さっさと立つのよ！』

『ガンバだぜ。ニンサツ』

うつ……立つのです、ニンサ……ッ！？ 二、ニンジンとサツマイモの甘煮！

よいつ、しょ……っと。

『立てるじゃない。まっ、あたしほどきれいに立ててはいないけどねえ』

『ラビットさん、そろそろウサギ人形さんになりましようか』

『嫌よッ！ あたしのこのきれいな耳に何をするつもり！？』

つかむだけです何か。

『皺になったらどうしてくれるのよっ！』

『アイロンでもかけましようか』

『熱いじゃないっ！』

それはそれとして、ルービックキューブさんを出してあげましょ

うか。

『……………ルービック、生きてるの？』

引き出しを開けると、ただのおもちゃのように静かなルービック
キューブさんが出てきました。

……………あ、私もただのぬいぐるみでした。

191 お墓参りはお静かに

「おー、色々久しぶりだー」

「色々も何も墓しかねえぞ」

「いやほら、肝試しよくやってし」

お墓一周してくるの。結構広いからホントに出そうだったなあ。

いや、ホントに出てたんだけど。

「あまり感心出来ないがな」

「何故に妙羅さんがこんなところにいらっしやるのでしょうか」

「私の仕事エリアだからな。お盆は霊が多くて死神が一人一エリア任されるからサボれない」

真面目な顔して何を言うか。

普段サボってんのかアンタ。

「あーっ！ 高山家！ 帰っちゃったん？」

まとめたな、女の子……って。

「おおっ！ 皆の妹香ちゃん！」

「古」

にっこりばっさり。

枝里香ちゃん、たまに不思議な行動をすることからあだ名は不思議ちゃん、とは誰も呼ばないけど。

えりかって読めるけど、そう言ったら怒るので要注意ー。

でもよかった、あたしの方がぎりぎり背、高い。なんとなく香ちゃんに身長では負けたかない。

「香ちゃんもお墓参り？」

「ううん。墓参りは昨日したけん、暇つぶしに来ただけ」

暇つぶしにお墓へ？ やっぱ不思議ちゃん。

「ここ、空開けてるから好きなんよー」

入道雲がもくもく。あ、あの雲狸に似てるー。

「でも、予定変更！ 皆に帰ってきたこと教えちよくけん、後で来

いよ！ んじゃっ」

おー、足速い。

……あれ。

「にーちゃん、今香ちゃんどこに行けばいいのか言ってなかったよな」

「そのうち気付くだろう」

おお、あっさり。

「三人ー、水！」

『はい』

おばーちゃん元気だなー。何歳だったかは忘れたけど。

「返事は短くしいよ！」

『ん』

「……………」

あれ、なんでおばーちゃん黙るの？

短くしたよ？ 一文字だよ？ 一音だよ？

「わっ！」

『わあっ！？』

「やっほー。元気か者ども！」

『……………』

心臓に悪いのでやめてください、……………えっと。

「誰だったっけ？」

「酷っ！？ 皐月！さつき 水無月皐月！みなづき」

「ああ、順番が逆な奴」

「あいっかわらず口悪いな、純ちゃん」

あいっかわらず突然出るね、皐月姉。今大学生のハズなのに。

……あれ、浪人生だったかな。

「おりよっ、この可愛えのはまさか光たん！？」

「そうだよ」

おお、可愛いのが否定しない。いや、あたしも否定しようとは思わないけど。姉馬鹿？

「おつきくなつちよんなー。追い越されたらいかんな、牛乳調達させにゃ」

いったい何に調達させる気で？

「まずは牛じゃな」

『そっからか！？』

「ビバ★生乳！」

ダメだこの人。色々突っ込んじゃダメな気がする。

「と言う訳で、行きんさーい！　ゴー！」

今何に命令した、この人。

何か向こうの草むらでがさがさって音がしたけど。

「たけー！」

「おおおおおっ！　たく！　誰が竹だっ！」

「誰が宅版だ！」

『誰もんなこと言っただけっ！』

はいはい、息ぴったりだね。

会うたびにこんなこととして疲れないのかなー。

たくって、七草卓也って言うんだけど……何か岳と仲良かったんだよね。同い年だからかも。

……ところで、あたし等はわざわざ墓で何をやっとするんだ。

192 宴会だと思いたい

『かーんばーいッ!』

大人たちのあれは本日何度目の乾杯だろう。十回目あたりから数えるのやめたんだけど、やめるんじゃないかなあ……。

酔った人たちってなんか、何でもやりそうだね。

忍でーす。

おばーちゃん家の近所のオジサンの家で、宴会っぽいモノやっけます。

久しぶりーっ! みたいな感じで。

いろんな一家が勢ぞろい。

あたしん家でしょ、なつくん家でしょ、香ちゃん家とか皐月姉ん家とかその他諸々。

「純!? お前純か!? やべえ、オレ身長抜かれるかもしれん」

「良雅くん、何が入ってんだそのコップ」

良雅くん、そのセリフは何回目。

「酒以外に何があるんじゃない」

前にちよっと話に出した、酔ったらえんえんとおかしなことを言い続ける父を持つおにーちゃん。

父親に飲まされたのか単に不良なだけなのか。高校生のくせに酒飲んでる。百十番したるか。

「良雅くん、お酒は二十歳になってからって中学生の時は言っちゃったんに」

待て皐月姉、アンタが飲んでるそれはなんだ。どーみても酒じゃないか。

んでもってアンタは春に高校卒業したとこじゃなかったか。

だれか、百十番お願いします。

「じゅんじゅんが来ちようって!」

あれ、何か玄関の方ででっかい女の子の声が。

「おー、あれってもしかしてたっちゃん？」

「そういやたっちゃん、空手でちよつと遅れて行くって言っちよつた」

たっちゃんって……たしか、辰巳^{たつみ}ちゃん？

「純ちゃん、今年は負けちゃってよ」

「何に？」

「たっちゃん」

「何が？」

「純ちゃん」

「へえ、理由は？」

「あたいが見たいから」

あれ、皐月姉の一人称ってあたいだったかなあ？

去年来たときは俺だったんだけど。

あれれ？ 一昨年は確かあたしだったつけ。

……もうどうでもいいや。

「お断りだ」

『ええーっ！？』

「何故全員がそこでハモる！」

だって純兄がたっちゃんに負けるところ見たいし。

たっちゃんってね、毎年毎年、合う度に純兄に勝負しかけるんだよ。

空手とか柔道とかの勝負じゃないよ？ 喧嘩。

たっちゃんが空手やってるのはまるで関係ナシ。ほんつとに単なる喧嘩。

「じゅんじゅん覚悟おっ！」

「たっちゃん、落ち着け。先ずは家帰って空手着替えて来い」

「ふふんっ、着替えならこの鞆に入っちよる」

そこは果たして胸を張るところなのでしょうか。誰か教えて。

「分かった分かった。んじゃ風呂借りて、シャワー浴びてから着替えて来い」

「手順が一つ増えちよらん!？」

「分かったらさっさと行く」

「うーっ、自分が戻ったら勝負じゃよ？」

「ほいほい」

「おじちゃん! お風呂借りるけん!」

「はいはい」

タオルとかはどうするつもりなのかな、たっちゃん。

「にっしっし、純! よくやった!」

「あ？」

「お前、あれじゃろ? たっちゃんの風呂見とおてシャワーせえ言
つたんじゃろ?」

もしもーし、たっちゃんは小学生ですよ、確かに六年生だし多少
……んと、まあええとー

「皐月姉、弟さん潰す。おけ?」

「許す!」

「許されなくてもやるけどな」

じゃあなんでわざわざ聞いたの、純兄。

「ちよおおおお待てえっ! 姉貴! そこんとこ許すな! こい
つの潰すってどーゆー意味か分かつちよぐはあっ!？」

分かつちよぐはあ? 何か新たな日本語を聞いた気分。……に
はならんな。

「痛いわッ!」

「痛くしちよんじゃろ? 純くん、ウチもロリコン潰し参加しても

……」

「おけ」

「よしやっ!」

あらら、香ちゃんまで参加してる。

「えーい!」

「あー、香ちゃんならいっか……」

皐月姉の弟こと文月^{ふづき}くん。

……んと、変態としか言いようが無いなこりゃ。

「純くん、ウチ、家からハンマーか何か取ってくる!」

「ってちよい待ち! ハンマー!? そんなんで殴られたら洒落に

……あ、行っちゃった……」

香ちゃん、まさか本気でハンマーで殴ったりしないよね……?

「純、アホか! 潰すちゅったらやっぱ酒じゃろ!」

「テメエの将来はアル中だな」

「誰がアル中じゃ!」

間違いないじゃないでしょ。多分。

『あああああああっ!』

「何!? どしたの!?!」

『今日って花火しないといけないんじゃないの!?!』

きれいにハモるね、小4組。約五名、光&はーちゃん含む。

「ほら、送り火!」

「ご先祖様帰ってくんでしょ!」

「花火花火!」

「打ち上げ花火万歳!」

「線香花火万歳!」

一番最後の、地味ッ!

あたしも線香花火好きだけどさ。でもやっぱりねずみ花火の方が面白いなあ。

『何言っちゃよん。花火は明日じゃろ』

『そうだっけ』

『そうだよ』

ハモりとハモリの会話。すげー。

「じゅんじゅんやるぞ!」

あ、たちちゃん戻ってきた。

「文月くん、潰しちゃうね!」

あ、香ちゃんも戻ってきた。

すっげー可愛い笑顔浮かべて。ハンマー片手に持って。怖ッ。

……今思った。

まともな人、居なくね？

193 吹き出し花火とか線香花火とか

「夏だーっ！」

「花火だーっ！」

「送り火だーっ！」

何かがずれているような気がしないでもないような気がしないでもないような気がしないでもない。

自分で言っておきながら意味が分からん。

純だ。

「んじゃっいただきます！」

『なんでじゃ！？』

花火食うのか。流石姉御……じゃ無かった、皐月姉。

「細かいことは気にするなと教えただろ野郎ども！」

『すいやせんでした！ 姉御っ！』

何だよ、この小芝居みたいなモノ。

「分かればよろしい」

まあ、多分突っ込んだら負けだな。

「それじゃあこれよりー、花火大会を始めろっ！」

「あー、すいやせん姉御、とっくにみんな始めちゃってます」

「ええっ！？ あたい置いてきぼり！？ 龍城^{たつき}、吹き出し花火は！
？」

誰だよ、龍城って。

「一m吹き出すのと二m吹き出すのと五十m飛び出すの、どれかい
いっすか？」

急にとんだな。ってか、

「吹き出し花火だからってそんなに吹き出すわけ無かる！？」

あ、皐月姉に先に言われた。

「あー、あれですね。花火作ってるトコが間違えてc入れ忘れたん
すね。じゃあ、五十“c”mで」

そんなミスしていいのか？

「よしっ、点いたあっ！」

ぶっしゅわあああああああっ！！

どんな音が済んだよこの花火。

つか、ええと。

「本当にコレ五十m吹き出してませんか」

花火やってる空き地が広くてよかったーで済むような状態じゃ…

…。

「ちょっと改良を加えて……」

「改良？ 悪くなってるのにどこが改良ですか。これ」

「多少危険でも一応ほら、やっぱり書かれたとおりにしておいてあげたほうがいいでしょう？」

龍城、怖えな。

「そもそも改良ってどうやって？」

「えー、そこをちょちょーつの、ほいーつの、パッ！ つすよ」

「分かるか！」

「短大でこーゆー事学んだんすよ」

「……………」

どーゆー事教えてんだ、こいつの短大。

「それが今の警察の仕事にまるで役に立たなくて、ちょっとストレス発散？ まあそんな意味でちょっとやってみやした」

「ちよっとやってみやしたじゃないですよ！ ってか、は？ 警察！？」

「え、それが何か」

こんなのが警察で大丈夫……突っ込むのやめた。めんどくせえ。もう何か色々ぶっ飛んでる気がする。

「あれ、お前こんなとこで何しとつと？」

「しかも後ろから声聞こえてくるし、背後霊でもついてるなら今すぐに叩き潰してえなー」

「おい純、何か危ない人に聞こえる」

誰が危ない人だ。

「誰すか、この人。お知り合いで？」

「龍城！　ちよっ、コレって……」

「あー、はいはい、今行きやす、姉御」

本とに、こんなのが警察で大丈夫か日本。……あ、突っ込むのやめたんだったな。

「んで、もっかい聞くんけどお前こんなトコで何しとっと？」

「テメエこそなにしてんだよ、忍？」

あ、忍って妹の忍じゃねえぞ。その忍は向こうでねずみ花火を回りに投げ散らかーいや、なんでもねえ。

「……あのさ、人の顔見てどっか見て、ほんでうんざりしたような顔になるのやめよ」

「その何処が出身かイマイチ分からん口調もやめろ」

「俺は福岡出身じゃよ？」

福岡の出身が何で山口弁を使うんだ。

「で、結局なんでここに居んだ。家は福岡……自称、だろ？」

「自称ちゃうわ。本とに「ループするから突っ込むな」ずっこ！」
事実だろ？

コイツは、一応死神やって知り合った俺みたいな状態のヤツ。
つまり人間か死神かよく分からんヤツ。

「友達ん家が山口にあんだよ。お前は？」

「婆さん家以下同文」

「……そこめんどくさがって何かいいことあると？」
時間の節約とか？

「んー……ま、いいや。それよりさ、せっかく現実世界で会ったんだし線香花火勝負でも」

「こっちは何でテメエが一人で空き地に居るのかを聞きたいけどな」

「散歩」

「あっそ」

「聞いたのそっちやろ。もっと興味持たんか」

「ヤ」

「あっさり言うなあ……。まあええ。早くやろ。ローソク何処にあると?」

「確かちようちんの中に」

「何で!?!」

さあ。

「ああ、でも妹がライターやらマッチやら持ってるのを没収したから」

ライターにマッチなんか文房具じゃねえだろ。

「それこそ何でや!?! テメーの妹はアレか、放火魔か!?!」

「人の妹に向かって失礼な。常に文房具を持ち歩く便利な道具箱だ」

「人間じゃなくなってるんじゃないか! それこそ失礼やろ! テメー妹を何やと思っとーと!?!」

「多少変だけど人間……。って、だからループするからやめい」

「ループの原因誰だよ……」

「テメエだろ?」

数分後

「やっと線香花火までたどり着いたな」

「長かった……」

「これと言うのもテメエが突っ込み続けるから」

「テメーがボケ続けるからじゃ!」

「落ちるぞ。勝負じゃなかったのか?」

「落ちんように左手はガッチリ固定しちよる」

左利きだったつけ。うん、まあそんな気もするな。

「ところでさー、お前兄弟何人居るん?」

「三人だけど。俺のぞいて」

「でもさー、あっきらかーに人数多くないか?」

軽く十人は超えてるからな。

「あつちで線香花火勝負してる男子共で、一人だけ中腰になってるのが弟。向こうでねずみ花火に追いかけられてるのが妹一号」

あれ？ さっきはねずみ花火投げてる方じゃなかったか？

「んで、歩道のコンクリに花火で落書きしてる奴等を半歩後ろから眺めてるのが妹二号。他は全部知り合い」

「ほー。……あつ、純の落ちた！ 俺の勝ちやな」

「ガキかよ、こんくらいで」

とか言いつつ人の線香花火の先っぽを揺らしてみる。

「あーっ！ 落ちた！？ テメーの方がガキやないと！？」

「はは、俺は負けず嫌いなんだよ」

「へー、じゃあお盆の間にどっちが多く冥界あつちに送る幽霊捕まえるか勝負しようや」

「負けず嫌いだけど面倒事の方が嫌いなんだよ」

「つごーのええ性格しちよんなこいつ！？」

だから何か？

193 吹き出し花火とか線香花火とか（後書き）

純くん、見た目年上の知らない人間には一応敬語を使います。

忍くん、名前が思いつかなくて百話で言った『名前が同じ男子』を使ってみました。

龍城くん、気が付いたら居ました。怖。

194 皆大好き肝試し！ 始まりの巻

「よし、皆居るかーっ！」

「イルカじゃないよ。人間だよ」

光、そこでボケたら話が進まない。

忍です。

毎年恒例の肝試しを……これからしようとしています。

去年は霊見えなかったからなあ。今年は大変そうだな。無視すればいいけど。

「はい、全員イルカ、もとい居るか確かめるためにせーのーでっ、で合わせて自分の名前を叫べ！」

果たしてそれに意味はあるのでしょうか、皐月姉。

「せーのーでっ、皐月！」

「忍」「光く！」（中略）「卓也あっ！」「文づぐぎゃあっ!？」

「龍城、と。全員居ますぞ姉御。ええ、一匹害虫が居たので潰しておいたので丁度っす」

こら。人を害虫扱いするな。あたしの事じゃ無いけどさ。

「でかした！」

そこも褒めない！

「でも純ちゃんが居らん事に気づけばもうちょっと点が上がったのに！」

点？

「毎年居ないので排除しやした」

排除って何！？

「今年は来るよう言ったんじゃけどなあ……」

って、毎年言ってるよね、皐月姉。

「いー加減夜の墓場に慣れんか純ちゃんは！ 肝試しもしないとかごんごんどうだ！」

「いらねっす。言語道断でしょ」

ごんごんって貰えるものなの？

「と言う訳で龍城、警察の権力目いっぱい使って連れて来い」
警察！？」

「あいよ」

『あいよじゃなああい！』

「大丈夫ですよ、返事だけっすから」
何かよく分からん人だな。

「それじゃ、肝試し一足先に始めちよこか」
やっとか……。

「はい、じゃんけんで順番決めて！」

『じゃーんけーんほい、相子でしょ、あーいこでしょっ！　しょっ
！　しょっ！』

（ジャンケンがなっがあああああいので中略）

「はい、んじゃ一番手、たく行って来ーい！」

「おうっ！」

行ってらっしやーい。

………、ええと、待ってる間に何しろと？

んとね、この肝試しはー。ま、普通にお墓一周してくるだけ。
ちなみに明かりはローソク一本。すぐ消えるから！

「ただーいまっ」

『早ッ！？』

「ふふん、五十m走七秒代じゃけんな！」

「七秒九九じゃんな！」

香ちゃん……。何で知ってんのって顔してるんだけど、たく。

「ただいまだぜーッ」

「はい次たっちゃんじゃね」

いつの間にか岳も行ってたし。

「じゅんじゅんは！？」

そういえば喧嘩してなかったね、まだ。

「あーはいはい、じゅんじゅんならたっちゃんが戻ってくるころに

来るよー」

「……ホント？」

「ホントホント」

おお、あっさり行っちゃった。簡単だなあ。

「姉御、純、連れて来やした」

この人凄い。この龍城って人凄い。

「臯月姉、こいつ何。警察って答えが聞きたいんじゃないじゃねえよ？
城って答えも駄目」
龍

純兄の手首に手形がくつきり。

握力何？あるんだろう。

「便利な子」

「子って年齢じゃないだろ」

同感。

「じゅうんじゅうん！！」

おい、戻って来るなりとび蹴りですか？

「たっちゃん、テメエスカート穿いてる事覚えてるか？」

「あっ！？」

ストレートに言うねー。純兄も。

「次、はーちゃー……あれ？　おい、はーちゃーん」

「お兄ちゃん！　肝試し怖いでしょ！？　ウチが一緒に行ってあげるから！　ほら！　時間短縮のためにも！」

「怖くねえよ！　怖いのはおめえだろ！？」

「こここ怖くないもん！」

どっからどー見ても怖がってます。

「行ってらっしゃい」

コラ光、そんなにニコニコして手を振ってやるな。

「ひーちゃあん！」

「はっ、はーちゃん！　満みちると行こ！」

あれ、満ちゃんも怖がり……だからか。

「ええーい！　もう四人で行って来おい！　はーちゃん、満、光、

夏、いいね!」

『何で俺(私)まで(ゝ)!?』

「面倒だから!」

……純兄のめんどくせえ病って皐月姉からうつったのかなあ。
んと、えー……つづく。

195 皆大好き？ 肝試し！ になってるか？ の巻

「怖いよー怖いよーひーちゃん怖いよー」

「ねー、満ちゃんー。それって私が怖いって事かなー？」

「こんに……間違えた、こんばんは、忍です。」

「いったい何がどうしてこうなったのか、純兄と一緒に光、はーちゃん、満ちゃん、なっくんをビデオで撮影しています。」

「えー、もう一度言います。何がどうしてこうなったのでしょうか。皐月姉にやれて言われたからだけだね。理由は分かってるんだけどね。」

「ひーちゃんは何でそんなに落ち着いてられるの！？ お墓だよ！？ 夜だよ！？ お化けとか幽霊とか妖怪とかあとえー……とにかくそんなのがぶらぶらほっつき歩いてんだよ！？」

「不良か、そいつら。」

「そんなところを土足で踏み荒らしちよんよ、満達」

「墓に土足で来るのは当たり前だろ」

「純兄、一応隠れてるんだから小声にしてよ。激しく同意するけども。」

「ねー純兄、なんであたし達二人でやんなきゃいけないの？ これ」

「皐月姉に聞け」

「皐月姉ー、なんでこれ二人でやるのー？」

『きゃあああああッ！』

「え？ 何？ 何かあったの？」

「はーちゃんー、満ちゃんー、どうしたのー？」

『あれっ！』

二人の指差した方を見ると……んと、

「ん、あんまんだな」

「どこが悲鳴あげるポイントなのあれ！？」

『ちっちゃな幽霊が出たあっ！！』

ちっちゃすぎるだろ。

「大丈夫だよ、ほらほら、パクツ、もぐもぐ、ごっくん。ほらね」

『ひーちゃんが呪われるうッ!』

「罰当たるぞ、ひーちゃん」

「なっくんも食べてるじゃん」

お供え物食うなッ! 罰当たる前に腹壊すわ!

「全く、問題児だらけだな。さっさと行くぞ」

お前も問題児の一人だろうが!

「わ、凄いやあそこのお墓。コーンスープがお供えしてある」
どんな家だよ。会ってみたいな。

「ひーちゃん、このスープ固えぞ? 茶わん蒸しじゃね? これ」

「スープ皿なんだけどな、これ」

しかも平たい。

「ますますその家の人に会ってみたい」

「おい忍、よく見ろ、墓の名前」

ん?

“ 枝里家 ”

「なるほど」

「な」

なんつかよく分からんけど納得してしまった。

「二人ともッ! 早く行こうよッ!」

「ただでさえ怖いんじゃけえ、祟られるかもーっ! なんて余計に

怖くせんといてよ!」

そもそも人ん家の墓に勝手に入るな。

「おー、はいはい」

「早く行こ」

早く行こ、って言われてたのはアンタだ、光。

「じゅわうううん!」

「あ?」「ん?」

あれ？ 背後から何か声が。

背後から、すうっごい恨んでるようなこっわあい声が。

「てんめえ仕事サボるとはどういうこっちゃ！」

「何か訳の分からんことに引き込まれて」

龍城……さん？ どうやって引き込んだんだろう。

「この真面目くんのくせして、サボるとはどう言う事だ！ 俺に仕事
事が回ってきたやんけ！」

関西の人？ にしちゃ標準語も混ざってるなあ。

「にしても……純兄、仕事も真面目くんなの？」

「『も』って何だ、こら」

だってえ。夏休み入ってからほぼ毎日勉強してるし。

……あ、しなきゃいけないのか、受験生。えー。

「お前、家でも真面目くんなんか？」

あ、何かすっごい呆れたような顔してる、この人。

「だから、『も』ってなんだ、こら」

『だってえ』

「だってじゃなくて。何しに来た、忍」

「あたしいちやいけないの！？」

軽くシヨックだよ！？ しかも今来たわけでもないのに！

「……妹ちゃんも忍っていうと？」

あ、忍ってこの人の事か。

「ああ」

「ふーん、よろしく、忍ちゃん！」

ニパーとか言う効果音つきそうだなー、この笑顔。そして胡散臭
いなー。

「え、あ、よろしくです」

で、この人は結局何しに来たんだよ。

「忍、結局テメエは何しに来たんだ」

「あ、そうそう。てんめえこの、真面目くんのくせに仕事サボると
はどう言う事じゃあああああっ！」

楽しそうだね、怒鳴るの。

「ん。妙羅は何て？」

「部隊長なら座布団枕にして寝てる」

……何だろ、想像するのが難しい。

って言うか部隊長って何の部隊長？ それって偉いの？ いや偉

いだろうけど。妙羅の態度からして。

「流石置物。そのままゴミ捨て場にでも捨ててやれ」

「おう。……って違う！ 早く来い！」

「んー。何処？」

あ、すごいめんどくさそう。

「ずっと東の方じゃ、オラ行くで！」

あのさ、さっきから思ってたんだけど。この人どこ出身？

「……わあったよ」

「えーっ、ちよつと、皐月姉達に何て説明しろと！？」 純兄行っち

やったら……」

最後まで言う前に行かれちゃったよ。

「お姉ちゃん！ ついて来てるんでしょ？ 早くおいでよ！」

うー……まあ、いっかあ。

196 皆大好き肝試し！ 最後なのに腹黒の巻

「上に一反木綿、前にのっぺらぼう。左右に子どもに、後ろに火の玉……ねえ」

龍城さん、冷静じゃけど……。

何じゃの？ このカオスな状況。

香じゃよー。

肝試しに、良雅くんの弟ちゃん妹ちゃん連れて回っちよんじゃけど……。

幽霊に遭遇。おまけに囲まれちゃった。

……どうしよう。このオバケ達で遊んでみたいんじゃけど。

「龍城さん、どうしよ」

「龍城でいいっすよ」

でも年上じゃもん。

「たつきいー、オバケって本とに居るんじゃねっ！」

「かおりいー、帰れるよねっ？」

帰れるよ。オバケに対してどんな想像抱いちよるん？ 聞いてみたいじゃないか。

「ところで香さん、やっぱり火の玉って熱いっすかね」

「そりゃ熱いじゃろー。仮にも火じゃけん。熱なかったら似非火の玉じゃ」

オバケだから実態なくて熱さも感じませーんっ！ って言うんならちやうじゃろけど。

「たつきいー、熱くないねっ！」

「かおりいー、意外とこいつ固いんじゃねっ！」

似非火の玉じゃったんか。

「んっ」

しかも龍城さんの裏拳であっさり撃退されちようし。

「弱っ」

「笑顔で向こうにとつちやぐさりと来そうな事いいやすね」
あは。

「龍城さんも、触っただけじゃ自分に害が及ばんってわかった途端
思い切り殴っちゃよね！」

「バック取られたら殴り倒したくなるんすよー」
わお。

「こっちからは殴るけど絶対殴られたかねえんすよー」
腹黒なんかなー？

「前の上のも撃退出来る？」

「撃退はしねえっすよ。捕まえるだけで」

「あーっ！ 分かった、何か使えることに使う気じゃろ？」

「御名答ー」

腹黒じゃねー。

「ゆーきいー、たつきもかおりもこわいものなしだねっ！」

「そうだねなつきいー、あこがれるねっ！」

こうして腹黒予備軍が出来ました。

うーん、火の玉はまあ、間違はなく明かりじゃろ。熱くないんじ
やったらコンロの代わりには出来んし。

一反木綿はー。うーん。後で考えよ。

のっぺらぼうは普通にお手伝いさん出来そうじゃよね、だって顔
がないだけで普通に動いちゃうもん。

「さて香さん。一反木綿どうやって捕まえやしよう」

ありゃ、のっぺらぼうぐるぐる巻き。簀巻き。海苔巻。食べたい
なあ……。あ、のっぺらぼうをとちやうよ！

「一反木綿ウチ任せ？」

「自分が頭使わなくていい時はお休みさせとく派っす」

「そしてどんどん馬鹿になっていくんじゃね」

「寝る子は育つて言うじゃないですか」

「たつきいー、たつきのあたまのなかでは、おやすみⅡねるなんじ
やねっ！」

……あんな事言っちゃるけど、人がどうやって捕まえるか見るつもりなんじゃろうなあ。

どうしよう。

「その前に龍城さん、一反木綿って何か利用価値ありますかね？」

「あの木綿の体で家じゅうの拭き掃除してもらう、とかどうですか？ 他にも気に入らない奴の首絞めに行かせたり、あれに乗って空飛んだりとかもできるんじゃないっすか？」

「おおー、いいね、一反木綿。便利じゃね！」

「あっ」

「え？」

「たつきいー、いったんもめにげちゃったねっ！」

「かおりいー、ざんねんじやったねっ！」

……うん、残念。

「ところで龍城さん、火の玉って譲ってもらえる？」

「一千万ほどでいかがでしょう」

高い。

「かおりいー、よくかんがえなきゃダメじゃねっ！」

「かおりいー、おかねはだいじじゃねっ！」

「勇気くん、菜月ちゃん。ちよつとだまっちよつてもらえるかな？」

197 いざ、勝負っ！

「じゅんじゅん！ 今日こそいざ勝負っ！」

あー、毎回毎回なんだかんだで流されてたもんなー。
今日こそ勝負したいと。

あれ、最終目的が変わってる気がすんだけど？

岳だーっ。

「たっちゃん、道着替えて来い」

「勝負するために着てきたの！ これが一番動きやすいけん」

えー？ そうか？

ちよっとだけ着てみたことあるけど、重いし帯ちよっと苦しいし、
逆に動きにくかったぜ？

ごわごわだし。くどい？

「さあ観念するのだ純ちゃん！ 今日には逃げられんぞ！」

「誰だよ」

「臯月だよっ！」

それは分かっているとと思うけど？

「……………よししたけ」

「誰がよししたけどコラ！」

たく、いくらなんでも名前を思いっきり変えんのはやめい。

「違う！ よし、たけ。つつったんじゃ！」

何だ。面白くない。

「おいら達もやるぞ！」

「何を？」

「流れで分かれや！ 勝負っ！」

わー、いきなり殴りかかってきたあー。かーさん助けてー。
とか思いつつ避けはするけど。

「避けんなボケコラァ！」

「いや、避けんなって言われても……………なあ？」

「受けると言う選択肢があるじゃろ！」

「うーん。たっちゃんに空手の受け教えてもらおつか」

「素直に殴られるという選択肢があるじゃろ！」

避けれるパンチを何もしないでぼけーっと殴られる奴はマゾだと思う。

違う？

「じゅんじゅん！ やるぞ！」

「やんなきゃダメ？」

「ダメ！」

「じゃあやだ」

「くおらあああああ！」

何でそこで起こるのが皐月姉ちゃんなんだよ。

あれ、なんでオレあんな変……じゃなくて個性的？ な人に姉ちゃんつけてんのかなあ。

「たけ！ ボーっとしてたら当たるぞ！」

「へっへっへー。たく！ 足元がら空きだぜ！」

足払あい！

あれ、払ったはいいけど、こっからどうしよう。

まうんてんぽじしょん？ とかオレ知らねーんだけど。あれ、まうんどだっけ。

「じゅんじゅん！ もうじゅんじゅんが嫌でも行くから！」

……あのさー。たっちゃんって空手習ってる筈なんだよね。

なのにさー、今にーちゃん殴ろうとしてんの、まるで空手っぽくねーんだけど。

たっちゃんの中では、これ単なる喧嘩なんだな。

「とりゃっ！」

「ぐほっ！？ ちょっ、たく！ いまの鳩尾入ったぞ！？」

「入れたんじゃよ！」

ちい、よそ見してたらたくに鳩尾蹴られた……。

「たけるうー、ゆだんたいてきじゃねっ！」

「たぐやあー、いけいけー！　ねっ！」

うあ、二歳に注意された。

「ってか勇氣。油断大敵ってどこで覚えた!？」

「にいたんのことわざ辞典ねっ！」

読めるんか!？」

あー、あれだ。こいつは将来、超難関大学とかに受かったちゃうんだな。きっと。

大げさか？

「へへっ、たけ！　こっちには菜月が味方に付いちよんじゃ。大人しく降参せい！」

あれ、喧嘩ってこんなだったっけ？

「たぐやあー、なつきたん、どっちにもついちよらん、ねっ！」

「かんちがいやろー、ねっ！」

さいごの『ねっ!』って最初は可愛いと思ったけど、何かこう毎回毎回つけられるとイラッと来るな。

「たけるうー、たぐやちゃんぼつねっ！」

「たけるうー、かったねっ！」

いや、多分勇氣、菜月ペアが勝ったんだと思う。

「ううっ！　来年こそ勝っちゃうんじゃないけえ、覚悟しちよけよじゅんじゅん！」

「あー、ハイハイ。来年こそもう少し大人しくなっとけよ、たっちやん」

何か向こうで毎年恒例の言葉言い合ってたなあ……。

198 温泉だあっ！

「皆の者、温泉じゃ！」

「温泉だ〜！」

「温泉だあっ！」

「温泉じゃあ」

「温泉温泉！」

「温泉じゃね」

「おんせんー、ねっ！」

温泉温泉五月蠅いわ。

忍です。

言わなくても分かるでしょうが、温泉に来ています。

近所だけどね。徒歩三十秒だけどね。

うわ、改めて言ってみると近っ。

「さあ、準備はよいか皆の者！」

『お〜っ！』

「飛び込めーっ！」

『おお〜っ！』

さあ、誰が最初にあの、アツアツホカホカ気持ちいい大きなお風呂にダイブするのかーっ！ って、

「飛び込むな馬鹿がっ！」

『えー』

あ、そこはちゃんと止まってくれるんだ。

「飛び込むのは体洗ってから！ おけ？」

「今日のお姉ちゃん純お兄ちゃんみたい〜」

純兄が飛び込むことを許可するようなこと言うかなあ？

いや、純兄はこう言う事痛い目見るまで言わないかな。

「しのぶうー、ポンポンきれいきれいしたらとびこむねっ！」

そうして下さい。

「菜月ちゃん、頭も洗わなきゃダメ」

小四組メンバーその四、麗美^{れいみ}ちゃんことれーちゃん。お姉さんだ！いや、何かよく分かんないけどこの中で一番お姉さんだと思う。

あれ、何か負けた気分。

「そうそう、頭の中身も洗わなきゃダメ」

何を言っとなんだこの小四組メンバーその五、愛弓^{あいみ}ちゃんは。

「誰が早く体と頭洗えるか競争じゃよ！ よーいどん！」

よーい、の所で何の用意をすればよろしかったのでございましょうか。

「いっちばん！」

「皐月姉、おっとなっげなーい！」

たっちゃんに大人げないとか言われてるぞ皐月姉。いいのか？

大学生として、浪人生かもしれないけどそれでいいのか！？ 別

にいいんだろうな、この人だから。

「ぼぶぼぶー」

「菜月ちゃん、動かんちよって」

「そうそう、カチコチになって！」

菜月ちゃんは凍らされてるのか？

「はーちゃん、楽しそうだねー、あの全身泡だらけー」

「そうだね、やったげる！」

「あ、満も手伝うっ！」

「コラそこっ！ 石鹼の無駄遣いをしない！」

ボディーソープのボトル、空にするつもりか！？

『はぁーい』

うん、素直でよろしい。

「れいみいー、あいみいー、飛び込むねっ！」

「ダメ、静かに入るの」

「そうそう、どぼーんって行ったらごぼごぼってなって、チーンじ

やよ!」

効果音ばかり。最後のチーンって、おい。

「うー」

「菜月たん! ほら! あたいの胸に飛び込んで……目を逸らすな!
ちよっ、何でみんなして遠ざかってくん!」

いや、だってえ。

「ひかりいー、こっちろてんぶろ? ねっ」

無理やり『ねっ』てつける必要がどこに。

「そうだよ、行ってみようか」

「ひかりいー、こんよくってかいてあるよねっ?」

『読めるの!」?』

天才幼児だ。うん。間違いなく天才幼児だ。

「どうしよつか。混浴って書いてあるとちよっと……」

「そうそう、でれーつな男どもが居たらちよっと……」

愛弓、ちよっと黙ってここ?

「れいみいー、なつきさきいくねっ!」

「そりゃ菜月たんなら問題欠片も無いわな」

「でも、こんな小っちゃい子だけで行くのは危険じゃけん、ウチも行く!」

れーちゃん菜月ちゃん行ってらっしゃあい。

止めないよ? 別に。

「えっ!? 行くの!」?

「混浴の意味分かってる!」?

「知っちよーよ、そんなくらい!」

『言ってみ』

「大人と子供が一緒に入る!」

何でだよ!

『はいちよっと帰りなさい』

「え、でも菜月ちゃんが……」

もう行っちゃってます。

「はい、それではれーちゃんに混浴の意味を教えます」
「うん」

「男女一緒のお風呂！ 分かる？」

「ふええええええええ！？ あうあうあつ」

うわ、れーちゃんテンパってる。

ほんとにわかって無かったんだね……。

「あれ？ ところで香ちゃん知らない？ ねえ、忍ちゃん！」

あれ？ 居ないの？ 香ちゃん。

「知らないよ？」

「香ちゃんならさつき菜月ちゃんに付いて露天風呂に」

愛弓ちゃん、何故止めなかった。

「なら私も行こーっと」

「ええええええ！？ ひ、ひーちゃんが行くならウチも！」

「じゃ、あたしも！」

「満も、行こうかな……」

あれ。残ったの、あたしとれーちゃんだけじゃん。

「……れーちゃん、ほかのお客さんもないことだし素潜り勝負で
もしよっか」

「……うん」

199 またね!

「うー、もう帰っちゃうん?」

「もうも何も一週間以上居けど」

「いや純、そこはまだ一週間、じやろ」

忍です。

帰ります。もう後は新幹線待つのみです、はい。

「じゅんじゅん! 来年こそ勝っちゃうんじゃないけえ、覚悟しちよけよ!」

「あー、ハイハイ。来年こそもう少し大人しくなっとけよ、たっちやん」

あれ、このやり取り一昨日も見た気がする。

「はいこれ、途中でお菓子か何か買いね」

「わー、ありがとうお姉さん!」

「まーっ! 光ちゃん正直だからもうちょっとあげる♪」

良雅くんトコのおばさん単純だなあ。詐欺にあうなよー。そして何か光が黒くなったなあ。

龍城さん、光に何か吹き込みましたー? いや、仕事だとかで来てないけど。

「じゃあねっ、ひーちゃん! はーちゃん!」

「またねー、ひーちゃんは一ちゃん」

「次はお土産もよろしく!」

愛弓ちゃん、もう少しいい事言えませんか。

「忍ちゃん、純くん、またね」

「うん、香ちゃんまたねー」

「俺は!?! ねえ香ちゃん!?! 俺は!?!」

なっくん、忘れ去られてたね。

「しのぶうー、しんかんせんきたねっ!」

「かおりいー、しんかんせんじゃねっ!」

『のりたいねえーっ!』

勇気くん、菜月ちゃん。そんなきらきらした目でこっちを見ないでください。

「純、次来たときは酒飲めよ!」

「俺まだ犯罪者にはなりたくない」

「ちっ、んじゃ夏!」

「そだな、親しだ「夏?」いややっぱね! 俺未成年で飲酒はよかねえと思うのよ!」

秋さん、すげえ。

「先ずは秋さんを超えて来「良雅?」ごめんなさい俺もう酒やめますから!」

秋さん、すっげえ。

「はっはー! 情けないな二人とも! それでも男か!」

「皐月、貴女が一番問題ね」

あ、皐月姉逃げた。逃げるが勝ちとか叫んでるけど。どう勝ったんだろう。

秋さん、すうっげえ。

「早く乗らないと新幹線出ちゃうよ!」

あ、そうだね。

『またね〜! 満ちゃん、れーちゃん、愛弓ちゃん!』

『またね〜!』

「またな! たく! たっちゃん!」

『またな!』

たっちゃん、次会ったときに男勝りな口調になってたらどうしよう。どうもせんが。

『またね(な)、香ちゃん、良雅くん』

「またねー。純くんも」「またな。ほら純もじゃ!」

「ん。またな」

あー、新幹線のドア閉まる。ってか閉まった。

あれ、誰かにあいさつし忘れてるような。

「俺はっ!？」

ああ、文月くんか。

『ならいいや』

ああ、全員思ってたんだ。

うん、新幹線に乗ってない人たちも言ってたよ。

「ゆうきいー、しんかんせん、すごいねっ！」

「なつきいー、あっちもみにこうねっ！」

このほやうとしたかわいらしい声が聞こえた瞬間。
血の気が引きました。ここにいた関係者、全員。

200 アイスの力

「純兄ずっこい！」「岳お兄ちゃんずるい！」

「ん、ずるい。だから何」「別にずるくねーよ！ 早い者勝ち！」
この辺が違うんだなあ。

忍でーす。

ちよつと光と買い物行って、帰ってきたらなんと六本入りアイス……でもそのうち四本は兄妹四人で食べたから残り二本。が、消えてなくなっていました。

そこら辺に居た子供の霊により、その犯人は純兄と岳という事が判明した！

ちなみにその子供の霊は純兄に見つかった瞬間成仏した。オーラ
か何か出てるのかうちの兄ちゃん。

「むうーっ、食べたかったあー！」

「もう残ってねーんだから諦めろよ！」

「やだーっ！ 岳お兄ちゃんと純お兄ちゃんだけ食べたのが許せないー！」

あたしだったら許してくれたのか？ まさかね。

「食ーべーたーいー！ 食ーべーたーいーっ！」

見た感じ、おもちや屋の前でダダこねる幼児。うん、まだ四年生
だしね。九歳だしね。一桁だしね。

「あー、聞こえない聞こえないー！」

「岳お兄ちゃんの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿ーっ！」

「何でオレだけ！？ て、ちょ、痛っ、おい」

連続パンチー。一発に大した威力なくても回数重ねると痛いよね。

「馬鹿あーっ！」

「泣くなよっ！」

「楽しみにしてたのにー！ ふえーっ」

「ん、岳、泣かせたな」

「にーちゃんも共犯だっつの！」

光の大好きな小豆&抹茶バーだもんなあ。渋い。

「ところでさー」

「いや、なに何もなかったかのように話変えようとしてんだよって
うわ！ 光、ちよっ、痛い、頭突きしない！」

思いついたときに言わないと忘れるでしょ？

「こないださ、いや、一週間以上前だけど。あたしが楽しみにとつ
といたバナナチョコアイスが無くなってたんだよねー」

「……………」

あ、純兄だな。純兄に間違いない。

理由？ うん、ちよつと小指の先が動いたから。

「純にー。何でだろうねー」

「何でだろうな」

最初の小さなぴくっ以外にはまるで動じないんだから困る。

「食べたでしょ」

「うん」

「ってあっさり認めんの！？」

「悪いか？」

うーん……。

「あたしのバナナチョコアイスを食べたのは悪い」

「そうか」

「うん」

「で？」

え？ 『で？』とか聞かれてもなあ……。

「んー、だから買って」

「買って買って買って買ってー！」

「……後ろの声と合わさると怖えな」

「じゃ買ってくれる？」

「いや、テメェ関係ねえだろ」
ばれたか。

「買ってくれるのくれないの!？」

「……よし」

おーっ、買ってくれるの？

……と、思ったら。

純兄が行ったのは冷凍庫。中から出てきたのは……

「パピコチョココーヒー味！」

「一本やる」

やったやった！ こっちの方が好きなんだよね、あたし。

「うー、美味し。つべた。ね、純兄」

「ん」

『あゝっ！ いいな!』

うん、で、次は『頂戴』でしょ。

『ほい』

『何も言っていないのにくれた!？』

文句あるならやらんぞ。いや、純兄に貰ったやつだけど。

食べさしだけど、いいよね別に。兄妹だし。

「あむゝ。おいしゝ。純お兄ちゃんのもゝ」

「オレもオレも！」

……………。

「純兄」

「あ？」

「何かいっぱい残ってるじゃん。頂戴」

「あつ。何でいきなり食いつくんだよ！ まだあんじゃねえか」

「あむゝ」

「ちゅー」

『あゝっ』

こうして、パピコチョココーヒー味をめぐる争いが始まった。

一分で終わったけど。

201 泥棒を見つけました

暇だ。

忍でーす。

大事な事なのでもう一度言います。暇だ。

おとーさんは仕事、おかーさんも仕事、岳と光は子ども会の料理教室、純兄は朝起きた時にはもう居なかった。

と言う訳で、あたしは一人でお留守番。

うーん……。

やることやっちゃったしなあ。

パソコンちよつといじって、広辞苑ばらばらして、おかーさんの隠したお菓子探し&つまみ食いに、読みかけの本読破、メインが納豆ごはんのお昼ご飯。

やることやっちゃったなあ。

一人寂しく勉強しようかな？ 何で受験生のくせしてさっきのやることの中に勉強がなかったの、とか突っ込まないで。

気分じゃないなあ。

なっくん家にでも遊びに行こうかな？

がたたっ

……二階から音が。

はてさて、なっくんか泥棒か。それとも純兄帰ってきたとかかな？

わお。泥棒発見。すげえ。

何がすごいって、家の中に誰もいないのかよく確かめずに、それも真昼間から入ってくるその度胸がすごい。

「うおおおおお！？」 ほ、宝石発見！？」

しかも大声出してるし。珍種だな。写真撮りたい。

……の前に通報だよね。はい百十番。

「はい、御用の方は近所の交番までどうぞ」ガチャ
……え。

な、なんかCMの『今すぐ近くの〇〇まで！』みたいに言われた
んだけど。

どうしよ、とりあえず再チャレンジ。

「御用の方は「泥棒が来ました」頑張ってください」ガチャ
いやいやいやいや。何のための警察だよ！

「な、なんか声が……」

あ、泥棒に聞こえてたっぽい。一階で電話してたのに。時刻耳だ
な泥棒。

あたしもか。

「確かめてみるかっ」と

相手がナイフか何か持ってたら、あたしピンチだよねえ。

「よっこらせ」

泥棒に入った家で座ってたのか？ しかもおっさんくさっ。

「……え？」

うん？

「ぎゃああああああっ！」

えっ？

「で、出たっ、出たあっ！」

何が出た？

気になる。行っちゃえ。

「ひiiiiiiiiii」

みつともなく腰を抜かすおっさん泥棒の側で。

霊体の純兄が、ルービックキューブ、ビーズのねずみくん、紐で
できたボールでお手玉してた。

……純兄お手玉三個で出来るんだー。

「お帰りー」

「ん」「ひいっ!？」

「泥棒はおいでませ」

震えてる震えてる。

「こ、この家の……?」

「長女です」

「い、いつから居たっ!？」

「始めから」

青ざめてる青ざめてる。

「ねえ、何かこの人可哀そうになってきたんだけど」

「だ、誰に言って……」

「軍服純にー」

「制服なんだよッ!」

あ、照れてる。

死神の制服って軍服なの? いや、漫画で見たそれに似てるなー
ってただけなんだけど。

何と言うかね……んと、学ランのボタン全部取って、代わりにチャイナ服の前止めてる奴みたいな紐がついてて、あ、学ランって言うにはちよつと長いかな。全部真っ黒。

死神のイメージが若干崩壊中。

あれ? 確か妙羅と最凶トリオは和服だったし、盗人姉弟はローブだったような……。死神って、決まり緩いのかな。

「ぐんぶくじゅんにー……? この部屋には誰も……」

「居るよ、そこに。ほら、アンタの隣でお手玉……あ、もうやめんの?」

あ、落ちたビーズのねずみくんが泥棒に直撃。

「痛っ。ま、まさかさっきから色んなものが勝手に動いたのは……」
色んなもの? 純兄何動かしてたの。

「うちの兄さんの仕業ー」

「にいさんって、まさか……」

「幽霊じゃないよ」

「ほ……」

「死神」

「ぎゃあああああああつ！ お化け屋敷！」

人聞きの悪い。こら、逃げるな。

「捕まえろよ」

「純兄が行ったんだもん。だから行かなかったんだもん」

「ぎゃあああああつ！ 襟首を死神に掴まれたあつ！？ 死にたく

ない！ 俺には娘が……」

「こら、人を殺人鬼みたいに言うな」

「ひいっ！？」

泥棒さん、後ろ見ようよ。

あんたをつかんでるのは人間の純兄だよ？ 軍服も実体化。おお、

意外と手触りいいなコレ。

「んで、忍、警察は？」

「呼ぼうとしたけど切られちゃって。日本大丈夫か」

「んじゃ、とりあえず紐。ロープ希望」

無いわい、んなもん。

「……と思ったら何か目の前に転がってたりね。何故に」

「知るか。よこせ」

「ほいさ」

何か……。

泥棒縛る動作が馴れてるように見える。死神ってなんだっけ？

「よし。交番にでも届けてくるか？ 落し物つつて」

「ちょ、待て！ 俺には娘があつ！ 命だけはっ！」

「テメエは俺を何だと思ってんだ」

「へ？ 死神って……さっき……」

「分かった。死神を何だと思ってやがる」

「人を殺す神様」

様つけるんだ。へえ。

「人を人殺しみたいに言うなコラ」

「だってえっ！」

うるんだ瞳で行っても可愛くないよ、いい年したおっさんなんだから。

「ねえね、なんで家来たの？　それもこんな真昼間に。馬鹿じゃない？」

「本能には従う主義なん——」

あ、蹴られた。思っ切り蹴られた。

「単なるアホだろ」

「金が欲しかったから……」

あれ、純兄が何か考えてる。

あ、考えるのやめた。

「今回特別。次はねえぞ」

「見逃してくれるんですか！？」

敬語になった！？

「これやる」

純兄が渡したのは……ほーせき？

「い、いいんですか兄貴！？」

「ん、誰が兄貴だ」

「じゃあ親父！」

「ぶっ飛ばすぞテメェ」

手がボキボキ言ってるよー。

そりゃあね、何が悲しゅうておっさんに親父呼ばわりされにやならんのだとは思うわな。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

ほんとに本能に従う主義なんだね。多分生存本能使ったよね今。

その泥棒。

連絡先だけ聞き出して帰してあげた。

純兄曰く、連絡先を聞いたのはいつか利用できるかもしれないと

かなんとかかんとか。

「ところで純兄、さっきの宝石。お給料じゃないの？」

「んにゃ、あつちはプラスチック。せっかく苦勞して手に入れたモンをそうそう他人^{ひと}に渡すか」

「……詐欺師だ。詐欺師がここに居る」

純兄の新たな一面を発見。

セコい。

202 誰でもピンチの時は心が通じ合うもの

「ああああああっ！」

……………五月蠅い。隣の家なのに響いてくる。どんだけ大声出してんだ。

「なあにーちゃん、今のなっくんの悲鳴」

「ほっとけ」

多分、明日提出の宿題が何か失くしたただけだろ。

「なあにーちゃん」

「ん？」

「夏休みがなんで八月中に終わんだよ」

「教育委員会にでも聞いて来い」

「そんな度胸ねーもん」

さらっと言ったな。

「やっぱさ、中学生はともかく小学生くらいは八月いっぱい休みでもよくね？」

「俺が小学のときはそうだった」

「ずっこい！」

「あぁずっこいよ？ 何か悪い？」

弟や妹、その他誰かに『ずるい』と言われた時の対処の仕方。否定したら『ずるい』『ずるくない』のループになるぞ。

「開き直んなよ」

「おい純っ！」

夏、たまには玄関から入ってきたらどうだ。

「探し物なら手伝わねえよ？」

「問答無用！ 来い！」

やだ。と言う前に襟首掴まれたら答えられん。

「……で、何を探せて？」

「英語のワーク。あとはまあ、俺の鉛筆が二、三本」

「ん、まあ頑張れ」

「んー、まいっか。ワークの方はお前のなんだけど」

今、何か聞き捨てならないようなことを言わなかったか？

「誰のだって？」

「んだから、お前の」

「首絞められるのと鳩尾蹴られるのとどっちがいい？」

「あはは、らんぼー」

うあ、ムカつく。

妙羅の相手してる時以上にムカつく。

「ん」

そういう訳で鳩尾蹴ってやった。

「あのさあ、鳩尾って痛いのよ？」

「これでもかと言うほど知ってる」

小さいとき、同じ布団で寝てた忍に何度もかかと落としされたからな

岳にやられたこともあった。

「お前さ」

「ん？」

「今俺の笑い止めたよな」

額らへんに『怒』って文字が見える。

「俺を屍にしようとしても？」

「そう」

「やってみやがれ」

「やってやるよ。今すぐ」

……ん？

俺は何しに夏ん家来たんだっただけ。

確か探し物手伝えて事で来たはず。

それが何で喧嘩になってる？ 取っ組み合い……っつか、殴り合

いの。

「そう言えば」

「あん？」

「何でテメエが俺のワーク持ってんだ」

「ああ、答え写そうと思って」

……夏休みの宿題を今日やろうとしたな。

「答えの本があるだろ」

「それも失くした」

「……テメエ、アホだろ」

「いや、成績オール三を守ってるぜ」

危な、鳩尾に拳入るところだった。

「お前さあ。オール三はアホだとか思ってたね？」

「せめて四が一つくらいあっても」

「一般人ナメんな！」

威張るところか？

「世の中にはなっ、オール三を目標にしてる奴だっているんだ！」

「……清か？」

「良雅くん」

あれ、小学の時成績よかったのにな。

「赤点の嵐ナメんなだってさ」

……良雅くん、何があった。ああ、酒始めたのか。

「あーっ、お兄ちゃん何やってるの！？」

「俺の笑いを遮った奴の始末」

「もう！ ほらストップストップ！」

春に入ってこられると止めるんだな……。いざと言うときのために覚えておこう。あるのかどうかはともかく。

「あーあー、引っかけてたハンガー落ちちゃったよ。直しとくんだよ？」

『へいへい』

「返事は一回！」

「母さんかよ」

「へへ、言ってみたかったんだー。あ、そうだ！ いまひーちゃん
とみーちゃんと一緒にゼリー作ってるからね、後で持ってくるね！」
最近やって無いなーと思ってたんだ。

同時に、そろそろやるんじゃないかなーとも思ってたんだ。

「純」

「分かってる」

一瞬でハンガーを直して、すぐさま逃げる。

とりあえずゼリーが出来て、それを他の奴等が食べ終わるまでは
裏山にでも行っておこう。

203 お土産騒動

「はい、お土産」

「おーっ、サンキュー」

「わ、ありがとう」

「え、私にもっ!？」

「あ、ども」

凄いいね、誰一人として同じ反応をしない。
忍でーす。

「開けていい？」

「いいよいいよ」

何かなー。何か丸っこくて硬いモノが入ってたけど。

「あら、小瓶？ ……の、中身は何？ 何かの歯？」

「サメの歯だよ、魔よけのお守り」

「へえ、ありがとう。お、お返ししないけど……」

「いいよいいよ」

あれ？

「あたしのはペンダントだ」

縦に伸びた丸いガラスの中に埋め込んである。

「あ、それ俺も」

「俺も」

「忍と純くんはそっちの方が好きかなーと思って
よく分かってる。」

「なっくんは……小瓶じゃ、失くしちゃうでしょ？ ペンダントも
付けてなかったらそうなりそうだけど」

よく分かってる。

「……もう俺、これずっと付けとくよ……失くしたらもったいねえ
し、悪いし」

「わー、嬉し」

ピキッ

あれ、何か変な音が。

「ちよっと海中、割ったんじゃないでしょうね？」

「いや、俺じゃねえよ」

「純のだ」

見てみたら。

純兄の手の上でガラス球が真つ二つ。

「純、お前何か憑いてるんじゃないか？」

「篠、それはないっしょ」

憑かれてるといえば憑かれてるけど、死神に。

おお、ここだけ何も知らない人が読めばかなり怖い。

「た、高山そのものが魔なんじゃない！」

「ええっ！？ 玲奈ってば酷い！？」

「貴方には言っていないのよ！」

だってあたしも高山だし。

「歯が出てきた」

「おー、貸して貸して」

見たい見たい！

「痛ッ」

「純兄大丈夫？ 血い出てるよ？」

「この歯、俺に喧嘩売ってんのか？」

刺さったのかな、引っかいたのかな？

ところでなっくん、今は放課後だけど、いつもなら笑い声のせいでクラス中の人に見られてる事分かってる？

「……さっきの、冗談のつもりだったけど、それでも無さそうね」

「純兄、あたし以外誰も心配してないよー？ かーなし」

「別に悲しかねえよ」

「見ててかーなし」

痛い痛い、鳩尾に手、突っ込まないで。

殴られるより衝撃は無いけどめり込むのも痛いから。

「あ、あたし絆創膏持ってるぞ」

「お、さーすが篠」

「いや、いい。多分絆創膏じゃおさまんねえから」

『どれだけ深いんだよ!？』

「んー、カッターで切った時以上、彫刻刀で掘った時以下」

あいまいだなあ。

「保健室、行って来たら？ 別にあなたの心配してるわけじゃないけど」

「へいへい」

「忍の心配だからね！ あんたが死んだら忍が悲しむでしょっ!」

「そうだよー、兄ちゃん、忍、泣いちゃうよ?」

ちよっとノって見た

「俺の傷はどれだけ深いんだよ」

指の先っぽただけだけど。

「あああもうっ！ さっさと行きなさいっ!」

「ゆでダコだ」

「りんごって言ってあげようよ」

「五月蠅いわね!」

まっかつか。

「……ところで鈴木」

「なによ!」

「シャツ掴まれてたら、進めねえ事くらい、分かるよな?」

ぼんっ しゅー

「あはは」

なっくん、笑ってばかりいないでよ。

「玲奈が煙を上げて倒れたっ!」

ナイスキャッチ、篠。

「オーバーヒート」

「ロボットじゃあるめーし」

保健室行きが一人増えた。

「どーやって持ってこう」

「よし、岬！ お姫さん抱っこだ！」

「はひ！？ 何で俺！？」

居たの！？ 全然気づかなかった。案外影薄いね、この人。

「ほら、俺の爆笑のためにやれよ」

「やらん！」

そりゃあそんな事言われたら誰だってやりたくなくなるわな。

「ほい、これでいいだろ」

「純くん、女の子を担ぐってどうかと思うよ？」

「桜、こいつはデリカシー欠けてるんだ。仕方がない」

「……忍、負ぶってやれ」

結局あたしに回すんですかお兄さん。

っていうか、よく指怪我してるのに担ごうとか思ったね。

いや、怪我してるのと反対の指だったけど。

保健室。

「先生、お土産です」

そう言って玲奈を渡したら。

保健室の先生（男）は妙に慌ててた。

……あたし、何か悪いことした？

204 はぐれて見つけて金魚すくい

「はぐれた……」

こんばんは。はぐれました。
忍です。

今日はお祭りなのです。

一緒に来たはずの純兄となっくんが迷子になりました。
え？ 迷子になったのはあたしの方？ そうとも言う。

あ、綿菓子発見。食べよう。こんなのは探すだけ無駄。適当にぶらついてたらそのうち見つかるよ。

「というわけで、いただきます」

綿菓子っておいしいよねー。

「あ、忍」

「来てたのか」

「おー、しーちゃんに桜。二人一緒に来るとあたしだけ仲間はずれにされてたような気分になるのですが」

泣きそうです、友達に仲間はずれにされました。

「ほら、小学校の校区違うから待ち合わせにくいでしょう。忍は忍で来ると思ってたの」

あたしの行動は想定済みですか、そうですか。

「ところで、清見なかったか？」

「迷子の迷子の清くんなの」

「見てないよ。あ、それより焼きそば食べない？」

『食い意地はってるな（はってるね）』

ほっとけ。今日の晩ご飯なんだよ。

綿菓子は食事の前なのデザート。

「あれ？」

ん？ どした桜。

「清くん見つけた」

あっさりだなあ。

「桜、他人のふりだ」

清、たこ焼きは口いっぱい詰め込むものじゃないよー。

「む！ ひふへは！」

「み、見つかったーっ！ 逃げるよおっ！」

「んぐ、んぐ……こらっ、逃げんな！」

逃げたのは桜だけです。

「あれ、篠は？」

篠もだった！

「あ、ねえ、純兄となっくん見なかった？」

「あん？ 見てねーよ。ああ、でもお前の妹なら……」

光？ はーちゃんと美代と一緒に来てた筈。三人揃って浴衣着て。

「金魚すくい女王の座に君臨してたぞ。ほら、あっち」

何やってんだ光！ 金魚すくい女王って何！？

ちよっと覗きに行こう。

「ほらほらー！ 早く取らないとなくなっちゃうよー」

「いけいけひーちゃん！」

「……いけいけー」

おお、あっさり見つかった。

金魚すくい女王とその側近。どうでもいいけど金魚すくい女王って語呂悪いな。

「じょおーさま！ たくみのもっとて！」

「ゆーちゃんのも！」

「ぼくも！」

おお、自分で取れないちびっ子たちに大人気。

誰だ、『じょおーさま』とか言った奴。

「じよ、讓ちゃん、頼むから全部は盗らないでくれ」

金魚すくいのおじさん、字が違うんじゃない？

「どうせ三匹しか持って帰っちゃダメなんだから、な？」

『えっっ』

「えっじゃねえよこら」

あ、純兄めつけた。

「あゝ、純お兄ちゃんゝ」

「見てみて！ ひーちゃんがこんなに取ったんだよ！」

「……百円で取りほーだい」

「違うからね！？」

あ、純兄が登場してから金魚すくいのおじさんがちょっと安心したような顔してる。

「テメェら、どうせ取るなら家にいねえ出目金にしろ」

『了解！』

ああ、金魚すくいのおじさんが『ガガン！』って顔してる。どんな顔かは皆様の想像にお任せします。ヒントは酷い顔。

「ああ……この兄にしてこの妹なのか」

「おっさん、被害が出目金だけでよかったじゃん？」

なっくん、慰めになってるのかそれ。笑いながら言うからほら、おじさん泣いちゃったよ。

「美代！ こら！ 家に水槽無いの忘れたか？」

「兄上。ほら、金魚」

「可愛えー」

……村田、頬が緩んでる……。

ほんとに元いじめっ子かこの人。

それはともかく。

お祭りはまだまだ始まったばかり。

205 お祭り大好き？

「あれ？ 美香？」

「……は、はぐれたわ……。」

もうっ、いつつもふらふらしてるんだから美香はっ！

どうせ適当にぶらぶらしてるでしょうから……。」

「こっちから探さないと……。」

「おー、玲奈だー」

「あら？ 忍じゃない。一人？ 高山は？」

「あのね、玲奈」

「な、何よっ？」

急に真剣な顔してっ！ らしくない！ ……今のは失礼かしら？

「あたしも高山って名字なの、覚えてる？」

「お、覚えてるわよそれくらい！」

ちよっと忘れかけてたわ……。」

「それでね」

「まだ何かあるの？」

「夏休みの始めに純兄の事、純って呼んでって言ったの忘れた？」

そ、そういえばそんなことも……。」

「でもっ、そっちこそ、高山に玲奈って呼ぶように言うとか言ってたじゃないっ！」

「こんな言葉があるんだ、玲奈」

何よ。

「それはそれ、これはこれ」

「殴るわよっ！？」

「やばーん」

「失礼ねっ！」

「あはは」

もうっ。

「ところでさ、篠と桜、見なかった？」

「見てないわよ。あなたもはぐれたの？」

「ん？ 玲奈もはぐれたの？ ……ああ、中森？」

「別にはぐれたんじゃないわよっ」

「いや、ここで隠すことにどんなメリットが？」

「知らないわよ。自分で行っというてなんだけど。」

「じゃあ一緒に回ろっか。見つかるかもしれないし」

「そ、そうね」

能天気な考え方……。

「あら？ あれって、高山じゃない？」

「玲奈……じゅ・ん！」

「ああもう！ 分かったわよ！ あれ、じゅ、じゅ……じゅん、じゃない！？」

「何か……玲奈って可愛いんだね。うん、顔は可愛いというより美人なのに」

「五月蠅いわね黙りなさいよ怒るわよ！？」

「怒ってるじゃん」

それはそれ、これはこれ！

「あめちゃん食べる？」

「子どもじゃないのよ！ しかも綿菓子じゃない！」

「綿あめとも言う」

ああ言えばこう言う！

「あ、玲奈さん」

あ、美香……って、

「何よそのかっこう！？」

「お祭りは楽しまなければ意味がありません」

だからって……、頭にお面、首にはぴかぴか光るおもちゃ、手首足首には光る輪っか、右手に綿あめと風船のヨーヨー、左手にチョコバナナ。

オマケに元から着てた赤い浴衣でもう、これ以上ないほどお祭り

！　　ってオーラが……。

「中森って、意外と……恐ろしい人だね」

「高山さんもいかがですか？　チョコバナナ」

「いただきます」

食べるのね……。

「あ、そうそう、玲奈さんにも一つ」
何よ？

「はい」

……ぴかぴか光る、ゴムの指輪……。

「こんなので喜ぶ人がどこにいるのよっ!？」

「ここに」

美香、喜ぶの……？

「ほら、よく言うじゃないですか。プレゼントするなら自分がつて嬉しいモノをつて」

言う、けど……。

「自分がずれてるとかは考えないのね」

「え？　ずれてるのですか？」

本気で不思議そうな顔をしないでくれる!？

206 お祭りの四人組

「修也 あ、なんでおめー、かき氷みぞれなの？」

「悪いか」

「悪い」

舌の色が変わったのを見せ合いっこすんのがかき氷の楽しみだろ！
違う？ 違うのか？

岳だっ！

歩きながら食べるかき氷ってうめえよな！ ちなみにオレのはブルーハワイ。

ブルーハワイって、どーゆー意味なのかね。単純に青いハワイか？
「修也、このイチゴ味、美味しいよっ！」

「古閑 あ、かき氷の味ってどれも同じじゃない？」

あ、言おうとしたこと翔に言われた。

「微妙に違うの。多分！」

多分にそんな力入れて言うなよ。

「む」

「どーした修也」

砂の上で元気に跳ねる金魚も見つけたか？

「金魚の群れだ」

修也 かき氷を突いてたストローの先を見ると……。

砂の上で元気に跳ねる金魚の群れがあった。

怖えよ！

「ど、どうしよ、水に戻してあげないと……。何処から来たのよこんなの！」

古閑、すぐそこにひっくり返ったタライがあることに何故気付かない。

「ああごめんね、すぐに戻すから……」

お、金魚すくいのおいちゃん。

この人の手が金魚に近づくと、一段と跳ね方、つつか暴れ方がひどくなるように見えるんだけど、これはオレの目がおかしいのか？

「よかったですね！ 元気な金魚で！」

「じゃないと今頃チーン、だもんなー」

「高山！」

ごめんなさいもう冗談で死に関係すること言いませんから。古閑の怒った顔って意外に怖いです、はい。何処からどう見ても鬼です。ツノ見える。冷や汗半端ない。

浴衣着てる女の子は誰だろうと可愛いモンだとか言ってた文月くん、怒らせたらそーでもねーぞ。

さっきまでは確かに可愛かったけど。

「……ちよつと、君顔見せて？」

何ですか金魚のおっちゃん。略してお茶。あれ、何か全然違うものになった。

「うわぁー、やっぱり金魚すくい女王に似てる」

誰だよそいつ。

「ごめん、もう来ないでね」

「いきなり何だよ!？」

酷くね？ いくらなんでもこれは酷くね？

「奈那子、ヨーヨー釣りがあるぞ」

「わぁっ！ やろうやろう！」

「おれ等は？ 邪魔？ やっぱお邪魔虫は居ない方……ってえっ!？」

あ、翔がいらんこと言うから殴られた。

あ、お茶がどっかに消えた。

「ああ、ごめん。つい岳にやるような感覚でやっちゃった★」

「やっちゃった★ じゃねーよ！ お前が『★』とか使うと怖えんだよ！ つつかどんだけハイレベルな喧嘩してんだよアンタ等!？」

前半は修也も明るくなった、つつー事でいんじゃない？

で、後半は……。

『この場合は翔のレベルが低すぎるだけ』

「ハモっていうんじゃないああああい!？」

いや、だって。

脚は速えーけど、こういうのの反応鈍いし。少なくともそこら辺のクラスの奴よりは。

「いいから、早くヨーヨー釣り行こうよ!」

「そうだな」

「ほいさっ」

「え、今の話題これで終わり!？」

翔、違う。もとの話題に戻したただけだ。

数分後。

『岳ってこういうの下手なんだな』

「ほっとけ!」

そこに突っ込んだめだ!

207 中三集合!

『さあ、次はブラスバンド、ザ・ブラスバンドです!』
まんまじゃねえか。

夏だ。

純が何処行ったか知ってる奴居るか? 忍でも可。

「あ、なっくんめつけた」

「めつけたはこっちのセリフだと思うぞ? 忍」

ところで、右隣に居る鈴木はわかるけど、そのさらに右隣でクレ
ープ食ってる浴衣娘は誰?

あ、いや、何かお面だとかヨーヨーだとか持ってるし、どっちか
と言うとお祭り娘?

「あのねなっくん。人数の少ない方が迷子って呼ばれるの」

「あのな忍。屁理屈っていうの、それ」

「屁理屈上等!」

喧嘩上等みたいに言うなよ。

「たか……じゅん、は?」

「純? 今探してるとこ。……あれ、鈴木ってそんな風に呼んでた
っけ」

「ほっときなさいよっ!」

分かった、ほっと……けるかこんな笑いの種になりそうなもん。

「何でだ何でだ? ほれ、言ってみ。吐いて楽になっちまいな」

「訳分かんないわよっ! 刑事ドラマじゃないのよ!」

どっかで聞いたのをまとめたんだけど。そうか、刑事ドラマだっ
たのか。

「あたしが頼んだの。だって、あたしも高山だし」

何だ、つまらん。……いや。

「気の強い玲奈ちゃんがそれに従ったのかあ、その心は」

「謎かけじゃないのよっ! 従うとか言うんじゃないの! わ、私

は友達をお願い聞いてあげただけなんだからねっ！」

「リングみてえ」

「何で顔色見えるのよっ！」

ああ、ほんとに赤くなってたのか。周り暗くて見えなかったんだけど。

「あっ、純兄めつけたあっ！」

忍、俺を見つけた時と純を見つけた時ののテンションの差は何。地味に哀しいじゃないか。

「純に、玲奈のこと、玲奈って呼ぶんだよ？」

「はあ？ 何を突然」

「別にいいでしょ。桜も篠も名前なんだし」

「いいけど、別に」

ああ、何か暗くても分かるくらい鈴木顔が赤くなった。頼むからは爆発だけはしてくるなよ。

……熱が伝わってくるんだけど。風邪ひいてるんじゃない？

「あゝっ、居た居た、忍ご一行」

「桜、やっぱまとめるんならこれだろ。しじなれみ」

「そんなまとめ方するのは清だけだ」

篠、俺もそう思うよ。

「あ、清！ それはもしや……」

「あん？ 綿菓子がどした？」

「いただきます」

「あああああっ！？」

忍……今、半分も盗ったな、一口で。

「どんな口してんだよお前は！？」

「ほふなくふい」

こんな口、か。なるほど、綿菓子だらけの口か。

……あれ？

「おーい、美咲ちゃん」

あ、シカトされた。ちゃんと言わなきゃダメ？

「おい、岬！ 村田岬！」

「あはー、やっぱ俺の事かよぶっ飛ばすぞテメエ覚悟はいいなコラ」
美咲ちゃんって呼び方気に入ってつい。

「一人でお祭りとか岬も寂しい奴だなー」

「妹も来てるけどよ……」

「うちと、純とこの妹にとられたんだろ。やっぱ兄貴より友達だよなー」

忍は例外かと思ったら案外そうでもないし。

「ほら、何かいいことあるよ美咲ちゃんにも」

「うん、俺は男」

「そこには突っ込んじゃだめだ」

「何で!？」

俺が楽しくないからだ。

208 夏祭りの終わりに

『さて、今年の夏祭りもあとわずかとなりまちっ……た!』

「囃んだね」

「囃んだね」

「囃んだ」

光、春、美代。三連続で言ってやるな。

何か司会の人が可哀そうじゃなか。すぐそこにいるんだから。忍でーす。

夏祭りが間もなく終わるらしいです。でも毎年の恒例のステージ……と言っているのか微妙なものがあるのです。

『さて、最後はやっぱりこれ! ええー、え? 何? は? 適当に題名つける? 無茶だろ、これって元から決まってるもんじゃなかったのか!?』

おーい、全部マイク通ってるよ。司会者ことサンゴの兄ちゃん! よくバイトしてるねこの人。これもバイトでしょ?

『ええ、失礼しました。それではーっ、レッツ、ダンスしたい人だけ前へどうぞー』

なんて適当な。

んーと、まあ大体言っちゃってるけどこれが毎年恒例、自由参加の適当ダンス。

ランダムで流された音楽に合わせて、どうぞご自由に踊ってくださいこっちは音楽しか用意しませんから。みたいない……なんだろうね? ステージとも言い難いし。

参加する人がいるっていうのが凄いなと思うよ。ノリいいなあ、皆ちなみに、「手抜きじゃね?」とか言ったKYは速攻つまみ出されます。誰にかは知らんけど。怖っ。

「修也行けよ」

「絶対やだ。岳が行けばいいだろ」

「絶対やだ」

まあ、こーゆーノリでされる会話も大量発生するけど。
って、岳達いつから居たの。

「よしやっ、行ってやらあっ！」

こんな奴も大量発生するけど。行ってらっしゃいお祭りに来てた
誰かさん。

『よし』

ん？ 岳と修也が突然頷いた。

『翔、お前行け』

どういう流れでそうなったんだ。

「了解！」

『了解すんの！？』

「よしっ！ あたしも行ってやるっ！」

……えと、古閑だったかな？ この子ノリいいんだねえ。

「純行って来「ヤ」」

純兄、いくらなんでも返事早すぎやしないか。

「何でだよ。行って来いよ！ 俺の爆笑のために」

「だから嫌つつつたんだよ。テメエが行け」

「いや、俺は常に笑う側に居なきゃなんねえの」

不思議お菓子持ったはーちゃん相手だと、あたしや純兄に笑われる側になるじゃんか。

この時はもう、ここまで笑わなくてもいいんだけどってくらい笑
ってやるよ。日頃の恨みを晴らすために。

日頃の行いは大切だねえ。

「あれ？ そこに居た妹ちゃん三人組はどうしたの〜？ 居ないよ
？」

「桜、あっこ」

しーちゃんの指すところを見てみれば……。

妹三人組が踊ってました。三人そろって、ソー○ン節を。

流れてるのはラテン音楽なのですが。ええと。まあいいや。地味

にリズムあってるし。どうやって合わせてるんだ。

『はいっ、突然ですが、終了です!』

「ほんっと突然だな。曲途中だぞ。毎年こんななの?」

ああ、なつくんは初めてか、このお祭り。

「噂によれば……、祭りが始まった時からこんなだったらしいです」

「へえ、って」

『どひゃあい!』

びっくりした、びっくりしすぎて思わず皆で意味不明な叫び声上げてしまった。

「オカルトオタクのマコちゃん!？」

「しののん……、マコちゃんと呼ばないでください……」

じゃあそっちこそしののんとか呼ぶな。シナモンみたいじゃないか。シとンしか合ってないけど! 発音がシナモンみたいなんだよ!
! 四文字だし!

「あとオカルトオタクではありません」

嘘つけ。オカルト部って、オカルトオタクの集まりじゃなか。

暇人の集まりのような気もするけど。

『それでは! 花火によって今年の夏祭りを締めくくりたいと思います!』

あ、何かマコちゃんが去っていく。……何しに來たんだあの子。

「へー、花火? ……って、あれ?」

あれです。

ステージの天井を支えてる棒に渡された紐についてる細いモノ。

あれ、よく売られてる手に持って遊ぶ花火です。

んで、その一、二mくらい離れたところにポーンと置かれてる短い筒は、上に吹き出す、でもやっぱりあっちこっちで売られてる花火です。

「相変わらずシヨボツ」

岬、謎の誰かさんXにつまみ出されるよ。言っちゃだめだ。

「あれ線香花火だったりしないかな」

光、

「……だったら、ソッコー終わる……」

ああ、美代に先言われた。

「あ、火が点けられるわよっ!」

玲奈さん、凄く嬉しそうですね。言わないでおいであげるけど、なっくん笑いかけてるよ。どうはまったんだ。

「しゅぱー」

中森、花火の音を口で言ったのは何故。

まずは上に吹き出す花火。うん、五個ならんで吹き出してたら綺麗。

点け方も両端からだからね、真中が残るし。

手に持つ細い花火も点けられると、これはこれでずらーっと並んで綺麗。

結構高い位置に吊るされてるから、火花が雨みたいに見えるんだよ。

「花だ」

うん、隣に来た人が言っただけなのに、花が降ってるみたいだよ。

火の花、椿みたいな形したそれが、落っこちて、消える。

「見る度に思うけど、馬鹿に出来ないな。こんな細い奴も」

……ところでね。花だって詩的な事言っただけ。あだし知ってるんだ。

「ハルやん、だっけー」

「しののん、ちょっと来てくれるか?」

きゃー、さーらーわーれーるー。

「純も」

「忍」

逃げるんだね。

「がってんだ!」

ダーッシュ!

……何で夏祭りの終わりに追いかけられにゃなんのだ。

209 全てはノリで進んでゆく

「でもでも。うう。っ……やっぱ、言わなきゃダメかなア？」

「里山の頭のネジが飛んだか」

「修也、何気に酷いぞその言い方」

何気にどころかモロ酷えよ、翔。

岳だーっ。

オレは見た。里山が俯いたまま背後にいる幽霊と話しているのを。つてか、皆見てる。そりゃそうだ。里山声でけえし。

「よ、よしっ！ 行ってやるんだよっ！ りりは悩まない子だっ！」

『滅茶苦茶悩んでたじゃん』

あ、クラス全員の突っ込みに幽霊も参加。

……ところでこの幽霊、顔が白くない以外は凄く舞妓さんみたいなんだけど、

髪型とか、着ものとか。修学旅行の楽しみが減るからそんなカツコしないでくれ。

「今日の給食、プリンを付けて貰えるように頼んで来よオっ！」

『んな事で悩んでたのか！？』

クラス突っ込みが再び炸裂！ まとまってるよなあ、このクラス。

「と言う訳で先生っ！ 行ってきます！」

「いつてらっしやうい」

「いいのか？」

修也の呟きは聞こえてたようで、せんせはこう言った。

「善は急げ」

『善なのか！？』

プリン付けて貰えるように頼むことが！？

「先生プリン好きなの」

せんせが好きなのはお菓子全般だろが。

「何としても付けて貰うからねっ！ 誰か一緒に行こうよ！」

「んじゃオレ行こーっと」

夏休み初め、あんなに幽霊の声怖がってた里山が仲良ししてる幽霊と話してみたいし。

プリンはい……半分ついで、半分本気。オレもプリン好き。

「じゃっ、あたしも行くよ！ 璃々」

古閑もなんだかんだでノリいいな。

「じゃーおれもー」

翔はい、どうでもいいや。

「こう来たらやっぱ、お前も来なきゃダメだろ、修也？」

「元から行く気だ」

あれ？

「プリンが付けられることは阻止しないと……」

あ、確か卵アレルギーで食えないのか……。

周りが食ってんのに自分だけ食えないとか悲しいもんない。

「代わりにヨーグルト」

そこはどうでもいいから。

『ヨーグルトはやメテ』

「何だよ幽霊。お前食わねえだろ」

『臭い嫌なの！』

幽霊が何で臭い分かるんだよ。

「大丈夫だよミナコ！ ヨーグルトじゃなくて、プリンだから！」

『うん、うん。絶対だね？ リリ』

「もちのろん！」

盛り上がってるところ悪いけど。

「里山、ミナコとやらはお前の向いてる方と逆に居るぜー」

「ありやいや？ そーなの？」

幽霊の方から動けよ、とか思ったのはオレだけじゃない筈。

「しゅ、修也あ……何か、居るのかな……？」

「そこは岳にしか分からねえっばいけど……大丈夫」

修也、何が大丈夫なのか三十秒以内に説明よろしく。

「古閑さあん！ 修也様から離れなさい！」

何だよ、今出てきた眼鏡っ子。

「しゅーやさまあ？」

あ、翔の目が点になってる。文字通り点に。どうやってるんだそれ。

「修也、あれ何？」

「ファンクラブ」

どこの漫画だよ。

「修也 あっ！ 死にさらせ！」

「コラ翔！ そんな言葉を使うんじゃない！ ちょっと来なさい」
せんせが怒ったあ！？」

「ねえねえ！ そんな事より早く給食室行こうよオ！」

『私も首をながあくして待ってるんだからあ』

おお、ホントに首がながくく……あれ？

「里山」

「うん？」

「そのお前が仲良くしてる奴さ」

「ミナコがどうしたの？」

「幽霊じゃなくて……ろくろ首って言わね？」

「……え？」

いやだって！ 首が余裕で結べそうなくらい伸びてるぜ！？

『バレタカ』

「バレるも何も自分からばらしてんじゃねえか！」

『チッ……仕方が無い。今日ノ所ハコレデ……』

「見つけたああああああっ！」

うわおっ！？

な、何か凄い顔した天が飛んできた！？

……窓ぶち破って。

『キャアアアアアア！』

女子の悲鳴ってどうしてここまで高いのか。どっから出してるん

だその声。

「このオバケめ！ 私のバナナを返せ！」

猿かお前は！

って、ちよつと待て！ 鎌を振り回すな！

「天ちよつと待て、落ち着け」

『そーなのでしゅ！ バナナは後でも取り戻せるでしゅ！』

「学舎バラバラになったら、直すの大変だねー」

「霧瑠依は何落ち着いてるでした！ 妙羅先輩も！」

「と、とにかく天！ オバケは殺すな！」

「クスリ、使う？」

『何煽ってんだよ！』

おー……、何だ、死神様ご一行？

……お化けも流石に引くよなあ。

つつか、何？ このカオスな状況。プリンどこ行った？

210 コーヒー

「コーヒーだ」

「コーヒーだね」

「……コーヒーがどうしたの？」

「コーヒーがあつたんだよ。」

「紙パックのやつ。『微糖』とか書かれてるの。」

「春だよ。」

「ひーちゃん家でね、コーヒーを見つけたの。それだけ。」

「どうしようか」

『何を？』

「このコーヒー」

「どうかするの！？」

「家にコーヒーの紙パックがあるのは珍しいの」

「ウチん家には常にあるけどなあ。お兄ちゃんとお父さんが飲んでるよ」

「わっかんないなあ、なんであんな苦いのが飲めるんだろ。」

「……ぶらつく？」

「うん、そのまんま」

「すごーいー！ なっくんて実は大人だったんだね」

「ブラツクのコーヒーが飲める」大人

「これって、間違いじゃないよ！ ウチ達からしたら。」

「純くん飲んでそうじゃん」

「まずコーヒー飲んできたら見たことないよ」

「……お兄さん、紅茶派？」

「紅茶は嫌いって言ってた。臭いがキツイって」

「美味しいのに！ ウチ、ミルクティー大好きだよ！

「あー、そうだよ」

「……？」

「お兄ちゃん達に飲ませてみよう」

「実験？」

「ピンポン」

どうなるのかな、どうなるのかな？

純くんの場合。

「純お兄ちゃん。岳お兄ちゃんも。コーヒー飲んで」

『何を突然』

ビバ突然！……なんとなく言ってみたただけだよ。

コーヒーのコップを渡してみると……。

「これ、何か手加えた？」

岳くんは、すぐお怖がつてるような顔で言われちゃった。

何か、失礼じゃない！？

「なにもしていないよ！」

「うん……まんま」

「あ、んじゃ貰つとく。サンキューな。ちょーどのど乾いてたんだ、オレ」

岳くんはあっさり飲み干した！ 意外！ だってゴーヤ嫌いなんだもん、岳くん。

関係ないか。

「何で純お兄ちゃんまであっさり飲むの？」

「何か悪いか？」

『悪い』

面白い反応を期待してたんだよウチ達は！

「何してんの？」

忍ちゃん、ドアの隙間から出した顔が生首みたいで怖いよ！

「お姉さん、飲んで」

「コーヒー？ ……この中に火薬が入ってて飲んだ瞬間ドカーンなんてことは」

『あるわけないでしょ』

さすがにそこまではしないよ！

「大丈夫だよ、何もしてないから」

「じゃあいただきます」

あっさり信じるんだな。岳くんたちもそうだったけど。

「うえ、やっぱ苦い。牛乳足そ」

あれ？

「忍ちゃんはコーヒー飲めないんだ」

「……でも、面白くなかった」

それは確かに。

……というか、コーヒーだけで面白い反応する人って居るのかな？

211 眠った人での遊び方

「純兄、寝れん」

「そうか。俺は寝る」

「寝れんって言ってるの」

「お休み」

「寝れないんだってば」

「……すー」

「だから相手してよ」

寝たふりはいいから。あたしが眠くなるまででいいから。忍でーす。

純兄が相手にしてくれません。暇です。

「純兄、妙羅呼ぶよ？」

「止めろ」

あ、起きた。

「んだよ、もう十二時過ぎてんじゃねえか……」

眠そー。半眼になってる。

「その眠気あたしによこしなさい」

「妹にそのような言葉を使われる筋合いはねえ……」

「ごめんなさい。その眠気あたしにも分けてください」

「できねえもん……だから寝る。おけ？」

ぜんぜん『おけ』じゃない。

「つまりは寝れるまで相手してってことなんだけど」

「布団に入って目え瞑ってたらそのうち寝れる……」

「無理」

「即答するな」

十一時から一時間それやって無理だったんだもん。

「しりとりしよー？」

「麒麟。ああ残念、終わったな。お休み」

腹の上でジャンプしたるか。

「マジカルバナナしょー」

「嫌」

「とりあえず何か相手してよ」

「妙羅達の相手で疲れた」

えー。

「何してきたの」

「タイの尾頭」

えーと、

「タイの尾頭付き食べてきたの？」

「いや、タイの尾頭」

結局何してきたの!?

「すー」

いやこんな気になる事言い残して寝ないでよ。

「ねーってば、純兄」

「葉草採りの手伝いなら今日は無理……」

誰が葉草採りの手伝いなんか頼んどるか。斬じゃあるまいし。

「おい」

「書類ならそこにおいてあります置物……」

誰が置物だ。妙羅じゃあるまいし。何で敬語?

「もしもーし」

「ここはラーメン屋じゃないですよ……」

電話の相手誰だよ。

……何この純兄。面白い。寝てたらこんな事なるんだ。寝てなかったら言わなさそうなことばかり。そりゃそうか。

「なっくん呼ぼうかな」

「たいした度胸だ……」

何でっ!?

「ぶくぶくぶくぶく」

「ふぐ? うん、毒あるぞ」

いやいや、聞き間違えてるよ。

「ごぼごぼっ」

「水の中でよくこんなに生きてられるな……」

「どんな場面！？ 何が起きてるの！？」

「深爪、深爪え」

「大変ですね……」

「誰相手に話してるの？」

「それより、何で嫌な夢見そうな事ばかり言ってるのに全部かわすの！？」

「ってか、どうしてかわせるの！？」

「よし、次の手！」

「滝だー、目の前に滝がある。落ちる」

「跳べる事を忘れましたか？」

「だから誰相手に話してるんだよ。」

「うーん、他には……」

「このKYめ！」

「んぐっ……」

「あ、効果あった！ 何か嬉しい。」

「空気読めない奴ー」

「んっ……すみませんね……」

「謝ったあ！？」

「ちょっと拗ねてるような声だけどっ！」

「うーん、他に何か無いかな？」

「あ……真面目くんとか？」

「真面目……？ そうでしょうか……」

「さっきからずっと敬語だね。何で？」

「聞いてみよう。」

「何で敬語？」

「頭カラッポそうでも上の人ですから……」

「皮肉を混ぜるなよ。上の人相手に。」

「大きなカブー」

何か突然思いついた。

「おばあさんは孫をどんぶらこ……」

話変わってるよ！？　そして何か怖くない！？

「怖い、怖い怖い怖い怖い」

「玲奈、手、痛い……」

玲奈が登場？　しかもなにやら？　まれてる？　いい雰囲気？

「玲奈、玲奈、玲奈、玲奈」

「俺にサメの歯を向けっぱなしにしているのにはどういう意味があるか言ってみろ……」

悪霊退散！　かな？

なんでそうなるの！？

……あ、何かちょっと眠くなってきたな……。

「眠い眠い眠い眠い」

「とっとと寝ろや……」

そうします。

212 お化け屋敷の意味

「ねえ純兄、行こうよあれ」

「ん？」

忍の指す看板に書かれてるのは『お化け屋敷』

純だ。

電車で三十分位の所にある、白銀しろがね高校とか言うトコの文化祭に来てる。

何か、忍が前に説明会来て、面白そうだったんだと。

んで、一人で行ったら寂しい子みたいだから一緒に来いだと。

「ね、行こうよ。お化け屋敷」

「ん、別にいいけど」

お化け屋敷って……小六の水小祭り以来だな。遊園地とかも行かねえし。

「はい、それでは彼女さん、しっかり彼氏さんに捕まってくださいねっ☆」

「誰が彼女（彼氏）ですか」

「ち、違ったの!？」

『兄妹です』

「はわはわ、これはごめんなさい! ……いいなあ、文化祭付いて来てくれるようなお兄ちゃん居て」

俺は単純に好奇心から来ただけなんだけど。

「純兄、小っちゃい時のノリのままだから勘違いされるのかな？」

「知らん」

うわ、中真っ暗だ。

「……迷子になるに一票」

迷路じゃあるまいし。

「純兄どこ？」

「目の前に居るだろうが」

「暗くて見えないんだよ」

慣れろよ。

「おら、さっさと行くぞ」

「見えないって言ってるのに！」

服掴むな。首が絞まる。

「あ、純兄がここに居たからー。あ、手ここだ。よし！」

よしじゃねえよ。

「何で手え掴んでくるんだよ」

「はぐれそうじゃん？」

「納得」

だって忍の方見ねえし。

「こおおおおんのリア充がああああああ！」

「んっ」「とっ」

あ。

しまった。

「ぎゃああああああああっ！」

二人そろって蹴っちまった。

ほら、暗い所から突然叫びながら出て来るから……。

「どーしよ兄ちゃん。つい誰がリア充だーと言う否定のつもりで」

「……まあ、いいや」

向こう気絶してる……。一分もすれば起きるだろうっ！

『ごめんなさい』

謝るだけ謝って、次。

「んっど、ここ曲がればいいのか」

「ねえ、やっぱりまだぼんやりとしか見えないよ。痛っ」

よかったな、壁が段ボールで。

「どーおりゃんせー、とーりゃんせー」

……とおりゃんせの歌が聞こえてきた……。

上手いな、歌ってる人。

「こーこはどーこの細道じゃー」
今のは忍だな。

「きゃあああああ！ 他の声が聞こえるううううう！」
……………えっと。

「勝った！」

「勝ったじゃねえよ」

何の勝負だ。

「あーした天気になあーあれっ」
下駄飛んできた！？

「……………ん、明日は雪らしいですよ」

「それ僕が言うはずだったのにいいいいいい！？」
あれ、着物の男の子が泣きながら走ってた。

……………何かまずいことしたか？

「純兄、勝ったね」

だから何の勝負だよ。

「ねえ……………遊ぼうよ」

今度は着物の女の子かよ。

「ほら、おいでよ」

「純兄、この人、力強い……………」

あ？ 忍は手え引っ張られてたのか。

「よし、そのまま手綱引きしろよ。はないちもんめの時みたいに」
「了解っ！」

足を合わせて、お互いの手を引っ張る奴。

俺は見よう。

「むあ……………」

「むうっ」

飽きた。

「ようっし！ 勝った！」

お化け屋敷ってお化けと勝負する屋敷だっけ？

誰か辞書を貸してくれ。

「一まああああああ、二いまああああああ」

「お菊さんが居る」

「ああ、似てねえな」

「つて、実在するの!？」

ん、あの人の料理旨えぞ。

『一枚、二枚……九枚……はあ……一枚、足りない……』 ってのが口癖だな。

誰かがあんまり可哀そうだからって皿買おうとしてた。わざわざ貯金までして。

「一枚、足りなああああああ!」

「キヤアアアアアアア!」

「キヤアアアアアアア!」

うおわ。

「し、忍?」

捕まれた腕が痛え。耳も痛え。

高っかい悲鳴二つも同時に聞いた……。

「びっくりしたあ……突然出て来るもんだから」

「びっくりした、びっくりしたあ……怖かった……」

「くくっあははっ」

「純兄! 何で笑うの!？」

お化け屋敷のオバケ役の方がビビってんじゃねえか。

「オマケに、忍がお化け屋敷程度で悲鳴あげやがったつ、あはははは!」

「純兄、ぶん殴るっ!」

「ははっ。やって見やがれ」

あー、久しぶりに思いつきり笑った。

「もおー。突然出てきたのにびっくりしただけでしょ! 虫が出てきたのとおんなじこと!」

「私は虫か!？」

夏の気持ちがよく分かった。面白いときには笑った方がもつとおもしれえな。

「あはは」

「お菊さんごめんなさい。純兄は後で肉まん奢って」
絶対やだ。

213 溜息の原因はケンカ売ってるのか？

「はぁー」

「ため息を吐くな夏。幸せが逃げる。ついでに言うとお前の陰気がうつる」

「……篠さん、陰気ってうつるモノでしたっけ？」

夏だ。

下校中、今になって思い出したことがあってすっげえ落ち込んでいるトコ。

「何かあったのか？」

ちなみに、一緒に居るメンバーは篠、清、俺。

忍は何か超音波みたいな声出す奴に拉致られて、純はそれから逃げるべく……どこに行ったかは知らんがどっかに行つて……と言っても、普段から学校に残ってるが。

「おーい、人の幸せ逃がしといて何も言わずに済むと思うなよ？」

「……清、ため息吐いて幸せが逃げるのに他の人関係あったか？」

「溜息の原因は何か聞いてんだよ！」

最初からそう言ってくれよー。分かってたっちゃ分かってたけど。

「お前等知らねえだろーけどさ」

「うん、知らないな」

篠さん、話の腰をいきなり折らないでください。

「夏、続き続き。篠はちよっと黙ってるよ」

「ケンカ売ってるのか？」

「何でそうなるんだよ!？」

息が苦しい。なぜなら笑ってるから。大爆笑中につきしばらくお待ち——ぷはっははは！

『夏、お前ケンカ売ってるのか？』

「やるかっ？ あはははは」

これでも純やら忍やらたっちゃんやらの相手してきたから、多少

はできるぜ？

……ああうん、純とやったら白星より黒星の方が多いことは認める。

でも、俺の笑いをとぎらせたそこらへんの奴屍にするくらいなら楽勝だ！

「って、だから！ 何でお前の溜息の原因聞いただけなのに喧嘩になっただよ！」

「そうだそうだー」

「喧嘩の原因がそうだそう言うな！」

「清、お前ケンカ売って「だから！」」

このループいつまで続くんだ？

「もう夏！ スパツといけ！ 遠慮なく！」

「遠慮した覚えは「スパツと行けと言っただろうがあああああ！」

」

清、そんなだけ大きな声出るなら応援団でもやりやよかったのに。そしてきつと近所迷惑だ。

「んだから、お前等知らねえだろーけどさ」

「んむ、んむうむむ」

「……篠さん。あなたは口にガムテはるのが趣味ですか？」

「んーむー」「いや、また話の腰折られたら面倒だからオレがはった」

結果、またも話の腰は折られたと。

「意味ねえじゃん」

「やっぱ甘かったか……」

やっぱて。そしてさらに出したガムテをどうするつもりだ。

……ってか、持ち歩いてんのか？ それ。

「……………う……………む」

何かもごもご言ってるけど聞こえないな。

「ほら、今度こそすぱつと行け！」

「いや……十日前、俺誕生日だったのに誰も何も言ってくれなかつ

たなーって……これだけ」

十日前が誕生日だったのに今更気付いた俺も俺だけど。

「……そーだったの？」

「うん、そーだったの」

「おめでと」

「ありがと」

……何かスッキリした。

「ぷはあっ！」

あ、篠。口のガムテ取るの早かったな。ぐるぐる巻きだったのに。

「おめでと」

「あ、ありがと」

「幼馴染にさえ誕生日を忘れられた可哀そうな奴」

ケンカ売ってんのか。

213 溜息の原因はケンカ売ってるのか？（後書き）

……我ながら不思議なサブタイ。

夏の誕生日が夏にあることを忘れてて書いたわけじゃないですよ！
嘘です、忘れてました（汗）

214 花子さんと悪の強盗

「はーなーこさーん」

「はーなこさん」

岳だ。

久々に三階の美術室の前にある使われてない女子トイレことトイレの花子さん達の住処に来てみた。

そしたら、

『こないで下さい！　ここは私達の家です！』

『あたしの家はあたしの家。あんた等の家もあたしの家なんだよ』

『なんだよーっ！』

何か修羅場っぽい。

一番お姉さんの花子さんと、サンガラスの女の霊が向かい合ってる。

オレが一番気になるのは、サンガラスの女の後ろで『なんだよーっ！』とか言ったサンガラスのお団子女だけだな。

「光、どーする？」

「見てよ」

鬼かお前。

まあ、イマイチ状況分かんねーしな。見てよ。

『純さん！　何とか言ってく下さい！』

どーやら見させてはくれないらしい……って、

「オレはにーちゃんじゃねーっ！」

『姉さま、こいつは、こそあど言葉よ！』

「それもちげーっ！　岳だよ！　岳！」

何でこそあど言葉！？

『む？　何だお前』

『何だー！？』

『ここの生徒か、なら当然先輩のあたしの言う事を聞くんだな？』

『聞くんだなーっ!?!』

『お前ちよっと黙れ』

『黙れーっ! 痛っ!?! 何すんだよ姉御ーっ!』

お団子女が殴られた。でも多分、オレも同じ事するな。

「先輩? オバサンこの卒業生なの?」

『だ、あ、あ、れ、が、オバサンだってえ?』

『だってえーっ!?! よく分かったな!』

事実なのか。

『だからお前黙れ』

『黙れーっ! 痛っ!?! 何すんだよ姉御ーっ!』

さっきと台詞まるで同じだな。

『ふんっ、あたしはまだ三十だ!』

「わお、オバサン」

『黙りな!』

サングラスで睨まれるって怖え。

「それで、お亡くなりになったのは……」

『二十年ま——あ、いや、ついさっき!』

「おばあさんだ」

『五月蠅い!』

『五月蠅い!』

あ、お団子女復活。

「んで、花子さん、何争ってんの?」

『無視するな!』

『なーっ!』

一文字!?!

『皆でお茶してたらですね……』

……まさか、洗剤茶? 飲んだの?

『そこのおばあさま達が突然、ここを家にするとか仰いまして』

『こら、誰がおばあさまだ?』

『だーっ!?! 大正解!』

『いい加減お前黙れ』

『黙れーっ！ 痛っ！？ 何すんだよ姉御ーっ！』

お団子女、ちよっとうっさいな。……ちよっと？

『ええい、全く七面倒くさい！ とっとなと出て行け！ おかっぱども！』

『お前が出てけーっ！』

『お、ば、あ、さ、まっ★』

……あれ、華子？ 何トイレの隅でじめじめしてんの？

『私が言おうとしたのに……はなことハナコに言われたわ……ふふ、そうよね、私なんか失敗した折り紙よ……ぐしゃぐしゃになつて捨てられるのよ……ふっ、あははははは』

怖っ。

『……お前達……あたしの恐ろしさを知らないからそんなことを言えるんだ。あたしが誰か知らないんだろ？ あたしは、生きてる時に銀行強盗から宝石強盗まで悪の限りを尽くした大強盗レーナ様だぞ！』

強盗しかしてねえじゃん。

『不覚にもイカを喉に詰まらせてこんな事になっちゃったけど……大盗賊の死因イカかよ。』

『大丈夫だ姉御！ 僕ちゃんも同じイカを喉に詰ませた！』

お団子女もかよ！

『今日もお茶が美味しいですね』

『そうだね、ねえたま』

……いやあの、何くつろいでんのトイレの花子さん四姉妹。

何で洗剤茶でくつろげるの。

『無視するなあああああ！』

『なーっ！』

「あ、やっと思つた。ただ冷奈じゃな？」

お、死神の誰かさん。

『ひっ！？ し、死神だよ姉御！』

『慌てるんじゃないよ！ 逃げ道を探せ！』

いや、あんた等壁抜けられるだろ。

んでもって、便器に向かって叫んでるあんたが一番慌ててるよ、婆さん。

「いやー、やあっと捕まえた！ よくもまあ、二十年も逃げよう思たな？」

『いつ死神に捕まるか分からないスリルが楽しくて。強盗してた時みたいで』

「あ、そうそう、生前何か悪いこととして、反省する事無く死んだ奴には地獄めぐりが待っちゃようよ」

響きは楽しそうだな。

「どんなの？ 楽しい？」

「まさかー！ 俺の後輩が一遍行っただけど、引っ張り出さんと戻って来んかったわ」

『うそん』 『うっそおーっ！？』

「知らんかったと？」

『『知らんわ！』』

「ははっ！」

何かこの死神、悪モンに見える。

『ありがとうございます、何とお礼を申してよいか……』

「いや、仕事ですんで、それではー」

……あれ？ あの死神、婆さん達置いて行きやがった。

『姉御！ あーゆーのを生粋の馬鹿って言うんだな！』

『ああ。混じりけの無い、とにかく馬鹿だな』

何かこの二人は呆然としたまま――

華子にトイレに流されていった。

オマケ

「お兄ちゃん、地獄ってどんなところ？」

「地獄？ ……健康ランド」

「地獄じゃないじゃん」

「いや、痛い思いして健康になるようなところ」

「お灸とか？」

「そう」

「……地獄って言うか？ そんなトコ。」

215 好き嫌いのお話

「ごちそうさま」

「光ー、トマト残ってんぞ」

「トマト」？ 見えないなあ。あはは」

「嘘つけ！ じゃあお前が今流しに置こうとしてる皿の上でころころ転がる赤くて小っちゃいそれはなんだ！」

忍でーす。

おとーさんはまだ仕事、おかーさんは小学校のPTAの懇談会で居ないため、兄妹四人での今日の晩御飯は皆大好きハンバーグです。副菜はプチトマトと百切りキャベツです。

百ぎりキャベツってのは……んと、とりあえず千切りより太く切ったキャベツだよ。

「ほら！ トマト食べ！ この赤くてつやつやなうまそーなトマトを食い！」

「毒もってそうな色だよねー！」

「んなこたー聞いてねえ！」

昔は毒もってるって考えられたらしいねー。トマトって。

「うめえじゃん、トマト！」

「変な感触だよ」

「なあ姉ちゃん！」 「ねえ純お兄ちゃん」

『そうだね（な）』

……逆のことをそれぞれ聞かれて、全く同じ答えを返す。

つまり、あたしと岳はトマト好きだけど、純兄と光はトマト嫌いなんだよね。

「でもにーちゃんトマト食ってんじゃん」

「だって食いねえ訳じゃねえし」

若干顔しかめてるもんね。

「ほら光！ 食いねー訳じゃねーんだから、食い！」

「純お兄ちゃんの裏切り者〜!」

「……忍、俺が今言ったのって、裏切ったようなことだったか?」
ある意味。

「んー……」

あ、純兄が何か考えてる。岳、何が起こるか分からないけど気を付けておいた方がいいよ。

「よし、岳。ナス食え」

「何でっ!? 何で突然ナス!? おかしーだろ、何で今ナスが出てくんだよ!」

岳、ナス嫌いだもんねー。

「確か冷蔵庫にナスの漬物あったから食えよ」

質問の答えになって無いよ。ってか、答えようとさえしてないよ。

「それはご飯のおマケだろ! 食わなくてもいいだろ別に!」

「じゃ、母さんに言っただけ明日の味噌汁にナスを「止めろっ!」」

岳……滅茶苦茶必死じゃん。

「いやもうホント、嫌いなモン無理やり食べさそうとしないで!」

「岳が今やってただろ?」

「あう……こ、これはおかずだし!」

「無理やりは駄目だろ」

「んじゃどーしろと!」

ほんとだ。どーしろと?

「光」

「は〜い〜?」

光……怖がってるよ? 半歩引いてるよ?

「ちよつと来い」

「う〜……」

「来い」

あ。来た。何て素直な。

「光、トマトの嫌いなトコは?」

「ぷしゅってなるでしょ〜、びちゃってなるでしょ〜、汁不味い〜、

種変な感じする」

それがいいのに。汁だって不味くないよ。

「んじゃ、汁抜いちまえ」

「いいの？」

「食わんよりマシだ」

いいの？

「お袋居ねえし」

待たんかい。

「んで、岳のナスが嫌いなのは」

「火い通したらグニってなるじゃん！ 全体的に不味いし！」

「そりゃどうしようもねえな。ガンバレ」

扱いの差がひどい。

確かにどうしようもないけど。

216 ばたばたでない朝

「にーちゃん」

「眠い、怠い、日光消えてしまえ。何の用か知らんけど忍に言え」
うっわ、聞きました奥さん、あまりにも酷いと思いませんかこの
反応。

誰だよ、俺。あ、何か訳分からん文になった。

岳だ！

さっきのにーちゃんの言葉に突っ込みたいことがも一つ！

「日光消えてしまえってなんだよ！？」

「岳の声消えてしまえ」

「人魚姫かよ！？」

「姫？ 岳が？ オカマは嫌いだ」

そうじゃねえっ！

「つつか、滅茶苦茶元気じゃなかよ！」

「元気じゃないもん」

子どもみたいな返し方すんなよ！

あれ？ 中学生って子供？ でも電車大人料金だし、未成年だし

……うーん。

何か。年上に子どもって言うとう自分が赤んぼみたいな気がする。

これはヤだ。

「ったくー。何でいつも無駄に早起きするくせに今日は寝てんの
！？」

「無駄には余計だ」

「質問に答えろよっ！」

つつか、枕に顔うずめてねーでこっち向けよ！ 誰かが言ってた
ぞ！

話をする時は相手の目を見なさいとか何とかかんとか。

「あーもー、ガッコ遅れてもしーらね」

「そうしてくれると助かる」

「何でっ!？」

「……しまった……」

しまった!？　しまったって言ったよな今!？　何がしまった!？

「じゅーんにー、学校遅れるよー」

「ん、今何時？」

えーっと、七時三十分。

……こんな時間から起きてどーやって遅刻するんだよねーちゃん
は!？

オレだって起きてるけどさ。これはまあ、にーちゃんに起こされる
時間がいつもこんなもんだから起きちゃっただけであってだな。

あれ？　オレがにーちゃん起こす側に居るってことは……もしか
して立場逆転？　何か知らんけどにーちゃんに9勝った？　何でだ
よ。でもやったー。

「ほらほら!　起つきろー!」

「岳、今黙ってた間に何を考えてた？」

「何もお？」

「嘘吐けや」

ちよっと怖かった、何だよ今の声。ちよっと笑含んだような声だ
ったんスけど。怖いです。おねーちゃん助けてー。

「お姉ちゃーんー!　ちよっと来てー!　ピンチなのー!」

朝っぱらから何のピンチに陥ってんだよ光は。

「宿題真っ白ー!　算数ー!」

……確かにピンチだ。

「答えは教えないよー。ヒントなら出してあげるから自分でやりな
さい」

「あうー。超特急でねー」

ねーちゃん、教師かアンタは。

「んでにーちゃん、どーしたんだよ。らしくねーの」

「……………すー」

おとーとが折角兄の心配してんのにシカトかよコラ。

「おーい！」

揺さ振り！ でもにーちゃんこんくらいじゃ起きねーよな……。

「止めろ馬鹿！」

……あ、起きたわ。んでもって怒られたわ。

「んと、何かごめん？」

「……ん、凄く謝れ……」

日本語変じゃね？

「にーちゃん、何か声苦しそうなんだけど」

「ほっとけ。今は寝かせろ」

「うー……はあい」

あれ、時計見たら、そろそろにーちゃんたちは出ないと遅刻な時間だったんだけど？

217 クラスが一つになった件

「なあ、村田。紺と白のムカデが居たら怖えよな」

「何か意味分からんが馬鹿にされてるのは分かった。ぶっ飛すぞお前」

純兄がそう簡単にぶっ飛ばされるもんか。

忍でーす。

来週の体育大会に向けて、学級全員でのムカデ練習が始まりました。

上に来ている体操服はもちろん白で、下に来ているジャージは紺色で、ムカデ競争をする時は必ず履かないといけないから……上半分は白で、下半分は紺色のムカデが出来上がってるんですねー。

おお、確かにこんなムカデが居たら怖い。

そして、村田が純兄にそれを言われて馬鹿にされたような気分になったのは……純兄が足怪我して参加してないからです。何処で怪我した。おい。紺と白のムカデより怖いよ。

足の怪我は軽くないみたいで、一本とはいえ松葉杖ついてるから……多分体育大会出れないなあ。

一組の切り札！……純兄より足速い人、何人かいるけどね。

朝起きなくて結局遅刻した純兄が、これが原因と言い張るのでクラス全員で突っ込んでやりました。

足怪我したのと朝起きる起きないは関係ないだろ！

笑ってごまかされました。普段笑わない奴が笑うとごまかせちゃうのがズルい。

「皆！ やるぞーっ！」

『……………』

あ、何か全体的にシーンってなった。

やるぞって言った人、はなうえ花上は……何でもバスケットをやった時に『やるーっ』って言い出した人。

「何でシケんの!？」

たまにノリで発した言葉が滑る、なっくんの笑いの種によく
なる娘。

「と、とにかく! 早くやろ! ね!？」

『何を?』

全員ボケ。始めてやったなあ。

「ムカデ! 皆で足に繋いでるこれは何!? それはロープ!
ムカデ用のロープ!」

『……………』

「だからなんでシケるの!？」

大丈夫、なっくんにはウケてるから。なっくんのツボって分
からん。

「はいはい、ほら、五秒前からカウントするから、走れよー」

柿の種、今までどこに居たの?

「高山——ああ、純の方だから、お前関係ないから」

何かちよっと傷つく言い方だったのですが、先生?

「何」

「あっちにベンチあるから座つとけ」

「いらん」

「いや、いらんじゃなくて……まあいいや、本人が言ってるんだし
まあいいんだ。」

……ところで、ウチの学校のグラウンドにベンチなんて無かつた
と思うんだけど。

そしてなんか、先生の言ったベンチって言うのがどー見ても手作
りなんだけど……。突っ込んだじゃダメかな?

「とりあえず、もうちよっと下がってて。突き飛ばされるぞ」
ムカデに?

「やれるもんならやって見やがれ!」

純兄にしては珍しく声を張り上げたと思っただら……。

『やってやらあああああ!』

クラスメートの皆さんが反応した。

「そうじゃなくてね!？」

いいじゃん。士氣上がったよー。

「行くぞーッ!」

応援団長の迅谷じんたにの声に合わせてー。

『いっせーのーでっ! いっちにっ』

走りだ……あれ?

「ちよつと!? コースあっち!」

「ん、来ると思った」

三年一組のムカデはスタートするなり方向を変えて、純兄の方へ突進!

それを純兄はピョコピョコ逃げてるんだけど……。

当然、まさか本当に追いかけるとは思ってなかった人も大勢いる訳で。

『わあああああつ!』

こける人が大量発生する訳なんだよ。

「おいおい……いきなりこけんなよ」

無理だろ。

「ちよつ、お前等! とりあえず高山兄あにぶっ飛ばしに行くぞ!」

先頭の蔵元くらもと、どうやら純兄の挑発に思いつきり乗ったようです。

『お、おおー?』

「やる気が足りない!」

『お、おおー!』

「よっしゃ、逝くぞおおおおお!」

『逝きたくねえっ!』

ごもつとも。

「ほらほら、俺を突き飛ばすんだろ?」

『やったるぞこらああああ!』

……誰、今蔵元と一緒に叫んだ奴。

「清くん、耳が痛い」

「五月蠅い」

何だ、清か。

桜と篠と一緒に真中の方に居たんだね……。あ、ちなみにあたしが居るのは前の方。今更ながら。

「迅谷！」

「行くぞーッ！」

『いっせーのーでっ！ いっちにっ』

いっちにっ。あ、さっきみたいにこけない。

行先はつきりしてないのに。すげー。

「高山兄iiiiiiii！」

「顔怖えよ」

どんな顔してるの？ 見たい。

あ、純兄がこっち見た。何か言ってる。

『般若』

あたしの心の声が聞こえたのか！？

——数分後

『はあ、はあ』

「おい、もう終わりか？」

『まだまだあっ！』

クラス心が、純兄を突き飛ばす基ぶっ飛ばすことに集中し始めた。

——数十分後

『はあっ、はあっ』

「おーい、もう終わり……」

『まだ高山ぶっ飛ばしてない！ 柿ピーは黙ってろ！』

余計なものが入った一組の担任はショックを受けて何も言わなく

なった。

——さらに数十分後

『待ああああてえええええ！』

「デメエ等はゾンビの集団か！？」

体力のない人もどういふ訳か気力で体力を補い……

「おらあっ！」

先頭の蔵元がついに純兄をぶっ飛ばした！

……え？　ぶっ飛ばした？

「純くんが三メートルくらい上に飛んでる」

「飛んでるな……」

「やった！　やっつぶっ飛ばした！　言葉通り文字通り！」

どんな飛ばし方したんだよ蔵元。

「……純、大丈夫だと思うか？」

『……………』

純兄ピーンチ。

あたし等もピーンチ？

「ちよっ！？　助けに行かないと！？」

誰かが走り出そうとして……こけた。

さっきまで凄く息ぴったりだったのに！？

と、皆で仲良く盛大にこけたところで……。

純兄が持ってた松葉杖を地面に立てる。

それを軸にしてロンダート（側転の途中で体をひねって、両足で

後ろ向きに着地する奴）っぽいモノをする。

片足負傷中だもんね、片足で着地するよねそりゃ。

「ん。こんだけ息ぴったりならムカデ優勝できるな、うちのクラス」

でもって何事とも無かったかのように言うので……。

皆、啞然としてた。

兄さん、アンタはどんだけ人間離れしてるんだ。

218 昼寝といえば

「……こんにちは」

「ん、誰？」

「……………美代、です」

怒ったか？ 流石に『誰？』は無かったか。

美代、美代……あ、

「村田の妹か」

「そう、です。ひー……光ちゃん、居ますか？」

「昼寝中。起こすか？」

純だ。

何で俺が来客の相手してんだろうな。怪我人だぞ一応。

「いえ……上がっても、いいですか？」

「ん、いいぞ」

村田の妹が来たって事は春も来るのか？ 遊ぶ時は三人一緒に基本だし。

「純くーん！ ひーちゃん居るよねっ？」

「ん。ついでにみーちゃんとやらも居るぞ」

確かこう呼んでた筈。

「……………ついで？」

『ついで』は怒ったか？ やっぱり。

「ひーちゃん何処？」

「二階^{うえ}で寝てる。起こすか？」

はつきり言おう。同じ事を二度も言って聞くのはとてもなくめんどくせえ。

「ううん。ひーちゃんて遊ぶよ！ ねっ、みーちゃん！」

光『で』遊ぶ？

「やっぱ寝た子相手には顔に落書きでしょ！」

「……………うん」

「絵の具使うなら布団に落とすなよ」

『止めないんだ……』

楽しそうで俺がめんどくさくねえ事は認める主義なんだよ。

実際、幼稚園位の時に文月くんによったら面白かった。つか、幼稚園児がやったにしては何か芸術品が出来てた気がする。

皐月姉の『どこぞの民族の仮面風』には負けたけど。

「でも、絵の具は使わないよ」

んだよ、面白くない。

「油性ペン使うから！」

「それはやられる方が余にも哀れだから止めろ」

コレも文月くんによったら、滅茶苦茶怒られた。泣きながら。

正直に言って、額に『肉』とか頬に『我こそは馬鹿である』とか書かれた奴が泣きながら怒るから、まるで怖くなかったけど。

むしろ笑いこらえる方が大変だった。夏なんか笑い死に寸前だったと思う。

「……色鉛筆、は？」

「色つかねえよ」

どうせ使うなら紙粘土を顔に塗りたくって乾かしてから……窒息死するかも。

「墨汁はどうかない？」

何で水性ペンスルーしたんだこいつ等。

「純くん、墨汁ある？」

「墨汁は十中八九布団につくからダメだ」

これは最近、死神仲間が『下剋上だよ！』とか馬鹿な事言って妙羅にやったけど……。

妙羅のお気に入り座布団もとい枕を汚したから、怒った妙羅に頭から墨汁ぶっかけられて。

その被害がお気に入り枕にまで及んで、それは完全に真っ黒になった。……妙羅、馬鹿だな。

「あ、じゃあこれは？ 鼻眼鏡！」

「かけてどうすんだよそんなもん」

「……どーしょ」

考えとけよ。

「あーもう、絵の具でいいや。ある？　絵の具」

「……あります？」

春は家隣なんだからもって来いよ。俺一応怪我人だっつのに探させる気か？

「光達の部屋漁ったら出てくんじゃねえか？」

探す気は毛頭なし。

「……人の部屋漁るのは……」

「ちよつと……ねえ？」

『ねえ？』じゃねえよ。

「これから人の顔に落書きしようって奴が何を言うか」

『それもそうだね』

単純すぎるだろこいつ等。

「へー、私の顔に落書きするの」

「あ……ひーちゃん……」

「あわあわあわわっ!？」

おいこら。

何で二人して助けて欲しそうにこっちを見る。

219 アイスと馬と

こんにちは、お久しぶりですね。

忘れたとは言わせませんよ。ニンジンとサツマイモの甘煮です。

『何でここに居るんだ、デカブツ』

『ぶっ飛ばしますよルービックキューブさん』

『今動いたら不味いだろうが』

そうですね、純さんが目の前で神、じゃなかった紙と格闘してますもんね。

隣では岳さんが『車が走った時間求めろ？ 走った後で求めてどーすんだよ』とか言いながら薄い冊子と格闘してますもんね。

「にーちゃん、あぢい」

「ん」

……クールですねえ、純さん。

「にーちゃん、何か食ってんだろ」

「あいふ」

……違いました。口にモノ入ってて喋れないだけでした。

ころころって、口の中で固いモノが転がる音が聞こえてきます。

「アイス！？ アイスあんの！？ 何味！？」

「れいほーこみけこひよ」

「ほいさっ」

新たな暗号ですか？

れいほーこって、霊の宝庫でしょうか。みけこひよ……三毛猫こひよさんとか？

『誰だよ』

『突っ込まないでください。真剣なんですから』

『冷蔵庫見て来いよ、じゃねえか？』

ああ、なるほど。

……よく分かりましたね。やはりパズルは頭が良いのでしょうか。

『関係なくねえか？』

『響きが頭良さそうです』

『……分かん』

あら、何か勝った気分。

「にーちゃん！ 冷凍庫見たけどアイスなんかねーぞ！」

惜しい。冷蔵庫ではなくて冷凍庫でした。

ルービックキューブさん、舌打ちしないでください。どうやってしてるんです？ 舌無いのに。

「んっく。年中あるだろ。白っぽい透明なのが」

あ、飲み込んだんですね。聞きやすくして何よりです。

「氷かあああああ！」

「棒がついてない時点で気付けよ」

「アイスの種かと思っただけ……」

何でしょう、アイスの種って。アイスって種があるモノなのでし
ょうか。ううん……。

「なあにーちゃん」

「ひまひほがひひ」

「暇ならいーだろ」

……二個目の氷を口に含みましたね。

『ルービックキューブさん、約をお願いします』

『今忙しい、だともう』

岳さん、まるつきり逆の方に捕らえましたね。

「あのさー、このワークになー」

ワーク？ ワーク……仕事って意味でしたっけ？

『あの冊子の事だろ。問題集に見えたけど』

何処で見てるんですか。目、無いのに。

私にはちゃんとありますよ。真っ黒なビーズが……

『体の割にずいぶんと小さい目だな』

だまらっしゃい。

「ひまひほがひーっへふあ」

「わかんねーってば」

岳さん、分かってるんじゃないですか？

「んだからな、このワークの問題でな」

「ん」

あ、あきらめましたね、純さん。流石めんどくせえ病。岳さんが前言ってたことをまねてみました。

「時速七十？の馬が五十mを何秒で走るかってんだけど」

「んっく。偉く変わった問題だな。体力テストか、おい」

三個目の氷に手を伸ばさないで下さい、聞き取りにくくなりますから。

そもそも何で氷がコップの中にスタンバイされてるんですか。溶けるでしょ。

「体力テストかってのはもう突っ込んだ。そうじゃなくてさ」

「ん」

「今時どこに馬に乗って五十mなんか計る奴がいるんだよって方なんだよ」

「昔も居なかったでしょ。そんなん」

「んーま、どちらにしてもどこに馬に乗って……って、ねーちゃんどこから出た！？」

最初からいましたよ。私の陰に。

「ニンサツの裏から出た」

ニンサツって言わないで！

何で忍さんがこの呼び名を知っているんですか！　　と言うか、私は認めてないですよこの呼び名！

『じゃあデカブツで』

立方体の集合体はだまらっしゃい！

219 アイスと馬と（後書き）

『忘れたとは言わせませんよ』

コレの後に入れる『ニンジンとサツマイモの甘煮』という名前を、
書いた私自身が忘れてました（汗）

220 応援団のテンション

「高山兄！ 何っでお前はいつもいつも無駄に早く来てるのに今日は遅かったんだ！」

あたしも居たのに華麗にスルーされました。忍です。

朝学校に来て、教室に入ると。

普段は空っぽの教室に応援団の皆様がそろっていらっしやいました。

「……いや、テメエ等が早すぎるだけだな」

時計を確認。七時二十分。

おお、記録更新だー。何処が遅いんだよ。今までで一番早いじゃんかよ。

どーりで朝、なっくんに『行こー』って言っても『寝てるー』って返事が返ってきた訳だ。

「何か用か？ しんたに？ だっけ。団長」

純兄が人の名前覚えてないとか珍しいー。

「迅谷だ！ 濁点が足りない！ 点々が足りないんだよ！ 何で団長って部分だけは覚えてるんだよ！」

「ああ、悪かった。じんだに」

「誰がダニか！？」

……遊んでるだけか。

確かに濁点付けれるところに付けたらそうなるねー。

「ん、で、何か用か？」

「よくぞ聞いてくれました！」

応援団員A……用があるから来たんじゃないの、あんた等。

「高山兄！」

「ん？」

「先週、ムカデでぶっ飛ばされた時に「ぶっ飛ばし返してほしいと？」そうそーじゃねえよ！」

おお、応援団B、ノリ突っ込み。

「そうじゃなくて、吹っ飛ばされた後にやってたロンダート、怪我した状態でもできるならバク転もできるよねっ？　応援の自由演技で取り入れるから、教えて！」

花上、応援団だったんだ！。

……演技に取り入れる？　今から？　本番今週の土曜日なのに？

『……………』

「何でシケたの！？」

『何かシケなきやいけないような気がして』

同じく。

「いらないから！　ほんとそんなのいらないからね！？」

「それで高山兄、返事は」

「無視するなあああああ！」

『……………』

「そしてシケるなああああああ！」

どうしろと。いや、どうしようもあるけど。

「……いや、なんでバク転できると決めつける？」

『何か高山兄なら何でもできる気がして』

「アホか」

『どーせお前から見たらアホですよーだ』

「開き直るな」

そして何、その示し合わせたようなハモリ方。

「まーいーじゃん。純兄できるでしょ？　練習してたし。近所の空

き地で」

「言うなボケ」

だって事実だもん。

「んでこけて一時腕に包帯ぐるぐるなってたよ」

「言うなって……何、テメエ等。馬鹿にしてんのかその目」

応援団の皆様、何やら珍しいモノを見るような目で純兄を見ております。

「……いや、お前もそんな時期があったんだなあ、うん。人間そう簡単になんでもできる訳無いもんなあ」

可愛いモノを見るような目に見えてきた。怖い。

「兄さん！^{あに} 教えていただけますか！？」

「まさかテメエそれが俺の名前とか思ってたねえだろうな？」

「違うんですか！？」

いや、そこ驚くところ？ ……上靴のゴムの色からして二年生か！。

「美月、バク転はやっぱりレベル高いよ。今から練習して本番でできる訳無いし……。ほら、兄さんもOKしてくれた訳じゃないし……」

もう、二年生からは兄さんってしか呼ばれなさそうだなー。

「やっぱ無理か……」

迅谷、こんな朝早くから来てたんならもうちょっと粘ろうよ。

「誰がいつ教えないと言った」

『教えてくれるの！？』

「誰がいつ教えると言った」

『はあー……』

このテンションの上がり下がり凄いな。

「ん、嘘。教えてやるよ」

『ホントッ！？』

うお、びっくりした。

「出来るようになるまでは本気で地獄だぜ？ いいのか？」

『もちろん！』

あーあー、言っちゃった。

「ん」

あ、何か純兄嬉しそー。応援団、覚悟しといてね？

純兄が何か教えるときはほんっと怖いから。厳しすぎるから。地獄どころの騒ぎじゃないから。前に前方倒立回転（バク転の逆の奴）なんか教えてもらった時にはもう……。

「んー、でも、俺この足じゃ無理だな。口でしか。んだから、手本は……」

あれ、なんで人差し指回してるの？ 何でこっち見てるの？ あたしの後ろだという事を願いたい。

「こいつのになるな」

ん？ 純兄の指した方は……あたしの後ろ？

振返ってみると……誰も居なあい。

っ、ま、り？

「どこ見てんだよ。テメエだよ、忍」

「あたしできないからね！？ バク転とかできないからねっ！？」

逆しか！ 前向きなバク転しかできないからね！？」

自分で行ってて思った。前向きなバク転って何さ。ポジティブなバク転か？

「嘘つけ。教えただろ」

「教えてもらってないから！」

「……あれ？ 岳だったか？」

絶対そうだ。あたしはバク転をした記憶は無い。いや、何かかったいいし、やって見たいけど。

「んじゃ、テメエも一緒に教えるか」

喜ぶべきか悲しむべきか？

「忍が出来るようになれば俺が楽になる」
利用される気分になるべきだった。

オマケ その日の放課後

「……忍」

「何、純兄。応援団とあたしにバク転教えてくれるんでしょ？」

「今日、十五夜だった」

「うん。それで？」

「光等が何もしないと思うか？」

月見団子!?

しかも去年と違って今年はーちゃんと美代と言う二人が増えてる!?! さらに不味いと言うか変なモノに!?!

「去年の生魚入りみたいな月見団子やだよ!?!」

「せめて刺身と言ってくれ。とにかく、今日は走って帰るぞ」

「そだねっ」

ほったらかされた応援団は。

「皆、各自家のパソコンでバク転の動画見てくること!」

大したダメージは負って無いようだった。

……便利な時代になったなあ。

爺さん臭い? ほっとけ。

221 主菜は揚げ物、デザートは卵

「あい、そういう訳で、修学旅行のお昼ご飯、の主菜を決めよー、の巻だよ」

『どういう訳だよ』

岳だっ！

どういう訳か知らんがそういう訳で修学旅行の昼飯決めよー、の巻だ！

巻ってなんだよ。何か巻いてんのか。チーズの海苔巻って結構旨い。

「選択肢はー……白身魚のフライ、チキンカツ、エビフライ、天ぷら」

「天ぷらって主菜か？」

「そこはまあ、あんまりカロリー捕りたくないダイエット中の女の子のためのね？」

『教師が生徒のダイエット気にするなよ』『ナイス先生！』

あれ、女子にはウケてる？ でもさ。

『何でその割には揚げ物ばかりなんだよ！？』

あ、翔とか修也とかとハモった。流石我が友。

「そこんところは二組の先生に聞いて」

あ、責任逃れしようとしてやがる！ 本とに責任ないのかもしれないけど！

「あ、後デザート選べるよ」

何でデザートまで選べるんだよ。

「プリン、ムース、トーストにメレンゲかけた奴、目玉焼き」

「待たんかコラ！」『何で目玉焼きが混ざってんだよ！』

修也、協調性は大事なんだから一人違う突っ込みをするな。

「目玉焼きについてはネタね」

「ネタ！？」

「修也はどうしたの」

「何で全部そろいもそろって卵入ってんだよ！」

卵アレルギーは辛いな。デザートなしか？ 可哀そ。

「あ、大分子供らしくなってきたね、修也も」

「今はんな事言ってるええ！」

「いや、やっぱりほら、デザートにそんなに必死になるところが……
：岳のおかげだな」

オレ！？ オレは単純に修也と、つつか修也『で』？ 遊ぶのが
楽しかったからやってただけなんだけど。

「そこんところは今は流しといてやる。質問に答えろ！」

今は？ 今はつつったか！？

「ごめんごめん、全部ネタ」

「歯あ喰いしばれ！」

『まあまあ』

暴力はよくないぞ修也くん？

「ホントはデザートなんて選べません」

『歯あ喰いしばれ！』

「まあまあ」

まあまあとか言いながら教卓に隠れるなよ！

「大丈夫、デザートはきつとついてくる。だって小学生の修学旅行だよ？」

せんせの頭の中はどんな風になってんだ。

「とにかく、主菜の方はこの時間内に決めておいてねー。決まった
ら言いにおいで」

えーっと、選択肢何だっけ？

白身魚のフライ、チキンカツ、エビフライ、天ぷらか。

うーん、まず、エビフライは十中五、六はほとんど衣でしたオチ
だろ？ オチってなんだ、自分で言っという何だけど。

天ぷらはー、うん、主菜って言わねーよなコレ。はい駄目。

あとはチキンカツと白身魚のフライかー。うーん……。

「修也、修也は何にするの？」

「……エビフライかな。奈那子は？」

「あたしも！」

古閑、絶対今決めただろ。一緒だったら何なんだよおい。

「翔一、翔は何にすんだ？」

「断然チキンカツだね！」

「このチキン野郎！」

「何でっ!？」

何か言ってみたかったんだよ。

……あ、翔にチキン野郎何か言ったら、オレがそれ食べたら絶対仕返しされんじゃん。

よし、白身魚のフライに決定！

……消去法やるとちよっとネガティブな気分になるのは何でだろう。

222 セコい奴等

「じゃじゃーん！ 未理阿ちゃんでした！」

「霧瑠依くんでしたー」

「帰れ」

「酷いでした！」 「なんでー？」

うるせえんだもん。

純だ。あ、またコケた。

ちようど校舎の陰になるところに置かれた、どこからどう見ても素人の手作り、ちよつと動くだけでガタガタ言うベンチに座って、ちよつと離れたところであちのクラスのムカデの練習をしているところを見て……あ、またコケた。

こないだはすげえ息ぴったりだったのに。

「ねー、純セーンプーイ」

「ん、まだ帰って無かったのか」

「酷いことばかり言ってたら……お金盗るでした！」

……あ？

「既に盗つという何を言うか。おら、返せ。七百五十リール」

「げげっでした！」 「ぎょぎょー」

バレてないとも思ったか。

リールつてのは霊界の金の単位で、日本円で……大体三千円くらいだったかな。

「贅沢フルーツケーキは旨かったか？」

「何でそこまで知ってるでした！？」

俺は顔が広いんだよ。霊界に限るけど。

「ううー、返すよー。はい」

「霧瑠依くん！ 何するでした！」

「大丈夫だよー、ほかの人から盗ればー」

うん、見事な演技だけど……。

「ニセ札渡すなコラ。しかも何気にクオリティ高えなコレ」

ちなみに、リールは全部紙幣。一リールより細かいか、千リールより大きいのは貨幣になってる。

紙幣か貨幣にするかの違いがよく分からん

「何でバレたでした!？」「まさかのまさかり」

「いいか、あのな。五十リール紙幣は縦八センチ、横七・五センチでちょっと縦長。裏に描かれてるのはテメエ等がサボってる学校の校長と、烏とコウモリ。あと表に描かれてる鳩と鹿。ここまでは合ってる。でも表に描かれてる人物は神校（神の学校の略）の校長で、死校（死神の以下略）の校長じゃねえんだ」

「……くわし」

ちよっと知り合いに作った奴が……いや、なんでもねえ。

「でも、ホントの五十リール紙幣の表面にも、死校の校長が書かれてるでした!」

「似てるけど、ちよっと違うんだよ。死校の方は耳にピアスの跡があってだな……」

「分かるかー!」「分かるわけ無いでしたっ! 汚れだと思ってたでした!」

霧留依の叫ぶところなんか初めて見た気がする。

「俺も言われて初めて気が付いた」

「そもそも何で死校と新校の校長が似てるんでしたっ!」

「噂では双子らしいよー。新校の校長は見たことないから噂でしか知らないけどー」

あれ、俺は死校の校長は新校の校長の分身だとか聞いたけど。

まあ、噂だしな。

「今度校長の耳見てみよー」

「ピアスの跡がきつとあるでした!」

そのまま風のような勢いで去って行こうと……させるか。

『ぐえ』

こいつ等の着てるようなローブに限らずフードってつかみやすい

な。

「なにするでしたっ！ 首絞まったでした！」

「殺す気かー」

「七百五十リール、まだ返してもらってねえぞ」

「あうー」 「気付かれたでしたっ！」

気付かれるも何も。

「今日のところは勘弁でしたっ！ お父さんが病気で……」

「最初は生まれたての妹、次は爺さん、その次はお袋でこんどは親父か。次はいつたい誰が病気になるんだ？」

「おー、のー」 「くうっ、今日のところは素直に払うでしたっ！」

……よし、これでさっき、ニセ札の中に混ざってた本物の百リール紙幣分設けた。

『わぁーっ！』

あ、クラスの奴等、頭から砂かぶったみたいになってやがる。これで何回コケた？

223 素直な泥棒

「うあー、疲れたー」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

大丈夫かなあ。大丈夫なのかなああたし。とりあえず疲れすぎてよく分かんない。

「はい水」

「……変なの混ぜた？」

「酷いな、塩をちよっぴり混ぜただけだよ、しょっぱくないから安心して」

あ、ちようどいいや。汗かいたし。ナイス光。

「ありがとう」

「うん。何してたらそんなに一瞬で水飲めるまで疲れるの？」

えー、何って……。

「バク転、純兄の指導の下……」

「それだけ？」

純兄のスパルタ指導を舐めるな！。

鬼どころの話じゃないからね、ホントに。

出来ても何か小っちゃいことにケチ付けるんだよ。

純兄曰く『演技でやるんだから綺麗に出来なきゃ意味ねえだろ』だつて。あたしはやらないのに！

「純お兄ちゃん。あれ？」 純お兄ちゃんは？」

「うー？ 部屋じゃない？」

「行こ」

「何であたしも？」

「もうちよつと緩くしてもらおうよ」

「んじゃ行く」

じゃないとあたしの身が持たない。

「……あれ、いつかの泥棒のおっさん」

「あ、どうも、ごぶさたしてます」

「あ、ご丁寧にどうも」

「……じゃなくてっ！」

「何で居んの！？　ねえ、純兄！？」

「ちょっと呼んだ」

「どうやってっ？」

「泥棒ーって」

なんつー原始的な呼び方だ。何のために連絡先聞いたの、あの時。ってか、それで来るおっさんもおっさんだ。

「で、なんで呼んだの？」

「本買いに went たかったけどめんどくさくて」

このめんどくせえ病！　確かに足怪我してりゃめんどくささも倍増かもしれないけどさ！

「で、行ってきてもらった」

「行った後！？」

「いいんですか、五十円もいただいて」

そしておっさんも小学生並のお小遣いでパシられんな。

金銭感覚どうなってるのこの人。

……あ、でも一回手伝いしたら二十円の身としては高く感じる。

うーん……。

「おじさん、仕事何してるの？」

「泥棒です」

「ひゃくとぅばーん！」

「ああああそれは止めて！」

じゃあ素直に泥棒とか言うなよ。

「にーちゃん、台所のテーブルに置いてたオレのダーツの矢が無いっ！」

何でそんなもののテーブルに置いてるの。

「うお、何このおっさん」

……何か、うちの兄弟ってあたしも含めて失礼だよなあ。

「おっさん、ダーツの矢盗ったか？」

「はい」

素直だなこの人！

「よし、百十番」

「やめてええええええ！」

耳が痛い。

「返せよ、おっさん」

「はい」

あ、返すんだ。

……何で盗ったの？

「それでは私はこれで」

「ばいばい泥棒さん」

「じゃーな、どこぞのおっさん」

……ほんと、あの人の行動訳分からん。

224 体育大会、の直前エピソード

エピソードの前に、純だ。

体育大会、色分け。ちなみに色決めるのはくじ引きな。

白組、一組連合軍

黄組、二組連合軍

青組、三組連合軍

赤組、四組連合軍

おけ？

えびそーど？ ハリケーン

「いいかー！ ハリケーンのコツ教えるから覚えろよ！」

『はい』

白組担当！ 一応私は女教師だ！

これ読んでる奴、いつやるかはともかくハリケーンのコツ覚えろ

よ！

「一つ！ 棒の端っこに詰める！」

『一つ！ 棒の端っこに詰める！』

何で復唱？ まあ、やる気があるってことでいっか。

「二つ！ 前後の間を極力詰める！」

『二つ！ 前後の間をできるだけ詰める！』

……復唱してるのに揃いも揃って違うけど、意味同じだからいいか！

「三つ！ 足の下に棒を通すときはくるぶしより上げるな！」

『三つ！ 棒の下に足を通すときはくるぶしより下げるな！』

出来ねえよ、つつこみやせんが。

「四つ！ 棒を通った後はすぐにしゃがめ！」

『了解！』

お前等復唱する気無いだろ。

「五っ！」

『押忍！』

「まだ何も言ってない！」

『あい』

「アンカーが頭の上に棒を通した後はしゃがんだまま！」

『はいはい』

やる気あんのかお前等。

えびそーど？ 綱引き

えー、綱引きは、えー、ハリケーンに出ない生徒、まあつまり、色の二分の一ごと対抗になっています。

どうも、黄組担当の魚有といいます……はい。

四月、合って間もない生徒に鮪と呼ばれたのはきつとずうつと動いているせいでしょう。

「行くぞおらああああ！」

はい、私の担当する黄組はやる気満々です。本番で、疲れてしまっていないことを願います。

「負けるかおらああああ！」

ああ、白組さんのやる気も相当なものですね。

分かってますか、これは練習ですよー？ いえ、つねに全力なのはいいと思いますけどね。

「始めっ！」

始めの合図のパアン！ って音、どうも苦手です。いえ、私が撃った訳ではないのですけどね。

……あら、うちの色の強いこと。

そして白の弱いこと。

このまま本番でも上手く行ってほしいですね。

えぴそーど？ 応援

「青組いーっ！ おーえーん！ 始めます！」

ドン、ドン

いいねえ。体育祭って感じで。

青組担当、見た目はヤツちゃん、中身は美術教師の川岸だ！

「青組のーっ！ ゆーしょー願ってーっ！ エールをー！ 送ります！」

ドン、ドン

太鼓っていいなあ。やっぱり応援にはこれが無いと。ぐっじよぶ水中。何故か前の学校には無かったぞ。

「フレーッ！」

団長木村、なかなかいい声してる。

『フレーッ！ あーおーぐーみっ！』

うんうん、この大声があってこそ応援団は成り立つ！

『そおーれ』

「ちよっと待てえい！」

何だ今の声は！ 何だ今の団席の声は！

「団席！ もっと声出るだろ！ ほらも一回！」

『そおーれ』

多少大きくなった、かな？ まだまだ！

「もう一回！」

『そおーれ！』

「そう！ もう一回！ できると思っている一m上を行け！」

何か微妙とか思ったか？ 一mを舐めるな！

『そおーれっ！』

「そう！」

『フレッ、フレッ、青組！』

「そう！」

よし、今度は出来ると思っている二m上を行け！

えびそーど？ ムカデ競争

『せーのーでっ！ いっちにっ いっちにっ いっちにっ』

最速記録は三十二秒、なかなか速いじゃないか。

赤組担当、池中だ。

一年、二年、三年と三つのムカデを見ているが、ここ三日でけたのは三回のみ。よしよし、本番もこの調子で行ってくれ。

……ほかの色はどれくらいの速さなのかは忘れたが。

っと、丁度いいところに高山妹が。

「おい、高山妹」

「今純兄居ないので妹はいらないと思うのですがー」

そこはまあ、いつもの癖という事で。一年の時は担任してたんだから。

「白の最速タイムは何秒だ？」

「えーっとおー。一、二年は分からないけど、一番速いのは二十五秒かな」

「ンなアホなっ！？」

二十五秒！？ どれだけレベル高いんだ白組！

「純兄をぶっとばせー！ って事で、すごい士気上がったんですよ。そりゃもう、般若の面をかぶったような顔になって……ま、今はそんなことしてないから、コレを覗けば三十七かな？」

高山兄、クラスの奴等に恨まれてるのかお前は。

と、とにかくそれを除けば三十七？ よし、コレならいける。

「ま、うろ覚えだから怪しいですけどね。詳しい事は純兄にー。タイム計ってるの純兄なんで」

練習中、タイムは担任が計るものだろう？ 何をやっているんだ、

柿のた……もとい、牡蠣野先生。

……っと、丁度いいところに高山兄が。

「おい、高山兄」

「今忍妹いないので兄はいららないと思うのですが」
まるで同じ事言うな。

「白の最速タイムは何秒だ？」

「えー……二年の三十一秒ですね」

二年に負けてるのか三年。

「さ、三年は？」

「最初は良かったんですけどね。最近はこのけてばかりで……やっ
とこけなかったと思ったら三十七秒ですよ」

もしかして……楽勝か？

えびそーど？ 学級対抗全員リレー
忍です。

ちょぴつと緊張してたりします。

練習だけど、本番通りだもん。

全員リレーは、素走り、二人三脚、おんぶ、騎馬、が全員に振り
分けられてそれでリレーするわけです。

そしてあたしはトップバッターだったりします。

ほら、普通緊張するでしょ？

「高山さーん！ 一位で戻ってきてよ！」

「努力しまーす」

うん、トラック半周ずつでホント良かった。じゃなきゃあたしの
体力持たないよ。長距離苦手。

「位置についてー」

ついてます。

「よおーい」

スタンディングスタートって、位置について、と用意の違いが分
かりにくいのはあたしだけ？

「どん！」

何で銃持ってたのに口でどん！ なの！？

ああ、突っ込んでる場合じゃなかった。ちゃんと走らないと。

クラス全員にシメられるのはごめんです。純兄じゃあるまいし。

……よし、一位で戻ってきてやったぞー！

誰か褒めて。頑張ったよあたし。

「よし、忍。次はもう少し二位との差を開けろ」

「あ、純兄居たの？」

「……よし、ついでにそこらで見てた奴の言葉をまんま伝えてやる」
え、悪口なの？ 怒ったから悪口伝えるつもりなの？

「『高山妹って意外と速えな』」

……褒められているのでしょうか、けなされているのでしょうか。

225 プログラム一ばぁーん

白い鉢巻ぎゅーっと絞める！

「くぁー、いっちゃん最初から出なきゃなんないのか」

うん、そんな事で眠気が吹き飛ぶもんか。

「眠そうだねー、忍」

「うん、桜って確か徒競走の補欠だったよね？ だから出て」

眠い。なぜなら今日は、起こされたわけでもないのにやたら早くに目が覚めたから。くぁー。

眠気全開ですいませんね、忍です。

今日は待ちに待っていたわけでもないけど、一応は待っていたかもしれない体育大会です。

立ったままうつらうつらしているうちに開会式が終わり、プログラム一番、徒競走が始まろうとしています。

……あ、あたしも並んどかないと怒られる。

「いってらっしゃーい」

「行って来まーす」

桜と手を振り合い、いざ出陣！ というような気力は残ってませーん。あしからず。

きっと脳がまだ寝てるんだ。うん。

ちなみに、個人競技は徒競走か障害物競走から選べます。選択競技です。

「あ、忍」

……今一番会いたくない奴に出会った。

ってか、一方的に向こうから来た。先生のサポート役でもしてるのかなお兄さん？

「純兄、四位ビリでも怒らないでよ？」

「いや、一位にならなかつたら怒る。だって一緒に走るの、テメェより遅い奴ばっかだろ？」

脳！ 今すぐ起きて！ お願いだから！ 純兄に怒られるのはごめんなんだよ！ 耳に目覚ましつっこんだるか！ とか思ったけどそんなことしたらダメージ受けるのあたしだよねって脳もあたしの一部ですよなんで体起きてるのに寝てるのおーい！

……とかね、考えられるんだから脳は起きてるよね。

「んと、努力しまぁーす？」

「ん」

おー、怖。

「忍」

「あ、しーちゃん。あたしの前だったんだ」

「どうしよう」

うん？ しーちゃんの口からそんな言葉が出てくると不安になるんだけど。

「あたしと走るの、何か速い奴が居るんだけど」

……五十mのタイム遅い順で並んでるのに？

「気のせいだよ、気のせい。うん」

「いや、学級対抗リレーに出るような奴が、補欠で……」

おー、クラスで二、三番目に速いような奴が？

あ、学級対抗全員リレーとは違うのでそこそこよろしく。

「……あれ？ 学級対抗リレーに出る奴って全体的に補欠できないんじゃないかったっけ」

前に柿ピーがそんな事言ってたような……。

「そうなのか？ あ、おい、じゅーん」

「ん？ どした」

「学級対抗リレーに出る奴って補欠できないのか？」

「そりゃな、補欠にそんな奴が入ったらあっさり勝負決まるし。色別対抗の選手も無理だ」

色別対抗リレーは学級ごとに男女それぞれ一番速い奴が走るもんね。そんなのが補欠に入ったら面白くない。

「そこに学級対抗リレーの選手が入ってるんだけど、補欠で」

「あ、あれ？ あたしの事？」

今さら気付きましたか、青山。あおやま

「黄組か。もう一人補欠がエントリーされてるはずだろ？」

「え、でもあの、綾香あやか得点係の仕事行つてて……」

綾香って誰。

「ん、呼び戻せ」

「今から！？ え、ちよつ、もう二年女子終わりにかけて……」

一年男子、女子、二年男子、女子、三年男子、女子の順番で走っています。

感想を一言。青組、強つ。

そして何気にスタートの合図する先生が赤組のフライング見逃してるぞ、おい。一秒にも満たないようなフライングだけどさ。フライングはフライングだぞ！

「三年男子がやってる間に行けるだろ？」

「ええーっ、あたし徒競走出たい！」

「知るかよ」

……純兄、そんな態度とってるから『高山兄ぶっ飛ばすぞー！』
って言葉で皆の士気が上がったりするんだよ。

あたしも今のはおんなじ事言いそうだけどさ。

「呼んで来なかったら赤組は不戦敗だぞ？」

「何でっ！？」

「いやだから、学級対抗リレーに出る奴は補欠で走ったらダメなんだって」

どんな純兄が機嫌悪そうな顔になってくる……。

「あ、三年始まったぞ、忍」

「えー、どれどれ？」

見てるのは怖いので視線を逸らそう。

お、白組速いじゃん。いけいけーっ！

………あ、コケた。誰だアイツ。紫波か！ シジミか！ あー
あ、ビリになっちゃった。ドンマイ。

「しーちゃん、今さらだけどさ、三年ってクラウチングスタートなの？」

「本とに今さらだな。三年だけじゃなくて二年もそうだったでしょ。」

……はあ、苦手なのに……」

あたしだって苦手だよ。何でわざわざ手え付くの？ 走るときには付かないじゃん！

ざ、屁理屈。

言った所でどうにもならない。

「あ、しーちゃん、次、清だよ」

「うー？ 余裕で勝つよ。清は速いから」

相手を見もせずに言い切ったね。ところで何、足元の砂である意味芸術とも言えるような物体を作り出してるの君。

あ、ちよつと目を逸らしてる隙に清がゴールイン！ 本とに余裕で一位だー。

「ところで、青山どこ行った？」

あれ、居ないの？ 綾香とかいう子呼びに行ったのかな。

「出たいのにー、出たかっただけなのにー」

違った。そこでしゃがみこんで駄々こねてるだけだった。しかも何かこっちも砂で、ある意味芸術作品を生み出しているのすがいかがいたしましょう。

「高山さーん、おーい」

「はい？」

「足、押さえてくれるかな、クラウチングスタートだから……」

あ、ごめんなさい黄組の知らない子。

……って、もうあたしの前！？ さっき最初の子が走ってった所だよ！？ さくさく行きすぎじゃない！？

「はあ、はあー、間に合った？」

お、綾香ちゃんらしき人の到着。凄く息切らしてます、これで走ったらまず間違いなくビリでしょう。

「ん、行ってらっしゃい」

「鬼かアンタ!？」

あ、突っ込んだ。

「ほら、もう始まってるぞ。今から行っても四位にはなれる。頑張れ」

「それビリよねえ!？」

「大丈夫、ビリでも一点もらえる。行かないよりマシだろう？」

「位置についてー」

あ、残念。今行ってももう得点もらえないよ。

「よーい」

はい、用意しましたつと。

「忍、一位な」パァン!

何か最後に凄いプレッシャーかけられたんですけど。

226 プログラム二番、三番！

忍です。今ちょっとブルーです。

徒競走でスタート失敗して、もう少しのところで二位になってしまったのです。誰だクラウチングスタートなんか考えた奴。おかげで純兄に一瞬睨まれたじゃないか。それだけだったけど。

……はい！ 切り替えよう！ 眠気も飛んだことだし、今はプログラム二番、綱引きの応援をしよう！

がーんばれ、がーんばれ。……練習ではダントツで弱かったけど。まああれだ、奇跡よ起これ！

あ、負けた。奇跡、起こらず！ 次は赤組と三位決定戦かー。ここでは勝ってほしいな……。

綱引きって配点高いも……あ、負けた。一瞬にして負けた。どんだけ弱いんだよ白組！

「ちよっ、嘘でしょ！？」 皆！ 次のハリケーンは一位とるよ！」
『おおおおお！』

花上、切り替え早いな。そして皆テンション高いな。

ハリケーンは綱引きと同じ配点だもんね。綱引きで四位とっちゃったんだから、こっちは一位とらないと。

「行ってらっしゃーい」

「行ってきまーす。って、なっくんどうしたの、その怪我」

「綱にめっちゃ引きずられた」

あ、よく見たらそんな感じの人が結構多い。

「そっか。ちゃんと手当てしてもらってくるんだよー」
きっと保健室の先生と救護係の子大変だろうなあ。

「忍、どうしよう」

「今度は桜？ どしたの」

「わたしね、まっすぐにしか走れないの」
イノシシかアンタは。

「棒にしっかりしがみついたら？」

「練習の時にやったら怒られた。忍に」
だって重かったんだもん。

「あ、忍、跳んで！」

人間は飛べないよ。あ、違う？ 跳べ？ 何？ もう競技始まつたの！？

「ほいっと」

「ほら、跳んだらすぐしゃがむんだよ！ 先生が言ったはったやん

！ ハリケーンのコツ五つ！」

桜、関西弁になってるよ。

……って、うわっ、危なっ。もう少しで頭にハリケーンの棒がぶつかる所だった。

「……あれ？」

「どうしたの？」

あたしどこ

「白組、四位じゃない？」

「そうだね」

やばいよやばいよ、二つのドカンと得点入る競技で両方ビリとかかなりやばいよ？

「よし、俺等は逆転するんだな。逆転劇だ」

「よしよしよし、やる気出てきた！」

……………あ。

「いつか村田と一緒に水谷いじめてた奴等だ。ついでに村田も」

「またんかコラ！ 俺はついでか！？」

だからそう言ったじゃん。

「いじめてたとか、人聞きの悪いことを言うな！」
事実じゃん。ちゃんと謝った？

「あ、跳んで！」

うえ？ あ、危ない。

「……なあ岬、何か、すでに二位まで順位上がってんぞ」

「逆転しても大した事じゃ無さそう」

「やる気なくなるからそう言う事言うな！」

やる気なくさないでよ。一位とりたいんだから。

「あたし達が安心して行けるように一位まで上げてよ？ 順位」

『つたり前だ！』

さつきと言ってることが違うような気がします。

今更ながら、あたし達……桜、花上、愛華^{あいか}さん（って名前だったはず）とあたしはアンカーです。責任重大です。そうか？

「あい、行ってらっしゃい美咲ちゃん」

「美咲ちゃんとか言うな！ 何か懐かしいじゃんかよおい！」
懐かしいの？

「頑張ってるね、村田くん」「いっけえー！」「フレ、フレ」
愛華さん、何か器用に指でエールを送っています。はたから見たらいいじいじしてるようにしか見えないよ。

「よし、いいね皆。岬達から棒もらったらダッシュよ、ダッシュ！
一位とるぞー！」

『はい、姐さん』

「誰が！？」

何か言ってみたかった。まさかハモるとは思わなかったけど。

あ、村田達けっこう速い。一位の黄組追い詰めた！……って所で戻ってきたよ。はい、ジャンプ！ で、しゃがめー！

「よし、行けっ！」

そして棒が渡されたー、一人で持ったら結構重いけど、四人で持ったら大したことない。

順位は一位！ おお、ビリからトップまで上ったよ。凄い。奇跡だ。

……とかおもったけど、練習の時も一位だったなああたし達。全く同じ展開で。

「忍！ もっと詰めて！」

あい。

一つ目のコーンを時計回りに、二つ目のコーンを反時計回りに回

って、三つ目のコーンを時計回りで半分回ってUターン。そこからまた、行きと同じように回って……。

「いいぞ！ 一位だ！」

端っこのあたしと花上で皆の足元を通す。うぁー、何回やってもこれ、体制キツイ……。

で、通し終わったら頭の上をまた通して……あ、手が滑った。

「いっつったあ！？」

ごめん、二年男子Aくん。

とっとと拾って、一番前へ。

「棒立てて！ 棒！」

分かってますって。

ほい、終わり！

……疲れたあっ！

「み、皆！ 一位だーっ！ 拍手！」

ぱちぱちぱちぱち……あれ、何か形的に花上に送られてるみたいだぞこの拍手。

で、花上がパッパッパッと手を振ると拍手が止まった。

「ふう。これがやりたかった！」

……さいですか。

227 プログラム裏側

「悪いねえー、高山くん。手伝わせちゃって」

「まるで悪いと思っていけないような口調ですね」

「ええっ、そんな事ないよ？」

わたわたあたあたしなくていいから、ちゃんと手当てしなさいよっ！ 保健室の先生！

玲奈よ。

ただでさえ綱引きで怪我した人が沢山居たのに、その手当が全部終わらない内にさっき終わったPTA競技、玉入れで怪我した大人達は何人も……。

どんなやり方したのよ！？ 玉入れでしょ！？ どうやって怪我するのよ！

玉入れの前のハリケーンで怪我した人が居なかっただけ、まだいいわよね……。

でも、当番でもないのに、保健環境委員の全員が呼び出されるし……じゅ、純まで何か手伝わされてる状態ってどうなのよ！？

本当に中学校の体育大会？ これ。

「いやー、でも高山くん、怪我の手当て慣れてるみたいだねえー。早い！」

確かに、そうね。いつ慣れる程怪我の手当てしたのが気になるけど……。

「口より手を動かさせて言うのが口癖の先生居ましたよね、呼んできましようか」

淡々と無表情で、手当てしてる人の腕から目を離さずにそんな事言われたら怖いわよ、べ、別に怖くは無いわよっ！？ あたしは！

「勘弁して！ あの人は僕苦手なんだ！」

「なら早く手当て続けてください。おいこらテメエ、傷口位洗ってこいや」

せ、先生と生徒で口調が全然違うわね……。

「あと玲奈、テメエもちゃんと手え動かせ」

「あっ、べ、別に忘れてたわけじゃ……」

無いわよっ！

「はいはい。分かったから早く続き。後二、三人だから」

……よく見たら、保健環境委員の人あたししかないじゃないっ！

「皆どこに行ったの!？」

「障害物競走に」

皆!？ 全員!？ そろいもそろって障害物競走に!？

嘘でしょ……。何より、今まで気付かなかったあたしに嘘でしょ

……だわ。

「高山くん!」

「はい」

あれ……得点係（図書委員）の先生じゃない。

「ちよっと手貸して!」

「一つ切って渡せばいいですか」

「グロいからやめて!」 「グロいわよっ!」

こ、怖いわけじゃないわよ!

「得点の計算ですか? 図書委員だけでできるでしょ」

「めんどくさいって言って、今当番の二年生がサボってるのよ!

さっきの障害物競走だって、走り終わった人に得点のカード渡して
くれたのは生徒会の人たちのよ!」

ふ、不良ねー、二年生の図書委員。

そして生徒会、雑用係になってるわね……。

「名前、何て言うんですかサボってる奴等」

「え?」

「後でめんどくせえのが俺に回ってきたという事でシメに行くので」

「それはやめなさい! いえ、本当は行け行けーっ! って言いた

いけど立場的に言ったらまずいからやめなさいと言っておくのよ!」

……言っちゃってるわよね。言いたい事。

「ん、で。どれですか。あ、玲奈。次学級対抗リレーだから応援席あっちで見てくれば？」

あ……そうね。あっちの方が見やすいわよねっ。手当ても全部終わったし！

「じゅ、純もそれ終わったら来なさいよ！」

「ん」

とりあえず、走り始める前に応援席まで行かないとっ！

228 プログラムお昼休み

「水谷くんお疲れ〜！」

「い、意外と速かったのねっ！」

「……二位だった……」

落ち込まないでよ。二位だよ？ 四クラス中二位だよ？

忍でーす。

学級対抗リレーが終わり、お昼休みです。

学級対抗リレーでは、何とアンカーの水谷が三位から二位まで駆け上がりました！ 差はそんなになかったけどー、とか言ったら雰囲気ぶち壊しになるので思うだけにしておきます。

「亮っ、亮っ！ お弁当だよ！ 早く食べようよっ！」

「うん……」

紫波元気だねー。

「水谷いー、テンション下げんなよ。次応援合戦だぜ？」

「そーそ。得点はこっから巻き替えしやいーんだよ！」

「応援は応援で表彰されんだからさっ！ 声出せよおー？」

おー、水谷いじめのメンバーと一緒にご飯食べてる。なにがあったんだろう、とは突っ込まないけどさ。

「柿ピー」

「……あのね、先生の名前はね、牡蠣野胤って言うんだよ？ ピーナッツ関係ないよ？」

純兄……わざと？ わざと柿ピーって言った？

「牡蠣野先生」

「何？」

あら、さっきまで落ち込んでたくせに一瞬で復活した。

「先生、午前中まるで働いてませんでしたよね」

「うっ……柿ピーがショックで、さあ……？」

『うわー、サイテーだこの教師』……って視線が教室の各所から送

られています。

「その分、俺があっちこっち手伝わされたの知ってます？」

「え、そ、そうだったの!？」

『うわー、サイテーだこの教師』

あ、今度は声が出た。先生撃沈。

「って訳で、この豚カツ貰います」

「そんなんっ!？」

復活早いなおい。

「おーい、豚カツ欲しい奴何人居る？」

『くれっ!』

手を挙げた奴が……十人くらい。

「……そう言う訳で、も一個貰います」

「勘弁して! ちょっ、先生のお昼のメインがなくなったよ!？」

豚カツ二つも入ってたの？

「いいだろー、別にー」

「そーそー! 高山兄働かしてたんでしょ？」

「サボり野郎に食べさせる豚カツはありません!」

誰だ最後のセリフ言ったの。

「そんなんあー!」

サボってる方が悪いって事でいいんじゃない？

あ、この豚カツ美味しい。先生って結構いいお弁当貰ってるんだな。

「ねえ、純兄」

「あ？」

「午前中何してたの？」

「柿ピーの代わりと、救護係の手伝いと、得点係の手伝い、かな」
「何でも屋みたいだなー。万事屋? さすがに万は無理か。」

「じゅんきち! 居るーっ!？」

「誰が純吉だこら」

ぶ、部長……オカルトオタクの部長!？」

『ゴム風船か!』

突っ込む側の筈のハルやんが思い切り突っ込まれてる……。

こんな感じで、騒がしくてある意味カオスなお昼休みでした。
誰かが言ってた。『午後からの応援頑張るぞーっ!』

あ、食べたら眠く……。

229 プログラム七番です

「白組いーっ！ おーえーん！ 始めます！」

ドン、ドン

さあ、始まりました、応援合戦。

演技、声の大きさ、タイミング、完成度、等が審査されます。

ちなみに審査員は各学級の学級委員長です。

私ですか？ 美香と申します。

応援団です。きちんとエールをする位置にスタンバっています。

何事も楽しまなければ意味がないのです。体育大会で一番楽しそうな役割と言ったら、やはり応援団でしょう。

「白組のーっ！ ゆーしょー願ってーっ！ エールをー！ 送ります！」

ドン、ドン

本当は団長の座を狙っていたのですがね。悲しいかな、女子は団長にはなれないのです。

男女差別だー、と叫びたいところですがバランスを考えれば仕方ないことです。

ですので、確実に優勝できるような声を出すように、団長の迅谷さんを脅しておきました。ぬかりはありません。

優勝は白組のモノです。

「フレーツ」

っと、私も声を出す時が来ましたね。

『フレーツ！ しーろーぐーみっ！』

『そおーれっ！』

団席の声、期待以上に大きいです。特に……何と言うのか忘れましたが、一年生の男の子の声がとてもよく聞こえてきますね。

「三っ、三っ、七びよおーしっ！」

ドンッ

つと、いつの間にかエールが終わってました。

体が勝手に動くので意識がどこかへ飛んでいました。今なら寝ても演技できるような気がします。流石にしませんか。

ドン、ドン、ドン

『はっ』

ドン、ドン、ドン

『はっ』

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン

腕を前後左右、動かします。たまに肩からポキッと聞こえてくるのは気にしない方向で。

手に持ったポンポンがぐすぐったいのです。ちよつと裂きすぎましたかね。ビニールテープが髪の毛のように細いです。よく丸坊主にせずに出来ましたね私。

『はぁあゝっ』

ドドドドドドドド……

ドンッ、ドンッ、ドンッ

『はっ！』

ポンポンを持った手を思い切り上に突き出して、シメッ！

私的には少し納得のいかない終わり方です。

最後に組体操の一つや二つ入れてもいいのではないのでしょうか。

三三七拍子なんだから。

意味が分からない方は勝手にストーリー何か作ってください。

私も意味わかりませんから。

さて、次は自由演技ですね。

私もバク転マスターしましたよ。高山兄さん、厳しいですが意外と教えるのは上手いですね。

体中あざだらけになりましたけど。正直言うと今も痛いです。

「頑張ろう、日本！」

『おおう！』

自由演技の掛け声に何でこれを入れたのでしょうか。

提案したのは私ですけどね。

頑張れ日本、頑張れ東北。

ちなみに太鼓のリズムは、童謡『小さい秋見つけた』を少しアレンジしたものです。

案外応援っぽくなりました。ずっと同じ音程だと。

太鼓団が『意外と難っ!?!』とか言っていましたけど、そこは無視です。

さて、まずは前から順々に女子は側転です。男子はその間、空手の型を組み入れたような踊りをしています。

地面に置いておいたポンポンが若干風で吹き飛ばされてしまいましたが、とりあえずは成功です。今度は側転した先に置いてあるポンポンを手に持ち、中央に集合します。男子は変わらず、空手の以下略。

縦一列に並んだら、ポンポンを上に掲げ、後ろから順に散らしていきます。おろすんじゃないですよ。パツと放り投げるんです。

退場の時行方不明になるかもしれませんが、そこは気にしては負けです。

ちなみに、応援席は応援席で簡単に手を躍らせたり、たまに何かセリフを叫んでいます。

さて、ここからが本番です。

まず、女子がロンダートやバク転、倒立……何と言うか忘れましたが、バク転の逆の奴で端へ寄ります。

そこへ一年男子がヘッドダイビングッ！　ってダイビングしてどうするんですか埋まるんですかあなた。

失礼しました、ヘッドスライディングしま……何か技しようとしてしくじりましたねこの子！

その上を飛び越えるように二年男子がバク転の逆の奴を……あ、手をつくところがしっかり一年男子の背中ですね……。ぐっじょぶです。

さらに、三年男子二人がまるで交差するようにロンダート↓バク

転を決め、ポーズ！

これにて演技終了です。

「白組いっ！ おーえーん！ 終わりますっ！」

ドン、ドン

ふう、達成感いっぱいです。やはり楽しまなければ意味がありませんね、こう言う事は。

『白組の演技に、問題点がありました』

それを放送で言いますか普通。

何ですか、問題点って。

『自由演技では、応援団による危険な技は禁止されています』

……ぱーどうん？

230 プログラム八番

「あー！空！、しろーい体操服！、まっしろーい旗！」
白が二つ入ってるんだけど。

「シジミ、何でもいいからその耳に悪そうな歌をやめてくれ」
「高山くん酷くない!？」

酷くない。だって本当に耳に悪そうだったから。
純だ。

午前の部の得点は高い順に、青342点、白311点、赤298点、黄296点だ。

これからムカデ競争だけど……こけなきゃ良し、って感じだしなあ……。大丈夫か？

ちなみにコースは、まっすぐ走って途中でおいであるコーンを回り、戻って来るって感じ。体育の教師が言ってた。『カーブを制する者はムカデを制す!』確かにそうだがこけたら終わりだな。

「いやったあああああ！ 一位！」

ん、一年が戻って来たな。次は二年か。

「……白組三年！ 円陣組も！ 絶対勝つぞー、おー！ ね！」

花上の言葉で思ったんだけど。全校生徒で円陣組んだらどれくらいの大きさになるんだろう。

いや、ほんとどうでもいいけど。

「おい高山兄い！ 杖置いてテメーも入んだよ！」

「何で？」

参加できないのに。

「えー……て、手当て係！」

「怪我人出る事前提かよ」

「いーから来い！」

はいはい。

「いーぞー、花上」

「いくよ？ 絶っ対っ勝つぞーっ！」

『おおおおおお！』

痛っ。何踏み込んでんだ俺。怪我したこと忘れたか？ 周りの雰

囲気に流された……。

「純って意外と馬鹿ねっ！」

「うっせ。とっと足の紐つけやがれ、玲奈」

「わ、わかってるわよっ！」

あ、こら、適当なのつけるな馬鹿が。順番狂う。

「あーっ！」

こっちは何だ。

「二年全クラスこけやがった」

怪我人は出してくれるなよ？

「純に、純に」

「んだよ忍」

「純兄が先導したら確実に一位とれると思うんだけど」

「餌か俺は。反則だろうが」

「やっぱり？」

やっぱりとか思ってたなら言うな。

「あ、二年は二位みたい」

「ちよっ、これであたし等四位だったらダサイじゃん！」

さっき絶対勝つぞの円陣やろうと言い出したのはお前だろうが。

何で今更マイナス思考になってんだよ。

『スタート一分前』

『きゃあああああ！』

「なんでテメェ等叫んでんだ？」

『何か緊張して』

緊張したら叫ぶのか、端迷惑な奴らだなおい。

『三十秒前』

『ぎゃーっ！』

やかましな。

『十秒前、九、八……』

「ちょっと高山兄、助けて!？」

「何から」

「緊張から!」

無茶言うな。

『五、四、三』

『ぎゃっせーのーで!』

ちゃんと走れんのかこいつ等。今更ながら。

『いっちにっ!』

あ、ちゃんと走れてる。ダントツで。

ダントツでドベだけど。

奇跡が起ころん限り勝つのは無理だな……。

『わああーっ!』

お、赤組がこけた。やっぱカーブは難しいもんな。

黄組はまあ足取りが危なくなっかしくなってきたからいいとして……

…あ、こけた。

問題は青組だな。いちいち強い。総合得点もダントツでトップだし……。

つと、やっと白組もカーブ終わったか。

……あれ。

何か、妙に速くなりだした?

ゴール地点に居る、俺に向かって、クラス全員が、全速力で向かって来……。

「い、い、い、いやっつったああああああ!」

「一位!? 一位なのあたし達!？」

「見たか! 俺のゴールする時の滑り込み!」

ああ、蔵元の奴ヘッドダイビングするのかと思った。つまり潜る気かと思った。額から血い出てるぞおい、気付いてるか。

……ところで。青組、抜いたのか?

四分の一位差つけた相手を?

すげえ……とか思いきや、な。ゴール直前でぎりぎりゴールしきれずにこけてる青組が目に入ったりしてな……俺の褒め言葉を返せ。運の強さは褒めるけど。

「奇跡だ……。奇跡が起こった……」

「うんうん！ 亮、やったねっ！」

「忍っっ！ やったね！」

「うんうん！ やったやった！」

「みんなぁーっ！ 円陣組むぞぉーっ！」

またか、とは思うけど……まあ、悪くないか。

「ムカデ優勝ーっ！」

『やったぁああああっ！』

よく見たら、泣いてる奴も居た。

テンションに任せて、何か背負い投げとかやってる奴が居た。余計に怪我人を増やすな。

……これ見ると、ちよつと、ムカデに参加できなかったのは寂しかった、かな。

「おい！ 高山兄い！」

「蔵元、血だらけの顔を近づけるな」

包帯残ってたっけ……。あ、テープの方が残り少なかったかな。

「いや、あの。まあとりあえずだな！」

とりあえずだな、じゃなくて傷口洗ってこい。

「一人でシケた顔してんじゃねえぞって事だ！」

「……そんな顔してたか？」

「少なくとも俺にはそう見えた」

「あたしにもー」「私もっ」「おれも」「僕もーっ」

あー……ん、よし。

「じゃあそれはいつまでたっても怪我した奴等が傷口を洗わんせいだな。俺は手当て係なんだろ？」

『えっっ』

ちよつとまでやこら。今『えっっ』つつた奴全員が怪我してん

のか？　ほぼ全員じゃね？

……今年の体育大会は怪我人祭りか。

「傷口洗ってきたらお前が全員の手当てするんだな！」
『行こーっ』

え、ちよつと待て、俺一人で？　全員？

「よかったねえ、純兄」

「何がだよ……」

「ちゃんと参加できてるじゃん」

「……ま、な」

……今はめんどくせえの方が上回ってるけど。

「じゃああたしも傷口洗いに行ってきたまーす」

大事な事だからもう一度言わせてくれ。

今年の体育大会は怪我人祭りか。

231 プログラム最後だよ

「ほんつとにどうなっただよ今年の体育大会！」

「きゃー、純くんが機嫌悪い」

半端なく怪我人だらけなんでもねえ。

体育大会前の純兄を始め、三年一組は全員怪我したし、すれ違う別のクラスの人もほとんどが包帯とか伴奏とかつけてるし……。

忍でーす。

色対抗リレーが終わり、最後の競技、三年の色対抗全員リレーが始まろうとしています。

何でこれが最後？ 普通色対抗リレーを最後にしない？ 一番盛り上がるんだから。

「デメエ等、今度は怪我すんなよ。んで、俺にすうつげえめんどくせえ事させたんだから一位とれ」

なんちゅー理由だ。

『アイアイサー！』

そしてどこの軍隊だここは。

『じゃあ任せた高山妹！』

「任された」

……けど、じゃあって何！？

「はい、トップバッタージャンケンしてー！」

最初の位置を決める大事なジャンケン。ぶっちゃけ最終的には全員内側に入るから順番関係あるのかと思うけど。

「さーいしょーはグー、じゃーんけーんぽん！」

……あ。負けた。一人負け。

「……ねえー」

「大丈夫！ 君はやれる！」

あたしが何を言おうとしたと思ったんだろう。この人。

「そうだ！ 一番外側だからってなんだ！」

「高山さんは速いよ！ 自信持って！」

「いっけえ！ 高山妹！」

「あの高山兄の妹なんだから行ける！」

……何か泣きそう。何でクラスの皆に励まされてるのあたし。言おうとしたこと忘れたじゃんか。

「位置についてー、よーい」

パンッ

よし、何か知らんが励まされたんだし、頑張ろう。

「行っけー！」

「ゴーゴーシノブ！」

誰、今外国人みたいな言い方したの。

「あい、頑張れシジミ」

って言ってバトンを渡すと、

「紫波だよっ」

って笑って返された。

お、紫波……遅い！

騎馬かおんぶの上へのっときゃ良かったのに……。

「紫波いいいい！」

「がんばれーっ！」

「シジミって呼ぶぞ！」

脅し？

「そう言えばシジミの名字って何？ 清かなつくん、知ってる？」

「汽水きすいだったと思うぜ？」

何だ、シジミでいいじゃん。むしろあってんじゃない。

「ありがと清。二人三脚がんばれー」

えーっと、順位は……あら、三位。

「頑張れよ、二人とも？」

『ぴゃいっ』

何か笑顔の純兄に話しかけられた途端、二人とも気をつけしたんだけど。……怖いもんねえ。

「あと忍はちゃんと列に並べ」

「はい」

あ、清となっくんはバトンが渡った。

……速い。

何か、めっさ速い。

二人三脚なのに、二人とも全力疾走してる。

純にーばわー？

「海中くんすごーい！」

騎馬に乗るっぽいポニーテールの子、清は？

……おお、なっくん達の次の二人三脚も速い！

もしかして、一位まで上れるんじゃない？……。

「よっし！ 青組抜いたあああああ！」

「赤も抜かせ！ いけいけいけいーっ！」

む、後ろから黄組が追い上げてきた。

次はおんぶだね。何でおんぶや騎馬があるのか不思議だけど、そ

こは突っ込んだじゃダメなことだよね。

大熊おおぐま小熊おぐまコンビこと、大熊と小熊。

体格は名前（ってか名字）と同じなんだけど……大熊が何で小熊の上に乗るの！？

逆でしょ体格的に！

「が、頑張れ小熊！」

「大丈夫、落着いて！」

小熊は落着いてるけどね。

あ、バトンが渡った。

瞬間、小熊がトンデモな勢いで走り出した。

あれ、小熊こんなに足速かったの！？ とか、どーなってんのこれ、とか、色々渦巻いてるのかちよつとの間静かになって……。

「いーぞー！ 小熊ー！」

「すっごい！」

「ってか大熊でけーくせに目立たねー」

とか、いろんな声が飛び交う頃には次の子にバトンが渡ってる。
しかもさりげなく赤組抜いて一位になってるし。
いーじゃん。

「篠ーっ！ ガンバレー！」

ん？ あ、本とだ。 清の声聞いて気付いたけど、しーちゃんだ。
下の子。

で、上には玲奈。

「純兄、小さい子が大きい子を負ぶうのが普通なの？」

「だったら光は潰れてる」

あー、光、おんぶ好きだったもんねー。

何で逆の事してるんだウチのクラスの人たちは。

しかも何気に皆速いし。

……あー、流石に騎馬では小さい子が上に乗るか。

騎馬、第一号が発車いたしました。……発馬かな？

んー、流石におんぶの時よりスピード下がるかー。

……とかのんきに思ってたらね、黄組がでっかい子乗つけて少し
速かったりね。

何？ 大きい子を上に乗せると走るのが速くなるの？ 確かに速
く降ろしたい一心で速くなるかもしれないけど！

ま、まあ、二人三脚とおんぶとで結構速かったからまだ差はある
けど……。

……お？ 次アンカーか、うちのクラス。

「海中くん、見ててね！」

もしもし、貴女が見ているのは白組の旗であってなっくんではあ
りません。

「ポニ子おっ！ 後は頼んだっ！」

「うんっ、走るの私じゃないけどねっ！」

騎馬だもんね。

……ポニ子って言うのあの子。

「いついかなる時もポニテだからだと。本名馬子^{うまこ}。おもしれーなあ」

なっくん、いつ来たの。

「……アンカーが騎馬の中で一番遅い」
誰かが言った、この言葉。

これでちよつとひゅうつと冷たい風が吹き……

「何か黄組、大分追い上げてきてる」

さらに誰かが言った、この言葉で……

白組の列が、凍る。

「だぁぁぁぁぁ！ 白おおおおっ！ がんばれえっ！」
事は無かった。

「ポニ子！ もう少し体重軽くしろ！」

「無茶言うなよおい」

あ、黄組がもう真後ろに……でも、

「ゴールまでもう少しだ！ 持てっ！」

「黄の邪魔しろ！ 邪魔！」

選手宣誓で『正々堂々と』って言った人が言うなよ。
パンツ！

勝った！

『セエエエエエツフ！』

一瞬の間があって、

『いよっしゃぁぁぁぁぁ！』

何か皆が皆に色々もみくちゃにされた。

正直に言おう。痛い。楽しいけど。

「やったな！」

「あー、なんかもう、何か、ほら、こう、こうだ！」

「何かわかんねーけど分かるー」

で、ぞろぞろと応援席に戻ろうとして。

「おいコラ、退場してねえぞテメェ等。勝手に戻るな」
応援席から現実に引き戻された。

232 天体観測の恐怖

あのね、確かにね、体育大会の応援と総合両方優勝したのはあたしだって嬉しいんだ。

んでね、じゃあせっかくだし皆でなんかするかー、見たいな流れも分からない訳ではないんだよ？

でもね、

何でその内容が天体観測なのかなっ!？

忍です。

どっかキャラが変わった気がするのはいのせいです。

最初に言ったとおり、優勝記念に、裏山へ天体観測に来ています。何で!？

ああいや、皆一回家には帰ったよ？ 晩ご飯も食べてきたよ？

どうでもいい事な気がするけど私服だよ。

「やー、雲も無いね。天体観測日和だ」

「月も出てないしねー。あ、金星!」

「あ、夏の大三角!」

皆最初は何で!？ って突っ込んだのに……普通に楽しんでます。まあいいや。あたしも混ざろ。

「桜ー、しーちゃん」

「あ、忍ー、太陽系の惑星って何だっけ。水金地火木……?」

土天海冥ね。あ、冥王星は違うんだった。すらっと言っちゃうけど。

なんか、海で終わると物足りないんだよね。

「どうだ皆! オレ、天体望遠鏡持って来たぜ!」

『早く出せよ!』

清がぱぱぱぱーとだした望遠鏡、突っ込まれながらも大人気。

順番はジャンケンで決めようねー。

「天体観測といえどもっとしつとりしたイメージがあっただが」
「しーちゃん、それ言っちゃダメ」

ちゃんと虫の声が聞こえてるんだからそれでいいじゃないか。

「早く変われ！」

「やあーっ！ もーちよっとーっ！」

……いや、周りの声で余聞こえないか。

そして何望遠鏡取り合ってるの。小学生かあんた等。

「じゅ、純っ、北極星ってどれなの！？ べ、別に分からない訳じゃないわよっ！？」

分かるんなら普通聞かないでしょ。

「はいはい。あれだろ」

……なんか純兄、玲奈の取扱い慣れてるなあ。でもって北極星見つけるの早っ。

「玲奈って何座？」

「え？ 何よ突然っ」

「探すものがなくなっちゃってちよっと暇になった」

見るだけじゃダメなの純兄！

「べ、ペガサス座よっ」

「んな星座ねえだろ？ いやあるけど、誕生日の奴にはねえだろ？」

「あ」

玲奈、君は何がしたかったの。

「べ、別に忘れたから適当に言ったわけじゃないんだからねっ！」

「理由を綺麗に言ってくれてるなおい。誕生日は？」

「し、四月二十二日……」

あれ？ 純兄と同じなんだ。

よし、後で玲奈姉って言うてからかってみよう。

「んだよ、同じか。おうし座はさっき見つけたから……よし、今度はいっそペガサス座探すか」

結局そうなるの？

「み、見れるの！？」

「星さえ出てりゃ、多分」

「ど、どれ？」

純兄って星好きだったっけ？

「……ああいうのをいい雰囲気って言うんだねえ」

「どわっ！ 桜、何で地面にしゃがんで膝なんか抱えてるの！？」

「しーっ、気付かれるでしょ！」

気付かれるも何も最初からここに居るんだから……。

って、何か後ろに変な光景が見えた気がする。

恐る恐る振り向いてみると……。

「どぴゃあ！」

全員が桜と同じ格好してた！

『しー、気付かれるだろ！』

この声とこの変な行動で気付かれると思います。

「あ、あれだ、ペガサス座」

「え、どこ？ 見えないわよっ？ べ、別に見えないわけじゃないわよっ！？」

「どっちだよ」

見えないって言ったじゃん。

「高山兄の野郎、俺、鈴木的事密かに狙ってたのに……」

何か少し殺気を感じました。返り討ちにされるから手は出しちゃダメだよ？

「……小熊座ってどれ？ わ、わからないわけじゃないわよっ！

確認よ確認！」

「北極星の隣の星と……後、その更に隣の四つの星が小熊座。あれ」

「あ、あれねっ！ ……や、やっぱりあれだったのねっ」

間があったよ、不自然だったよ流星に。

「あ、ところで玲奈。ちよっと聞きてえんだけど」

「な、何よっ？」

あ、このパターンは……ちよっとあたしは……

「な、何かな何かなっ」

「きゃーっ」

女の子がそわそわし始めた。何で？

「俺の……」

『きゃーっ』『あんにゃろ……（もてない男子、恨みの声）』

「あ、俺等の……」

『何々？』『……うん？』

「後ろで体育座りしてる奴等、どう思う？」

「えっ？」「げっ」

ほらねっ！ やっぱりね！ こう来ると思ったよあたしは！

逃げといて良かった！ 木の上に！

何かなつくんも一緒だけど。

「俺は皆を地面に寝かせて星を見させてやるのが一番だと思うんだけど」

「そうねっ！ やっちゃえっ！」

何か今回だけは素直だな玲奈！

「……誰から寝る？」

『ごめんなさああああい！』

「遅えな」

あーあ、片っ端からこかしてってるし。本とにねっころがしてるだけじゃん。

ってか器用だな、杖と足と片手でやってるよこの人。

「なつくーん。おい」

「も、やべ、あは、腹筋、マジ、やべえ。あは、あはは、壊れる、腹筋壊れるっ！ あははははっ！」

くれぐれも木から落ちないようにしてください。

あたしの危機感地能力が三メートル位のところまで登っちゃったんだから。

「忍ー、夏ー、おーりとーいでー」

「純兄怖い！ ハンパなく怖いよその言い方！」

「ん？ 何か言ったか？」

……なんか、登ってきた。一瞬で。両手と片足だけで。三メートルの高さまで

さあ、なっくん。ご一緒に？

『ぎゃああああああっ！』

233 あるものに乗って夜の住宅地を走り回るあるもの

「夜に自転車で走り回りたいな」

「突然何言いだすんだよ。ドラキュラかお前」

『……………』

岳だ。

しくった！

突っ込みしくった！

何だよ、ドラキュラかって！ ドラキュラがチャリ乗って夜の住宅地走り回んのか！？

もしくはドラキュラは何か突然言い出すのか！？

「…………お兄ちゃん、ドラキュラってどういうものだと思ってるの？」

えー？ ドラキュラだろ？

「何か黒い角があってー、んで紫のマント着てて、牙が生えてて、で髪が黒くてちよつと逆立ってるかオールバックで、マントの中にはタキシードだな」

「ぐ、具体的……………」

何か悪いか？ ドラキュラってこんなじゃなかったっけ。

「でも…………。ドラキュラのマントって黒じゃないかな。裏面は赤」

そーか？ 翔に借りたマンガじゃ紫だったんだけど。

「あのマントリバーシブルなのかな？」

「知らねーよ！」

「そうだ、外行こ？」

ぜんっぜん話繋がってねーよ！？

しかも今夜だし…………よく見てみりゃ時計二十一時代ってなってるし。

「ね、行こうよ」

「いや、行こうよーじゃなくてだな……」

「夜に外出てみたくないのー？」

……出てみてーけどさ。

「母さんとかにーちゃんとかがダメっつーんじゃ……」

「こっそり行けばいいよー」

「母さんとはもかくにーちゃんにこっそりが通用するか？」

「頑張ろー！」

結局行くのかよ！

「岳ー、光ー、外行くなら上着の一枚は着なさいよー。結構冷えるからー」

行く前に気づかれた！？

「……なんだかんだで何も言われなかったねー」

「にーちゃん仕事だっつってたしなー。まあいーじゃん、外出れたし」

にーちゃん、まだ怪我してんのに何の仕事すんだろ。死神に書類仕事とかあんの？

それにしても、意外と冷えてんな。上着着ててよかった。半袖一枚じゃ確かに寒いわ、こりゃ。

上着っつってもパーカーだけどさ。

「静かだねー」

「え、そーか？ 虫鳴いてんじゃん」

「それ含めて静かだねー」

……あ、静かじゃねーや。

向こうからめっちゃ喧しい声と共に何か来る。

「なー光」

「うんー、ムードぶち壊し野郎を殴ろうかー」

関節ポキポキ鳴らすなよおい。笑ったままそれすんな。

「ぶっっちゃけ賛成だけど」

あ、でも殴ったら怒られるかな。一応相手大人だろうし返り討ち
つてことも……。

「オラァ！ オラオラオラオラオラァッ！」

「光」

「うん、やっぱり逃げようか」

声的にあれだよな、暴走族か何かだよな？

にしちゃバイクの音しねーけど。まさか自転車？

あ、街灯で姿が見、え……。

「光」

「本当に居たね」

チャリに乗って夜の住宅地を走り回るドラキュラ。

が、こっちに向かって来る。

怖っ！？

「光、逃げんぞ！」

「あ、あのドラキュラさんのマント黒と赤だよ。私の勝ち」。

百円ちょうだい」

いつ賭けになったんだよ！？

とりあえず今は逃げる方が先だよな、つつつてもチャリ乗った奴
からどうやって逃げんだよ。

木い登んのか？ ねーちゃんじゃあるめーし。

「あ、お兄ちゃん、こっちに細い道がある」

「お、んじゃそっちに逃げるぞ！」

「了解」

……ふう。

「……いきなり逃げるなんてどおゆうつもりなんですかねえ？」

『きゃあああああっ！』

「いきなり叫ぶなんてどおゆうつもりなんですかねえ？」

怖えよ！ 何無理矢理この細い道に自転車ごと入ろうとしてんだ
よ！ 降りろ！

って、そーゆー問題じゃねーか。

「ちょ、光！ もっと奥行け！ 反対側から逃げんぞ！」

「お、お兄ちゃん、こっち……行き止まりだよお」

「嘘っ！？」

「ふふふ、いきなり袋のねずみなんですよねえ？」

その喋り方やメロ、怖えから！ しかも何？ 何か目の周りに紫の線とか書いてるぞこいつ。

あれか？ コスプレイヤーってやつなのか！？ でもドラキュラのコスプレならハロウィンにしろよ！

「さあ、楽しい夜の始まりですよねえ？」

『おーまわーりさーん（〜）！』

っつか、この行き止まりの家の奴も気付けよ！ オレ等ずっと大声で話してんだぜ？ 何で気付かぬーの？

「ふう……光、とりあえず落ち着こう」

「何で〜？」

落ち着くの早えな、さっきまで『このへんに隠し扉とかないかな〜？』とか言ってたくせに。

「いーか、光。こういう時にーちゃんやねーちゃんならどうするか考えんだ！ んでそれをやる！」

「そんな無茶な〜！」

光の中にーちゃんとねーちゃんはどーなってんだ。

オレん中？ えー……にーちゃんはあれだ、めんどくさがり屋の残念なオールマイティ。ねーちゃんは……掴めん。

あ、何かオレも無茶だろって気がしてきた。

「ま、まず楽そー方から考えるぞ。ねーちゃんならどうする？」

「相手で遊ぶ〜」

「ああ、そっか」

……………。

それをして何になんだよ！？

「ちょ、もーちょい真面目なのねーのかな……」

「この壁を腕と脚つっぱって登って〜。扉を歩いて逃げる〜」

あ、それいーじゃん。

「んじゃちよつと登ってみっか」

「頑張れ」

何でおめーは見てんだよ。

ま、いか。

えーつと、手足つっぱって登るんだよな。家の壁でやったことあるから楽勝だぜ。

「あー、お兄ちゃん上ー!」

上?

ゴンッ

「痛っ!」

何だよ! 何で上に板なんかのっかってんだよ!

「ふふふ、これがホントの袋のねずみですかねえ?」

オレ等はねずみじゃねえし、ここは袋じゃねえっ!

えーい、こうなったら……。

「にーちゃんならどうする?」

「純お兄ちゃんなら……まずこんな事態に陥らない」

「それ言ったら何も話が進まねーじゃんかよ!」

「……言葉で相手をどかさ」

にーちゃんがそんなめんどくせーことするか?

「つつか、オレ等そんなことできねーじゃん」

「じゃあー、変人変体ドラキュラさんをぶっ飛ばす」!

よし、んじゃあそれで行こう。

「何をするつもりなんですかねえ?」

行ける、行ける、オレだってにーちゃんの弟なんだ! アイツぶ

っ飛ばすくらい余裕だっつ!

「オラァッ!」

「ごふっ!」?

あら? けっこうあっさり。漫画みてーに蹴り決まったなあ! わき腹だからけっこー痛いんじゃないの? つかいい加減チャ

リ降りろよ。

「とっつ！」

んあ？

「ぎゃふっ」

あ、光がトドメにドロップキックした。

いやいやいや、顔面にそんなもんすんなよ。スカートめくれてんぞお前。つかジャンプ力すげえ。

あーあー、気絶しちゃった。やっと自転車から降りたな。いや、落ちただけど。

「あ、めつけた。純兄、居たよー！」

「ねーちゃん！」「お姉ちゃん」

何で居んだ？

「……どーしよっかな、これ。やっぱ交番？ お巡りさん？」

「お姉ちゃん」。何でここに？」

「チャリ乗って夜の街を走り回るドラキュラが居ます。それに興味を持たない奴が何処に居る！」

そっち！？

234 教師がおかしくなった件

変なのが居る。……変なのが居る。

大事な事なので二度言いました。

忍でーす。

朝、学校に来たら変なのが居ました。

んーっと、頭には『肅正』って書かれた鉢巻、手には竹刀、ジャージに何故か下駄。

……と言う姿の柿の種もとい牡蠣野胤（先生）！
何があった！？

「純兄、あれどう思う」

「壊れたんだと思う」

「純兄以上の壊れ方だねー」

「いや、あれはまだ人間だから俺以下だ」

どーゆー基準なのそれ。そしてなんか張り合ってない？

……よく見てみたら、何かあれだね。今の牡蠣野、よく漫画で見かけてる生活態度の強面先生だね。筋肉ついてないのが残念。

「ねえ、純兄」

「門を通らずに学校に入る方法なら五通りはあるぞ？」

「ちよっと待て。何で門を通ったらまずいかのような言い方なの」

「ってか五通りって？ そんなにあるの？ それでいいの学校として。」

「あ、ちようどいいのが来た。ちよっと柿の種の方見ててみる」

ん？ あ、学校一の真面目ちゃんと噂の……四組の誰かさん。

普通に挨拶して門通ろうとしたら、あれ？ 何か呼び止められた。手首掴まれた。

スカートは別に短くないし、カバンに何かちゃらちゃらがちゃがちゃついているわけでもないのに……むしろ、これ以上真面目な格好できないような姿なのに、何で？

「永田、これは何だ！」

「……？ あ、永田って言うんだあの人。じゃなくて、これって何？

「え？ 髪留め用のゴムですけど……体育の時要るので」

「今、体育マツト運動だもんねー。」

「そんなモノ鞆に入れておけばいいだろう！」

「ええ！？ それだけ！？」

「ええ！？ だ、駄目なんですか！？」

「当然だ」

もつとちらちらしてる子いっぱい居るじゃん。今はまだ時間早いから来てないけど……。

「……そ、そうですか」

永田、ちゃんと言われた通りにするとところが真面目だね。

「な？ 通ったら絶対何か言われるだろ？」

「え？ 別にあたし、変なモノ付けてないけど」

「……あれ、何か純兄がじと目でこっち見てる。」

手首？ あ。

「しまった……ずっとつけてたから忘れてた。ミサंगाの存在」

いつか純兄に『死神予防』とかでもらった、不思議な石のついたミサंगा。……どーしよ。これ取れないんだよ。直接手首に結んだから。

「やっと思いいたか。それ、絶対引っかかるだろ？」

「あれ？ 純兄は引っかからないんじゃない？……っと、何か首に付いてんだった。取れないの？」

今まで純兄の一部としてスルーしてたけど、純兄の首にも石が編み込まれた……ミサंगाでいいのかな。首に巻いてるけど。

「一応取れるけど、取ったら俺霊体化する」

「嘘っ！？」

「いや、ホント。だから取れない」

へー。へー。ちょっと取って見たい。

「取ったら怒るよ？」

「ごめんなさい」

エスパー？ エスパーなのこの人。

「おーい！　じゅし！」

『誰が樹脂じゃ』

「おは、忍と救護係」

「おはよー、しーちゃん」 「誰が救護係だ」

「だって体育大会ずっと救護係だったから」

救護係でもいいじゃん。

「何やってんだ？　おめーら」

「柿の種がおつまみの分際で生活態度の教師気取ってんだ」

酷い言われようだな、ホントに教師なのに。

「小さい事にもいちいちケチ付けてくるっばいし……どうやって入るかな。隣の保育園から入るのは最後の手段にしてえんだけど」

そらそうだ。

「おいこら高山あ！　いつまでそこに居るつもりだ！」

あ、気付かれた。

「行ってらっしゃい、純兄」

「何で俺だけなんだよ。明らかにテメエもだろうが、今は」
やっぱり？

「いつまでそこで話しているつもりだと言っている！　ちょっとこ
つち来い！」

どーしょ。

『いつてらっしゃーい』

清としーちゃんは何で見捨てる気満々なの！？　何でご丁寧に手
まで振ってくれちゃってんの！？

「よしテメエ等、覚悟しとけよ？」

『い、いつてらっしゃーい……』

冷や汗かきながら頑張るねえ。

「おい高山妹、手首のこれはなんだ！」

「ミサンガですが。見て分かんない？」

「何で学校にこんなものを付けてくる！」

「だって取れないんだもん」

「切れ！」

「願い事叶わなくなっちゃうじゃーん」

「何を願ったんだ！」

え？ えーっと……。

「霊にとりつかれませんように」

「切るぞ」

「駄目！」

何真面目にはさみ出してるの！？ 何で持ってるの！？ 光じゃあるまいし！

あ、純兄、先生の手首掴んで……捻る。痛いよ、これ。

「あいたっ」

「駄目つつつてんでしょうが。耳聞こえねえんすか？」

あ、純兄の敬語にあらが。そもそも純兄って柿の種に敬語使ったっけ。

「あつ、高山兄！ 首のこれはなんだ！ 今まで気付かなかった！ シャツに隠れてるもんねえ。そりゃ見えんわ。」

「お守りですが何か？」

「何かじゃない！ 取れ！」

あの、手首が変な方向に曲がり始めてるけど、大丈夫？

「これは無理」

「今までつけてなかっただろう！」

「アンタが気付かなかっただけだろう？」

あ、敬語使うのやめた。

「いけいけー！ 誰かは知らないけど怪我の手当てしてくれた先輩！」

「頑張れセンパイ」

「いぞ高山兄！」

何か、純兄応援されてるし。

何の応援？　このままもうしばらく門の方がお留守になるように
って意味？

大分いろんな人来てるもんねえー。野次馬だらけだもんねえー。

「いけいけ救護係！」

「救護係は定着してるのか？」
多分。

「高山兄……お前のせいで俺はピーナッツなんか混ぜられたんだぞ
！　誰が柿ピーだちくしょー！」

酔ってるの？　ショックでおかしくなったの？　何か今更感しか
しない。

「大丈夫だよ先生！　僕がピーナッツ食べてあげる！」

『そーゆー問題じゃないだろ』

「てへっ☆」
誰？

「教頭先生、なんでそこで見てるんですか？」

「何か、見てたくて」

だからって何野次馬に混ざってるの教頭！

「純兄ー、もう柿の種こかせば？　天体観測の時みたいに」
「ん」

あ、今顔色が変わった人、三年一組だ。

どたん！

あ、ホントにこかした。……あれ？

………柿の種の手に、純兄が付けてたミサンガが。

「あ、やべっ」

霊体化しちゃった。

『消えたっ！？』

あー、純兄ピンチ？

235 信頼性

「おはよー。……あれ、純は？」

「あ、おはよなっくん。純兄ならここ」

「……居ねえじゃん」

「見えないだけだよ。ちゃんと居るよ！

忍です。」

純兄が霊体化してしまいましたどうしよう。

とりあえず鞆は持ってきてあげたけど……だってほら、純兄が見たら他の人にはカバンが浮いてるように見えちゃうでしょ？

ちよっと気付いたこと言っている？ 服は霊体化するんだね！

何このご都合主義。

「ちよっと忍！ ふざけないでよ！？ どこに純が居るのよっ！」

おー、玲奈。ようやく純兄の名前をするっと言えるようになったかー。

「だから、ちゃんと自分の席に座ってるよ」

「居ないじゃないっ！」

「そこで編みかけミサンガが浮いてるでしょ？ しかも現在進行形で編まれていってるでしょ？」

柿の種がはさみで切っちゃったっぽい。いつの間に。

「……きやあっ！」

気付いてなかったんかアンタ。

「これやってるのが純兄だよ」

『きやああっ！』

あら？ 別にホラーじゃないでしょ？ 知り合いでしょ？

「この反応を見てどう思います、純兄」

「え？」

「いやえ？ じゃなくて」

「後もう少しでできるから話しかけないでくれるか？」

早っ。

「編むスピードが半端ねえな……。鬼早い」
鬼？ 純兄は鬼じゃないよ。

「高山さん、高山兄って何モン？」

「高山家の長男」

「いやそうじゃなくて」

「言っていいのかな、駄目なのかな。」

「よし、できた」

もう！？

早すぎでしょ。

「人間、やればできるもんだな」

あ、そのミサング端っこに留め金ついてるんだー。

「純兄人間じゃないでしょ？」

「今人間に戻った。だから人間でいんだよ」

『高山兄っ！？』

おー、ミサング付けた途端皆に見えるようになった。

「高山くん、あなた何者！？ 幽霊！？ 悪霊！？ 悪魔！？ 大

魔王！？」

「何でどんどん悪くなっていくんだよ」

『いいから答えろ！』

ちよっとみなさんいいですか？

もう朝のSHRはじまってます。担任来てないけど。

「死神だよ」

っておーい！

「純兄！？ 何あっさり言っちゃってるの！？ 隠してたくせに！」

「いや、なんかもう、霊体化するところ見られたしいっかって」

開き直るな！

なんであたしははぐらかしたんだよさっき！

「ほら、先輩も言ってたから。『どーせそのうちバレんだから、あんまりピリピリしない方がいいよ』って」

知らんがな。

『うええええええええ！?』

あ、何かクラスの皆さんが叫んだ。静かだとおもったら驚きのあまり沈黙してたのか。

「純、頭大丈夫か!? 病院行けビュイン!」

ビュイン?

「脳の精密検査受けておいで! ほら早く!」

「頭大丈夫だし行かねえよ」

『頭大丈夫な人間が死神宣言なんかするかあああああつ!』

クラスの皆は正論を放った!

「じゃあ別に信じなくていいよ」

『へ?』

「いやだから、信じなくていいってば」

『あ……そう』

何かさっきまでの騒がしさが嘘みたいに静かになったな!。
ざわざわとはしてるけど。

「おい純」

「ん? 夏か」

「何で今まで言わなかった?」

あ、清まで。

「そうだよ!」

「しかも一度はぐらかしたな?」

桜としーちゃんも。

さあどうする純兄。半眼になって……。

「言って信じたか?」

『いや』

即答!?!?

236 ある平和な日の事

「……いいなー、三人ともお兄ちゃん居て」

「そうかな?」「……そう?」「無い物ねだりしてるの?」

光です。

突然佐紀ちゃんが目の前で溜息を吐きました。

お兄ちゃんがどうしたの?」

「はあー、あたしもカッコよくて優しくてカッコいいお兄ちゃんが欲しいなー」

「別にお兄ちゃんカッコよくないよ? 純くんじゃないし」

「……美代の兄上、ヘタレ……だよ?」

「私のお兄ちゃんは、純お兄ちゃんはカッコいいけど岳お兄ちゃんはたまにしかカッコよくないよ?」

『カッコいいんじゃない?』

えへ。

プラス思考で考えるんだよ。

「なつくんは、……あれ、褒めるところより恨むところの方が多いなあ」

「でしょ?」

はーちゃん、あっさりうなずいたらなつくんの立場無いんじゃないの?」

私が言ったことが最初だけだね。

「みーちゃんのお兄ちゃん。……知らないな。ちらっとしか見たことないし」

「……ヘタレ。言うほどカッコよくない……。投げられる? 投げられる?」

「遊ぶとき……、投げてくるの」

「楽しそうでいいじゃん。ウチのお兄ちゃん、色んな物失くすし、何かと言うと笑うんだよ?」

十分楽しそうじゃん。主になつくんが。

「もおっ！ 人がお兄ちゃん欲しいなーって言ってる側でお兄ちゃん自慢しないでよー！」

「はい、ぶっちゃけなしてる方だと思いまーす」

「あたしにとってはお兄ちゃんの話は全部自慢なのーっ！」
面倒な人なあ。

「従兄弟の中でもあたし一番上なのに……お兄ちゃんちようだい！」

「うーん……」 「取り敢えず五百円で……貸す」 「駄目」
みーちゃん、レンタル料取るの？

「うー、ピカちゃん、上のお兄ちゃんちようだい」

「純お兄ちゃんが一番駄目。何で純お兄ちゃんなの？」
そもそも何処で会ったの？

「体育大会の時にピカちゃんと話してるの見て一目ぼれ♪」
そういう意味のちようだったの！？

「……面食い」

「面食い佐紀ちゃんだ！ 純くんカッコいいもんねー。断じて好青年、好少年？ 風じゃないけど！」

メンクイって何？ 麵食べるの？ 今の話にどんな関係が？

「びーっだ。どーせ面食いだもんね！ ねえねえピカちゃん、純くん彼女居ないの？」

「きつと居ないよ」

「ホントにホント！？」 あ、あの、体育大会の時に一緒に居た女の子は！？」

一緒に居た女の子？ あ、

「それお姉ちゃんだよ」

「よかったー！」

あ……でも、そういえば。

玲奈さんって人……よくお姉ちゃんから話聞くんだけど、どうなのかな？

どうせなら不安煽ってあげよう。

「ライバルはいるかもしれないけどね」

「嘘」

バツサリ嘘って断言されちゃったよ！？

「はーちゃん、みーちゃん、私って嘘吐き？」

「ウチ等以外には割とそーじゃないかな？」

「……まあ、ある意味そうだと」

酷い！ そんなに嘘ついてないよ！？

いつも嘘っぽく事実を言ってるだけだもん。

……あゝ、これのせい？

237 久し振りの……

「にーちゃん」

「ん？」

「最近さ、トリオ見ねーよな。斬天剣」

夏休みにも帰って来やしねーしさぁー。

「ああ、あいつ等なら今、牢の中で暴れてるぞ」

「はあっ!？」

「いまにーちゃん何て!？ 牢とか言ったか!？」

岳だっ!

修学旅行のしおり読んで、何か思い出したから聞いてみたんだけど……。何したあいつ等。

「今月初めに、無駄に暴れまくって村一つ潰しやがって……」

「何やってんだあいつ等!？」

「確かに、その村の側にある森は火事になってたし、暴れんならその火を消して来いって言われてたのも知ってる。でもだからって村一つ水没させることはねえよなぁ」

水没!？ 村が!？

「そこ住んでる人、大丈夫だったのか……?」

「死ぬ気で助けた」

「あり、にーちゃんが?」

「煽ったの俺だったし……煽ってから不味いと思って行ってみたら案の定大変なことになってるし」

何やってんだよにーちゃんまで。

「なんとか減給は免れたから良かったけど」

そっちが大事なのか!？

「……あれ?」

「ん?」

「何で死神が消火活動なんかしてんだよ」

「いやだから、霊界であんまり暴れるから、どーせ暴れんならーつてことで」

その霊界で暴れまわってたって所にはどんなのが入るんだろうな
ー。

建物の一つや二つぶっ飛んでんじゃねーの？

「まあ森が消滅するくらいは予想してたけど」

「んじゃ煽るなよっ！」

自然破壊反対っ！

「たーけーるーにいーっ！」

「ぐはあっ」

は、腹が……腹があっ!？

誰だよいきなり頭突きなんかしてくる奴は!？

「あ、たけにいだ」

「……たーにい、大っきい」

そりゃーオレだって成長期だから。背くれー伸びるっての。

修也にゃ負けん! あ、これは関係ない？

「こらテメエ等。まだ牢に入ってなきゃ駄目だろうが」

「だあって、暇だし!」

「バナナないし」

「子どもは遊ぶのが仕事だし……」

マトモな事を言ってるような言って無いような。

「明日で一ヶ月だろ。明後日になったら出してもらえるんだから、
今日明日くらい大人しく入ってる」

あのさ、てかさ、

「牢って抜かれるモンなの？」

「……今まで抜けられた事なんか無いはずだけど」
だよなあ。

「オレの水と斬の氷と、天のバナナよこせパワーでどっかーんだぜ
い! すげーだろ!」

分かんねーよ。確かになんか凄そうだけど。バナナよこせパワー

ってなんだよ。

「再現するとだな『しなくていい!』ちえ」

この部屋、ってかこの家？ を破壊する気かつ！

「みいゝつうゝけたあゝっ」

『ひっ』

お、いつかの生粋の馬鹿死神。

「斬天剣！ もおゝお逃がさへんよ」

あれ、コイツ関西弁しゃべったっけ？

「純、ちよい手伝ってな。こいつ等俺一人じゃ捕まえられん」

「天はバナナで釣れる。斬は新種の葉草に食いつくし、剣はとりあえず食い物で……」

このトリオ、なんだかんだで単純だよな！。

「なるほど。よし、天！」

「私は戻らないぞ！」

「大人しく牢に戻ったらバナナ十本おごっちゃる！」

「本とですか先輩！」

天がオチた。にしてもバナナ十本もって、

「太っ腹あー」

「一桁じゃったら文句言いよおけん……」

経験者？ じゃあ何でにーちゃんに手伝えとか言ったんだ、バナナで釣れるの分かってんのに。

あ、この人は捕まえに来た人ほっぽって帰るような生粋の馬鹿だった。

「剣」

お、今度はにーちゃんか。

「オレあ天みてーにはいかねーぜ！」

「今度知り合いが幻想世界の珍料理をご馳走してくれるらしいけどどこだよ幻想世界って。」

「一緒に行く！」

「じゃあもう少しだけ牢に入って大人しくしてろ」

「はいッ！」

おもいつきし天みてーにいつてんじゃんかよ。

「よし、残るは斬！」

「……………」

無言。

「ヤマクイ草の根っこ、調達しておいてやるぞ！」

何だよそれ。……漢字に直したとき、山喰い草、なんてこたーねーよな？

「それ、もう試した……あまり使えない」

おっと、斬が一番厄介そうじゃん。一番年下の癖に。

「えー……じゃあ、ソウコク草でどうだっ！」

「試した」

「嘘っ！？ あの超レア草を！？」

なんだよ、超レア草って。

「忍、話それてる」

あり？ その人ねーちゃんとおんなし名前なの？

「ああー、うん、じゃあそうだな……ラフレッシュア！」

「臭い。……そもそも薬草じゃない」

うん、何でラフレッシュアなんか出してきたんだろーな。

「純！ 俺には手におえない！」

「薬草の知識少なっ」

「ほっとけ！」

「……実験台、なるなら戻る」

殺す気か。

あ、忍くん動き止った。

「アノ、ボクハネ、エトネ、ジュンクン、ミガワリニナツテクレタマエ」

うちの兄貴を殺す気か。

「斬は忍になって言ってる」

「……別に、どっちでもいい」

たらゝり。

冷や汗が流れると共に一瞬の沈黙。

「純！　ここはやっぱり交流の深いお前が行け！」

「絶対やだ。交流を深めるためにテメエが行け」

「くそっ！　そもそも何で俺たちがこんなことを！」

「もういつそ妙羅にやらせりやよくねえか？」

また沈黙。

パチンツと忍くんが指を鳴らして……。

「その手があったか！」

「いい考えだろ？」

さっきまで争ってたくせに。

協力しようとしたり喧嘩したり仲直りしたり忙しいな。

「ほう」

あ、妙羅。

「部隊長、丁度いいところへ！」

何か偉そーな名前だなそれ。

「斬、思い切り人体実験して来い」

「りょーかい」

あ、飛び出して行った。

「よし、これで全員戻せるな。サンキュー純！」

「どういたしまして」

ちよっと聞きたいけど、にーちゃんってそこまでしたっけ？

「今日はこっち来いやー。何かおごっちゃるけん」

何かおごってもらうほど何かしたっけ。

「じゃ、行く」

「はぁーい、待ってんで」

あー、行っちゃった。

「よし、何おごってくれるかは知らんが儲けた」

にーちゃんセコっ。

238 テストは敵

「純、忍！」

あり、清？

「ん」「何？」

「今切羽詰まってるんだ！」

そうか。

『まあガンバレ』

「助けてくれて言ってるんだよ！」

言っていないじゃん。

忍です。

間もなく中間テストです。きっと清が助けてほしいのはそこでしよう。

「数学？ 二次方程式位解けなきゃー」

「ん、二次関數位簡単だろ？」

「おめー等ぶっ飛ばすぞコラアツ！」

それ頼む奴の態度じゃなーい。

「忍く！ お願ーい、理科教えて！」

桜まで。

「あー、イオンややしいよねー。あ、酸とアルカリも入ってたっけ。アルカリは人間溶かすんだってー」

「タンパク質だろ」

あれ？ 実験の時に理科の先生が『溶けないように気を付けて扱ってねっ★』とか言うから人間溶かすのかと思ってたよ。

「しいいのおおぶうう！」

「ぎゃあっ！ しーちゃん！ 怖い！」

いきなり突進なんかしてくるなっ！

「英語教えろ！」

命令形！？

「純兄に言った方がいいんじゃないの？」

「純は間違いなく清だけで手一杯だ。アレの数学の苦手さを侮ってはいけない！」

別に侮ってはいないけどさあ……一応二年半は一緒に居るんだし。

「てか清、こんだけきっぱりと言い切られといて何も言わないの？」

「いやー、だってほら、事実じゃん？」

うわー、認めてるー。

「でもさ、数学できねーと受験ヤバイじゃん？」

「何でそれを一年前に気づかなかった」

そだよ、純兄の言う通りだ。

「オレは今しか見ねーんだよ！」

『開き直るな』

「と言うかり、さっき受験って言ってたから未来見てるよね」

「あゝ」

ざ・矛盾。

「と、とにかくっ！ 教えろっ！ つつかテメーの脳味噌寄せ、純！」

怖いこと言わないで。

「俺の脳味噌やったらテメエが俺になるぞ？ つまりテメエの存在がなくな「やっぱいいっ！」」

そんな慌てて取り消さなくても。本当にやるわけじゃあるまいし。

「ちなみに清、意味わかってる？」

「分かんねーけど何かぞっとした」

生存本能とか言うやつか。

「と、とにかく！ 数学教えてくれ！ ついでに他のものよろしく！」

「他のやってる暇があんのか？」

「そこには突っ込むな！」

無いんだ。

「何処が分かんないんだよ。数学なんか覚える事少しだろ？」

「計算が無理！ 暗算とか超遅い！」

「帰れ」

「今まだ昼休みだぞ!？」

大丈夫だよ。五時間目家庭科で、六時間目総合なんだから。何がどう大丈夫かは知らんけど。

「んだからさー、二児法律なんかどうやって解くんだよ!」

「何だよ二児法律って。二児の法律か？」

どんな法律、それ。

「忍、イオンって何？」

「桜!？ 何、そこから!？」

「まさかー。数学中の清くんじゃあるまいし」
良かったー。

「で、イオンって何？」

「分かってないんじゃないか! 電気を帯びた原子だよ!」

十の電気を帯びたのが陽イオン、一の電気帯びたのが陰イオン!
「あー、あの、先生が丸かいてその周りにさらにぐるぐる書いてたあれかー」

……原子核と周りの電子の事かな？

「忍、これ何語？」

あたし等の生活の中で、しかも授業で配られた宿題に書かれてるのは日本語か英語のどっちかでしょうが。

『I know how to play the piano.』

私はピアノの弾き方を知っている、か。

「んと、英語だけどこが分からない？」

「全部!」

「いーい、これが?で、私は、私がって意味」

「それは分かってる!」

だって全部分からないって言ったじゃん。

「knowは分かるよね」

「知っている」

「そ。んで、how to」

「何語？」

英語だってば。

「の仕方、でしょ。こないだやった。ね、忍、物体を上を持ち上げる仕事をした時、持ち上げる力と同じ大きさの、下向きに働く力って何？」

重力でしょ？

ってか、いつイオンから仕事に変えたの。

「桜、なんで今地球に立ってられる？」

「立ってちゃいけないの！？」

そうじゃなくて！

「地球でさ、ジャンプしてもすぐ落ちるでしょ？ 何が働いてるから？」

「えーと」

「ほら、なんで筆箱は下に落ちるの？」

「重力だ！」

「そゆこと」

「お」

ところで桜、何やってるの？ ワーク？

「このワーク、わたしまだ二十ページもあるんだよ！ テスト終わった後に提出とか酷いね」

「ソナナノ、アッタツケ」

「何だ忍、忘れてたのか？」
ピンチ。

239 ある八つ時の蛍光灯

忍です。

今日は珍しく兄妹そろって仲良くお八つ食べています。
せんべいと牛乳。だれだこんな妙な組み合わせにしたの。

「……………あ」

「ぺかりっ……ぺかぺかりっ」

「見てて哀しくなるモノの一つだよねー」

「そうか？」

さあ、何を見て会話してるでしょう。先に断わっておくとお八つではありません。

答えは台所の切れかかった蛍光灯です。

ほら、みてて哀しくならない？ 一つだけ光っては消え光っては消えしてるヤツ。

ちなみに他の見てて悲しくなるモノは、んーと、たとえば電池が切れかかって途中から上に行けなくなってる時計とかかな。

「これって替えあったっけ」

「無いよ。こないだうっかり折っちゃった」

『何やった!？』

どうやったら『うっかり』蛍光灯なんか折るの!？

「んーとねー、はーちゃんがぼしゅーんでー、さっちゃんがどーんでー、みーちゃんがみょーんでー、私がほりらんだよー」

何と不思議な効果音でしょう。

「春がぼしゅーんはなんとなく分かった。さっちゃんと美代がどうしたって？ つかささっちゃんて誰だ。バナナが大好きな童謡の子か？」

バナナが大好き、ってところで天を頭に浮かべてしまった。サッちゃんだったね、はい。

「さっちゃんはねー、同じクラスの子でー、変なあだ名付けるのが

プレーリードッグが頭の中に登場した。

「私は色んなことをほろっとやってたんだよ」

プレーリードッグがほろっとお茶を飲んでる映像がめちゃ鮮明に頭の中に展開した。

えーっと、何の話してたんだっけ。

「それでどーやって蛍光灯折ったんだよ!？」

ああ、それだそれだ。

「はーちゃんがぼしゅーんで補完してた地下倉庫開けちゃって」

……ん？ はーちゃんなら閉めるでしょ、うっかり開けたところ以外。

「どうやって開けたんだ？ 跳び回るだけで」

「私が引つかかるように取っ手立てといたの」

ほらりらんが最初に来るのか。どこがどうほらりらんなんか分かんけど。

「でー、みーちゃんがうっかりその中に落ちちゃって」

そんなにスカスカだったっけ。

「そしたら蛍光灯見つけてさっちゃんに献上したら」
献上で。

「さっちゃんが受け取り損ねて落としちゃって」

椅子から降りろよ。

「でー、それを取ろうとして椅子から降りたらうっかり蛍光灯の上に降りちゃってー。ポキッ」

やっぱ降りるな。もう遅いか。

「そか」

「どーするよ、この蛍光灯」

「ほっといても害はねえだろ。あ、親父がこっそり買ったと思われる豚まん発見」

『グッジョブ!』

冷蔵庫にドンと入れてる時点でこっそりじゃないけどねー。

あー、せんべいと牛乳意外と会うかも。

240 お兄ちゃんと似てるトコ

「っもう！ 何なのよ放射線って！」

「ある一点を中心に放射状に広がってる線のことだろ」

「違うわよっ！」

「ん？ 放射性物質から放出されるアルファ線、ベータ線、ガンマ線の総称の方か」

「違うって言ってるのよ！ とうか、何で知ってるのよ！ 習ってないでしょう！？」

おー、扉閉めてる筈なのにめっさ声聞こえてくる。玲奈って喉強いよね。

忍でーす。

今必死になって理科のワークやってます。くそ、まさか理科に宿題があったとは……。テストの日に提出だってさ。

しかも今になって数学にもワークがあることが判明。頑張らないと絶対提出できません。

純兄は自分の部屋で、玲奈と、声は聞こえてないけど清に数学を教えています。放射線関係ありません。

多分放物線の事だね。二次関数も範囲入ってるし。

「純、ちょっと思っただけだよー。ぶっちゃけ数学ってどこで使うんだよ」

「そのうち分かるからさっさと問九やれ」

そのうちっていつ。

えーと、アルカリの水溶液に必ず入っているイオンは――水酸化物イオンって。

「お菓子持ってきたよ」

「おー、サンキュー光ちゃん、兄貴には似んなよ！」

「あはは、清くん、無駄な足掻き頑張ってるね。玲奈お姉さんはテスト頑張ってるね」

「何で毒突く!？」「あ、ありがとつ、光ちゃん」

玲奈お姉さん？ 桜は桜ちゃんだったと思うんだけど。それにしてもお菓子かー、大丈夫なのかなあ。

「ねー、お姉ちゃんー」

「どわっ！ いつの間に背後に……」

「人を幽霊みたいに言わないでよー」

大丈夫、幽霊なら蹴りかかるから。あたしは。

「ねー、お姉ちゃんー。私って純お兄ちゃんに似てないー？」
え？

「清くんにねー、兄貴に似るなよーって言われたからー」

あー、似てたらそんなこと言われないって？

んー。

「怒らせたら怖い所は似てる」

「……お兄ちゃんほどじゃないよー」

うん。なっちゃだめだよ？

「お姉ちゃんは本気で怒ったらお兄ちゃんにそっくりなのになー」
嘘だ。絶対嘘だ。あそこまではなれんて。

「ねーねー、他はー？」

「えー？ うーん……。若干くせっけなところか」

「そう言うのじゃなくてー。性格みたいところー！」

難しい質問を。

「んじゃ、ハマったことはずっとやり続けるところとかかな」

「……よく分かんないー」

「純兄はパズル、光は（変なモノ入れた）料理。何だかんだですー
つとやってるでしょ？」

「料理の前が聞こえなかったなー」

聞こえなくていいよ。聞かなくていいよ。

そういえば純兄はいつからパズルハマってたかなあ。

光が変なモノ料理に入れ始めたのは確か三歳くらいの時だったけど。

「ぶはっ、げほっ、がほっ」

「ちょ、ちよっと！？ 大丈夫！？ べ、別に心配なんかしてないんだからねっ！」

……あの。

「光さん、さっき出したお菓子に何入れました？」

「クッキーにね、小麦粉を包んだの」

「何やってんだホントに。意味あるのかそれ。」

「清、粉をまき散らすな。掃除がめんどくせえだろうが」

「げほっ、こんなことする方がめんどくさくね！？」

「ごもつとも。あ、

「楽しそうな事だったらめんどくさがらないのも似てるかな」

後、ちゃんと毎日家でも勉強するところとか。

偉いなあ、宿題家でするなんて。あたしなんか全部学校でやってたのに。

「そっか。ちゃんと似てるもんね、私」

「うん、似てる似てる」

えーと、アルカリの性質を持つ水溶液にーってこれはさっきやった問題じゃん。

「ななな、純、コレどーやって解くんだ？」

「先ずそれぞれの縦、横、まとまりに入っている数字見て」

「は？」

数独でしょ、それ。

人に教えながら自分はパズルしてんのか、おい。

「ん、どれだ？」

「問十一！」

おお、問九と十は自力で解けたんだ！

「わ、私にも教えなさいよ問十一っ！ わ、分からないわけじゃないんだからねっ！」

分かってたら聞かないでしょ。

「ね、お姉ちゃん。ベッドの上側の壁に穴開いてるよ？」

「嘘？」

「ホントだよ。何か小人さんなら通れそうなくらいの小っちゃい穴」

小っちゃくねえよ。壁の穴にしちゃ十分でけえよ。

妙に純兄達の部屋の声聞こえると思ったら……。

「おや、忍殿」

「ごめん、一七法師。床に穴が開かないうちに外行ってくれる？」

「いきなりそれでござるか!？」

「その穴何？ 八つ橋あげないよ？」

「はっはっは、それはもういいのでござる。爺婆の事はもう忘れたのでござる」

忘れんなよ。

「ではさらばでござるっ!」

しゅぽつとか音立ててどこ消えた!？

忍者かお前!

……あれ？ 何かお隣のベランダに見覚えのない穴が。忍者にはなれんな。

「ちゃんと修理代払いなさ〜い」
にこっ。

「わ、わ、分かったでござるうっ!」

……笑顔が怖い所も似てるな。

241 給食中の四人組

いただきます。

「むむむ……」

「どうした岳、毒キノコでも食ったような顔しやがって」

「真剣な顔してんだよ馬鹿っ！」

真剣な顔が珍しすぎて、つい。

修也だよ。

かったりい午前の授業が終わって、給食の時間。

いつもみたいに突っかかってこないと思ったら……あん？　いつも追いかけてるのは俺だって？　そうなるようにけしかけてくるのは岳だから。

今はまだ給食の時間だからだって？　いつもはこの時間に挑発してくるんだよ。で、給食終わりのチャイムと同時に追いかけてっが始まるんだ。

「ねえねえ、修也。岳くん、おかしいよ」

「おかしいのはいつものこったろ」

「真剣すぎておかしいよ！」

「激しく同意」

さすが奈那子。

「なー、修也、翔、奈那子さん」

「岳くん、なんであたしにさん付けなの？」

此間、奈那子を名前で呼ぶようになってから気になってたんだ、俺も。

そして今は何でにやにやしてるのかが気になってるんだ。

「いやー、ほらさ？　彼氏以外に呼び捨てされたくねーかなーっと、オレなりの配慮な訳よ。んだから、大人しくさん付けされといて。そっちだっくん付けな訳だし」

余計な配慮だ！　いらん！　全く持っていらん！　イランは関係

ないぞ。

「おーい、岳何言おうとしてたんだ？」

「あ、そうそう。それぞれ。あのさ、オレ等さ、小六じゃん？」

うん、そうだな。

「んでさ、今、もう十月じゃん？」

ああ、うん、そういえば。

「後何気に小学校生活半年しか残ってねーじゃん！　って思った訳よ」

うわ、本当だ。六年もあるのに。

「んでさ、おめー等、中学行ったら何部入んの？」

『今までの話関係なくね！？』

どうやったら『小学校生活残り半年しかねえじゃん！』から『中学で何部入んの？』になるんだ！？

「だって気になったから」

『……………』

岳の思考って分かりにくい。

「翔は？」

「おれは野球部かな」

「あんなん投げて打って走るだけじゃね？」

「はあ！？　聞いたいてなんだよそれ！」

「奈那子さんは？」

「スルーか！？」

そして翔の扱いが最近酷え。

「うーん、あたしは……」

何でこっち見るんだよ。

俺は別に入りたいのなんか……あ、いや、んえと。

「す、吹奏楽……かな？　決めた訳じゃないんだけど……っ。しゅ、修也は？」

「俺も同じ」

「ほんとっ？」

「ほんと」

……おい岳。何で半眼になってんだ？

おい翔、何で牛乳でむせてんだ？

「ちよっと、お二人さん、ラブラブなのは結構ですがね、もうちよっとそのピンクオーラをね、抑えて、ね？」

「何言ってやがんだお前！」

別にそんなんじゃ……。

「げほっ、げほっ！ あのげほごほっ、しゅがほっ、あのなっ、おれ言いたい事あんだけど、言っていい？」

「何だよ」

「リア充爆発しろ！」

はぁ？

「リアルに充実してる奴、略してリア充だよ！」

聞いてねえよ。何だそれとは思ったけど。

「たたた、岳くんはっ？」

よし、ナイスだ奈那子。よく分からない、でもってからかわれそうな話はさっさと終わらせよう。

「ん？ オレ？ 参考に聞いたんだよ。兄ちゃんも姉ちゃんも部活やってねーから、中学のはよく分かんなくってさー」

兄さん姉さんから以外にも情報は手に入るんじゃ……。

「岳って何部入ってた？」

「一応バスケ部だぜー。でもオレ、球技はそんな得意じゃねーんだよな。野球とかやったことねーし」

『マジで！？』

野球やったことない奴なんて居たのか！？

と言うかそれ以前に、岳に苦手なものがあつたのか……。あ、いや、兄さんも苦手なんだっけ。自分にプレッシャーかけるのに使うくらいだし。

ええっとー、純さんだっけ？

「んじゃーさ、一緒に野球部入ろうぜ！ そしたら球技得意になる

かしんねーじゃん」

「うん、考えとく」

考えるだけか、おい。

「それにしても、岳くんがスポーツで苦手なモノなんてあったんだね！」

「ん？ 球技はうちの家系全体的に得意じゃねーんだよな。兄ちゃんも姉ちゃんも妹も」

『嘘！？』

以外だ……。

岳の姉さん、三年の時に見たことがあるんだけど……ゴキブリにテニスボール投げつけて潰してたぞ？ なのに球技得意じゃない？

ありえねえ。

「お手玉はできるんだけどな」

『それはあまり関係ない』

「あ、やっぱし？ まあうん、オレン家は武闘派なんだな、きっとそれはまあ、五百％認めるが。きつとなんかじゃねえぞそれ。」

「水中って格闘技の部活ないんだよな」

そういえば。

「ってか、あったら兄ちゃんも姉ちゃんも入ってんだろな」

勧誘されまくってそうだな。

「あ、そーそー、そういえばな。兄ちゃんと姉ちゃんが迷惑してるっていうオカルト部ってのがあるらしいぜ」

オカルト？ ……オカルト、部？

「ま、自称部活のオタク集団らしいけど」

ああ、なんだ。本当にそんな部活があるのかと思った。

「勧誘には気を付けろだってさ」

「そんなんされるのはお前だけだろ」

見えるんだろ？ 奈那子が怖がるから口には出さないけど。

「あ、奈那子さんの右隣に……」
がたんっ！

痛い痛い、しがみ付くところ間違えてるぞおい。

「なな、何！？ あたしの右隣が、何なの！？」

「空気がある」

「起こるよ！？」

「おー、んじゃ、今日は修也じゃなくて奈那子さんと追っかけっこするか」

……ちようどチャイムも鳴ったし、ってか？

ごちそうさまでした。

242 誰だって喧嘩はする

「忍」

「……ん？ 桜」

「どうしたの？」

「何が」

「テンション低いんだもん」

高山妹のテンションなんていつも違うじゃねえかよ。
岬だ。

断じて美咲ではない。だんっじて！

朝のSHRが終わって、一時間目までの小休憩。

忍は何かぼーっとしてるし、純はSHR終わった瞬間どっか消えるし。ああいや、本とにパツと消えたわけじゃないぞ？

「忍？ 何か暗いよ？」

「んー、そうか？」

口調が変。まるで純だ。なんっか違うけど。

「何かあったの？」

「……別に」

どうしよう、急に怖くなって来た。

だって名に高山妹が暗すぎるから。

なあ、何で無表情崩さねえの？ 純のまねでもしてるのか？
としたら結構似てるからもう止めろ！ だ

あんなのは二人もいらん。

「あつれー？ 岬、純知らねーか？」

あん？ 高崎か。

「どっか行っただけ」

「う、嘘だろ……数学の宿題写させてもらおうと思ったのに！？」
自分でやれよそんなん。俺も基本誰かの写しだけ。あ、今回は自分でやったからな！？」

「あ、戻って来た。おーい純！」

キーン コーン カーン コーン

あ。

「嘘だろ……」

大丈夫、数学は五時間目だから。

「じゃあねー、忍」

じゃあねって、お前の席高山妹の後ろだろ。

何でわざわざ前に行ったんだ、山内。

「ん」

「あれ、純くん。何処行ってたの？」

「一階」

なんてアバウトな。

「ねー、どうしたのかな、忍」

「いや、俺に聞くなよ」

「だって隣に居るんだもん」

確かに俺の席は通路挟んで隣だけど……。

「本人に聞けよ」

「別について言うんだもん」

「高山兄は」

「同じ答えるんだもん」

いつ聞いた!?

「あーい、あーい、授業始めるぞー……」

先生の顔が強張っていく、ついでにクラスの全員の顔は既に強張った後。

だって、な？

夏休み終わった直後にくじで決めた今の席、高山兄妹は横に並んでいて、そこはクラスの丁度中心。

で、何故か今、そこから『ざ・険悪』って感じのオーラが出てた
ら……なあ？ 顔の一つや二つ、
強張るだろ？

いや、一人一つしかねえけどよ。

「ええーっと、授業、始めて、いいのかな？」
戸惑うなよ。

「あ、あの、高山？」

『どっち』

「いや、両方……どうしたの？」

『別に』

「いや別にじゃなくてね……。聞かせてくれないかな」

『こいつに聞け』

怖い、一々怖い。

何でわざとわざとハモる訳！？ で、何かいつもより声のトーン低いぞ！？

仕草までシンメトリーで同じだし……。そっぽ向いたり、相手指したり。

何か、本当に兄妹なんだなって改めて思うな。……いや、陰悪すぎて思えねえ。前言撤回。

「じゃ、じゃあ高山さん、何があったの？」

「このクソ兄貴に聞け」

高山妹、マジで何があった。

「高山くん……」

「このクソ妹に聞け」

腕組みしてそっぽ向く。うわー、きっちりシンメトリー。

身長差が結構あるのがちょっと残念。……いや、そんなのんきな事考えてられねえや。

「ええっとー」

「せんせー、この二人、ただの兄妹喧嘩ね。いい？」

海中……ただのだって？

『ただの兄妹喧嘩でここまで周りを巻き込むかあああああっ！』
「巻き込んでるつもりは無いと思うけど……。なあ？」

さすが幼馴染。

「忍、ほれ、何があった？」

「ん……純兄の留守中にさ、D○のパズルゲーム見つけてやってみたんだ」

ああ、いつも通りに戻った。

「で、余に難しすぎて凄くムカついて……ゲーム機叩き割っちゃって」

そら高山兄も怒るわ。

「そこまですらないんだけど」

よくねえよ！？ どっこもよくねえよ！？

「壊した衝撃か何か分からないんだけど、データ全部消えちゃってそりゃあ怒るだろうな……」

「で、ちゃんと謝ったのに怒られてさらにムカついて殴る蹴るアリの喧嘩になって」

……………。

「で、純兄に負けてさらにさらにムカついて今に至る」
勝てたらすげえよ。

「ふんふん、純？」

「あのゲーム最初は簡単すぎて面白くねえんだよ。せっかくいいところまで行ったのに」

なんか……高山兄も所詮中学生なんだなーとか思ってしまった。

「そか。んじゃそのゲーム俺に貸して？ やってみたい」

『どうやったらそんな流れになるんだよ！？』

「ここをこー、こーやったら」

身振り手振りでこー、こーやったら、と表現してくれてるけど、分からん。

「ま、そゆことで、先生どーぞ授業始めちゃって」

「え？ あ、ああ、うん」

……どうせならこのまま授業潰れた方が良かった。

オマケ

「純テメエ、これの何処が簡単だよ!? めちゃくちゃ難しいじゃないか!」

「だからなっくん、言ったじゃん。ムカつくほど難しいって。あたしやったの、新しいデータだよ?」

「聞いてねえっ!」

……前言撤回。やっぱ高山兄って中学生じゃない気がする。

243 黒いX

「……十円の飴と二十円の飴、どう違うんだよ」
なあ、どー違うんだよ。

岳だ。

明日から修学旅行！ つつー訳で近所の駄菓子屋におやつ買いに来てんだ。

ん？ 修也達なら居ねーぞ。だってさ、やっぱおやつ交換の時に楽しみは取っとくもんじゃん。

ちなみに、バナナはおやつに入らしい。

「もういつそバナナばかり持ってってやろーかな」

「だめ！ それは絶対だめよ岳ちゃん！」

「んあ？ あ、飴ちゃん姉ちゃん」

語呂悪いかな。

店の奥から出てきた女子大生、本名は忘れたけど、店の名前が『ミタチ』だからミタチって名字なんじゃねーのかな。

いっつも飴食ってっから、飴ちゃん姉ちゃん。

「なんでバナナ駄目なんだよ？」

「だってバナナはうちに置いてないんだもの！」

なんちゅー理由。

「ほら、修学旅行のおやつなんでしょ？ だったらこの棒付き飴がおススメよ！」

「棒付き禁止なんだってさ」

しおりに書かれてたおやつのはははははキャンディだったんだけどな。

「ふーん、じゃあこっちの新発売！ 黒い物体X飴は！？」

「何だよ黒い物体Xって！？」

正直すぎだろ商品名！

「Xは分からないモノを現すの」

「わけわからんモン進めんなよ！」

実験台かオレは！

「ちょっと怖くて食べられなくって……」

ほんとに実験台かよ！

「飴なら何でも食らいつくすって言ってたじゃんか！」

「二年前の話でしょ！？ 記憶力良いね岳ちゃん！」

何か印象的だったから。

「と、とにかくほら、コレのお金はいらないから……ね？ 食べてみてよ」

「ね？ じゃねーよ！ そんな怖ーモン食えるかよ！ 腹壊したら洒落になんねーぞ！ せっかくの修学旅行なのに！」

「お腹壊したらお菓サービスするから！」

「んなサービスいらねーよ！？ ってか置いてんのか！？」
駄菓子屋に！？

「ううん、お姉さん家の」
なんだ……びっくりした。

「ところで岳ちゃん」

「あん？」

「これ食べて♪ お姉さんのサービス」

何だよこの飴。黒っ。

コーラ味か？ ……にしちゃ黒すぎるし……。

「飴ちゃん姉ちゃん、これ、黒い物体X飴じゃ……」

「ううん！ 違うよ、これは新発売のブラックキャンディ」

「どっちにしろ黒じゃねーか！」

うわー、何か、鏡並に光ってて不気味なんだけど。顔映ってるし。
「ほら、噛んだら黒くなるガムあるでしょ。あれの飴ちゃん版よ」

あやしー。

「まあ食べてみてよって」

口ん中突っ込まれた！ あぐ。

「あ、へっほーんめえ」

「ほんと!？」

おいこら。

「へー。美味しいんだ。この黒い物体X飴」

「やっぱりひか!？」

んー、でもうめーし、いいや。

……うめーけど、何味だこれ。

何か、例えようの無い味だ、とだけ言っとくけど……。

「飴ちゃん姉ちゃん、これの包み紙見せてくれよ」

……あれ？

「何で口抑えて蹲ってんだ？」

「まままま」

まままま？ えー、と。

「魔神!」

「しりとりじゃなっ……うぷ」

あん？

「どーしたんだよ」

「まままま」

「ままままじゃわかんねーよ」

「不味いっ!」

はぁ？ めっちゃうめーじゃん

「何コレ! よく食べられるねこんなの!？」

「はぁ？」

あ、それっぽい包み紙めつけた。

えーと、原材料は……書いてない!？ なんで!？

本来なら原材料が書かれてるところには……。

『味の感じ方には個人差があります』

いや、薬の効き方じゃねーんだぞ？

『次作をお楽しみに』

どーゆーこっちゃい。

『あ、そうそう、分量適当なので毎回味が違うかもっ☆』

かもっ☆じゃねーよ！ 適当にすんな！ 機械で作ってんじゃねーのかよ！

『でも一回目で旨いと思った君なら大丈夫！』

何で励まされてんだ！？

『でははへへ』

何で途中から話し言葉になってんだよ！

「……飴ちゃん姉ちゃん、大丈夫か？」

「う、ん。うん、おさまった……」

旨いんだけどなあ。これじゃあんまり交換できねーよな……。うーん、でもやっぱ持ってきたいし……。

「飴ちゃん姉ちゃん、黒い物体X飴とポッキーくれ」

うん、我慢できん。

「はーい。あ、笛ラムネどう？」

「あ、欲しい」

「はいはーい、全部で二百円ね」

お、ぴったり。二百円以内なんだから二百円もいんだよな。にしても……黒い物体X飴、略してエク飴、五円なのか？ 安っ。

「岳ちゃん……」

「あん？」

「お腹壊す前に食べるのやめた方がいいよ！？？」
進めたの誰だよ、エク飴。」

244 バス内の四人組

「ひゃっほー」

「暗い声でそんなこと言われたら戸惑うだけだぜ？　おーい、岳、聞いてんのか」

「昨日ちよつとはしゃぎすぎて」

「ガキか」

「オレ等ガキじゃん」

「認めなくもない」

「認めたくもない？」

奈那子だよつ。一文字違うだけで大分違うんだねって今ちよつと実感したよ！

それはともかく、今日はやつと！　修学旅行なんだ！　バスに揺られてどんぶらこーってこれは桃だね。

もうそろそろお菓子食べていい時間だね？　ね？　聞いても分からないか。

んとねー、あたしと、修也と、岳くと翔くんは一番後ろの横並び！　くじで決めたのに凄くない？　むかって右から、翔くん、あたし、修也、岳くん！　……と、眼鏡で超大人しい、クラス一頭いい子、雄川くん。おがわここだけの話、雄川くんは運動音痴だよ。

「なあなあ、飴食う？」

「貰……何だよ黒い物体X飴って！？」

「うめーぞ、エク飴」

「エクレアみたいに言うな！」

普通に怖いんだけど、その飴。何この黒さ、まるで弾丸。弾丸って黒いのかどうかは知らないけど。

あれ、前にアニメで見たのは金色だったなあ。

「奈那子さんいる？」

「居るよ！　何でそんな事聞かれなきゃいけないの！？」

そんなに影薄い!?

「そんなこた誰も言うちやらん。エク飴いるかって聞いてんだ」

「あ、それなら欲しい……何処の人？」

「およ、知らなかったか？ オレってば山口に住んでたんだぜー。
二年始まるまで」

「……あつ、そういえばそうだった！ 山口からとは聞いてないけどね。」

それはそうとエク飴、意外と美味しいんだなー。

「修也、美味しいね、これ」

「うん」

「へへ、だろー？ 毎回ちよっぴり味違うんだぜ、コレ」

へえ、どうやって作ってるんだろう。機械で作ったら同じ味になりそうなのに。

「……うぷっ」

「ちょ、ちよっと翔くん大丈夫!? バス酔い？」

「エチケット袋なら目の前席の網にあるぞ」

あ、ホントだ。ありがと修也っ！ ってあたしじゃないのよ！

「何この飴……、まっずっ」

『嘘っ!?!』

こんなに美味しいのに!?

「うえ……っ」

雄川くん!? 不味の!? って言う前に食べてたの!?

「雄川もか？ ほれ、エチケット袋。吐くか頑張って押し込むかど
つちだ!? ああっ!?!」

「何の脅迫してんだよ、岳」

「やって見たくて」

やって見たくて……。

「あふ、ふ、ふう……ありがと奈那子さん、もう大丈夫……の筈、
おれ寝るわ……」

「そ、そう。お休みなさい?」

「うー、お休み」

「気持ち悪う」って呟いてから寝るんだ。わざわざ。

「ちよっと岳くん、この飴どうなってるの？」

「ほれ、見るかー？ 袋」

あ、おっきいパック……ちゃんと二百円に収まってるの？ えーと、確かこの白い表に名称とか賞味期限とか原材料名とか書かれてるんだよね！

『名称…黒い飴』

何て！？ 黒い飴！？ 『黒い』はいらないでしょ明らかに！

『原材料名・自分の舌で当ててみな』

「無理よっ！」

「どうした奈那子」

あ、声に出てた……。

「この飴の、原材料名」

見せてみたら、何かイラっとしたような顔になって……何で岳くんを殴ったんだろう。

「おおい、危ねーなー。仮にもバスン中だぞ！」

本当にバスなだけで。危ないとか言いながらもちゃんと受けてたよね？ そしてノリでバスの中で追いかけてっこしようとしかけたよね！？

「もー」

でも見てて楽しいし、強大な敵（岳くん）に立ち向かう勇者（修也）がカッコいいから『やれやれー』って言いそうになったのは内緒。

んと、何か続きがあるな……。

『味の感じ方には個人差があります。次作をお楽しみに。』

あ、そうそう、分量適当なので毎回味が違うかも☆ でも一回目で旨いと思った君なら大丈夫！

ではでは^^』

何処から突っ込めばいいの！？

もう順番に箇条書きで行くよっ！

・個人差って何！？

・アニメの次回予告じゃないのよ！

・分量適当で飴って出来るものの！？

・何がどう大丈夫なの！？

・誰に向かって話してるのよ！

こんなとこかな。

えーと、次の項目は……。

『賞味期限・あはっ』

怖っ！？ 何で笑ってるの！？ ねえ何で！？ 何で！？ 修也

あっ！

「岳くん嫌い！」

「何でっ！？」

これでも喰らえーっ！ 飴入り袋アターック！ 顔面に綺麗に決まりました！ はい良かったねうん良かったよ、これで強大な敵は倒せたよ何処が強大だったのそれはともかくよかったね私の勇者様その名も修也あ！

「……いろいろな意味で奈那子が暴走してる」

「修也、飴って結構痛えんだな」

あはっ。

245 いん・きょうと だぜっ！

「うおーっ！　すげー！　なんてーか、とにかくすげーっ！」

「すげえーっ！」

「すごーい！」

「お前等おんなじこと連呼するの好きだな！？　すげー」

修也だってノッてんじやんか。

岳だ！

清水の舞台から景色眺めてんだ。うん、目に良さそー、緑がいっぱい。

「あ、そういや岳、今日誕生日じゃなかったっけ」

「んあ？　おー、うん、そだった。修也覚えてくれてたんだな！」

ちよつと感動。

十月六日な、ちなみに。

「十二になった記念に飛び降りてみるよ」

オレの感動を返せ！

「冗談じゃねーよ！　いきなり死ねと！？」

「大丈夫、生存率は結構高いから」

「そう言う問題じゃねーんだよ！」

「ほらほら」

ほらほらじゃねーよ！？　何落とそうとしてんだよテメエ！

「飛び降り禁止令って出てんだぞ！　知ってんのか！？」

「そりゃま、事前学習で調べたし」

「じゃあ落とそうとしてんじやねーよ！」

「ばーか、マジで落とす訳ねえだろ」

落とされてたまるか！

「捕まるの嫌だし」

「テメエの問題か！？」

修也って意外と思った事口に出すよな……。

「あ、でも生き残ったら願いがかなうって。ちょっと飛び降りてみるよ」

「結局落とす気か!? 自分が行けよ!」

「嫌だ。いくらここから飛び降りて死んでも成仏できるからって自殺したら成仏できるわけが……あれ、どっちなんだろうな、これって」

「こんにゃろ。勝手に話変えてんじゃねーよ。」

「修也ー! 音羽の瀧行こう?」

「奈那子さあん、モロに話変えんなよ。」

「なあ翔」

「何?」

「ちよっとお前こっから飛び降りて」

「何で!?!」

「よし、オレも音羽の瀧行こつと。」

「なあ翔」

「うー、何?」

「音羽の瀧って何だっけ」

「確か三つあってー?」

「ほら、あれでしょ。三つの筋から流れてて、健康、美容、出世の御利益があるんだよ。……健康、学業、縁結びって書いてある資料もあったけどさ……」

「よっしゃ、行くぞ!」

「……あれ? 確か、三つ全部飲んだらご利益って無くなるんじゃないかったっけ。」

「先に思い出してよかったあー。」

「柄え長っ」

「汲み過ぎたら柄杓落したりして。てこの原理で。」

「出世が左端だったよな」

何で出世すんのか知らねーけど。

「で、右端が健康だっけ」

もうとっくに健康だけど。

……あ、この水うめえ。

「修也、何の水飲んだ？」

「学業」

「……修也頭いいじゃんかあ」

「岳に一回も百ます計算で勝てねえから……」

それって学業関係あんのか？

「しょーおー。お前何飲んだ？」

「縁結びを腹いっぱい」

「何で!？」

学業飲んだ方が良くね？ あ、この部分だけ読んだら何かすげえ。

「なんとなくカップルが身近にいと嫉妬心が」

「お前奈那子さん好きなのか？」

「別に。友達としてなら好きだけどさ」

結局何がしたかったんだよ。

「次どこ行こっかー」

「そうだなー、あ、確かここに来るまでの途中の坂道」

偽物っぽい舞妓さんと結構すれ違ったな。

じゃなくて、

「いっぱい八つ橋試食出来たよな！」

「じゃ、もっかい行こっか！」

『行こう!』

「……ちゃんと買えよ？ 失礼だし」

あい。

246 仲良し八人部屋

「修学旅行だ！ 枕だ！ 枕投げだ！」

『語呂悪っ！』

とっさに言ったんだもんよ、そんなもん気にしてるわけねーじゃん。

岳だあっ！

修学旅行といやー、やっぱコレやんなきゃダメだよな、枕投げ！
三つに分かれてるうちの、一番でけー部屋だから八人居るし！
これはやれってことだよな！？

意味わからん？ オレ様勝手論理何だから分かんなくていんだよ。
「行くぞおらあああああっ！」

「わあーっ！」

「そーそー負けるかあああああっ！」

うん、枕投げじゃなくて枕合戦だな、こりや。

「おらあっ！」

うおっとお、枕飛んできた。

これ位余裕で避けれるけどな。あ、やっぱ取る。武器増えるし。

あい、一個げっとお。……あれ？

「痛っ」

何で四方八方から……いや、オレ除けば七人しか居ねーから八方はぜってーねーけどさ。とにかく、何であっちこっちから枕飛んでくるんだよ！？

「岳対他の奴か。面白えじゃん」

「修也あ！ どっこも面白くねえよ！？ はっきり言っていじめだかんなコレ！」

「弱い者いじめじゃねえからいいんだよ」

「何その屁理屈！」

せーんせー！ ここにいじめられてる子が居まーす。先生なら助

けろおっ！

……せんせが居ねーけど。

「仲良きことは美しきかな」

『居たあっ！？』

何部屋の隅でお茶啜ってくつろいでんだよ！？　せんせって確か

二十代だったはずだけど！？　その年にして爺か！？

「と、とにかくだ、先生公認だから、やっちまえー！」

『翔……やっちまえ？』

「う、あの、その。えーと、そりやっ！」

枕ありがとう。

「お前等ー、一般の方も居るんだから五月蠅く暴れるなよ」

『先生はどっちなんだよ！？』

「静かに暴れろ」

んな無茶な。

「しつれーしまーっす」

『失礼されまーす』

「ええ！？」

ごめん、写真屋のおっちゃん。ついいつものノリで。

「写真撮るよ、並んでー」

『はーい』

適当にごさっと集まって……何でオレを踏み潰そうとするんだテ
メー等。

「前に四人、座って。で、後ろで四人立ってー」

あ、先生居ないことになってる。

……違った、ホントにいつの間にか居なくなってたんだ。

「はい、1＋1は？」

『田んぼの田！』

パシャ

「ええええええ！？　何で君等そういう事言うの！？」

Aはこう語る。

「ちょっとやって見たくて」

Bはこう語る

「おじさん困らせたくて」

Cはこう語る……最低だなB!?

「どんな反応するか見たくて」

Dはこう語る

「これが答えだと思ってた」

マジで!? Eはこう語る。

「皆こういうと思ったから」

すげーなE。翔はこう語る。

「やっぱこう言う事はふざけないと」

修也はこう語る。かぶせてオレも語る。

『ノリで!』

『だよな!』

仲いいよな、オレ等。

「……もう寝る時間だからね、ちゃんとね、寝るんだよ?」

『え!』

「仲いいな君等!」

いや……だって、な? せつかくの修学旅行だし!。仲良きこと

は美しきかなだし!。

「カメラのおっちゃんが何か怖え話してくれたら寝る」

「あ、それいいな!。おっちゃん、何か話して」

「ホントに寝るんだね?」

あ、疑ってる。そら疑うか。

『多分! きつと! おそらく!』

「話してあげるから寝なさい!」

秋ちゃんみてーだな。ほら、なっくんはーちゃん母の。おっさん声だけど。

「じゃあ話すよ? 布団に入って」

『アイアイサー!』

どこの軍だよここは。あ、『ぐん』は『ぐん』でもこっちの群か。あい、布団に入って電気消して、ぶっちゃけ言っちゃまうと季節外れの怪談の始まり始まり！。

「十年くらい前の話な。ある真っ暗な山道の中、右手側には切り立った崖がある所を、男乗つけたバイクが走ってたんだ。男には彼女が居て「そいつぶっ飛ばあす」いやあの」

「翔、余計な口出しすんなよ」

「ごめん。つい」

「つい！？」

「ええと、で、その彼女を送った帰りに、その山道を走ってた。しばらく行くと、何やら道路に細長い、横たわった影が見える。バイクを止めてそれに近づいてみると……」

みると？

「何と、その彼女さんが血まみれになって倒れていたんだ！」

「何だよ、普通の怪談か」

何を期待してたんだ、今喋った奴。

「バイクの男は、がくがく震えてその彼女さんの体を抱き上げた」
勇氣あるな。

「するとその、これ以上死ねないような死にっぷりの彼女さんがニコツと笑って、それで男はそのまま怖いのと悲しいのとで走り出して、崖から落ちてしまった。その崖は今、この下になってるんだけど……どうも、出るらしいよ」

そりゃ、その話が本当なら出るんだろうな。成仏してなければの話だけだ。

「なあ」

「どうした？ 早く寝なさい」

お父さんか、おっちゃんは。確かにどうした？ だけど、修也。

「それ……誰が見てたんだ？」

「えっ！？」

そーいやそーうだな……ニコツと笑っただの影が見えたのだ。

『絶対嘘だあーっ!』

「ええええええ!?! ってか、ほんっと仲いいな君等!」

『俺等の団結力を舐めるな!』

「はい」

『よし』

何か話変わってね?

オマケ

次の日。

「……修也」

「あん?」

「マジで出やがった。昨日の話の奴」

「はあっ!?!」

『あの話、ほとんど嘘だったわよねえ。ね、ダーリン』

『そうだねえ、僕らは一緒にバイクで落っこちたんだもんねえ、ハニ―』

怖えよ。幽霊とかとは別の意味で怖えよ。さぶい

「テメエ等成仏しろ! マジで! 一足先に冬が来てんぞ! おも
にオレに!」

『ああ、ああ、何か昨日の死神君にそおっくり、ね、ダーリン』

『また襲ってきても、僕が守るよハニ―』
んだからさぶいって。

「岳、協力感謝。成仏しやがれ、見てる方が寒いんだよ」

あ、兄ちゃん。

『きゃああああ! 昨日の死神君!?!』

『も、もう一人いる筈……きゃああああ!』

「よし」

おー、幽霊消えた。何をどうしたのかよく分からんまま消えた。
何か寒さはしっかり置いていきやがった。秋だから寒いだけか?

「よしじゃないよ、純ってば。勝手に一人で行かないの」
誰だコイツ。金髪青目？ 外国人か？

「リオが遅えんだよ」

「人のせいにしないの」

「事実だからしゃあねえだろ？」

あ、何か説明も無しにどっか行きやがった！

「おーい」

「岳ー」

『頭大丈夫か？』

……これ言う仲良さはいらねえっ！

247 魅惑の八つ橋

「八つ橋美味しいね」

「あたしは焼き八つ橋が一番好きだな」

「生八つ橋も美味しいわよ？」

「やっぱり断然チョコ八つ橋だよ」

「だよねーっ！」

もぐもぐ、ごくん。

忍でーす。

岳のお土産、八つ橋をおかーさん、秋ちゃん、はーちゃん、光、あたしで食べてます。

持って帰ってきた本人はベッドにダウンしています。ちなみになつくんはもう夜なのに塾だそうです。純兄は例によって例のごとく……そうでもない？ お仕事です。怪我治ってからはほぼ毎日。

「にしても岳、よくこんなにたくさん買ってきたよね」

「試食ばかりしてたら修也くんに怒られたんですって。それで、お小遣い全部これにつかったそうよ」

何やってんの岳。グッジョブだけど。

「抹茶美味しいわね」

「チョコバナナってある！」

「チョコの方が美味しかったや」

いや、やっぱり焼き八つ橋だってば。人の好みなんて人それぞれだけど。

「うわー、いいなー。食べたいなー」

あ、剣。……いつの間に。

「なあなあ忍ねえ！ 食っていい！？」

どうぞご自由にーと、言いたいところだけど。はーちゃんと秋ちゃんも居るからなあ。

「あい」

「サンキューッ！」

ま、いいや、隠れてるなら。

「おお！　もしやこれはっ……」

あ、一も法師……。

「や！　っ！　は！　し！　拙者のでござるか！？」

「一昨日来やがれ」

「ぐはっ」

あ、打ちひしがれて帰って行った。

……ちよつと。床に穴開けないでよ？

「ね、ねえ、今声聞こえなかった！？　ねえ！？」

「そうねえ……？」

聞こえてるのか、一も法師の声。そう言えば一も法師って何なん
だろ。霊体じゃないし。

『気のせいだよ』

ニパッ

やっぱ似てるなこの母娘。あたしだっておかーさんの娘なのに。

「そっか……なあ？　ねえ、お母さん」

「気のせいかしら、ねえ？」

首ひねりながら八つ橋に手を伸ばし、それと一緒に疑問を飲み込
む。

……何かそれっぽくない？

『忍ちゃん』

「あ、クロ」

白猫クロ。久しぶりに会ったなー。

『クロ、不法侵入って知ってる？』

『久しぶりに会った猫に言う言葉がそれかにや！？』

あ、今度は『にゃ』が口癖になったの？

『ミイもそれ、食べたいにい』

口癖固まってないの？

『猫が食べたならお腹壊すよ？』

『じゃあいらないに。じゃーにゃ!』

早っ。もういいの!?

「……あ、八つ橋」

「お帰り〜、純お兄ちゃん〜」

『お帰りなさい』

「八つ橋食べる?」

もう誰が買ってきたとか関係ナシだね、八つ橋。

「えらく多いな、八つ橋」

「持ってたお小遣い全部使ったんだって」

「何やってんだよアイツ……」

やっぱりそう思うよねー。

「ん、焼き八つ橋ってうめえな」

「だよね! やっぱ焼き八つ橋だよね!」

「何興奮してんだ」

周りにいた人に焼き八つ橋派が居なかったもので。つい。

『ねえ……桃も食べたいなっ!』

誰この子。桃の花の着物って季節外れだなー。

『ねえね、ちようだい! ちようだい!』

あい、どうぞー。

『あのね、あのね、お化けてね、こんなものなっかなか食べられないんだよ!』

あーお化けなんだこの子。

『あーっ! 何このお菓子! 美味しそう!』

『華子、はしたないですよ。すみません、少しいただけますか?』

『きーっ! 抹茶味!』

『きーっ! チョコレート味!』

トイレの花子さん四姉妹まで……。

どんっだけ魅力的なんだよ、八つ橋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5939q/>

ただいま暴走中！

2011年10月10日03時20分発行